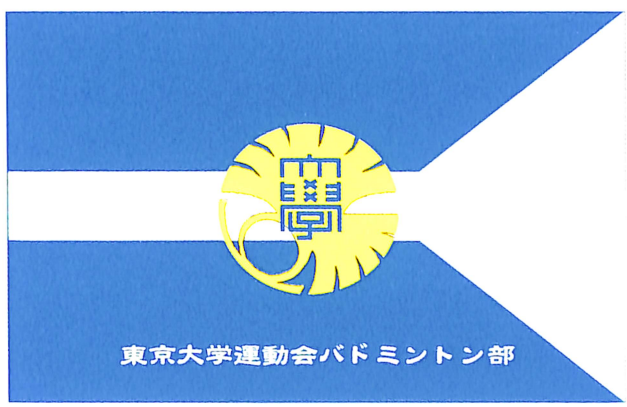
東京大学ボート部

五十周年記念誌

東京大学バドミントン部

五十周年記念誌

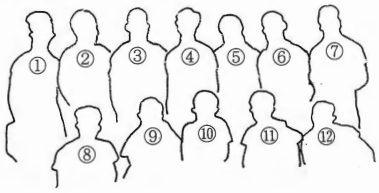




京大戦（駒場１・２年組）

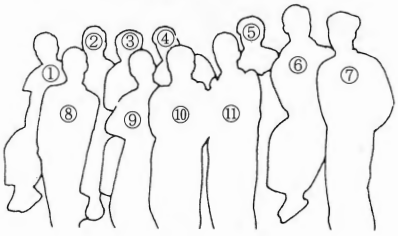
1958 年８月（京都）

①比田　②　③工藤　④対馬　⑤古山
⑥片上　⑦安達　⑧　⑨金丸　⑩森(健)
⑪石川　⑫七条



春合宿　1959 年３月（駒場）

①渡辺　②新田　③小原　④金丸　⑤司馬　⑥石川
⑦岡野　⑧山元　⑨森(健)　⑩古山　⑪比田

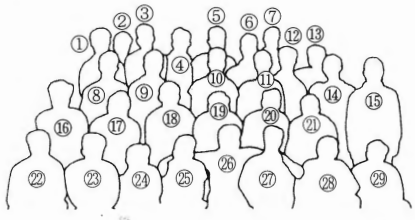




新歓コンパ親善試合　1960 年春（駒場一体）

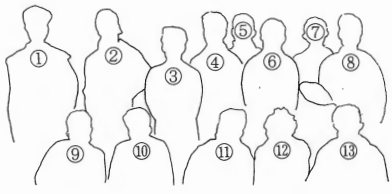


①小野　②萩原　③浜田　④三浦　⑤加藤
⑥藤原　⑦石平　⑧佐藤　⑨浅野　⑩城石
⑪金丸　⑫重松　⑬山元　⑭平松　⑮木村
⑯岡野　⑰石川　⑱新田　⑲古沢　⑳比田
㉑宗像　㉒渡辺　㉓高山　㉔小原　㉕西本
㉖清水　㉗司馬　㉘細矢　㉙秋山



春合宿　1960 年春（駒場）

①岡野　②石川　③山口　④藤原　⑤比田
⑥浅野　⑦森(健)　⑧阿部　⑨山元　⑩
⑪金丸　⑫浜田　⑬新田

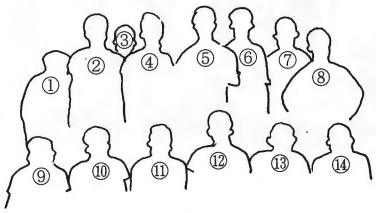






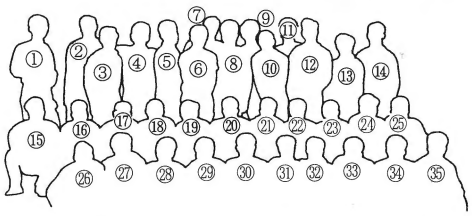
国公立完全優勝　1963年６月（学芸大）

①城野　②渡辺　③木下　④城石　⑤大西
⑥徳田　⑦鈴木(明)　⑧森本　⑨北浦　⑩重松
⑪鈴木(敏)　⑫平松　⑬三浦　⑭小野



平塚合宿　1965年秋



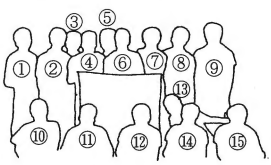


①横山　②志岐　③福光　④新美　⑤安江
⑥河西　⑦宮田　⑧黒川　⑨高岡　⑩一杉
⑪川名　⑫本沢　⑬上西　⑭塚本　⑮井上
⑯森本　⑰今井　⑱浜中　⑲宮地　⑳谷合
㉑江口　㉒伊藤　㉓碓井　㉔高橋　㉕神田
㉖藤田　㉗山根　㉘鈴木(伸)　㉙永松
㉚鈴木(明)　㉛田島　㉜山中　㉝浜田
㉞松崎　㉟古谷



国公立団体優勝　1969年６月

①尾上　②岩崎　③小林(伸)
④盛　⑤塚本　⑥湯浅
⑦小宮　⑧森安　⑨保持
⑩飯倉　⑪小吹　⑫川上
⑬豊田　⑭小林(健)　⑮岡本





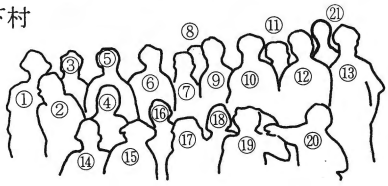
七大戦　1971 年 7 月（大阪大体育館）

①増田　②成瀬（京大）　③江藤　④大田
⑤岸田　⑥小林（伸）　⑦角本　⑧長谷川
⑨　⑩　⑪盛　⑫豊田　⑬岩崎
⑭尾上



七大戦　1975 年 7 月（名古屋大）

①大脇　②白坂　③殿谷　④嶋村　⑤橋本
⑥田尻　⑦船渡川　⑧　⑨　⑩
⑪渡辺　⑫金井　⑬野中　⑭池原　⑮百瀬
⑯土屋　⑰有賀　⑱惣野　⑲村田　⑳松本
㉑下村

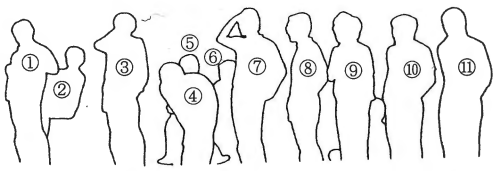






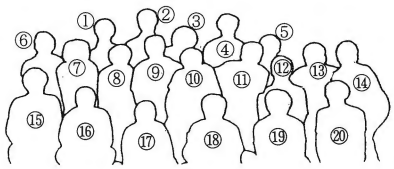
リーグ戦　1976 年秋（駒場４体）

①村田　②小松　③大脇　④野中
⑤金井　⑥土屋　⑦飯田　⑧小鷹
⑨小西　⑩上田　⑪萩原



リーグ戦　４部１位　1979 年秋（国学院）

①赤木　②高見　③芳賀　④神野　⑤森
⑥徳永　⑦井川　⑧山本　⑨築地　⑩佐藤
⑪古谷　⑫大谷　⑬相田　⑭前田　⑮上野
⑯内藤　⑰森　⑱中田　⑲小松　⑳野村







七大戦　1980 年 7 月（東北福祉大体育館）



①高見　②山田　③武田
④中田　⑤大木　⑥中神
⑦炭谷　⑧野村　⑨芳賀
⑩坂本　⑪小松　⑫内藤

春強化練習　1982 年春（駒場４体）



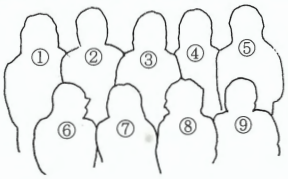
①前田　②青木　③築地
④炭谷　⑤天野　⑥中川
⑦高見　⑧徳永　⑨芳賀
⑩佐伯　⑪村田　⑫小林
⑬大井





リーグ戦　1983 年秋（駒場４体）

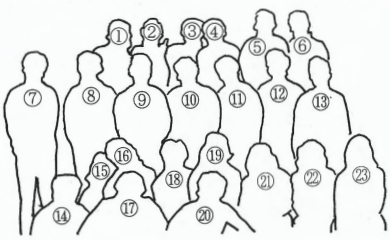
①高瀬　②佐伯　③近藤　④平川　⑤石山
⑥福田　⑦田村　⑧畑　⑨近江



リーグ戦　1983 年秋（駒場４体）



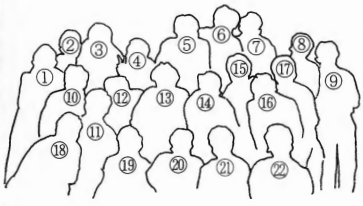
①岩松　②渡辺　③森　④原田　⑤小林　⑥中川
⑦境　⑧芹澤　⑨岸野　⑩村田　⑪川上　⑫
⑬盛田　⑭佐伯　⑮福田　⑯石山　⑰河野
⑱近江　⑲平川　⑳青木　㉑高瀬　㉒畑　㉓近藤



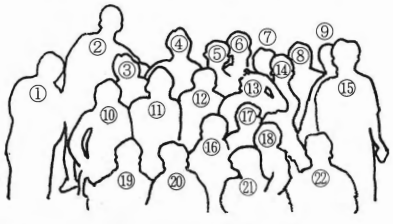


リーグ戦入替戦　３部昇格　1985 年５月

①戸巻　②岩松　③境　④渡辺　⑤原田(英)
⑥高橋　⑦久保田　⑧高橋　⑨宝迫　⑩岡田
⑪岸野　⑫山崎　⑬芹沢　⑭青山　⑮川上
⑯壁矢　⑰赤瀬
⑱倉田　⑲村田
⑳森　㉑日高
㉒盛田



①日高　②高橋　③村田　④戸巻　⑤梶井
⑥野村　⑦宝迫　⑧壁矢　⑨山下　⑩盛田
⑪岸野　⑫原田(秀)　⑬赤瀬　⑭木藤
⑮原田(英)　⑯山崎　⑰岩松　⑱渡辺
⑲青山　⑳森　㉑岡田　㉒長谷川



リーグ戦　３部残留

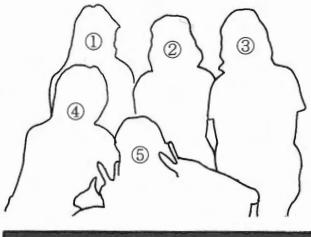
1986 年５月（千葉商大）





シングルス選手権

1986 年９月（駒場４体）

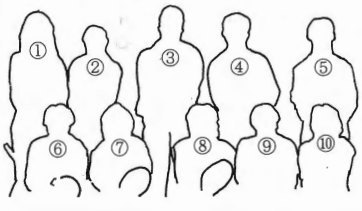


①青山　②近藤
③高瀬　④近江
⑤郡司

リーグ戦入替戦　女子４部昇格

1987 年 10 月（立川市民体育館）

①柴崎　②池田　③村田(章)　④岩松
⑤村田(光)　⑥秋朝　⑦伊藤　⑧田中
⑨郡司
⑩国友

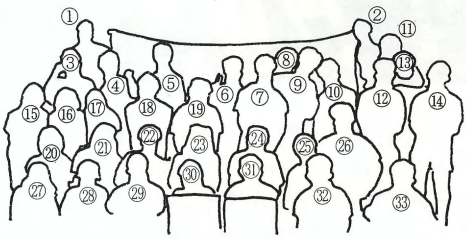






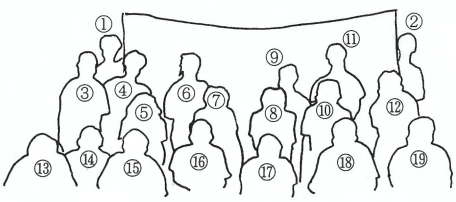
七大戦　1987年7月（東北大青葉山体育館）

①戸塚　②　③　④　⑤陣野
⑥長谷川　⑦後藤　⑧川村　⑨岩村　⑩福島
⑪前間　⑫先田　⑬野村　⑭山下　⑮
⑯国友　⑰池田　⑱原田　⑲中野　⑳伊藤
㉑柴崎　㉒郡司　㉓中村　㉔新名　㉕中島
㉖坂田　㉗阿部　㉘秋朝　㉙宝迫　㉚田中
㉛壁矢　㉜赤瀬　㉝西口



夏強化練習　1990年8月（駒場2体前）

①三島　②林　③後藤　④岩間　⑤橋本
⑥酒井　⑦小西　⑧市原　⑨山下　⑩石田
⑪小西　⑫宝迫　⑬茂木　⑭楠本　⑮合田
⑯西口　⑰前間　⑱伊藤　⑲八重嶋

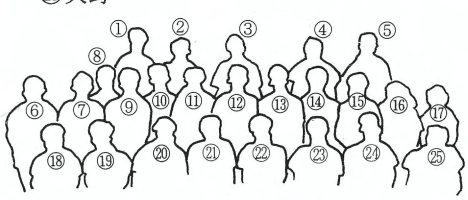




卒業アルバム写真　1990年春（駒場4体）



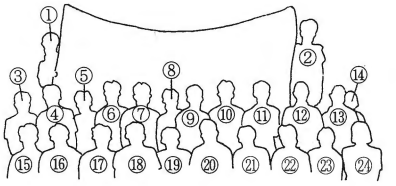
①三島　②佐藤　③佐藤　④酒井
⑤小西　⑥工藤　⑦合田　⑧小西
⑨石田　⑩楠本　⑪成田　⑫市原
⑬伊藤　⑭岩間　⑮八重島　⑯橋本
⑰山下　⑱林　⑲坂田　⑳中野
㉑戸塚　㉒後藤　㉓西口　㉔前間
㉕矢野



卒業アルバム写真　1991 年春（駒場４体）

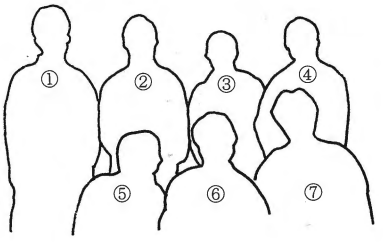


①氏家　②塚本　③原田　④平田　⑤松薗
⑥三島　⑦平野　⑧小西　⑨楠本　⑩市原
⑪石田　⑫小西　⑬酒井　⑭池田　⑮小林
⑯佐藤(和)　⑰林　⑱岩間　⑲合田　⑳伊藤
㉑志村　㉒橋本　㉓山下　㉔中島



リーグ戦　1991 年４月（鶴見大）

①後藤　②小西　③後藤　④酒井
⑤山下　⑥橋本　⑦志村

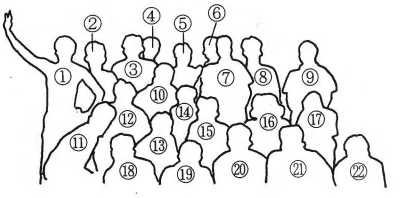






七大戦　1992 年７月（大阪大）

①伊藤　②光澤　③米永　④香西　⑤松薗
⑥塚本　⑦近藤　⑧飯島　⑨小西　⑩小林
⑪佐藤　⑫原田　⑬川　⑭氏家　⑮平野
⑯橋本　⑰飯塚　⑱楠本　⑲小西　⑳石田
㉑市原　㉒酒井



創部35周年記念総会

1985年11月12日（ホテルセンチュリーハイアット）









関西ＯＢ会第１回

1987年８月21日（住友金属寮）



バドミントンフェスティバル

第１回　1989年３月19日（駒場１体）







◆駒羽会行事◆

第２回

1990年３月





第３回

1991年３月

第４回

1992年３月





第５回

1993年３月

創部40周年記念総会

1990年10月20日（学士会館）











監督交替パーティ

1991年３月16日（アサヒビアケラー渋谷）



京都大学バドミントン部　創部45周年

1992年５月５日（京都大学）







臨時駒羽会総会

1992年６月６日（山上会館）











上野前部長の功績を称える会

1992年９月11日（ホテルセンチュリーハイアット）





臨時駒羽会総会

1993年６月12日（学士会館）





創部45周年記念総会

1995年11月18日（小田急ハルク「豪華」）









法政大学バドミントン部　創部50周年

1997年10月18日（ホテルグランドパレス）

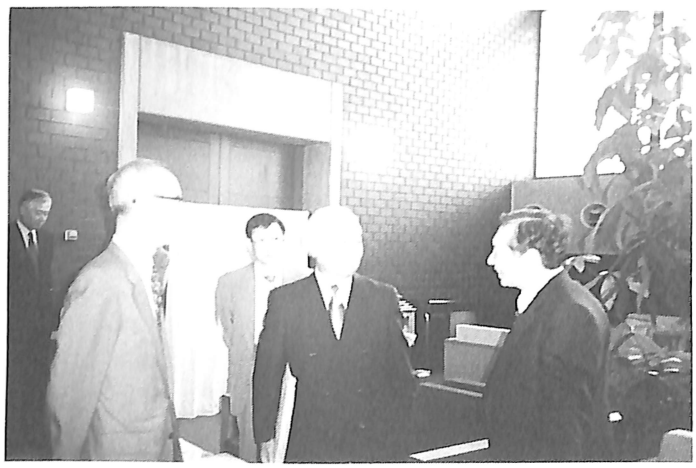


京都大学バドミントン部　創部50周年

1998年10月10日（京都大学）







秋山敦男さんを偲ぶ会

2000年６月16日（ホテルグランドパレス）



東京大学バドミントン部五十周年記念誌

目　次

●創部 50 周年を迎えて●

部　長	三浦　登	3
駒羽会会長	金丸清昭	5
監　督	石田仁志	7
主　将	杉本光貞	9
日本バドミントン協会副会長	清水　務	11
洛羽会会長	中山敏弘	13

●活動史●

バドミントン部創立 50 周年を迎えて	初代主将、前部長	上野　正	17
バドミントン部 50 年存続の背後にある７つの仕組み	初代監督	司馬正次	22

１．リーグ戦・国公立戦・京大戦・七大学定期戦

昭和 25～33 年頃「東大バドミントン部の黎明期」	編集委員会	33
昭和 28～31 年「半世紀前のこと」	足達哲之・深田健介	35
昭和 32～35 年「1958～60 年のこと」	比田　宏	37
昭和 33～35 年「関東大学リーグ戦二部復帰の頃」	渡辺光夫	39
昭和 35～38 年「昭和 35～38 年」	平松由紀夫	42
昭和 38～41 年「昭和 39～41 年の戦績」	北浦正一	48
昭和 41～44 年「苦い思い出の時代」	川上邦彰	52
昭和 43～46 年「あの頃」	岡本伸行	55
昭和 45～48 年「学年不在を乗り越えて(Road to ２部)」	江藤弘純	58
昭和 48～51 年「二部昇格、三部降格、そして二部昇格の夢」	村田光二	62
昭和 52～54 年「ダブルスで掴んだ三部復帰」	上野誠也	65
昭和 54～57 年「1980－82 年の攻防」	炭谷俊樹	67
昭和 57～60 年「昭和 57 年から 60 年」	村田　章	70
昭和 59～62 年「エース君臨の時代からエース不在の時代へ」	壁矢和久	74
昭和 62～平成２年「一番うれしい思い出・悔しい思い出」	戸塚英男	77
平成元～ 4 年 「６、２、５、２」	石田仁志	80
平成 3～ 6 年 「駒場時代を振り返って」	川　信郎	83
平成 6～ 9 年 「現役諸君よ、強くあれ」	古川敦司	86
平成 9～ 12 年 「現役生活を振り返って」	杉本光貞	89

２．京都大学との交流

京大戦：年おくれの修学旅行	細矢富雄	97
京都大学との交流	金丸清昭	100
京大戦の思い出	三浦　登	102
京大戦の思い出	神田道男	104
東大／京大 42 年入学組の交流	小林　健	105
「めばえ」	関　和夫	107
京大戦－過去・現在・未来	小鷹　長	109
京大バドミントン部との交流	佐藤彰彦	111
今後とも京大メンバーと長いお付きあいを…	森　郁雄	113
感銘、あるいは刷り込み	先田力哉	115
京都大学との交流	平野正浩	117
京都大学との交流	香西昌平	119
京都大学との交流	勘里裕樹	120

３．合　宿

合宿、練習方法の改善など	橋本　章	123
合宿のことども、トレーニング事始め	渡辺光夫	125
バドミントン部創立 10 年頃の合宿の思い出	佐藤祥次	129
合宿から見た 4 年間	鈴木明夫	131
限界を超えて行こう	大田　豊	135
検見川の熱い夏	久保田正志	139
裏合宿史 1985-1988	木藤祐一郎	141
合宿の思い出	伊藤恒有	144

４．女子部

女子部の夜明け前	豊田拓男	149
昭和 48 年度入学女子部員の卒部まで	江藤浩子	152
20 年前の女子部	渋谷紀子	154
女子部について	升野伸子	156
必死だったあの頃	志村もと子	157
なんだかんだ言っても、結構いい感じで似てた	小西美恵子	159
平成５年～９年、女子部を支えた人々	雑賀喜代美	163
「女子部」から「チーム」へ	岩井佳世子	165
女子部の強化について	吉野　崇	167

５．部の在り方

東大バドミントン部の在り方	森本　剛	171
我々の時期における東大バドミントン部	塚本壽雄	173
30 年程前の練習	伊藤正博	177
ヤサシイ世代からの覚え書き	野中浩一	179

軟派よ去れ！硬派よ来たれ！　上野誠也　182
21 世紀の東大バドミントン部（監督経験者座談会を通じて）　壁矢和久　184

６．部員達の憩いの場
東大バドミントン部北千束分室　金丸清昭　193
お世話になった横山家　大西正芳　196
われらの定宿　豊田拓男　198
岩松家　岩松正憲　204
ひさご　窶迫　巌　206
駒場寮の思い出　中野史彦　208

７．伊豆・戸田マラソン
伊豆縦断レースの思い出　岩崎與雄　213
戸田マラソン人生論　上野誠也　215
伊豆戸田マラソンの思い出　野村　誠　217

８．部報抜粋
バドミントンを始める人の為に　伊丹　誠　225
クラブ活動の心構え　豊田拓男　231
遺産シリーズから　野中浩一　236
ストローク、練習、試合について　村田　章　249
コースに対する意識　他　後藤拓也　252

９．その他
関東大学ＯＢバドミントン選手権大会　金丸清昭　257
「蹴飛ばし」について　〃
部旗の話　豊田拓男　261
「栄耀栄華」の旗について　青山豊久　264
バドミントンフェスティバルの創設　江藤弘純　267
木によって育ち、金属とともに滅び、炭素によって復活する
～ダブルス選手権、シングルス選手権の回顧と現在～　野中浩一　269
ガス戦・東大戦　豊田拓男　271
筑波大学との交流　内藤史門　274
東大バドミントン部と運動会総務について　竹内　実　276
東大バド部と私　陣野康幸　279
バドフェス三洋電機選手招待について　茂木淳一　281

10. ＯＢ会の歴史
駒羽会以前　鈴木明夫　285
駒羽会以降（1985年以降）　小林伸宏　289

●追　悼●

片山先生を悼む　上野　正　301
片山先生と駒場の思い出　早津秀彦　303
短編集「ヘソキチの独り言」から　初代部長　片山信夫　305
横山正二様追悼文　鈴木明夫　310
上林邦雄さんの思い出　杉原健児　312
北沢　巽君を悼む　西本　正　313
弔辞（秋山敦男様告別式）　橋本　章　314
故木村武さん追悼文　平松由紀夫　319
宮地純樹氏追悼文　鈴木明夫　322
小吹哲郎君の急逝を惜しむ　川上邦彰　325
湯浅有光君の思い出　小宮　泉　327

●駒羽会報から●

（1987年 5月）全米バドミントン選手権の決勝戦を観て　松本純子　331
（1987年11月）カフジの生活をふり返って　盛　俊夫　333
（1991年 2月）香港のバドミントン事情　関みどり　335
（1991年11月）モスクワ便り　秋山敦男　337
（1993年 6月）板場うら話　内藤史門　339
（1994年 1月）オックスフォードでのバドミントン　高橋克彦　342
（1994年 6月）ニューヨーク雑感　重松宗男　345
（1994年11月）二つのＢ　相澤修三　349
（1997年 6月）関西駒羽会会議録　小西美恵子　351
（1997年11月）Hong Kong　横山直也　354
（1999年 6月）ミャンマー（旧ビルマ）に住んでみて　川上泰司　357

●記　録●

●駒羽会規約●

●編集後記●

●創部50周年を迎えて●———

創部50周年を迎えて

部　長　昭和35年入学　　三浦　登



20世紀が終わろうとする節目のこの2000年に東京大学バドミントン部が50周年を迎えることはまことに喜ばしく、ＯＢの一人として皆様とこの日をお祝いできますことを非常に幸いに思います。

東京大学運動会の数ある運動部の中にあって、半世紀の歴史をもつ部は今や歴史の長さの上では中堅クラスに属するといえますが、バドミントンという競技そのものの歴史は長いようで短いものです。我国の学生バドミントンの歴史を紐解いてみると、日本バドミントン協会が結成されたのは戦後間もない昭和21年とのことです。その後、法政大学、明治大学、立教大学など、学生バドミントン界の強豪校のバドミントン部が相次いで創部されたのが昭和22年でありました。因みに慶応大学バドミントン部は昭和17年に結成されており、同大学の先進性には驚嘆いたします。早稲田大学の創部が昭和27年と聞いております。このような情勢の中にあって、我が東京大学バドミントン部は昭和25年という早い時期に、後に第２代部長も勤められた上野正先輩らの方々によって創部されました。バドミントンそのものがまだ主要なスポーツとして認知されていなかった時代、正確なルールなどを知る人も少ない当時に、いち早くこのスポーツの素晴らしさに着目し、上記の強豪校とほぼ時を同じくして東京大学運動会の中の運動部としてバドミントン部を創部された諸先輩や故片山初代部長のご慧眼、ご尽力には今更ながら敬服と感謝の念を禁じ得ません。これらの方々のご努力があればこそ、後輩たちがバドミントン部の活動を楽しめるという恩恵を享受できてきたからであります。

バドミントン部は、50年という長い年月の中で親子３代ほど世代の異なる部員が活動を続けてきたわけですが、その間に300名を越える卒部生を生み出してきたことを考えると、今更ながら歴史の重さを感じずにはいられません。またその中で関東大学リーグ戦、インカレ戦、国公立大学戦、七大学戦、対京都大学定期戦、対一橋大学定期戦などの主要な対外試合を通じて他大学との交流を通して広がった活動の輪はさらに大きく、実に多くの人々が東大バドミントン部と関わってきたことになります。その間には、非常に多くの人々のいろいろな出会いやドラマが繰り広げられてきたわけで、そこには何かロマンの香りすら感じずにはいられません。

創生期の頃と現在とでは時代や社会は随分違いますが、駒場キャンパスの北東の一隅にある体育館付近のたたずまいや、今でも新歓コンパの行われる同窓会館などの中

で、未だに現役部員が時代を超えて先輩たちと共通の経験を積んでいることは非常に貴重なことだと思います。また東大バドミントン部の、強くなる、試合に勝つという運動部としての厳しさの中にも和気藹々とした和やかな雰囲気、自由な雰囲気のある伝統は今も変わらず受け継がれているように思います。

また10年後、20年後に東大バドミントン部がさらに発展した形で創部記念行事を祝うことができることを切に祈ります。

創部50周年にあたって

駒羽会会長　昭和33年入学　　金丸　清昭



我が東京大学バドミントン部は、記念すべきミレニアムの年に創部50周年を迎えることができました。本当に素晴らしいことであり、皆さんと喜びを共にしたいと思います。

まだ戦後の混乱が残っていた昭和25年という年に、この新しい部を創り、伝統的な各部に伍して東京大学運動会に加盟し、部の基盤を作られた先輩達に改めて感謝をささげ、又それを今日迄守り・引き継いで来た多くのＯＢ・ＯＧの方々、そして現役の皆さんに、心から御礼を申し上げます。更に創部以来互いに技を競い、我々を育てて下さった京都大学をはじめ、関東学生連盟等の関係各校の方々にも篤く御礼申し上げる次第です。

今日に至る迄の部員達の汗と涙と喜びの歴史は、このたびの50周年記念誌に縷々述べられているので、一々は触れませんが、その一員として４年間を駒場の体育館で過ごせたことは、私にとってこの上ない誇りです。

今や日本のバドミントン界は、日本リーグ、世界選手権(ヨネックスオープン)等の開催に見られる様にまことに隆々としています。関東学生リーグも６部を数え、しかも３部以下はＡ・Ｂ或いはＡ～Ｄという様に複数構成になっており、参加校は男女とも100校に達しています。我が部は平成12年春現在、男子は４部、女子は５部とやや低迷していますが、それぞれ上のクラスを目指して精進しています。

関東リーグ２部に参加して以来、次々に現れる新規加盟の有力校に抜かれて、昭和30～40年代は、３部優勝２部復帰がメインテーマであり、昭和30年代の終わりから40年代初めには、強豪を相手に堂々２部４位という好成績も残しました。この間何度も、部のあり方についての議論がなされました。強いこと・リーグ戦で勝つことが至上のものなのか、部員同士のつながりの方がより大切なものではないか、常に部員全員が参加できる部であるべきではないのかなどです。部内だけではなく、現役とＯＢの間で、激しい議論をすることもありました。ただ何れの場合も結果的には前向きな解決になり、次の発展に役立ってきたと思います。多くの大学運動部の中で、バドミントンというスポーツが比較的新しいということを割り引いても、東京大学バドミントン部が、常に「部は現役のものであり、現役部員が責任を持ってこれを運営・発展させ、次代につなぐ」という姿勢を守り、自由な論議を通じてこれを実現して来たことは、我々がもっとも誇りにすべきことだと確信致します。そういう雰囲気の中で、現役が

ＯＢと一体となって４年間を過ごしたことが、これだけのメンバーを擁する駒羽会につながっていると思います。

私が入部した昭和33年頃はまだＯＢの数も少なく、コンパをしても全員が顔を突き合わせて、話したり飲んだりすることが出来て、いきおい、顔も名前も人柄もすぐに分かりあえる時代でした。今は300人を超えるＯＢ会員を擁しており、現役としても喜ぶべきことだとは思いますが、一方で昔のような交流は難しくなりました。それでも入学から卒業迄、上下それぞれ３年、自分の年代を入れて前後７学年に亘る交流は、運動部生活なればこその得難いものであり、それは毎年追い出しコンパに参加する度にひしひしと感じます。50年目を迎えた今、あらためて「我々の根っこが駒場の体育館にある」のだと実感します。出来るだけ多くのＯＢ・ＯＧ達が、駒場に、京大戦に、リーグ戦に、合宿にと、あらゆる機会に現役の応援に顔を出して、より親密な現役とＯＢの交流を作って行きたいものです。

私の新入生時代には、ボーナス時期に先輩の所を訪問して、リーグ戦の戦績等の近況を報告かたがた、会費という名目で寄付をお願いに上がったもので、それなりに良き交流の場でもありました。その後ＯＢの数も増えて来て、より組織的に現役との交流及びＯＢ同士の親睦を図るべく、東京大学バドミントン部ＯＢ会が出来ました。手元にある規約案を見ると昭和34年のことです。初代会長は清水さん、その後足達さん、秋山さん、私、木村君を経て、よりしっかりした形になったのが昭和60年でした。あらためて木村君が会長に就任、平成２年には駒羽会と名称を改めました。平成３年、木村君の急逝により平松君、更に彼の転勤で秋山さんが会長に就任、平成７年からは私が務めて参りました。駒羽会は、会員相互の親睦と現役への支援と言う二本の柱で出来ており、会員及び現役の協力の下に見事に機能しています。鈴木明夫君をはじめとする事務局のメンバーや理事の方々の目に見えない御苦労がこれを支えていることは言うまでもありません。この場を借りて、一言お礼申し上げる次第です。

最後に、50周年を機に東京大学バドミントン部と駒羽会が、益々発展をするよう心から祈念して、私の御挨拶とさせて頂きます。

尚40周年記念誌の御挨拶で、50周年には多分あの世から挨拶することになるだろうと書かれた、初代部長の片山先生をはじめ何人かの方が亡くなられ、50周年を共にすることが出来ないのは大変残念です。わけても、50周年記念行事の準備を進めているさなかの２月26日に、駒羽会の中心人物とも言うべき秋山敦男さんが、淋巴腫の為に急逝されたことはまことに悲しみの極みであり、謹んで哀悼の意を捧げる次第です。

創部50周年によせて

監　督　平成元年入学　　石田　仁志



今年で我が東大バドミントン部が創部50年を迎えることになりました。本当におめでとうございます。人生僅か30年余りの私としましては、50年もの長い間バドミントンという一つのスポーツ競技のもとに組織と伝統が存続していることに、その重みを感じずにはいられません。

大学生活の４年間東大バドミントン部に在籍し、バドミントンに情熱を持って取り組めたことは私個人としては大きな財産になっています。そして、半世紀もの間途絶えることなく、入部して４年間を過ごし卒部して行く人達が居るのは、その人達がバドミントン部での経験は自分にとって価値あるものだと感じているからでしょう。

私は、社会人になって以後すっかり運動とはかけ離れた生活に浸ってしまい、仕事の忙しさにかまけて、バドミントンどころかジョギングをする機会を作ることさえなくなっています。あのころ研究を重ねたヘアピンの打ち方、見分け難いカットの打ち方、素早く効率よい足の運び方、それらの技術を支える強い足腰と心肺機能はほとんど無になってしまいました。（卒部されても尚練習を続けられ、未だに現役部員と互角にラリーをなさる一部のＯＢの方々には尊敬の念を覚えます。）しかし、今となっても尚、「大学時代はバドミントンに真剣に取り組んだ。」と胸を張って言えるのは、“強くなる”という一つの目標に向かって４年もの間試行錯誤を繰り返した事がある、という事に自信と誇りを持っているからです。そして、客観的に目標が達成されたかどうかは別として、少なくともその時々は、試合の勝敗という分かり易く、時には残酷な結果を受け入れ、反省したり建設的に改善策を考えたりする姿勢を身につけたことが今の自分の基礎になっていると思っているからです。

バドミントン競技が個人競技であるのにもかかわらず、目標をチーム全体で達成しなければならないと言う難しい課題にぶつかったのも大変良い経験でした。例えば、“レギュラーとそうでないメンバーとが同じ練習時間のなかで個々の実力を上げ、結果としてチーム全体のレベルが向上する”、シンプルで理想的な目標ですが何時の時代も悩まされるテーマです。しかし、難しい目標であってもそれを共有し、相談に乗ってくれた先輩、助言を与えてくれた同輩、協力を惜しまなかった（不満をぶつけてきた？）後輩達との間に、一生続く強い繋がりをもてたことは、私には何よりも大きな果実でした。

東大バドミントン部を取り巻く環境は50年の間に大分変わったことでしょう。（私が入部した時には既に存在していた）女子部の創設、バドミントンサークルの出現などはバドミントン部の在り方を変えた事件だったかもしれません。関東リーグの参加大学数も100大学を優に超えています。その一方で最近ではリーグ戦が男子も２複３単になり、そのことが東大に限らず参加する全ての大学に少なからず影響を与えています。しかし、周囲の変化はあってもこの部が、東大バドミントン部らしく部員全員が“強くなる”目標を持ち、それを実現するプロセスを経験するのに十分なチャンスを提供できる場であることは変わらないでいて欲しいと思います。100周年を迎える時になっても変わらず、この部に籍を置いた全ての人がバドミントンというスポーツに４年間真剣に取り組み、苦楽をともにした仲間達と一生続く繋がりを作れる東大バドミントン部であって欲しいと願います。

創部50周年に際して

主　将　平成９年入学　　杉本　光貞



東大バドミントン部創部50周年おめでとうございます。半世紀という長きにわたって、先輩から後輩へと部が受け継がれてきたと思うと、只々、すごいことだと感じますが、もちろん自分が実際に知るバドミントン部は入部してから現在に至る３年間のみであり、ここでは、自分の知る限りでバドミントン部について書きたいと思います。

ここのところ、率直に申し上げて、ＯＢの方々に胸を張って言えるような戦績を残すことはできておりません。昨年の春リーグで四部に降格し、先日の春リーグではついに五部との入れ替え戦までいってしまい（なんとか四部に残留しましたが)、また対京大においても京大戦・七帝通算で五連敗となっております。七帝戦でも低迷しております。

この戦績について、ＯＢの方々、特にいつも試合を見に来てくださる金丸さんに至ってはそれはもう歯がゆい思いをされていることと思いますが、現役にとっても到底、満足のゆくものではありません。そのつもりつもった鬱憤をはらすには、とにかく試合で勝ち、結果として残すしかありません。

考えるに、私たちが一年生の時、非常に層の厚い四年生の先輩方が黄金期を形成していただけに、「強い東大」というのが頭に深く刻み込まれ、その名に依存し自らを顧みず、逆に東大の名を重荷としていた部分があったように思います。ただ、一つ下の菅原君の代より下の世代は、その点で自分たちとバドミントン部に対する認識が全く異なると思います。

これからの課題としては、いかに自分たちなりの成果を残すかという所だと思います。自分はバドミントン部にいて「どうありたいのか」、そして「どうなりたいのか」をかたちにしていくことが必要です。

私やその他９名の四年生も残りわずかな現役生活で、なんらかの結果を残したいと思っています。具体的には京大戦に勝利し、七帝戦でも上位に食い込み、秋リーグでは（もし出られたら）四部一位、三部昇格というところを目指しております。実際にやってみて結果はどうでるかはわかりませんが、運動会でバドミントンに打ち込んできた人間として、少なくとも「プライド」をもって試合に臨むつもりです。

私たちが引退したあとのことですが、私たちより下の代はそんなに人数が豊富にいるわけではありませんが、それぞれなかなか向上心もあり、将来どう化けるかわかり

ません。代替わりしたら菅原君を中心に幹部学年は自分たちなりに頑張ってほしいと思います、バドミントンを楽しむことを忘れず、また決して後悔だけはしないように。そして、これからの新たな歴史を刻んでいってほしいです。ＯＢ・ＯＧの方々も時には駒場に足を運び、ご指導していただければ幸いです。

とりとめもなく書いてしまいましたが、ＯＢの方々、私たち四年生は最後に一花さかせようと思っておりますので、どうか暖かく見守ってやってください。それでは、最後に東大バドミントン部の今後のさらなる発展を願い、筆をおきたいと思います。

創部50周年にあたり

日本バドミントン協会副会長　昭和26年入学　　清水　務



バドミントン協会

私のバドミントン関係の現在の肩書きは三つあります。東京都バドミントン協会会長（平成10年４月就任)、日本バドミントン協会副会長（平成11年４月就任)、日本レディースバドミントン連盟会長（平成11年４月就任）であります。役職の意義は、その機能と貢献により決まってくるものです。ただし、スポーツ団体の役職に就くにはいろいろな縁によるところが多いと思われます。

とりわけ東京都の会長に推薦されたきっかけは、学生時代からの縁で立教出身のチャンピオン佐藤氏〔現グランドパレス取締役〕や、同じ立教出身の花岡氏や慶応出身の宮永氏〔現明治生命〕等からのご推挙があったことによります。

思いもかけず、学生以来バドミントンとの関わりが続く中でのお話しでもあり、個人的には仕事との関係もありましたが、バドミントンに対する多少の恩返しが出来ればという気持ちでお受けすることにしました。

ただスポーツ団体の常でありますが、本当にスポーツを愛する者が欲得ぬきで奉仕するというのが、その存立の基本になっているといえます。妙な名誉欲などで勤めるものではありません。富める国の割に、スポーツ団体やスポーツそのものへの経済的援助は殆どなく、日常運営はボランティア的奉仕によって支えられております。

私自身もまだまだスポーツ団体の実体把握が不充分ですが、変化の激しい時代にあって今までにない考え方で見直すべき点が多いことを感じます。そのためにも、多様な経験、立場の人達がスポーツ団体の運営に参加出来るような条件を作っていくべきです。そうすることがスポーツそのもの、あるいはそのスポーツ団体の在り方が時代に即した見直しに直面することになると考えます。

ＯＢ会

我々が卒業した昭和30年（1955年）は、まだまだ景気も物の供給も不充分な時代でした。練習中にボロボロのシャトルしかないときはやむを得ず、２～３個のシャトルをジャンケンに負けた者が自転車で渋谷まで購入に行く状態でした。

卒業後も安サラリーマンの集りでありましたが、たまには集まろうという自然の気運のままに飲み会をやりました。卒業生が少ない時代で集まりやすかったこともあり

ました。特に私が仕事柄、東京に常駐していましたので、ＯＢ会をリードする立場にたったのは自然の流れでした。自称ＯＢ会初代会長となったわけです。堅苦しい規則もない同好の士の情報交換が主でありました。

当時の将来の夢は、ＯＢ会で赤坂の芸者の総上げをしようと意気軒高なことを話しあったこと等が懐かしく思い出されます。

思い出

京大戦へは夜行のドン行（各駅停車）で行くのが常で、暑い車中で夜通しアイスクリームを幾つも食べたのを思い出します。京大生の招きで湖上のヨット遊びの後、「琵琶湖周航」の歌を湖岸で肩を組んで歌ったのを思い起こします。

東北大との試合で小雪降る仙台での宿泊の折、ジャンケンに負けて焼イモを買いに行ったことも強い印象があります。

何といっても、ルールも慣行も不完全な時代に本当に熱心に部の運営、連絡に骨身惜しまず勤めた歴代マネージャーの存在が大きかったと思います。とりわけ、同期の司馬正次君の個性と熱意に改めて敬意と御礼をここに記しておきたいと思います。あの茶色と黄色の毛糸で編んだ帽子と共に今も眼底に焼き付いております。

最後にバドミントンの水準がかつてのようにトップレベルに復活するための協力、お手伝いを頑張ってやっていきたいと思います。現在のバドミントン関係役職を遂行しながら将来の展望を皆様と共に語り合うとともに、東大バドミントン部創部50周年を節目に後輩諸氏の更なる積極的ご助力を期待します。

東京大学バドミントン部創立50周年によせて

京都大学体育会バドミントン部洛羽会会長　昭和39年入学　　中山　敏弘



東京大学運動会バドミントン部創立50周年、おめでとうございます。我が京都大学体育会バドミントン部とは、それ以来50年にわたって定期戦というかたちのみならず、ＯＢになってからも交流や親交を結ばさせて頂いており感謝しております。私も50年のうち30数年間も夏の定期戦、その後のレセプション、忘年会や記念祝賀会等に参加してきました。その間には色々と思い出深い出来事もありました。試合として最も印象に残っているのは卒業後二年目に年次として一年先輩の横山さんにフルセットのすえ、勝利をおさめたことです。当時横山さんは現役・ＯＢを通しても最強と皆が認めており、かつ御本人もおそらく自負されていたと思われます。（その後、定期戦の試合に横山さんが出場されないのが残念ですが。）また、同期になる大門さんとは一年生の時にオープン戦で対戦して負けた試合も楽しい思い出です。コート外の先輩達の貴重な助言をうけてお互いにクリアーとスマッシュのみのラリーを延々と続けてふらふらになりました。カットをすればお互い楽になるのですが、当時は二人ともまだうぶだったんだと今思い出してもおかしくなります。書いているうちにたくさんの試合が思い出されてきて、あの時はどうだったかと考えていると筆が進まなくなってしまいました。

年齢が進行するとともに、バドミントンの試合をするというのが少し辛くなってきました。しかしながら、東京大学には金丸さん、三浦さん、鈴木さん、京都大学には北脇さんや植村さんという大先輩の方々がまだ頑張っておられるので止めるわけにはいかないと言い聞かせて、参加する予定を組んでいます。夏の暑い時にわざわざ窓を閉めて風通しを悪くした体育館の中で何故こんなしんどい目をしてシャトルをおっかけているかというと、試合後のシュワーと泡のでるジュースを美味しく飲みたいことにつきるのではないでしょうか。

最近はゴルフの対戦もするようになっているそうですが、これからも年齢や大学の枠を越えて、色々な形で相互に交流し末永く親交を深めていきたいと願っております。

東京大学バドミントン部のさらなる飛躍を！

●活　動　史●

バドミントン部創立50周年を迎えて

初代主将、前部長　昭和25年入学　　上野　正

はじめ駒場に生まれた小さなサークルだったバドミントン部が、遂に50周年を迎え、大勢の活発な先輩と元気な部員諸君を擁する部になったとは、何か不思議な感じさえします。

これも長い間多くのメンバーが熱心にプレイをし、部そのものや、ＯＢ、ＯＧ間のつながりなども大事にして来た成果だと思います。

今後とも、自由で柔軟な気風を持って成長して行って欲しいと願ってやみません。

なお、私はこの部に最初から居たので、今回の節目にあたって創立当初のことをまとめておきたいと思っていました。

また、初代の片山先生が御定年のあと、「大学紛争」の直後に部長をお引き受けしたので、当時のことを少しつけ加えておきます。

1950年（昭和25年）の春、駒場一号館のアーケードにバドミントン部創立と部員募集の掲示が出て、当日十数人が集った時点でこの部が生まれた。

ラケットを持っている者が少ないので、当時5000円程の部の予算からネットとポール一組のほか、部で共同利用するためのラケットを何本か揃えた。

練習は週２回、ルールを知っている者も少ないので、練習試合のようなことをしながら、段々皆がルールを覚えてゆくようにした。当時は東大全体で体育館といえば駒場の第一体育館だけなので、バドミントンの場合は１／３をもらって、柔道と体操、ピンポンと空手など、合計三つの部で共同利用した。

途中でやめる人もいるので新人を誘ったりもした。それにしてもバドミントンを知っている人が余りにも少ないのに一驚。体育科の後援を得てバドミントン大会を開いた。ダブルスのトーナメントだが、これが初めてという人も含めて20組ほどの参加があり、まずまずの成功だった。

当時駒場では、学生がセミナーを何かひとつとることになっていたが、地学をとった早津君が、セミナーの片山先生は戦時中インドネシアでバドミントンを経験された方で、部長を御願いしてはと提案。それは良いときまり、早津君と二人でお願いに上がったところ御快諾を得た。かくして、バドミントン部は片山先生にめぐり合うことが出来た。

1951年には、大勢の元気な新入生が入って来て活気が出て来たので、大部分がルールを覚えたあたりで、成蹊大と初めての試合を駒場でやった。両方とも大差ないチームで、多数のマッチを長い時間をかけて楽しんだ。

夏には、教養学部学友会のよびかけに応じて最初の京大戦に参加した。学友会では、前年度から「京大戦復活を！」と各部によびかけ、大変な熱意で準備をすすめていた。

実際には、東大と京大の間に部をあげての対抗試合などなかったのだが、旧制一高と三高の間では何十年か続いていて、それが戦争でやめになった。旧制一高がおもな母体になって東大教養学部が、三高が母体で京大教養部が出来たので、昔の一高対三高戦を、京大戦として「復活」しようというのであった。

かくして我が部は、希望者全員の十数人で意気軒昂と京都に着き、京大の人達と相談して、試合はダブルス５、シングルス10とし、それにオープン戦をたっぷりつけた。全員が十分試合を楽しめるようにしたものだが、このことで双方の意見がピッタリ一致したのは嬉しかった。

試合は４対11で敗けたが、爽やかで愉快であった。試合のあとは懇親会、コンパである。旧制三高の流れを汲むレパートリーも多々あり、のちのちまで僕等の部のコンパの内容を豊かにしてくれた。

直後に祇園祭もあり、戦争からこの方観光旅行などロクロク出来なかったから、試合のあとも大抵の者が宿舎の吉田寮にとどまって方々見て歩いた。最も印象深いのが、京大の澁谷さん、関口さん達が琵琶湖のヨットに招いてくれた時のことだ。二隻に分乗して遊んだが、天気も好く、周囲も美しく、何よりも京大の人達の優しさとスマートさには心を打たれた。

1952年には、まえから誘われていた関東リーグに加盟、春から二部のリーグ戦に出た。当時の二部は入替が少なくて割合安定していたので、都立大や学芸大の常連の顔が今でも目に浮ぶ。

参ったのは翌1953年の春にボロボロに敗けてしまい、入替戦に追いこまれたこと。相手は青山学院で、ダブルス３、シングルス５で、点数は４対４のあとに私が当ってしまい、やっとセット・オール、最終セットはセッティングで互いにマッチポイントを繰返したあげくようやく勝って二部に残れた。（今でもこんなに詳しく覚えているのは、あと一試合位のものである。）どういうものか、秋のリーグ戦では二部の三位と好調であった。

1953年には最初の関東地区国公立大会が、かなりの種目の参加を得て発足した。準備期間は相当短かったようで、この夏は第三回の京大戦を東京でやっていた会場に、

東大、お茶の水などの準備委員が突然やって来て、参加の有無、日程の都合などを聞いて帰ったのを覚えている。彼等の熱意は大変なものだった。

この年の第一回大会で、バドミントンの参加校は余り多くなかったが、東大が優勝した。

時期が前後するが、1952年には神戸で開かれたインターカレッジにも初参加した。５人で出かけたがアッという間に粉砕されてしまい、相手も内容も覚えていない。このときの大会委員長は関西学連委員長をしていた、関西学院大の大圃秀生君で、横浜緑ケ丘高校バドミントン部の同期生である。彼の家に緑ケ丘の一級下のメンバーが大勢来ていて久しぶりに再会を楽しんだ。（1950年度の全国高校選手権大会では彼らのチームが第二位。優勝は同じ横浜の関東学院高校だった。）

全試合が終ったあと、大圃君に頼まれて全日本学連の議事のとりまとめを引受けたが、実質的な議論があったのは翌年の開催地だけで、これは仙台ときまった。

1953年のインターカレッジにも５人で参加したが、この時には小樽商大に勝ち、二回戦で明治と当ってゼロ敗に終った。仙台は無闇と寒くて参ったが、仲々楽しい数日だった。

インターカレッジでは、のちに木村－平松君達が大いに活躍するのだが、これは大分先のことになる。

学連と言えば、ある時期に日本学連の執行部と協会との間に若干のいきさつがあり、学連の関係者から、東大で日本学連の委員長を出してくれないかという話があったが、東大の部には不釣合な重荷を背負いかねないので断った。

其後大分たってから、学連に委員を出して欲しいという話があり、今度は大丈夫そうなので主務の司馬君を関東学連の副委員長に推した。彼はのちに東京６大学問題（当時一部の或る大学と東大を入れかえて、野球と同じ東京６大学を作るという案。これはつぶれた）の収拾などにも貢献してくれた。

面白いのは、それから40年以上もたって、司馬君と同期の清水務君が、今度は日本協会の副会長として斯界に貢献していることで、まことによろこばしい。

1953年、いよいよ卒業を前にして気になっていたことは、バドミントン部は教養学部学友会の部であるが、東大運動会の部としては認められておらず、予算の問題は別としても、対外的には立場が弱い点があった。

この問題を、創立期のメンバーが居る間に片付けておきたいと考え、運動会総務部に加入を申込んだ。仲々埒が明かないので交渉を重ねたが、結局総務部メンバーのな

かに、新しい種目に対する抵抗感と、受入後の将来に不安を持つ者が居たのが原因であった。これは相当頑張らねばなるまいと腹を決めたが、幸い第一体育館で一緒だった柔道や空手の人達が、ときには必要なデータを彼等自身で調べまでして、総務部のなかで辛抱づよく説得をくり返してくれた結果、バドミントン部の加入がきまった。僕の方で武道の人達に頼み込んだわけではない。彼等として正しいと思うことを独自にやってくれたのだ。このことを思い出すたびに、彼等は立派な良い連中だった、本当に有難かったと思う。

ここまで書いて来て思うのだが、運動部の世界でも、大きな、古い、有力な部を中心とする、守旧的で権威主義的な潮流が、新しい、楽天的で寛容な、意欲的な世代によってどんどん変わって行ったのだ。

京大戦の「復活」やら、国公立大会を始めようとして熱っぽく活動していた戦後育ちの連中が全体をリードするようになっていったのだと思う。

駒場で新しく生れたバドミントン部は、この新しい潮流に進んで参加することによって、自らの骨格を形成して来たのである。

卒業後８年程して駒場の数学教室に助教授として勤めることになった。その後アメリカに２年間出張して帰って来ると学内は騒然。この年は入試もなく、新入生もなくて、授業は再開されていたものの、絶えず小事件にゆさぶられる―――という風であった。暮に主将の川上君と小林（健）君が来て、片山先生が今度御定年なので後任を引受けて欲しいという話で、もうそんな時期なのかと驚いた。

翌1970年、今は亡き木村武君の世話で銀座のサッポロビールで大きな会があり、片山先生にあれから初めてゆっくりお会い出来たように思う。「大分長く部長をやって来ましたが、あとは頼みますよ」というお話で、これで確かにお引き受けしたという感じがした。

「大学紛争」は大学全体に大きな影響を与えた。公害の激化などで科学の役割に対する疑問が噴出したことも大きい。バドミントン部のコンパも、以前より小ぶりでインフォーマルになったように感じられた。企業に勤めたが、今はやめてSF作家の修行中だというＯＢが話しに来たこともあった。

部報も生活雑記帳のような性格をやや強めたが、これに記事を頼まれると、何か非常に大事なことのように感じて（多分一回を除いて）毎号書いた。40回は越えたであろう。当時は数学界も大きな転換期にあり、記事を「適当にまとめておく」ことが苦

手なたちなので、期日が迫ると辛いこともあった。その当時頭にあることを、バドミントンと無関係でも書いたので不思議に思う人も居たかも知れない。

細かい話になったが、部長をしていた20年余りをふり返ってみると、一学年がそっくり抜けた時期や、バドミントンのサークルが部以外に幾つもあるのが常態になった——という、はるかに大きな変化にもかかわらず、大した落ち込みもなしに発展を続けて来たことは貴重なことだと思う。

其後私自身も定年を迎え、これもこの部生え抜きの三浦登現部長にあとを引受けて頂いたので心強く思っている。

いま40周年の記念誌をみると、巻頭で片山先生が50周年の頃には自分はこの世の人ではなかろうが——と書かれ、不幸にしてその通りになってしまったが、それでもこのあと長い間お元気で、亡くなったのはついこの間のように感じている。改めて、創部以来ほぼ半世紀にわたってお世話頂いた先生を偲んで筆をおきます。

バドミントン部50年存続の背後にある７つの仕組み

初代監督　昭和26年入学　　司馬　正次

１．はじめに

1999年の暮、バドミントン部ＯＢ会シニアの部の総会が開かれた。その時、非常に印象に残ったことがあった。

それは末席に座った何人ものＯＢ諸君から「50歳近くなった現在、このような末席に座る会合に出るのは全く久し振りだ。」との発言が相次いだことだ。まだ日本の旧い世代には、長幼の序をわきまえるという儒教の素晴らしい美徳が残っていると一瞬嬉しくなった。しかし、それ以上に50年の長さを実感した。当日は、バドミントン部の全ての世代が集まったわけではない。初期の卒業グループだけの集まりであった。

それでさえこのような感想が出る。ましてやバドミントン部の卒業生全部が集まったら、もはや年齢的な上下の感覚などなくなる位の関係だ。つくづく50年とはながい時間なのだと実感した。このながい50年を振り返る50年記念誌が発刊される。そのなかには、各世代毎に、自分達の過ぎ去った青春の甘い想い出を語る多くの記事が載せられるであろう。そのことに文句をいうつもりはない。

しかし、50年という歴史それ自体に真正面から取り組むことも必要ではないか。50年という長い時間の間に多くの人達がこの部の中を通り過ぎた。そして社会に出て、みんなそれぞれ、自分の持場で一隅を照らす人となっている。またある人は、社会全体に、いや世界にインパクトを与えつつある。しかも、それらの多くの人々が現在もバドミントン部に深い愛着をもっている。その意味でバドミントン部での共通の経験に共感を持ち、その中で人間的成長を得ていった。そして日本、いや世界に対して貢献する人材が50年の歴史の中で確実に形成されてきたのだ。

それだけではない。現役の集団である東大バドミントン部は、現在も絶えることなく続いている。戦績は、４部ということであまり芳しくない。しかしその地位よりも運動部として続いていることに本質的な意義がある。

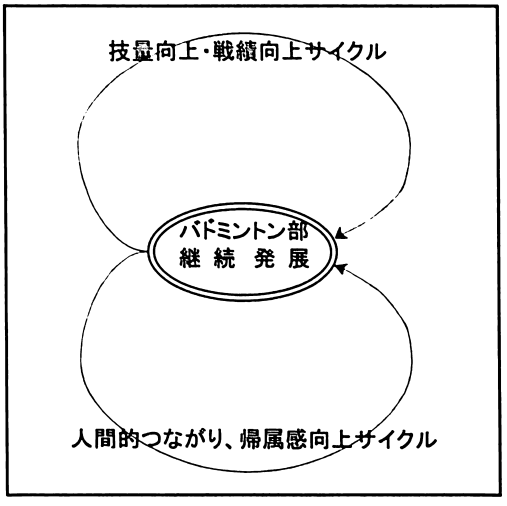
現在の大学の中には集団的な束縛を嫌う風潮が蔓延している。同好会全盛の時代である。また、公共の体育施設の整備と共にバドミントンを個人的に自由に楽しむ場が社会の中に飛躍的に増えた。何も大学の運動部という束縛のある場を選択しなくても良いはずである。そのような中で東大バドミントン部が50年間続いてきたことは奇蹟ともいうべきことである。そこには多くの人々の努力があった。しかし、その努力の方向が誤っていたなら、このように50年も続かなかったはずである。理にかなった継続のしくみ・システムがあったと考えても良いのではなかろうか。

つまり、ひとりひとりの部員は４年間という短い期間だけ部の中で生きる。それは通過していく集団といってもよい。一方、部は50年間という長い期間生命をもってきた。ひとりひとりの生命をこえ、永遠の生存をつくり出す秘密がその背後に存在するといえる。それを明らかにすることこそが50年という歴史を振り返る本質的な意義であると私は考えている。

２．部の根幹をつくる技量向上のサイクルとそれへの負のフィードバック

図１を見てほしい。バドミントン部の継続を支えてきた力は二つある。ひとつは技量向上サイクルであり、いまひとつは人間的つながりサイクルである。

図１



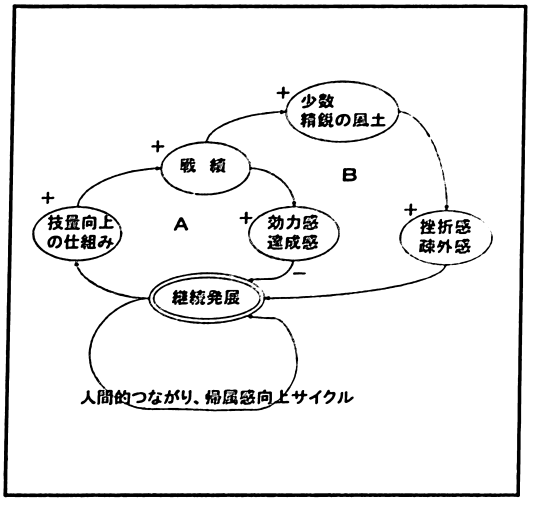
まず、技量向上のサイクルに注目しよう（図２）。このサイクルは、バドミントン部の存在意義を示すサイクルといってよい。毎週の練習、休みの期間の合宿、個人的な技量向上のトレーニングなどがそれである。その仕組みが十分機能するとリーグ戦などの試合での戦績が向上する。戦績の向上は、プレーヤーひとりひとりの効力感、達成感をつくり出す。それがより強く、より向上への意欲、さらに継続への原動力となる。（図２、Ａのサイクル）

しかし、このサイクルにはひとつの落し穴がある。より強く、より多くの試合に勝つことへの努力は、一方で少数精鋭の風土を部の中に生み出す。人間の能力や努力にはバラツキがあるのは当然である。勝つためには能力の秀れたものに組織の資源が優先して配分される。試合への出場、練習でのレギュラー優先などなどがそれである。このような少数精鋭化への風潮は学生連盟１部のリーグ戦が２ダブルス、３シングル

にこだわっている所に象徴的にあらわれている。４名の超エリートをそろえれば１部の地位は確保できる構図がそこにある。

少数精鋭の風土は当然のことながらエリート以外の一般部員の挫折感を生み出す。それは部の活動への積極的参加の意欲を削ぎ落とす。つまり、部を活性化させ継続していくことへマイナスの作用をつくり出す。（図２、Ｂのサイクル）

図２



従って、図２Ａの戦績重視の部の運営がどこまでも貫徹するわけではない。部の運営がその方向に強く傾くと部員はエリートだけとなり部全体の活力は低下する。その結果、部の存続が危なくなる。そこで、戦績重視、ことばを替えれば勝つことにウエイトを置いた部の運営に疑問の声が出る。“全部員がバドミントンを楽しめなければおかしい、”“楽しくバドミントンをやろうよ”ということになる。

バドミントン部の歴史を見ると一定周期毎に、このような「勝つこと」と「楽しむこと」との間の相克が生じている。そして、その度に部員の中で真剣な討議が行なわれそれを乗り切ってきている。その背後にあるのは、いま述べた相互に矛盾するサイクルが存在するからといえる。

そして、東大バドミントン部の良い伝統は、決して「運動部だから○○すべきだ」といった教条的な考えを外部から押しつけない点にあった。また内部の部員達も教条的なベキ論にとらわれることなく、“勝つこと”の苦しみに徹することが自分達の真の向上につながることを自主的に確認した点にあったといえる。これが東大生の知性の高さをあらわしていたといって良いのかもしれない。

３．部の活性化を創る人間的つながりのサイクル

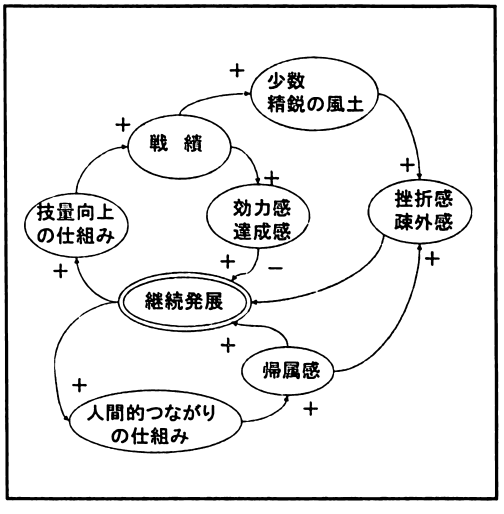
しかし、個人的な知性の高さだけで、少数精鋭のマイナス面が解消され、多くの部員を活性化した形でバドミントン部につなぎとめることにつながっているわけではない。そこにもうひとつの仕組みが存在する。それが第２の人間的つながりの仕組みである（図３）。

東大バドミントン部の中には部員の人間的なつながりを創り出すさまざまな素晴らしい仕組みが存在してきた。駒場同窓会館でのコンパ、寮の中でのマージャン或いはブリッジ。さらには京大戦、七帝戦などの遠征旅行などがそれであった。

また木村家、横山家などの例にみられるように家庭を開放して、家族ぐるみでの人間的つながりの場があった。また村田光二君の駒場城もそのための素晴らしい仕組みづくりであったといえよう。

このようなその時代時代に適合した人間的つながり形成の仕組みがバドミントン部の中で創造されていった。それが、バドミントン部全体の部員の間に帰属感をつくった。またバドミントンの技量の面ではエリートとなれず、挫折感を持った部員達に部に所属することの意味と楽しさを与えた。そして、部の継続への力となっていったのである。

図３



それだけではない。この人間的つながりの仕組みは、部の中に複数の価値基準を導入することにもなる。技量向上のサイクル、またそのサイドエフェクトとしての負のフィードバックを生み出すサイクルも含めて、そのいずれも戦績という価値基準に支配されるサイクルである。

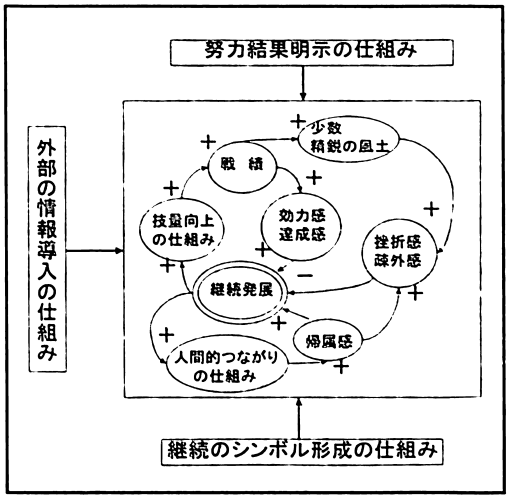
しかし、人間的つながりのサイクルは、戦績つまりバドミントンの強さ以外の価値基準を部の中につくり出す。“あいつが居ないとコンパが盛り上がらない”、“あいつはブリッジの神様だ”といったアソビの価値基準もそのひとつだ。また、バドミントンを離れた知的な基準もそのひとつだ。私自身、柔軟で洗練された清水君の発想にどれだけ影響を受けたことか、また工学的なものの見方を細矢君からいかに学んだことか。それらは、バドミントンの強さと異なった価値基準といえる。このような多様な価値基準を部の組織に、そしてその運営の中に持ち込むのが人間的つながりサイクルの真の意義といってよい。

4．ふたつのサイクルを支える３つの仕組み

いままで技量向上のサイクルと人間的つながりの両サイクルがバドミントン部継続にかかわる基本的な構造であるとのべてきた。これらのシステムを外側から支える３つの仕組みがある。(図４参照)

ひとつは、技量向上のための部としての努力、個人としての努力の結果を客観的に明示する仕組みである。それは関東学生連盟のリーグ戦がそれといえよう。バドミントンのチームとして、個人としての強さを春秋の２回、定期的に示すものといえる。つまり、部の努力のゴールをつくり出すのである。そして春と秋の定期戦日程はその努力のためのマイル・ストーンをつくり出すといえる。

図４



第２の仕組みは、部が変ることなく存続することをシンボリックに示すものである。東大バドミントン部の現役部員は４年間在籍するだけである。従って、メンバーは常に変化しているといって良い。この変化に対して部の不変性を示すことが必要である。それを象徴的に示すのが、部長である。また東大運動会所属の団体ということである。この後者は、永続性を組織面から象徴するものである。東京大学と共に存在する運動会。それに公式に所属するということは、とりも直さず部が一時的な存在でないことを示しているといえる。

バドミントン部の創立時に、運動会に加入するためいかに苦労したことか。それを達成したとき、これで部の基礎ができたと実感した。その背後には、今にして思えば、このような大きな意味があったのである。

このようなシンボル形成のための仕組みは組織だけでは十分に機能しない。それは抽象的であるからだ。部長の存在はそれを人間化する。

初代部長の片山先生が部の創立時より長年にわたって果たされた功績は実に大きい。あの温和で、親しみのあるお人柄はまさにバドミントン部の永続性を象徴するものとして不可欠のものであった。そのことは、先生のお亡くなりになる直前まで、年始に大勢のＯＢや現役が先生のお宅に押しかけ御馳走になる習慣が続いたことからも明らかである。そこには変ることないシンボルを求める人々の強い心がみられる。片山先生のあとバドミントン部でプレーした経験をもつ上野、三浦両氏が部長となりバドミントン部の内部から部長の再生産が行なわれた。このことは部にとって極めて幸せなことだったといえる。

第３番目の仕組みは、外部の情報をバドミントン部に導入する仕組みといえる。変

化の激しい時代の中で生き続けていくためには常に外部から情報を取り込み、それに適応していかねばならない。この仕組みの役割を果たすのはなんといっても監督、コーチであろう。また卒業生の有志による指導である。さらに現役自ら、他の大学の練習に参加するなどもこれである。

部の創立後間もない時には、法政の現役プレーヤーから、また立教の監督であった有馬氏や一流プレーヤーから多くの新情報を得た。また後年、当時一部であった筑波大から指導を受けたりしたのはこの仕組みのひとつの活動であったといえる。

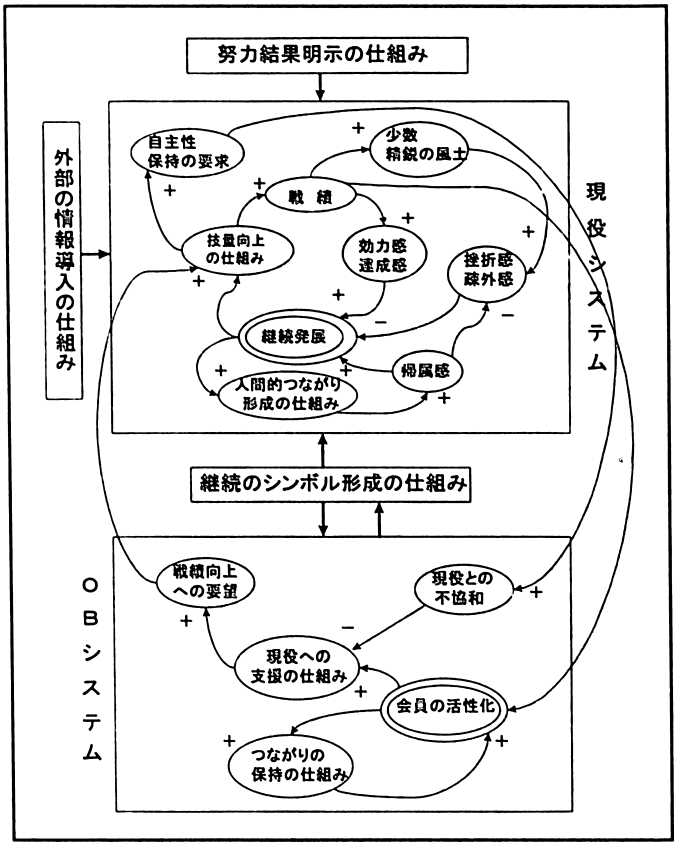
５．現役の活動を支援するＯＢ会の仕組み

いままでのべたバドミントン部継続の仕組みは現役を中心に考えたものだ。50年という歴史の中でバドミントン部はもうひとつの新しい組織を創り出した。それはＯＢ会である。

既に何度ものべたように現役は４年間の通過集団である。バドミントン部でプレーしたＯＢ達は年々着実に増加する。しかも最近の高齢化の傾向は、幸か不幸かわからないが、まだまだ最初の卒業生も健在である。つまり、本体の現役の人数は常におおよそ一定であるが、卒業生の集団は年々増え続けるという、極めてユニークな集団がバドミントン部なのである。

このＯＢ会の存在もバドミントン部の継続に大きな役割を果してきたといえる。その役割をまとめた図５を見ていただこう。ＯＢ会の中心目的は会員の相互の親睦活動への支援と現役への支援活動である。そして、この現役支援の背後には、自分達の過ごした部がより発展してくれること、もっと具体的には戦績向上への期待がある。それは現役システムの技量向上の仕組みへの働きかけとなる。

図５



しかし、この働きかけが度を過ぎると現役の部員から“うるさい”、“自分達の自主性を尊重して欲しい”との声があがる。つまり、現役の側としては、活動資金援助は大歓迎である。しかし、自分達の活動に口を出されては困るというわけである。このような現役とＯＢとのデリケートな関係は多くの部にとって普遍的な構造といえる。東大バドミントン部の良き伝統はこのＯＢ会の運営にもみられた。初代の清水会長以来、現役への支援活動は、“金は出すけど口は出さず”の原則を忠実に守ってきた。そしてＯＢ会の活動の力点を会員相互の親睦活動、言葉を替えればＯＢ達のつながり保持の仕組みづくりに主力を置いてきたのである。

ＯＢ会のこの戦略は、バドミントン部の継続発展に大きな力となってきた。この援助により部の創立時や初期の頃と比べるならはるかに財政的にゆとりのある部の運営が可能になった。更に、現役が先輩の顔色を伺いつつ、背後で不満を述べるといった不健全な状況も幸いにしていままで表面化することもなかった。

それは、ＯＢ会の執行部の秀れたリーダーシップのたまものであったことは確かだ。それと並んでバドミントン部の民主的、開放的な風土も貢献したといって良い。創部の時より、伝統的な運動部によくみられる先輩、後輩の厳格な差別意識は我々の部に

はなかった。いや、それを排除するよう努力してきた。“忘年の交わり”を結ぶよう全員が心掛けてきた。この良き伝統がＯＢ会運営を通して東大バドミントン部の継続を支える要因のひとつとなったのである。

このＯＢ会は、継続のシンボルを現役と共に共有する。例えば片山先生という初代の部長が、その求心力のひとつになっていたことがそれである。しかし、一方、ＯＢ会の存在、そしてその民主的・開放的な活動は現役の部員にとっても、部の歴史の存在、将来への継続を確認するきっかけづくりともなってきた。その意味でＯＢ会自体が部の継続のための新しいシンボルの役割も果たしてきたといえよう。

６．まとめ

いままで、バドミントン部を50年間継続的に発展させてきた構造的要因を７つの仕組みとして示してきた。それらは(1)技量向上の仕組み、(2)人間的つながり形成の仕組み、(3)努力結果明示の仕組み、(4)継続のシンボル形成の仕組み、(5)外部情報導入の仕組み、(6)ＯＢ会による現役支援の仕組み、(7)ＯＢのつながり保持の仕組みである。

これらの仕組みの内容はその時代時代によって変っていく。いやその時代に、またその部の置かれた状況によって変えていかなければならない。そこにこそ現在を生きる若者達の創造の場が存在する。この創造性に支えられてバドミントン部の50年の歴史が創られてきたのである。そしてこれからも若い力が新しい創造を続けていってくれることを心から期待している。

１．リーグ戦・国公立戦・京大戦・七大学定期戦

東大バドミントン部の黎明期（戦績のまとめ）

記念誌編集委員会

1950年春に有志が部員募集をして生まれた東大バドミントン部は、１年経つと呼びかけた発起人たちがいつの間にかいなくなり、一学年下の上野が主将となり、その後３年間をリードして部の基礎固めをした。

東大を代表しての正式な対外試合の始めは京都大学との定期戦であった。1951年、52年と２回連続して京都で開催してもらったが、当時の京大は渋谷兄弟を擁して戦力は圧倒的に優っており、４－11、５－10と全く歯が立たなかった。渋谷兄弟他有力メンバーが卒業した1953年になって11－４とようやく勝つことができた。翌1954年は８－７と辛勝、55年は５－10と負け、拮抗した戦力の良きライバルとして、定期戦は夏の一大イベントとして50年の歴史を刻み始めた。1956年は12－３で勝ち、当時としては勝ったり負けたりの勝負の一つであったが、後から見ると1965年までの10連勝の最初の年となっていた。

関東学生連盟には1952年に加盟した。以前から学連加盟の誘い、あるいは野球と同様、東京六大学リーグを作ろうという誘いもあったが、部としての体制が整っていなかったため参加できず、ようやくこの年、２部に加盟ということになり、春のリーグ戦では２部５校の４位という成績であった。同年秋には加盟校は一挙に６校増え、３部を新設して17校となった。秋の成績は春と同じ２部４位であった。翌1953年春は２部最下位となり、青山学院との初めての入替戦に臨んだ。試合は４－４となり、最終試合で上野主将がファイナルのセッティングをものにして２部残留を決めた。秋には一転して２部３位、戦績上最高の記録を残した。この当時は２部以下の各校とも戦力が揃わず、当たり次第で、勝ち負けが簡単に入れ替わる状況にあったということである。

上野らが卒業して山下が主将となり、1954年は春４位、秋５位という成績であった。加盟校は24校に増え、４部構成となっていた。翌1955年は山下、清水、細谷、司馬が大挙して卒業したため、対馬主将のもと、秋山ら新入部員の活躍で健闘したが最下位となり、入替戦で日大に敗れ３部に転落した。秋は３部優勝２部復帰を目指したが、５位に終わった。1956年足達が主将に就任。宇都宮で合宿を行うなど、合理的な練習方法の確立に向けて歩み始めた。春は４位であったが、秋には３部優勝を果たし、入替戦に臨んだ。残念ながら横浜国大に敗れ、２部復帰はならなかった。1957年須藤が主将となり春、秋とも３部３位であった。加盟校は28校に増加、５部構成となった。

1958年には秋山が主将となり、練習が組織立ったものとなっていった。合宿も定着

し、運動部として体裁が整い始めたのはこの頃であった。しかし、例年のことながら４年生の須藤、西本、深田らが卒業して戦力ダウンとなり、成績は３部４位、５位。２部復帰の夢は1960年春までかなわなかった。

この間1952年神戸、53年仙台、57年高松で開催された全日本インカレにも参加している。戦績は53年小樽商大に勝ったくらいで参加することに意義があるという程度であったが、高松のインカレに参加した七帝大の４校で相談して、翌年の七帝戦開催を決めたのである。第一回七帝戦は名古屋大学が当番校となって開催され、東大は３勝３敗の４位であった。

国公立戦は、1953年から始まり、第１回から1957年の第５回まで連続優勝している。その後、他校に有力選手が現われ、３位、２位、２位と優勝から遠ざかった。

１学年に１～２名の経験者と、あとは初心者がレギュラーになることで構成される東大バドミントン部は、毎年４年生の有力選手が卒業しても、それに代わる選手が育つシステムが整いつつあった。また、ＯＢ会の熱心な支援もあって、東大のバドミントンが確立されようとしていた時期であり、1950年代後半は、黎明期から第二世代への脱皮が始まった時代であった。

体育館あれこれ（1）

駒場第一体育館（昭和45年頃まで）

現第二体育館の玄関を背にして右手、テニスコートの突当りにあった。スレート張りの壁、暗い照明、さび付いて所々閉まらない窓、雨漏りする天井、ポールはロープで固定する、高いサーブが照明灯に当たるとレット（当った・当らないでもめる事も良くあった）等と書くといかにもひどい印象だが、当時としては恵まれていた方である。勿論今の第二体育館とは比べようもない。

コートは３面だが、体操の用具を隅に寄せるとあと１面分位の余地があって、基礎打ちの時は、30人ほどが並んでハイクリヤーを打ち合っていた。ここでは普段の練習、合宿、京大戦と、３部リーグ戦が行われている。駒場祭の招待試合で、早稲田、青学等とのオープン戦もやっている。出入り口は３個所あって、夏の練習では休憩時間に全部明け放って、涼しい(?)風にホッと一息ついた時期もある。その頃は練習中に水を飲むのは厳禁で、皆１時間以上も全く飲まずに汗びっしょりになって頑張った。今考えると随分無茶をしたものだ。休憩時に裏手の一つしかない水道の蛇口には長い列が出来た。ラケットやシャトルの置き場に困り、体育科の用務員さんに頼んで、鍵付きの収納ケースを館内に作って貰ったが、入れて置いたラケットが盗難に遭った事も思い出と言えようか。スレートの壁をバックにした懐かしい写真がいくつか残っている。

半世紀前のこと

昭和28年入学　　足達　哲之
昭和29年入学　　深田　健介

気象関係の仕事をしていた私の父が、第二次世界大戦時に海軍士官に任じられ、昭和17・18年ごろ一年ほどインドネシアに駐在、ラケット二本と数個のシャトルを持ち帰ったのが私のバドミントンとの最初の出会い。当時のシャトルは今の水鳥のモノとほとんど同じだったが、ラケットのフレームはラワン材を張り合わせたモノ、ガットはシープで湿度に敏感だったようだ。そのため梅雨時は正常なラケットが、乾燥時にはグニャッと曲がってしまっていた。それでも空襲警報におびえていた戦中、食べる事に必死だった終戦直後には、貴重な遊び道具だったので大事に使っていた。

そんな背景があったので、入学後バドミントン部があるのを知ってすぐに入部した。この年はＮＨＫテレビと日本テレビの放送が始まり、昭和25年に始まった朝鮮戦争の休戦協定が調印されるなど、終戦後の混乱期から成長期に移りかけた時だった。それでもまだ外で米のご飯を食べるには「外食券」なるものが必要で、京都に行くのに外食券集めに苦労した記憶があるが、京大戦のためだったかどうかは覚えていない。

私は通学生だったが、駒場寮のバドミントン部室にはしょっちゅう出入りしており、勉強を大事にしていた寮生には迷惑をかけていた。（足達）

寮は二室で十二人（各室六人）。初めて寮をのぞいた時、二年上の対馬さんが本郷へ移るので引越し直前だった。入寮時、二年生は足達・高山・杉原・上林・合田・坂井・菊池さん、一年生は石本・西本・北沢・小野寺・阿部・深田。次の年に入ってきたのが森・橋本等であるが、通学生（秋山・角川・原・宗像・相沢など）がほとんど毎日寮室へやってきて、トランプなど練習以外で賑やかだった。バドミントンの寮室にはバドミントンをやらない人もいて、バドミントン部は運動部か、同好会か議論した事もあった。運動部とはいうものの貧乏財政で、寮室でシャトルの傷んだ羽をセメダインでつけ換えたり、「サンバタ」からシャトルの前借をした。先輩からの寄付も仰いだが、期末はいつも赤字になった。（深田）

昭和29年春まで関東大学リーグは三部十九校で、立教の全盛時代だった。二部は青山学院・成蹊・都立大などが常連だったと記憶している。その後四部制となった昭和30年春に二部最下位となり、入れ替え戦で日大に敗れ、三部に転落してしまった。

この頃、西本君の高校時代の同期生が中央大学のバドミントン部にいるという縁で、

練習試合をする事になった。当日駒場の体育館に登場した中大の選手達は、白のズボンにまっ黄色のポロシャツという姿で整然と練習を始めた。当時の東大にはまだ統一のユニフォームは無く、一応運動着らしい物を着ているという時代だから、派手なユニフォームにビックリした。

国公立戦の記録では、私の在学時代一位を維持しているが、私自身は苦戦していた記憶しかない。

昭和31年の京大戦の成績は12勝３敗だが、天井の低い暑い体育館で、高く打つと天井にあたってしまうので苦労した覚えがある。多分三敗の中の一人は私だったのではないか。（足達）

国公立リーグでは横浜国大が強かったように思う。一橋大の一年上の横光氏とよく対戦したが、すべて負けた。同氏は第一物産（今の三井物産）に入社、一年遅れて小生が入社し関東実業団連盟二部に加盟。選手不足のため女性二名を加えシングルス三・ダブルス二で結構勝つことができた。

昭和31年の京大戦の対戦場所は紫野高校の体育館。京大体育館の天井が低いので、相手はハイクリアーの練習はしていないと見て作戦を立て、シングルス・ダブルスとも勝ったと記憶している。二年前と同じ百万遍知恩寺が宿舎。夜遅くまで麻雀をしていたら、住職に「息子が受験生で迷惑」と苦情を言われた。京都へ行くのは二回とも夜行の普通列車（現在在来線を走っている四人がけ座席）だった。

宇都宮総合グラウンド内の体育館で最初の合宿をしたのは昭和31年。小雪のちらつく中うさぎ跳びでラグビー場を一周したり、リーグ戦方式で練習したり、休憩時間はブリッジ・コパックをするなど、初めてのこと故まごつくことが多かったが仲間意識の強化にはなったと思う。賄いは４名の女子部員がやってくれた。

橋本さんが栃木高校の出身だった関係で、体育館を捜してくれて合宿場所が宇都宮になったと思う。また司馬さんには貴重な差し入れもしてもらった。まったく頭が下がる。（深田）

創部50周年を迎える前に、上林さんと秋山さんが他界されたことは、大変に残念だ。お二人のご冥福を心から祈ります。

1958～60年のこと

昭和32年入学　　比田　宏

1　戦績

秋山主将の下スタートした1958年の部の戦力は、須藤・西本・深田氏の卒業により苦しい状況にあった。４年生の秋山・橋本・森氏、３年生の古沢・小原氏に加えて、２年の石川・比田、１年の金丸等が起用されたが、期待ほどには勝てず、リーグ戦は春３部４位、秋３部５位と低迷した。この年は、国公立３位、七帝戦（名古屋）４位、京大戦８－７の辛勝と、総じて不冴えな結果に終った。

1959年は、ようやく戦力が充実し始め、古沢・小原組（この年東日本８位)、石川・金丸組の２強ペアを軸に、３年後半から台頭した岡野、２年の森・新田、有力新人木村等も加わって、リーグ戦ではあと一歩のところまで行った。しかし、当時充実期にあった一橋にどうしても勝てず、春秋とも３部２位にとどまった。国公立も七帝戦（札幌）も２位 、京大戦のみ12－３の圧勝だった。この年、主将は古沢氏から石川へとバトンタッチ。

1960年の春は、古沢・小原氏の卒業によって戦力は未知数のままシーズン入りしたが、石川・岡野・比田の４年組、３年の金丸（秋からは主将)、２年の木村・浜田、新人の平松等を中心に、それを追い上げる浅野・藤原・重松・三浦等が競り合う中で、部の活気が出て戦力も向上、３部リーグで優勝し、入替戦で 関東学院を下して 念願の２部入りを果たした。２部で戦った秋は残念ながら全敗したが、入替戦は一橋に勝って２部に残留した。この年、国公立は２位、七帝戦（久留米）はエース石川を欠き３位、京大戦は11－４の勝ちだった。

2　合宿と部の体制づくり

春秋のシーズン前の合宿は定例化していた。駒場の同窓会館を宿舎にすることが多かったが、抽選に敗れて裏門近くの「ちんや」なる安食堂に泊ったこともあったし、宇都宮や久里浜に出かけたこともあった。どこでも、予算の制約でメシのまずさが悩みだったが、それにしては皆よく食べた。合宿中もバイトに出かける者、夜外出する者もいたし、トランプが流行ったりして、比較的自由な雰囲気だった。

そんな合宿に、ある時ＯＢに伴われて当時日本一だった立教大学の監督が突如現れ、高い水準からの厳しい話をされた。あまり違いすぎる話で、ショックを受ける者、参考にならぬと反発する者等様々な反応だった。立教大学とは、その後合同練習も行ったと思うが、ちょっと差がありすぎた感は否めなかった。

この頃は、部のあり方を巡って、いわば路線論争のようなものが盛んだった。皆バドミントンが好きで集まっているのは同じだが、大きく分けると、個人の主体性に重きを置く考え方と、集団としての方向性や規律を重視する考え方があって、よく議論した。

また、ＯＢの数も次第に増え、部の指導のほか金銭面でも支援が期待できるようになってきた。こうしたこともあって、部全体の経営を行えるマネージャーの必要性が意識されるようになった。それまでのマネージャーはどちらかというと、主将以外の選手が片手間にやるような傾向があり、部全体の舵取りまでは手が回らなかった。1958～59年には私がその任にあったが、結局虻蜂取らずに終わった。

そこに登場したのが渡辺光夫であり、彼の工夫と努力によって、部の骨組みが固まり、その後も名マネージャーといわれる人たちが続く基礎を作った。（私のマネージャーとしての唯一の功績は彼を後任に推薦したことである。）

3　その他の思い出

- 今とは比べものにならないほど学生生活は貧しかったが、国中がそうだった。名古屋への遠征で準急に乗って、先輩に贅沢だと言われた。コンパでも、酔う効率の悪いビールなどはあまり出ず、安い日本酒を大やかんで暖めて飲むのが主だった。1959年頃から都会派の多少ゆとりのある部員が増え、試合の帰りにビアホールに寄ることも多くなった。学生で運転免許を取る者はほとんどなく、スキーへ行くのもほんの一部という時代だった。
- 駒場寮がクラブごとに入室させる制度だったので、寮に入るために部に入る人もいた。部室代わりにたむろする通学生とは多少気まずいこともあったが、いろいろな人が周りにいたのは部にとって悪いことではなかったと思う。
- ２年になって間もなく、当時４年の秋山さんにものすごく叱られたことがある。バドミントンのことから始まったのだが、生活態度、人生観など一切含めての大説教だった。あれほど相手を思って本気で言えるというのはすごいことだし、有り難いことだと思っている。部生活の中で得た貴重な経験である。

関東大学リーグ戦二部復帰の頃（昭和33～35年）

昭和33年入学　　渡辺　光夫

昭和30年代に入って、新入部員の数も次第に増えるようになった。そして、東大バドミントン部にも高校時代に対抗試合を経験した者が毎年のように入部するようになって、部員の層も厚くなり、練習も少しずつ体系的になっていった。

昭和30年春に二部から三部に転落して以来、35年春に二部に復帰するまでの５年間に部の体質も次第に強化されてきた。

新入部員の中に、１年の春季リーグから公式戦出場が出来るほどの基礎的実力を持った経験者が毎年途切れなく入部して、即戦力として活動するようになるとともに、その後の４年間にわたって大いに活躍するようになった。32年の比田、33年の金丸、森、34年の木村、35年の平松などの諸兄がその代表例である。こうした活気ある新入部員の参加は、実力競争の環境にも良い影響を与え、大学に入ってバドミントンを始めた者の中にもメキメキと力をつけて活躍する者も続いた。もちろん、31年の古沢、小原、32年の石川、岡野などの諸先輩も３、４年になって益々実力をつけて目覚しい活躍をした。

このような層の厚みが出来てきた結果、実力派の卒業生を送り出しても、その穴を後輩達がすぐ埋めることが出来、他校に見られるような強い４年生の卒業による戦力低下現象に見舞われることもなく、着実に実力をつけていくことができた。35年の春季リーグ戦での二部復帰、36年の国立七大学戦初優勝、国公立戦４年振り優勝と創部10年の充実期を飾るにふさわしい戦績を残すことになった。

このような充実期の流れで東大バドミントン部の戦力を特徴づけたのは、何と言ってもダブルスの強さであった。従来、ダブルスのペアは、同学年で組むのが一般的であったが、34年の東日本ベスト８にまでなった古沢・小原の後続ペアは、学年をまたがるケースが一般的になってきた。このことがペアリングの柔軟性を増し、第一ダブルスと第二ダブルスの戦力を均衡あるものにすることを可能にするとともに、第三ダブルスの戦力を他校に比し圧倒的に「強力な」ペアで試合に臨むことをも可能にした。この結果、ダブルス３ポイント制のリーグ戦では、オーダーの如何にあまり左右されることなく２ポイント、オーダーによっては３ポイントが常態となり、「ダブルスの東大」の評価を得ることになっていった。もっとも、ダブルス２ポイント制の国立七大学戦では、トップ・ダブルス激突で涙をのみ、１対１で引き分けと言うことも何度かあったのだが。

関東大学リーグ戦、国公立大学戦を通じて東大の好敵手としてよく対戦したのは、

都立大学、横浜国立大学、一橋大学、学芸大学などである。これらの大学とは、定期戦のほかに、度々練習試合なども行って、互いに行き来した。

これら各校とは全般的には実力伯仲といったところだったと思うが、一つだけ東大と違っていたのは、チームに飛び抜けた力のあるいわゆるスター選手がいたことである。都立大の原口、横国大の岡田、秋山、一橋大の森田といったように。これらスター選手は、いずれも入学早々から三部リーグでは、公式戦でその強さを示した面々であり、東大レギュラー陣の中には、シングルスはもちろんダブルスでも容易に勝てなかった。ほかに、三部リーグでスター選手がいた大学に、学習院大学（田中）、成城大学（四ツ柳、岩崎）などがあった。

しかし、東大勢も３～４年になってくると、これらの選手ともほぼ互角に渡り合える実力をつけてきた。34年国公立戦では、古沢・小原が森田・久郷（一橋）を、石川・金丸が原口・鈴木（都立）をいずれも２－０で降し、それまでの雪辱を果たした。34年秋季リーグ戦では、古沢・小原が岩崎・金川（成城）を２－１で、田中・村田（学習院）を２－０で降し、森田・久郷（一橋）、秋山・福永（横浜）にはフルセットまでねばって惜敗した。35年春季リーグ戦では、石川・木村が原口・針生（都立）、田中・大月（学習院）をいずれも２－１で降し、比田・金丸が森田・久郷（一橋）、岩崎・小林（成城）にいずれも１－２で惜敗している。さらに35年秋季の一橋大学との入替戦では、石川・平松が森田・久郷を２－１で降した。

このようにダブルスでは各校のスター選手と互角に戦える実力をもつようになったものの、シングルスではこれら選手の牙城に肉薄することは容易ではなかった。34年秋季リーグ戦で古沢が２－１で森田（一橋）を、また35年秋季の一橋大学との入替戦で石川が２－０で森田を降したほかはフルセットまで持ち込んだ試合はあったものの勝ちを得るまでにはいたらなかった（原口（都立）については比田（34年国公立）、石川（34年秋）、木村（35年春）が、岩崎（成城）については木村（35年春）がフルセットで負けた）。

33年には三部の４、５位と低迷を余儀なくされた東大も、34年のシーズンには、古沢、小原という強力な４年生に加えて木村という新入生の即戦力が入ったこともあって、関東大学リーグ戦は春秋ともに二位、国公立戦、国立七大学戦もともに二位とまずまずの戦績を残した。そして35年のシーズンは、古沢、小原の両戦力の抜けた穴埋めが大いに懸念されたが、平松という即戦力の新入生が加わったこともあって、安定した戦力を維持することができた。

春季のリーグ戦、緒戦の都立大学戦ではダブルスで石川・木村が宿敵原口のダブルスをフルセットの末勝ちを得たうえ、シングルスでは木村が原口に挑んでフルセット

で惜敗したほかは５ポイントを上げるなど好調な幕開けとなった。しかし、その後は、一橋大学戦５－４、成城大学戦５－４と接戦が続く。成城大学戦では、四ツ柳・大野と岩崎・小林にダブルス２ポイントを失い、東大のお家芸のパターンを敵に取られてしまって一時は慌てたが、シングルスは四ツ柳、岩崎をうまく外して４ポイントを取り事無きを得る。続く対学習院戦も５－４であったが、ダブルスで石川･木村が田中･大月に１セットを軽く取られてフルセットになり（２－１で勝)、シングルスでも平松（対荻田)、金丸（対田中)、岡野（対牛島)、比田（対小山）４人もフルセットになるという大接戦であった。最後の横浜戦では、石川・木村が福永・田中にフルセット大接戦の末破れたが、他は順当に勝ちを取り５－４となり、終わってみれば全勝優勝ということで、31年秋以来７シーズン振りに入替戦に再挑戦することになった。

関東学院大学との入替戦は、国民体育館という大舞台で行われ、相手側の観客席応援団に先ずびっくりする。試合の方は、比田・金丸、岡野･浜田とダブルス２ポイントを難なく先取し、続く石川・木村は佐久間・大坪とフルセットの末ポイントを得て、早くも王手という態勢。シングルスは岡野が対安藤、金丸が対佐久間でフルセット・マッチを失ったものの、石川、木村が難なくポイントを取って５ポイント先取、あっけなく試合終了、二部昇格ということになる。

石川・木村は、余勢をかって関東選手権に出場し、一回戦では石井･清水（早大）をストレートで降し、二回戦に進出、慶応大ナンバー２の宮永・蒔田というペアとぶつかり善戦するも及ばず涙をのんだ。

体育館あれこれ（2）

検見川体育館（東大付属検見川総合運動場の一部）

昭和39年頃から合宿と京大戦で使っている。昭和41年の七帝戦もここで行われた。コートは４面、数年前に改装され、床は非常に奇麗であるが天井はやや低い。現在も合宿は主としてここで行っているが、ゆったりと４面を取っているので、使い勝手は充分である。宿舎も完備しており、都心から１時間程度と地の利も良い。６面あればリーグ戦等にも使えるのではないかと思う。ここで何度か行われた京大戦では、クロスカントリーもメインイベントの一つであった。かってはここに付属のゴルフ場があったが、国立大学の付属施設で、職員の為のゴルフ場とはと云々されて、今ではクロスカントリーコースになっている様だ。

国民体育館

神田一ツ橋にあった。古いが趣のある体育館。コートは３面、かなり収容能力のある素朴な造りのスタンドを持つ。関東１部リーグ、関東学生、東西対抗など多くのイベントが行われた、往時のバドミントンのメッカである。入替戦もここで１部から３部までが一緒に行われた。１・２部入替戦の審判は際どい判定を迫られ苦労した。記録によれば東京での最初の京大戦もここで行われている。隣は共立女子大だったと思うが、今あの辺りはどうなっているだろう。

昭和35～38年

昭和35年入学　　平松　由紀夫

昭和35年

第一次安保闘争の年であった。６月にはデモ隊が国会に突入し樺美智子さんが死亡するという事件があり学内騒然。練習をさぼってデモに参加する者も続出した。

石川さんがキャプテン、渡辺さんがマネジャー、木村さんが駒場のキャプテンにそれぞれ就任した。渡辺さんは名マネジャーとして活躍。コンパの取仕切りもお得意で、「エンヤラヤー」の掛け声と「フレー、フレー」のエールが今でも耳に残っている。

この年の新人は平松、重松、三浦、小野、城石など多士済々。平松は即戦力として春のリーグ戦に出場。重松、三浦も準レギュラーとして活躍。次第に上級生を脅かす存在に成長していった。

駒場主将になった木村さんは慶応大の春の合宿に特別参加。１部校のハードトレーニングを駒場に持ち帰り実践。トレーニングやランニングの先頭に立ち、颯爽と皆を引張る姿はまさに「駒場の若大将」であった。

春のリーグ戦は石川主将の下、チームワークを発揮し３部で優勝。入替戦でも関東学院大を破り、５年ぶりに２部への復帰を果たした。

監督の司馬さんは大変恐い存在であったが、２部昇格のご褒美としてレギュラー全員に銀座の末広でステーキをご馳走してくださった。当時の我々にはめったにないご馳走である。後で伺ったことだが、司馬さんは大学院の特別奨学金がおりたので、それでご馳走してくださったとのことであった。

この２部昇格祝いのコンパで、小柄ながら負けん気の強い１年の重松は前後不覚に酔っ払って、石川主将以下諸先輩を前にして、「そのうちハイクリアーさえマスターしたら全員に勝って見せる」と豪語し、翌日頭を丸坊主にして体育館に現われ、皆を驚かせたが、彼は夏休み中にひそかに猛練習し、休み明けにレギュラー全員に挑戦。全員から少なくとも１セットを取ったのには恐れ入った。

国公立戦は都立大の原口さん、一橋大の森田さんなどの強豪に歯が立たず。団体戦２位。個人戦もダブルスで石川・金丸組が２位になったのみ。この頃の東大は国公立の中でも決して「図抜けた存在」という訳ではなかった。

京都で行われた京大戦は11－４で快勝。

七帝戦はエースの石川主将が欠場。炎暑の九州で比田さん、金丸さん以下奮戦した

が、頼りの木村さんが九大戦でついにスタミナが切れてダウン。九大、阪大と一敗で並んだが、残念ながら得失点差で３位となった。試合後の打上げパーティーで平松は酔った勢い（？）で「以後３年間 連続優勝する」と豪語したが、結果として「公約」を実現することとなる。

秋のリーグ戦は２部の日大、日体大、青学大、神奈川大、明治学院大に全く歯が立たず、３部との格の違いを思い知らされた。以後、２部と３部の間を行ったり来たりすることとなるが、「２部定着」という一段と高いレベルを目標に猛練習の結果、次第に運動部としての体裁が整い、選手の層も厚くなり、「国公立には敵なし」という東大の黄金時代（異論があるかも知れませんが...）を築くこととなった。

昭和36年

監督が司馬さんから秋山さんに交代。金丸さんがキャプテンに、佐藤祥次さんがマネジャーに就任。平松が駒場キャプテンになった。

この年の新人は大西、森、渡辺、徳田、鈴木敏之など。理科系が多かったせいか、賑やかな前の学年とは対照的に真面目で大人しい者が多かった。

前年の石川さん、比田さん、岡野さんといった主力が抜けた穴は金丸、木村、浜田、平松に加え、しぶとい浅野・藤原組のダブルスおよび進境著しい重松、三浦等によって十分カバーされた筈であったが、春のリーグ戦で２部最下位となり、入替戦でも横浜市大に敗れ３部転落。さらに、秋のリーグ戦は３部で一橋大によもやの敗戦で２位。上記２試合は実力的には有利といわれながらオーダーの不運もあり、いずれも４－５と接戦で敗れ、勝負の厳しさを味あわされた。

リーグ戦では不本意な１年であったが、国公立戦では団体戦で初優勝。ダブルスでも木村・平松組が圧倒的な強さを発揮して優勝した。

京大戦も11－４と圧勝。東大は選手の層が厚くなり、ダブルス５組、シングルス10人の公式戦から外れた連中がオープン戦で次々と京大の主力選手に挑戦し、勝ってうっぷんを晴らすといった光景が見られた。

続いて大阪で行われた七帝戦では金丸キャプテンの下、木村、浜田、平松等の活躍により接戦の末、九大、阪大といった強敵を下して初優勝。

この年、東京で行われた東日本学生選手権のシングルスで２年の平松は４回戦まで勝ち進み、１部の強豪、法政大の五味川選手とフルセットの接戦の末、惜しくも敗れたが、この活躍で東日本学生ランキングの18位となり、秋に名古屋で行われたインカレではシングルスのシード選手となった。もっとも、この時は初戦で日大の新人に敗

退したが、ダブルスでは木村・平松組が２回戦で慶応大（１部）の臼井・本山組を破る番狂わせ（？）を演じた。

秋山監督は司馬監督と異なり、ストレートに雷を落すことはなかったが、敬虔なカソリック信者で、合宿などで皆を相手によく神父さんみたいにネチネチと（本人は「理路整然」のつもりであったと思うが...）お説教をされた。

秋山監督について印象に残っているのは、ダブルスのパートナーを固定せず、誰とでも組めるように練習し、対戦相手に応じて組替えるようにと指示されたことである。

当時我々は、ダブルスはパートナーとの一体化が重要であり、それにはパートナーを固定して練習を積むしかない、ただでさえ練習量の少ない東大が他校に勝つためには尚更であると思っていた。秋山さんは、「パートナーを固定して練習すれば却ってスケールが小さくなる。パートナーが変ってもダブルスの基本は同じであり、パートナーを取替えて練習することによって各人の行動範囲が広くなり、ダブルスとしてのスケールが大きくなる。」とのお考えで、これを強く主張された。我々は半信半疑であったが、監督命令であるのでこれに従ったところ大いに成果があがった。

スタミナの関係もあろうが、「東大はシングルスよりダブルスの方が手強い」と他校から言われるようになったのも「秋山方式」のお蔭である。

当時、練習は月・水・金の週３回。午後４時から始まり、柔軟体操やサーキット・トレーニングの後、駒場のキャンパス一周（２～３km）のランニング。その後、第一体育館でハイクリアーから始まる基本練習。この頃から本郷の連中も加わり、試合形式の練習が始まり、７時頃に一旦終了。その後、レギュラークラスが残って９時、10時まで実戦練習。大事な試合前にはこれが11時過ぎまで続くこともあった。

特に、足腰を鍛えスタミナをつける目的でランニングを重視しており、羽を打つより、ランニングの方が得意な連中（ランニング専門部員？）もいた。毎年、正月に伊豆の戸田で行われていた運動部のキャプテン合宿のマラソンで35年に木村さんが陸上、サッカー、ラグビー部等の猛者をおさえて、ボート、野球に続き堂々の３位。37年には鈴木敏之も３位となった。また、36年の駒場の運動会のマラソンでは山家が６位、三浦が７位に入賞。さらに、37年の運動部対抗駅伝競走では陸上部に次いで堂々２位となった。

上記は何れも東大運動会におけるバドミントン部の地位向上に大いに貢献した。

昭和37年

木村さんがキャプテンとなり、小野がマネジャー、大西が駒場のキャプテンに就任した。小野はひょうきんなしぐさで皆を笑わせるのが得意であった。

金丸さんの抜けた穴は、当時の高校バドミントン界の名門麻布高校から、インターハイで活躍した馬場の入部により十分埋まり、その他、森本、鈴木明夫、谷合、宮地など新入生が50～60名入部、活況を呈した。駒場の第一体育館は３面しかないので新人は７月の駒場の合宿まではトレーニングとランニング主体の練習で篩にかけられていった。

馬場は春のリーグ戦から大活躍。２部で鍛えられ層が厚くなった東大は３部では圧倒的な強さを発揮して優勝。入替戦でも宿敵一橋大を下して２部復帰を果たした。

国公立戦は層の厚さを発揮。団体戦は楽々優勝。個人戦シングルスで新人の馬場が早くも優勝。木村さんが３位。ダブルスでも平松・馬場組が優勝した。

京大戦は９―６で勝ったが、意外と苦戦。京大の善戦というべきか。

札幌で行われた七帝戦は最終東北大との優勝をかけた一戦、シングルスで平松が足がつってよもやの敗戦。２－２となり勝負はキャプテン同士の最終戦に持込まれたが、ここで木村さんが、本人曰く「最高に気合の入った試合」で相手を圧倒し、２連覇を達成した。

２部に復帰した秋のリーグ戦はシングルスの平松、馬場、ダブルスの木村・平松組の活躍もあり、５位となって入替戦なしの２部残留となった。特に、木村・平松組は２部の強豪相手に通算４勝１敗の好成績で「２部最強のダブルス」と言われた。

チームとしてもこの37年秋のシーズンあたりが一番強かったのではないだろうか？

昭和38年

この年からフレームショットがフォルトではなくなった。これにより審判のフレームショットの判定をめぐってもめることがなくなった。

平松がキャプテンに、鈴木敏之がマネジャーに就任。駒場のキャプテンは馬場に内定していたが、一身上の都合で退部したため、代って森本が就任した。

木村、浜田、浅野、藤原に加え馬場まで抜けた穴は大きく、残った４年の平松、重松、三浦、城石、３年の大西、２年の森本に加え、麻布高校で馬場とペアを組んでいた新入生の北浦が即戦力として参加、リーグ戦を戦うこととなった。

この年の新人は北浦の他に木下、井上、江口、志岐、高橋、浜田、浜中、横山、脇

田と多士済々。同期の結束も堅く、次代を担う勢力として成長することとなる。

春のリーグ戦は２部で一橋大に惜敗し最下位。入替戦も関東学院大に敗れ、３部転落となるところであったが、上位の日体大に選手の登録違反があったことから、幸運にも２部に残留できることとなった。

国公立戦は、リーグ戦で一橋大に負けたうっぷんを晴らすべく奮戦し、団体戦優勝。個人戦でもシングルスで平松が優勝、北浦が３位。ダブルスでも重松・北浦組が優勝、平松・三浦組が２位と圧勝した。

この大会の最中、日頃、運動部員としての根性と心構えを力説していた強硬派の小野は、下級生の見ている前でぶざまな試合をしたことを恥じ、自ら頭を丸坊主にしてけじめを示したが、そのまま就職試験に臨み、「そんなの古いよ、君！」と試験官に笑われたとのこと。

京大戦は15－０を狙ってダブルスを組替え、オーダーにも工夫を凝らしたが、これが裏目にでて11－４となり、不遜な態度を咎められる結果となった。

九州で行われた七帝戦は平松、重松、三浦、大西、北浦等の活躍により、圧倒的な力を発揮して優勝。公約（？）通り３連覇を達成した。

秋のリーグ戦は２部の４位を目指して北陸の高岡で合宿。ダブルスを主体にパターン練習を取り入れた猛練習の甲斐あり、宿敵一橋大と関東学院大を何れも接戦の末破り、春の雪辱を果たすとともに、念願の２部４位という目標を達成することができた。この２部４位という記録はその後も破られておらず、我々の時代の誇りである。

片山先生：部長の片山先生は京大戦をはじめ時々試合の応援に来てくださった。白髪、温顔の紳士でいつもニコニコと笑顔で応援してくださり、先生がいらっしゃるだけで我々は大いに奮いたたされた。毎年、お正月に皆で先生のお宅にお邪魔し、奥様心尽くしの手料理とワインをご馳走になった。また、その席で新年度のキャプテンが抱負と目標を述べるのが恒例であった。

矢城堅太郎さん：矢城さんは麻布高校で木村さんや森健一さんと同期の友人であったが、慶応大学に進まれ、在学中から東大の試合の応援に来られ、さらに合宿、コンパ、遠征にまで参加されるようになり、長年にわたり自他ともに認める「私設応援団長」として活躍。誰にも親しまれるお人柄から、いつのまにか部員と変わらぬ存在となり、自然に駒羽会の名誉会員になられたというユニークな方である。個人的にも私

を含め、矢城さんに種々お世話になった者も多い。

この時代マージャンが盛んで、部員同士駒場の周辺の雀荘で楽しむ他、試合やコンパの後など木村家や平松家さらに横山家で徹夜でやるようになった。当時は千点５円～10円位のささやかな金を賭けてやっていたが、毎回清算する代わりに紙に記録をつけて置くようになり、次第に参加者が増えて、次々に用紙を継ぎ足して行く中に１年たって追出しコンパの後で清算する時には長い巻物みたいなスコアシートが出来上がっていた。この中で断然回数が多かったのは４年の重松、城石に１年の横山といった連中であったが、結果は重松がダントツの一位で横山がビリ。僅かな賭けといっても１年間では相当な金額となったため、横山の泣きが入り、重松に大幅にまけてもらってめでたくチョン。

体育館あれこれ(3)

ドレメ体育館(杉野学園短大体育館)

山手線目黒駅のほぼ真ん前にある。昭和35年から昭和38年頃の２部リーグ戦は主にここでやったように記憶している。ここもコートは３面、スタンドも整備された、当時かなりハイレベルの体育館だったが、今はなくなったと思う。１部・３部とも土・日に試合をして居たが、何故か２部はウイークデーの試合が多かったような気がする。試合後は権之助坂界隈で反省会（飲み会）をしたり、近くにある木村家が基地となって、麻雀をしたりした。

品川体育館

大井町線戸越公園駅に近い。コートは４面か６面、スタンドについての記憶はない。２部では一度くらいしかやっていないが、昭和39年には、春、秋ともに入替戦を戦っている。今でも品川区の色々なバドミントンクラブのホームグラウンドになっている。

横浜公園体育館

名前だけの記憶であるが、確か昭和35年、２部昇格（復帰）後の秋リーグ第一試合の場所として記録に残したい。尚昭和38年秋から昭和39年秋まで２部リーグ戦が行われた。

東工大体育館

大井町線大岡山。正門迄は駅から近いが、体育館迄は袴線橋を越えて10分ほどかかった。コートは６面、広々とした体育館で、主に国公立大リーグを戦った。

昭和39～41年の戦績

昭和38年入学　　北浦　正一

昭和39年

この年バドミントン界ではトーマスカップが東京体育館で開催され、日本はアメリカゾーンから出場を果した。デンマークのエルランド・コップスやインドネシアのソネビル等のトップ選手のバドミントンに目を見張った。

大西さんがキャプテンに、鈴木明夫さんがマネージャーに就任。駒場のキャプテンには北浦が就任した。

平松さん、重松さん、三浦さん、城石さんのレギュラーが４人抜けた穴は非常に大きく、先輩からは三部転落は必至といわれた。４年の大西さん、徳田さん、渡辺さん、３年の森本さん、谷合さん、２年の北浦、木下、浜中、井上、横山で二部で通用する戦力を構成する必要があった。新人選手としては大門らが入部した。

春の一橋大学との定例の練習試合で、大西主将が気合いの入った試合で鎌田氏に勝ち、風邪で欠場した渡辺さんに代わって出場した横山が義家氏に勝ち、５－４で試合をものにしたことで、何か行けそうな予感がした。

春のリーグ戦では、予想通り上位５校に歯が立たず、最下位となった。入替戦は一橋がでてくるものと考えていた処、明治学院がでてきた。予想外であったが、相手のオーダーを読み、辛うじて二部残留を果たした。

国公立戦は、二部残留の余勢を駆って絶対的ポイントゲッター佐藤氏を有する一橋を破り団体戦優勝。個人戦では、シングルスで北浦が２位、ダブルスでは北浦・木下組２位であった。

京大戦は平安女学院体育館で行われ、11－４で予想以上の大勝。オープン戦で横山が京大NO.１の長尾氏にファイナルで勝ち、実力、自信をつけた。

京大戦に引き続き京都西京極体育館で行われた七帝戦では、更に余勢を駆って優勝を目指したが、緒戦の九州大学に破れ、あとはボロボロの６位となった。京大戦から連続して京都に滞在し、全員疲れが溜まっていたこと、急激に成長した横山に期待しすぎたオーダーが裏目にでた。

試合開催前日のキャプテン会議で、２複３単の試合は今年限りとすること、来年は過渡的段階として２複５単、再来年には３複６単で実施することを決めた。

秋のリーグ戦は、日体大をあわやという所に追い込んだが、結果は最下位で、また入替戦となった。今度も相手は明治学院かと思ったら一橋で、何とかいけると考えた

が、敢えなく敗退、今度はよもやの３部転落となった。

この１年を総括すれば竜頭蛇尾。プレーヤーは揃っていたが、追い込まれて逆転できる底力を持つには至っていなかったということになる。七帝戦の敗戦以降、レギュラー合宿等で引き締めを図ったが、チーム内のまとまりを欠いてしまったということである。

昭和40年

この年学連が公式試合に水鳥球の採用を決めた。これによりシャトルコックのバラツキが少なくなり、弾道が安定して技術の高い者が有利になるということになった。当部としては２部復帰、七帝戦優勝は至上命令であった。また、リーグ戦ではダブルス３、シングルス６の試合数は変わらなかったが、シングルス６試合を二つに分けその間にダブルスをはさんで、３単３複３単とする変更があり、オーダー戦略が変わった。

キャプテンには森本さんが就任し、マネジャーは鈴木さんがそのまま続けることになった。

春のリーグ戦は、３部で優勝すれば入替戦の相手は一橋で、佐藤氏の抜けた現在、２部復帰は見えていた。３部では圧倒的な強さで４勝０敗で最終日に同じく４勝０敗の明治学院と対戦した。オーダーはバッチリ当たり完勝と思われた。ところが、Ｓ１北浦、Ｓ２横山の二人がまさかの敗退、続けて大門も負け、ダブルスの北浦・横山組は勝ったものの次のダブルが敗れて、後がなくなった。木下・大門組が１セット落とした後、大逆転で何とかつないだ。次のシングルスの浜中は順当勝ちしたが、毎試合カド番であった。

森本さんは藤野氏に対して１セットを落とし、２セット目も先行を許し、殆ど絶望的な状況であった。しかしキャプテンの責任と根性で逆転し、ファイナルに持ち込んだ。第３セットも同じく先行をされたが、２セット目同様、後半盛り返して遂に４－４の最終試合に持ち込んだ。ここまで来ると最後の木下の優勢は明らかで、奇跡の勝利を勝ち取った。一橋との入替戦には順当に勝ち、２部復帰を果たした。

国公立は、当然の様に団体戦を制した。個人戦でもシングルスは優勝北浦、２位横山、３位森本と上位を独占。ダブルスは北浦・横山組が優勝した。

京大戦では、公務員試験と重なった谷合さんが欠場した。何とか勝てるだろうと考えていたが、結果的に７－７で最終戦決着となった。オーダーの最後は木下だったので一応安心していた。ところが京大 黒田氏は極めて快調に試合を進め１セットを取

ってしまった。応援の方も青くなったが、２セット目もリードされた中盤から木下の執念がまたも逆転を生んだ。京大は10連敗をまぬがれる絶好のチャンスを逃すことになった。

この時点で、森本さんは大学院入試準備のためキャプテンを辞め、北浦がキャプテンに就任した。

七帝戦は昨年の雪辱に燃えて大阪へ乗り込んだ。宿舎は道頓堀で道頓碑の直ぐ近くの旅館で京大、阪大を除く５校が同宿となった。他校は麻雀の対抗戦をやっているところもあったが、優勝の二文字以外考えていない東大は就寝時間を守り、朝は食前にランニングとダッシュ、柔軟体操をして大阪城公園の大阪市立中央体育館に乗り込んだ。

試合は最終戦まで結果的には楽勝であった。昨年の申し合わせ通り、２複５単の試合で、シングルスの比重の高い大会であった。そのため層の厚い東大は極めて有利であった。ダブルスで２つ負けることは全くなかったし、シングルスだけの浜中は常に第１試合に出て勝った。不動のオーダーで５試合を戦い、相手校は自由に対戦相手を選ぶオーダーを組むことが可能であったが、ものともせず５校を退けて全勝で東北大との最終戦を迎えた。東北大は昨年最終日に最下位を争った因縁の相手であったが、今年はベストメンバーで一つ間違えば優勝をさらわれる可能性があった。５試合不動のオーダーであったため、先方はやりにくかっただろう。結果的に東北大の裏をかくことができ、ポイントとしては楽勝であった。

秋になって、１年９ヶ月マネージャーをやっていた鈴木さんが退き、木下が就任した。

秋のリーグ戦は、横山の著しい伸びがあったものの、やはり２部では仲々勝つことができず、最下位でまたも明治学院との入替戦となった。今度はオーダーがお互いに外れて、結果的には５－３で勝ったが、最終試合はまたも木下で、相手は藤野氏であった。ところが、藤野氏は不運にも試合途中でアキレス腱を切り棄権、あっさり東大の２部残留が決まってしまった。

この年を総括すれば、森本さんという類希な根性と遠慮のない性格によるリーダーシップのもと安定した力が発揮でき、部のベクトルが合っていた年といえる。

昭和41年

キャプテン北浦、マネージャー木下で継続して、新年度に入った。森本さん、谷合さんの２人のレギュラーが抜けたが、４年生だけでも６人１チームできる状況であり、

大門、伊丹も十分２部で試合ができる状態であった。また、熊本高校の川上など将来の期待されるメンバーが入部した。

春のリーグ戦は、神奈川大学に勝ち、久しぶりに入替戦なしでシーズンを終えた。しかし、他の大学からポイントを上げるには、未だ力が足りないという状態であった。特に青山学院の個性豊かなメンバーには今でも思い出が深い。

国公立は、団体戦優勝。個人戦では、横山が優勝、２位北浦、ダブルスでは横山・木下組が優勝、北浦・井上組が２位と相変わらず上位を占めた。

京大戦は京都橘女学院の体育館で行われた。不運にも就職試験、公務員試験のため、横山、浜中、井上の３名を欠き、７－８で京大に破れ、11連勝を逸した。

七帝戦は東大が当番校で、検見川の体育館で開催した。脇田が裏方を全て引き受け、これまで、毎年華美になる大会を質素なものにという方針のもと、立派な大会運営を行った。

初めての３複６単の試合であり、京大戦とは打って変わりフルメンバーで臨むことができ、北大戦で競ったほかは、危なげなく勝ち、優勝した。

秋のリーグ戦では、東大に横山ありと言われる程に強くなった横山が、２部トップのプレーヤーと互角に渡りあう試合がかなりあったが、結果的には勝ち点が得られず、最終戦で再度明治学院とあたり、今度は４－５で破れ、入替戦となった。しかし一橋には勝って、２部残留には苦労しなかった。

京大戦に負けた以外は順当に勝ち、２部残留も容易であった。しかしレギュラーが４年生に固まりすぎ、順調に成長してきた大門、伊丹、川上に続くものを育てる余裕がなく、翌年以降のことが気懸かりな状況で卒業をすることとなった。

体育館あれこれ（4）

一橋大（小平）体育館

駒場１体と同じく古い体育館だが何となく趣のある建物だったと記憶する。コートは３面、対校戦・ジュニア戦などもやったが、昭和36年秋リーグ戦最終日、全勝対決を中途半端なオーダーで、エース２人を残して５－２で負けてしまった苦い思い出が強烈である。ここでは昭和48年新築の体育館で京大戦も一度行われている。

関東学院大体育館

在六浦、京浜急行金沢八景駅に近い海べりの体育館である。ここは無理をすると12面が取れる大きな体育館である。更衣室も狭い乍ら良く整備されている。関東大学OB選手権（別記）の会場として10年間お世話になった。バドミントン部長の湊教授やOBの中村さんには、本当に感謝している。余談であるが、この体育館では神奈川県の高校の試合がよく行われた。名選手を輩出した関東学院六浦高校もここで練習していたが、当時神奈川の強豪というと他に関東学院三春台、緑ヶ丘などがあり、多くの卒業生が関東リーグで活躍している。

苦い想い出の時代

昭和41年入学　　川上　邦彰

昭和41年の春、東京に出てきて下宿に落ち着く暇もなく、駒場の体育館を訪ねた。柔道だか空手だかの格好をした人にバドミントン部のことを聞いたのだが、あまり要領を得ない返事だったような記憶がある。後から聞くと合宿かなにかで不在だったらしく空振りで、しかしそのうちに訪ね当たって入れてもらったのはまだ入学前だった。そのうちに同級生も加わり（経験者としては湘南の三留・河内君、学芸大付属の鹿沼君、新宿の若園君など、未経験者では宮崎から来た小吹・高雄君、日比谷の佐々木君などがいた)、歓迎コンパもしていただいた。コンパのあと渋谷で当時の若いＯＢにおごられて、駒場まで歩いて帰ってくる途中、鈴木さんに「若紫」の歌唱指導をうけた。鈴木さんは駒場の裏がご実家で、私はやはり近くの富ヶ谷に下宿をしていたのでそういう形になったのかも知れないが、ほかに誰がいたのだろう。そんなこともあり、一時期この歌は我々の前後の学年の持ち歌になっていた。

熊本高校では出来のよくない卒部生だった私だが、一応の経験者であり、先輩方に温かく迎えられ、気楽な新入生だった。当時の強い時代の上級生に交じって、バドミントンの力ものびたように思うし、他校との対抗戦では強い上級生を食ってしまったりした。一橋戦の宮本さんや京大戦では次期キャプテンに決まっていた木村さんに勝ってしまったりした（もっとも木村さんには翌年の七大学戦だったかで返り討ちにあったが)。当時は４年生がとても強く、北浦さんがキャプテン、横山さんが力で伸してきていて、木下さんや井上さん、浜中さんなどの４年生に、３年の大門さん、２年の伊丹さんなどおられると、痔の具合や司法試験の準備とかで誰かが欠場されるというときが出してもらえるチャンスといった状況だった。当時試合などの様子を撮っておいていただいた横山さんの８ミリフィルムを最近見させていただきビデオに取り込んだりしたが、本当になつかしく、また黄金期の強さと、今は大ＯＢとなられた諸氏の楽し気な当時が彷彿とする。ただ当時はまだ木のラケットの時代であり、今の感覚からすると重砲を撃っているような、ヒッコリーシャフトのクラブでやっているゴルフのフィルムを見るような感じもある。

この強い４年生が抜けられたあと、大門さんがジ情があって退任され、２年の伊丹さんがキャプテンになり、碓井さんに継いで、碓井さんは工場実習だかで京大戦・七大学戦にいけないということで３年の夏から私が引き継いだような形になった。このころがずっと暗い時代。あとから思うと、もっと何とかできなかったろうかとか、ああすればよかったとか思うこともあるが、詮無いことである。

部内では部の運営、特に対外試合でだれが部の代表として試合に出るべきかなど、伊丹さんから提起された問題があり、内部でもモヤモヤした雰囲気であったし、先輩方からも批判があった。横浜市大でのリーグ戦だったか、強いものより練習により出ているものという基準でオーダーが組まれたこともあった。私は伊丹さんには親しくさせていただき、立川の反基地集会など政治運動の現場に連れていってもらったりしたこともあったが、部の運営のやり方にはついていけなかった。そのうちに伊丹さんは自分で部を去られた。

大学ではいわゆる学園紛争の時期になっていった。授業が妨害され、試験がおこなわれなくなった。私もクラスの集会などである程度全共闘系諸君との議論にも加わってみたりしていた。が、これはどうしてもおかしいと考えたのは、経済学部の封鎖と図書館が破壊されるのを見たころからだった。他の大学などからも人が入り込み、法学部なども封鎖されて機動隊が構内に入った。中学の同級生が機動隊にいるとの噂を聞いていた自分は、どこかで会いはしないかなどと感じたりしていた。総合図書館が封鎖されるというときには、自分も反対の意思を表示しようと座り込んだら、「正当防衛論」とかで民青のヘルメットをかぶらされることになってしまい、おしかけた封鎖派の連中にしたたか竹竿などでなぐられたりした。安田講堂の占拠と機動隊による封鎖突破、占拠学生の逮捕がテレビ中継され、自分の高校の同級生もその中にいた。44年の入試はとうとう中止になり、部にも新入生が入ってこなかった。破壊するばかりで何も生み出さなかった悲惨な時代だった。

そんな環境の下でも部での練習や試合だけはちゃんとやろう、部員の中にも紛争についての考え方や思想の違いはあっても、と考えてやっていたが、総合図書館封鎖とかいって最も混乱していた時期には、佐々木君と森安君と三人しか集まらない日もあった。法学部の３年の試験が翌年の５月にずれて、それもできなくて３日ごとに課題が出てレポートを郵送で提出という形になった。しばらく練習していない上に徹夜で論文を書いた日に臨んだ国公立戦では学芸大の西城君に負けてしまった。結局この時は、小林君が脚をつらせながら優勝してくれたが、個人的には実にくやしかった。こんな中で愉快だったのは44年の伊豆縦断マラソンである。死んだ湯浅君と岩崎君と３人で、誰の発案か出ようということになって、我が部ではじめての出場になった。結果は団体優勝。前半でバラバラになったが蛇石峠で３人いっしょになり、あとは適当に励ましあいながら走ったり歩いたり。ちょっと道を間違ったりしたが、ゴールしてみたら、５、６、７位だったのだ。タイムは３時間30分ほどだった。しかしこの時は格好も靴もまったくバドミントンそのもので、あとの後遺症がひどかった。秋のリーグ戦にも響いたかも、というのは言い訳だろうか。ということで、主要な試合の戦績

を避けたようなことを書き連ねてきたが、記録に明らかなとおり、この間まことに不本意な時期であった。リーグ戦２部復帰の掛け声はあったが夢のまた夢で、七大学戦も下位にとどまった。唯一、自分にとって最後の44年の京大戦（検見川）で、かろうじて８－７で勝てたことがなぐさめである。しかしこの時のレセプションは本郷の学士会館別館だったが、勝った嬉しさより何かうつろな感じにとらわれていたのを変に憶えている。

現役時代の思い出をマネージャーだった佐々木君と話していたところ、片山先生から上野さんへの部長交替のとき、上野さんの教授室にお願いに上がったときのことを佐々木君が思い出した。先輩らが決めて、現役の代表も挨拶に行くようにとでも言われたのだろうが、私はほとんど忘れていた。佐々木君によると、その時上野さんはクリックとワトソンの二重らせんの話をされたそうだ。きっとバドミントンはしっかりやれ、でも勉強もしろよとおっしゃりたかったのかも。遠いむかし。

京大戦や七大学戦での因縁。熊本高校バドミントン部の同期でキャプテンをやった坂口君が京大に入って一年間は在部していた。一年のときは京大の選手として出てきて碓井さんと当たって勝っている。京大側もわが年代は若干かげが薄く、坂口君が居てくれていたらと思う。私がやられてしまった相手は、なんと言っても上では中山さん、下では荒木君。ずっと負けっぱなしで、やっと最近ダブルスでちょっと仕返しをさせてもらっているところ。植村先生とはＯＢ戦でのお付き合いだが、近年は学生の採用を通じてお世話になっている。現役時代、七大学戦で当時いちばん元気でにぎやかだったのは阪大だったが、就職を内定したところキャプテンだった島岡君が先に決まっていて驚いた。以来、社内の対抗戦などでも楽しくやっている。

私にとって過去はたいてい悔恨をともなってよみがえってくる。現役時代の想い出はことに苦いものが多いが、同じ部の先輩方、同期、後輩諸君に加え、他大学との交友からその他にも、生涯をつらぬく宝をいただいていると、しみじみありがたく思う。

あの頃

昭和43年入学　　岡本　伸行

30年前の駒場の合言葉は「２部復帰」だった。
東京で強い方から12番目までに入る？回答はすぐに出た。先輩がとてつもなく強い。ＯＢまでも強い。
講義はたしか６月にはなくなった。気のおけない会話をするため、時間をつぶすため、学館に集まり、練習に出た。
そして夏、検見川。皆、経験のない苦痛を味わった。朝６時から夜９時まで。体力を使いすぎて飯が食えない。全日本級のいる法政が一緒にいて呆れていた。帰りの秋葉原駅の階段がつらかった。

練習は月水金午後４時から９時頃まで。１体。天井が低かった。いきおい練習の中心は「移動クリアー」。ドリブンクリアーの打ち合いだからかなり疲れた。スレート屋根の支えの鉄骨に新しいシャトルを乗っけてしまうと叱られた。ある時練習中に地震。シャトルが舞うように落ちてきた。怖さを忘れて喜んだ。

闘争の世代。ほぼ１年間講義はなかった。クラスでは悩む者もいた。真剣な討議もあった。でも、われわれ６人のバドミントン同期生が集まった時には影を落とさなかった。
ごくふつうに、考えていることを互いに話していた。
講堂前がヘルメットで埋まる大集会もあった。でも直後の練習には不思議に顔を揃えた。すでに練習が生活の一部になってしまっていたからだろうか。
これで１年下がいなくなった。

そこまで練習しても、３部どまりだった。４年間、相手が違っても、ずっと３部の真ん中へんをうろうろしていた。当時は３Ｗ６Ｓ。毎回オーダーには気を使った。でも結果に大差なかった。
京大戦も勝ったり負けたり。国公立はまずまずの成績。東工大の飛行機の格納庫だったというボワーンとした体育館で一日何試合やったことか。七帝戦も上位の記憶がない。
その頃、わが部の看板は、川上さんと小林さんだった。
この２人に引っ張られてわれわれがいた。頼みにならず、いらいらを募らせていたの

ではと、今思い出しても肩身が狭い。

記録ではなく記憶。
１年の秋か２年の春。成蹊の安食と長い試合をした。勝った。俺の方が20センチ近く背が高い。なんてしつこい奴。彼とはこの１回しか当たらなかった。
同じ頃、神大の松下。キャプテン。ほとんど勝っていた試合を絵に描いたような逆転で負けた。申し訳ない気持ちで一杯だった。
小林さんの思い出。いずれもダブルス。私が２年の国公立。東工大。団体、シングルで小林さんは勝利。三冠王の最後。私の足がつった。まるで動かない。棄権はできない。ネット際に張りついてよろよろでの勝利。小林さん４年の七帝。相手は阪大のペア。強かった。勝った。相手は油断していたわけではない。全校勝利、全試合勝利の勢いできた相手の本当に悔しそうな顔。そして、最後。４年生を送る最後の試合か。相手は思い出せない。電機大体育館か。肩より上にきたシャトルは、全部スマッシュを打つ気だった。最後に腹筋がつった。後にも先にもこの時だけの経験。

思い出す顔。一橋、北村。学芸、斉藤。阪大、田村。京大、菅田、成瀬。そうそう大東大に大江、向井田なんて３部ではもったいないような奴もいた。上の年代では、京大、荒木、西念。阪大、角。一橋、駒。東工大、杉、戸井田……の先輩。
バドミントンにまじめに取り組んだ。神田体育館では一流選手の試合の線審を一生懸命やった。代々木の体育館に国際試合を見にもいった。あの本間（といってもわからないか）が簡単に負けた。信じられなかった。トレーニングもよくやった。駒場の野球大会もいいところまでいったはず。

大学生活が波乱に富んでいた。だからかもしれない。はなばなしい戦績がないからかもしれない。コートのなかよりも毎日の生活が思い出される。
レバニラの臭い、遠征費稼ぎのお中元仕分けアルバイト、マネージャーに連れられてのシャトルの買出し。
そういえば、短い期間だったけれど、女性部員も２人在籍した。どう教えればいいのかわからなくて面食らったが。

お世話になったかたがた。
横山さんご一家。次の学年がいなかったこともあり、私たちが最後の年代だったのでは。

先輩に連れられてよく寄らしていただいた。おじさんから麻雀を教えてもらったのもいい思い出。いつもびっくりするようなご馳走で迎えてくれた。おばさんいつまでもお元気で。
湯浅さん。ランニングが速かった。あの伊豆縦断マラソンの後、へっこんでいるはずの土踏まずが逆にはれ上がってしまい、私のおふくろが変に感心していた。あんなに早く天国に旅立たなくてもと残念に思う。
小吹さん。一晩泊めていただいたことがある。大塚の急な坂道の上の下宿で、きちんと整理された部屋だった。神経を使う仕事をしていたとは承知していたが、やっぱり早すぎるよと言いたい気持ち。小吹さんとよく話していた伊丹さんどうしているかな。

卒業してからかれこれ30年近く。いろいろな人と触れあったけれども、今、バドミントンの４年間を誇りに思っている。同期、長谷川、岩崎、尾上、小林、山田の５人も同じ気持ちだろう。駒場の体育館で会ったすべての人に感謝していることも同じだと思う。
「あの頃」はなにか手で掴めるもの、思い出と呼ぶよりもっと強いものとして残っている。

体育館あれこれ（5）

京大戦の体育館

現在の京大体育館、駒場２体を別にすると、やはり京都工繊大の体育館が記憶に残る。時期が時期なので当然ではあるが、兎に角暑かった。汗びっしょりになって、出口の戸を開けると、外から一段と暑い風が吹き込んでくるというのが印象である。
東京では文京３中、紙テープでラインをセットした。30周年記念誌を見ると、直前に学校側からキャンセルが入り必死で交渉、事無きを得たと木村武君が書いている。

七帝戦の体育館

第３回は久留米の石橋文化センターで行われた。夏の九州は本当に暑く、フルセットでもやろうものなら、試合後は外の日陰を探して、ぶっ倒れてひたすら涼風を求めるのみだが、期待薄。天井の高い体育館で、九大若手の江頭君が、阪大の梅沢主将に敗れた後、憤然として「折角追い込んでもあんなに高いハイバックを打たれては、どうしようもない。他の体育館ならみんな天井に当たっている。」と言ったのが今でも印象に残っているが、自分ではそこまでの実感はない。
もうひとつ第４回の大阪市立中央体育館がある。場所は馬場町。当時大阪勤務の秋山稔さんに「ばばちょう」と言ったら「ばんばちょう」だと笑われたので良く覚えている。七帝戦初優勝の思い出多い体育館である。

学年不在を乗り越えて　　－Road to 2部－

昭和45年入学　　江藤　弘純

1970年、２年ぶりに駒場キャンパスは新入生を迎えた。デモ隊の小競り合いや投石等はあるもバドミントン部の練習は平常に復していた。しかし入試のなかった1969年以降1972年までの４年間続く３学年しかいない変則体制はその間のみならずその後もいろんな意味で部の戦績に影響を及ぼした。私が在籍した1970年から1973年の出来事をトピックス風に綴ってみた。

エースは活躍すれど‥‥

1970年当時、リーグ戦、国公立戦、京大戦、七帝戦いずれにおいても東大のエース小林さん(1971年卒)、岡本さん(1972年卒)は他校からも認められる大会を代表する顔であり白星を続けられていた。しかし、団体になると(国公立戦を除くと)十分な結果を残せなかった。当時は３複６単であったが有力校の５、６番手は東大の３、４番手に匹敵しており、選手層の厚さの差はいかんともしようがなかった。わずか一学年欠けているだけであるが、役者が１、２枚足らずその分ポイントが足りなかった。(当時のレギュラーの方、ごめんなさい)

４体竣工

1971年、４体が完成し練習場が１体から４体に変わった。１体はとにかく狭く３面しか取れない所に無理に４面張って使っていた。また天井は低く隙間から入る風雨の影響無しとは言えず自然環境に左右されない強い精神力の醸成には役立ったものの、選手層を厚くするには打ち込み不足であった。コートの周囲もスペースがなくコートの横を通ることは無理であり後ろを通るのもラケットで叩かれそうな具合であった。広い４体に移動後はこれらの問題が一挙に解消し、しかも３学年しかいないことが幸いしそれこそ十分に羽を打つ環境ができた。もっとも先輩方には低い攻撃的なドリブンクリアーを打たなくなったとか、シャトルを打つ時間が増えた分、上位者のプレーをコートの外から観察して技術を盗むことをしていないとか、随分お小言をいただいた。

新人戦で自信

1971年、1972年と２年連続して関東リーグ新人戦団体戦Ｂブロックで準優勝を勝ち取った。先輩方及び後輩方の新人戦の結果は存じ上げないが、とかく一学年不在によ

る危機感ばかりが強調されてきただけにこの結果は明るい話題であると同時に大きな自信となった。Ｂブロックは実質的に３部以下の戦いであり、しかも優勝校は１部リーグの日体大のイレギュラーチームであったため幸いリーグ戦で対戦する心配もないし、このままいけば数年後の３部制覇も夢でないという野心を植え付けてくれた。

結果的にはこの事が後の３部優勝２部昇格の伏線となった。

最大の危機<４年生不在のリーグ戦>を頭で乗り切る

1969年以降、一学年不在とはいっても最上級生の４年生はいた。しかし1972年は１年生から３年生までのチームであり他校に対するハンディの大きさはピークを迎えた。毎年掲げる目標も、1967年の３部降格以来、期待と願望を込めて「３部優勝」といっていたが今回ばかりは「３部残留」とせざるをえなかった。一方ここさえ乗り切れば翌年は新人戦で活躍したメンバーが上位学年となり、期待が持てるだけに今シーズンはなりふり構わず３部に残りたかった。かくなる上は東大に残された最後にして最大の武器である頭を最大限に使うことに我々は活路を求めた。各校ともエースクラスはそのプライドと戦う姿勢の表現として、オーダーの位置は大体固定しており、エース同士の対戦は見応えがあった。野球で言えば中心バッターは４番前後と決まっているようなものである。当時の主将角本は戦力分析による取るポイントと落とすポイントの峻別を十分に行ない他校のエースに対し徹底して東大の５～６番手をぶつける作戦を取った。毎試合相手のエースとやらされた関や大田には気の毒ではあったが、その甲斐あって３部での順位は例年と同じ位置を確保できた。京大戦、七帝戦もお荷物にはならなかったし国公立戦に至っては優勝までしてしまった。こうまでして３部にしがみついた以上、残るは翌年での大暴れで失礼を許してもらうことを誓った。

なんとしても「打倒千葉大」

1973年、目標は一転して「３部優勝２部復帰」（当時は２部昇格というより２部復帰という言葉がＯＢも含めて合言葉であった）となった。我々は２部から引きずり落とすターゲットを千葉大に絞った。一つには1971年の理工戦で千葉大と当たり勝つことができたが、全学チームでやっても何とかなるのではという感触をもてたことが挙げられる。その過信ともいえる自信を基に1972年の検見川での秋合宿に練習試合を申し込んでしまった。やっと３部に残るような学校が２部に試合を挑んだのである。同じ国立大のよしみか、場所が検見川で近いということか、はたまた我々の熱意にうたれたのか相手をしてくれた。結果は我々のほうが上という自信を得た。翌1973年春には勢い込んでリーグ戦準備に万全をつくした。まず春合宿を４面しか取れない検見川

ではなく広い駒場４体でやった。ひとえに十分打ち込むためである。加えて練習試合の相手に２部の明治大学を選び、渋る相手に拝みこんで駒場にきてもらった。結果はまたしても互角ないし我々の方が上というものであった。更に調子に乗って２部で優勝候補の慶応からも主将以下４人試合に来てもらい、これはさすがに強かったが２部のスピードとパワーに慣れるには良い機会であった。最早２部校は我々にとっては憧れの対象ではなく、同じ土俵の相手という感覚になっていた(噂では２部の春季リーグ戦中、明治、千葉、慶応、２年前まで３部で一緒にやっていた大東文化の間で、３部の東大強しと話されていたそうである)。念には念を入れるためにリーグ戦でも工夫をした。会場である。いつも練習で使っている体育館でやれるのが何と言っても有利である。天井の高さ、壁や隣のコートまでの距離、シャトルを叩く音と飛距離・スピードの関係、コート内に引かれているバスケやバレーのライン等をフレー中どこかで意識しているものである。それに慣れているだけで１～２点は利点があると思い、マネージャーに頼みリーグ戦会場を駒場に持ってくるように頼んだ。２部校との練習試合の交渉やらとあいまってこの時のマネージャー角田は本当に大変だった。ここまで準備をした春季リーグ戦は予想通り優勝を果たした。残るは入れ替え戦であり相手は睨んだ通り千葉大であった。入れ替え戦は平日であったが２部復帰を祈るＯＢや横山先輩のお父さんにも足を運んでいただき、やっとここまで来たという喜びと自信で望んだが結果は最悪。10回戦えば９回は勝てる相手だったが残る１回のケースに遭遇してしまった。敗因は最悪のオーダー。１年前のリーグ戦をオーダーの妙で生き残った我々がオーダーで敗れてしまい千葉大に「東大に頭で勝った」とまで言われることになろうとは、皮肉なものである。

落胆からの切り替えがうまく行かないまま国公立戦、京大戦は力で乗り切ったものの七帝戦は不本意な成績だった。原因は３つ。先ず、チームとして明確に優勝を意識して臨まなかったこと。二つ目は夏合宿(検見川)の翌日が京大戦(一橋大学体育館)、その翌日から東日本学生個人戦(ダブルスBブロック増田・江藤１位、野中・市川３位)、その翌日から仙台で七帝戦と連日約３週間緊張しつづけたことによるコンディション調整不足、三つ目はレギュラーの角本が就職活動のため参加できず、変則的なダブルス陣になったことであった。しかし収穫もあった。優勝は関西１部リーグの阪大であったが、我々は阪大にダブルスで１－２とリードされながらもシングルで４－２と逆転し５－４で勝ったのである。関西の１部校に堂々と勝ったのであるからもう一度倦土重来関東リーグ２部を狙ってみようという気になった。

10月に駒場で再度全員合宿を張り、夏休み、学期末試験、大学院試験で不足していた練習を一気に取り戻し、また２部リーグを見に行き最下位が千葉大であることを確

認しターゲットを定めた。秋季３部リーグ戦は春同様問題なく優勝し、むしろ入れ替え戦の相手である千葉大が３部の会場に東大の偵察に来たくらいであった。入れ替え戦は駒沢体育館と一級品の会場であり相手も狙いつづけた千葉大(エースは後に上尾高校監督、現日本ユニシス監督の阿部)、更に春敗れたとはいえ東大も一段とチーム力が上がってきており何の不足もなかった。結果は４－２の勝利。待ちつづけていた２部復帰を果たせ主将伊藤の胴上げとともに、1969年の入試中止以来苦しみつづけていた東大バドミントン部もやっと体制と成績を整えることができた。

一学年不在という異常な事態の中で、戦績へも大きな影響があったし、その記録をここに記した。小生の記憶違いもあるかもしれないが、お許し頂きたい。練習方法や技術は今と比べると古典的であったと思われるが、この変則的な状態で東大バドミントン部が目標を失わず真面目にそして激しく練習を続け、終には２部に至ったプロセスの中から現役諸君の参考になることが一つでもあれば望外の喜びである。

体育館あれこれ（6）

合宿の体育館

前述の駒場第１体育館と検見川総合運動場がメインではあるが、これ以外にいくつか地方に出ている。初めて合宿が行われた宇都宮、昭和40年前後の高岡、吉原、平塚等もあるが、回数ではやはり久里浜体育館が多いのではなかろうか。横須賀線の終点久里浜から歩いて20分程である。近くにはペリー提督上陸記念碑や城ケ島、東電の火力発電所などがあり、朝のランニングコースにもなった。８面を縦長に取ったうなぎの寝床の様な体育館で、４面を借り、残りが法政大と言う事で、勉強になったと言えば聞こえが良いが、多少劣等感を感じながら練習したように思う。練習中「社会党委員長の浅沼稲次郎氏が、山口二矢に刺殺された」と言うニュースを聞いたのも此処である。法政と言えば次の春の千葉市立体育館でも（ここも８面）一緒の合宿になった。この時は準レギュラークラスの人にコーチもして貰ったが、それよりも当時学生では上位を争っていた、沢田・森、森脇・富田、平野・井門といった、名選手の練習を目の当たりにして、非常に感激した。ここは自分達でラインを引かなければならず、苦労した記憶もある。

二部昇格、三部降格、そして二部昇格の夢

昭和48年入学　　村田　光二

私たち昭和48年入学生たちが駒場の第四体育館（当時）に足を運んだとき、東大バドミントン部の練習は異様な熱気に包まれていた。「三部優勝、二部昇格」という夢がまさに実現するかもしれないと選手たちが信じ、わき目もふらずに練習に取り組んでいたからである。私たちの学年には、事故がなければインターハイに出場していただろう野中と、インターハイに出場したＩ（彼は途中で退部した）がいた。この二人の組んだダブルスは、当時の一橋の第一ダブルスよりも強かったと記憶しているが、それでもレギュラーには入れなかった。それ以下の、初めは50名近くいた一年生たちが、ほとんど眼中におかれなかったことは言うまでもない。

伊藤主将、角本前主将、江藤さん・増田さんの第一ダブルス、３年生の関さん、大田さん、２年生の松本さんといたチームは、春の入れ替え戦は試合巧者の千葉大の前に惜しくも敗退したが、秋のリーグ戦で優勝、そして入れ替え戦ではその千葉大を破ってついに二部復帰を果たしたのである。それは東大バドミントン部史上に残る快挙であった。しかし、二部復帰を果たした主力メンバーは、ほどなく引退を迎えた。一年生は夏合宿を終えたところで十数名にしぼられていたので、人数も多かった四年生が抜けると、駒場の体育館の選手密度は一気に減少した。

その頃オイルショックが始まり、突然シャトルを大事に使う（使用前に湿気を与えたり、再生利用を試みる）ようになったことを記憶している。来春には二部で戦う我が部は、戦う主体を失ったかのような状態であった。不動のレギュラーと呼べるのは関、大田、松本、野中までで、夏合宿の頃には上から三十番目くらいだと思えたこの私でも、五復十単の出場が狙える位置にいた。そして翌春、我が部は板橋体育館のコートで、二部のリーグ戦に参戦した。結果は全敗であり、入れ替え戦でも宿敵千葉大に敗退した。その春の新入生に、四国で何番目かの非常に強い選手が入ったとの情報を得て、主務の緑川さんが連絡したり、２年生になった私たちが連絡を取ろうとしたことを記憶している。入ったばかりの新入生にでも頼りたい、という心境だったのだろう。

そこからまた二部昇格への取り組みが始まった。関さん、松本さん、そして村田と主将が代替わりしても、東大バドミントン部は常に三部（当時は６チーム）で優勝を目指し、三位以上の成績を残していた。しかし、「二部昇格」は、結局のところ夢となって現在に至っている。

その当時の関東学生リーグは縦一列に九部くらいまで並んでいた。新規加入の専修

大学はそこを一気にかけ登り、三部昇格直後の秋のリーグ戦で、東大と二部昇格をかけて争った。S五が勝負となり、私が負けて、専修はその後二部に昇格した。代わりに落ちてきたのが名門明治大学であった。私たちが四年のときには立教大学も三部に落ちてきて、当時の東大は明治にも立教にも勝ったことがあると記憶している。しかし、二部に昇格したのは、一橋大学であった。彼らは一年以上の間、二部にとどまった。なお、関東学生リーグの三部以下が三復六単から三復四単に変更されたのは、私たちが四年生のときであった。

リーグ戦ではそこそこの強さがあったにもかかわらず、私たちが三年生になる頃には東京地区の国公立では一橋大の方が強く、なかなか勝てずにいた。また、京大は関西の一部リーグで戦うほど強く、京大戦や七大戦での東大の成績は振るわなかった。こういった時代の悔しさが、大学院に進んでもバドミントンを続け、私が監督を引き受けたということにつながったのかもしれない。同期の野中が続けていた理由は別かもしれないが、二人でダブルスを組んで街の大会に出て、その経験を東大のコートにも持ち込んでいたように思う。

私たちの時代の特色の一つは、女子部員が定着したことである。私が入部した年にはすでに一年上の女子部員がいた。彼女たちは途中で退部していったが、私の同期の四名はずっと練習に励み、最後に八部昇格という偉業を達成した。女子部の伝統は、それ以降現在まで続いている。また、私たちが四年生のときに、東大ダブルス選手権が開始された。企画立案したのは私である。すでにバドミントンの実力は社会人の方が上である時代を迎えていた。その技術と経験をＯＢが発揮できる場を作り、同時にそれを現役部員が学ぶシステムをと考えていたように思う。

私は入部したときから駒場寮に入寮した。そこには一つ上の橋本さんが住んでいた。初めは他のサークルの部屋であったが、そこを「駒場城」と命名し、バドミントン部員中心のサークルにしたのも私である。そこで私たちは一つ上の多くの先輩のお世話になり、同輩たちとは寝食を共にした。駒場祭でたこ焼きを開業して大成功を収めたことも記憶している。

私たちが一年生のときに走った伊豆縦断マラソンは、戸田寮から車で小一時間南下したところをスタートして下賀茂寮にゴールするものであった。その時越えた峠は蛇石峠であった。ところが翌年に地震で大会が中止された後は、戸田寮から東へ向かい、北上して真城（さなぎ）峠を越えて海岸線を回ってくるという、ほぼ現在のコースに変更となった。四年生の時に私は再びレースに参加して、最後のアップダウンに参って歩き出したことを覚えている。今考えると愚かなことは、そこまで全く飲まず食わずでいたことである。当時は運動中に水を飲むと体に悪いと信じられ、練習中には何

も飲まなかった。普段の練習で二〜三時間は水を飲まないのだから、マラソン中でも飲まずにすむだろうと考えていたのである。

私が四年生の秋に学士会館の分館で二五周年のパーティがあった。現役からただ一人参加した私は、現役の取り囲まれた社会的環境が、我が部が成立し、発展した時代から変わって来てしまったことを訴えた。例えばその頃、ＴＢＡといった同好会が創設され、バドミントンをしたい東大生が他の集団を選択可能となっていたのである。部員を部から引き離す誘惑が増えていることを趣旨とした発言は、創設期のメンバーには甘えた戯言と聞こえたらしく、フロアからはヤジも飛んだ。

それから二五年。創設期のメンバーと当時の私の年齢差より、私と今の現役との差の方が大きくなった。が、そんな実感はない。

体育館あれこれ（7）

駒場第２体育館

現在の我が部のホームグラウンドである。昭和45、6年頃第4体育館として完成、当時最新のボート練習用の流水プール(現存)が設置されたのが記憶に残る。昭和46年から京大戦の会場となっている。昭和63年新体育館（１体）竣工後は第２体育館に改称された。明寮が取り壊されてから、西日で見にくいのが難点である。何とか暗幕が付けられないだろうか？コートは８面、付帯設備もまずまず、こんな体育館で練習をしたかったと言うのが古いOBの気持ちだろう。照明が暗くて相手が打つ瞬間のシャトルが見にくいので非常にいやだと言う声もあるが、飽く迄も比較論である。

京大体育館

昭和47年春に完成してからは、京都での京大戦の会場である。コートは８－10面。３フロアーで剣道・柔道場や、プールもある立派な施設である。ここも採光の関係でやや見にくいのが残念である。余談になるが、これ以前は京都工繊大、京都府立大などに混じって、平安女学院・橘女学院と京都では２回続けて女子校で試合をした事も記憶に残っている。

吉田体育館

試合は行われなかったが、練習では何回か使っている。梁のある天井の低い体育館で、ここで練習すればドライブが強くなる事間違いなしである。今は勿論ない。

ダブルスで掴んだ三部復帰

昭和51年入学　　上野　誠也

昭和52年から昭和54年の３年間の試合について書く。どの頃の時代かといえば、カーボンシャフトのラケットが世の中に出る直前の時代である。戦績を調べてみた。当然記憶にあることだが、ひどいものである。七帝戦はきれいに７位が３年間続いている。ダブルスでリードしながら、シングルスで逆転される試合もあった。勝ち方を忘れてしまったような状態であった。何も七帝戦に限ったことではない。京大戦も一橋戦も勝った記憶がない。

昭和53年はどん底であった。団体戦勝利が１勝も無い１年と筆者は記憶している。春のリーグ戦は３部で全敗し、入替戦となった。４部優勝の成蹊大に敗れ、東大バドミントン部史上初の４部降格となった。ところが、この年にリーグ制が改訂となり、縦１本のリーグ制から現状のピラミッド方式のリーグ制となった。その結果、実力を伴わずに３部４位に復帰することになり、秋季リーグも３部でプレーすることになった。しかし、秋季リーグ戦も５戦全敗し、入替戦となった。３部残留を掛けた入替戦も駒沢大に敗れ、４部に降格した。何と、春と秋に連続して２回降格した年である。この年は国公立戦もまさかの初戦敗退をしている。一橋戦も負け、京大戦も負け。七帝戦は６戦全敗。どこを探しても団体戦勝利は出てこない。

いつまでも暗闇の中を走り続けるつもりはない。勝利のために練習を積み重ねているのであり、何をすれば勝てるか常に考えていた。その努力がいつか結果として現れてくる。昭和54年、筆者が４年の時代は、「３部復帰」を目標に掲げ、それを実現できたことで結果が現れた年であった。まずは春季リーグ戦から復活の兆しをつかんだ。しかし、すべてが最初からうまくいった訳ではなかった。連敗脱出を賭けたリーグ第１戦で、いきなり理科大に敗れた。手痛い１敗であり、これが後まで尾を引いて春季リーグ優勝を逃した。しかし、第２戦の水産大戦以降は圧勝を続け、やっと団体戦における勝ち方を覚えたようだ。

国公立戦は順当な勝利を手にした。ダブルスが強くなった。シングルスでは全く歯が立たない相手２人でも、ダブルスなら勝てるという自信が皆にあった。秋季リーグを迎える頃には、第３ダブルスの古谷（４年）・中田（２年）組が成長し、国公立準優勝の佐藤（４年）・上野（４年）組、勝負師の小松（４年）・森（３年）組の３ダブルスの実力は僅差となった。その結果が秋季リーグに現れ、15戦中２試合しか落していない。東大のダブルス強しと自負していた。秋季リーグ最終戦ははっきりと記憶に残っている。会場は国学院大、相手は４戦全勝の農工大である。オーダー交換時に第

４シングルスで勝利と読んで、歓声があがった。予想通り第３シングルスまではあっという間に終わって、３対３で第４シングルスを迎えた。東大は２年生中田に勝利を託した。中田は応援の期待を裏切ることなく、ファイナルで勝ち、東大にリーグ優勝をもたらした。

ここまで波に乗った東大は、その勢いを入替戦へと向けた。入替戦は３部最下位と４部優勝の合計６校間で行なわれるトーナメント方式である。トーナメントの抽選による運が少なからず影響している。マネージャー内藤がくじ運強く、１回戦シードでかつ、強豪がいない山のくじを引いたのである。この１回戦シードは非常に大きな意味があった。当時の就職活動は10月解禁であるために、４年生にとって就職活動と秋季リーグ戦が重なっていた。そのため、入替戦１回戦が行なわれる初日にはレギュラーを揃えることができない状況であった。内藤マネージャーの入替戦勝利への貢献は大きい。

入替戦の対戦相手は１回戦で成蹊大を破って駒を進めた埼玉大であった。４年を欠いている埼玉大は１回戦も苦しい試合展開であり、早い試合で主力を出してくることが目に見えていた。東大は第１シングルスを外すオーダーで望んだ。しかし、予想が外れて埼玉大も外してきた。第１、第２シングルスとも取られて０－２とリードされたが、自慢のダブルスパワーをぶつけて挽回する自信はあった。まず、春秋リーグ戦で10戦全勝の佐藤・上野組が、経験浅い１年生ペアに圧勝した。一気に波に乗った東大は、選手と応援が一丸となって、第２ダブルス小松・森組を送り込んだ。相手は第１、第２シングルスの勝者ペア、こちらは同じ試合の敗者ペアである。ここが東大の強さの見せ所である。巧みな試合展開の末、小松・森組が勝利を手中にした。試合は振り出しに戻ったが、調子づいた分だけ東大有利であった。第３ダブルスは、夏場に実力をつけた古谷・中田組である。余裕の圧勝で、我が代４度目のダブルス３タテを達成した。もう、お祭り騒ぎの勢いは止まるところを知らず、第３シングルスの佐藤は気合の入ったプレーで相手を打ち砕いた。これで４勝。東大３部昇格が決った。「３部復帰」を目標として掲げ、それを達成した満足感に浸ることのできる最終戦であった。

1980－82年の攻防

昭和54年入学　　炭谷　俊樹

1980年というとちょうど20年前になる。最近自宅の引越があり、荷物の中から当時の部報や試合の記録がでてきた。なつかしい。まるで昨日のことのように思い出される試合もある。80年から82年のレギュラー戦力を振り返りながら、そういった試合を中心に書いてみたい。

３部復帰を果たした小松・上野・佐藤・山本・古谷さんがごそっと抜け、未経験からレギュラー入りした森さんが主将だったのが1980年であった。部報によれば、長島監督、王選手、山口百恵の引退もこの年であったらしい。我が部の戦力低下は否めず、当面の３部残留、七帝戦での３年連続最下位の脱出が現実的な目標であった。相手の上位を崩せるスタープレーヤーが不在、下位ダブル、シングルを確実につぶしていく作戦をとるため、ダブルスは内藤（４）・中田（３）、森（４）・芳賀（３）、高見（２）・炭谷（２）の３ペアが拮抗した。春季リーグで残留をかけた都立大戦は、前日にやっとレギュラー入りしたばかりの私のＳ４勝負となり、だれもが入れ替え戦を覚悟した。ところが緊張した役君に私が圧勝し残留を決めた。ダブルスで２つとって、相手の下位シングルをつぶすという作戦は七帝戦でも奏功、名大戦、九大戦で高見と私が連日のＳ５／Ｓ６勝負を制し、４位進出を果たした。

このように何とか乗り切ったという感のあった80年だが、翌年は一転戦力が充実、上位進出をねらえるチームになった。しゃかしゃかと静かに素早く動く“ゴキブリフットワーク”で有名なエース中田さん（４年）の安定感はすばらしく、確実にポイントをゲットした。またシングルは安定感の増した高見、炭谷（３年）に加え、まだ不安定ながら一発大物食いを秘めたスマッシュの山梨（２年）が頭角を現しはじめ、３部で勝てるプレーヤーが一気に４枚もそろったのだ。問題はダブルス。中田・芳賀ペアには安定感があったものの、炭谷・山梨ペアがいまいち息があわず（もっとも、独自の動きをする山梨に合わせられたのは村田章くらいだと思うが）、リーグ戦では期待されたほど勝てず、３部上位進出が果たせなかった。

そんな炭谷・山梨ペアだが七帝戦では値千金の勝利を挙げた。当時は東北大がダントツの実力でそれに次ぐのが北大であった。その北大のＤ１であった佐々木・渡辺との対戦だ。当時はリバーススピンサービスが解禁されていたが、山梨のリバースはとくにえぐかった。唯一問題はほとんど相手コートに達することなくネットに戦いを挑んでしまうことであった。ところがこの日はさえにさえて相手を苦しめ、これに気をよくした山梨のスマッシュも一段と威力を増した。ファイナルセッティングの末大激

戦を制し、これが鍵となり５－４で北大を打ち破ったのであった。佐々木・渡辺ペアはその他の全ての試合に圧勝しており、この勝利が如何に貴重であったかがわかる。こうして、あとは京大か阪大のどちらかに勝利すればなんと２位になるというところまでこぎ着けた。

ところが、である。両校戦はこれ以外に負けるはずのないというような最悪のオーダーとなってしまったのだ。阪大戦はなんと中田、山梨が相手のＳ１木村、Ｓ２阿部にともにファイナルの末つぶされ、４－５でやぶれた。京大戦では、山梨がＳ１本多にファイナルでつぶされたあと、Ｓ６勝負で高見が天敵・小倉に破れたのであった。小倉君は“はえ叩き”のようなフォームで単調なクリアを繰り返し、全く攻めずにただひたすら拾いまくり、汗一滴たらさず涼しい顔でプレーをするという、夏には決して顔を見たくないプレーヤーである。運動神経抜群の高見も、フェイントや技の効かないこういうタイプだけは苦手であった。こうして２位進出の夢は泡と消えてしまったのだった。しかしながらこの81年は、国公立団体戦は小畑さんを擁する一橋大をやぶって優勝、京大定期戦も圧勝するなど、比較的安定した戦績を挙げたのは確かである。

私が主将となった82年には、昨年の反省からダブルスは高見・炭谷に戻して３部でも確実に勝てるようになり、シングルは山梨が充実した。１年から３部リーグに君臨し、われわれもさんざん苦しめられた東海大の雁田にＳ１で山梨が、Ｄ１で高見・炭谷が雪辱を果たして溜飲をさげたが、あとが続かなかった。悲願の３部上位進出もあと一個がとれず、また４位に終わってしまった。

国公立戦では高崎と文挟を擁する都立大が宿敵だった。シングルでは準々決勝で高見が高崎にやられ、準決勝で私が文挟にやられた。高崎と文挟の決勝での激しいクリア合戦は見ごたえがあった。この年は文挟が制した。この２人の活躍はＯＢになってからも続いた。ダブルスでは高見・炭谷が高崎・高橋にやられた。高崎・高橋には理工戦でも村田章（１年）と組んで準決勝でやられるなどいやな相手であった。高崎君は体も小さく、パワーもあるように見えないのだが、首を90度曲げて天井に向けた奇怪なフォームからドリブンクリアとカットをうちわける機械のような正確なプレーで皆を悩ませたものだ。この都立大に団体戦の準決勝であたり、余り勝てなかった山梨・河野ペアが働き、勝利した。これで油断したのが災いし、決勝で恐怖のＯＢペア安永・市川を擁するダークホース水産大にまさかの不覚をとってしまい、準優勝に終わった。この年はダブルスではわが小松・上野さんがＯＢとして優勝するなど、無欲のＯＢの強さを思い知った年であった。

油断といえば京大定期戦の本戦も不覚をとってしまった。どう考えても絶対勝てる

という安心感が前日の気のゆるみを生み、宿舎に戻る門限を首脳部自ら破ってしまった。気まずいまま当日にのぞみ、ドミノ倒しのようなまさかのダブルス全敗。翌日のオープン戦や七帝戦では同じ相手に圧勝しており、如何にメンタルな要素が大きかったかを物語っている。もちろんＯＢにもさんざん絞られた。この反省から七帝戦では心を入れ替え、狂ったように勝ちまくったが、主将として最後の夏としては少し苦い思い出となった。夏休みに実家に戻り、ぐったりと心身を休めて院試に臨む必要があった。

自らは前面にでず、若手を上手く活用して難局を乗り切った森さん、自らエースとして無言で皆を引っ張った中田さん、結構中途半端だった私自身と、今振り返るとリーダーシップについて色々と考えさせられる３年間であった。

体育館あれこれ（番外１）

30周年記念誌でもふれたが、現在では殆どの小学校、中学校にも体育館がある。勿論バドミントンコートが完備されて居る。同じ記念誌に書かれている、「昭和40年頃の検見川体育館で、ラインを引き、ポールは竹を鋸で切って作った」のと比べて雲泥の差である。

勿論これは講堂と兼用で、基本設計は「演壇（舞台）」「コート３面（バスケットコート１面と言うべきか）」「倉庫・洗面所」と言った所である。学芸会用に暗幕が設置されているので、日光に邪魔される事も無い。バスケットのゴールが気になるのと、照明が今一つと言う難がある程度で、ありがたい話である。

昭和57年から昭和60年

昭和57年入学　　村田　章

昭和57年私の入学当時の主将は４年生炭谷さん、春季リーグ戦（３複４単）のレギュラーは、複が高見・炭谷（４）、山梨（３）・河野（２）、井川（４）・久保田（３）、単が高見、山梨、炭谷、久保田であった（オーダーでは敬称略。括弧内は学年）。春季リーグ戦は３部４位。練習で見たことがない人（山梨さん）が試合に出ていて驚いたことを思い出した（私が前半の練習しか出ていなかったという意味で他意はなし）。京大戦はダブルス５敗の５－10で大敗（私も村田・芹澤の１年生ペアでダブルス１敗に貢献）、秋季リーグ戦では、複が高見・炭谷、山梨・久保田、青木（２）・村田（１）、単が高見、山梨、炭谷、久保田で臨み、最終日千葉商に４－２で勝ち、３部５位であった。私の出場したダブルスでは途中足の肉離れで一週休み、３試合で３敗という結果であった。

主力の高見さん、炭谷さんが抜けた翌年（昭和58年）は、山梨主将のもと秋からずっと大量のスクワットをした（させられた）記憶がある。練習試合も非常に多く、春季リーグ戦で当たる筑波大、都立大、横国大、別ブロックの明学大と行った。春季リーグ戦は複が山梨・村田、久保田・芹沢、河野・青木、単が山梨、久保田、河野、村田であり、２日目終了時点で立教大、国学院大に４－３で勝ち、最終日の結果次第では２位から５位の可能性があった。結局は最終日都立大に２－４で負け、３部５位であったが内容としては充実したリーグ戦であった。当時の私はまだシングルのやり方が分からずとりあえず泥試合に引きずりこんで勝っていた気がする。国公立戦は団体では学芸大戦（準決勝）でこけてしまったが、個人戦では、山梨さんが単で２位、山梨・村田が複で２位であった。単複とも個人戦決勝での相手は都立大（単は文挟（３）、複は高橋（５）・高崎（４））であった。東京での京大戦は９－６で勝ち、北海道での七帝戦は、東北大、阪大、北大に負けての４位であった。優勝した東北大は１年から４年までメンバーがそろっており、隙がなかった。山梨さんと組んだダブルスでは各大学のエースダブルスと当たることが多く（一部では山梨さんが当たるように相手と調整していたが）、勝ち負けを超えて長く楽しいラリーが多かった。負けたものの、東北大の引地（４）・須藤（２）、阪大の阿部（４）・小野（３）との試合は印象に残っている。

代が替わって、河野主将となった秋季リーグ戦では、複が、山梨・久保田、河野・村田、青木・芹沢、単が山梨、村田、久保田、河野であった。最初の２試合をこの布陣で戦ったが、後の３試合は複を山梨・村田、久保田・河野と組み直した。この時の

リーグ戦はなんとなくもう４部に降格するのだろうという雰囲気があり（私だけ？）、結局全敗で入替戦となった。入替戦では、４部１位の工学院に山梨さん欠席のオーダーで臨み、２－４で４部降格となった。当時から工学院は吉野（２）、近藤（１）が主力であった。この時私はＳ１で吉野と当たり０－２で負けた。（吉野は卒業後実業団で活躍した。）

昭和59年の春季リーグ戦は、複が村田・森（２）、河野・芹沢、青木・高橋（２）、単が村田、森、河野、芹沢の布陣であった。茨城に遠征しての４部リーグ戦はあまり記憶に残っていないが、上智に３－４で負け４部２位となり、３部復帰はならなかった。４部は４ブロックあるので（３部は２ブロック）、強い選手がいたとしても強豪同士が当たることはめったになく、また全体として大雑把な甘い試合が多かった。国公立戦は、団体優勝、個人戦複で村田・森が優勝であった。個人的にはこの時の団体戦決勝で個人戦で負けていた都立大の文挟さん（４）にシングルで勝てたのがうれしかった。京都での京大戦は５－10と大敗、その後の九州での七帝戦も九大にだけは勝ったものの最下位であった。七帝戦の優勝は東北大で、絶対的なエースはいないが４年生の層が非常に厚かった。

代が替わって、村田が主将となり臨んだ秋季リーグ戦は、複が村田・森、芹沢・盛田（４）、川上（４）・高橋、単が村田、森、芹沢、盛田の３年生以下のメンバーで臨んだ。全勝で４部１位となったが、入替戦は３部６位の都立大と当たり３－４で負け悔しい思いをした。しかし３部に復帰するには、チームとしての力不足をなんとなく感じていた。

昭和60年となり、春季リーグ戦は、複が村田・森、芹沢・高橋、盛田・倉田（２）、単が村田、森、高橋、芹沢で臨んだ。文教大に４－３というきわどい勝負もあったが、全勝で４部１位となり、入替戦に臨んだ。入替戦初戦の城西大戦は、ほとんど誰もがもうだめだと思ったS3芹沢が火事場の馬鹿力、奇跡的逆転勝ちをして、S4森が思ったより弱かった相手に２－０で勝ち、４－３で勝利。次の一橋戦は単複とも実力順に当たり、もう大丈夫と思ったら意外に苦戦。D2盛田・倉田が勝利を収め、D3村田・森も勝利。S3森が六信（４）に苦戦しつつも勝ち、４－２での勝利、昇格となった。国公立戦団体では、決勝でその一橋大に敗れ２位、個人では村田・森が複で優勝、単は柿沼さん（横国から東工大院M2）に敗れ、村田が２位であった。東京での京大戦は８－７で勝利。大阪での七帝戦は初戦の京大に４－５とつまづいたのが痛く、阪大に勝っただけの６位であった。それでも片山先生宅での新年会で誓った、３部復帰、七帝戦最下位脱出という最低限の約束は果たせた（目標が低過ぎるか？）。

代が替わり、森主将のもとでの秋季リーグ戦は、複が、村田・森、芹沢・高橋、原

田秀（１）・長谷川（１）、単が村田、森、高橋、原田秀で臨んだ。３－４の負けが３試合とめげそうなところであったが、最終日の横国大戦に４－３で勝ち、５位で３部残留となり、私達の代のお役目も御免となった。

私は中学・高校でダブルス専門だった（シングルは練習さえしなかった）ので、シングルは大学に入ってから始めた。最初はあまりシングルをやる気はなかったのであるが、周りの状況からそんなわがままは通りそうもなく、しぶしぶやっていた１年生のころ。幸運な勝利を数試合経験した２年生のころ。山梨さんが引退後、実力もないのに否応なくエースになってしまった３年生のころ。そして結局シングルの試合の流れや攻め方が分かったのは４年生の春ごろだったと思う。単純に打ち返すだけでなく、ラリーを布石として組み立てられるようになった。

私が在籍した４年間、チームとしては３部Ｂクラスから４部Ａクラスの実力の時代だった。ただ、３部と４部全体としてのレベル差は非常に大きく、チームとしてのレベルアップのためにも３部残留を続けることが大切だと感じた。当時の３部は１位になった筑波大、青学大など２部昇格後すぐに２部１位となっていたことからも分かるように非常にレベルが高く、刺激的だった（上位校と下位校の差が大きいともいえるが）。４年生最後の秋のリーグ戦を３部で終えることが出来たのは幸せだったと思う。

以下にその他の印象に残る試合等をいくつか挙げる。

・２年生秋の理工戦で都立の高崎さん（４）に勝った試合。１年生のときに高崎さんの試合を見て、この人にはシングルで（一生）勝てないと思っていたので、相手が風邪で発熱していようがうれしかった。

・渋谷のラケットショップ元町（またはのちのウェンブレー）の店長草島さん（法政大ＯＢ）のつてだったと思うが、２年生の冬に権藤さん（日体大４年、３年生の時にインカレ優勝。４年生のときは２年生の松浦（法政大）に決勝で負けていた。）が駒場の練習に来てくれた。１セットだけシングルをやってもらったが15－４で負けた。取れたと思ったスマッシュがラケットをすり抜けていく体験をしたのはその時が最初で最後だった。シングルスにおいてラリーを一発で終わりにする（ノータッチエースをとれる）ショットの大切さを教わった。

・４年生春の入替戦。城西大戦では日原さん（３）（中学・高校時代は私の１学年上の好選手）と当たると覚悟してS1に出たが、山崎（２）と当たり勝利。試合前に家を出るときから緊張していた試合はこの城西大戦だけだったと思う。次の入替戦２戦目の一橋大戦に勝って３部昇格決定のとき胴上げしてもらったことも印象に残っている。最後に腰からたたき落とされたような気もするが。（書いていたら、試合後の高田馬場駅前ロータリー中央芝生での２次会で酔った森に「村田！」と呼び捨

てにされたことも思い出した:-)

・４年生の関東学生Aブロック単での吉田（日大２）に負けた試合。大東文化大（当時２部）のS2に勝ち、次に当たったのが当時１部日大のレギュラー。ファイナルになったが最後は力で押しきられた。夏の東日本選手権（仙台）でも単複とも日大に負け、なぜか日大に縁のある年だった。

・４年生の七帝戦東北大との単複。複でD1須藤（４）・猪瀬（２）に勝ち、その直後の須藤とのS1では息が上がっており、全くの完敗（試合にならなかった)。ダブルスでばてたのはあまり記憶にない。結局４－５で負け。東北大は戦力が揃っていないにも関わらず優勝。このシングルでの負けは団体戦としては２年生秋の入替戦で吉野に負けて以来。その後の秋季リーグ戦でのシングルは全勝だったので自分の記憶に残る負けだった。

・４年生の東日本選手権で見た、辻田（中央大３）と中谷（筑波大３）のシングル。当時筑波大とは定期戦があり、そのなかでも頭一つ抜け出ていたのが中谷（インハイダブルス優勝者)。しかし、１部の実力者辻田の前にラリーにはなるものの完敗していた。試合を見るときは、自分が負けた相手（または勝ちたい相手）がラリーになりながらも負ける試合を見ると良い。弱点が非常に良く分かる。あまりに強い選手の試合を見てもためにはならない気がする。松野・松浦（法政大。当時学生チャンピオンかつ全日本チャンピオンだった）の試合は何度か見たがあまりにレベルが高く、自分には何の参考にもならなかった。

おまけ

久保田さんへ　　私も体に悪いことはきらいですので、合宿の朝にランニングはしませんでした。

先田くんへ　　京大戦でのD1対決は、私の在籍した昭和57年からの４年間、東大側から見ると×○×○となっていて、ほぼ互角でした。

エース君臨の時代からエース不在の時代へ

昭和59年入学　　壁矢　和久

僕の現役時代（昭和59～62年）、団体戦の重要度は①関東学生リーグ戦、②京大戦、③七大戦、④国公立戦、⑤その他の定期戦の順であったと思う。ＯＢの方々が見る目もこの順に厳しく感じられた。ここでは上述の順で戦績を振り返るとともに、この時代の特徴を記させていただく。

関東学生リーグ戦

昭和59～62年の４年間を一言で表現するならタイトルの通り「エース君臨の時代からエース不在の時代へ」となろう。昭和59～60年にかけてエースの座に君臨されていたのは村田章さん（昭和57年入学）である。村田さんは僕ら後輩にとって雲の上の存在で、負ける姿を見ることはほとんどなく、関東学生リーグ１部のレギュラー選手と死闘を演じられた昭和60年夏の東日本大会などは圧巻であった。その村田さん引退の後、エースの座をしっかりと引き継がれたのが森郁雄さん（昭和58年入学）である。大エース村田さんの次の主将というプレッシャーに見事打ち勝ち、勝つべき試合は必ずものにする素晴らしいプレーヤーになられた。森さんが皆の期待に確実に応えることでチームの士気が高まっていたことをよく覚えている。この「勝つべき試合は必ずものにできる」力こそがエースの条件なのだと思う。森さんの後、壁矢の代になり、残念ながらエースと呼べるプレーヤーがいなくなった。ダブルスこそ長谷川・原田（共に昭和60年入学）が安定した力を発揮していたが、シングルスに関してはこの二人も、また赤瀬（昭和59年入学）、壁矢も力不足が否めなかった。

そしてこのエース不在の影響が最も顕著に映し出されたのがリーグ戦であったと思う。現役の４年間、８回のリーグ戦は３部４回、４部４回、そして入替え戦出場４回ということで、常にボーダーライン上の厳しい戦いを強いられた。そのぎりぎりの戦いに勝利する、すなわち３部残留あるいは３部昇格を果たすには、勝つべき試合を必ずにものにする必要があった。昭和60年春の歓喜の３部復帰から森さんが引退されるまでの３シーズンは苦しみながらも勝負どころの試合を確実にものにし、３部の座を死守した。しかしながら昭和62年春、勝つべき試合をものにできず、ついに３部６位→入替え戦敗退→４部降格という地獄を味わうことになってしまった。今振り返ってみると自信を持ってオーダーを組むことができなかった印象がとても強い。リーグ戦の場合、単単複複複単単の３複４単なのでまず初めのシングルス２本のうち少なくとも１本を取ることが重要である。勝つべき試合つまり同等レベルのチームと戦う場合

であればなおさらである。ところがそういったオーダーを組むのが難しかった。入替え戦では半ば開き直って最上級生の責任がある壁矢、赤瀬がＳ１、Ｓ２として戦った。１戦目の明星戦は功を奏して勝利できたが、２戦目の横国戦では二人が相次いで敗れ、トータル０－４の完敗となってしまった。無念だった。そしてエース不在が悲しかった。

京大戦

この時代、東大と京大との力は拮抗していた。４年間の戦績は２勝２敗。どちらが勝ってもおかしくない状況であったので、定期戦は非常に盛り上がった。戦績の中身を分析してみると面白いことにダブルスは４年間全て２－３で京大に軍配が上がっている。つまり東大はシングルスでしっかり勝てないと勝利できなかった。これは偶然とは思えない。当時の東大のダブルスは極端な言い方をすると二人でシングルスをしているような感じがあり、普段の練習も個々のシングルスの力を鍛えることに主眼が置かれていた。京大戦の場合は５複10単と数が多いので一部のレギュラーというより、部全体の方向性が結果に表れる。そこでダブルスについては東大よりやや緻密な練習をしていた京大が勝ったのであろう。

この頃の京大戦に関して忘れてならないのは、試合後のレセプションにおける東大村田光二監督と京大山本監督とのスピーチバトルである。試合を振り返り、勝敗のポイントとなるゲームを戦ったプレーヤーを批評しあうのだが、このバトルについては村田監督の口撃力に一日の長があったように思う。東大のプレーヤーにとって、戦いに勝ち、レセプションで京大のプレーヤーが槍玉に挙げられている様を見るのは実に愉快であった。口撃されるプレーヤーは大変だが、ここで的となった者はその後、皆強くなったように思う。村田監督の口撃は辛口だが暖かいアドバイスだったのである。

七大戦

七大戦の成績は７位→６位→５位（２勝４敗）→５位（３勝３敗）と年々向上していった。昭和59、60年頃は東北大の力がやや抜きん出ていたが、その後は７大学の実力差が小さくなり、戦国時代になったように思う。例えば昭和62年は優勝した名大に勝利するなど、東大にも上位進出のチャンスが出てきた。この年は３勝２敗で最終戦（九大）を迎え、勝てば３位という状況であった。しかし、そこで勝つことができず、結局５位に甘んじてしまった。この試合は自分が主将として臨む最後の試合であったので、強烈に記憶に残っているが、もしここで勝って３位になっていれば、翌年の３位が優勝か準優勝になっていたのではと思うと残念でならない。

国公立戦

国公立戦の成績は１位→２位→２位→１位。一橋大や都立大がライバルであったが、その２校の戦力が大幅にダウンしたことで、昭和62年からは東大連覇の時代となった。他校が３複６単の９本をしっかり揃えるのに苦労している中で、東大はＤ３やＳ５、Ｓ６まで比較的充実し、層が厚かったことが大きな要因と思われる。国公立戦に関しては東大の実力が頭一つ抜け出し、優勝して当たり前という風潮になっていった。

その他の定期戦

この時代の特徴として、伝統の一橋戦以外に東工大、筑波大といった他校との定期戦が活発に行われていたことが挙げられる。一橋大は昭和60年春の入替え戦に代表されるようにかつては強力なライバルであった。しかし、国公立戦の項でも述べた通り、61、62年頃からは戦力が急激に低下し、定期戦では東大の圧勝が続くようになり、手応えのない相手となってしまった。むしろその頃は東工大との戦いの方が白熱していた。筑波大は関東学生リーグ１部に昇格し、実力的には東大の遥か上をいっていたが、定期戦は快く継続してくれた。東大のレギュラーと筑波大の女子とがいい試合をするくらいの実力差があったため、正式な団体戦とはならなかったが、関東学生１部の選手とプレイや交流ができる、また阿部先生や岡本先生といった著名な指導者のアドバイスをいただける貴重な機会であった。

「エース君臨の時代からエース不在の時代へ」という流れはリーグ戦４部降格という不名誉な記録を残してしまった。しかし、一方で七大戦の成績は年々向上し、国公立戦では連覇のスタートとなった。無論、これらは他校との相対的な力関係によるところが大きいが、レギュラー全員が自分が勝たなければならない、人任せにできないという気持ちをより強く持つようになった点も見逃せない。これは長谷川、原田や木藤（昭和60年入学）、先田（昭和61年入学）らにより、それまでのシングルス中心に鍛えられた２人が組む１＋１≦２のダブルスから１＋１＞２のダブルスの追求に発展していった。Ｄ１からＤ３まで全てがダブルスらしいダブルスができる形が整い始め、戸塚（昭和62年入学）という新たなエースが誕生することで平成に突入した東大バドミントン部は一つの繁栄期を迎えることになる。

一番うれしい思い出・悔しい思い出

昭和62年入学　　戸塚　英男

私が在籍した昭和62年から平成２年までの間の東大バドミントン部の戦績を、リーグ戦と七大戦を中心に振り返ってみたい。

昭和62年～４部降格からのスタート

私が入部して最初の試合は昭和62年春のリーグ戦だったが、いきなり４部降格という厳しい結果でのスタートになってしまった。私も数試合に出場するチャンスがあったが、まったく勝利に貢献することは出来ずに終わった。入学してすぐの試合であり、部の置かれている状況も良く把握できていなかったし、自分のプレーを冷静に振り返る余裕もなかった。何もわからないうちに気が付いたら４部に降格していた感じである。

従って、私にとっての実質的デビュー戦は、その後の七大戦になる（国公立戦は当時優勝が当たり前という状況だったので、あまり強い印象は残っていない）。この年の七大戦は久しぶりに上位進出を狙える展開となり大いに盛り上がったが、結局最終戦の九大戦に敗れ、得失ポイント差で５位に終わった。

この大会の異常な雰囲気には本当に驚いたが、私にとって特に印象に深かったのは、最終戦終了後の主将壁矢さんの引退の挨拶だった。最後に涙ながらに「いい夢見させてくれてありがとう！」と語った姿に、壁矢さんのバドミントン部に対する様々な思いが凝縮されている様だった。思えば、この時の壁矢さんの姿は、その後の私がバドミントン部に対する思い入れを強くしていく際の一つのベースとなっていたような気がする。

昭和63年～上り調子の時代

昭和62年の秋リーグ、昭和63年の春リーグと連続して４部優勝を果たしながら、入替戦で敗れ、３部に上がることの難しさを痛感した。但し、メンバー的にはかなり充実していたと思う。七大戦ではごく自然体の戦い振りで３位となり、久しぶりの上位進出を果たした。実力的には充分優勝を狙える位置にいると実感した。そしてこの年の秋リーグで遂に念願の３部昇格を果たした。不思議なもので、あれだけ苦労した入替戦も今回は比較的簡単に乗り越えられた。

個人的にもこの頃はプレイヤーとして非常に充実していた。その後10年以上に渡り

ダブルスのパートナーとなる後藤とペアを組みはじめたのもこの時期で（秋リーグの直前に思い付きで組んでみたところ、予想外にうまくいったので、そのまま正式なペアとなった）、当時「ダブルスの先生」的存在であった先田さんのもと、ダブルスとしての形を作り上げていった。この年は、秋の関東学生の新人戦でも好成績を残すことができた。当時２年生の私、後藤、前間、西口のチームでＢブロック団体戦準優勝を果たした。この同期の４人は当時既にチームの中核メンバーとなっていた。従って、翌年以降の戦力に関しては何の不安も無く、３部での戦いについても極めて楽観的観測を持っていた。しかし、現実はそれほど甘いものではなかった。

平成元年～どん底の１年間

自信たっぷりで臨んだ春のリーグ戦。ところが、緒戦こそ勝ったものの、その後は各校と互角の戦いをしつつ４連敗、結局ポイント差で最下位となってしまった。入替戦でも敗れ、苦労して昇格した３部をわずか一期で去ることになった。入学以来、４度目の入替戦敗退であった。続く七大戦は、優勝候補に挙げられながらも、結果は６位。さらに続く秋のリーグ戦はまさかの４部３位。結局この１年は個人的にも不本意な試合が多く、結果としてチームの成績も巻き添えにしてしまった。十分な戦力を持ちながら、結果を残せず、主将としても非常に辛い時期であった。前間は負けた後の飲み会では必ず大泣きしていた。

平成２年～復活

前年の失敗は、各自の甘え、油断に起因していた。いろいろ思い悩んだりもしたが、結局基本に立ち返るしかなかった。当時は、授業の関係もあり、練習の運営は後藤にお願いすることが多かったが、彼は持ち前のサディスティックな性格を存分に発揮して、後輩たちを鍛え上げていた。

そして迎えた春のリーグ戦。同ブロックには創価大がいた。創価はインターハイで実績を挙げた１年生等が多数加入し、戦力的に３部あるいは２部クラスの力があった。ところが、この創価に勝ち、入替戦でもぎりぎりで東京経済大を振り切り、３部昇格を果たした。

このリーグ戦で密かにポイントを握っていたのは２年生の石田だった。横浜商大戦でのシングルスではファイナルの末敗れたが、相手は石田との激戦で足に痙攣を起こし、ダブルスを棄権、４対３で横商に勝つことができた。入替戦の東経大戦では３対３で迎えた最後のポイントが石田だった。相手は実力的には石田以上と思われたが、相手はその前のダブルスの激戦の影響でまたしても試合中足が痙攣を起こし、石田が

逆転勝ちした。

このリーグ戦の結果は、正直なところ奇跡的と言っても良かった。ただし、決して運だけで勝ち取ったものではなく、間違いなく各自が最大限の努力をした成果だった。大学４年間で最もうれしい勝利だった。

七大戦では優勝争いをしたが、名古屋に一歩及ばず２位。２位という結果は主将としては一応の責任は果たせたという安心感はあり、また、東大バドミントン部としても久しぶりの好成績ではあった。しかし、優勝できなかったという悔しさの方が遥かに強かった。リーグ戦とは逆に4年間で最も悔しい敗戦になった。

結局、リーグ戦では何と４年間で６回の入替戦を経験した。これは歴代最多であろう。入替戦の戦績は２勝４敗で、苦しい思いもしたが、おかげで４年間常に高い緊張感を持って試合に臨むことができた。

４年間を振り返って見ると、極めて幸運な代であったと思う。途中で苦しい思いもしたが、最後はそれなりの結果を残して引退することができた。努力や苦労というものは、必ずしも報われるとは限らない。ただ、努力しなければ結果は決して訪れない。自分はたまたま苦労が結果として報われるという貴重な体験ができたのだと思う。

それにしても七大戦で優勝できなかったのは本当に悔しい。思えばかなり長く優勝から遠ざかっている。不思議なことだ。自分が果たせなかった七大戦優勝への思いを現役の皆さんに引き継いで行きたい。

６、２、５、２

平成元年入学　　石田　仁志

僕が部に在籍したのは1989年から1992年までである。その間色々な大会・試合があり、人それぞれプライオリティーのつけ方に違いがあろうが、個人的には大学時代の部活の最大イベントは七大戦であったと思う。在部４年間で、東大バドミントン部の七大戦での戦績は６位、２位、５位、２位と順位が推移している。「６、２、５、２」この順位の変動が、４年間の全てを今でも鮮やかに蘇らせる。

１年生の時、名古屋での６位と言う結果は今から考えても“七大戦の魔物に取り憑かれた”とでも言うような結果だった。（そう、あの気が狂ったような体育館の中の暑さと、耳鳴りのようにコートを取り巻く応援合戦が実際に魔物の餌食を何人も作った。）行きの新幹線の中で“優勝も狙える”と言う声が聞かれ、期待いっぱいで望んだ大会だっただけに、終わった後はチーム全体にぶつけどころのないもやもやが渦巻いていた。当時のエースは３年生の戸塚さんで、シングルスは頭一つ抜き出ている感があったが、その他のレギュラー陣も実力・経験ともに充実しており、“優勝も狙える”の声を信じさせるに十分の布陣だった。その後の秋リーグで、春リーグで落ちてしまった４部でなんと３位になってしまい、魔物に取り憑かれた後遺症は思ったよりも重かった。秋のリーグ戦後練習時間にミーティングが開かれ、新幹部を前に下級生達も何か意見を言えといわれて、“慢心があったのではないか、他大学はもっと厳しい練習をしているのではないか”と言う意味のことを生意気にも言った記憶がある。が、本当の所はなぜ勝てなかったのか全く分かっていなかった。とにかく、チーム全体としては春リーグからの巻き返しを目指さねばならないこと、厳しい練習はその目標のために是認されるべきことが確認された。個人的には４年生引退後既に３・２年生で固められつつあった新レギュラーの一角を春までに崩すことが当面の目標となった。

高校時代、コートの割当が厳しく、20人の部員に1.5コートと言う割当の中で、私のバドミントンは“決めることよりも決められないようにするバドミントン”になっていた。少しでも長いラリーをした方が長くコートを使えると言う理由と、守りに勝る攻撃を出来るようなプレーヤーが長野に多くなかったからだ。当時の練習は、あるいはそれから後４年生になるまでの練習はシングルスにおいてはおおよそこうした私のバドミントンスタイルを矯正するものではなかった。すなわちとにかく体力負けはしないと言うスタイルだ。すばやいフットワークと柔軟な体を作ることでカバー出来るコートの広さを広くし、かつその動きをフルセット持続させる。当時世界のトップ

に立っていた男子ではインドネシアのウィラナタ、女子ではインドネシアのスサンティは共にこの延長線上にいるように見えた。（やがて香西という新人が入ってきて、シングルスにおける攻撃の重要性を身にしみて感じさせられたのは僕が４年生の時だった。）

一方ダブルスにおいては４年生だった先田さんから教えて頂くことは僕にとって大変参考になり、その実践に努めようと思って取り組んでいた。①相手より高い位置で打つようにすること、②そのために相手の先を読んで（確率が高ければ）先回りすること。シンプルな理論ほど実践は難しい。特に僕の場合高校時代にシャトルを呼びこんで打つ癖がついてしまっており、体の前でドライブをうちながら相手の返球の確率の高い位置に向け始動する（さらにはそのドライブの前に相手の返球を予測する事で、２手先の相手の返球に対する読みの確率を上げて行く）といった類のことが出来るようになるには相当時間がかかると思われた。が、やる価値のあると考えるものをやらない選択は出来ない。

翌年の戦績は練習の成果があったのか、ほぼ完璧に近いものだった様に思う。春リーグではインハイ選手榎本を擁する創価大学に勝ち奇蹟（？）の３部復帰を果たし、七大戦では名大に惜敗したものの準優勝を飾った。気力・実力ともに最高の年だった。個人的には次期主将の伊藤さんの負傷で春リーグからレギュラーになれ（沢山負け）たことは（伊藤さんには申し訳なかったが）大きな財産になった。前年からの前進はなんと言ってもダブルスの安定度の向上であった。ダブルスを３本中２本落としたのは敗戦の名大戦のみであった。戸塚・後藤組は全勝だった。戸塚・後藤組は前年の秋リーグ以降月・水・金以外の日も練習に出かけ、春リーグ前まで練習過多と思われるほど練習していた。見事に過程と結果が結びついた瞬間だった。

伊藤さんの代になり、４年生が秋リーグ３部３位という置土産を残して卒部された後は、あるいはそれ以前から、明らかにチーム内に危機感が沸いてきた。レギュラーとして十分な経験を有していたのは３年生の合田さんだけで、はっきり言って“チームの柱”が存在しない状況だった。伊藤さんも大変そうだった。戸塚・後藤体制で、“苦しい事が練習”的な“常識”を持つに至った我々に、技術中心の練習姿勢を押し出した（様に映った）伊藤体制はややもすると“生ぬるい”と感じることすらあった。伊藤さん自身考え抜いた挙句の方針であったろうにも関わらず、不満を漏らしたこともあった。個人的に振返るとしかし、この時期は自分の技術を改めて見なおす良い機会を沢山与えられた時期であった。冬に不注意からアキレス腱を切りチームに（特に伊藤さんに）多大な迷惑をかけたが、リハビリの過程、復帰後の一試合一試合で、足の運び、捕球体勢等自分の動作の一つ一つを確認し修正する期間だった。七大戦でも、

東北大の久保さん、北大の谷さん、名大の北原・宮田など、スタープレイヤーのプレイをやっと自分に引き寄せて見ることが出来るようになった。戦績は奇蹟の春リーグ３部５位残留と実力通りの７大戦５位というものだった。一昨年から昨年までの事を考え起こすと、なんだか少し物足りないと思った。予想通りとはそんなものか。

自分の代になっても依然として戦力的な柱は存在しない状況が続いたが、幸い同期の４人が全員法・経済学部で練習に下級生よりも出席できる状況にあり、精神的な柱にはなっていた。練習は努めて厳しく、やや“体育会系”に傾倒した。反動と言う奴だったのかもしれない。秋リーグは３部４位と無難にこなした後、冬から春にかけてその傾向に拍車がかかった。今考えると後輩やレギュラーでない部員の意見もろくに聞かず半ば強制的な体力トレーニング中心の練習にみんなよくついてきてくれた。自分としては、（先の見えている）自分の代よりも後輩の代の下地を作る気持ちの方が強かった。自分の代以外のレギュラーはポテンシャルを秘めつつも安定感からはほど遠かった。レギュラー圏外の後輩にも大化けする奴がいるかも知れないとも考えていた。

七大戦２位。最後の七大戦は半年前からは予想だにしなかった結果だった。あまり持ち上げるのも癪だがなんといっても１年生の香西の力が大きかった。有力な新人が入ってくると噂に聞いていたが、明らかに予想以上だった。春までの練習が全体のベースを上げていたこともあり、唯一の敗戦となった名大戦（また名大！）以外は余裕すら感じながら戦えた。今から考えても信じ難いが、ダブルスのペアを組換え、楠本・市原、市原・石田、楠本・香西など本邦初公開のペアで試合もした。Ｍ．Ｃ．（メンチェン）で沢山の部員を試合に出すことも出来た。本当に楽しかった。

困惑・基点の“６”
雪辱・達成の“２”
自然体の“５”
集大成を楽しんだ“２”

生涯忘れることのない４つの数字である。

駒場時代を振り返って

平成３年入学　　川　信郎

～戦績全般について～

私がバドミントン部のメンバーで４年間過ごした時期（平成３年～平成６年）の戦績を概観すると、春と秋のリーグ戦は１度３部３位になった他は、いつも３部のＢクラスで４～５位。（入れ替え戦の出場は無し）

七帝戦は、準優勝が２回、３位が１回、５位が１回。

国公立戦は一度の準優勝の他、毎回優勝。

一橋戦は互角。一橋ＪＲは勝った年が多い。

京大戦は大勝。東工戦もだいたい勝っていた、という感じでした。

他に大きな試合としては、関東学生の個人戦・新人戦、理工戦・国公立の個人戦がありました。関東学生の個人戦は石田・香西組の活躍がありましたし、理工戦はどの代も誰かしら入賞していたように思います。

私の頃からなくなってしまった伝統というと、筑波大との交流戦ですね、きっと。少し上の代の方の頃はやっていた様なのですが、いつ頃からなのでしょうか。あとは、練習試合をするにしても、４部の上の方の学校が多かったように思います。

～伝統行事について～

伝統行事としては、三菱ガス戦は毎年ありましたし、Ｓ選手権・追いコン・こまうん、戸田マラ、夏季開寮、強化練習・駒下のカキ氷、検見川合宿・クロカン・チャリ道・スキー合宿・「地下てん」での飲み・ひさご会議・バドフェス・アニマル等々、バドミントン部固有の行事は思い返すと盛りだくさんですね。

～リーグ戦について～

当時の３部は、若干の入れ替わりはあったものの、上位校が、明治・慶応・東経・創価・成蹊・国士舘・神奈川。下位校が、東大・一橋・東工大・埼玉・明星・横浜国・横浜商といった感じでした。

他の大学にはリストラの影響が出始めていて、どうも１部ではない種目のクラブは推薦入学で人をとれなくなったらしく、専修大が部員がそろわず２部から棄権で落ちていったりしていました。また一方で、神奈川大学・創価大学（２部）・東経大などが新興勢力として３部に上がってきていました。

４部についていうと、３部の２リーグ12チームに対して、４部が４リーグ24チーム

あったこともあり、上位校となると、かなりの実力を持っていました。３部最下位で入れ替え戦に出たらリーグ落ちは確実、というのが一般的な見方でしたね。

私の代あたりでは、部室においてあった「２部昇格祈願のだるま」を横目に、いかにして残留するか？が至上命題であったように思います。

～七帝戦について～

七帝戦は、石田さんの代と私の代がそれぞれあと一歩で優勝というところまで行ったのですが、残念ながら準優勝に終わりました。私の代の時には、何十年ぶりかで優勝を狙えるのでは？ということで、駒羽会の上の方にわざわざお呼びいただいて、激励を受けたりもしたのですが・・・。私が４年の年は、人材豊富な古川君の代が多数加入してきて、レギュラー選びに困ったことが記憶に残っています。それだけ選手層が厚かったのだと思います。（年次順に、川、松薗、塚本、光澤、岩井、古川、上等、増永というメンバーが主に出ていましたが、誰がレギュラーでもおかしくないような状態でした。）

～全般を振り返って～

私の年代のトピックスを、戦力的にみると、香西君の加入がとにかく大きかったですね。今で言うと、西武ライオンズの松坂投手みたいな感じでした。公式戦で負けたところはほとんど記憶にありません。また、古川君達の代が入って来た時の印象も強いものが残っています。

チームカラーとしては、強打というよりは、粘り強いレシーブとラリーをもとに、ポイントを拾っていく、という選手が多かった感じがします。

練習の中身は、シングルはひたすらノックとオールロング、オールショート。ダブルスはアタック＆レシーブを中心とした練習が主でした。そのせいか、練習最後のアニマルが終わった後でも、ラリーの練習をしているメンバーが多かったように思います。

検見川の合宿は、中身の濃いものにしたいと、どの代の幹部もきっと思ったことと想像しますが、コートが４面しかとれず、またそのコートも他の団体と分け合うことになることもあり、よく走っていたなあ、という記憶が多いです。私の代では、近くの小学校に場所を借りてまで練習をしにいったり、夜にめいめいで電気をつけて練習していたりしたことが思い出に残っています。

～終わりに～

今回の50周年記念誌の執筆メンバーを拝見させていただいた時に、現役の頃にはあまり考えもしませんでしたが、自分の代はまだまだ長い歴史の後ろの方なのだなあ、としみじみ思ってしまいました。私が上述したことも、いつの時代かにどなたかが始めたことが、引き継がれていたことが多いのではないか？と思うと、不思議な感慨があります。

東大バドミントン部も、50周年という節目を迎えましたが、今後もますます現役諸氏の活躍によって、盛り上がっていくことを祈念して筆をおきます。

現役諸君よ、強くあれ

平成６年入学　　古川　敦司

私が東京大学バドミントン部に入部した頃は、主将に川さん（H3）、香西さん（H4）、岩井さん（H5）とキラ星の如く人材が集まっておられました。そして同期にも、上等、増永、川上、夕部など愉快で頼もしい仲間がいて、毎日がお祭り騒ぎのようでした。一年次は誰でもそうかと思いますが、私もご多分に漏れず無我夢中にただ自分の練習に打ち込んだ時期でした。幸運にも一年の春リーグから試合に出させて頂き、松薗さん（H3）と組んだダブルスで勝ち越すことが出来ました。松薗さんの必殺「チョロロンヘアピン」と私の爆烈スマッシュのコンビネーションが本当に絶妙で、唯々楽しかったのを覚えています。この時、勝ち越したことに対して先輩方がすごく褒めて下さったことがとても不思議で、「実力はこんなモンじゃないよ」と密かに思っていた私はのちにその意味を強く実感する事になるのですが・・・それはまた後程。その春リーグは２勝３敗で４位という結果でした。その後に行われる国公立戦は危なげなく勝ち上がり、優勝しました。その決勝で大串さんという一橋大学の大エースとダブルスで対戦し、誰もが勝てないと思っていたらしい試合で勝利し、急に他大学を含めた周囲の私に対する見方が変わったのを覚えています。

更には、夏合宿、京大戦、七大戦と続く勝利への渇望の時期となります。この季節が終わると四年生が事実上の引退となるのですが、一緒に練習していた先輩がもう来なくなるのが毎年信じられない思いでした。合宿の後の京大戦は本当に印象が薄く、失礼ながら「ＯＢの為の定期戦」といった印象しか持っていませんでした。結局、在学中は一度も京大戦で負けたことは無く、東京大学は四年間勝ちっ放しでした。その後にやって来る七大戦は個人的にとても好きな大会でした。この大会で優勝するというのが入部の個人的な動機でしたし、他大学の仲間と楽しい時間を過ごせた貴重な大会でした。ＯＢの方には、その応援方法などに渋面される方もいらっしゃいましたが、個人的にはこういった大会があっても良いし、あった方が良いと思います。この時にはランキング戦で１位になっていたので、エースとして勝つことが要求される立場にいました。最初の北海道大学戦のダブルスであっさりと負けてしまい、非常に落ち込みました。そして、この敗戦こそ私の大学時代最大の後悔でもあります。悔しくて、次のシングルは全道３位になったという人にあわやラブゲームのような試合をして、コート外の人とノリノリで試合をしたのが印象に残っています。しかし、４－５で北海道大学に敗れ、最終的に５勝１敗で並んだ首位も勝ち数で北海道大学が優勝し、準優勝に終わりました。四年間を通じて七大戦でたった一度だけ負けた、本当に最初で

最後の試合で優勝を逃し、以後個人的には七大戦で負けなしでも、東京大学として一度も七大戦で優勝出来なかった最大の後悔として永遠に記憶されています。

その後、日に日に強くなる自分自身を楽しみながら秋リーグを迎えました。新チームになり、「勝たなければ」というプレッシャーを感じつつも相手チームのエースとの対戦に敗れ、この時の伊藤主将（H4）に大変ご迷惑をおかけしました。そして同期の上等と「リーグ戦で勝たなければ何の意味も無い」という事を二人で語り合ったのを覚えています。

二年生の春リーグではアキレス腱を断裂するアクシデントに見舞われ、リーグ途中でリタイアし、部全体に非常に迷惑をかけました。この時は全員の頑張りで何とか１勝をもぎ取り３部残留を果たしたと病院のベッドの上で電話を受け、涙が込み上げてきました。そして同時に、２年生の時点で試合に出ていた多くの同期を頼もしく感じました。復帰後もリハビリで試合に出られませんでしたが、裏方の仕事を頑張り、応援で何とか部に貢献しようと思っていました。同時に、普段自分が試合をしている時に応援してくれている仲間の存在が更に強く感じられるようになり、それ以後は同期や後輩に「背面の『東京大学』と後ろにいる『仲間』の為にも、試合に出る以上はいい加減なことだけはするな」と言い続けました。結局この年は国公立戦も準決勝で都立大に敗れ、七大戦でも４位に終わり、秋リーグでは同率５位ながらも４部降格という屈辱的な結果を残してしまう事になりました。私自身の試合に出られないもどかしさに加え、個人戦などではみんな良い成績を残していた時期だけに信じられないような結果でした。

その冬は屈辱を胸に春が来ることを待ちわび、３年の春リーグでは全戦完勝で３部復帰を果たしました。打ち上げの時に、「あんな所（４部）では二度と試合したくない」と誰もが口にしたのを覚えています。以後の関東リーグでは各自のモチベーションの向上に伴い、４位、３位と確実にステップアップし、最後の秋リーグでは当時の小林主将（H7）の頑張りにより３部２位という近年ない好成績を収めることが出来ました。この時には、しみじみ「素直にうれしいな」と言いながら増永や上等、夕部と美酒に酔ったのが素敵な思い出です。

３、４年時の国公立戦は東大のためにあるような大会で、団体はもちろん優勝で、４年の時には１ゲームも失う事なく優勝しました。個人戦もうちが総ナメで、４年生の時のシングルはベスト４全てが東大でした。ちなみに私が入学してから国公立戦のシングルはずっと東大がタイトルを保持していた事も付け加えておきます。最後の七大戦は古川黄金時代と言われてきたこのチームの最強の布陣で優勝を狙いに北海道へ上陸しました。しかし天王山であった東北大学戦において、悩み抜いた末に決めたオ

ーダーが当時の北海道拓殖銀行のように完全に破綻して１－５という完敗に終わってしまいました。最後まで、七大戦優勝の悲願は達成されることはありませんでした。もう一つ、その敗戦以後目標を失ったチームは大学時代を通じて初めて団体戦で京都大学に敗れ、最終的に３位に終わり、一つの時代が終わっていく寂しさを感じさせられました。

久々の黄金時代とＯＢの方々に言って頂けた程の先輩・後輩、そして何より同期に恵まれ、そんな時代に主将をさせて頂けて本当に幸せな部活動でした。オーダー的には本当に豊富で、今の現役に神様のように言われている小林（H7）に「お前はダブルス下手だから引っ込んでろ」といってシングルだけに使ったり（小林、ゴメン）、鎌田（H8）を捨てシングルに使ったりしていました（ほとんどオモチャ扱いだった）。個人的にも、ダブルスでは川上という良きパートナーと組んで敵を蹴散らし、上等、増永、夕部やその他の同期とバドに遊びに走り回っていました。いつもの渋谷での打ち上げの後は、我が家の「代々木上原109－Ⅱ」に集まって大騒ぎしたり、麻雀したりして大いに楽しんだのもイイ思い出です。

最後に現役へアドバイスするとすれば、急激に強くなる時というのは「上を目指した時」であり、私たちの場合でいえば個人戦で１部リーグの連中と当たるようになり、そいつらを倒そうと思うようになってからです。逆に言うと、七大戦や国公立戦で勝つぐらいの目標ではその程度の強さにしかなれないということです。大きな目標を設定し、それに到達するための道筋を見つけだし、必要な努力を着実に積み上げていって下さい。ＯＢはいつでも強い現役を求めていますし、そのサポートに労は惜しまないはずです。そのためにも、誰でも最初に持っている「強くなろう」という気持ちを忘れずに頑張って下さい。自分の心の壁に負けぬよう、次々と高い峰を征服し、はるかなる頂上を目指して歩み続けて下さい。

現役生活を振り返って

平成９年入学　　杉本　光貞

私の入部した平成９年当時、我が部は部員も多く、主将の古川さんの強いリーダーシップのもと、誰もが真剣に、そして楽しみながらバドミントンと付き合っているように感じました。もちろん古川さんをはじめ、上等さん、川上さん、増永さん、夕部さんと強い４年生が豊富におり、入部してすぐの国公立戦では１試合も落とすことなく完全優勝を遂げるなど、非常に勢いのあるチームでした。古川さんは「七帝戦優勝」を部の目標とされて、文書に七帝戦にかける思いを綴るなど、部員全体に意識を浸透させるべく、努力されており、目標に向かいレギュラーを中心に一丸となっていたように思います。

春合宿を経て京大戦を迎え、初日の５複10単では、川上さんが事故のため、欠場されており、どちらかというとダブルスが強い京大にダブルスでは２－３とされたものの、シングルスで挽回し全体として勝利を収めました。翌日の３複６単も総合力で勝り順当に勝つこととなりました。そして優勝目指し、気力みなぎる中、七帝戦を迎えました。

初日の名大戦では相手のエースダブルス、牛山・篠原組に苦戦したものの、上等・鎌田組が勝利を収め、５－０で勝ち、勢いよくスタートをきりました。つづいて優勝候補であり、最大のライバルとされていた東北大と早くも対戦しました。私は１年生で審判があったため試合は見ていないのですが、序盤から立て続けにとられ、鎌田さん、古川さんのシングルまでまわすことができずに負けてしまったようでした。振り返るにこの年の東北大は戦力が非常に充実しており、まさに最強という名にふさわしいチームだったと思います。東大としては、出鼻をくじかれた格好となってしまいました。

その後、阪大、九大、北大と接戦勝負が続きましたが、上等さんの勝負強い決めシンなどで３連勝しました。ここで個人的に印象深かった試合は上等さんの対脇坂戦、古川さんの対花岡戦、増永さんの対逢坂戦です。それぞれの先輩の持ち味が遺憾なく発揮されていたように思います。

最終日、京大との試合では、先日の京大戦の勝利もあって、まず負けないだろうと思っていたのですが、そこに落とし穴がありました。当たりも悪く、５－４で敗れてしまったのです。しかもポイント差で三位となり、この夏の七帝は幕を閉じました。先輩方からすれば非常に不本意な結果だったろうと思います。

しかし、この後の秋リーグで、それを吹き飛ばすような結果になりました。私たち

後輩の間で今でも語り草となっている三部二位という快挙です。初戦の淑徳大学国際コミュニケーション学部との試合こそ敗れはしましたが（淑徳はこの秋に二部に昇格し、今では二部で安定した地位を築いています）、その後全勝し、二位となりました。淑徳を除く四大学も決して弱くはない中で、この結果はもう圧巻というしかないです。ここで印象深かったのは、古川さんのシングルスです。古川さんというと、エースダブルスの印象が強かったのですが、この時の古川さんのシングルスは気合い十分で鬼のように強かったです。全体を通して、古川さんに限らず四年生の活躍はすさまじいものがありました。

この結果について、全くの個人的な推測ですが、あの七帝での苦い経験が逆によかったのではないかと思います。三位に終わったことで、バドミントンに対する未練が先輩方の中に残り、勝利への執念が生まれたのではないかと思います。

代は替わって、小林さんの代になった時（平成10年）にリーグに大きな変化がありました。３複４単から２複３単になったのです。そして迎えた春リーグでは東大の戦力の低下は否めず、残留を目指して、食らい付いていくという展開でした。

東海、日大経済、横浜商科が強く、全て１－４で敗れました。勝負所は横浜国立大と湘南工科大でした。まず、横国大には２－２で最後のシングルスまで行ったのですが、坪倉さんが原さんに惜しくも敗れ、湘南工科大との試合に全てをかけることとなりました。

湘工大には２人強い選手がいて、そのうちの一人に鎌田さんが勝ち、ダブルスを一本とって、２－２で第３シングルスを迎えました。東大は主将の小林さんで相手は３番手でした。小林さんは気合い十分で相手を２本、０本と圧倒し、残留をほぼ決めました。そして最終日に湘工大が横国大に敗れたため、無事残留が決まりました。小林さんをはじめ先輩方は本当にうれしく、またほっとされたことと思います。

国公立戦では準決勝で農工大にシングルス３本、ダブルス３本終わった時点で３－３とされたものの、残るシングルス３本を小林さん、高木さん、坪倉さんが全てとり勝利を収めました。翌日の決勝は電通大相手に５－０で圧倒し、優勝を決めました。

夏になり京大戦では、昨年とほとんど戦力が変わらなかった京大に初日、２日目とも敗れてしまいました。試合をご覧になっていたＯＢの方に「東大の選手は元気がない」と言われました。負けかたにももっと力を出しきるというか、変な言い方ですが「いい負け方」があるということなのでしょう。

そして九大での七帝となりました。その年の福岡はかなり暑く、最初の練習日で使った体育館は異常とも思えるほどの暑さで、果たして大丈夫かと思ったのですが、試合は冷房付きの体育館で行われたため、予想外の快適な環境でした。ただ、冷房によ

って微妙にコート内に風が吹いていたのを覚えています。

試合の方は初日の名大戦、勝てるだろうと思って臨んだのですが、大接戦となりました。東大のエースダブルスの小林・鎌田組は相手の三番手を引き、圧勝したのですが、残る二組はいずれもファイナルの末、敗れてしまいました。シングルスでは鎌田さん、小林さん、鳥居さんがとり、４－４で最終シングルスの坪倉さんにまわりました。相手は名大の秘密兵器、六年生の牛山さんでした。その結果、坪倉さんは敗れてしまい、初戦を４－５で落としてしまいました。これはけっこうショックなものでした。

続く東北大戦、浅野、佐野という七帝中でも最も有名な二大エースを抱える東北大に５－０でとられてしまいました。（最終的にこの年も東北大が優勝しています。）

そして京大戦、定期戦レギュラーオープンでは１－８というスコアで敗れていただけに、東大側にはかなり期するものがあり、去年うちが京大戦で勝ちながら七帝で負けたように、今度は京大に仕返しだと思いつつ臨みました。小林・鎌田組が三井・奥田組にファイナルで劇的な勝利を収め、かなり盛り上がりを見せました。しかし、シングルスで坪倉さんが瀬川さんにファイナルで接戦を演じたものの力尽き２－５で敗れてしまいました。

翌日の九大戦では鎌田さんが逢坂さんに敗れるなどして、２－５で敗れました。全敗の中、次の阪大はかなり弱いという情報が入り、ここで勝つぞということになりました。実際、阪大とは力の差があり、５－１で勝ちました。ここでは阪大のエース勝山さんを鎌田さんが引き、見事鎌田さんがエース対決を制しました。鎌田さんの試合は午前の失敗を打ち消すような素晴らしい試合運びでした。

結局ラストの北大戦を落とし、残念ながら一勝五敗で六位という結果に終わりました。小林さんに出ていただいた秋リーグではやはり三部残留を目指し、必死の戦いでした。東海大、横浜商科大、東経大、芝浦工業大にはいずれも敗れてしまい、東工大との試合が残留の最大の山場でした。Ｓ２の小林さんが小泉さんをファイナルにもつれたものの落ち着いたラリーでくだし、Ｄ２の小林・鎌田組が小泉・岡嶋組を圧倒し、残留を決定づけました。小林さんの助けで残留することができ、鎌田主将をはじめ、部員皆が本当にうれしかったです。

次の春リーグ（平成11年）では小林さんという大きな柱を失い、苦しい戦いとなりました。創価大、千葉商科大、東経大、横国大に敗れ最終日の茨城大にも２－３で敗れてしまい、入れ替え戦に出ることとなりました。入れ替えの相手は明治学院大でした。シングルスを２本とったものの、以下３本を落とし、四部落ちが決定してしまいました。このリーグ戦は相当苦い思い出として残っています。

続く国公立戦では準決勝で東工大相手に４－４ともつれましたが、Ｓ６の坪倉さんが永井君を圧倒し、なんとか勝利を収め、一橋大との決勝では５－２で勝利し、見事優勝を決めました。

夏の京大戦は初日、ファイナルで落とした試合も多く、４－11で敗れてしまいました。２日目も２－７で敗れました。２戦とも敗れたわけですが、総じてどちらが勝ってもおかしくないところで、そのほとんどを京大にとられてしまったために数字として惨敗という結果がでたように思います。

阪大での七帝ではまたもや初戦で名大とあたり、ダブルスで２－１としたものの、シングルスでとれそうな試合を落としてしまい３－５で敗れました。去年と全く同じく名大には勝つぞと思って臨んだ初戦で敗れ、かなり苦しいスタートとなりました。続く阪大戦では相手の会場校としての執念のようなものがあり、どうも勢い負けしていた部分もあり、３－５で敗れてしまいました。勝負所だとにらんでいた二試合を続けて落とし、かなりショックは大きいものでしたが、逆に開き直ったのか、午後の北大戦では鎌田さんが相手のエース宇野さんを力強く倒し、最後は相浜が相手を圧倒し、５－４で勝利を得ました。残りの京大、東北大、九大には負けてしまい最終的にはポイント差で七位となってしまいました。また東北大は浅野さんというエースが抜け、苦しいかと思いきや佐野さんを中心に選手層の厚さを見せ、王座を守りました。

鎌田さんと坪倉さんに出ていただいた秋リーグでは初めての四部という場での戦いでもちろん四部優勝、三部昇格目指して臨みました。しかし、初戦の武蔵工業大戦を２－３で落とし、またあと一歩という所で最初の試合をおとしてしまいました。次は五部から上がってきた国際武道大との対戦でした。鎌田さんが相手のエースを倒し、鎌田・相浜組がファイナルで松原・宮城組を破り、４－１で勝利しました。しかし、都立大には１－４で敗れてしまいました。そして東農大との戦いでは鎌田さんが相手のエースを倒し、鎌田・相浜組が相手のエースダブルスをファイナルの末くだし、最後は坪倉さんが疲れの見える川岸君を気合い十分に破り、３－２で勝利しました。この時点で東洋大が全勝しており、優勝を決めていましたが、二位以下は大混戦で、二位から六位は最終日にならないと順位が決定しないという状況でした。東大は東洋大相手でしたが、相手は優勝を決めており、イレギュラーを中心にだしてきたため、東大は４－１で勝利し、三勝二敗で二位に終わりました。三位以下は全て二勝三敗でポイント差、セット数で順位が決まるということになりました。

鎌田さんという大きな柱、そして坪倉さんが抜けた春リーグ（平成12年）ではこれまで以上に苦しい戦いとなり、初戦の明星戦を落とし、勝負所であった立正戦も２－３で落としてしまい、そのまま負け続け、全敗で四部六位となってしまいました。入

れ替え戦は上智大との対戦でＳ１の相浜が相手のエースに敗れたものの、Ｓ２の服部が高校時代のチームメイトの水越君に勝ち、Ｄ１をファイナルでとり、最後は服部・伊藤組が落ち着いて相手のダブルスをくだし、３－１で残留が決まりました。

・最後に

このようにだんだんと苦しい戦いぶりが多くなってきているようですが、ここまで振り返ってみて、リーグ・七帝は初戦を落とし、そのままずるずると負けを重ねるパターンが多いように思います。これからは長丁場の試合に対する入り方の面で、いかに精神に程良い緊張を保ちつつも落ち着いて臨むかといったところも再び考えていこうと思います。現役一同、三部目指して一から出発しようと思っておりますので、どうかＯＢ・ＯＧの方々のご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申しあげます。

体育館あれこれ（番外２）

多摩センターに、丸紅の体育館（正式には研修センター付属アリーナ）がある。筆者は商社リーグ、商社合同練習でプレイしているが、なかなかやりやすい体育館である。バブル期に完成したので、ロビーの冷暖房完備は当然として、体育館そのものの空調も出来る、年間を通して快適なバドミントンが楽しめる。計画時に、同社バドミントン同好会の代表(早稲田の主将・エースであった人)が、全社体育同好会の会長で発言力があり、設計に際してかなり注文を付けたとの事である。照明は気になるといえば気になるが、照明に関する限り百点は難しいと思う。我部OBにも建築分野に何人か居られるが、バドミントン用体育館の、最適標準設計をして売り込んではどうだろうか？

２．京都大学との交流

京大戦：年おくれの修学旅行

昭和26年入学　　細矢　富雄

トンネルを抜けて下り勾配にかゝると、車窓には、山々に囲まれた古びた街が、近づいて来た。あちこちに、大きな瓦屋根が目立って見える。その中でも一際高い五重の塔を見上げながら、列車は京都駅に着いた。1951年７月半ばのある朝である。

私達東大バドミントン部の一行は、これから始まる京都大学との定期戦、いわゆる「京大戦」に出場すべく、一寸した気負いと、はるばる京都まで来たという感慨も少し込めて、ホームに降り立ったのだが、まっ先にしたことは、水道の蛇口で煤だらけの顔を洗うことだった。

当時、東京から京都まで行くというのは、結構大変だった。往復が夜行列車になるのは仕方ないとして、急行料金250円を節約するため選んだ鈍行では、約14時間かかった。又、途中からはSLが引っ張ったのだが、冷房など無かったから、窓は開けっぱなしで、一晩中煤煙を浴びていたわけだ。それと、まだ食料難が続いていて、「外食券」がないと、食堂でも駅弁でも、米の飯にはありつけなかったのだ。

駅前から市電に乗り、京大に着くと、旧制三高時代から使われている吉田寮に、宿舎として案内された。

東大と京大のスポーツ定期対抗戦は、1951年に始まり、現在まで続いている。先輩の話では、旧制時代の一高・三高戦のような姿を新制大学同士で復活させたいという気運が、駒場の学友会を中心に高まり、この年に実現したとのことだ。当初、種目毎に開催地を分け、あとは交互に往き来する形でスタートしたが、翌年になって、全種目の開催地を統一し、あらためて京都からということになり、バドミントンは、京都開催が２年続いた。これで、私は在学中３回、京都に行く機会を得た。

学生の貧乏旅行とはいえ、３度もくり返せば、結構色々体験が出来るものだ。とりわけ、戦中・戦後に育って、遠足も修学旅行も、まったく経験しなかった私にとっては、出会うものすべてが新鮮で感動的であり、時間のある限り仲間と歩きまわり、まだたっぷり残っていた、古都の風情を味わった。

堀川沿いの狭い道で見かけた、昔からの姿を残す町屋の格子戸や、蔵造りの続く家並みの前を、小さな電車がゴトゴト走る風景など、今でも目に焼付いている。又、祇園祭りの宵山（山鉾巡行の前夜祭）で、山車の上から聞こえるコンチキ、コンチキという、囃子の音に情感をかき立てられ、人出の中に見かけた浴衣姿の女性の清楚さに、京の夏の暑さを一とき忘れさせられたこと、そして、戦前のものらしい、モノクローム写真に着色した祇園祭りの絵ハガキが、結構みやげになったことなど、次々に思い

出される。ただ、50年も経ってしまうと、時間的な前後関係や、誰と一緒だったか、などということは、かなりあやしくなっているし、肝心な試合のこととなると、断片的にしか覚えていないのは、一寸残念だ。

私達に用意された練習場は、木造の武道場で、屋根トラスの梁が低く、ハイクリアーは殆どぶつかるので、止むなくプッシュの練習をした。

いよいよ第１回京大戦。試合場は、近衛中学の講堂。天井が低く、当るとノーカウント、という変則ルールだった。練習場の梁で悩むことはなかったのだ。

当時の東大チームは、創立２年目で、２年生と１年生だけ、しかも、ラケットを初めて握ってから３ヶ月という、私のような初心者が何人も居たのだから、元気だけは良くても、実力は自分でも未知数だった。果して、４対11の大敗。聞けば、先方には、全日本クラスの猛者が居てチームを鍛えているというのだから、かなうわけがなかった。

しかし、次の年は状況が違った。コーチを招いて、基礎から鍛え直し、関東大学リーグへの参加も実現して、実戦の経験もたっぷり積んで、力がついて来たことを、自分達でも実感していた。京都に出発する前に、当時としては最軽量クラスの、32匁（120グラム）のラケットも手に入り、夜行列車にも、京都の街にも、もう慣れている。今年こそは勝つぞ、と意気込んで臨んだ第２戦だったが、又もや、５対10で敗退。総体的には、そうひけは取らないと思えただけに、意外な大差は口惜しかった。私自身については、第１戦で、三川君と組んで負けたダブルスと、どの試合か忘れたが、シングルスで、フルセットの死闘となり、結局は負けたのだが、試合中、苦しさを通り越して、ブルブル寒気がして来たことを、生々しく覚えている。

東大の勝ちは、東京での第３戦でようやく実現し、地の利と、組合せにめぐまれて、11対４の大勝だった。その後は、今年迄、通算東大の29勝21敗、この間に、東大の10連勝の記録も残っている。

リーグ戦と京大戦は、私が現役だった頃の、部の２大イベントだったが、自分の勝ち負けより、チームの成績が気になり、緊迫感が漂っていたリーグ戦に比べ、京大戦については、少し違った期待感を持って迎えたように思う。それは、単複合計15という、試合数から来る気楽さもあろうし、試合後の交歓会を楽しみにしている者もいた。私にとっては、何回も京都に行けるということは、とうとう行けなかった修学旅行を、思いがけずとり返したような気分だった。

交歓会で、京大生側の元気に押され気味だったのを、「ケトバシ」でようやく盛り返したことや、琵琶湖でのヨット帆走に招待された時の楽しさなど、仲間内での懐しい話題だ。

私は、東大で「建築」を学び、社会に出て、昨年までの44年間、企業人としての人生を過したが、バドミントンとのつき合いは、この間全部をカバーして、まだ余る。もし、これがなかったら、このように沢山の仲間も、スポーツに本格的に取組んだという実感も得られなかったろうし、京都や仙台などへの遠征や、リーグ戦や合宿などの、様々な思い出も残らなかったと思うと、駒場のアーケードでのバドミントン部との出会いが、如何に貴重なものであったか、この頃になって、あらためて感慨を覚えている。



1962年京大戦（京都学芸大）

森(健)

篠田　　森(邦)　　金丸　　石川　　岡野

原　　秋山　　司馬　　細矢　　橋本

京都大学との交流

昭和33年入学　　金丸　清昭

入学以来、米国駐在の４年と、仕事の都合で欠席した１回を除けば、常に参加してきた私にとって、京大戦は本当に生活の一部、年中行事であり、京大北脇先輩との対戦が待ち遠しい。最近は試合後のＯＢゴルフ対抗戦も盛んになり、京大荒木君・東大豊田君等昭和42年入学組を中心に、両校の関係がより強くなっているのも嬉しいことである。又49年入学の京大ＯＢ・ＯＧの方々が東大の他の行事にも参加してくれて、両校の関係に彩りを添えている。

さて昭和30年代はＯＢの数も少なく又経済的な事情もあって、遠征側の人数が少なかったこともあり、試合後の現役中心のレセプションが交流の殆どであった様に思う。先輩の挨拶と講評、両校全選手のスピーチ、皆が肩を組んでの「嗚呼玉杯...」「紅萌ゆる...」「我は湖の子...」等に続いてエール交換、これで充分に友好を深める事が出来た様で、余り二次会・三次会の記憶は無い。記憶に残る場所は京都では「楽友会館」、東京では本郷の「更新館」である。何れにせよ七帝戦では、外の５校より関係が深い分いつも応援し合う仲であった。

昭和33年（京都工繊大）　名古屋での七帝戦を戦ったその足で京都入り、吉田分校の天井の低い体育館で練習をして、試合に臨んだ。宿泊は農学部横のグランドの一隅にある合宿所。この年は東大のエースの古沢さんが相手１年生の中谷君に負ける大番狂わせがあったが、８－７で勝ち。レセプションの後、京大勢の案内で市内を見物したり、麻雀をしたり、また翌日は嵐山等を案内してもらった者も何人か居た。

昭和34年（駒場第一体育館）　12－３で圧勝。練習不足もあって、又も古沢さんが京大新人の後藤君に１セット目を落とす苦戦、司馬監督曰く、「例えあと全部勝っても、主将が相手の１年生に負ければ東大の負けだ」と。圧勝の驕りという訳でなく、当時一日制だったのでオープン戦が少なく、こんな考えも出たと思うが、更新館でのレセプションの席上、両校ランク順にオーダーを組めば試合が面白くなるのではと話していたら、司馬さんの一喝を食ってしまった。「たとえ自分がNO. 10であろうと相手の強豪に当たったら、全力を尽くして母校の勝利の為に戦う所に対抗戦の意義があり、古沢・後藤戦はまさに好例である」と。何れにせよ当時の先輩達は、東大・京大関係なしで、激励したりお説教したりが普通で、昭和38、39年頃京大の工藤先輩の勤務先である日立亀有工場で、ＯＢ懇親戦をした時も、工藤さんからかなり厳しい批評を受けた様に思う。この頃は京大の近藤君が、色々面倒を見てくれた。

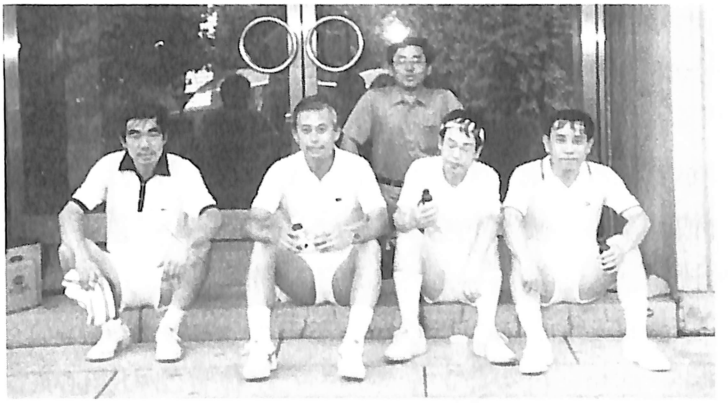
昭和35年（京都工繊大）　新たな試みとして、初日にオープン戦（二軍戦）を行っ

たが、公式戦の緊張感が無くなると不評でこの年限りとなった。複で５－０としたが、結局11－４に終わった。確か祇園祭の時期で、宵山を案内して貰った記憶がある。帰途岐阜で同期の篠田君の実家に泊めて貰い、長良川で泳いだり、鵜飼いを見物した懐かしい思い出がある。

昭和36年（文京三中）　ラインが引いてない為、紙テープを貼った。 10－５で快勝、平松君の強さが目立ち足達先輩曰く「東大離れした選手」。この年のレセプションは本郷の白十字だったので、あまり騒げなかった筈だが、殆ど記憶に無い。

昭和40年迄10連勝したが、41年は横山他エース級を欠いたこともあって、遂に７－８で敗れた。10連勝の勢いもあって、レセプションのたびに私以下東大ＯＢは、京大はもっと頑張れ等と言い続けていたので、この時京大の松島大先輩が「嬉しい、良くやった、大いに飲もう、京大全員ついて来い」と言われたのが、言外に「東大よ、思いあがるな」とも聞こえ、口惜しく又幾分の反省を抱いて聞いていた。自分が強い訳でもないのに、現役の勝ちに酔って偉そうな事を言ってしまったと、汗顔の至りである。他にも色々なお付合いをして居るが、京都の荒木君宅で徹夜麻雀をしたのも懐かしい。荒木君は顔が広く、日曜日の夜中にもかかわらず、三次会位迄やってくれるので、東京開催時はお返しに悩んでしまうのである。

尚、平成10年10月の京大50周年には、駒羽会から大挙京都に押しかけ、８日の前前夜祭、９日の瀬田GCでのゴルフ、その晩の飲み会、更に当日と３日間に亘ってお世話になったのも記憶に新しい所である。



1988. 7. 16　京大戦（京大体育館）

盛

荒木(京大)　　平松　　金丸　　鈴木

京大戦の思い出

昭和35年入学　　三浦　登

学生時代以来、何度となく京大の方々を東京に迎え、あるいは京都に出向いて懐かしい京大の選手、ＯＢの方々と数々の試合を行ったことは、バドミントン部のＯＢすべてにとって、真夏の京都の体育館の異常なまでの蒸し暑さや、時期を同じくして行われる祇園祭りなどとともに忘れられない思い出であろう。

昭和35年頃には新幹線はもちろんなく、特急つばめ号でほぼ一日かかって京都に着くと宿舎は京大のグラウンドに面した合宿所であった。グラウンド側に土間がある広い座敷に泊まったことが鮮明に思い出される。当時の京大の体育館は元は三高の体操場であったということであるが、非常に天井が低く、ハイクリアを打つとすぐに天井にぶつかってしまう。京都に着いてから試合までの練習はこの体育館で行ったが、公式戦は昭和35年には近くの京都工芸繊維大学、昭和37年には京都学芸大学、昭和39年には平安女学院の体育館で行われた。一方、東大駒場の第一体育館もかなり古く、雨漏りがしたり、床板が一部破損しているような体育館であったが、天井だけはずっと高く、バドミントンには適していた。しかしバドミントンコート３面がぎりぎりとれるだけの広さしかなかったので、京大戦には面積が足りなかった。東京での試合は、昭和32年、34年には駒場第一体育館で行われたが、昭和40年以降、検見川合宿所の体育館で行うようになるまでは、文京三中（昭和36年）、高円寺体育館（昭和38年）と外に借りた体育館で行う他はなかった。現在の京大体育館（昭和49年以降）や駒場の第４体育館（現在の第２体育館、昭和46年以降）のような立派な体育館で定期戦が行えるようになったのは、両校の体育施設が充実してからのことである。

昭和35年の東大は春のリーグ戦で２部に昇格したばかりの非常に勢いのある時で、石川主将を中心とした強力なメンバーであった。結局、筆者が在籍した昭和35年―38年の４年間は東大が京大を圧倒していた時代であったように思う。その前後の何年間かは七帝戦での対戦も含めて東大が勝っていた。その後の両校定期戦の歴史をみると、東大が強かった時代、京大が強かった時代が周期的に訪れることは両校が真によいライバルであることを物語っている。当時は現在のような女子部はなく、試合参加者はすべて男子であった。応援には少数の女性がいたが体育館の雰囲気には今のような華やかさはなかった。

当時の京大は、昭和34年入学の植村さん、井村さんを中心として、非常にまとまりのあるチームであった。植村さんの学年にはこの他に後藤さん、野呂さん、深尾さん、吉岡さんがおられた。その下の学年には大場さん、さらにその一年下には荒木さん、

近藤さん、石橋さん、川辺さん、森本さんなど、またその一年下の昭和37年入学組には黒田さん、谷さん、長尾さん、谷内田さん、山上さんなど、多士済々の方々がおられた。植村さん、井村さんは筆者よりも一年上の学年であったが、公式戦、オープン戦、ＯＢ戦を通してシングルス、ダブルスとも幾度となく対戦した。試合の思い出もつきないが、素晴らしい人柄に魅了され、今でも京大戦に参加するたびにお会いするのが非常に楽しみである。現在京大のバドミントン部長をされている植村さんは筋肉質で手首の効いたしなやかなフォームから繰り出すきれいなショットが特徴であった。特にバックバンドからの鋭いショットはたいへん印象的であった。先日、久しぶりに対戦させていただいたが、相変わらずの華麗なフォームに感銘を受けた。井村さんは大柄で柔らかく懐が深い感じのバドミントンで、体力もあり、試合ではいつも熱戦をされていたように記憶している。昭和35年にＯＢになられた北脇さんはその後も定期戦には必ずといってよいほど出場され、実にうまい試合運びで現役を圧倒されていた。最近でも相変わらずのプレーぶりは驚くばかりである。37年組の長尾さんはサウスポーで１年のときから試合に出ておられたが、重松と２年続けてあたり、どちらも試合の行方を左右する大事なところでフルセットの大熱戦となったことは未だに記憶に残っている。

試合が終わるとレセプション、その後京都の町に繰り出しての飲み会といった慣習は今も昔も変わらない。また飲んだ後は、先斗町にある小さなうどん屋に行くのが常であった。筆者が１年生であった昭和35年については、非常に大勢の京大、東大ＯＢが来られ、祇園の八坂会館でビールをごちそうになったことなど今でもよく覚えている。

当時の試合を思い起こして、今の京大戦に照らし合わせてみると、両校とも当時の方がかなり勝負にこだわっていたような気がする。関東大学リーグ戦などは単６、複３のゲームで試合に出られるのはレギュラー６人程度であるが、京大戦の場合は単10、複５と試合数が多く、準レギュラークラスにも十分出番がある。そこで準レギュラーを含め全員が京大戦に出て勝ちたいという気持ちで頑張り、試合前の気分は大いに盛り上がったように思う。試合後のパーティーなどでも、両校間で試合の感想や技術論などを語り合い、時には戦績を誇示しあったりして、たがいに大事な試合相手という意識が強かった。最近の京大戦をみると、応援の仕方などもさることながら、試合そのものにもお祭り気分が若干強くなってきており、随分当時の雰囲気とは違っているような気がする。

京大戦の思い出

昭和39年入学　　神田　道男

最初の京大戦（オープン戦であったが）に参加したのは昭和39年、いわゆる「東京オリンピック」の年であった。それから35年、すっかり御無沙汰して、記憶も十分でないが、当時の雰囲気を伝えられればと筆をとった次第である。京大戦には、留年したこともあって５回出ているが、オープン戦２回、対抗戦３回で戦績は、シングル、ダブル合わせて１勝６敗と誇れるものではない。この５年間の全体的傾向は、39、40、41年は、東大が、42、43年は京大が強かった。（41年は、東大の一部の選手が出場出来なくて、京大の勝利になっているがフルメンバーで戦った七帝戦では、東大が優勝している。）特に43年は、京大の成長著しく、我が方は、エース大門の病気欠場や、大学紛争による部員の減少等もあって大敗し、今思うと、彼我の勢力の逆転の時期にあたっていた。自分の試合の記憶は定かでないが、１年生の時は、京都の暑さ、薄暗かった体育館（女学校の体育館であったことも驚きであったが）や、初めての対外試合で、思うようにいかなかったことを思い出す。京大では１年生を一回生と呼ぶのを知ったのも京大戦が初めてであった。２年目は東大の主催であったが、前年のオリンピックの練習場として整備された千葉の検見川の緑のグランドや前後に四面とれる体育館が思いだされる。ここでは４年目の京大戦も行われた。２年、３年と対抗戦で出場したが、４年目のこの年は主務だったこともあって、オープン戦で出場したので、さすがに負けてはいかんと戦い、結局これが私の京大戦唯一の勝利となった。

振り返ると、京大戦そのものより、試合前の合宿や、試合後の旅行のほうが私にとっての京大戦の思い出であるといえるかもしれない。頑張れば京都に連れていくと言われて参加した１年生の駒場の合宿は、逃亡者がいたくらいだから本当にきつかった。早朝のランニングや、体育館での縄跳びやウサギ跳び、休憩のときの水道の水のうまかったこと。京大の中山の吉田山近くの下宿に泊めてもらったのは３年の時か、５回目の時か、彼も我も同じ年から同じように５回現役で出ている。戦績は随分と違っているが。１年のときは、途中でやめた野崎の岡山の家へ寄り、小豆島、高松、倉敷を回って帰ったし、３年の時は、大阪で行われた七帝戦を応援し、５回目は、比叡山を巡って帰った。京大戦が祇園祭りに合わせてあり、ちょうどこの時期が、梅雨明けになる。東京を出る時まだ雨だった空が、京都では、夏空に変わっていることに気づいたのも京大戦の思い出である。

東大／京大42年入学組の交流

昭和42年入学　　小林　健

現在でも同じだと思うが、京大戦は常に検見川での合宿と併せての思い出となる。更にその後にある七大戦を含め、長い夏の部活動の丁度中心に位置していて、酷暑と湿気と汗と熱気と、レセプションでの信じられぬ程甘いビールの味……

勝てば益々甘露で舌滑らかとなり、敗れて京大の連中に散々威張られても、やはり美味かったあのビールは、現役時代しか味わえぬものだ。

さて、我々42年入学組は両校共多士済々であり、互いの纏まりも良く、今でも年一度の京大戦のみならず、何か機会を捉えては集まり旧交を暖めているが、最近は輪が随分広がって、東大組では金丸さん始め超ＯＢも頻繁に登場されている。

両校に亘りこの年代はＯＢ会でもシニアとジュニアのＯＢを繋ぐ核の役割を担っており、京大側は荒木君（主将)、43年の成瀬君（主務）を中心に、当方は生涯現役を目指す豊田君が実に肌理細かく連絡を取り合い、自然な交流が続いている。

当時に時計を戻せば、両校紛争の真っ只中で、授業も無く、有り余る時間を東大組は６月の末頃から旅費稼ぎに、皆で中元配送、製缶工場、ビール工場の清掃等の集団バイトに出向き、７月上～中旬に夏合宿を経て京大戦を迎えるのが毎夏のパターンであった。

京大戦は公式戦が５複10単であり、合宿を通じて10指に入る事が、特に大学からバドを始めた上級生にとっては大きな目標であり、その意味では正に両校の総力戦である。

互いに相手校の中にライバルを見つけ、迎え討ち、討たれるの４年間であった。

着実に地道な努力で遂にNo.1になった荒木主将、気は優しいが勝負どころで貴重なポイントを上げる梅本君、スタミナ抜群でクロスカントリーのみならず、此方がバテれば必ず負ける南手君、新入生で華々しいデビューを飾った美しいサウスポーの西念君、４年間のうち３年連続公式戦で私と当たり、「もうお前の顔見とうないわ……」と、お褒めの言葉を頂いた武部君（彼は京都での試合の翌日、私を彼の狭い下宿に招いてくれ、天井から吊るした籠の中に入れたコーヒー豆の香り漂う中、それを挽いて御馳走してくれたインテリでもあるのです。）等々、思い出に残る仲間の顔、プレイの数々が浮かんでくる。

又、我々入学時に京都の主将をされていた中山さんには、本当に御世話になりました。（敬礼）

私も荒木君も中山さんを目標に練習に励んだし、新入生の時の七大戦（仙台）でコ

テンに負かされた事は今でも忘れません。

斯様な訳で、今でも年に一度の京大戦に我々は相集い、一献が三献十献となり、両校仲間の其の後のバド、ゴルフ、結婚（？）、子供歴等々披露の場となり、互いの自慢話をぶつけ合い、不幸があれば励まし合い、喧騒のうちに夜が更けて行くのであります。



1970年京大戦（京都工織大体育館）

岡本　岩崎　荒木（京大）　小林　盛
飯倉　山本（京大）　　（京大）　豊田

「めばえ」

昭和46年入学　　関　和夫

最近、「思い出の青春フォーク」とか「グループサウンズ特集」といったTV番組をビデオで見る機会がありました。50周年記念の原稿、特に京都大学との交流と何の関わりがあるのかという疑問を持たれるかと思いますが、そのキーワードは麻丘めぐみという当時のアイドル歌手、そして確か「めばえ」という彼女のデビュー曲なのです。

昭和47年、その年の七帝戦と京大戦は暑い暑い夏の京都でした。たまたま変則的なスケジュールとなった年で、７月の10日頃に七帝戦が行われ、20日過ぎに京都大学との定期戦が催されたと記憶しています。例年の通り、検見川で夏合宿が行われたのですが、日程の関係で七帝戦に出る選手は先に京都に向かい、残った人達は夏合宿を終えて京都に合流するということになりました。私は幸か不幸か先発隊の中に入り、七帝戦と京大戦出場の為、ほぼ２週間近く京都に滞在することになりました。その時京大の皆さんの御厚意で農学部の方にあったと記憶していますが「スポーツ会館」と呼ばれる、立派な？合宿所に滞在する機会があったのです。

ちょうど七帝戦と京大戦の狭間に入り、東京からの後発隊が到着するまでの数日間は百万遍の体育館で京大の皆さんと一緒に練習したり、合間を見て京都見物をすることも出来ました。祇園祭の宵山に、京大の同期のＳ君が、当時定着しつつあった京大女子部員の１年生を誘ったなどという話題もあったような気もします。七帝戦のレセプションの後、東大レギュラーメンバーの一人が帰って来ず、鴨川の河原で酔いつぶれて？一晩を過ごしたこともありました。

当時既にＯＢになられていた京大の中山さんがいつも練習に参加され、南手さんと御一緒に蚊取り線香を持ってスポーツ会館に現れたり、京大ＯＢ一同からのスイカの差し入れを頂いたことも懐かしい思い出です。

スポーツ会館には泊まる所の横に、簡単な食事の出来る食堂のようなものがあり、当時で見ても粗末と言えるテーブルとイスが並べてあったのですが、そこに何と１台のカラーTVがありました。そして、そこで流れていたのがデビュー間もない麻丘めぐみのミニスカート姿、そして歌は「めばえ」。その瞬間まで麻丘めぐみという歌手の存在も「めばえ」という歌も全く知らなかったのですが、その時一緒にいた東大の誰かが「いいだろう？」と言い、他の誰かも「いいね。」と言いました。麻丘めぐみさんには悪いのですが、私はその後も特にファンというほどのこともなく、後のヒット曲「わたしの彼は左利き」という歌ぐらいしか知らないのですが、あの夏の京大スポーツ会館のTV画面は目に焼き付いたまま今日に至っています。

ちょうど昭和47年は、昭和44年に東大入試が中止された影響で４年生の欠けた苦しい時代でしたが、部員が検見川と京都に二手に分かれて合宿をし、それぞれがバドミントン部への参加意識を高め、団結を強める一つの切っ掛けとなったのではないでしょうか。そしてそれが翌年の関東大学リーグ戦２部復帰に繋がる貴重な要素だったと思っています。

以来時が流れて28年、同期の酒井くん、沢井くん、十亀くんや１年下の奥村くんを始め、京大の皆さんとも本当に長い付き合いになりました。東大同期の土居くんなどは東大を卒業したあと京大の大学院に行き、京大バドミントン部に頻繁に出入りした為、京大の現役の人の中には彼を京大ＯＢと勘違いしていた人もいたようです。

そして、今、New Yorkの自宅でこの原稿を書いている私の横に、その土居くんがたまたま仕事の関係で来て、我が家のソファに座って居るのも何かの縁ではないかと思います。30年近く前の昔話をしながら、今日は酒を酌み交わし楽しい１日を過ごすことができたことを、ここで書いておくと、きっと又10年後、20年後の記念誌を作るときの良い思い出になると思い、敢えて書かせて貰いました。

（2000年１月22日（土）記）

高松でのインカレ

今年１月21日駒羽会のゴルフ（湘南CC）の折秋山さんが、当時の地元紙なら東大の事を取り上げているのではないかと言い出して、高松出身の秀才（?）であった小野君が調べる事になった。「当社の高松支店にお願いして、図書館でマイクロフィルムから、コピーをとって来て貰いました」と、昭和32年11月22・23両日の四国新聞のコピーが送られてきた。

残念乍ら東大の見出しはなく、１回戦で熊本商大に０－５で敗れた記録のみが載っている。その熊本商大は２回戦でこの大会５連覇の立大に０－５で敗れている。流石に地元香川大は扱いが詳しく、３回戦（２回戦から出場、不戦勝）での対慶大１－３の敗戦について、楽勝予想の慶大に一矢を酬いた経緯が２段に亘って書かれている。その慶大は決勝で立大に０－３の敗北。立大の新鋭であった永井選手が、単複に活躍している。記事の横に大相撲九州場所13日目の星取表が載っている。怪我から復活の平幕玉乃海が全勝、これを大関若乃花が１敗で追う展開である。確か玉乃海が「金色まわし」で全勝を飾った筈である。この星取表に並んだ４人の横綱、栃錦・吉葉山・鏡里・千代山も、今は皆亡くなっている。

京大戦－過去・現在・未来

昭和49年入学　　小鷹　長

過去－京大は強かった。

私が在籍した昭和49年から52年の４年間、部としての京大戦成績は記録によれば４敗、個別に見ても15勝45敗と大きく負け越している。私自身の戦績もよくない。０勝４敗である。

京大の同期には、前川・森下・加納がいた。彼らは強かった。（どうして私の同期に強いのが集まっているのだろうか？不思議だ。）彼らが加わる前の昭和48年の京大戦が、東大の10勝５敗だから、彼らが加わってからの京大がいかに強かったかわかる。これに対抗できるのは同期では三角しかいなかった。それ以外の同期は私も含めて相手にされなかった。一つ上の野中・村田氏らとよくやっていた。

京大は強かった。そんな思い出しか残っていない。あとは、暑い体育館、グランドホテルでの雑魚寝、レセプションの賑わいなどである。

現在－自分ではいまだにバドミントンをやっている。

週１～２回はバドミントンの練習をかかさない。またパワーアップのため（正確に言うとパワーダウンを防ぐため）にと最近では１㎞水泳＋プール往復５㎞走も週１で始めた。続けている理由の一つに、いつかは現役当時には雲の上だった人々（野中さんや前川・森下君など）をやっつけられるかもしれないと言う意地汚い根性がある。ところがそうは問屋がおろさない。やっつけたいと思った相手のほとんどはバドミントンをまったくやらなくなり、コートの上に引きずり出せなくなってしまった。あるいは、たまに今でも続けている人がいても、現役の時よりたくさんやっていたりしてこちらを上回って更にパワーアップしているのである。なかなか勝てる相手を見つけられない。

そんな中で、３年前の東大ダブルス選手権で松田智氏・北條久美子さんに出会った。自己紹介の時、京大49年入学の同期と言うではないか。現役当時はお互いによく覚えていない相手であったが、話してみると皆バドミントンの虫だと言うことがわかった。それ以来、毎年、ダブルス選手権、フェスティバルなどでの対戦を楽しみにする相手となっている。松田氏の紹介で、森下氏とも手合わせをする機会があった。100%万全の体調ではないとのことであったが、やってみると思い出した。サービスプッシュをいつも切り替えされてつぶされていたのだ。そうだった。悔しいのも思い出した。でも考えてみると、現役時代は京大戦で2、3回対戦しただけだった。今なら、いくらで

もできる。今年負けても来年また挑戦できる。その間トレーニングしようと言う気になる。またバドミントンの虫が蠢きはじめた。現役のころとは違うバドミントン生活がここにはある。

未来ー私のバドミントン生活は、まだ終わっていない。

おそらく、京大の同期にはもう負けなくなっているだろう。

赤門運動会の事

名前から想像できるように、東大運動部OBの連合会という位置付けにある。平成８年に結成され、参加45部前後で、目的は運動部OB相互の懇親と現役部員への支援。UCカードとタイアップした赤門カードを発行し、OBの利用金額に比例して、その出身部に手数料の一部が奨学寄付金として配分される仕組もある。会合は年２回、アメリカンフットボール部の清水監督(S47卒)の戦力アップ苦心談や、ユニークな発想でスプリントトレーニングマシンを開発された小林寛道教授の講演もあった。最近では野球部三角監督(S58卒)の、東大初の女子選手が、立教戦で一人に投げ、２－３から四球で終り何となくほっとした話、蓮見総長がどうしても彼女の球を受けたいと言われて、万一総長に怪我でもあったらと気を揉んだ話等中々面白かった。

各部代表である評議員は金丸が務めている。総会には３～４名参加出来るので今後は中堅・若手の方々にも出席して頂きたいと思う。

（金丸清昭）

京大バドミントン部との交流

昭和51年入学　　佐藤　彰彦

昨年末に、卒部20周年を記念して同期会をした。若干頭が寂しくなった人、栄養満点の人がいたが、学生時代の雰囲気を楽しんだ。大阪の会社に就職して20年間、相変わらずバドミントンをやっている。その為、東大より、地元の京大、阪大の出身者とバドミントンする機会が多い。10年くらい前に京大ウイルス研には、１年間勉強（遊び）に行っていたので、たまに一緒に練習させてもらった。山本監督と組んで、現役の相手をしたり、１年生と一緒に最後尾でへとへとになりながら、鴨川沿いに北山まで走ったりした。その為、今でも京大ＯＢのような感覚でいる。

さて、我々の同期は、未経験者が異常に多く、１年の頃は20人以上もおり、特に和気あいあいとした学年であった。おもしろいことに京大の同期も同様で、未経験者が30人以上もおり、京大戦は非常に活気があった。３、４年になっても、東大、京大ともかなりの部員が残り、京大戦、七帝戦にも皆で参加し、打ち上げの飲み会ではよく騒いだ。京大は同期が20人以上もいて、名前が覚えきれなかった。

京大戦では、１年の時（S51）に京大の強さに圧倒された。七帝戦では、２年の時（S52、阪大主催）が特に印象深かった。京大は、前川、森下、加納、御宿さんの４強がいて、その年の関西大学リーグ１部３位の実績で優勝をほぼ手中にしていた。京大の同期が、京都総合で優勝した森下さんらをよく自慢していたのを覚えている。ところが最終日、その京大が１敗して結局優勝できなかった。

３年の京大戦（S53)、飲み会で聞いた話では、京大御宿さんが対抗戦、レギュラー戦でシングルスで東大に１点もやらないと宣言したらしい。その通りに、上田さん、上野が１点も取れなかった。その時の打ち上げも京大ペースで圧倒されていた。翌年（S54)、主力が次々卒業し、関西学生でも２部に落ち、低迷したはずの京大だったが、何故か七帝戦（S54、京大主催）で優勝した。前年の七帝戦（九大主催）では東大と最下位を争っていたし、主力メンバーはあまり変わってない。実際、４年の時の京大戦、七帝戦の試合は競っており、どちらが勝ってもおかしくなかった。それなのに、京大は優勝、東大は３年連続最下位である。優勝に沸く京大の選手・応援者と一緒に騒いだものの、さすがに悔しい思いをした。結局、在学中は京大に勝てず、２年の時から参加した七帝戦は、全て７位であった。少なくとも、４年の京大戦は、僕が勝てば東大の勝利で、勝てる相手だっただけにかなり悔いが残った。この勝敗の明暗を分ける違いについては、現役時代から実践してきた村田元監督（S48）の現役時代、監督時代の部報を参考にされたし。

最近の京大ＯＢ戦で、往年のパートナーである上野と組んで、京大の森下、松田組（S49）と対戦し、久しぶりにおもしろい試合をした。やはり、昔の仲間とバドするのが楽しい。残念ながら、京大も東大も卒業後もバドやっている人が非常に少ない。地元の京大出身者でさえ、森下さん（S49)、清水夫妻（S51)、津田くん（S51)、中島くん、安藤くん（H2)、大畑さん（H2)、理事をしている大阪実業団では、小倉くん（S54）しか知らない。全日本実業団に至っては、東大、京大は皆無に近い。何とも寂しい限りである。はっきり言って、バドは30過ぎてからが特におもしろい。スピードよりテクニックが優勢となる。最近は40代のラリーを続けまくる体力優勢のバドも楽しんでいる。全日本シニアでは、関東学生時代の知り合いとも会える。是非、30過ぎても遅くないので、バドを再開し続けていってもらいたい。

一昨年、京大のバドミントン部創部50周年記念祝賀会に参加させて頂き、京大澁谷名誉副会長の挨拶を聞いて、当時の京大バドミントン部の活躍には驚いた。昭和26年からは東大定期戦を開始して今に至っており、改めて東大、京大バドミントン部の歴史を感じている。今後は、現役をできるだけ続けるとともに、今まで楽しませてもらった分を少しでもバドの発展に貢献したいと思っている。

今後とも京大メンバーと長いおつき合いを…

昭和58年入学　　森　郁雄

私の京大戦の印象としては、「楽しかった・うれしかった思い出」というよりは、「辛かった思い出」というイメージが強いような気がします。

なぜかな？と思ったところ、まず第一に◇夏合宿と七帝戦の間に開催されるというハードなスケジュールであったこと、第二に◇梅雨明けの非常に暑い時期であったこと（特に京都の梅雨明けの暑さは尋常ではなかった）、第三に◇（個人的なことではあるが）接戦で負けたことがあるような気がすること（これが勝っていればもう少し印象が良いかもしれない）等がその原因ではないでしょうか？

試合で一番印象深いこととしては、やはりダブルスのＤ１勝負です。京大戦は確か５W10Ｓだったと思うのですが、そのオーダーは作戦を練ってお互いがランダムにだすというルールでしたが、Ｄ１だけなぜか両大学のNo 1と思われるダブルスをだして、全員が見ている中で（シーンとした一種独特な雰囲気の中で）やるということになっていました。（今でもそうなのでしょうか？）私は、光栄にも？２年から４年までの３年間Ｄ１にださせてもらったのですが、記録をみると２回ほど大接戦（フルセット）で負けたようです（記録を見るまでは全く思い出せなかったのですが、この結果が上述したようなイメージにつながっているような気がします)。ただ、勝負の結果はさておき、その雰囲気だけは私のような昔の記憶が乏しい人間でさえ、今でも懐かしく感じられる数少ないことのうちの一つになっています。

昨年の年末に、私が７年ぶりに福岡から東京に帰ってきた（自分の意識の中では「上京してきた」と思うほど、福岡に慣れ親しんでしまっていましたが）ということもあって、誰かの結婚式以外では本当に久しぶりに同期で集まって酒を飲んだ際に、私が50周年記念誌で「京都大学との交流」について書くことになっていることを聞かされました。ところが、私は昔のことをあまり覚えない性質を持ちあわせているらしく、例に漏れず「殆ど記憶にない」ということを打ち明けたところ、同期の高橋君・岩松君等が気遣ってくれて、先日、京大の同期のメンバーとこれまた久しぶりに集まって飲む機会（卒業以来はじめて京大の同期と集まって飲んだような気がする）をセットしてもらい、昔話や今のお互いの仕事・家族の話等で盛り上がりました。

その際に、京大のメンバーからでた話をいくつかあげると、

・森は無愛想でとっつきにくい感じであった（試合中・試合外ともに)。

（本人としてはそんなことはなかったと思うのだが、負けたこともあって悔しくて不機嫌になっていたのかな？と反省しました。）

・（Ｄ１勝負で勝った京大の宮川君曰く）最後のシャトルがどのように落ちて勝負がついたかをいまだに頭の中で思い出せる（信じられない）。
・京大のだれ某とだれ某がつきあっていたけど、結局、だれ某とだれ某がくっついた（プライバシー保護のため、具体的な名前は伏せておきます。）
・京大のメンバーは今でも毎年、同期で旅行（家族と一緒に）に行ったり、マラソン大会にでたりしている。（羨ましい話）
・ゴルフで対抗戦をする話がまとまった（日程まで決めたのだが、都合が悪くなって延期。しかし必ず近いうちにセットするつもり）。

バドミントンに明け暮れた日々から15年近くが経ち、かつ、それ以来バドミントンから遠ざかっている私ではありますが、両大学の同年代のメンバーが久しぶりに集まろうと声をかけて、それ程遠慮もなく、楽しく飲めて話ができるというのは素晴らしい財産だと感じました。今後も定期的に交流を持って、これからが本当の意味での楽しい「京都大学との交流」になっていければ良いなーと思う次第です。



1980年京大戦後（北白川スポーツ会館）

感銘、あるいは刷り込み

昭和61年入学　　先田　力哉

私にとっての最初の京大戦は、数えてみれば、もう十四年も前になる。

新幹線で京都に降り立ったときのことを、今でも覚えている。冷房の効いた車内に慣れきっていたのもあってか、京都の夏は、暑かった。

駅には、当時の京大主将の峰さんが先頭に立って出迎えてくれていた。飛び交う関西弁。きびきびと誘導する部員たち。これが京大バドミントン部か。

翌日の五複十単。第一ダブルスの開始。京大側のものすごい声援！

都の国公立で敵なしだった森・原田組が、宮川・泉川組に完敗。ダブルスは、全体的に旗色が良くない。かくいう私も岩松さんとのペアで完敗。聞けば、第一ダブルスは、ここ数年連敗しているという。

理由は、はっきりしていた。ドライブ・前衛の差、だった。隙を突くドライブ、急所へのスマッシュ、前衛での早いカット、といった京大のダブルスに比べ、東大は、極端に言えば、スマッシュかレシーブの「シングル×２」といった戦い方で、スマッシュを打っても詰めが甘く、レシーブに回ればいつまでもレシーブしていた。

京大のようなダブルスがしたい！　東大にああいうダブルスを浸透させてやる！

私の京大贔屓は、どうやらこのときから始まっていたようだ。

その京大戦の後、七帝戦がたまたま京都だったので、それが始まるまでの一週間、そのままスポ館に宿泊させてもらった。素敵な「ごっつあんの日々」だった。寝苦しいのには参ったが。

その期間中に、東大一年生は、同学年の京大女子部員の部屋に招いてもらった。

東大のある女子部員は、身だしなみの「み」の字も知らない我々に言った。

「ちゃんとシャワー浴びていって下さいね。私も浴びますから。」

（そう言った彼女にぞっこんだったのは、京大のＳ村である。）

確か、かき氷とスイカをごちそうになった。

六年後、関西に就職した。バドミントンをするつもりもなく、お気楽にテニスでもしたい、と言っていたある日、社内電話がかかってきた。あの峰さんからである。（現在は会社の先輩でもある。）

「お前、テニスしたいとか言うてるそうやないか。あほなこと言わんと、来い。」

げ。よいお耳をお持ちで・・・。

こうして、また、バドミントンとつきあうことになった。

試合が近づいたある日、峰さんに連れられ、京大に練習に行った。あのあこがれのチームに、ＯＢになってから練習に参加することになるとは！

それ以降、決して近くはない京都に、何度も通った。百万遍、とまではいかないが、百遍近くは通っただろうか。新人の屋外芸もおもしろかったし、「ランニング・すきやき・ざぶとん・カラオケ」の追いコンフルコースも楽しかった。何度もやってくる図々しい他大学ＯＢに内心鬱陶しい思いをしていた部員もいたことと思うが、そんなことはおくびにも出さず、おかげで大変楽しく過ごさせてもらった。

東京近郊在住の京大ＯＢにも、是非とも駒場に足を運んでいただきたいものである。

学生連盟の黎明期(1)

関東学生リーグ

初期の戦績を求めて行き着いたのが慶応昭和24年卒業の六角努（ろっかくつとむ）先輩である。22年10月に慶・明・立の３校でスタートした関東学連の初代委員長（22・23年）を勤められた。その後法政が加わり４校、26年に６校となった由。まだ食料も乏しい時代で、今のような立派なプログラムはもとより、記録も当事者のものしかないとの事で、残念乍ら東大の記録はなさそうだった。それでもいくつか記事があって、27年春に２部ができ、東大が参加。メンバーは上野主将以下山下、司馬、清水、細矢、沼倉、岩崎（憲太郎）。場所は駒場で５月17日、東大3－6都立大の結果と、対戦予定として23日に日大、24日学芸大、31日成蹊大の記載がある。

秋は都立大が会場で、10月18日成蹊大、19日横国大、11月10日早大、12日都立大（勝敗は不明）となっている。これを見るとこの年は２部５校だったようである。27年秋には３部構成となり、この時の三枝委員長が28年春リーグを総括、２部の横国大・日大は実力紙一重との評をしている。また３部は青学大が優勝。その頃、第１回の学生選手権（神奈川体育館）開催に当たって、既に社会人になっていた六角さんが試合のポスターを貼っているのを、学生運動の全学連と混同した警官に見咎められ、警察から会社に問い合わせが来たが、氏のバドミントン熱を知る上司がいて事無きを得たというエピソードがあるそうだ。

京都大学との交流

平成２年入学　　平野　正浩

古いアルバムを久し振りに繰りながら、学生時代を懐古してみました。

出会いは平成２年７月、１年生時の京大戦。京都で行われ、東大は吉田寮に宿泊しておりましたが、夜中に中島君ら京大の同期が、我々東大の同期を、裏山に案内してくれました。大文字焼きの一文字が記される山で、京大のマラソンコースでもあるようです。山上から見下ろす古都の夜景と相俟って、素朴でいい連中だなあ、という第一印象でした。

平成３年７月、２年生時の京大戦は東京で行われ、この辺りから親交が徐々に深まったように思います。当時、京大の中島君は既にレギュラーとして試合で活躍していたと思いますが、レセプション２次会のカラオケでも、ビーズ「Bad Communication」で大暴れ、もとい、大活躍し、同期を始め居酒屋にいた人々を盛り上げてくれました。また、平成４年１月には、中島君、寺内君がジャパン・オープン（東京）観戦の帰りに東大の練習に参加し、その帰り、東大同期の三島君宅で一夜飲み騒いだ、ということもありました。余談ですが、井の頭線・高井戸にあった三島君のアパート（通称“三島部屋”）は駒場から近かったこともあり、同期ではよく立ち寄っていました。泊まると必ず風邪をひく、という話があり、中島・寺内も“三島風邪”をひいた、との噂もありましたが、とにかくこの頃には京大同期の面々もすっかりバドミントン部同期生の一部として定着していたようです。

平成４年、３年生時の夏が、最も長く一緒の時間を過ごし、交流を深めることができました。先ず、７月の京大戦（於　京都）の際、私は中島君らと連絡をとって１日先に京都入りし、祇園祭りの宵山を案内してもらいました（他の東大同期は確か期末試験があり、なぜか私だけ宵山の風情を味わうことができました）。残すと追加料金を払わないといけないというカレーハウスに行ったのも、確かこのときだったと思います。また、京大戦の後、京大の同期がドライブに誘ってくれ、昭和62年の後藤さん、同期の小西さん（女史の方）、三島君と私を日本海まで案内してくれました。車３台のうち１台がはぐれる（結局合流できず）というハプニングを経て、午後３時頃、日本三大松原の一所：「気比の松原」に到着したのですが、誰が言い出したか、「ここから東尋坊まで数km」ということで、東尋坊を目指して更に北へとドライブを続けました。実は数十km（約70km）の誤りだったので、到着したときには既に９時頃になっていました。

わずか数週間後の８月、この年の七帝戦は阪大だったのですが、七帝戦後、京大の

同期が、今度は石川県輪島にある阿波野君の親戚宅に遊びに行く、という企画に我々を誘ってくれ、帰省等の予定が無かった私だけ、この輪島行き小旅行に参加しました。アルバムの中でもこの時の写真が一番印象的です。夕日を映して白く輝く日本海、澄んだ海に素潜りし、ようやく獲れたさざえ（１個だけでした）、夜、天の川を仰ぎ眺めながら飲んだ酒・・・（というと稍叙情的過ぎるでしょうか）。美しい自然の中で、同期の楽しそうな顔が写っています。尚、この時中島君のご厚意に甘え、滋賀県草津市にある彼のご実家にもたいへんお世話になりました。遠きにかまけてなかなかご挨拶できずにおりますが、この場を借りて改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

平成５年７月、４年生として最後の七帝戦の舞台は京都でした。さすがに４年生となり、小旅行は行きませんでしたが、それでも貴船に行き、渓流の上に編んだ座敷でくつろぎながら、河床料理を堪能しました。

現在社会人となって７年目を迎えようとしており、京大の同期はおろか東大の同期ともなかなか会えない状態ですが、それだけにかえって、バドミントン部の同期を思い出すとき、京大の仲間の顔も一緒に浮かんできます。学生時代の様々な恩返しも含めて、旧交を温める日を楽しみにしています。

学生連盟の黎明期(2)

東大のインカレ参加

これも記録を求めてお会いした同志社大OBの大圃秀生（おおはたひでお）さんの話である。大圃さんは関西学連の役員として大学選手権（インカレ）の運営に当たった方で、初代OBの上野さんとは緑ヶ丘高校の同期である（30周年記念誌に京大戦の時上野さんと一緒に写った写真がある）。第３回（昭和27年11月22-25日、於神戸王子体育館）に東大が参加している。正確には第４回全日本学生選手権(個人)と第3回全日本大学選手権(団体)である。メンバーは上野、司馬、細矢、山下、清水、山内(彬正)。入場券は４日間通しで、40円、１日分ずつ順に切り離す様にミシン目が入っている。

またプログラムの中にオニツカ（現アシックス）のバドミントンシューズの広告がある。底に滑り止めの深い溝が切ってあるのと、スポンジのクッションが入っているのが特徴だが、今のものとは比べようもない。又同時にお借りした第5回（東大は不参加、29年10月於京都）のプログラムには公認球メーカーの連名広告が出ている。「ブルバード、トッププレー 日本シャトルコック協同組合（静岡）」「サンバタ 東京バドミントン工業所（渋谷）」「オリエンタル オリエンタル腸線研究所（三鷹）」「NO.1 都築シャトルコック工業所（名古屋）」「C.S ナルト(横浜)」「MSK 丸和商事(台東区)」が並ぶ。オリエンタル腸線は、多分ガット製造からの参入であろう。

京都大学との交流

平成４年入学　　香西　昌平

京都大学との定期戦は私が経験した中でも特別なものである。私が１年の時は京都大学で行われ、石田さん（現監督）と組んで第一ダブルにださせてもらった。猛暑の中コートの周りをぐるりと囲まれてラリーの合間はずっと応援された。当然そんな経験の無い私は舞い上がりミスを連発し、石田さんに多大な迷惑をかけたのを良く覚えている。考えてみればそんな経験が無いのは当たり前で、京大戦は普通にイメージする「大学生らしい」定期戦であってお互いの大学が意地になって１対１で勝負する。良く言われることかもしれないが、環境も似通っているということもあり実力もあまり離れない。毎年いい勝負になる。そうなれば自然と仲良くなるのは当たり前だと思う。

ここで当時の戦績などについて少し言わせていただく。現在では中島監督率いる京都大学にだいぶ押され気味のようだが、私がいた４年間は壁矢監督のもといつも快勝していた。この前東大で行われた定期戦では中島監督の言いたい放題であったが、中島監督が主将の時は我々が快勝し主将として日本酒を一気していた。欲を言えば中島監督にいろいろ言われると腹がたつので、現役の皆さんにはぜひとも頑張っていただきたい。個人的にはシングルで舟山さんと良くあたり、七大戦もあわせて２年で４試合もした。真夏の暑い中強い相手を引くのはほんとに嫌だったが、負けなかった事をアピールしたい。

さて、そんな仲の良い東大と京大なのでレセプションをはじめ夜も仲良く付き合わせてもらった。４年生の時には１日目に飲みすぎて、２日目はレセプションにでるのがやっとだった。最近では定期戦にＯＢとして参加するようになったが、ＯＢになると当時にも増して同期だけでなく先輩や後輩とも仲良くさせてもらっている。定期戦を通じて非常に多くの方と親しくなれるのは本当に素晴らしいことと思う。これからも定期戦を中心に親しく付き合っていければと思う。

京都大学との交流

平成７年入学　　勘里　裕樹

京都大学とは、毎年７月の中旬に東大・京大の定期戦、７月の後半から８月の前半にかけての七大戦と、年二回交流する機会があります。年二回会うということで、他の七大よりも親しく交流することが出来たような気がします。

東大、京大の定期戦では私が１年生の時から３年生の時までは私の一つ上の代等の活躍により東大が勝利していましたが、４年生の時は京大の私の同期の、１年生の時からレギュラーをとっていた三名や、一つ下の東大寺の３人トリオ等のおかげで京大に負けてしまいました。

しかし、普段一緒に練習している人とは違うプレースタイルの人たちと試合が出来たことで、お互いに勉強になるところがあり、定期戦の二日間はとても勉強になりました。

試合以外でも、京大の人たちとは、とても仲良くつきあうことが出来ました。

定期戦は、土曜、日曜の二日間にわたって行われますが、土曜日は京大であれば吉田食堂、東大であれば駒場の生協食堂でレセプションが行われました。土曜日のレセプションは、次の日も試合があるために、酔いつぶれるまで飲む人はほとんどいませんでしたが、日曜日の打ち上げは、東大の人は次の日に授業があるにもかかわらず、深夜２時、３時まで飲み明かした記憶があります。また、京都で定期戦が行われたときの打ち上げが、ソファーにすわって、ウィスキーでもでてきそうなお店で二次会があったことが非常に印象的でした。

飲み会が終わった後も、東大ならば同窓会館、京都ならばスポーツ会館で夜が明けるまで話をしました。そこで、バドミントンのことやその他のことを話すことで、お互いの交流をもっと深めていきました。

そういった試合の後の打ち上げのおかげで、年に二回しか会わなくても非常に親しくなれたのだと思います。

最近では、どちらの大学もホームページを持っており、私も時々拝見しますが、そのホームページの掲示板に書き込むといった、そういう交流もできるようになりました。

今でも、私の年に近いところでは、一つ上の塚原さん、増田さん、同期の三井君、堀田君、一つ下の奥田君等は、シングルス選手権やダブルス選手権といった、東大のイベントにも参加してくれて、卒部した後でも交流することが出来、うれしく思います。

このように、東京、京都と距離は離れていますが、定期戦などを通じて京大の人たちと交流できたことは、４年間の部活の思い出の中でも大きな存在を占めています。

3. 合　　宿

合宿、練習方法の改善など

昭和30年入学　　橋本　章

合　宿

合宿によるトレーニング強化は過去検討されてきたようだが、実現したのは、昭和31年４月である。

場所は、橋本の地縁で栃木県宇都宮市県営総合運動場を借りた。経費節減のため、自炊とし、茶碗等は、橋本の親戚の瀬戸物屋から、只同然で購入し、持ち込んだ。

炊事は当番制であったが、結果的には、女子部員の４名の方に大変お世話になった。司馬先輩持参のモツの調理方法が判らず苦労した。

一堂に会しての合宿は、系統立った練習ができ、戦力強化に役立ったことは当然として、練習の合間にトランプにいそしみ、親睦、結束の面でも効果を挙げた。

第２回の春季合宿も、翌32年４月に同所で行われ、前回の自炊の苦労に懲りて、アルバイトに宇大生の鈴木さんをお願いしたところ、熱心にやっていただき、極めて好評であった。

七帝戦

七帝戦をやろうという話は、32年11月のインカレ高松大会の時に話が出た。インカレに出場したのは、４校だけであり、東大は、大会初日第１試合で惨敗したのだが、その際、七帝戦をやろうという話になり、翌年名古屋で東日本選手権があるので、その時、まとめて開催と決め、名大には、後から話をして、賛成してもらった。

33年８月８、９日、第一回七帝戦は、名古屋ＹＭＣＡ体育館で開催され、結果は、優勝 東北大、東大は京大、阪大、名大に勝ったものの４位であった。

練習方法の改善

30年当時の練習は、授業を終わった者が、駒場寮の部屋に集まり、トランプやマージャンをやり、適当な人数になったら、第１体育館に出かけ、準備運動もそこそこに、ひたすらシャトルを打ち合うという形であった。一段落した６時頃から、卒業した先輩が現われ、また練習が夜まで続くのが通例であった。練習の体系化を図るために、立大に臨時コーチを依頼したのもこの時期であった。

また、バドミントンの技術指導書として“Winning Badminton”が著名であったが、日本に２冊しかなく（邦訳なし）その1冊を所有する聖学院高校の今井先生に、２ヵ月の借用書を入れて借り出し、交代で筆写をした。途中から女子部員が、タイプをし

てくれて、大いに助かったが、写真や図形は、トレーシングペーパーで写した。これにより、ダブルスのフォーメーションや、バックの打ち方、ラウンドザヘッドストロークなど学んだ事は多い。

部財政改善

当部の収入は、運動会の予算、先輩からの援助、部員が出す部費から成立っていたが、運動会の予算はたしか年６万円程度であった。先輩からの援助は、まだ人数も少なく、社会人成り立てなのに、職場やご自宅にお伺いし、ご馳走になりながら、ご協力を頂いた。

部費は部員数からも、大した金額にならず、練習中シャトルコックが消耗すると、皆で手持ちの金を出し合って、幡ヶ谷のサンバタまで、バスに乗って購入に行った。

なんとか財政を確立すべく、臨時の収入源として当時流行した、ダンスパーティーや音楽会（柴田睦）を開催したが、チケットの売込みに苦労した割に成果が乏しく、五月祭にビールやカルピスを売る売店を出したところ、かなりの収益を挙げた。

また、司馬さんから翻訳の話が持ち込まれ、一同受験の昔に戻って、分担して英文和訳に励み、首尾よく出版の運びとなった。創元新社からの「賃金政策入門」の後記に、東大バドミントン部の諸氏には校正で世話になったと書かれている。報酬はたしか５万円であったと記憶している。２冊目は、たしか水産経済学であったと思うが出版に至ったかどうかさだかでない。

前記の音楽会には、プログラムの広告集めにも苦労した。宗像は、食品関係に強かった。サンバタに広告を頼みに行ったら、雑誌広告の短文コピーを作ったら、金を出そうと云われ、３点作ったら、3000円呉れた。

新入部員の加入による入部費の獲得も、大きな財源であったので、31年度の入学者を目指し、秋山以下、駒場寮に泊り込みで、勧誘のチラシを作成し、大量に配布し、かなりの入部者があり、成果を挙げた。入部早々のランニング、兎とびで、悲鳴を上げ、退部者が続出したのも、やむを得なかった。

合宿のことども（昭和33年～35年）

昭和33年入学　　渡辺　光夫

昭和33年春の宇都宮遠征合宿には、同年春の新入生森健一君が入学式前に体験参加し、現役部員諸兄を喜ばせたエピソードが後々まで語り草になっている。宇都宮の合宿は結局同年限りで取り止めとなったため、以後、35年秋の久里浜合宿まで、春・秋とも駒場合宿となった。

また、駒場の１・２年生を中心として７月に夏期強化トレーニングを行っていたものを、昭和34年には夏期合宿に拡充したので、合宿は春、夏、秋の３シーズン制が定着した。

駒場での合宿は、合宿期間中もアルバイト、実験、私用等様々の理由で、合宿所からの外出を弾力的に容認するというものであったため、参加者も増加した反面、運営の規律面ではどうしても緩やかなものとならざるを得ないのは否めなかった。これも、運動部と同好会との狭間で揺れ動いていた部員意識の一面を物語っていたともいえよう。

駒場合宿のもう１つのメリットは、ＯＢ連が入れ代わり立ち代わり連日のようにやってきて、差し入れは勿論のこと、夜のコートで球を打ったり、ミーティングで話をしてくれたりと、合宿らしさを盛り上げるとともに、ＯＢ・現役の交流の場としての役割を果たし、ちょうど部員が第二世代に移りつつあったバドミントン部にとって極めて大きな意味をもったことである。その象徴的な意味を体現したのは、「司馬さん」である（当時、バドミントン部の監督であったが誰もが「司馬さん」と呼び、その口吻を好んで真似た）。暇を作っては合宿所に現れ、夜は訓話、昼はコートでの叱咤と精力的な言行で現役部員に恐れ親しまれたのである。言行録に事欠かない司馬さんの合宿指揮でも特筆されるのは、34年春の合宿に立教大学バドミントン部監督の有馬氏と同部ＯＢの山崎氏を招致したこであろう。この「事件」は、その後の東大バドミントン部の基礎固めと発展の大きな流れを方向づける契機となったという意味でも忘れられない出来事となった。当時関東大学リーグ一部の上位を占めていた、文字どおり大学「運動部」の実態を生の声で聞かされ、完全に圧倒されてしまった感があった。直後の合宿反省会は、「部」のあり方をめぐって、従来になく深刻なものとなったのは言うまでもない。その後４月早々に立教大学との交歓試合ということで、立教大学の現役部員が駒場第一体育館まで足を運んでくれることとなったが、「百聞は一見に如かず」のことば通り、試合前の体操、コート練習を見ただけで、その気迫と迫力に完全に圧倒されてしまう始末であった。結局この日は、１セットも取れずに終わった。

ここから立ち上がることが課題となったわけだが、その後の展開は、本物を見たことが全員の支えとなって少しずつ成果を積み上げていったように思う。

駒場合宿のもう１つのハイライトは、夜の楽しみであった。毎日のように行われたミーティングは別として、ＯＢ直伝のカードゲームが盛行した他、同窓会館ホールでは、時にはダンスパーティがあったり、音楽会があったりと練習疲れの部員の心を誘惑する催事もあり、それぞれ思い思いの時間を楽しむのには事欠かなかった。また、東大前の飲食店街から、一寸足をのばして渋谷までと、地の利に恵まれていたこともあり、部員の相互理解という合宿のもう１つの成果を得るのには、先述のＯＢ諸兄の協力もあって、大変好都合であった。それだけに消灯時間厳守も破られたりする。さらに、下ネタ話の巧者も多士済々、隣室では、どこかの部の合宿や騒々しいコンパがあったりということもあり、合宿期間中を通じて平常心を保つのも容易ならざることであった。門限、起床など時間に遅れた場合は、グラウンド２周のペナルティを課することとされた。

当時の駒場合宿といえば、先ず誰でも思い出すのは、食事の怨み、特にも朝食の不味さではあるまいか。キャプテンの「起きろ」の声で叩き起こされ、ランニングと軽い体操の後、東大裏門の「ちんや」（金松食堂）で朝食というのがお定まりのコースであったが、早起き後遺症のためだけではなく、正直言ってヒドイというのが偽らざる実感であった。１食50円という単価であったので、多くを望むのは無理としても、御飯の炊き加減そのものからして問題ありというのが皆の記憶に残っている。とは言っても、早朝に営業している店は他に無く、改善要望を申し入れること度々というしか打つ手がなかった。昼食は、基本的には寮食堂(60円)という献立であったが、その気になれば自分の好みに合わせる手だてはあり、それほど怨みは残っていない。

「ちんや」といえば、35年春の合宿では、同窓会館での宿泊和室が確保出来ず、やむなく「ちんや」の二階の狭い部屋に押し込まれての宿泊とあいなったという苦い思い出もある。

最後に、合宿でもう１つ忘れてならないのは、東大バドミントン部の合宿ではないが、34年入学の木村武君が35年春に慶応大学バドミントン部の合宿に参加したことである。木村君の麻布高校時代のバドミントン仲間であった臼井氏が慶応のバドミントン部で活躍していたという事情が背景にあったのだが、駒場キャプテンの戦力向上という以上に、東大バドミントン部を運動部として客観的に考えてみるという絶好の機会となったことは言うまでもなく、その後の駒場諸君の活躍や東大バドミントン部の対外交流にも大きく資することとなった。

トレーニング事始め（昭和33年～35年）

昭和33年入学　　渡辺　光夫

昭和30年代に入って、新入部員の数も増えてきたが、駒場の第一体育館は、バドミントン部、バスケット部及び体操部の共同使用となっており、練習日は昼間は週３日とそれほど多くは確保されていなかった。しかし、駒場寮の寮室を部室としていたこともあり、夕方の遅い時間帯や夜間の空いている時間に練習することは自由に出来た。従って当時は、練習時間には何はともあれコートに入って球を打つ時間を出来るだけ多く確保することが第一であり、体力作りのためのトレーニングということを練習メニューに組み込むことにはあまり意を用いていなかった。しかし、新入部員の数も次第に増えてくる一方で、体育系は苦手と言う部員も結構見受けられ、コート練習には顔を出すものの、少しの運動量でへばってしまい、コートの周囲に腰を下ろしてしまう無気力さも見られるようになってくる。このようなことから、秋山キャプテンの頃に定例練習日には、規律ある練習に心がけるようになり、集合時間、ランニング、準備体操、フットワーク、ハイクリア等と言うように一貫した流れを取り入れるようになってくる。こうした試行錯誤をしながら、また他の運動部の練習ぶりを横目で見ながら、そして当時少しずつ交流が始まった立教大学や慶応大学のバドミントン部の練習風景を見聞きするにつけても、基礎体力の重要性を改めて強調せざるを得なくなってくる。

こうした運動部運営のあり方に当時もっとも強い問題意識を持っていた一人に、秋山、古沢両キャプテンの下でマネジャーをしていた比田さんがおり、その旗振り役をすることになる。こうして、持久力や柔軟性とフットワークに重点をおいたバドミントン部スタイルが作られていく。昭和34年の駒場の新役員の中に「トレーナー」なる名称が初めて登場する。（小生にその役割を与えられたが、その後、「トレーナー」という名称は見当たらなくなり、その役割は、マネジャーに引き継がれていく。）

コート練習に入る前に、グラウンド２週（合宿時には、５～10周）、ダッシュ走、アヒル歩き、ウサギ跳び、柔軟体操、コートを使っての前後・左右フットワーク等のメニューが定着していく。こうしてやっとハイクリアに移ることになる。

これらのトレーニング方式の定着は、新入生に対して当初から運動部意識を持たせる上でも役立つようになった面もあり、体力作りとともに部活動の活性化にもつながっていったといえよう。

もう一つこの頃のバドミントン部の運営面で大きく変わったのがマネジャーの位置付けである。それまでは、部の所帯もあまり大きくはなかったこともあり、マネジャ

ーは、キャプテンを補佐する役割ではあっても、運動部の運営面でそれほど負担のかかるものではなかった。レギュラー選手としての活動の傍らでマネジャーの仕事をするという、いわゆる「プレイング・マネジャー」であった。しかし、20人を超える新入部員の増加、ＯＢも30人を超えるようになるなど所帯も大きくなりつつあり、運営面でのマネジャーの仕事も多事多忙ということになってきたため、貴重なレギュラー戦力に依存するだけでいいのかということが議論になってきた。この点でも、前述の比田さんのマネジャー論と問題提起があって、そろそろバドミントン部も専任マネジャーを置くべしということになった。たまたま新入生のトレーニング役をしていた小生がマネジャーもやれということになった。

石川キャプテンの下でマネジャーを勤めることになったわけだが、マネジャーの専任化はまた、ＯＢの組織化の面でも大いに役立った。部の活動費として一部はＯＢからの寄付（当時は未だＯＢ会費とは言わず寄付といっていた）に依存せざるを得ないわけであるが、合宿、リーグ戦、遠征試合等の日程が決まり次第近況報告かたがた寄付をいただきに行くというのが、マネジャーの大事な仕事の１つとなっていった。また、遠征試合の行き帰りには、東京地区以外に勤務しているＯＢのところにも立寄って、近況報告と寄付のお願いをしたりもした。コンパもＯＢの参加を前提に計画され、あつかましく、ＯＢの特別会費をあてにすることになっていた。こうしたＯＢと現役の一体的な部活動の一面を物語るエピソードの１つとして、昭和34年の国公立大学戦には、昭和32年卒業のＯＧ若林さん、来栖さんが応援に駆けつけてくれるということになり、現役部員を大いに発奮させたものである。

昭和35年の安保闘争時には、学内は学生運動の高まりの中で騒然とした状況にあり、バドミントン部員も、それぞれの考えでデモに参加することになるが、日常の練習や合宿に支障が出るというほどではなかった。それでも、安保闘争の最終段階で６月の国会周辺30万人集会・デモにまで反対運動が高まった頃には、ほとんどの部員がデモに参加し、デモ隊の隊列の中に仲間と出くわしては合図をしたり、デモの後で安否を確認したりという状況が、ほんの一時期だけだが現出した。運動部として行動を共にするかどうかといった深刻な事態にはならずに済んだし、幸い、デモ隊の中でかすり傷を負ったという程度のことを別とすれば、大きな事故にも遭わずに終息して、一同安堵したものである。リーグ戦二部復帰は、世情騒然とした中での出来事であったわけで、政治に無関心ではいられなかった運動部員としては、運動部としての当面の目標達成で、自分たちの政治参加のあり方にも納得出来る気持になったかもしれない。

バドミントン部創立10年頃の合宿の思い出

昭和34年入学　　佐藤　祥次

昭和25年の東大バドミントン部の創立から数えると昭和34年入学の我々はちょうど10年目の入部と云うことになる。

部の創立50周年という今日の時点から考えると、部の活動が始まって、まだまもないころであったといえるかもしれないが、当時の思い出としてはバドミントン部に入部して立派な諸先輩のもと、それまでの良き伝統を引き継ぎ、精一杯頑張っていこうという思いがあった。

当時の部の一番の目標は３部から２部への昇格という事で、事実昭和35年の春には、２部に昇格、惜しくも昭和36年に３部に舞い戻り、翌37年春に再度２部に昇格するといった状況であった。

そのために日頃の練習に加え春、秋の合宿は欠かせないものであった。バドミントン部では２年の秋頃から３年の秋にかけて、マネージャーをしたこともあり、京大戦や七帝戦の遠征等いろいろの思い出が浮かんでくるが、バドミントンの初心者であった時期から、何とかバドミントン部員として練習し、シャトルを一生懸命追いかけた思い出の多い合宿について、思い出すまま若干綴ってみたいと思う。

大学１年の秋の合宿は駒場の同窓会館であった。

毎朝起きるとすぐにグランド５周。朝の清々しさよりも、眠くてまだ基礎体力不足の中で結構ばて気味の毎日であった。柔軟体操やら、腹筋運動、うさぎ跳び等合宿の必須科目の後、素振り、ハイクリアー等基礎的な練習をみっちりしこまれた。

初心者にとって入部当初はハイクリアーをいやと言うほど打たされ、考えてみるといまだに、ラケットを持って会社のバドミントン部のメンバーと練習をするとき、ハイクリアーだけは若い者に負けたくないと思うのは、このころの練習のお蔭ではないかと考える。

大学２年の秋には久里浜の体育館で合宿を行った。駒場の体育館がコート３面であったのに対し、久里浜の体育館は８面で明るく広々としており評判が良かった。

毎朝起きるとすぐのランニングは、ここでも継続され、久里浜の海岸沿いに毎朝かけ声をかけながら走った。グランドを走るのとは違い、潮の香りを楽しみながら岬の先を目標に走る事は結構楽しみであった。

宿泊場所は「海浜館」という旅館で決して上等ではなかったが、練習後にゆっくり風呂に入る事も出来、今思い返してみると一寸懐かしい気がする。

この年は春のリーグ戦で３部優勝、入替戦で関東学院に勝ち、念願の２部への昇格がかない、明るい気分の中での合宿であったように思う。

合宿中の日曜日、体育館が使えず練習はランニングと柔軟体操のみで、その後自由行動とした日があったが、城ヶ島へ行く者、喫茶店やパチンコへ行く者、釣りに行く者などさまざまであった。

何人かが久里浜にある東電の横須賀火力発電所の見学に行こうということになり、小生もそのグループに入った。突然の見学であったが東電の守衛所の人に頼んで見学をさせて貰った。まさか卒業して東電に入社し、その後33年も勤める事になるとは当時は夢にも思わなかった。

大学３年の春は、千葉の体育館で合宿を行った。たまたま法政大学のバドミントン部も合宿をしており、レギュラー陣が時々法政大学のダブルスと練習試合をさせて貰った。

矢城さんが豪華な差し入れをしてくれて、インドリンゴとみかんが食べられたと云って皆が喜んだ等というのも合宿の楽しみであった。

大学３年の秋の合宿も久里浜の体育館で行った。この年の秋から木村武君がキャプテンになり、小生にとってはマネージャーの最後の年であった。３年の春のリーグ戦で残念ながら２部から３部に転落、この合宿は秋のリーグ戦を前にして２部復帰をかけた合宿でもあった。うさぎ跳び、アヒル歩きなどを罰則としても活用したり、ランニングで競争させたりハードなメニューもあった。この合宿の後、翌年の春、２部への復帰を果たした。

昭和30年代半ばのバドミントン部の活動の一端を合宿を中心として、思い出すまま書いてみたが、苦しいこともあったがいろいろ楽しい思い出も多かった。

その後社会に出て、またいつのまにかラケットを握る生活をはじめており、年に１～２回、２日程度の短期間ではあるが、会社のメンバーと合宿と称する練習を行う事もある。

そんなときに“ふっ”と思うのは、大学に入ってはじめてバドミントンを始めて、いまだにその延長線上で人生を楽しんでいるということは、本当に幸せであるということである。

合宿から見た４年間

昭和37年入学　　鈴木　明夫

昭和37年４月ふらりと入部したバドミントン部の同期生は55名であった。その中には馬場という超一流のプレーヤーもいたが、その存在も知らず練習に参加した者が大部分であった。練習はバドミントン体操に始まり、柔軟体操、腹筋、腕立て伏せ、ウサギにアヒル、素振り、それからやっとボロのニワトリの羽のシャトルでハイクリアー。これが全く飛ばない。やっと終わると駒場一周のランニングという練習メニューは既に確立していた。初心者でもレギュラーとなり対外試合で大活躍した先輩は大勢いる。頭を使って練習すれば強くなる。みんながんばれ。上級生から叱咤激励を受け１週３日の練習。やっと試験にパスして、最も軽そうなバドミントン部に入部した青白き新入部員はトレーニングに耐えきれず次々とやめていった。これは部の財政上必要なことだったようだ。入部金を取ってしごいてやめてもらう。コートはたった３面しかないのだ。

これでも残ったものには次の関門が待っていた。それが駒場の１、２年だけの夏合宿だ。７月の上旬になると合宿前の特別トレーニングがあり、もうこれで沢山と言う状況で合宿にはいる。宿舎は同窓会館だ。いつもはあまり打つ時間がなく、やっとたっぷりコートに入れるのだが、クリアー、クリアー、そして移動クリアー。何でわざわざ前に出て、また戻ってクリアーを打たねばならないのだ。「終わり！」の声が待ち遠しい。蒸し風呂のような体育館から外に出ると今度はフットワーク。これでは倒れたり、気分の悪くなるものが出ても不思議ではない。コートでのメニューはクリアーに加えてスマッシュ、ドライブがはいる。ラケットを上げろ、声を出せと後ろから上級生の声が飛ぶ。練習中の水は御法度、昼食は寮食を利用したが、その前に中寮の売店で牛乳をガブ飲みする。食後の休憩時間の短いこと。また同じメニューで、直ぐに午後の練習が始まる。最後には400mのグランドを５周位のランニングでやっと終わる。この夏の合宿の目的は何だろう、などと新入部員は考える余裕はない。只々つらい５日間、部員ふるい落としのプログラムと言えないこともない。後になって考えてみれば、全くの初心者に基礎体力をつけ、バドミントンの基本を叩き込み、この中からレギュラーを何人か出さねばならない。毎年、優秀な経験者が入部してくるわけではない。合宿のあと京都へ遠征して京都大学の初心者と初めての対外試合に臨む。何となく一人前になった気分を味わうことになる。

秋になると別の地獄の試験がある。徹夜をしていると、あの苦しい練習が懐かしく、待ち遠しくなる。恐らく試験地獄から逃げたいだけなのだが。成績は芳しくなくても

試験は終わる。さあ、今度は部全体の合宿だ。場所は久里浜だという。横須賀線で随分遠い所だと思った。細長い体育館で８面使って、休む時間なく練習メニューが組まれている。相変わらず１年生はクリアー、クリアーに明け暮れる。しかし漸くドロップ、ネットも習って、一通りのストロークは打てることになった。そうすると半面シングルスの練習がメニューに入り、ノータッチはウサギ跳びの罰則が待っていた。

久里浜は今と違って何もない所で、夜に駅の近所に行って、大判焼きを食べるくらいしか楽しみはない。名所としてはペリーの碑が立っている公園があるが、朝のランニングの目的地なので、恨めしき所ということになる。１年生にとっては、全てのストロークを習得し、ともかく目録終了となるための合宿ではあるが、上級生やレギュラーに取っては秋のリーグ戦に備えて戦力アップのための重要な練習である。また４年生にとっては最後の合宿で、これで終わったという感傷にひたるものもある。秋のリーグ戦、追い出しコンパと４年生は急速に部から遠のいていく。１、２月は何か歯の抜けたような、もの寂しい練習がガランとした第一体育館で行われる。

新学期を前にした春の合宿は、４年生が抜けた後の戦力ダウンをカバーし、春のリーグ戦に備える意味を持つものであるが、初心者にとっては一通りのコースを終了するまとめとしてダブルスの練習をする。残念なことに馬場が事情があり退部してしまったが、この合宿で頭角を現した同期の森本は、レギュラーの仲間入りをして春の２部リーグ戦に堂々スタメン出場を果した。この合宿も久里浜であったが、体育館がまとめて取れず２日間駒場で合宿を行った。宿泊場所の同窓会館も取れず、誰が探したのか山口屋から淡島通りに抜ける坂道の中頃の左の路地を入ったところの「ゆうぎり」という連れ込み旅館を利用した。費用節約のため四畳半に５人が詰め込まれ、端に寝た者が寝返りを打つと襖が外れた。２人やっとの風呂に４～５人が芋を洗うようにして入った。

４月になると新入部員が入り、今度はしごく方に廻った。彼らを見ていると１年間の練習に耐えて残った者は明らかに体力が違う。トレーニングの成果は明らかだ。少しいい気分になって、駒場一周のランニングでは全員がバラけないように声をかけ、先頭とどん尻との間を往復する余裕が自然とできていた。

昨年２部に昇格し、秋には２部５位という成績で、２部に定着するかに見えた東大は一橋の執念の前に３部転落という悪夢をみた。しかし、実際にこれは夢であった。日体大の選手登録にミスがあり、日体大の対戦記録が抹消され結果的に２部５位ということで２部に残留したのだ。一時は２部復帰が目標となってしまったが、秋になり残留が決まったところで目標は２部維持に切り替えられた。練習は平松主将のもと、２部に通用する練習を目指した。ともかく移動クリア、そして球の下に入るフットワ

ークが基本で、そしてパターン練習が導入された。ドロップ／ネットやスマッシュ／ネットはよく見かけたが、もっと複雑なパターンを何種類もカードにしてあり、それを繰り返し練習した。初心者あがりの２年生の大部分にはストロークが続かず、実践に使うには相当な距離があった。しかしレギュラーにとっては、サービス前にある程度これから始まるラリーのシミュレーションをして臨む姿勢を身につけようというもので、この様な練習がじっくりできる合宿の意義は大きい。

秋の合宿は富山県高岡市となった。いつも使っている久里浜の体育舘が取れなかったため、やっと探して大遠征ということになった。天井が高い体育館で、広々としていて、こんな体育館もあるのだと感心した。東大が合宿に来ているということで地元の新聞に記事が掲載され、それを見た富山大学が練習試合を申し入れて来た。翌年入部した大門(S39)も練習を見に来て、東大は大したことないなという感想を持ったということだ。この合宿は大遠征であったため費用がかさみ、ＯＢに奉加帳を廻し寄付をお願いした。これが事前の根回し不足で、合宿が終わってから寄付集めに廻ったところお説教を頂戴することとなった。

こんなことがあったので、12月に主務に就任した私は、まず春の合宿が気になった。１月早々に久里浜の体育館が使えないことが分かり、できるだけ近くでと考えて探したが、結局吉原市（現富士市）の体育館を借りることになった。下見に行って、コートは４面とれるが、バドミントンのコートのラインが引いてないことが分かっていたので、コートの寸法が載っている本を持って行くよう指示した。ところが、持っていった本には寸法がヤード法で書いてあったため、換算ができずワァワァ言っていたら、体育館にヤードの巻尺があって一件落着。平松さんを始め有力な４年生が抜け、３部転落必至と先輩から言われ、「何を！」という気持ちで頑張った合宿であった。その甲斐があって２部では最下位となったものの、明治学院大学との入替戦ではオーダー予測がぴったり、勝つべきものが勝ち転落をまぬがれた。以降、順調に国公立、京大戦に勝ち、勢いに乗ったつもりであった。好事魔多し、と言うが京大戦に引き続き京都西京極体育館で行われた七帝戦では、緒戦の九大によもやの敗戦で結局６位という最悪の結果となった。後から考えれば、心に驕り、隙があったということである。チーム全体がバラバラになった感じがあり、引き締めないと秋が心配だということで、８月の下旬に検見川でレギュラー合宿なるものを初めて実施した。レギュラー合宿はこの50年の歴史の中でもこの時だけだと思う。

その後、秋の合宿も同じ吉原の体育館で行った。宿舎は違ったが、２回とも風呂屋の二階だった。入船湯と五色湯という名前だったと思うが、今もあるだろうか。後年、転勤で２年間富士市に住んだことがあるが、遂に見に行くことができなかった。

夏、秋と２回の合宿を経てリーグ戦に臨んだが、やはり最下位で、入替戦は今回も明学だろうと考えていたら、一橋が出てきた。与し易しという気分があり、七帝以降引き締めたつもりが、やはり弛んでいたのだろう。この年一度も負けていない一橋に、あっさり負けて３部に転落してしまった。部内は重苦しい雰囲気を引きずって、もがいていたのがこの時期であった。その後、墨田区立体育館で開催されたインカレに出場し、１回戦岡山大に簡単に勝ち、２回戦中央大学と当たった。当時学生NO.1のダブル秋山・小島組がおり、全く歯が立たなかったが、思い切ってぶつかり何か吹っ切れた感じがした。翌年に向けてのきっかけが掴めた様な気分であった。

２部復帰は、誰も言わなかったが当然の目標であった。そのための春の合宿は、もっとコートが沢山使える所と言うことで情報を集め、平塚の体育館を下見にいった。丁度慶應大学が合宿をしていて、少人数で随分密度の濃い練習だなと思った。この体育館も２度使った。宿舎は春が伊東旅館、平塚八幡神社の近くだった。秋は土地の名士の田中さんのお屋敷で、その後何回も使ったようだが、海岸の近くで、朝のランニングは海岸の波打ち際を走った。砂の上のランニングは走りにくく随分と足に効いた。春のリーグでは３部で簡単に優勝できると考えていたが、明学に大苦戦、奇跡的な逆転でやっと入替戦に臨んだ。この年、一橋の絶対の切り札の佐藤さんが卒業したことで、入替戦は予想外に楽勝ということになった。

国公立、京大戦、七帝戦とそれぞれ勝って、秋の合宿に入った。３年生が安定して強くなってはいたが、最下位はまぬがれず、明学との入替戦となった。４－３となった次の試合で明学の藤野君がアキレス腱を切り、やや後味悪く残留が決まった。このように明学との試合は想定されており、合宿での練習もレギュラーの強化、調整に頭がいっぱいで、次の代の強化についてはプログラムがなかったように思う。私自身、最後の合宿ということで、力が少し抜けていたかとも反省される。偉そうなことを書いたが、合宿の最中は無我夢中で、合宿についてまとめてみて始めて分かった、何とも遅すぎる話ではある。

限界を超えて行こう

昭和46年入学　　大田　豊

昭和46年駒場の春、東大バドミントン部の練習風景を初めて見た。その時はまだ４体（今の２体）ができる前で、暗くて狭く、おまけに天井の低い体育館（１体：当時）ではあったが、諸先輩がたの熱心な迫力のあるプレー、特に豊田さん、盛さんの勇猛なかけ声（？）には大いに心が刺激され、高校で３年間やっていた者として、「よし、バドミントンを再開しよう！」と決めることとなった。

受験上がりのやせた肉体（もともとスリムでしたが）には、入部したての頃のハードトレーニングは応えた。この頃、新１年のトレーニングを指導して号令をかけてくださった、角本さん（当時駒場主将)、増田さんら上級生のももがやけに太く見えたのが印象に残る。おかげで梅雨になるころには体も慣れ、検見川での厳しかった夏合宿にもなんとか耐えることができるようになっていた。

合宿の記憶は、この最初の検見川合宿だけでなく、その後参加した合宿を含めて、時間軸がすでに曖昧になってしまった。すべて周囲がぼかされた白黒のイメージと、ところどころでなぜか当時の「におい」が蘇える、不思議な思い出になっている。

合宿の朝の記憶はすがすがしい。検見川の芝生の上を、みんなで隊列を組み、元気良く号令をかけながら走る早朝ランニング。草のにおいがほのかに香り立つ。汗をしたたらせながら歯をくいしばった、二人一組で取り組む柔軟体操と筋力トレーニング。飄々とこなすボディビルダーのような山田裕理さんの姿が印象深い。そしてまたランニング。最後は宿舎に向かって全員でダッシュ。土居がすいすいと駆け抜けて行く後ろ姿が軽やかだった。

さて、この次はおいしい朝食のはずなのだが、なぜか食事に関する記憶は昼食、夕食を含めて、まったく欠落している。ただ、関の記憶によれば、「私が元気でもりもり食べていたとき、尾中はげっそりとして殆ど食事をとれず、『どうして、あんなに厳しい練習のあとに、こんなに不味い食事が食べられるの？』と言ってたよ。」ということなので、ボリュームはあるけれど、それほど美味な品揃えではなかったようだ。

体育館での記憶は、さすがに音も生々しい。「キュッキュッ」というバドミントンシューズのゴム底がきしむ音、「パッシーン、パッシーン」というシャトルを打つ音が、単調に響き渡る空間が拡がる。基礎をみっちりと何度も繰り返す、地味ではあるが大切な練習だ。私が一番の苦手としたのはアレーのクリア（移動クリア）だった。どちらが先に根負けするかの戦いだ。伊藤さん、江藤さんと当たるとラリーがなかなか終わらない。同期では関、後輩では松本だ。「負けたくない」という気持ちが、絶

対に自分が原因でラリーを終わらせたくないというこだわりになる。「もうだめだ、休みたい。」と弱音を吐く体と、「負けるな！もう少しだ。がんばれ。」と叱咤する心のせめぎあい。これはもう限界かと葛藤しつつも、「交代！」の声がかかるまで踏ん張りとおすことができれば、「やった！」という喜びを感ずることができた。ささやかではあるが、自己限界突破の実感と言うべきか。

余談になるが、最初の検見川合宿で、はじめて塩の錠剤なるものの存在を知った。「これが薬局で売っているという塩の粒ですか。」と言いながらビンを覗き込む自分の姿がそこにあった。「大学の合宿ともなると違うなぁ。」と妙に感心した。私自身は使うことはなかったのだが、今でも使う人はいるのだろうか。

合宿の夜は、基本的な練習をすることもあったが、練習試合をよくやったように思う。とにかく時間はたっぷりある。日ごろの練習日にはできない、いつもと違う相手とダブルスのペアを組み、試合をしてみる楽しさがあったように記憶している。我々の年代ではよく知られている角田と三浦さん、松留さん、有馬さんとのレギュラーの座をめぐるシングルス因縁対決の伝説も、多くは合宿の夜の試合で作られた。（まちがっていたら、ごめんなさい。）

こうは書いてみたが、夏の検見川を含め、４年間の合宿中に行った紅白戦などの勝負の記憶は、残念ながらほとんどない。記憶はいいかげんなものだ。記録をしっかりつけることの重要性がよく分かる。

もうひとつ余談。私が駒場にいた頃、タイからの留学生でプラセトさんという方がたまに本郷から練習に来ていた。一度夏の合宿にも顔を出されたことがある。合宿に来られた豊田さんとプラセトさんが昼食後に宿所で寝そべりながら、一生懸命話をされている姿が記憶にある。バドミントンを通じて、アジアを感じた思い出だ。そのプラセトさんの特徴ある顔が、しばらく前に（といっても10年ほど前だが）ＴＶに映ったときは驚き、そして懐かしかった。その時は、タイのチュラロンコン大学の教授としてインタビューを受けていた。余談終わり。

バドミントン選手は瞬発力だけでなく、持久力がきわめて重要だ。そのためランニングはトレーニングメニューでも重要な位置をしめている。合宿ではないのだが、私の現役時代、運動会主催の伊豆縦断マラソンなるものが一度は参加すべき恒例の行事としてあった。先輩の川上さん達が初参加で団体優勝して以来、バドミントン部からは常に上位入賞者を輩出していた。我々が２年のとき、私自身は参加しなかったのだが、当時駒場寮で同室だった田中（伸）が、当時のベストメンバーの一人として優勝を狙うチームに選抜され、走った。とても暑い日だった。夕方、彼が日射病で倒れ、途中棄権となったことを知った。あとから聞けば、死線をさまようほどの状態だった

という。その後部活動から身を引くことになるのだが、今は京都弁護士会の重鎮として活躍する田中の、当時の忘れられない思い出だ。

この伊豆マラソンには私自身は翌年参加した。42.195kmのフルマラソンは後にも先にもこのときだけだ。その年はバドミントン部から20人近く参加したように思う。そのときの記念写真を見ると、後年トライアスロンで名を馳せる当時一年の村田も写っている。すでに素質十分だったと言うべきか。

前の日は宿舎でよく寝付かれず、ほとんど一睡もできなかった。前年の部報に載っていた中田さんの気持ちが良く分かった。右手に海を見ながら、最初の１時間ぐらいバドミントン部は一団となって走っていたように思う。一緒に走る気心の知れた仲間がいることで、気分はとても爽快だった。途中の蛇石峠を超えたころ、車で応援の伴送をしてくれた先輩達が飲み物を差し入れてくれた。コーラのような炭酸入りのものだった。先輩達に意図があったかどうか定かではないが、これはけっさくだった。普通コーラを飲んだら「げっぷ」は口から出る。しかし走っているときには別のメカニズムが働いたようだ。坂道を下りながら、乾いた音で下から出るのである。誰も周りにいなかったからよかったが、自分でげらげら笑いながら走った唯一の思い出だ。そんなこともあったが、一度も歩くことなく完走し、結局３時間30分前後で、10位くらいの成績だったように思う。ゴールイン後しばらくの間、足が勝手にぴょんぴょん動いたのには、びっくりした。

このフルマラソン完走の体験は、達成感を感ずるという意味では、個人的にはたいへん貴重なものとなった。また、その年バドミントン部は10位内に少なくとも5人は入っていた記憶がある。この年の秋に二部昇格を果たすことになるのだが、伊豆マラソンでもバドミントン部は強く、他に抜きん出る勢いがあったのである。

三つめの余談。我々の学年では、関がキャプテンとして全体をリードし、角田、緑川がマネージャとして部の運営を支えていた。特に４年のとき東大で七帝戦を開催したときには、角田が公務員上級職試験準備のために一線から身を引き、その後任としてマネージャとなった緑川が各大学を迎え入れる準備のため、暑い夏の時期、東奔西走の苦労をしたことはいまだに記憶に残る。余談であるからには、ほんとうはその後日談を書くべきところなのだが、緑川がまだ許可してくれそうもないので、次の機会に先送りしようと記すにとどめる。

最後に一つ、現役時代を振り返って私の心残りになっていることを書いておきたい。それは「型」の研究を熱心にしなかったということだ。どんなスポーツにも基本の型があり、定石となる動きがある。バドミントンではラケットの振り方、フットワークの動き、ダブルスのコンビネーション、攻める場合、守る場合それぞれのショットの

組み立て方、さらに言えば呼吸法なども検討し、考慮すべきだった。これらは、無意識的に、また見よう見真似でできてしまう部分もある。しかし、本当の「型」というのは、その人にとって最小のエネルギーで、最大の効果を発揮するべきものである。それは自分の頭で考えるプロセスを経て、自覚的に身につけることで、より強固な力となって自分を支えてくれるはずだ。

無意識的に身につける「型」ではなく、熟考を重ねた上で身につける自覚された最強の「型」をぜひ熱心に研究してほしい。より洗練された「型」を武器に、若いエネルギーを最大限有効に爆発させてゆく東大バドミントン部諸君となりますよう。

平成12年５月1日　記

検見川の熱い夏

昭和55年入学　　久保田　正志

筆者が在籍した昭和50年代後半、合宿は春、夏とも全て東大検見川運動場で行われました。

思い出の検見川は、夏は暑く、飯はまずく（『ケミ飯』などと言ってましたが）、体育館は暗くて小さく、「なんでこんな条件の悪い所でやるんだろう」と内心で思っていました（もちろん言いませんでしたが……ちょっとしか）。まあ、それが伝統というものなのでしょう。

最も印象に残っているのは入学してすぐ、森（明）先輩が主将だった時の夏合宿です。

朝は六時台に集合をかけられ、検見川グラウンドの周りを走らされるのですが、これが朝っぱらからいきなり競走で（前年までは並んで走ってたそうです）、朝食前に汗だく。朝食後は二、三組に分かれ、半数以上は基礎トレ組となりますが、ここでもクロカン走、ダッシュ、ウサギ跳びと死ぬほど走らされ、体育館に入っても延々とフットワークがあり、ラリーになってもひたすら移動クリアばかり。その上、夕食後にも夜練がありました（前年までは自主トレだったそうです）。

普通、合宿中一日ぐらいは雨が降るもので、そうなると戸外でのトレーニングがなくなる上、他の運動部が割り込んできて体育館まで使えなくなってしまい、ぐっと楽になるのですが、この合宿中はついに一度も降りませんでした。しかも毎朝、いかにも期待を持たせるように空がどんより曇っていたかと思うと、朝飯が終わる頃には嘲笑うかのようなカンカン照りに変わるのです。筆者たち一年はこれを恨んで『ケミ天気』と称していました。

筆者の場合、もともとゴキブリよりも長距離走が嫌いだったことに加え、高校時代は清里など自分たちで勝手に決めた涼しくも楽しい高原リゾート地で合宿し、昼は中学生たち相手に先輩風を吹かせ、夜は指導の先生の目を盗んで持ち込んだ酒を隠れ飲み……というような安逸な合宿に慣れていただけに、ほとんど地獄のようでしたね。

そういう場合でも誰か一人明らかに自分より体力のない者がいると、「よおし。おれより前にあいつが倒れるな」などと考えて急に元気が湧き出てくるものですが、上級生はみなさん元気いっぱいで、一年仲間にも筆者より根性のなさそうな者は見当たらず、「最初に死ぬのはおれかい？」などと思い、必死でした。

周りが元気だと二倍疲れるものです。

ＯＢにしても、上野（誠也）先輩、山本（直史）先輩など体力に自信がある方々は

ランニングに参加されるし、小松（秋広）先輩などプレーに自信のある方々は体育館の中におられるので、現役は楽ではありません。

ご承知のように移動クリアでは、ラリーが長く続くと息が上がってしまいます。基礎トレの後などは特に辛いので、筆者はこの種目の最中は常に天井の梁だの電球だのを狙って合法的にラリーを中断しようと試みていたのですが、いざ狙うとなるとこれがなかなか当たらないものです。しかもやっと当たってシャトルがあらぬ方向に弾かれたと思っても、根性の塊のような森先輩や村田（光二）先輩などが猛ダッシュをかけてそれを拾い取ってしまい、がっくりしている筆者に向かって「どうだ」と胸を張られるのでした。

森先輩といえば、この合宿の二日目、一年生全員が早くもよれよれになって死んだ魚のように布団に横たわっている時に、「どうだ、疲れたか」と言いながら一年部屋に顔を出されたのをよく覚えています。みんなで「はい。疲れました」と答えると、「そうか。三日目が一番疲れるからがんばれ」と言って戻っていかれました。

「……」

みんな二倍疲れました。

合宿が終わる頃には、全員の足に豆ができたのは当然として、その豆が破れてその下にまた豆ができ、それも破れてまたその下に豆ができるという、三重マメ状態になっていました。最終日の試合で、一年生がみな上級生に全く歯が立たなかったことは言うまでもありません。

人間、体力ですね。

ちなみに朝飯前のランニングは、筆者たちの代になって主将の山梨君が「健康に悪い」という理由で廃止しました。しかし聞くところによると筆者たちより二年下の村田（章）君の主将時代も大変にきびしかったそうですから、その頃に復活させたかもしれません。今はどうなっているのでしょうか……。

裏合宿史　1985-1988

昭和60年入学　　木藤　祐一郎

合宿と言えば検見川。検見川と言えばクロカン。クロカンと言えば、０－２負けは３周、１－２負けは２周、２－１勝ちは１周。大学を卒業するまで、あそこがゴルフ場とは気付かなかった。

我々1985年入学組は、1985年夏から1988年夏まで、夏合宿を４回、春合宿を３回、計７回の合宿を行なったが、そのうち1987年の春を除き、６回を検見川で実施した。ここではクロカンやランキング戦と言う、「オモテ」の合宿論ではなく、「合宿の場所」「食堂」「洗濯」「雨」という四つのキーワードから、「ウラ」合宿論を展開してみたいと思う。

合宿の場所

我々は検見川では何故６回しか合宿を行なわなかったのか。当部では合宿は全て検見川で実施するという伝統があった筈である。しかし、我々が３年生となり、多少なりとも分別を身につけ、部の運営に関わる発言権を増していった時期と、日本経済がその泡沫（うたかた）の繁栄の頂点に向けて一気に上りつめていった時期が奇しくも重なり合った1987年という年は、現在の日本の状況からは想像もできないほど自信に溢れ、光輝いていた（ように思えた）。不況にあえぐアメリカ合衆国を日本円が征服し、土地と株価は天井知らず、高級ゴルフ場やスキー場が日本中いたるところに建設され、全ての日本人が「日の沈まぬ帝国」の永遠の繁栄を疑いもしなかった時代である。我々運動部を取り巻く学内環境もその例外ではなく、就職の心配などなく、華やか且つ、浮かれていた。

当時、一般大学生の合宿といえば、高原や海辺のリゾート（温泉付）で行なう楽しい、最大のイベントであった。にも関わらず、何故我々バドミントン部員だけは、この繁栄の真っ只中で、リゾート臭が全くない住宅地で、苦痛に顔をしかめるだけの合宿を行なわねばならないのか、当時20歳前後の我々には理解できなかったのである。その考えを後押しするかのように、天の声も味方した。検見川での春合宿の日程が、バレー部とバッティングしたのである。これを奇貨とし、当時の４年生の積極的な賛同を得て、1987年の春合宿はリゾート気分が漂い、テニスサークルの合宿も多い、静岡県は伊豆高原で実施することとなったのである。

「バブル」とは過去を振り返った場合にのみ気づくのであって、当事者達にはそん

な認識は全くなく、花見客に沸く伊豆高原で、たった一度の大学生らしい雰囲気での合宿に満足して春の定期戦を迎えた。そして、結果は４部降格。その後、合宿を検見川以外でやろうという考えは部員からは払拭された。原点回帰である。日本の各企業がバブルの夢から醒め、原点回帰を始めたのは1993年。今から思えば我々はその６年も前に、バブルの危うさに気づいていたと、今になって自画自賛している。

食　堂

検見川のご飯の評判はあまり良くないそうだが、我々は苦労した記憶はない。ただ、朝食の場所取りには苦労した。特に合宿がラグビー部やアメフト部といった、女子マネージャーを擁する大規模な部と一緒であった場合、その争いは熾烈を極めた。何せ奴等は朝飯の場所取りに朝6時から食堂でスタンバッており、挙げ句にお茶用のヤカンを大量に（ほぼ全量）確保してしまうので、こっちは油断しているとお茶は飲めないし、未だ肌寒いテラスで朝食を摂るはめになってしまうのである。我々も負けじと朝食当番制を採用し、早朝からの席＆ヤカン確保に努めたものの、敵は朝食の場所取りにほぼ全体力を傾注できるのに対し、こっちは食事の場所取りなぞに大切な睡眠時間を削られ、体力を消耗することはできないのだ。その結果、決着は自ずと明らかであり、常に圧倒的な人材と物量の差に泣く結果に終った。他部をうらやましいと思ったことは在学中あまりないが、この時ばかりは敵の裕福振りをうらやましく眺めざるを得なかった。

洗　濯

世界規模で社会構造の民主化とフラット化が進展した現在ではどうだか知らないが、ソ連も鄧少平も健在であった80年代後半当時には、合宿における下級生の夜のお勤めに、諸先輩方のものを含む洗濯があった。洗濯と言ってもコインランドリーにぶち込んで、約１時間程度時間を潰していれば済んだ話ではあるが。

その洗濯後、各々の衣類を仕分けするのであるが、ここで困ったことが良く発生した。ユニフォームはもとより靴下、パンツに至る下着類まで、なんと同じものを着ている奴の多いことか。一緒に洗濯されるとこれは全く判別不能となる。これを嫌い、一部の潔癖な人間はパンツにイニシャルをマジックで記入する等、自衛策を講じてはいたが、長い検見川暮らしでデリカシーを失った大多数の人間は、他人のイニシャルがあろうがおかまいなしに、着てしまうのである。その結果、良く合宿等を経験すると、「同じ釜の飯を食った仲」と称することがあるが、我々は文字通り「同じパンツをはいた仲」となってしまった。

それにしては感染症や伝染病等の病に苦しんだこともなく、平和に過ごせたものであったが。

雨

バドミントンは屋内スポーツである。よって練習は天候には左右されない筈、という常識が通用しないのが、検見川であった。雨の日は確実に練習の負荷が少なく、後半にかかり身体がきつくなってくると、雨を心待ちにした。

雨が降ると練習が軽くなる理由は、まず体育館にある。推定建造年月日が不明の木造体育館は、雨が降ると雨漏りが激しく、滑って危険極まりない状態となる。こんなところで大切なランキング戦なぞやってられなくなり、自ずと別メニューとなる。更に、雨が降るとクロカンを走らなくて良い。合宿での体力消耗はクロカン50%、移動クリアー20%、ランキング戦30%と勝手に断定させて貰うと、雨の場合、体力の消耗を半分に抑えることができるのである。しかし、雨が続くと、走りきれなかったクロカン走を消化するために、合宿後も居残ったり、駒場の「８の字走」に持越すことになるため、あまり喜べたものではなかったが。

京葉線開通後、検見川周辺は海浜公園やマリーナができたり、マンションが林立したりと、随分とおしゃれになったようで、都心に意外と近いながらリーズナブルな価格設定から、マンション等の人気も高いようである。しかし、我々にとって検見川とは、いつまでもクロカンであり、花見川沿いのランニングであり、雨漏りがし、高いサーブやクリアーが天井の梁にぶつかるきっと耐震基準を全くクリアしていないに違いない体育館であり、倶利伽羅紋々のおじちゃんがいる銭湯の印象であり続けるのである。

合宿の思い出

平成４年入学　　伊藤　恒有

私たちの頃の合宿は年２回、６月の末から７月にかけて七帝戦に向けてと、春の関東学生リーグに向けて３月の終わり頃から4月にかけて検見川総合運動場で行っていた。

検見川の体育館はバドミントンコートは４面しかとれず、天井は少しサーブを高くうつと届くような高さで、また、１年の頃は床に何カ所か穴が開いたことから、初めて体育館をみたときは、駒場の方がまだしもよい練習が出来るのではないかと思った記憶がある。練習内容は合宿ごとに異なっていたが、20人から40人の部員が４面のコートで練習を行っていたため、総じてノック練習と筋トレが多かったように思う。また決して広いとはいえない体育館の中に大勢がいるため、夏は非常に暑く、コートサイドで筋トレを行う際などには、みんな少しでも風が入ってくる場所を探して行っていたように思う。

合宿の練習で忘れられないのが、なんといっても、どの合宿でも欠かさずに行われた総合運動場内にあるクロスカントリーコースと花見川沿いのサイクリングコースを走ったことである。その時々で異なったが、午前中の最後にサイクリングコースを走り、午後の練習の最後にクロスカントリーコースを走ることが多かった。サイクリングコースは総合運動場の周りを通り、花見川沿いのサイクリングコースに出て、川沿いをひたすら走り宿舎まで帰ってくるというコースだった。この川沿いの道は景色もよく、走り出した際には気持ちがよいのだが、走っても走っても同じような景色で、いくつか橋を通り過ぎるのだが、かろうじてその橋を目安に走っていた記憶がある。クロスカントリーコースはこちらも緑に囲まれ気持ちのよいコースだったが、サイクリングコースと打って変わって起伏に富み、上り下りの連続だった。この起伏が非常に急で、特に合宿の日数を重ねて足に疲労がたまってくると、一つの坂を越えるのもきつかったのを覚えている。

また練習後に他の部員と一緒に過ごしたのも合宿ならではだった。寝泊まりした宿舎は４人から６人部屋のことが多かったが、１度だけ全員一緒の大部屋の事があった。どこに布団を敷くかなどささいなことでもめたこともあったが、普段あまり話をしない先輩や後輩ともバドミントンのことからプライベートのことまでいろいろ話した。また、練習の疲れをとるために合宿所の近くの銭湯（花園湯）までよく入りにいった。合宿所にも風呂は有ったのだが、泡風呂や電気風呂などもあり疲れがよくとれたので銭湯までいくことが多かった。その他にも検見川の合宿所ではＪリーグの選手や陸上

の有森選手など有名人とバッティングしたり、高校サッカーの選抜チームの練習を見に女子高生が押し掛けたりと、なにかと事件があったのも楽しかった。

つらいことも多く、やめたいと思ったことも多かったが、振り返ってみると楽しいことも多かったように思う。思い出の多い宿舎も平成７年に取り壊され、今では近代的な宿舎に建て替えられてしまったことを少し寂しく思う。

１年合宿

２年に進学する前の昭和43年の春休み、検見川で１年合宿をやった。主将は次期駒場キャプテンの予定者、小林健。主目的は駒場の練習を主体的に運営して行くための準備。同期の本格的な経験者は名門麻布中、高で鍛え上げた小林、飯倉の二人だけだったので、全員が新入生を教えるだけの力をつけるべく、基本ストロークの習熟を目指したのだ。

参加者は20人まで思い出せる。期間は３泊４日か４泊５日の本格的なもの。

きらめく朝露に濡れながら、クロスカントリーコースのランニングに始まり、体操、馬跳び、手押し車、坂道ダッシュ、手つなぎ鬼などの早朝トレーニング。昼間はみっちり基礎練習。学年の自主性や結束を高めるのが目的だから、上級生の参加は（おそらく）なく、１年生だけの相互研鑽。初日の夜のミーティングは自己紹介。どんな彼女がいるだの居ただの、いろいろ切ない話を聞いた。２日目は一人づつ順番に俎上に載せ、その人のフットワークやストロークの課題、弱点などを批評しあった。

何日目かの午後、これもトレーニングのつもりで全員でソフトボールをやっていたら、当時監督の木村さんがラケットバッグを提げてグラウンドに現われ、例のきょとんとした表情であたりを見回されたので、一同何となくバツの悪い思いをした。

ギターを持ち込んで本格的な演奏を聴かせた飯倉、この時だけでなくいつもフランス語の教科書を持ち込んで睨んでいた森安、練習着で擦れて痛いといって乳頭に絆創膏を貼っていた盛、寝物語の小宮、ロマンチックな歌を披露した小林など、思い出せば懐かしい。この合宿で我々はクラブに対する求心力を高め、互いの人となりを知り、一生の友となるきっかけを得た。

この形式の合宿はいつまで続いたのだろうか。メールで問い合わせたところではもう何十年もやってないようだ。ほんとにいいものだから、ぜひ現役諸君に再開をお勧めしたい。

前年（昭和42年）の１年合宿では、みな寝坊して予定の起床時間に遅れたので、反省のため川上主将以下全員がグラウンドに正座したという話を聞き覚えている。青春の香りが漂ってくるではないか。

（豊田　拓男）

４．女子部

女子部の夜明け前

昭和42年入学　　豊田　拓男

女子部のことを男が書くのか、というご不審もあろうが、多少の理由はある。大学に６年いるあいだ怪我ばかりして、ちゃんと練習できない時期が多かったので、故障中は折から入ってきた女子の練習相手をしていたこと。また卒業以来今に至るまで、ながく現役に接して一応部の状況を見続けてきたこと。それに、つい元部員の女房を持ってしまって、当時の女子部員の記憶をたどるのに、たまたま話を聞きやすい立場にいる、という個人的理由からである。

さて、駒羽会名簿を繰ってみると、昭和30年入学の大先輩からずっと飛んで、48年の旧姓池原浩子まで女子部員の痕跡がない。実際にはこの間、少数ながら男子部員に混じって共に体育館に汗を流し、途中で部を去った女性たちがいた。当時の部報の記録、および本人たちや同時期の男子ＯＢに取材した結果を元に纏めたのが以下の文章である。

証言を綴ると、昭和30年入学の小沢さん、深山さん以降41年まで、女子部員は影もかたちもなかった。36年春に２年生になった三浦、城石、小野の各氏が、駒場の並木通りで女子部員募集を大々的にやってみたが応募者ゼロに終わり、大いに面目をつぶしたという話がある。かわりに男子入部者が70名にも達し、人数を絞るのに苦労したとのこと。その後も毎年これに近い新入部員が入るので、女子部員のことなぞ考えるヒマもなかったというのが実態だった。男子の入部者が多いことや、女子の入部希望者が皆無だったらしい事などは、やはりこの時代を思わせる。

42年春、ひさびさの女子の入部希望者を、川上駒場キャプテンが怖い顔で、「女子は募集しておりません」と断った。

43年春も募集はしなかったが入部希望者があり、小林駒場キャプテンは、「入りたい者は入れてやったらいいじゃないか」と言って入部を許可した。三浦陽子、渡辺由美子の二人が新入部員に名を連ねた。二人とも小柄で未経験者だったから、教える方も教えられる方も苦労した。始めのうちは「当たらない、飛ばない、動けない」で、運動部の練習には見えなかったと思う。男子の半分くらいの負荷でトレーニングをやってもらったが、基礎体力を作るのも難題だった。

合宿の時、男子はドロップミックス、女子は上級生に球を拾ってもらうただのドロップ練習だったと思うが、一人が練習中とつぜんネットに歩み寄ってきて

「目が見えなくなりました」と言ったのには驚いた。どうして目が見えなくなるのか

さっぱり分からず、またそんなに疲れているようにも見えなかったのである。

同じ合宿の時だったか、もう一人の方が疲れて寝込んでしまった。心配になって部屋に見舞いに行くと、薄暗いなかに目をギラギラ光らせて布団から起きあがったので、いささかたじろいだ。倒れなかった方が心細げにそばにすわっていた。

この二人はいつ頃部を去ったろう。ストで44年の入試がなくなり、その秋に４年生を追い出し、翌春まで３年と２年の２学年（ストのため進級もできないのでじつは２年と１年）だけで練習をやったが、その時期にはもう姿を見なかったように思う。渡辺嬢はのちに関西方面のテレビ局のキャスターのような役でテレビ出演したので、42、43年組の間でひとしきり話題になった。

翌45年にも数名の女子が入部したが、すでに先輩女子部員はいなかった。腕立て伏せをやらせたら、「腕が太くなるとお母さんが心配する」と言って、やろうとしない子がいた。この学年の男子も大量入部で、入試中止の影響で２年生がいない分、特に熱心に鍛える必要があったから、女子には手が回らなかった。多分、全員１か月と持たずやめて行ったと思う。46年は女子の入部者なし。

47年、初めてまとまった女子の入部があった。塚内尚子、矢口温子、大沢真理、白倉弘子の４名である。うち塚内は２年からの入部。矢口が多少の経験者。

女子の練習は１年生だから４時から６時まで。メニューは男子と一緒で、トレーニング量は３分の２。最後は駒場１周（男子は大回り、または８の字の長距離ルート）のあと整理体操で終わり。とくに女子部員担当の男子というのはいなかったようだが、全体によく面倒を見てもらえたとのこと。４体（現在の２体）女子更衣室にはシャワーもなく、汗を拭いただけで着替えて帰ったという（あったと思う、という意見もあり、調整つかず)。当時の４体の男子更衣室は玄関を入った正面にあり、シャワー室(これは今と同じ位置)との間を泥だらけのラグビー部員が全裸に近いかっこうで堂々と往復するので、毎度目のやり場に困ったとのこと。帰りには駒場寮の売店に寄ってよく腹ごしらえをした。

この年の夏は京大戦よりも七帝戦が先になり、いずれも京都で開催。レギュラー選手が京都で七帝戦を戦っている間に検見川で合宿があり、３年生のイレギュラーの集団指導で練習をした。合宿を終えて京大戦に合流したら、試合前に首脳部の交替が発表され、主将が角本敬から伊藤正博に替わった。京大には、以前からある程度まとまった数の女子部員がいて、この年はオープン戦をやった。不参加の白倉を除く３人がそれぞれシングル３試合づつをやり、矢口が唯一の勝ち星をあげて１勝８敗。秋の一橋戦では、女子部員２名の一橋大と、やはりオープン戦をおこなった。

48年の２月末、男子主将から女子部員の一人に葉書が来た。
「これからの練習はきびしいものとなるので、体力をつけておくように　バドミントン部主将」とただ２行。この当事練習をサボりがちだった彼女への気配りだったのか、それとも女子部員全員に出したものなのか、今となっては分からない。生真面目さと含羞の伊藤主将らしい内容である。

この４月、女子では初めて運動部らしいキャラクターの池原浩子をはじめ、嶋村由美、百瀬純子、白坂みどり、武田牧子ほか１名が入部。この夏の京大戦が東大女子にとって初めての公式の団体戦となった。２Ｄ３Ｓで１セットも取れず惨敗。ほとんど素人からの２年目だから是非もなかった。

七帝戦は仙台で、これに初参加。試合結果は参加６校中６位。ほんの数年前までは各校ともほとんど女子部員の姿はなかったのが、一転６校で団体戦を組めるようになったのも、やはり時代というべきである。

この遠征では、パチンコで取った景品を大田豊が女子に差し入れてくれたり、仙台に親戚があるとかいう、一橋大のバドミントン部員Ａ君が、遅れて一人仙台に向かった〇子さんの電車に乗り合わせ、ふたたび宿舎に車で現れて、角田隆の車と２台で２年女子４名を乗せ、ドライブに出かけたりした。女子部員間では、Ａ君の狙いは〇子さんに違いないということになったが、結果から言えばこの企ては実らなかった。

49年の春先、上級生の４名が揃って退部した。塚内は４年となってバドミントンどころではなくなる。残る３名も家が遠かったり勉強が心配だったりで、本郷から駒場に乗り込んで、遅くまで練習するほどの気力か、熱意かに欠けていた。下級生が結構強くなって試合でも押され気味。指導する責任などにはさほど煩わされず、むしろあとを引き受けてくれる後輩ができたので、ホッとしてやめたのだという。

傍から見れば部内の重大な危機のようだが、本人たちにはそれほどの意識はなく、あまり深刻な話にもならず退部させてもらったとのこと。

「そんなことぐらい自分たちでやったら？」といった感じのことは言わないタイプの、優しい角田主務、緑川主務を始めとする男子部員の庇護に恵まれ（この点大いに感謝していた）、女子部を作って自分たちで切り回さなければ、といった責任感や気負いを持つこともなく、ただの女子部員として存在した彼女たちは、周りから見れば物足りなくもあったろうが、その意識は以後も東大女子部員の多数派の感覚として引き継がれて行く。

女子部の独立、あるいは自立のテーマは、ときおり論じられることはあるにしても、人数、技術等の基盤が整わないかぎりは観念論の域を出ず、運動部本来の意味から見た女子部は、いまだ『夜明け前』の状態と言わざるを得ないであろう。

昭和48年度入学女子部員の卒部まで

昭和48年入学　　江藤（旧姓池原）浩子

昭和48年春、駒場に行った初日か２日目に運動部の勧誘があり、入学前から考えていたバドミントン部に入部した。新２年の渡辺さんと白倉さんが机の後に立ち、新入生の列に声をかけていた。48年入学の女子部員が揃ったのはいつだったか、夏に向け練習が厳しくなった６月頃には６～７人いたように思う。白坂さん以外にも看学生の部員がおり、何となく６時以降の練習にも早い時期から参加した。

池原・百瀬がバレーボール、嶋村・白坂がバスケットと華々しくはないが高校での活動歴を持ち、運動部に違和感はなかった。何事にも巡り合わせは付き物だが、同じ学年に４人揃ったのは幸運だったと思う。四体の片隅の更衣室で４人の先輩達がよくしていた男子の先輩達の噂話（主に人物批評）を興味深く聞いた。

昭和48年春季男子リーグ戦では真面目に応援に通い、コートの周囲からバレーボールやバスケット仕込みの蛮声を張り上げた。「シャトルが飛んでいる間は静かにするように」と複数の先輩に注意された。後、女子のリーグ戦で某大学の選手から「東大は男みたいな応援をする」と言われた由だが男の応援しか知らなかったのだから当然だろう。

練習やトレーニングにはフーフー言いながら、圧倒的多数の男子部員に気後れは感じなかった。見回したところ体育館の中で女子一人だったこともある。男子が多数なのはキャンパスの日常なわけで、いちいち気にかけていては身が持たないのが現実だと思う。

昭和48年夏、京大戦団体戦全敗、仙台での七帝戦も全敗の６位だったが、こんなものかと落胆はなかった。

昭和48年秋、初参加のリーグ戦９部で７校中３位、１位の茨城大が８部に昇格した。48年入学の登録選手は池原、嶋村、白坂、武田、宮川、百瀬の６名。昭和49年春、２年の登録選手は池原、嶋村、白坂、百瀬の４名になった。リーグ戦では６校中２位、東京農大が８部に昇格。リーグ戦の前後、４人の先輩達が次々と退部し、２年始めで女子の最高学年になった。

昭和49年夏、京大戦団体戦全敗。東大で行われた七帝戦は６位だった。京大戦後、嶋村さんの母上の御実家に泊めて頂き、嵐山の花火大会見物に出かけた。昭和49年秋季リーグ戦は春と同じ２位。優勝校は不明。冬、関主将から松本主将に代わり、基本以外は男子と別れて練習するようになった。50年春季リーグ戦は清泉女子大と大東文化大に負け３位。優勝した清泉は順当に昇格したが、清泉は48年秋から同じリーグで

共に会場校になったこともあり、何となく置いて行かれた寂しさがあった。50年夏、京大戦団体ダブルスでようやく一勝。七帝戦は５位になった。七帝戦では戦績より会場の豊田自工スポーツセンターの充実ぶりと、終了後皆で行った志摩半島が印象に残っている。旅先で偶然名大のバドミントン部と行き逢った。50年秋季リーグ戦は大東文化大、日大、青山女子短大に負け４位。追いコンでは白坂さんが一足早く追い出される側になった。

昭和51年春、４年に進級。有賀さんが加わり、団体戦は４年の３人と３年１人で臨む事が多く、オーダー表を交換する度に平均年齢の高さを痛感した。春季リーグ戦は日大に続き２位。京大戦団体はダブルス、シングルス各１勝。札幌の七帝戦は結果的に２位になれたが、優勝した北大はもとより九大、阪大、京大と苦戦が続いた。その中で百瀬さんの対九大シングルスと池原・嶋村の対阪大ダブルスの印象が強い。百瀬、三浦（九大）は共に守ってつなぐタイプで、サービスオーバーが何回も続く中、三浦さんがオンラインのサーブをミスジャッジした。それが流れを決めたと断言はできないが試合後百瀬さんは「サーブがアウトになってくれたらと何度も思った。三浦さんも同じだったのだろう」と言っていた。阪大のダブルスはほっそりした美人ペア（多分３年）で、競って勝ったが、池原・嶋村は顔を狙ってスマッシュを乱発したと言われた。日大が抜けた秋季リーグ戦でようやく優勝し８部に昇格。就職の面接試験と重なり池原は入替戦不参加だったが、残留の不安はなかった。

上級生にはうるさく言われず、時に重圧となる伝統はなく、レギュラーを目指す熾烈な競争もない身軽・気楽な部員だったと思うが、団体戦を組めるかどうかの存亡の危機が見え隠れする状況が変わらない以上、その中でいかに楽しむかを考えるしかない。

大学内の拠り所としてバドミントン部の存在は大きく、遊びの場でも旅行やスキーによく行った。また追いコンでトロフィーを手にした４人のうち３人が、その後の生活を大きく方向付ける出会いを得た。残念ながら（ママさん）バドミントン現役は百瀬さん１人だが、「ダブルスは大学時代の自分より強い」そうで感心している。

20年前の女子部

昭和53年入学　　渋谷（旧姓宮田）紀子

東大バドミントン部を卒部して20年近くになりますが、当時の女子部を思い出して頭に浮かぶことは、あれだけの人数でよく公式戦を戦っていたなということです。

私が入部したのは昭和53年で、初めて先輩方の応援にいった関東大学リーグ戦で東大女子部は15部中９部に所属していましたが、この直後より３部以下が複数リーグ制になり、ピラミッドの底辺を支える５部に所属することになりました。４年の女子部員は０でしたので、３年の三種さん、２年の吉田さん、小森さん、松下さん、原さん、小西さんに１年の私、という７人のメンバーでした。新入部員20数名中、女子が１人というのも心細いものでしたが、男子部にも女子部にも高校の先輩が複数いらしたのと、先輩方がいろいろ親切にしてくださったので、居心地は良かったです。ただ、翌年の女子の新入部員も０で、三種さんが卒部され、看学の方もあまり練習に来られなくなってしまったので、事実上残りの４人――キャプテンで、どんな長距離を走ってもどれだけお酒を飲んでも顔色の変わらなかった吉田さん、身長170cmでアネゴ肌、頼もしかった小森さん、小柄だけれどいつもニコニコして練習好きだったムードメーカーの松下さん、それに私――だけで２複３単を戦うという、うっかり怪我もできない状態が長く続きました。大変ではありましたが、過ぎてみると楽しい思い出です。練習は男子のメニューの1/2から2/3をこなすもので、かなり厳しいものでした。当時は今のようにスポーツ医学よりも精神修養の意味合いが強い時代（？）で、練習中に水を飲むことは悪と考えられて厳禁されていました。夏合宿のクロスカントリーのランニングやリレーは毎年恐怖で、「移動クリア」といってホームポジションにチョークで書いた円の中に戻りながらクリアを打ち続ける練習を１時間もやった時は、本当に涙が出ました。練習の合間には冷房の無かった検見川の部屋で、皆ぐったりと横になってユーミンを聴いていたのを覚えています。（今にして思えばよくあそこまでラジカセを持って行ったものだと思います。）

夏の京大戦や七帝戦は、全力を尽くしてはいたのですが、各大学にインカレレベルと思われるような人達がたくさんいて、ほとんど太刀打ちできませんでした。私は２年の時から参加しましたが、京大戦は１勝４敗で負け、七帝戦も７位で、力の差を思い知らされました。

関東大学リーグ戦では５部の中では健闘していたのですが、あと一歩のところで2位に甘んじていました。筑波大学のように彗星の如く現れて、華々しく上位リーグへ上がっていったチームと一緒になったこともありました。お陰で後に全日本チャンピ

オンになったような選手のプレーを間近に見ることができました。国公立大学戦では男子部は活躍していましたが、女子部は１部に所属していた学芸大学が上位を独占していて、なかなか勝ち進むことはできませんでした。

私が３年になった時にようやく新１年生が入ってくれました。山田さん、武田さんの看学コンビ（漫才コンビとも言われていましたが）をはじめとした、元気いっぱいの新入部員に、部全体が活気づいた気がします。女子コーチとして昭和49年の小鷹さんに続いて51年の上野さんが指導して下さり、少ない時間ですが、女子だけの練習もできるようになりました。それまでシングルスは勝ててもダブルスが弱点と言われていましたが、女子同士のダブルスの試合をいろいろな組み合わせでできるというだけで、画期的なことでした。３年秋の関東リーグ戦では、ずっと４人で一緒に戦ってきた先輩方が卒部される前に何とかリーグ優勝したいと思ったのですが、あと１歩で力及ばず、万年２位から抜け出せませんでした。

レギュラー３人が抜けてどうなることかと思っていた時に、頼もしい新入部員が入ってきてくれました。田村さん、斉藤さん、福田さん、緒方さん達ですが、先輩に対する僭越発言も可愛く感じられた田村さんと、笑顔が印象的で「ドラミ」の愛称で親しまれた斉藤さんの２人は即戦力として大車輪の働きをしてくれました。メンバーが変わってもリーグ戦で２位、３位を保つことができましたし、七帝戦で５年振りに最下位を脱出することができました。斉藤さんとダブルスを組んで理工系大学戦で優勝したのも懐かしい思い出です。

大学生活４年間、練習が辛いと思ったこともありましたが、バドミントンを通して得たものは計り知れません。現役時代の楽しさが忘れられなくて、最近また区民大会に顔を出したりしています。

今後も東大バドミントン部の益々の発展をお祈り致します。

女子部について

昭和56年入学　升野（旧姓田村）伸子

私が入部した昭和56年には、４年生に宮田紀子（お名前はすべて旧姓にて）さんという大先輩がいらして、そして２年生に看学の武田亜夜さん、山田敦子さんがいらして、と、そんな時代でした。同期で入ったのは、斎藤ドラミじゃなくて美紀さん、福田かっちゃんこと勝代さん、緒方しげちゃんこと滋子さん、そして途中でやめた川瀬みゆきさんなどがいました。敬語を知らない私を中心に、騒々しく遠慮のないメンバーで、まわりの方々は困っていらしたことと存じます。

翌年には、複数の新入部員がいたように記憶していますが、結局残ったのは畑由加里さんだけでした。そして次の年は豊作（？）で、高瀬知文さん、近江直子さん、近藤尚子さん、平川ますみさん、途中でやめた石山厚子さんと、ずいぶん賑やかでした。

当時、私たちは５部でして、４部昇格をめざしていました。５部と４部のちがいは、Ｓ２、Ｓ３で、５部ではＳ１とＳ３がずいぶん実力差があるのに対し、４部はそれが均等化していたことでしょうか。東大のように、女子の人数がレギュラーの数とあまり変わらないような部では、やはり４部は遠いなあと感じました。また、女子部は練習相手がどうしても男子になりがちで、女子どうしで練習する機会があまりないので、思いきってお茶大などと合同合宿でもやればよかったかしらん？と考えることもありました。また、私の代のまわりの人は、怪我に泣いた人も多く、不完全燃焼のクラブでした（まァ、燃え尽きずにすんだということかな？）。

それでも、大学時代に楽しかったことと言えば、やはり駒場４体ですごした時間で、これは、卒部をした人たちは皆同じことと思います。私個人としては、駒寮で行われていたらしいマージャンに参加できなかったことはちょっと心残りで、25歳をすぎて覚えたことを後悔（？）しています。今度誰か相手をして下さいね。

私が４年の時は、自分は骨折をし、ドラミは３年で卒業してしまったし、かっちゃんは試験勉強で忙しく……と、淋しい限りでしたが、安藤文子さん、中村佳美さん、郡司真理子さんといった新入部員に恵まれたことは幸いでした。

今回、駒羽会の50周年記念行事をとりまとめて下さる方々、お忙しい中、本当にありがとうございます。久しくＯＢ会にも出席しておりませんが、皆様のことを本当に懐かしく思い出しております。

必死だったあの頃

昭和63年入学　　志村　もと子

まず、戦績をたどりながら、私が部にいた時代を振り返ってみることにします。

私が入部したのは昭和63年春、女子部は前年秋のリーグ戦で５部から４部に昇格したばかりでした。と書くと勢いにのっていた時期か、と思われるでしょうが、実際は昇格時のレギュラーメンバー４人のうち２人が抜け、しかもその年入部した我が学年は、４人全員が初心者という状況でした。その頃の先輩方は４部校としてやっていくことにさぞ不安だっただろうと思います。その年のリーグ戦は春・秋とも４部に残留できたのですが、先輩方が「４部の下位校は５部の上位校より弱いね」と話していたのを覚えています。

降格の最大の危機は翌年（平成元年）の春で、伊藤先輩がひとり奮闘されたものの、あと１本が取れず最下位、入替戦になりました。しかし相手校の棄権で運良く残留しました。結局、私の在籍中はずっと４部校だったのですが、リーグ戦はいつも「小指１本で４部にひっかかる」ような状態で、「この１校だけには勝とう」と目標を決め、オーダーに頭をひねり、とにかく粘り、必死になっていました。秋リーグの後、先輩が退部されて女子部は初心者ばかりの１、２年生５人が残されました。

翌年（平成２年）には、試合以前の問題が出てきていました。私以外の部員は看護学校生で、彼女たちは３年生の夏に卒部してしまいます。もし新入部員が来なかったら夏以降は部員がたった２人になってしまうのです。廃部かな、と思いました。いっしょに男子部のマネージャーでもやろうか、と後輩と話していたくらいです。でも４人も新入部員が来てくれて、廃部の危機はまぬがれ、新人の活躍で試合も順調にこなすことができました。この後のことは、この年入部した小西さんの記事と多少重複するかと思いますが、私も少し触れていきたいと思います。

私が４年生になった平成３年度は、部員も次第に増えて一時は10人にもなり、勢いづいた年でした。廃部の危機から一転、黄金時代が来たようでした。国公立戦では団体戦で準優勝しましたし、秋のリーグ戦４部２位は今でも女子部の最高記録として残っています。リーグ戦最終日は初めて３部昇格の可能性を感じて興奮し、結局優勝は逃したものの、降格・廃部の危機を経験した者としては、ここまで来たんだ、と大変感慨深いものがありました。

今、私がいた時期を全体的に振り返ってみて、私なりに感じることがいくつかあります。

ひとつは、看護学校の部員がメンバーの中心になった時期だったということです。

最近は看学生はあまり入部しなくなったようですが、その頃は人数も多く、実習中も駒場へずっと練習に通ってくれ、多忙な中で頑張って部を支えてくれました。特に、同期の３人にはずいぶん負担をかけてしまいました。私が靭帯損傷して手術・リハビリと全く戦力になれなかった３年生の１年間、普段の練習・試合はもちろん、新入部員の指導など、部の運営のほとんどが、最終学年にいた彼女たちの肩にかかってしまうことになり、どんなにか大変だっただろうと思います。

もうひとつは、部の雰囲気の変化、体育会系からサークル風へという変化です。これは、練習が厳しいと部員が入らず、入っても続かなくなったためです。当時はその変化に不満を感じながらも、部員数の確保のためには仕方がないとあきらめていました。そのためか、初心者・経験者ともに試合に粘りがなくなり、プレースタイルが変わったようでした。初心者が育つかどうかも不安でした。私が入った頃の女子部は、とにかく“粘る”、根性と体力のバドミントンで、どんな大会でも団体戦が終わるのは必ず最後、いつも粘って長〜い試合をし、結局負ける、なんて自分たちで言って笑っていたものです。ここ数年の様子はよく知りませんが、今、『初心者が強くなる東大・粘りの東大』は健在なのでしょうか？

卒部生の様子も変わってきました。私が女子部の先輩方に対して持っていた印象の中には、必死に頑張って疲れきって卒部するか、力尽きて退部して、もう二度とラケットを持たない、部へもめったに顔を出さない、というものがありました。でも、後輩たちには卒部後もバドミントンを続けたり、選手権や京大戦などのイベントに顔を出したりする子が増えました。以前より余裕が出てきているのでしょうか、これはいい傾向だと思いますが、ひょっとしたら先に述べた部の雰囲気の変化が関係しているのかもしれません。

男子部との関係にも、やはり変化があったと思います。私は、始めの頃は本学と看学に対する男子部員の態度に違いを感じたり、お荷物だと面と向かって言われてつらい思いをしたりすることがあったのですが、次第にそう感じることが少なくなりました。リーグ戦にはお互い応援に行き、同期で遊びにも行きました。男子部の先輩方にもいろいろ相談にのってもらいましたし、ＯＢの方々にコーチしていただいたことも多く、本当にお世話になりました。

以上、思いつくままに述べてきました。違う考え方、感じ方をしていた方もあるかとは思いますが、一部員の思い出ということでどうか御容赦願います。

なんだかんだ言っても、結構いい感じで似てた

平成２年入学　　小西　美恵子

＜勧誘＞

「あ、すいません、入学してからもうやりたいことは決まってますか？」
“つかみ”のこの言葉を、一体何度繰り返したことやら。
サクラの花びらの下、狭いテントの中で押し合いへしあいの入部勧誘合戦。
なかなか話を聞いてもいいよ、といった表情には出会えない。
ビラを手渡し、「第２体育館で練習やってるから、ぜひ見学だけでも来てくださいね！」

女子部の永遠の、とも言って良いであろう、テーマである部員の確保は毎年悩ましいものだった。
当時は医学部付属の看護学校という強い味方があったのだが、それでも思うようにはいかなくて、各種運動部の女子部同士で、情報交換をしあっては協力した。

金曜日の後半練では、体育館の向こう側で、バドミントン関係のサークルが活動していて、山ほど女子学生が見える。
あああもうじれったいな、そんなとこでバドミントンやったって、１時間に10分ぐらいしか羽根打てないよ、こっちにきたらいいのに！

しかし運動会とサークルの間には、さても高い壁があるのだった。

＜練習＞

確かに女子と男子では、勝ち方と言うか試合の運び方が違う。
スマッシュは速い方がいい、でもクリアーがきちんとコートの端から端まで飛ばせる方が、ときには大切だったりする。
練習のすべてを男子部に依存していた当時は、「女子練実施」が非常に難しかった。

最大の理由は、なにより全員練習に来たとしても、瞬間最大風速で、二ケタにいくかどうか。
せいぜい多くて５～６人。
４人以上いれば、女子練ができるじゃないか！

そう思う向きもあるかもしれないが、もう一つの理由が立ちはだかる。
各自の経験・技術・体力の差が大きかったことである。

この差は女子部員の中で、片方からは“いらぬ遠慮”、もう片方からは“足らぬ配慮”を絶え間無く生み出すこととなり、ただでさえ少ない部員の中途退部のきっかけ、あるいは直接の原因となった。
反省してもしてもし足りないが、当時はどうしていいのか、本当に、本当に、わからなかった。

＜戦績＞
1991年から1993年にかけて、女子部のリーグ戦最高記録は４部２位、七大戦は５位である。
それ以外のリーグ戦では、４部５位が「いつもの場所」だった。
女子部員が足りない足りないと言いながら、一度も棄権することはなかった。
シングル３本、ダブルス２本で決まる女子の団体戦は、オーダーが命とり、あるいは命拾いになることも多々あった。

リーグ戦の男子部の試合の応援にも行った。男子部員の方々も、よく応援に来て下さった。
応援に来てくださった方々同士で、お昼の休憩時間にパタパタとスリッパの音をたてて、コート内でドライブやプッシュの練習をしてるのをみて、（もちろん私服で。）なんだか妙に嬉しかったのを覚えている。
“リーグ戦会場”、という非日常空間の、ややこわばった空気の中で、いつも見なれている男子部員の皆さんの姿を見ることは、日常空間である第２体育館を思い出すことができて、「応援に来てくださってるから頑張らなきゃ」という気持ちと同時に、なんだかほっとできて、それはとても、ありがたかった。

京大とは定期戦＋七大戦で、いつも接戦だった。おそらく実力的に見て、双方とも、「東大には勝たなきゃ」「京大には勝っとかなきゃ」と思っていたにちがいない。
少なくとも東大側はそうだった！

一橋戦、東工大戦も、時にはオープン戦になることがあったが、総じて接戦だった。
彼女達とは国公立戦・理工系戦でも（残念ながら団体戦は組めなかったが個人戦で）

よく対戦した。
個人差はあるだろうが、東大vs一橋or東工大というドローでないときは、一橋か東工の選手を応援することが自然だった。
これは七大戦での、京大の選手に対しての応援にも通じるところがある。

＜天狗＞
500円～1000円ほど同期の男子部員が支払う額から引いてくれる、「女子わり」にはだいぶお世話になった。
これこそ個人差があるだろうが。
その有難い彼らが次々と撃沈されて行く中で、ぬくぬくとマイペースで、はちみつレモンサワーだの梅酒だのを飲ませていただいた。
彼らがタクシーで最寄の部員の下宿にシュートされているころ、生き延びた私たちは交通機関のスケジュールが許す限り、先輩方の美声を拝聴する機会も与えられた。

＜追いコン＞
この日は大荷物である。
追い出されるときも、追い出すときも。
試合が終わってからの更衣室は、さながらバーゲンセール会場のように、ごった返す。
なぜならこの日ばかりは盛装でなければならない！

下級生の時は、まずは試合の後片付けがある。
終わったら、スーツを着るだけでいい（失礼！）男子部員をうらやましがりながら、ほうほうのていで着替える。
改築される前の、うす暗い、鏡が曇った更衣室では、慌てているために床に落としたメイク道具も、そう簡単には見つかってくれない。
急げ、エミナースに遅刻してはいけない。
エミナースでも受付という仕事がある。
走る。
重い！
普段の荷物に、追い出される先輩に渡す花束、記念品、色紙の入った袋のどれかがプラスされている。

この色紙の入った袋をつくり、追い出される先輩方の顔を縫い取りするのも、女子部

員の役目だった。
どの先輩の顔を誰が担当するかで、ちょっとしたネゴシエーションが毎年続いた。
僭越ながら、「構造上」難易度の高い先輩は、最後まで残った。

1984年春季リーグ戦プログラム　女子５部Ｄ

東京大学	氏名	学年	出身高校	抱負
☆部長　上野　正	1. 田村伸子	4	筑波大附属	「若いもんには負けられん。」と体力の衰えを隠して、ひたすらに見栄を張ってトレーニングをする４年生二人。そんな彼女らを尻目に、量も質も豊富な２年生群団は一段とパワーアップを図っています。間にはさまれた３年、次期主将某嬢の運命や如何に……？ 提供は東大バドミントン部でした。
☆監督　村田光二	2. 福田勝代	4	青山	
☆主将　河野匡	3. 畑由加里	3	富山中部	
☆主務　佐伯修	4. 高瀬知文	2	八戸	
	5. 石山厚子	2	秋田	
	6. 近江直子	2	富山中部	
	7. 近藤尚子	2	柏原	
	8. 佐伯久美子	3	桜蔭	
	9. 平川ますみ	2	お茶大附	
	10.			

1991年秋季リーグ戦プログラム　女子４部

東京大学	氏名	学年	出身高校	抱負
部長　☆上野　正	1.志村もと子	4	筑紫丘	しばらく４部５位が続いている東大女子ですが「こにゃんちょし」新主将のもと飛躍をめざして、女子一同燃えています。
監督　☆壁矢和久	2.小西美恵子	2	浦和一女	
主将　☆小西美恵子	3.酒井彰子	2	町田	
主務　☆山下真智子	4.橋本陽子	2	雙葉	
	5.山下真智子	2	学芸大附	
	6.飯塚陽子	1	渋川女子	
	7.池田知美	1	磐田南	
	8.中島智恵	1	掛川西	
	9.			
	10.			

平成５年～９年、女子部を支えた人々

平成５年入学　　雑賀　喜代美

平成５年４月、女子バドミントン部は４年の小西美恵子主将、看護学校３年生の飯塚陽子先輩の２人だけで、非常にこぢんまりとした部でした。そこへ入部してきたのが、根本美紀子さん、大河原万紀子さん、高本伸子さん、藤沢礼子さん、と雑賀喜代美の５人。女子部は一気に賑やかになりました。雑賀以外の４人はバドミントン初心者であったため、吉田女子部コーチに基礎の基礎から教えていただき、それぞれのバドミントン部生活がスタートしました。

初めての春リーグは、小西先輩のシングルス、小西・飯塚組のダブルスが取れても、飯塚先輩、雑賀のシングルスがなかなか取れず、２－３で敗れ続けました。この時、バドミントンを始めて１ヶ月足らずの根本さんが、雑賀と組んでダブルスに出場しました。やはり点数は全然取れませんでしたが、めげることなく、「次は勝ちたい」と、意欲を見せた根本さんの姿が印象的です。全敗で迎えた最終日、これが引退試合となる飯塚先輩がシングルスで勝利し、４部残留が決定しました。小西先輩の引退試合となった秋リーグでも、小西先輩がらみの２本以外がなかなか取れませんでした。やっと雑賀のシングルスが１勝し、４部残留が決まりましたが、確実にポイントを取りつづける小西さんの偉大さを身にしみて感じたとともに、先行きに不安を感じたリーグ戦となりました。

平成６年春、初めての後輩、遠藤賀子さんが入部しました。遠藤さんも初心者でしたが、持ち前の体力と根性で、めきめきと力をつけていきました。佐藤和也女子部コーチの下、この年の春リーグは、同期５人フル出場でがんばりましたが、先輩方の抜けた痛手は大きく、１勝もあげることができずに５部に転落してしまいました。そしてその年の秋リーグは、初めての５部リーグとなったわけですが、審判のいいかげんさ、シャトルの質の悪さなどに、４部リーグとの圧倒的な違いを感じ、絶対４部に戻りたいという思いを強くしたことを憶えています。

平成７年には、山崎彩さん、加藤紘子さんが入部しました。山崎さんは一見頼りなさそうに見えましたが、遠距離通学にも負けず練習をがんばっていました。加藤さんは芯の強い女性で、学業も練習も意欲的に取り組んでいました。この頃、藤沢さんはシングルスで他の初心者と差をつけ、皆の母親的存在の大河原さんはダブルス専門として根本さんとペアを組み、美しいフォームを完成しつつあった高本さんが雑賀とペアを組み始めました。そして春リーグでは、それぞれのメンバーがポイントをあげることができ、５部２位となりました。更に伊藤恒有女子部コーチに御指導いただき、

秋には４部昇格できるのではないかと期待を感じました。

しかし３年生という学年は、多くの部員にとって、この部活を続けていく上で本質的な問題を突きつけられる時期であるように思います。この頃、学業との両立等々、それまではうまく行っていると思っていた、様々な問題が嵐と共にやってきて、快調に成長を続けてきた女子部３年生の勢いは衰えを見せはじめました。何のためにバドミントンをやるのか、どうして運動会でなければならないのか、自分に運動会に在籍する資格があるのか…。それぞれが悩み苦しんだ時期だったのではないかと思います。

平成８年春、岩井佳世子さん、青木麻由美さんが入部しました。岩井さんは雑賀以来の経験者で、地獄のような高校での部活を乗り越えてきた女性でした。青木さんは初心者ですが、ものすごく負けず嫌いな女性でした。春リーグでは、この頃までに驚異的な成長を見せた遠藤さんが、４年生に代わり単複両方でポイントを稼ぎました。

この４年間に入部した女子部員のほとんどは、バドミントン初心者でした。京大は三谷先輩、川向先輩、宮重先輩、向坂先輩、永井、出島、東、稲岡と、次々に経験者が現れ、他の七大学はイレギュラーにも経験者がたくさんいる状況で、彼女らはそれらの相手と対等に戦ってきました。試合では負けることが多く、勝って嬉しい思いをすることはとても少なかったと思います。それでも、ＯＢ・男子部員のみなさんの激励や協力、そして何より部員一人一人の強い意志で、４年間シャトルを追いかけ、それぞれが何かをつかんできたと思います。

平成８年８月、４年間一勝もできなかった七大戦の、最後の最後で勝利することができました。私にとってはこの１勝が、４年間がんばった自分への最大の御褒美だったように思います。卒部して３年以上経つ今でも、運動会バドミントン部に関わった、すべてのみなさんに対する感謝の気持ちでいっぱいです。

「女子部」から「チーム」へ

平成８年入学　　岩井　佳世子

いつか、男子部の先輩にこんなことを言われたことがある。「女子部はぬるま湯だ」と。それが女子部のことを親身に考えて下さっての言葉であることはわかっていても、当時は随分厳しい言葉に思えたことを記憶している。しかし今、振り返って思うと、この言葉の正しかったことがわかるのである。

人数が少なく、またその多くが大学始めということもあって、「女子部」として独立した活動は現実的には難しく、男子部と同じ練習に参加してきた。

男子と打つことはそれ自体で得るものが大きく、男子部と同じ練習をできるということは女子にとって重要な財産であると思う。他校に比べ初心者からはじめた場合に特に成長が著しいと言われるのも、わが部の練習が充実しているためであろう。

しかし同じ練習をしていても、女子部はやはり別個の存在である。女子としての試合があって、そのためのチームとして自立しなくてはならない。にもかかわらず、練習に関しては男子部に甘え、その一方で女子部という内部では明確な目標と方向性を持った「チーム」が育たない状況があった。

女子部は長らく５部でリーグを戦い、七帝戦においては一勝することが難しいのが現実である。勿論、それでも勝敗にこだわり、それを目的に練習してきた。しかし大学始めの者が主体の女子部では、正直言って勝つことへの意識を持つには時間がかかる。そしてそれがある程度容認されてきたことも仕方がないことではあるが、人数の少なさゆえか、全体として意識が低く馴れ合う体質が出来上がってしまっていたようにおもう。

加えて、私の知る時代は古川さんの代を中心に男子部が強かった時代で、男子部には自然と競争があり、各自が自主性を持って取り組むことが重んじられた。それはとても理想的ではあったが、女子部内においては競争も無く、目的を見失いがちで、それでも試合には出られる、あるいは出なくてはいけない、という「ぬるま湯」の中での自主性がどれだけのものをもたらすといえるだろう。しみついた体質がさらに意識を低くする、ニワトリと卵の繰り返しだった。

そういう意味で、女子部コーチという指導者を得たことは本当に大きかったと思う。現コーチの吉野さんに週１日、メニューを組んでいただき、女子として必要な練習を中心に「女子部練」として取り組んでいる。女子部練では、できることから、自分達のためだけに組まれた練習をすることができる。これらが技術的に目に見える向上をもたらしたことは、自分達でも感じられた程である。しかしそれ以上に、こうした練習

は女子部としての目標や、なにより自分で自分のバドミントンを考え、取り組む姿勢を生んだように思うのである。

確かに、男子部と同じ練習に参加することは、ハイレベルなものに触れることができ、得るものも多い。しかし一方では、やはり無用の劣等感を植え付け、女子部員の自信を失わせていたように思う。勿論、男子部に私達を見下す風があったというのではないが、明らかなレベルの差を感じるうちに、自分達の中で何かねじれたものが育っていた。いつか、男子に混じってその端のほうで小さくなっていたのだと思う。

そんな私達に、自分達が中心となって取り組む女子部練は、ある意味での自信と、「自分達のバドミントン」を明確な形で与えてくれた。何より、熱心に指導してくださるコーチがいるということで、外からやる気と自主性を喚起してもらうことができ、またそれを自分達の中に根づかせることができた。

今の女子部には、互いに競い合う雰囲気も自然と生まれていて、とても自信に満ちていると思う。とてもいいチームになっている。人数が少ない女子部では、各自の果たす役割が大きいため、一人一人に自主性が育てばチームとしての得るものも当然に大きくなる。「ぬるま湯」であった頃の互いの馴れ合いも、ほんの少しずつ各自の意識が変わればきっと大きく違ったはずであったが、それを見つけるきっかけが無かったのだと思う。今の女子部を見て強く感じられるのは、チームが一人一人から成り立っていること、そして自分達で作るものであるということである。

私の知る間で女子部は変わったと思う。この間戦績としてはあまり振るわず、ここに書くこともあまり無い（といっても全員で得た成績なので私がこういうことは不適切なのだろうが）。一時は本当にリーグも降格必至と言ったチーム状態のこともあった。しかし現在は、今年の春リーグで５部２位となったように、確実に４部もねらえるチームになってきている。これは勿論、現役選手と吉野コーチの頑張りによるものである。成績としては雑賀さんの代での七帝戦一勝が私達にとって最も大きかったが、これから今のチームでそれ以上の成績を残してくれることを期待し、エールを送りたい。

女子部の強化について

女子部コーチ　平成６年入学　　吉野　崇

現在、女子部員の人数は非常に少なく、戦力となる部員の半数は大学からバドミントンを始めた人が占めるため、主に基礎技術の増強が目的で男子部員とは別の練習をやらせてもらう日を週一度設けさせてもらっています。もちろん、技術的にバドミントンが上手くなっても試合に勝つことが出来なければバドミントンの面白味も半減してしまうので、試合に勝つことを前提に練習内容を考えています。関東学生選手権、国公立戦、理工戦などの個人戦はトーナメント形式で行われ、一度負けるとその時点で終了し、また、いずれの大会も優勝するほどの実力はないため、くじ運に左右されがちです。バドミントンは本来個人スポーツですが、チームの総合力で勝つことのできる関東学生リーグ戦、京大戦、七大戦での団体戦で勝つことを目標に練習に取り組んでいます。これからぞれぞれの大会で勝っていくためにはどのようなことが必要かを考えてみたいと思います。

関東学生リーグ戦では、現在５部に属し上位に食い込む実力をつけてきました。５部で優勝するチームの特徴は、他のチームに見られるようにダブルスやシングルスで極端に弱い選手がいないといった点です。また、選手層も厚く、ダブルス専門、シングルス専門の選手がいます。弱点があるとすれば、強力なショットをもっている反面、細かいミスが目立つ点でしょうか。これから５部で優勝し、４部に昇格する為にはこちらのミスを極力減らし、いかに持久戦に持ち込むかが大切だと思います。

七大戦のプレマッチとしての位置付けもある京大戦ですが、京都大学は例年コンスタントに女子部員が入部しています。そのため、男子と女子は別々に練習しています。東京大学の場合、女子部だけで練習をするには、部員の人数も大学以前からバドミントンをしていた人も少なく、男子と女子がすべての練習を別々にすることは不可能に近いです。京都大学では選手層が厚く、女子部員の自主性があると思います。２複３単で行われる団体戦もここ数年、ほとんど勝ったことがありません。ただ、京都大学でもこの２～３年は入部してくる部員の大半が大学からバドミントンを始める人で、僅差のゲームが増えてきました。接戦でゲームを物にする勝負強さが身につけば京都大学に勝つことが出来ると思います。

七大戦の女子はレベルが高く、京大戦で東京大学がほとんど勝つことの出来ない京都大学であっても、５位、６位が当たり前なレベルです。ただし、七大戦の中位校は関東学生リーグの５部で優勝するチームを少し強くしたような感じなので、関東学生リーグの５部で優勝する為にも中位校と接戦を繰り広げる必要があります。七大戦は、

万年最下位の脱出が当座の目標なので、とにかく京都大学に勝って、あとはどれぐらい星を伸ばせるか、という感じです。

いずれの大会でも個々のショットの強力さで試合に勝つというより、コート全体を大きく使った、繊細緻密なバドミントンで勝つ。そのような試合が出来るようになれば自ずと勝利への道は開けてくると思います。必要となってくる要素は、「コートの隅々まで移動できるフットワーク」、「ミスなくコースに打ち分けられる安定したストローク」、「相手の得意なコースに返球しない危険察知能力」、「最後まであきらめない集中力」が大事だと思います。やはりラリーを続けなければ試合になりませんから、最初に取り組むべきはフットワークとストロークだと思います。

現在女子部だけで行う練習メニューは女子部コーチが考えています。その利点は、選手としての主観がなく、あくまで第三者として客観的な立場で練習内容を決めることが出来る点です。選手個人個人には能力差があり、バランスよく練習内容を決めるにはやはり客観性を持つことが必要だからです。また、練習の意図を把握し、細かい指導をすることが可能です。欠点は選手の自主性がなくなってしまう点です。与えられた内容をそのまま行うだけでは、練習に奥行きがなくなってしまいます。練習内容をどれだけ理解してもらい、どれだけ自分の中で消化し、発展させてもらうかは、これからもっと考えてかなくてはならないことだと思います。

1973年（S48年）秋季リーグ戦プログラムより
新規加盟校紹介

東京大学（女子）
「まだ女子はいるかい。」と時々みえるＯＢの方に言われながら女子部員が定着して１年半になります。週３回の練習に顔をそろえる部員も10人とずいぶんにぎやかになりましたが、高校時代の経験者が大変少なく、練習は主に男子部員に基本から教わりながら強くなる日を夢みて試行錯誤を繰り返しています。はじめてのリーグ戦に皆張り切っており、また練習試合も積極的にやって行きたいと考えていますのでどうぞよろしくお願いします。

５．部の在り方

東大バドミントン部の在り方

昭和37年入学　　森本　剛

年月の経つのは早いものでバドミントン部のＯＢとなってから30年以上になる。いろいろあったが、バドミントンそのものとは、主として激し過ぎて楽しむどころではないという体力的な理由から現在は疎遠になっている。其の一方各種の駒羽会の活動や行事には声がかかれば公式、非公式にかかわらず可能な限り参加している。そういうことを通じて新たに面識を得たり、無理を承知で頼みごとをお願いするＯＢの方々もいる。かつてバドミントン部に所属し、現在駒羽会に所属することによる御利益であり感謝している。

現役時代の部での出来事は今でもはっきり覚えていることがたくさんある。部の活動が生活のなかで大きな比重を占めていたということであろう。それらの多くは30年誌に記したので省略するが、部の在り方とも関連するので私の部や大学での生活のあらましを述べてみる。駒場での１、２年生時、当時の教養学部にいたころは適当に勉強もして部活動に打ち込むことができた。その後本郷の理学部化学科に進学して、現在の飯の糧となる化学を学ぶことになってからが大変だった。リーグ戦で１週間か10日程大学を休んで出てみると、授業が全く理解できないのである。進学時のガイダンスで、理学部での授業はすべて連続しているので休めば分からなくなると言われたとおりになった。部の行事で何かと休むことが多く、このようなことがよくあって慌てた。また、本郷で学生実験を終え、駒場に５時半前後に着いて９時半過ぎまで練習し、長距離通学であったため家に着くのが12時前という生活は、１日おきとは言え若い体であってもなかなか疲れがとれず、授業でよく居眠りをした。このようなわけで大学の最もアカデミックな部分と最も非アカデミックな部分を揺れ動き、ふらふらしていた。人生のかなりの部分を経験した今では、大学は一番下の成績で卒業し、後から追いつけば良いぐらいの腹の決め方もできるが当時は無理であった。それでも、皆に助けてもらったし、前後左右の人々と強い心のつながりがあったのであろう、どちらも満足とはほど遠いものではあったが、バドミントン部を卒業し大学も卒業した。

優れた組織とは、目的が明確でそれに沿った成果の上がっている組織である。即ち、バドミントン部で言えば、よく練習し実力が向上し、実力と同等以上に勝つ状態である。実際、力が向上し、実力と同等以上に勝つ時は皆の気持ちが一つにまとまって目的に直進していた。逆に負けが込むと、私の知るどの世代でも、必ずもめごとが生じ、部の在り方についての議論が起きた。議論の中身は人間関係も含む広いものであったが、不思議と実力向上を狙いとする科学的なトレーニングや方法に関するものは、当

時のスポーツ全体がそうであったように少なかったように思われる。個々の実力向上は個人の創意と工夫にまかされていたが、それぞれ時間が無かった状況ではもっと近代化すべきであったと残念に思っている。そのような目で見ると、なされた部の在り方に関する議論は見当はずれのこともあったが、多くはまじめで真剣なものであった。勝つための負けであったり議論であったのかも知れないし、その意味で心のつながりがあったと言える。

バドミントン部は既に50年の歴史を有しはするが、東大の運動会のなかでは、相対的に必ずしも古い歴史と伝統を有する部ではないし、予算の規模も大きくはないと思う。また、バドミントン自身も国内はもとより世界的にもマイナーな競技である。しかしＯＢ会（駒羽会）の結束の固さと活動の活発さは、50年誌の発刊の動きにもみられるように、東大の運動会のなかでもトップクラスに位置づけられるように思う。これは初期の創部時代のＯＢに人を得、その背中を見ながら成長し、その精神を引き継ぐ優秀な人材がそれぞれの時代に数多く輩出した結果であると思う。強く、勝つ、に越したことはないが、それぞれに体力、資質の限界や時間の制約があることも事実である。現役時代に真摯な努力を行うこと、それによって養われた体力と気力を生かして社会へ貢献をすること、そしてそれらを互いに認め合い長く交流を行えることが部のあるべき在り方であると思う。

50年の歳月のなかで亡くなられたＯＢの方々もおられる。お世話になったことが忘れられず残念である。ひたすらご冥福をお祈りする。また、バドミントン部ならびにその延長である駒羽会の発展にささやかながら貢献していきたいと考える。

我々の時期における東大バドミントン部

昭和40年入学　　塚本　壽雄

我々の在籍した昭和40年度から43年度において、東大バドミントン部は揺れ動いた。我々の時期を特徴づける最大のものは、部の在り方に関する、合宿やミーティングでの真剣な議論と、その結果に基づく改良の試みであったろう。

その直接のきっかけとなったのは、昭和40年に起こった東京農大ワンゲル部の「死のシゴキ」事件だった。事件自体は、同部における上級生と下級生の封建制度そのままの関係が最悪の結果をもたらしたものであったが、我が部でも「対岸の火事」と見ることはできないと重く受け止められ、上級生がリードを取って、下級生との関係を含む部の在り方の見直しが行われて、各部員の所感を載せた臨時の部報が横山さん（昭和38年入学）によって編まれた。

当時、部は、対外試合においては、圧倒的に強い３年生(38年組)がレギュラーのほとんどを占めており、この結果、２つの問題が発生していた。１つは、同じ３年生の間でも、使えるコート数が限られている(当時は、第一体育館に３面。練習は、駒場が４時から６時、その後本郷から合流、８時まで上級生と下級生のレギュラー格が中心。)という制約があった結果、レギュラーとそれ以外の者(ノンレギュラー)の間ではっきりと練習におけるコート利用に格差がついてしまっていたことである。さらに１つの問題は、その下の２年生(我々の直接上級生)に、１年のうちに部を去るものが多く、残った者についても、一部を除き、上級生と技能にまだ相当の差があったことに発していた。こうした中で、この人たちは、２年生として下級生の指導の責任を果たしつつ自分たちを早く強くしなければならないという難しい問題を抱える一方で、上級生からは常に圧力を受けざるを得ない環境にあり、これが３年生と２年生との関係を必ずしもスムーズなものにしない状況があったという問題である。

これにはまた、理由もあったといえよう。当時、我が部は、昭和39年の七帝戦で過去３年間の首位から一挙に６位に転落し、また、秋のリーグ戦でも一橋との入替戦に敗れ３部に落ちたことから、この失地を回復することが部にとって至上命令であったのである。

そのためには、昭和40年の冬以降、新たに３年生になるメンバーの強化が最重要となり、実際これらの人たちは激しい気迫で自らが「強くなること」に取り組んだ。そして、昭和40年のシーズンには、春のリーグ戦で２部に復帰したのを始め、すべての対抗戦に目覚しい成績を修めることとなった。しかし、その陰には前述したような部活

動上の矛盾のようなものも存在していたのであり、そのことは上級生も認識するところであった。

こうして、農大ワンゲル事件以降、我が部では上級生・下級生の関係の在り方と同時にレギュラー対ノンレギュラーの関係の問題、すなわち同じ目的をもって部に集まった人間に部活動の上でどう平等を保障するかの問題が相当の期間にわたり共通の課題認識となったのである。

前述の臨時部報において、当時の主将の北浦さん(昭和38年入学)は、スポーツを「高度に楽しむ」ことを求めて各部員が部に対し全人的に参加することにより部活動はより実のあるものになり、問題解決の方向も見つけられるのではないかとされた。そういう雰囲気を皆の意識的努力で作り上げていくことが重要とも述べられた。(30周年記念誌『三十年』所収「僕たちは何をするのか」)

その後、昭和41年度の駒場主将であり、38年組の去った昭和42年度には、前述の39年組有力者が体の故障等から辞されたことにより、３年生で部を率いることになった伊丹は、次のようにより尖鋭に部の改良問題を提起し、実践を図った。

すなわち、「３、４年生になるとレギュラー・準レギュラーしか残らない」ような部は異常であり、部は部員全体の部であるべきこと。部員全体が「強くなる」という目標の下に互いに励まし合いつつ自らを鍛えることがまず重要であって、レギュラーを中心とした運営はこれを排すべきこと。また、リーグ戦（当時３複６単）など現行の形式で行なわれる試合には限られた人数しか出られない以上、学連や対抗戦での部の勝利を第一とする運営をすれば、結局レギュラー中心に帰さざるを得ないため、その方針は改める必要があり、やる気のある人間が数多く出られる試合の機会を増やす一方で、現在の試合に対しては、レギュラーに独占させるのではなく、できるだけ多くの人間（ただし、これだけ練習したのだから試合に出るのは当然との自負があり、周りからも認められる者）に出場機会を与えること。これを理想としたのである。(同『三十年』所収　「部活動を考える」)

もとより実際には、直ちにこれがすべて実行されたわけではなかったが、既に春の２部リーグ戦では、ノンレギュラーで実力を加えてきたと目される者をオーダーに入れることが行なわれた。しかし、こうして始まった実践も、秋のリーグ戦中のある出来事により、完遂を見るには至らない結果となった。

その年の春、部は対外戦績に関する限り、昭和40、41年度にわたって２部５位まで引き上げるなど活躍した38年組が卒業で抜けたあと、前述した39年組の事情もあって、新たな陣容では穴をすべては埋められず、再び３部に落ちた。そして、その秋、リー

グ戦の第１日第２戦横浜市大戦で、全く出場経験のない者を含め全員２年生で固めたオーダーが組まれる「事件」があったのである。結果は、２試合を取っただけでの惨敗であった。以後は再び順当なオーダーに戻ったものの、そのシーズンの成績は２勝３敗、一挙に３部５位への転落という結果になった。

その年末、主将は交代し、同期の碓井が、部の改良の基本方針は維持しつつ、伊丹の下での１年間の部としての経験を踏み台に、新たに部を率いることとなった。

どうしたことからそのオーダーが組まれたか、今となっては思い出すよすがもない。確実に勝つことを考えれば、これほど大胆なオーダーには異論も出せたはずだが、そのままとなったのはなぜだったろうか。伊丹の方針を受け止め、これに従って進んで来た以上、止めるに止められなかったということか。

しかし、その後しばらくの部の歩みを見ると、この出来事のもたらしたものは小さくなかった。まず、この秋のシーズンは、以後相当長い間の３部での低迷の始まりとなった。あのオーダーがなかったら果たしてどうだったか。次に、部の雰囲気にも色々波紋が及んだ。また、この後現役とＯＢとの関係も一時硬直したものになった。

この昭和42年の１年間を、当時、「再建なき破壊」に終わってしまったと評した人もあった。もし破壊に終わったとすれば、その一因は、提起された方針を結局全員が自らのものにすることができていなかったことにあったであろう。伊丹が言った「お互いに強くなろう」という意欲がぶつかり合う理想的な状況を作り出すことが現実にはいかに困難かが示されたと言うべきかもしれない。

新主将の碓井は部報で述べた。「確かにこの一年間、我が部は大きく揺れ動いてきたかも知れない。しかしこれは試練として受け取るべきであって、これまでのことを踏み台に改めて一歩を踏み出すべきであろう。もし今まであのような考え方がなされなかったなら、「部はどうあるべきか」につき新しい面から見ることはできなかったであろうし、しかもそこにクラブの真の理想の姿があることも気づかずに終わっただろうと思うからだ。しかし実際には部は色々な人間の集合であり、しかも巨大なものである。１つの団体がある理想目的に向かってゆく場合、それがマス化していればいる程、どんなに困難があることだろうか。」（同『三十年』所収「新キャプテンとして」）

一方、部の成績の上で「再建」こそできなかったが、部の活動の在り方という点で何物も残らなかったとは思わない。特に救いであったのは、こうした時期を下級生として過ごし、さらに「東大闘争」の間とその収束後、例えば、新入生がいないため、駒場には１学年しかおらず、全体も３年次しかいない陣容で、練習の運営や試合への対応を含め、極めて困難を来した環境を、川上、小林、岡本を中心とする41、42、43年組

の連中が着実に乗り切り、しかも、部としての非常なまとまりを示したことである。これらの人たちは、我々が繰り広げていたこれらの動きをある意味で冷静に受け止め、見事に総括して、自分たちの活動に活かしてくれたように思われる。

その後、第４体育館の完成によるコートの６面化は、物理的基盤に関する限り、状況を変えた。果たして我々が課題とした問題は解消したのだろうか。その後どのような解決が与えられたのだろうか。この記念誌が教えてくれることを期待したい。

30年程前の練習

昭和45年入学　　伊藤　正博

神奈川県の公立高校に在職してバドミントン部の顧問をしています。現在の多様な練習方法に比べると、当時は練習パターンも限られていて、なぜあれほど打ち込んだのか不思議な気もしますが、学生運動の余波で勉強に打ち込む雰囲気がなかったのか、部員は誰しも、それぞれの理由で、生活のある部分をバドミントンに賭けていたように思います。１年生のあるときに部室で小林健先輩が、学者になるのなら部活をやっては行けないかなあ、俺も「零の発見」を読んで学者になろうと思ったこともあるよと言われたのを覚えています。

当時、練習日は月、水、金の３日間で、日曜日にも練習をしたかも知れませんが、ウィークデイの記憶より曖昧です。４時から８時までで、理系の人などで都合のつかない人は６時頃から出ました。体操、柔軟、素振り、基礎打ち、サーキットトレーニング、アレーのクリア、外のランニングで６時位になりました。サーキットトレーニングは初めの頃はかかった時間を記入して行ないました。アレーのクリアーも先輩から受け継いだ練習で、私たちの代も１年ほど使った天井の低い体育館では特に有効で、シングルスのクリアーのコントロールはこの練習で身に付きました。外のランニングは、体育館近くの出入り口から出て、左方向に走って、駒場の民芸館の前を通って駅沿いの緩やかな坂を駆け登るコースで、８の字、大回りなどの走り方がありました。速かったのは、上の代では岩崎さん、同じ代では岸田君です。後半の練習は、オールロング、オールショート、ネット際の潰し、ダブルスの左コートから中央にショートサーブをしてそれを相手左サイドにプッシュ、後衛がバックのストレートでドライブを打つパターン練習、試合形式、それにアヒルやウサギなどの強化練習、これらで８時までででした。同期の増田君のアヒルがやたら速かったのを覚えています。

現在の技術書、練習手引き書から見ると極めて単純な練習の繰り返しでしたが、30周年記念誌に豊田先輩が書いてくださったように、トレーニング、といっても器具を使ったものではないのですが、それはずいぶんやりました。それで体力がついて、技術のない私たちにも当時の東大らしい泥臭いバドミントンができたのだと思います。同期にインターハイダブルス熊本県代表の江藤君がいたとはいえ、高校の時に無名だった、あるいはバドミントンをしていなかった者たちが名のある他校の選手たちと互角に渡り合えるようになりました。１、２例を挙げると、後輩の松本君は順位戦で高校時代関東ベスト４か８という山梨大の選手と互角の勝負をし、江藤君は入れ替え戦で千葉大の２番手に競り勝ちました。千葉大の１番手は現日本ユニシス監督の阿部さ

んでした。３部優勝、２部昇格という幸運な結果が生まれたのですが、これには様々な要因があったのではないかと思います。引退後も練習に来てくれた先輩たち、プレーイングマネージャー角田君のマネージメント、前キャプテン角本君の順位戦から入れ替え戦までの奇跡を呼ぶオーダー作り、後輩の関君、大田君、大学から始めた同期の山田君らの試合での活躍、卒業後、今まで同期会を組織してくれた中田君を始めとする同期の連中の仲間意識などです。

東大バドミントン部の在り方というテーマをいただいてその責を塞げたとは思いませんが、勝手なことを書かせていただいたついでに印象に残っているプレーのいくつかと思い出の一端とを記します。

伊丹先輩の左サイドからの角度のある逆クロスのスマッシュ

小林健先輩のダブルスで相手の頭上を緩やかに越すハーフロブ

盛先輩の左後ろからの相手をのけ反らせるバックハイクリア

検見川の合宿での岡本先輩と千葉大の選手との試合

縦のカットドロップを返球する江藤君のフットワーク

合宿でガットを張っていただいた、夭折された湯浅先輩のこと

２部昇格のお祝いを横山さんのお宅と料理店とでしていただいたこと

川上監督、江藤監督、村田監督らの監督、それぞれの代の選手、ＯＢが努力をされて、様々な行事の定着、女子部の定着等、部を発展させてこられたことに敬意を表します。現役の皆さんには精一杯のご活躍をお祈りいたします。

最後に私事を一つ書かせてください。原稿の依頼を頂戴したのと相前後して、二宮正之氏の「小林秀雄のこと」（岩波書店）が上梓されました。高校から大学１年に掛けて小林秀雄の作を読んでいましたが、身辺の必要からその後は吉田健一の作に安心を求めました。二宮氏の本はもう一度、小林秀雄の作を読んでみようと言う気を起こさせるものでした。50周年記念誌編集諸氏のご努力に感謝しつつ。

ヤサシイ世代からの覚え書き

昭和48年入学　　野中　浩一

４年という月日で切り取られた分衆の断片をつなぎあわせてみれば、歴史がつづられる……それがこの稿を依頼された意図だろう。昭和48年（1973年）に入学し、52年（1977年）に卒業した私たちの世代は何を見たのだろうか。限られた視野ではあるが私たちの世代が切り取った窓を振り返ってみたい。それは学生運動の余波で東大入試が中止された世代から一回りが過ぎようかという頃、高度成長期の区切りとなる第一次オイルショックが起こり、田中角栄が逮捕され、流れは明らかに変化しつつあったが、まだゴルバチョフが表舞台に登場するにはだいぶ間のある頃であった。

当時の流行語を（意図的に）拾ってみると、ユックリズム（S48）、ゼロ成長（S49）、ニューファミリー（S50）、窓際族（S53）などというものがある。そして、しゃにむに成長だけを追い続けてきた時代の終焉を象徴するかのように、昭和51年には、全人口の90%が中流と答えるような時代を迎えていた。いまだに、そしておそらく生涯言われつづけるであろう、団塊の世代の裾野に位置する「半端」な私たちの世代は、優しい世代とも言われることがあった。私たちはハングリー精神を失いつつあったのだろうか。それが運動部としてのあり方に影響したのだろうか。

大学を代表して活動する運動部、そういう考えには個人的にはいささかの戸惑いがあった。端的に言えば「楽しいだけのバドミントンではいけないのか？」という考えである。そうした考えと軌を一にするかのように、スポーツ愛好会といったいわゆる同好会が勢力を伸ばしていった時代でもあった。インターハイ出場経験者がスポ愛に入った、という噂もあった。はたして私たちは彼らとどう違うのか？　私が駒場の主将を務めていた時期、運動部にあるまじき言動が少なからずあったかもしれない。おそらくはバドミントンを、私にとって夾雑物である主張で染めたくなかったのだろうし、大学を代表するのではなく個人としてバドミントンと格闘したかったのだろう。だから、１年生の未経験者を教えるときには、戦力にならないから手を抜くのではなく、戦力にならなくてもバドミントンの本当の面白さに触れてくれるようになってくれ、と願っていた……。初心者にどこまで手をさしのべるのか。ついてくる限り、初心者にも等しく機会を与えたい。しかし、そうすればするほど、ややもすればスポ愛と運動部の境界はあいまいになる可能性もあった。

しかし、決して楽なバドミントンを目指していたわけではない。かろうじて、その点だけは、スポ愛とは異なると言えたと思う。苦しい練習の後にはじめてできるレベルのバドミントンの楽しさを知ってしまった人間には、ただ仲良く、無理せず、楽し

めれば、という水準には戻れなかった。だから、あの検見川の炎天下の苦しさも、今は感謝とともに思い出す。あの極限状態だったからこそ、個人的にも安定したクリアショットの打ち方が体得できた。

私のような考えが主流でなかったことはよく分かっているつもりである。もっと運動会らしい意志をもって４年間を過ごした部員も少なくはない。昭和48年入学同期のなかでは、村田光二がそうだったと思うし、少し前の世代の、例えば大田氏のようなハングリーな意識を見せつけられ、２部での戦いを目の当たりにした経験をもてたことは、どこかで私たちのバックボーンをつくってくれたはずだ。それでもなお、私自身が大学の運動部を生き残れたのは、運動部にありがちな無意味な上下関係のおしつけがなく、未経験者を切り捨てない部の雰囲気があったからだと思っている。私自身はこうした優しさの時代、しかしながら、逆にいえば、自分自身に対する厳しさを自らの意志で保たなくてはならなかった時代が好きだ。

当時はそれほど意識していなかったが、セピア色の過去となった現在から振り返ってみると、部の周辺事情で特徴だったかと思うことがいくつかある。一つは、「周辺」といってしまうと叱られてしまうだろうが、忽然と生じたがごとき女子部中興の時代だったことである。それも、まともに４年間つづけた人材が１学年に３人も４人もいたという、昨今と比べてみても特異な時代で、それまでは実質的に男子だけだった部の雰囲気を変えた、と感じた先輩たちも多かっただろう。そして、第二に、今は姿を消そうとしている駒場寮に、「駒場城」という部員のたまり場がつくられ、憩いの場にもなっていたことが挙げられる。私などは当時はあまりに当たり前の存在となっていたが、かなりの時間が麻雀に費やされていたとはいえ、そういう場があったことは、部の練習や試合などをお決まりの「出勤」ではなく、「出陣」に変える効果があったように思う。第三には、これはやや後の世代に属することだが、技能中心の検見川合宿以外に、親睦の意味合いが濃いスキー合宿が始まったことである。こうしたことは、その後加速された部分もあれば、反動が生じた部分もありそうだ。それについては後の世代の筆者の手に委ねたい。

ところで、この文章を依頼された意図のひとつに、今後の部のあり方を考える一助に、というものもあるらしい。これに関しては、先輩として何も言うことはない。というより、上から押しつけたりするような性質のものではないだろう。今後とも、そのときどきで、それぞれが理想とするバドミントンを妥協なく追求してくれればそれ以上言うことはない。以下に述べることは、もっぱら時代変化についての覚え書きのようなものである。

最も大きな変化、これはラケットの変化に尽きる。私が入学した昭和48年の時点で

は、ウッドフレームのラケットが普通で、今の現役の人たちはひょっとすると見たことがないかもしれない、フレームの反り防止のための木製のプレスも必須だった。ガットを手作業で張るための道具も持っているのが普通だった。しかし私が卒業するころから、メタルフレームなど、急速に新世代のラケットの時代を迎える。これがバドミントンのプレイの質を大きく変えたことは間違いない。そう遠くなく、初心者にバドミントンを教える人たちも全員がメタルフレーム以降の世代になるだろう。道具は科学されつづけているが、私たちの練習やプレイは科学されていないかもしれない、あるいは、まだ改善の余地があるかもしれない、とだけ言っておきたい。

バドミントンが科学されていなかった、と言ってしまっては嘘になる。私たちの世代が現役のころも、ようやく、練習としてのウサギ跳びが膝によくないこと、試合中に水や塩分を補給しないのはむしろ悪であることなども言われるようになった。ペットボトルなどまだ存在していなかったあの頃、何だか御利益のありそうなボトルでゲータレードを飲むのを格好よがったりもした。その後も進歩はつづいているように思える。私たちが現役のころに影も形もなかったものとしては、運動後のアイシングという考えがそうであるし、テーピングもなかった。機械をつかった筋力トレーニングも、隣のボート部を横目で見るくらいがせいぜいだった。正直なところ、最近の新世代のラケットや、こうしたアイシングやテーピングがなかったら、現在の私のバドミントンはとっくに終わっていた。道具やスポーツ科学の進歩にはこれからもお世話になるだろう。

私たちの４年間からすでに20年が経った現在、現役生活を送れる人たちは、物質的な環境では恵まれていると思う。追コンでは正装をして送り、送られ、というのもちょっとは変わったかなと思うが、私たちのころより爽やかな印象がある。土曜日の自由練習もあって、練習時間もめいっぱいやれば私たちのころより多くの時間をとれるのだろう。部全体の枠組みで言えば、十分な気がする。ヤサシイ世代の私としては、その恵まれた枠のなかで、そのときどきの現役の人が、精一杯のことをしたと言えるだけの充実した時間を残してくれれば、と思う。しかし、ある意味では努力のための外圧が少ない分、自分に厳しくありつづけることは、じつは意外に難しいのかもしれない。願わくは、そうしたなかでバドミントンをとことん追求する無頼派がたまに登場してくれればこんな楽しみなことはない。

軟派よ去れ！硬派よ来たれ！

昭和51年入学　　上野　誠也

この言葉を新人勧誘に使おうとしたことがある。新入部員の減少を恐れて、結局使うことはなかった。しかし、部の在り方を考えた場合、この言葉が理想像の一角を表わしている。同好会と違った運動会に所属する部はこの精神の下に活動を続けているはずである。何をもって「硬派」と言えるのか。当然のことながら、試合に勝つことが結果として得られなければならない。相手に勝つ。そのための練習では、己に勝つ。易きに流れる精神では達成できない目標である。

我々の東大バドミントン部の場合、関東学生リーグ戦に勝つことが第一目標である。リーグ戦に勝利を得るための部であり、そのために部員が一丸となって突き進む部である。レギュラーは試合に勝つことで直接の成果をもたらす。その他の者は将来のレギュラーを目指して練習を積み重ねる、または、レギュラーが試合に向けた練習ができる環境を作りあげる。リーグ戦に直接出ていなくとも、その貢献度は高いものがある。部員が共通した目標を持ち、厳しい練習に耐えぬいていくことに意義がある。目標にそぐわぬ者は切り捨てられるべきであり、切り捨ててきた。

我々の代はどん底から始まった。連敗に次ぐ連敗を経験し、ＯＢからは見放された中で引継いだのである。それまでの練習を続けていたのでは低迷時代を抜け出すことは容易ではない。何かを改革しなければ部の目標が達成できないと痛感していた。ここに記すのは、我々の代が努力した内容である。

「意識を高めよ」

勝利を掴むといっても、漠然と練習を行っていては、簡単に勝利を掴む実力を得ることはできない。プレーに集中し、常に上の目標を見ている姿勢が必要である。その目標は、練習を積み重ねることで、手中に収めることができる目標でなければならない。設定する目標が遠すぎては、設定しないことに等しい。我々の代では、部員一人一人が目前の目標を持つことにより、練習への集中力の増加をねらった。部内の個人ランキングを設定し、常に「誰」に勝つという目標を全員が持って練習を行なった。毎週、ランキングの入替戦を実施し、勝者には上位への挑戦権を与えた。伸びる者は伸ばすシステムである。あわせて、欠点を早く知ることもでき、改善への目標を常にはっきりとさせた。これにより、練習に対する集中力を高めることができた。

「常識を改めよ」

試合は体力があれば勝利を掴むものではない。それと併せて、試合を組立てる判断力・知力も必要である。試合の組立て、すなわち、シャトルの配球と自分のポジショニングは、本人の能力、試合相手の癖によって異なるものである。若手選手にはこの事に気付かず、かなり苦労している者がいる。学校の勉強とは違って、本を読めば知力が養われるというものではない。バドミントンに関する本が世の中に数多く出まわっているが、それは一般論であって、個人に対応していない。それどころか、著者個人の能力レベルで書かれている愚書も多い。そのような愚書に書かれている試合理論を疑うことが判断力を高める第一歩である。我々の代にはいわゆる勝負師がいた。相手に「なぜ球が返ってくるのだ」と思わせるプレーをする者である。コートのどこに立とうが、ルールでは規制されていない。役に立たない常識と試合をしている相手がスキだらけである。非常識ではなく、常識を超えた超常識の世界で試合を有利に展開したのである。これらは自分達の考えで造り出したものが多い。人から学ぶだけでなく、新しく産み出す努力を行なった。

「体力を貯えよ」

やはり試合となれば、体力差が試合結果に少なからず影響する。体力を養わなければ、勝利を掴むことはできない。体力養成のためにトレーニングは欠かせないものである。しかし、伝統的に行なわれていたトレーニングは全員が同じ量をこなしていた。これでは、個人の体力は成長しない。能力のある者はそれに見合った量をこなして、その能力を伸ばさなくてはならない。我々の代では、個人メニューのサーキットトレーニングを導入した。数種類のトレーニング項目を順にこなすトレーニング方法であるが、各種目の量は個人能力に応じて設定した。得意な種目は、さらに引き伸ばすために、他人より多い量が与えられていた。全員がほぼ同じタイムで終了するように回数が設定されており、終了タイムを競う方法でトレーニングを行なった。回数更新のために体力測定も行なった。このデータを統計処理した工学部の部員がいた。トレーニング能力とバドミントン技術の関係を調べた結果、レギュラー部員は回数の増加量が多いという結論を得た。バドミントンで成長著しいレギュラーは、トレーニングでも顕著な成長を示すということである。

現役時代は、一夜明ければ成長しているという若い時代である。成長するか否かは本人の意志で決る。勝利は日頃の意識の積み重ねで手中にすることができる。己に厳しい、硬派を自称する部員のために当部は在るべきである。

21世紀の東大バドミントン部　～監督経験者座談会を通じて～

昭和59年入学　　壁矢　和久

東大バドミントン部50周年にあたり、部の在り方を語り合い、21世紀に向けての提言ができればという主旨で、監督経験者による座談会を開催した。

【日時】　2000年４月９日（日）
【会場】　ホテルグランドパレス
【出席者】　川上邦彰（昭和41年入学、監督在任昭和47～49年）
江藤弘純（昭和45年入学、監督在任昭和50～54年）
村田光二（昭和48年入学、監督在任昭和55～平成２年）
壁矢和久（昭和59年入学、監督在任平成３～６年）
後藤拓也（昭和62年入学、監督在任平成７～10年）
石田仁志（平成元年入学、監督在任平成11年～）


川上



江藤


村田


壁矢


後藤


石田

座談会では各人の現役時代そして監督時代の経験に基づいた活発な意見交換がなされた。本稿では、話し合われた内容を整理し、東大バドミントン部の在り方を考えてみるとともに、21世紀に向けての一つの方向を示したいと思う。

１．部を取り巻く環境の変化

部の将来を語るには現状を正確に把握する必要があるということで、まず部を取り巻く環境を整理してみた。練習場所がどこにあるかといった物理的環境は部の活動を大きく左右する基本条件となる。例えば一橋大学では、従来教養課程があった小平には体育施設だけを残し、その他すべてを国立に移して一貫教育をすることになった。それゆえ、運動部員は練習のために講義を受ける国立からわざわざ小平に通うことを強いられ、バドミントン部のみならず多くの運動部が苦しんでいるらしい。

幸い、東大バドミントン部は活動に支障を来たすような物理的環境の変化にはさらされていないが、それでも長い歴史の中でいくつかの変化が見られる。下表は昭和40年代と平成に入ってからの部を取り巻く環境を比較したものである。

部を取り巻く環境の変化

	昭和40年代	平成年代
サークル（同好会）	なし（昭和49年頃発足？）	ＴＢＡ、スポ愛など複数あり
新入部員数（１回でも参加）	30名以上	20名以下
（卒部まで在籍）	10名前後（未経験者多数）	数名（未経験者少数）
練習場所	駒場	駒場
コート数	３→４面	８面
練習日	月、水、金	月、水、金（土：自由練）
練習時間	午後４～８時（１、２年生は通常６時で帰る）	午後４～８時
関東学生リーグ戦形式	３複６単	３複４単→２複３単

まず、サークル（同好会）の存在が部員数に及ぼす影響が非常に大きいことが分かる。サークルができる前は30名以上、多いときには50名以上の新入生が少なくとも１回は練習に参加していた。その中で大抵10名前後が卒部までやり遂げており、大学入学までにバドミントンの経験がない、いわゆる未経験者の数も多かった。しかし、最近ではそもそもの入部者数が減少傾向で、最終的に残る人数も10名に達することはごく稀となっている。特に未経験者が減ってきており、大学からバドミントンを始めようとする人の多くはサークルに流れてしまっているようだ。女子部については残念ながらここ数年、それまで本学部員と共に両輪を形成してきた看学部員が途絶えている。一方で本学女子学生の絶対数が増えていることもあってか、看学部員がいなくても活

動に必要な部員数は確保できている。

練習環境の大きな変化はない。場所は一貫して駒場で、午後４時から８時まで週３回の練習を行っている。４時から６時は１、２年生中心で駒場キャプテンが指揮を執り、６時以降の練習を全体のキャプテンが指揮するという形態も変わっていない。しかし、昭和40年代頃までは部員数に比べてコート数が不足していたこともあり、１、２年生は６時までの駒場練で帰るのが普通であった。６時以降まで残られると、とても上級生の練習にならなかったらしい。ところが最近では逆にコートが余る状況も出てきている。昔はコートの確保に苦労していたが、今ではむしろ部員の確保に苦労しているという図式が浮かび上がる。

部を取り巻く環境という点で、1998年春になって関東学生リーグ戦の形式が従来の３複４単から２複３単に変更されたことは大激震であった。２複３単になると、飛び抜けた選手が２人いれば勝てることになる。高校のトッププレーヤーが入部することはまずなく、これまで部としての総合力で勝つことに活路を見出してきた東大にとっては非常に厳しい、そしてリーグ戦に対する取り組みを根底から覆されるような変化だと言える。

２．部の在り方

運動部はスポーツにおいて大学を代表する組織であり、他大学の代表と競技するわけであるから、目標はあくまで「勝つ」ことである。そのような姿勢で臨まなければ相手に失礼となる。ただし、運動部は一部の学生のためだけに存在する組織ではない。上手い下手で排除するようなことがあってはならない。そこで勝つことだけでなく、もう少し幅を持たせることも必要となる。そしてバドミントンは個人競技ではあるが、ここで言う「勝つ」とはごく一部の強いプレーヤーの力によって勝つことではなく、部全体の力でチームとして勝つことを意味している。

このような点から、どういうプロセスで目標に向かっていくべきかについて、どの代でも多かれ少なかれ悩んできた。特に普段の練習をどうやっていくか、何に重点を置くかは大きな課題である。例えばレギュラーにとっては初心者の相手をするよりはレギュラー同士で練習した方が自分自身のレベルアップになる（初心者やイレギュラーの相手をすることが実は良い練習になるという意見もあったが･･･）。目先の勝利に重点を置けばそれがベストかもしれない。しかし、部全体そして将来のことを考えれば、イレギュラーのレベルアップは不可欠であり、レギュラーが多少の犠牲を払うのは当然と言えよう。部員数が多かった時代には、レギュラーには届かないが初心者や

下級生を教えることに情熱を傾ける中間層の人材も豊富だったらしいが、サークルとの共存時代となり部員数も減っている現状ではそれは難しい。一方、イレギュラーにとってはリーグ戦の応援などを時に負担あるいは犠牲と感じることもある。皆がある程度の犠牲を払いつつも、全体としてきちんとバランスを取り、最終的には一つの目標に向かうことが望ましいと考える。

座談会では、東大バドミントン部が目指すべきは、チームとして部全体として勝つことであるという見解で一致した。一方で、いろいろな側面、考え方を持った人間が集まって部を構成することも重要である。多様性を認めつつ、バドミントンをやるために集った者が、チームとしての勝利という共通の目標に向かって努力する、これが部の在るべき姿なのであろう。

3．21世紀に向けて

言うまでもなく、部は現役のものであり、どのように運営していくかは全て現役が決めることである。ＯＢがとやかく言う類のものではない。現役には精一杯悩み、考え抜いた上で、自分たちの信ずる方向に進んでもらえれば良いというのが、座談会出席者の総意である。しかし、ここでは敢えて座談会で出された意見を集約し、21世紀の東大バドミントン部の一つの方向性を述べさせていただく。

① 東大バドミントン部の良き伝統を継承する

東大バドミントン部の良さは、高校までの名選手でなくても大学に入ってから強くなり、部としてある一定以上のレベルと質を維持し続けていることである。最近でこそ未経験者でレギュラーとなる例はほとんどないが、かつてはエース級にまで上り詰めることも少なくなかった。また、部員は個として強くなり勝つことを目指す一方で、組織を支えることにも注力し、常に両立させてきた。

このような伝統は特に強制されるまでもなく、先輩と後輩、ＯＢと現役といった縦のつながりの中でごく自然に引き継がれてきたものと思われる。21世紀に向けてもこの素晴らしい伝統を是非とも大切にしてもらいたい。

② 部員各人の目的意識を高める

人が大きな力を発揮するには目的意識を高めることが極めて重要である。部全体の目標はチームとしての勝利だとして、そのチームを構成する部員各人が明確な目標、やりがいを持つことは、各人が充実した部活動をしていくために、さらには部としての目標達成のためにも不可欠である。

江藤さんら昭和45年入学組は関東学生リーグ２部昇格を成し遂げた輝かしい代だが、必ずしも高校からの名選手が揃っていたわけではなく、大学に入って以降の努力で、高校までのキャリアからは信じられないくらい強くなった選手が多かったそうである。そこには、東大闘争により入試が中止された直後だったため上の代がいなかった→早くから部を背負っていく立場に置かれた→自分の力を発揮できる可能性が見えた→猛烈に頑張った、という背景があったらしい。

とは言っても、リーグ戦のレギュラーになるのは容易なことではない。２複３単とレギュラー枠が減った現状ではなおさらである。そこで、例えば京大戦をこれまで以上にクローズアップし、ＯＢの注目度も高め、大きく評価する。５複10単に入り、さらに勝利するという目標は、リーグ戦のレギュラーには届かないイレギュラークラスにも強力な動機づけとなろう。そして、たとえレギュラーになれなくても自分が確実にうまくなっていると実感でき、やりがいを持てるような環境を整えられれば、部全体の活力につながるものと考える。

③ 新たな交流を模索する

まず対外的交流については、対外試合を再考してみたらという意見が出た。先にも触れた通り、リーグ戦が２複３単となった今、リーグ戦をチームとして部全体の力で勝つ試合と位置付けるにはやや無理がある。そこで、例えば５複10単で戦うような、従来とは全く別のリーグを作るといったことも考えられる。東大バドミントン部が主導権を握って新たな流れを作る試みである。また、21世紀には、海外との交流も視野に入れたい。相手があることなのでハードルは高いが、国際化のうねりの中で、東大と関係の深い海外大学への遠征や定期戦などを始められれば素晴らしいことである。

現役、ＯＢを含めた部内交流については、インターネットの有効利用による新たな展開が考えられる。部のホームページを充実させ、現役の戦績や駒羽会活動の情報ソースとするとともに、それらに対する意見交換などコミュニケーションの場とするのである。情報媒体という点では、現役に部報の内容をもっと充実させてもらい、主張や考えをしっかり伝えて欲しいとの声も上がった。

監督経験者座談会を通じて部の在り方と21世紀の方向性を考えてみた。半世紀に及ぶ歴史の中で、東大バドミントン部は常にある一定以上のレベルを保ちつつ発展してきた。この伝統をしっかり引き継ぐことと同時に、最も大切なのは「部が元気であること」である。そして、元気であり続けるためには、部員各人が高い目的意識を持って切磋琢磨し、チームとして部としての勝利を追求していくことが必要となる。21世

紀の東大バドミントン部のために、ひとりのＯＢとして何か貢献できないものかと思うとともに、現役そして次世代の部員たちが東大バドミントン部の更なる飛躍に向かって突き進んでくれることを期待して止まない。

６．部員達の憩いの場

東大バドミントン部北千束分室

昭和33年入学　　金丸　清昭

東急大井町線北千束駅の小さな改札口を出て、右に10メートル程行き、角の酒屋を左に曲がり、坂を下ってガードをくぐると、木村君の家である。昭和34年に木村武君が入部して、何時の頃からか、彼の家が我々バドミントン部員の溜り場になった。多分、大岡山の東工大の体育館から近い所為で、国公立戦の後にお邪魔したのが始まりかと思うが、駒場からもそんなに遠くない事もあったろう。３部のリーグ戦が駒場、２部は目黒のドレメ（杉野短大）か品川体育館（戸越公園）だったので、地の利も良かった。勿論それだけではない。いつも、母上が、本当に、明るく・楽しく我々を迎えて下さったのだ。大変さばけた、面倒見のよい女傑で、我々以外にも、常に木村君の友人が集まって居たようである。「ミッちゃん・チコちゃん」という美人の妹が居て、それも楽しみの一つだったが、何よりも木村家の雰囲気が皆を引き寄せたのである。

木村君自身親分肌で、皆を引き連れて自宅で騒ぐ事が好きだったが、それだけでは中々こうは行かなかっただろう。広い家ではあったが、多い時は20人以上もの男共が、あちらで酒を飲む、茶の間で麻雀をする、座敷の隅で碁を打つ奴が居る、といった具合で家中を占領してしまう事も再三であった。自営業であった父上は良く家に居られたが、いつもニコニコと皆の騒ぎを見つめていてくれた。余談だが、大変器用且知識も豊富な方で、電気屋さんが捨ててしまうようなテレビを（２台から１台をという具合に）見事に再生してしまうので、あの当時としては珍しくテレビが２台も３台も有る家であった。母上は本当に若く（気持ちだけでなく）、既に結婚していたお姉さんを含めて「４人姉妹の長女」と、我々は呼んでいた。後年木村家がそれ程裕福ではなかった事を知ったが、その頃は全くそんな事を知らず、良く飲み、良く食べさせて頂いた。尤も結婚後、家内（美津子）に聞いたら、彼女等のおかずが突然なくなってしまう事も良くあったそうである。

特に、当時鎌倉から通っていた私は、練習やコンパで遅くなると、よく泊めて貰ったものである。いつのまにか遅くならなくても木村君の家に入り浸るようになった。卒業後も、現役の試合後の集合場所になる事が多かったので、相変わらず通っていた。昭和39年に次女美津子と結婚したが、実質的な仲人をして頂いた秋山先輩には今もって頭が上がらない。

結婚時の条件として、東大バドミントン部の行事は全てに優先し、女房は一切文句を言わないと言う事にしたが、それを拡大解釈した私は殆ど毎日午前様、女房に苦労を掛け続け、今日に至っている。勿論東大バドミントン部の行事は現役・ＯＢを問わ

ず、よほどの事がない限り参加している。木村君が亡くなる直前も、ダブルス選手権の後病院に駆けつけた記憶がある（彼も許してくれるだろう）。木村君がサッポロビール（当時は日本麦酒）に勤めたので、夏場は当時人気のあった「サッポロジャイアンツ」を買ってきて、盥で冷やした事も懐かしい思い出である。ＯＢ会（当時は人数も少なかった）を木村家でやった時も暑い時期で、遅れて現れた司馬さんが、風呂場で悠々一浴びしてから席に加わった事もある。麻雀は勿論よくやったが、使い込まれた木村家の牌は「一索」と「白板」の見分けが付かず、確か本間先輩がチョンボをした事があった。白のシャンポン待ちで、一索で、ロンと叫んだのである。木村家は二階がアパートになっていて、空いている端っこの部屋で何度も徹マンをしたが、良く隣近所から文句が出なかったものだと思っていたら、実はかなりあったと言う事をつい最近聞いた。

名誉会員の矢城君は、木村君の麻布時代からの友人で、森（健）君を除けば、木村家に集まるメンバーとしてはバドミントン部の誰より先達だったが、慶大生であるにも係らず、我が部の応援団長格であった。木村君が結婚して新橋に越すまでいったい何百人がここに集まったのだろうか。２部の最終日前夜、遅くまで対明学戦のメンバーを木村君と二人で考え、強気の策を取って見事に外れてしまった事もあった。就職後もしばしば泊めて貰った私は、いつもぐっすり眠っている木村君を横目に、蒲団をきちんと畳み（あたり前か?）、朝食を頂いて会社に向かったものだが、結婚後、家の事を何もしない私に、家内はさぞや驚いた事だろう。序でだが、寝坊で寝起きの悪い木村君は、合宿ではいつも最後まで寝ていたが、朝飯の卓に着くのは、起きてからが遅い平松君よりも必ず先であった。あれから幾星霜、父上も、木村君本人も亡くなられた。母上は御健在で、コーラス・グループに参加するなど、相変わらずご活躍である。忘れ形見の史君は、父と同じサッポロビールに勤め、二女の父である。チコちゃんは、明治学院に進学、バレー部で活躍していたが、バドミントンでは、明学との試合でも東大応援だったのは矢城君と同様である。彼女も二女の母であり、ミッちゃんこと、私の女房は、二男の母である。

木村家は皆の集まり場所であったが、前にも言ったように鎌倉の住人であった私はコンパその他ちょっと遅くなると電車がなくなるという宿命で、随分あちこちで泊めて頂いた。

比田家（早稲田）、平松家（鷹番）、横山家（祐天寺）がそうであった。特に横山家には、麻雀を含め卒業後も何度か泊めて頂いたと思う。但し、３日連続という浜中君には及ばない。

横山君の父上は良く試合の応援に来られ、その折の８ミリカメラによる記録が今も

残っており、貴重な資料である。平松君の父上は塾を経営しておられて、その教室の机を並べ替えて祝勝会をしたり、麻雀をしたのだと記憶する。他にも上野さんの本牧のお宅にお邪魔して、皆で泳いだ事もある。今ではあの辺では、海など見ようと思っても見られない。そう言えば当時の秋山主将は、バドミントンだけではなく、水泳であれ、野球であれ人に負けてはいけないと、我々にハッパを掛けたものである。憩いの場所といえば、井の頭線を渡って石段を下りて行った、風呂屋、ソーセージライス等遅い夕食をした伊東屋とか山口屋、合宿の自由時間に行った喫茶店クレモナも懐かしい場所である。

あの頃の練習は４時に始まり３、４年生が本郷から着く６時前後から更に熱が入り８時・９時になる事も珍しくなかった。その後風呂屋に行き、飯を食うという訳で、家に着くと12時近かった。駒場での合宿はたいてい同窓会館。ミーティング後、クレモナでコーヒーを飲みながらクラシックを聞くという、文化的(？)な一面もあった。クレモナの女主人は確か踊りの名取りで、看板の横に「藤間勘太代」という名前が掛かっていた。クラシックといえば、当時の東大生は、結構名曲喫茶に通っていたが、秋山稔さんが大家で、ブラームスの熱狂的ファンであった。練習のない時は講義をさぼって渋谷のライオンや田園に聴きに行ったものである。この辺をわれらの憩いの場と言って良いのか迷う所だが、良き思い出の一つではある。

(本文で度々言及した秋山敦男先輩は去る平成12年２月26日に急逝された。御冥福を祈る)



1963年　国公立大会後打上げ会（平松家）

お世話になった横山家

昭和36年入学　　大西　正芳

昭和36年に入部してからの２年間は木村先輩の家へはみなで良くお世話になった。その後平松さんがキャプテンになってからは、平松家でお世話になるようになった。平松さんの家は塾をやっておられ、平松さんも大きかったがお父様は大きいだけではなく体格の良い人だったことが印象的であった。教室の机を並べ替えてご馳走をいただき、麻雀もやった。ちょうどその頃横山君が入部してきた。

横山家は後にＯＢ会の名誉会員になられたお父様、やさしいお母様と横山君、それに真っ黒で毛が長い大きな犬のジョン君がいた。人懐っこい性格の横山君に誘われるままお邪魔したのがきっかけであった。横山家へ行くパターンは、練習が終わってから、渋谷の恋文横丁の中華料理の店でビールを飲んで、餃子とやきそばを食べて、さてツモルかと話がまとまり、大抵はタクシーに乗って、目黒税務署と行き先を告げる。駒沢通りで祐天寺を通り過ぎ、税務署の近くで降りて、少し斜めに戻るように歩いて横山家に繰り込む。彼は連絡もしてないのに、いつも待っていたかのごとく、お母様にお出迎え頂き、汗臭い若者がどかどかと上がりこんだものである。それから麻雀を始めると、炊き立てのご飯で作ったおにぎりの夜食が出てくるのだった。あるいは何も食べずに行くと、カジキマグロの刺身でお茶漬けということもあった。大勢で伺った時には我々のためにわざわざ炊いて頂いたお釜一杯のご飯が、あっという間になくなるという状態であった。これをおにぎりにして、おかずを作るのは大変な労力がいるのだが、そういう時はどういう訳か必ずお母様の姪御さんの三室玲子さんがお手伝いに来て、いやな顔一つ見せずにサービスをしてくれたものだった。徹夜で麻雀をして、朝になると目玉焼きのおかずで暖かいご飯をいただいてそのまま学校へ行くということが度々有った。

お父様は国際水産の重役さんと聞いていたが、お忙しいためあまりお会いすることはなかったが、お母様はおっとりしたやさしい方で、横山君が一人っ子だったこともあってか、我々を息子のように歓迎してくれた。我々もそれに甘えて自分の家より居心地が良いため良くお邪魔した。

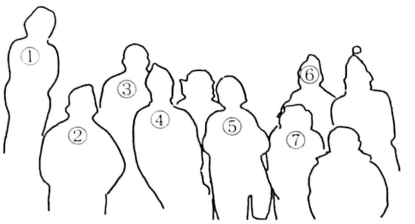
横山君は麻布高校時代からバドミントンをやっていたが、２年生になってから急速に強くなり、東大バドミントン部の歴史に残る名選手になったが、麻雀においても攻撃的で上り牌をつもったときに発する「堂々」という言葉は今でも耳から離れない。岐阜へ来てから私も時々使わせてもらっている。

私が卒業したあとは、ポイントゲッターとなった横山君の応援のために、お父様も

というより、おばあさまに玲子さんを加えて一家総出で試合会場に来て頂き、その内横山君だけでなく、東大バドミントン部全体の後援会長の様になってきた。その時、お父様が撮影した８ミリのフィルムは今でも残っている。その後、横山君の同期生が、練習日、麻雀に関係なく何連泊もしたり、ＯＢあるいはライバルであった他大学のＯＢが伺ったりというようなお付き合いとなった。さらに横山君が卒業された後でも、本人を抜きにして後輩が押し掛け、雀荘あるいは二次会、三次会の会場として使わせて頂いた。

木村さん、平松さんと歴代のキャプテンの家が部員の溜まり場になったが、私の家は市川市に有るため、なかなかその機会が無かった。昭和39年の夏に始めて検見川で合宿した後で皆に寄ってもらったが、それが最初で最後であった。大勢の男どもが突然それも度々やってきて、食ったり飲んだり徹夜で麻雀をやったりした後、朝飯を食べて出かける者、そのまま寝てしまう者の面倒を見ることは本当に大変なことだったであろうと思うと、木村家や横山家の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

S48 早春　横山スキー学校　蔵王



①玲子さん　②横山氏　③盛　④豊田
⑤横山夫人　⑥飯倉　⑦飯倉直子



われらの定宿

昭和42年入学　　豊田　拓男

昭和42年の新入部員は50名近くもいたろうか。検見川の夏合宿が、体のできていない１年生には恐ろしく過酷だったせいか、秋の新学期になると体育館に現れる同級生の数は激減し、翌春３月の１年合宿も同じ検見川でやったが、人数はすでに半分ちかくになっていたようだ。

知り合って１年も経つと当然仲良くなる。総武線本八幡にあった同期の飯倉正夫の家が検見川合宿の帰りの立ち寄りコースとなり、よく集団で泊まりがけで麻雀をやった。飯倉に三つほど年下の妹直子がいて、高校生なのに麻雀ができたので、誘い込んでよく一緒にやった。

洗牌のときに手が触れるのが嬉しくて、盛俊夫なんかとくに嬉しそうな顔をした。

飯倉の部屋は幾分離れのようなつくりになっており、泊まるのも気楽だった。飯倉がすてきにうまいギターを、あまりうまくない講釈入りで弾いてくれた。

２年になって同期のメンバーも固定してくると、１年先輩の川上邦彰さんにくっついて、我々と入れ替わりで卒業された横山直也先輩のうちにお邪魔するようになった。横山さんの父君が部の後援会長のような役割で学生を庇護してくださっていた。練習の後、大勢でしばしば目黒区中町のお宅に押しかけた。いくら図々しい学生共でも、まさか不意を襲うという無茶はやらないはずなので、おばさんからお招きの声がかかっていたのだと思う。（と考えていたら、川上さんから訂正が入った。思い立つと突然「今からお邪魔していいですか？」と電話して、さあ行くぞと言うことだったそうだ。図々しい。）

どやどやと上がりこんで、常連のなかには、毎回ご指名であらかじめ風呂場で足を洗わされる奴もいて、それからカジキマグロの刺身など、海産物を主としたご馳走をいただいた。そして麻雀。おじさんや、珍しく早く帰宅された横山先輩が仲間に入られることもあったが、仕事のある身なので早めに引き取られる。そのあと学生ばかりでウサギのような目をして明け方までがんばり、ひと眠りして陽が高くなって目覚めると、おばさんがちゃんと朝ご飯を用意してくださった。

ジョンという真っ黒な老犬がいて、手術を縫合した赤い糸をお腹にぶら下げたまま、喘息気味にゼイゼイいいながら部屋の中を歩き回っていた。後年ジョンが老衰で亡くなったとき、おばさんがひどく悲しまれたので、一緒に正座して真面目に位牌を拝んでみた。

横山家には留年中も卒業してからも、引き続き出入りさせていただいた。横山先輩

の従姉の玲子さんや、その女性の友達などがおおぜい集まってにぎやかだった。毎冬横山スキー学校と銘打ったスキー旅行が企画され、川上さん、同期の飯倉や盛などと共に参加させてもらった。

横山家とともによく押しかけたのが同期キャプテン小林健の白金の自宅である。

聖心女子大の脇の坂を登った高台の家で、おばあさん、ご両親、小林、八つ違いの弟の聡君の５人家族である。よく訪ねるようになったのは、小林が駒場のキャプテンになった頃からであろうか。２階の小林の部屋の造りつけのベッドには、昔の駅のホームにあったような大型のベルが取りつけてあり、寝坊すると、下の台所あたりのスイッチで容赦なく鳴らされた。ものすごい音で、ぜったいに寝ていられなかった。小林がぶつぶつ悪態をつきながら起き出すのを見ると、あんまりじゃなかろうかと同情心が湧いた。小林家には象牙の立派な麻雀牌があり、ここも居心地のいい雀荘になった。余談だが、小林家に比較的近かった湯浅有光（故人）の下宿で、ハードコンタクトを外さないまま徹マンをやってあわや失明の危機に陥った森安孝夫が、部屋を真っ暗にしてもらって終日寝ていたのもこの小林家の２階である。（記念誌『三十年』部報抜粋「さりゆく人々のこと」参照）

小林のおばさんは料理自慢で、おいしい会津米でご飯を食べさせて下さった。バターロールなど、焼きたてのパンをご馳走になる時は、残ったぶんはたいてい盛俊夫がもらって帰った。南国系というのか、心底感激して全身でおいしさを表現するものだから、ついおばさんの心をとろかすのである。

おばさんには「なによ、あんたたち」で始まるご意見、お小言をよく頂戴した。遊びに行って泊めてもらうのと、お小言がだいたいセットになっていた。親元を離れて勝手にやっている世間知らずの学生にはいたく貴重な訓戒ばかりで、ひたすらありがたいお説教なのだが、それはもう、ぽんぽんぽんぽん、実の親にまがう手厳しさだった。

社会に出て何年もたち、すでに中年に近い同期生３人が渋谷で飲んだことがあった。小林本人はたしかロンドン勤務で不在だった。つい飲み過ごして終電がなくなった時、そうだ、小林のうちに行こう、という話になり、深夜に電話してタクシーで押しかけた。

おじさんとおばさんが起きて待っていてくださって、深更まで話の相手をしていただいた。そのあと飯倉はタクシーでこれまた昔、皆でよく泊まりに行ったことのある「目黒のおじさん」の家へと消え去ったが、小宮泉と私は当然の如く泊めていただい

た。さぞ迷惑なことだったろう。酔っ払っていたとはいえ、こちらには、そんなこともあっていいんじゃない？という気分があって、なんとなく嬉しさすら感じていたのである。

それから十余年、年も四十なかばとなったある春の晩、ちかくに勤務する小宮と誘い合わせて皇居千鳥ヶ淵の夜桜を見に行った。花見酒でいい加減酔っ払ったところで、小宮が以上のことを突然思い出して感極まってしまった。それじゃ小林のご両親をご招待して謝恩会をやろうじゃないか、という話がその場でたちまち纏まった。

またまた同期を誘い合わせ、目黒の聚寶園という中華料理屋にご両親をお招きして、謝恩の会食をやった。その席上、

「私たちは学生時代、休みになると旅行に出てお互いの実家を泊まり歩き、それぞれの両親にずいぶんお世話になった。今夕の会食は我々の、親の世代全体に対するお礼の意を、小林のご両親に代表で受けていただくものである。」

という趣旨のご挨拶をした。普段あまり飲まれないおじさんが心地よく色づかれ、運ばれたフカヒレの煮物を見て、

「君たち、随分無理したねえ。フカヒレはだいたいスープあたりが相場で、もとのままの形をしているのは珍しいのに、これは丸のままが山になっているじゃないか。」

と言っておばさんに叱られていた。

それからさらに数年、我々同期は若くして亡くなった湯浅有光を除き、全員が50才を超えた。親の世代ももう高齢である。老いた両親を田舎に残して、実の親でなくてもいいから親孝行のまねごとがしたいような気分である。また夜中に小林家を襲ってみようかしら。



S53 京大戦（京都）後、
六甲山小林の岳父の別荘にて
泊まりがけのジンギスカンパーティ



①小林　②豊田　③本田　④森安
⑤南手（京大）　⑥小宮　⑦飯倉

関連資料

小林家への手紙１

拝啓　花の季節が足早に過ぎつつあります。急に思い立ってご愚息はじめ友人知己に電話をしたのが、このお手紙の発端であります。

花の下にてゆく春を惜しまんとて、夜桜見物を緊急提案したわけです。

捕まったのは明治製菓次長、小宮薬学博士只一人。ワンカップ数本とつまみを買って丸の内から千鳥が淵へと歩きました。朝方の雨のせいか花見客の姿は少なく、茣蓙の団体は各自十分の距離をとって花の下に座っています。少し寂しいので、我々も団体にほど近いところに占位しました。夜風が冷たくて葉の出るのが遅れているのか、枝全体が見事に白いたわわな固まりをなしており、風に大まかに揺れては無数の花弁をお堀の方に散らしています。

昭和天皇ご健在の頃、この千鳥が淵の花見客が、お堀の向こうに佇む人影が陛下らしいと気づき、手を振って見たら陛下も手をお振りになり、それを察した周りの人々が一斉に手を振りはじめて、満開の桜のもと、時ならぬ国民との交歓風景が現出したんだそうな、というような話をしながらワンカップを飲みました。

寒さが身に沁み、花弁と鼻水を一緒にすすり込むようになったので河岸を変えることにし、車で八重洲に出ました。

店に入って急に暖かくなったせいか、小宮博士、酔眼をぐるぐる回して言うやう、「小林がロンドンにいる頃、飯倉を加えたこの３人が渋谷あたりで飲んでいて、つい過ごして電車が無くなってしまったじゃん？その時、豊田が小林家に行こうと言い出した。電話をしたのが１時過ぎで、お邪魔したのが１時半。それから１時間ほども話の相手をしていただいた。突如目黒方面へ立ち去った飯倉を尻目に、我々二人は厚かましくもゆったりと泊めていただいた。朝起きて見ると、ちゃんと朝御飯が用意されていて、恐懼感激、ほんとに恐縮したよなあ。云々（以下繰り返し）」

実を言うと私はこのことをきれいに忘れ去っており、酔った小宮が同じことをくどくど繰り返すうちに、次第にその夜の情景が脳裏によみがえってきたのです。

えー、その節は実にご無礼申し上げました。感極まった小宮があまり同じことを繰り返すので、恥ずかしい旧悪をすっかり思い出してしまいました。取り返しのつかぬ事ながら、当時の無作法、平にご容赦下さりませ。

そこで不肖思へらく、

「これはひとつ罪滅ぼしをせねばならない。ご両親様には東京の然るべき場所に枉駕いただき、一献差し上げ参らせて、往時の罪をあがなわねばならない。博士、異存はござるまいな。」

という訳で、突然ですが近いうちに一度粗餐を差し上げて胸のつかえを下ろしたく、近日中に改めてご都合をお伺い致しますので、その節はよろしくお願い申し上げます。

敬具

平成７年４月14日

小林　三郎　様　　阿久利　様

豊田　拓男

小林家への手紙２

平成７年４月19日

小林　三郎　様　　阿久利　様

拝啓　新緑の候ご両親様ご夫妻におかせられましては益々ご健啖にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

振り返れば日頃のご指導ご鞭撻四半世紀余に及び、息の長いご厚情に対し有難く厚く御礼申し上げます。

さて、やうやく中年にさしかかった手前どもでは、昭和から平成にかけて積もり積もったこれまでのご恩に対し、一挙に謝恩申し上げ参らせんと、このたび御両所様に粗餐を差し上げることを計画いたしました。

お味にうるさい御両所様に飲食をお勧めするのは不遜無謀との声もありましたが、そこはそれ、ご高評を拝聴する楽しみもあるんでないかい？とのことで蛮勇奮っての決行と相成りました。

場所はご城下にほど近い白金台の聚寶園、時は25日（火）六時半。お揃いでサンダル履きでお出かけ下さい。豊田の名前で予約致しております。

敬具

追伸：前回のお手紙で、小宮博士が酒に酔って我々の旧悪を繰り返し暴いたとした点につき、博士より抗議がありました。抗議によれば、そんなにくどくなかったのじゃないだろうか、と言うのですが、実はそのとおり。翌日の電話で、すっかり酔っ払ってしまって何も覚えていないなどと本人が言うものですから、うっかり信用して文飾を加えたら、ちゃんと正確な指摘をして来ました。訂正してお詫び申し上げます。

粗餐会幹事　豊田　拓男

岩松家

昭和58年入学　　岩松　正憲

我が家の事を憩いの場として書くのは、少々面映いが、昭和58年から62年の頃にいろいろな部員が訪れてくれたので、その時の思い出を書かせてもらう事とします。

我が家は町田市にあり、駒場からは１時間はかかるため、練習帰りにちょっと寄るというわけにはいかなかったので、大抵は休みの日にわざわざ来てもらった。

そもそも私の両親は若い頃に東京に出てきて苦しい生活の時周りに助けてもらったことなどもあり、どんどん友達を呼びなさいといってくれたのを良いことに、親の苦労も気にせず結構な人数を呼んでいた。２年の頃までは、同期のメンバーだけだったが、それでも、２年の夏には同期全員計12名が揃っていた。中でも原田（英）君や山崎君ら一人暮らしをしている人にとっては家庭料理が食べられるということで、非常に喜んでくれ、呼んだ甲斐があったと思ったものであった。

３年になると後輩も呼ぶようになった。昔の写真をみると、赤瀬・浅井が揃ってきている時があるが、たぶんマージャンをしに来たのだろう。また、京大戦や追いコンの時に「嗚呼玉杯に花うけて」を歌うことになっていたが、年々歌が続かなくなっているという危機感があったため、皆で歌うので家にくる人は必ず歌詞を覚えてくるようにという通達をだし、食後に歌ったりした。その甲斐あってか、その後歌が途中で立ち消えることはなくなったように思う。

人数的にいっても最大となったのは、４年の夏、確か夏の強化練後に開催した焼肉大会であろう。隣の家族３名を含め、総勢29名が一堂に会した。全員でぞろぞろ移動するのも大変なので、各自勝手に来てもらったが、初めて来た秋朝は場所も電話番号もわからなかったので、電話番号案内に「料亭岩松の番号を教えてください」と問いあわせをしたようだ（うちは一般家庭なので、当然これではわからないのだが、たくさん食べて帰れるため、当時部報などでは料亭岩松と呼ばれていた）。

これだけの人数だと部屋で食べるのは大変なので、庭にござを敷いて焼肉をした。電気プレートはかなり電気を食うらしく、２台を１つのコンセントに繋ぐと、どうしてもブレーカーが落ちてしまうので、１台は隣の家から電気をひかせてもらったら、今度は隣のブレーカーが落ちてしまった。宴もたけなわとなった時、１年生には演芸を披露してもらった。そんなこんなで、時間も遅くなり、帰るのが面倒な人が結局10名程雑魚寝していったように記憶している（同期の青山君は現在の夫人と一緒に寝てたかな）。

ＯＢとなって最初の京大戦の時は、京大の同期の連中が来て泊まっていった。彼らは必ずボケと突っ込みを誰かがやらないといけないことになっていた？ようで、非常に賑やかであった。

ここで記憶にある料理をあげてみると、かぼちゃスープ、刺身、グラタン、おでん、鳥のもも焼き、中華ちまき等であろうか。中でも中華ちまきは意外と好評で、うちに泊まりに来た人のおみやげとして持ち帰ってもらった人も結構いたように思う。

卒部して10年以上が経つが、ＯＢとなってからも何人もきてくれました。地方にいる人は東京にきた折には、ホテル代わりに使ってもらっても構いませんのでお気軽におこしください。

そして最後になりますが、突然何人も連れて行ったり、かなりの人数を呼んだりしても快く受け入れてくれた両親に感謝 !!

部員達の憩いの場について----「ひさご」

昭和59年入学　　竇迫　巌

「ひさご」と聞いて、皆さんは何を一番に思い出すであろうか？　筆者がまず思い出すのは「ひさご選手権」（第１回～第３回）である。

ラブオールプレイッ！！　掛け声と共にひさごの引き戸を入ってすぐ左側のテーブルいっぱいに陣取った参加者達は一杯目のサワーを飲み干した。「なんだかこのサワー、俺のだけやたら濃くないか？」とＡがつぶやく。「そんなことないですよ。みんな同じに決まってるじゃないですか。」とＢ。だが、実際にはアルコール量はマスターの手加減で決まり、当たりはずれが大きいのである。「ひさご選手権ルール」は単純である。他店と比べて「濃い」ただしアルコール濃度のばらつきが大きいひさごサワーを一番多く飲んだ者が優勝（酒ランキングのＳ１）である。「おっ、今日はみんな飲みっぷりがいいねぇ～」とマスター。「いやいや、いつもと同じですよ。サワーお代わり10杯」とＣ。「飲んでばかりいないで、つまみも頼んでよ。」とマスター。このように和やかな雰囲気の中、選手権は始まった・・・。７杯目を過ぎた辺りから、雰囲気が熱く妖しくなってきた。駆け引きが始まる。「ちょっとトイレ」と言って外へ出て酔いを冷まそうとする者、「だんだん、厳しくなってきたなぁ～」と牽制する者、「「うぇっ」となっちゃうかも、な～んて」と余裕を見せる者など様々である。この辺の駆け引きはバドミントンの試合と同じである。先に熱くなった者が負ける。10杯目を過ぎると、リタイア組が多くなってきた。テーブルに突っ伏したまま動かない者もいる。しかし、戻したりする者はいない。さすが部の酒豪達である。戻すまで飲むのはもったいないのでルール違反であるという暗黙の了解があったのも事実である。勝利を確信したＣがたたみかける。「Ｄさん、グラスを持つ手が止まっているんじゃないですか？」、「Ｅ、飲みが足りねぇぞ」。このように言われＤとＥはグラスに残っているサワーを一気に飲み干した。「おばちゃん、サワーお代わりっ！」、Ｃの容赦ない叫びが店内にこだました・・・。この日の優勝者はＣで記録は15杯であった。ゲームオーバー。

さて、ひさごのバドミントン部に於ける役割を一言で言うと部の会議室（兼憩いの場）であったと思う。少なくとも筆者の頃はそうであった。練習の後に行け、比較的長い時間居ることができ、しかも空いた腹を満たし乾いた喉を潤すことが出来る場所となれば、ひさごの他はなかったのである。目的はシングルス選手権やダブルス選手権の組み合わせを決めるためであったり、上級生から下級生への引継や合宿・遠征・

対抗戦・リーグ戦のための打ち合わせのためであった。店に入ってすぐ左側にあるテーブル席を使わせてもらうことが通例であった。このテーブル席に座れる人数は通常５～６人程度であるが、時には10人くらいが詰めて座っていた。取り敢えずビールと枝豆を注文する。ビールと枝豆で議題について議論（決定）したあと、他のつまみや酒を注文するのが習慣であったと思う。ここからが憩いの場であり、そこでの話題は様々であった。バドミントン技術や他校選手のことから進路や“お付き合い”のことまで話題には尽きなかった。

最近は現役部員がひさごに行くことは無くなったと聞いている。しかし、何かを決める会議は、たとえひさごで行わなくても「ひさご会議」と呼ばれているそうである。これもひさごがバドミントン部の会議室として機能していたこと示す一つの証拠と言えるのかもしれない。

今から振り返ると、ひさごのおばちゃんにマスター、そして常連のお客さん方にはいつも迷惑ばかりかけていたように思える。しかし、厭な顔一つせずに毎回暖かく迎え入れてくれた。お陰で、楽しい時間を過ごすことが出来たし、部の運営も滞り無く行うことが出来たと言えるのではないかと思う。この場を借り感謝の意を表したい。

最後に本稿を書くに当たって筆者が思い浮かべたひさごに関する事柄を以下にキーワードとして纏めておく。皆さんがひさごについて思い出す時の一助となれば幸いである。

キーワード：提灯、ミニ提灯、枝豆、モツ煮、野菜炒め、ウィンナー炒め、焼きそば、エイひれ、揚げ豆腐、ナス納豆揚げ、お茶漬け、ビールは自分で冷蔵庫から取る、濃いサワー（だぶだぶ）、おばちゃん、マスター、娘さん、常連のおじさん達、駒場商店街の東端、夏の強化練の後はかき氷そしてひさご、部の重要事項を相談（決定）する場、ＯＢと相談をする場、技術論を語り合う場、進路相談、人生相談

駒場寮の思い出

昭和61年入学　　中野　史彦

私が駒場寮生になったのは、大学２年になった時である。１年の頃は、普通に下宿生活を送っていたのだが、よく生協などで見かける駒寮生（服装からすぐわかる）を見るにつけ、「人間、ああはなりなくないものだ」と常々思っていた。「ああなりたくない」などと思っていると、逆にそうなってしまう事があるから人生とは、恐ろしいものである。

駒寮は、一度住んでしまうともう出られなくなるところである。長所を挙げればきりがない。（都会の一等地で家賃が安い、電気水道、風呂、洗濯は無料、通学時間０（通学しなくなるので意味はない）、etc.）しかし、とりわけ寮全体に漂っているなんともいえない心地の良いけだるさといったようなものが人を魅きつけて離さないのだ。こうして「毎日が日曜日」の生活がバド部の連中と始まったのであった。

当時は、バド部を中心として、毎日の生活が動いていた。私は故あって練習時間を除いては、大抵駒寮の自分の部屋にいたのだが、講義の空き時間などに同輩、先輩、後輩が入れ替わり立ち替わり訪れてきてくれたおかげで、早速溜まり場（＝暇つぶし、着替え、ガット張り、ファミコン、図書館、宿泊所、居酒屋、つぶれた者の駆け込み寺、etc.）の主人になってしまった。鍵の番号はすぐに知れ渡り、私のいないときにも誰かが必ずいて上記の目的に使用していた。

といっても私も利用されてばかりいたわけではない。何かの都合で、部室がつかえないときには、ネットやシャトルの保管場所になっていたので、いつでもシャトルをくすねて個人練習に使う事ができた。体育館の合鍵を手に入れ、朝練もやった。無理やり付き合わされた同輩のＦ君やＫ君には、本当に悪い事をしたと反省している。

しかし私達は大学時代を部活に捧げる模範的運動部員とはいい難かった。練習が終わると毎回のようにＹ君の行きつけの居酒屋、焼肉屋などへ繰り出して夜遅くまで遊んでいたのである（焼肉のおかげで筋肉はついた）。駒場寮は渋谷中心街まで、徒歩20分で終電を気にする必要がない。でもハードな練習の後にあれだけ夜更かしをしても平気だったのは何故だったのだろうか。

部屋でも良く飲んだ。皆酒の力を借りて、私にその赤裸々な「真実の姿」を見せてくれたものである。当時の飲み方は通常の限界をはるかに超えており、特にＫ君の飲みっぷりは「スプラッシュ」「スプリンクラー」などの言葉で形容されるにふさわしいものであった。またコンパの度に必ずつぶされ、「いつも翌朝、目をさますとなぜか駒寮にいる」Ｔ君の姿も忘れる事ができない。

夜が明けると部屋は凄惨な様相を呈しており、ふき取れないシミを除くために、絨毯には、所々穴があけられた。私の不在中にＹ君がどこからともなく連れ込んできた「猫」のおかげで部屋にノミがわき、眠れぬ夜を過ごしたこともある。またＳ君の持ち込んだファミコンは、一時ブームを捲き起こした。

私達が卒部してからすでに10年以上が経過した。駒場寮は数年前に取り壊され、あれだけ馬鹿騒ぎをしていた皆も、今は社会に出て立派に活躍している。私は故あって今だに大学に在籍している身であるが、隣りに住んでいる学生の夜中の騒音には、いつも悩まされる。しかし彼らも昔の自分達よりはずっとましだ、と思うのであった。

7．伊豆・戸田マラソン

伊豆縦断レースの思い出

昭和43年入学　　岩崎　與雄

アルバムの余白に「1969年10月５日伊豆縦断レース団体優勝」と書かれた二枚の写真がある。これが当時を呼び起こす唯一の手懸りである。その一枚には、川上さん（昭和41年入学）、故湯浅さん（昭和42年入学、昭和52年事故により逝去）と私がゼッケン姿で肩を組んで写っており、もう一枚には、賞状と副賞のビールを抱え、晴れやかな顔の三人が写っている。既に三十年以上も歳月が流れ、記憶も随分薄れてしまったが、あの頃を回想してみたい。

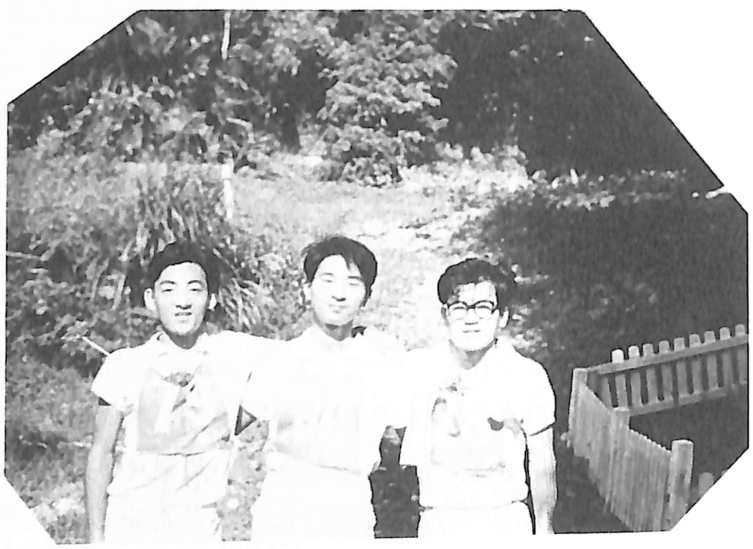
当日は初秋の穏やかな日であった。早朝、バスで戸田寮を出発し、スタート地点の宇久須に移動する。準備体操とウォーミングアップをした後、号砲一発スタート。朝日を浴び爽やかな空気を肺に出し入れしながら岬の軽いアップダウンをこなしていく。ところが、５kmすぎから横腹が痛み始めペースが鈍る。先輩二人は快調に前を走っており、どんどん離れていく。しかし、チームを構成する三人中三番目の人の順位で団体成績を競うというルールでは意地でも脱落するわけにはいかない。田子、堂ヶ島と走りぬけるうちに腹痛はおさまる。コースの途中何箇所か設けられた給水地点には水分以外にバナナやおにぎりが用意されており、立ち停まってぱくついているやつがいる。彼らを横目で見ながら抜き去り、前へ前へと進む。松崎からは、海岸線と別れ、川に沿って内陸へ入っていく。道は、徐々に上り勾配となり、難関の蛇石峠へ向かう。路面は、未舗装の砂利道で走りづらい。上りにかかってすぐ、先行する湯浅さんを追い越して、さらに走り続ける。しかし、厳しい上り坂続きで脚が動かなくなる。気力で前進するうち、頂上付近で、川上さんを発見する。前の走者と大きく離れてしまったため、立ち停まって後輩の我々を待っていてくれたのだ。程なく、湯浅さんも到着、三人そろったところで、狙いを個人成績から団体優勝へ切り替える。下りは、脚も膝もガクガク、ピッチも歩くに等しいところ迄落ちたが、後続の走者に抜かれぬよう給水ポイントで順位を確認しつつゴールの下賀茂目指してひた走る。スタートしてから約三時間半、遂に、下賀茂寮のテープを切った。表彰式を終え、バスと電車を乗り継ぎ下宿にもどったその晩は、ベッドにバタンキュー、その後一週間、筋肉痛と脱力感が続いた。

翌年初夏に行われたレースには、卒業した川上さんを新入生の岸田君に入れ替えたチームでチャレンジした。今回はクラブから同期の長谷川、小林両君や下級生の江藤君たちが別チームを編成して参加し仲間が増えたし、前回と同じコースを走るということもあり、余裕をもって臨んだ。スタート直後トップ集団について飛ばす下級生を

みても慌てる事はなくマイペースを貫いた。蛇石峠の頂上付近で、太股の裏が吊りかけるというアクシデントがあったものの、昨年を上回る個人４位でゴールし、チームでも湯浅さん、岸田君の頑張りで連続優勝することができた。

このように、参加二大会いずれも団体優勝という記録を残せた訳であるが、今振り返ってみると、随分無謀な挑戦をしたものだと思う。というのも、中学、高校と駅伝等で長距離を走っていたとはいえ、一番長く走った距離はせいぜい10kmであったし、初参加の時は、コースの試走はおろか、どんなコースかも全く知らず、文字通りぶっつけ本番で臨んだのだからである。それにも拘らず好成績を残せたのは、日頃クラブで厳しいトレーニングを積み、体力、気力共十分ついていたことに加え、クラブ仲間の連帯感の強さの賜物である。

四年間の部生活において本業のバドミントンでは大した戦績も残せなかった私だが、副業の伊豆縦断レースで二年連続団体優勝という輝かしい記録に貢献できたことを現在では大いに誇りに思っている。私の数少ない勲章である。



伊豆縦断マラソンレース完走後の疲れた顔

1969年10月５日

左から　湯浅、岩崎、川上

戸田マラソン人生論

昭和51年入学　　上野　誠也

１．戸田マラソンは人生の栄光である。

バドミントン部は昭和53年戸田マラソン団体の部で優勝している。当時、２年の神野氏と３年の山本氏と筆者がチームを組み、３人の合計順位で競う団体の部での優勝である。これは全く無欲の優勝であり、予想していなかった。神野氏は初マラソンであり、順位など予想できなかった。山本氏と筆者は２回目の参加であったが、初参加時の記録は50位前後であった。上位に入るとは考えもせず、レース前日に急遽組んだチームであった。戸田マラソンが人生の栄光であることは、何も上位に入賞することでない。あのコースを走り抜けたという事実が一生他人へ語ることのできる栄光である。フルマラソンでありながら、500m、200m、150mの３回の登りがある気違いじみたコースである。こんな過激なフルマラソンコースは日本には例がなく、富士登山競走や六甲山縦走などの山岳レースに匹敵するコースである。それを走破したという実績は人生の栄光である。

２．戸田マラソンは人生の縮図である。

これは、戸田マラソンを走った関口元学生部長がコース紹介で使った言葉である。幼稚園児のようにはしゃぎながら戸田の町中を走り抜けた一団が、緩やかな上り坂を義務教育のように一列となって走る。５km地点付近からは苦しさだけの青春時代の登りが始まる。500m登って、たどり着く真城峠は華やかな卒業式である。ここからは、順風満帆の独身貴族の下り坂である。そこで目にする美しい富士山は、良き伴侶との出会いである。下りきって古宇からは海岸線を走り、中間点を過ぎる。どこまでも続く退屈な海岸線は倦怠期を迎えた二人である。大瀬からの登りで中間管理職のつらさを痛感し、ここで多くの走者が歩き始める。30km地点を過ぎて、井田への下り坂で確たる地位を得たと思ったのも束の間、急に始まる最後の登りはまさかのリストラである。苦しめられた後に戸田寮が見えれば人生の終点が近いことに気づく。町中で耳にする声援は、退職者への花道である。町中から離れ、人々に忘れ去られた後、安楽のゴールにたどり着き、人生を終える。ゴールの先には極楽浄土である戸田寮の風呂が待っている。

３．戸田マラソンは人生の英知である。

はっきり言って、走っている最中、頭は暇である。足しか使っていないので、頭は空っぽの状態である。レース展開を考えるといった高度なランナーではない。いろい

ろと考えることをレース前に考えておかないと、本当に暇になる。暇を持て余して、余計なことも考える。まさに考える「足」となっている。考えることはいつも決まっている。いかに疲れないかである。勢い余って、走る前からも考えてしまう。部内で伝統的に受け継がれた、戸田マラソンの攻略法である。当時のバドミントン部は二人ずつペアで走る走法を使っていた。また、コース上の特徴を示す「白亜の建物」「疑似岬」など部内だけに通じる言葉も生まれた。その最たる用語は「軽量化」である。これに関しては、昭和53年入学の野村氏の論文が部報に掲載された。名著である。親が子に習慣を教えるように、部内に引き継がれた。まさにバドミントン部の英知の賜である。

4．戸田マラソンは人生のバカヤローである。

戸田寮といえば馬鹿野郎の集団である。そこで繰り広げられる戸田マラソンの参加者は当然馬鹿野郎である。近年、「バカヤロー賞」なるものが設定され、スタートダッシュ１位などの最高のバカヤローが表彰されている。戸田マラソンはコースの厳しさで他に類を見ないレースであるが、もう一つ特徴がある。それは、初マラソン挑戦者が参加者の大半を占めていることである。初マラソンでこんなコースを選ぶのは無謀というのが正直な話である。無知より強い物はない。初マラソンであるからいろいろとエピソードが生まれる。寝付けないと困るからといって、自宅から枕を持参した方もいた。レース中に倒れないようにと、妖しげなお守りを首から下げて走った方もいた。残念なことに、この方はコースを間違えて、他人より２㎞程多く走られた。それだけ多く走っても倒れなかったのだから、お守りの効果はあったようだ。レース中に催して、草むらの中で用を足す者もいる。まさに国際（こ臭い）マラソンである。気合いだけで走っている応援部員もいる。どんなにバテていても、声援だけで復活するので怖い存在である。皆真剣にやっているから一層おかしい。この気違いコースを16回も走っている筆者も間違いなく馬鹿野郎である。

伊豆戸田マラソンの思い出

昭和53年入学　　野村　誠

学生時代に戸田マラソンに３回出場し、都度完走できたことは今でも少し自慢に感じています。完走したコースが世間一般の平坦なコースではなく戸田のマラソンコースであるから尚更です。

マラソンコースの厳しさは距離が同じ42.195kmといってもコースによって随分異なります。戸田のマラソンコースは上り下りの高低差が大きく、世界各地に数あるコースの中でも相当の難コースでしょう。

戸田マラソンのコースを思い出してみましょう。西伊豆の戸田港の灯台前から出発し、往路は山中の真城峠を越えて、隣町の西浦まで行きます。復路は海沿いの道を井田経由で戸田港の灯台まで戻ってくる基本的には周回コースです。このコースの特徴は何と行っても坂の上り下りの多さにあります。

地図を見ながら高低差についてもう少し詳しく見てみましょう。
戸田港の灯台の前から出発します。つまり最初は海抜０メートルです。往路の途中の真城峠まで上ると海抜約500メートルです。折り返しの隣町の西浦まで行き着くと一度海岸まで下るので再び海抜０メートルです。復路の海沿いの途中にも高低差約120メートルの上り下りが２回あります。コース全体の高低差の合計は、地図から読みきれない小さな上り下りを含めると約800mでしょう。

比較のためにマラソン雑誌(*1)で日本各地のマラソンコースの高低差を調べてみました。紹介されている131のマラソンコースを高低差の多い順に並べると以下の通りとなります。

	レース名	高低差	距離
１）	富士登山競走	3000m	21km
２）	磐梯吾妻ｽｶｲﾗｲﾝｳﾙﾄﾗﾏﾗｿﾝ	1550m	70km
３）	八ヶ岳野辺山高原100kmｳﾙﾄﾗﾏﾗｿﾝ	1020m	100km
４）	鳥海ブルーライン登山マラソン	1000m	17km
５）	千ヶ峰気絶寸前登頂マラソン	820m	15km
６）	奥武蔵登山マラソン	800m	75km
	（戸田マラソン）	800m	42km
７）	大阪府ﾁｬﾚﾝｼﾞ登山山岳マラソン	800m	35km
８）	兵庫県美方の残酷マラソン	700m	24km

9）	青海町ヒスイの里山岳マラソン	650m	30km
10)	石巻登山マラソン	500m	15km

(*1)　「ランナーズ」2000年５月号マラソン大会予定一覧より

世の中平坦な高低差100m以下のコースが多い中、物好きなコース設定が案外あるものだと感心します。その中において戸田マラソンは、１位の富士登山競走にはかなわないまでも、並な各種登山マラソンよりも厳しいコース設定で、８位の残酷マラソンや５位の気絶寸前登頂マラソンと肩を並べる堂々たるコースということになります。これはもう普通のマラソンコースというよりウルトラマラソンコースといえるでしょう。

ただ戸田のマラソンコースの距離は昭和54年までフルマラソンに少し足りなかったようです。昭和57年以降総距離を42.195kmに合わせるためにコースの途中で海岸沿いの道を数キロ往復させられた記憶があります。

レース展開を思い出してみましょう。

コース前半の真城峠までの坂は相当に急で呼吸器系に負担がきます。ただバドミントンで日頃鍛えていた若者達はまだ体力に余裕があり、下りで視界の開けた直線コースでは気分的に楽なためもあって、ついオーバーペースとなりがちでした。前半の坂で飛ばした分中盤の上りのダラダラ坂で筋肉系に負担が出てきます。使い古しのバドミントンシューズを履いて走った初出場の時は、途中から靴が異常に重く感じられ脱ぎ捨ててしまいたい気がしたものです。当時の部報に軽量化特集の原稿を書く気になったのはこの時でした。２レース目からは軽い陸上競技用のシューズで走りましたが、タイム的にはほとんど変わらなかったと記憶しています。

コース終盤の道は山中も海沿いもカーブが多く前後の見通しが利きません。前のランナーから少し離れると背中が見えなくなり孤独な走りとなって、ペースがつかめなくなります。特に小刻みに曲がりが続く30km近辺は、木の枝が道に覆い被さった薄暗いカーブが多く、同じコースを何度も走っているような錯覚に陥って精神的にもきつかった。視界の狭い道をしばらく走った後、ゴールの約５km手前の地点で山の上から戸田村が一望に見える地点があります。急に視界が開け、ゴール地点にある灯台が輝いて見えるのは何とも言えない気分の良い瞬間でありました。

マラソンの約30kmまではエネルギーは肝臓内に蓄えられたグリコーゲンを燃焼することにより得られています。30kmを走り終わる頃肝臓内グリコーゲンが枯渇しエネル

ギー源が脂肪に切り替えられます。このエネルギー源の切り替えの際に苦痛を伴い時に腹痛を起こしたりします。ただ、このエネルギー源の切り替えが済んでしまうとその後の走りが不思議と楽になる事を戸田マラソンで知りました。肉体的な苦しさを感じなくなり、頭の中が真っ白になり、嫌なことを忘れて不思議な気分に包まれながら楽々と最後の５kmを走破した気がします。

戸田マラソンを２回３回と走りたいと思った理由はこの麻薬にも似た不思議な感覚を再び感じたいがためであったと思います。

30km前後のエネルギー源の切り替えに伴う苦痛と、切り替え完了後の不思議な感覚を知ってから、テレビなどでマラソンレースを見るのが好きになりました。選手が苦痛に顔をゆがめていると他人事と思えずついレース毎に感動してしまいます。

坂が多いとされるシドニーオリンピックの観戦もコース上の坂の位置や高低差に着目して観戦すると一味違った楽しみ方ができるでしょう。

あなたは42.195kmを今でも完走できますか。

40歳を過ぎた今の私にフルマラソンの完走は多分無理になってしまいましたが、苦しさを乗り越えて完走したときのあの感覚は今でも胸に生きています。

あなたも走れるうちに一度挑戦してみては如何ですか？



1980 年 11 月

小林　坂本　大井
神野　野村　上野　大谷
山本　築地

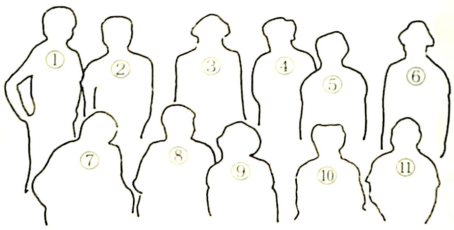


1982 年 11 月

山本　小林　松野
徳永　佐伯　上野　前田
井田

1976 年６月６日





①上野　②真川　③坂井　④園
⑤松坂　⑥山本　⑦工藤　⑧小鷹
⑨小西　⑩村田　⑪菊地

1983 年 11 月６日





1986 年



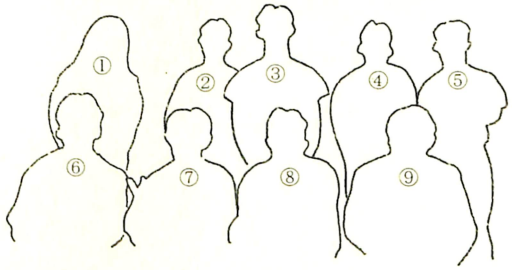
1986 年
第 11 回伊豆戸田マラソン打ち上げ
（双葉寿司）
団体２位

1987 年





1991 年 11 月 10 日



①酒井　②小西　③市原　④伊藤　⑤石田
⑥小林　⑦氏家　⑧松薗　⑨塚本

８．部報抜粋

初心者向けパンフレット（1967年頃）より

バドミントンを始める人の為に—その技術的向上に向けて—

昭和40年入学　　伊丹　誠

これは一年前、現二年生の一年合宿に向けて書かれたものであるが、その内容を全く変えずに再び出すことにする

乱打の注意

乱打（編集注：基礎打ちのこと）は、単に肩ならし程度のものとしか考えずに、いい加減に（あまり緊張せずに）なされ勝ちである。もしもその程度のものなら、その時間は10分もあれば充分である。そのような乱打も、その場の事情によってはあり得るであろうが、普通に乱打の時間を20分も30分も取ってやるからには、それだけの効果を引き出さねばならない。努力次第で乱打の効果を２－１以上にすらしようと思えば出来る筈である。

乱打を効果のあるものにするための基本的注意のひとつは、自分の欠点を直すことに留意する事である。フォームが悪い、下がり方が遅い、打ってからの姿勢が悪い等々の注意は、諸君は練習の最中によく受けるだろう。それをよく頭に入れておいて、乱打の時にこそその欠点を直すのである。この点だけを取って見ても、乱打で気を抜いてやることは出来ないはずだ。

次に、乱打をする時には必ず相手がいると言う事を忘れないでもらいたい。当たり前じゃないかと言うかもしれないが、この事は、意外と忘れられがちである。自分の欠点の修正に囚われる余り、相手のことを忘れて、その練習の妨げになる事がよくあるからである。自分の練習であると同時に相手の練習でもあるのだから、充分にその点を考えてもらいたい。また、ささいな気分的な事、感情等でいい加減な練習をすると、自分の練習にならないばかりか、相手の練習をも妨害することになる。前者はたとえ許されようとも、後者は断じて許されるべきではない。乱打を含め、一般に一対一でやる練習は、お互いが厳しくする事によって、お互いを上達させるのである。この点を再度十二分に確認しておく事が必要であろう。

次に個々のストロークについての注意を述べておく。

ハイクリアー

乱打を開始して最初にやるクリアーであるが、これが非常にいい加減である。クリ

アーにはハイクリアーとドリブンクリアーとがあるが、どちらともつかない中間的なクリアーを打って澄ましている。先ず最初に打つクリアーはハイクリアーである。大きな弧を描いてバックラインまで飛ぶようなクリアーである。これには二つの事を注意すべきであろう。

ひとつは高く飛ばす事、それは駒場の体育館で言うならば天井に届くくらいに飛ばすことである。そしてもう一つはバックラインギリギリまで飛ばす事である。特に後者はいい加減になりやすく、ダブルのサービスラインまでしか飛ばさなかったり、バックラインを大きく越して打ったり、現在の状態は目に余るものがある。とにかくこのハイクリアーがバドミントンの一番の基本であり、かつ最も簡単なストロークであるから、確実に打てるようにしておいてもらいたい。

次にドリブンクリアーであるが、これは攻撃用、防御用と分ければ攻撃用のクリアーである。スマッシュの次に力のいるクリアーで、手首を相当に使う。これはハイクリアーのように高く上げるのではなく、ほぼライナー性で、ホームポジションにいる相手が、ラケットを精一杯伸ばしたそのほんの上を抜くくらいの高さを飛ばすのである。

このクリアーで十分注意すべきは、バックラインを大きく越す人がたくさんいると言う事である。これはただやたらに力を入れて打つからで、手首の入れ方、打点等と共に力の配分に十二分の注意をしなくてはいけない。打点も高く、手首の入れ方がいいと、バックラインをまさに越えそうなところから急角度に落下し、ラインギリギリに落ちるのである。このドリブンクリアーを何発も何発も続けて打てるようにならなければならない。それが出来るようになったら大きく成長したと思ってまちがいないだろう。

このクリアーを打つときの注意は、必ず前に出るという事。打ったら必ず前に出て、飛んできたら又さがって打つ、打ったらすぐ前に出る……。これを怠らずにやれば、ことさら２－１をやる必要もないし、全面でやる時もそれ程苦にならなくなるだろう。そして打った瞬間は、必ずフォアなら右足、ラウンドザヘッドならば左足でしっかりと止まる事。打ったあとヨロケルようではダメだ。さがり方が遅くてシャトルに押され、打ったあと後ろにヨロケル人が多いが、そのようでは安定したストロークは打てないし、ホームポジションに戻るのに時間がかかって（特にバドミントンのようにスピードのあるゲームでは、半歩の違いが致命的になる）取り返しのつかない事になる。後ろにヨロケルというのは、ただひとえに下がり方が遅いからである。十分な姿勢で打ってヨロケル人はいない。下がり方の遅い人は速く下がる練習に励まなければならない。

次にフォアを打つときであるが、充分な姿勢でいながらも、打ったあと左足を“送る”人が目立つ。左足を送れば、右足ですぐ蹴って出る時よりも一歩か半歩遅れる。この点を充分に注意して欲しい。これは上級生にも多く見られる欠点である。それから打点であるが、大切なのは腕を充分に伸ばして頭のてっぺんで打つことである。腕力、手首の力がついてくると、少しくらい横の方から打っても後ろまで飛ぶようになるが、それではクリアーの威力が落ちる。低い位置から打つよりも、高い位置から打つ方が威力があるからである。低い位置から打つことがクセになると（楽だからクセになりやすい）他のストローク――スマッシュとかドロップを打つときにも同じクセが出て、その威力を減少させる事になってしまう。特に低い打点からしか打てない場合を除き、半面という狭い範囲でやるのだから、常に打点を高くして打つ事を心がける必要があろう。打点が高くなれば手首も非常に入りやすくなるという事もしっかりと覚えておくように。

スマッシュ

ハイクリアーの次に教わるのがスマッシュである。基本的姿勢はハイクリアーの時と変わらないが、力を入れる方向と、手首の入れ方、力を入れる量が非常に違う。これこそまさに全身の力でネットの白いテープをめがけてシャトルを叩きつけるのである。スマッシュも打点が非常に大切である。打点が高ければそれだけ手首が入りやすくなるし、角度もつき、スピードも速くなる。これもクリアーと同様に右足でふんばって（フォアの時）打ち終わったら、その勢いで前にグッと出る位でなければならない。スマッシュを打ったあとボサッとその場に立っている人が多いが、スマッシュのリターンはネット際に返ってくる場合が非常に多いから、必ず前に出るようにしなければならない。スマッシュが遅かったり、相手のレシーブがうまくて後ろにシャトルを返されたら、すぐに又バックしてスマッシュを打つように心掛けなければならない。特に大きく返されると、フワッと返したりあきらめて見送ったりする人が多いが、そんな事をやっていても決して進歩は望めない。上がってきたシャトルはすべて叩くという意気込みでやってもらいたい。ネット際に返されたシャトルでも、前にダッシュして叩きつけるくらいの気構えが欲しい。

次にスマッシュを打つコースであるが、これも非常にマチマチで、自分で狙って打ったのか、打ったらそこに飛んでいったのか分からない状態でやっている。とにかくコースを狙って打つようにしてもらいたい。半面でやっているからといって半面のどこかに入ればいいというのでは困る。特にコースを狙って打つのは非常に技術を要するし、細心の注意力、精神の集中力を必要とする。狙ったコースにスマッシュを打つ

方が、速いスマッシュを打つよりも何倍か難しい。ゲームをやってみれば、コントロールのよし悪しは露骨なほどによくわかる。半面の練習の時から、相手のバックなりフォアなりボディなりを狙って打つように心掛けてもらいたい。

次はレシーブである。レシーバーがまず注意すべきは、シャトルから逃げるなという事。レシーブの際、腰が引ける人が多いが、一歩下がってレシーブするのではなく、逆に一歩前に出て球を捉えるようにしなければならない。スマッシュは普通上から下に飛んでくるから、後ろに下がれば下がるほど打点は低くなり、返すシャトルは甘くなり、相手のコートに届くまでの時間が長くなる。そうすればそれだけ相手に有利になるのである。シャトルを少しでも前でとれば、逆に打点は高くなり、厳しいシャトルを返す事ができ、相手のコートに着く時間も短くなる。

しかし、前でとるといっても、相手は守りを突破せんとして打つのであるから、守備位置には自ずと限度がある。ネット際にラケットを上げていれば、十数発のうち一発くらいはうまく当たって返せるかもしれないが、それでは練習にならない。ある程度下がって腰を落とし、かかとを上げて、膝に柔軟性を持たせてラケットを出す。肘とラケットヘッドを上げて構え、球が来たらすぐにその方向にラケットを出すようにする。特にボディに来た時は受けにくいが、この時も後ろに下がらずに、横に体をひらいて打つことだ。体を開くというのは、片方の足を横に踏み出すという事である。そして、ゆるいスマッシュや浮いた球が来たら、横なぐりにドライブで叩き返すようにする。ドライブで返すのは、前でとるのが絶対的条件となる。

次にラケットのかまえ方であるが、ラケットは体からある程度離しておいた方が自由に使えるし、前に構える方が範囲を広く使える。色々小細工がきくのである。体の横よりも前の方が多彩な球が打てるから、横に来たシャトルも体をすばやくそちらに運んで、なるべく前方で打つのが望ましい。この為にはまず足を踏み出すのが前提となる。とにかくシャトルが飛んできたら、ラケットだけを出すのでなく、左足で蹴り、右足を鋭く踏み込んで体ごとシャトルの方に持っていくつもりでレシーブしてもらいたい。フォアに来た時に左足だけを一歩踏み込んで打つのは、比較的自分に近いところはいいが、遠い時は届かないし、更にこの場合、切り返しがうまくいかなくなる。

ドライブ

ドライブはライナー性のストロークで、スマッシュを打つには低すぎるシャトルを、ほとんど床と平行に打つストロークである。練習では下に叩く事ばかりに追われて、まっすぐに何発も続けて打つというのが行われていない。特に初歩の人は、肩口あたりのシャトルを相手の肩口あたりに返す練習を続ける事が望ましい。そしてそれが出

来るようになったら、速いシャトルにも押されないようにして、打ち合いながら徐々に前に出て行くようにする。

ドライブのポイントは、かかとを上げて、膝に柔軟性をもたせ、一発打ったらすぐにラケットを上げて構えることである。足は必ず右足を前に出して打つ。打ったあと、ラケットを上げずにシャトルが飛んできてから上げるようだと必ず遅れて、リターンが浮いてしまう。“ラケットを上げていること”、“右足を出すこと”、“かかとを上げていること”が最も心掛けるべき点である。

練習方法には更に、一人が比較的前、一人は比較的後ろにいて、前にいる方は下にシャトルを叩き、（そんなに強くでなく）後ろにいる人は横又は下から強く白いテープをめがけて返すようにして、それを何回も続けて打ち合うという方法がある。バックのレシーブが弱い人が多いので、とくにバックを充分に練習する必要があるだろう。横から打つ時も出来るだけ前で球を捉えることを心掛けるべきである。

ネット

ヘヤピンの事である。シャトルの飛び具合から、hair-pinというのであろう。注意する事は、打つ前はショートサービスラインまで必ず下がっておき、シャトルが飛んできたら右足を前に出して、腕を伸ばし、手首をあげて、出来るだけ高い位置で受けるようにする。この時の構えも必ずかかとをあげて、すぐに動き出せるような態勢でなければならない。レシーブをしたらすぐに右足を戻してかまえ、又右足を出して受けるというように、絶えず右足を出したり引っ込めたりしなければダメだ。ネットのつぶし（ネット際に上がったシャトルを叩くこと）は、出足とタイミングが難しいので、後の機会にする。

ドロップショット

ドロップは非常に難しい。“力”を全く必要とせず、“技術”のみである（ネットも同じ）。“力”はかえって邪魔になる事さえあり、大学から始める人にとっては、ドロップを確実に打てるようになるには、相当の苦労が必要であろう。“技術”は若ければ若いほど身につきやすく、体が固くなればなる程身につかなくなるものだから。そして“技術”は一度身につけるとほとんど後退しない。スマッシュを速く打てるようになってもコントロールをつけるのは難しい。ドロップは更に難しい。打つ姿勢はハイクリアーの時と同じである。出来るだけ高い所で、ラケットをかぶせるようにして軽く当て、シャトルをネットぎりぎりに落とすのである。諸君も体験した通り、初めのうちはスマッシュのようになったり、ネットよりも1メートルも高かったり、ネッ

トの下をくぐったりするのである。打ち方はスマッシュと同じで、スマッシュを打つ瞬間に力を抜いてシャトルを打つといったらよいのか。とにかく“力”を使わないストロークであるからこそ、一番諸君の身につきにくいものだろう。打つ瞬間のラケットの面の向きによって相手のバックに行ったり、フォアに行ったりする。練習においては、ドロップを打ったら必ず前に出て、シャトルが飛んできたらバックして打つ…、これはスマッシュ、クリアーと同じである。

ドロップのレシーブは、左足で蹴って右足を大きく出し、腰を低く、上体を起こして、出来るだけ高いところで取るようにする。右足の踏み込みが足りないと前につんのめったりして、安定した球を返す事ができない。右足の踏み込みの足りなさ、その結果としての腰高、これこそが最も一般的に見られる欠点である。これは特にフットワークの練習の欠陥に求められる。現在見られる練習の多くは、ただ足を出し、体を倒しているに過ぎない。左足で蹴り、右足を思い切り出し、腰を充分に落とす。これをやらない限り進歩しない。現在のフットワークの練習は、悪い姿勢を更に更に強固にしているのである。

右足で止まるのは、かかとでなく、親指のつけ根である。親指のつけ根でしっかりと止まり、そのつけ根で思いきり蹴ってホームポジションにもどる。フットワークこそ最も大切なものである。悪い姿勢は早く直さなければならない。

（以下　略）

1983年５月新入生歓迎号より

クラブ活動の心構え

昭和42年入学ＯＢ　　豊田　拓男

物言はぬは腹ふくるゝわざですが、断片的にものを言えば誤解されることもあり、また、意を尽くさざることもありますので、今後は原稿を寄せることにします。今回はクラブ活動をやるに当たっての心構えについて、それぞれの立場に沿って書いてみましょう。

１　キャプテン

(1)キャプテンは強くあれ

キャプテンで大切なことは、まず自分が徹底的に強くなることです。ムラのある強さでなく、常に、1セットも落とさず、しかも10ポイント以上取られない、といった、絶対的な安心感と信頼感を与える強さです。昨今の七帝戦、リーグ戦、国公立戦などには全勝して当たり前。どんな相手と当たっても、キャプテンは必ず勝つ、というのは、団体戦などに於いてチームのメンバーに非常な勇気を与えます。

常に安定的に強い、というのは、技術・体力よりも、すぐれて精神的な問題です。幸い現キャプテンは良い素質を持っておられますので、対内試合、対外試合を問わず、見事な横綱相撲を取ることを心掛けてください。

(2)キャプテンは強くなるものを鍛えよ

キャプテンは強い者、及び強くなろうとする者を鍛えることに専念してください。「ロバを水辺につれてくることはできても、水を飲ませることはできない」のであって、キャプテンは部員に練習を強制することはできても、これをすべて強くすることまではできない相談です。強くなる、ならぬは本人の心掛けの問題であって、キャプテンの責任ではないのですから、皆が強くならないといって切ながる必要はありません。意欲のある者が、自分で強くなる環境を作ってやればよいわけです。時々上級者どうしで試合をやらせる。やる気のある下級生には特に基本をみっちり仕込む、というようなことを考えて下さい。クラブの中に、火を吹くような核が生じれば、クラブ全体はそれに引っぱられていくはずです。

(3)「魅力ある人物」をあきらめよ

キャプテンは、練習態度のいい加減な者には厳しい態度で臨んで下さい。バドミントンの練習には必ず相手がいるわけで、やる気のない練習態度は相手の気を削ぎ、全体のムードをこわします。これは練習をサボることなどよりもはるかに大きな罪です。

部員のなかには、練習はいい加減にしかやらないが、人間は面白い、といったタイプの人もいると思います。しかしそういう人も練習に出るときは一生懸命にやらなければなりません。それもできないのであれば、キャプテンはこのような人を相手にしない、という強さを持ってほしいと思います。

クラブの本分は、練習を通じてバドミントンの技量を高めることにあり、キャプテンの責務は精気あふれる強いチームを作って試合に勝つことにあるのですから。

2　上級者、及び上級生

(1)上級者は強い者に挑め

レギュラーも上位になりますと、上位どうしで競うということをやらなくなる傾向があります。これは進歩を止める大きな要因です。下の者に負けるところを見られたくないという心理が働くのか、何故かレギュラーという部屋に入ったら、その中に風が吹かなくなるということがあるような気がします。

やりすぎて馴れ合いになるのもよくないが、月に一度くらいは上級者どうしの試合をやってシノギを削りあう必要があると思います。特にNo. 1に常に挑んで、これを超えるよう努めて下さい。また、基礎打ちの場合も、相手がダブルスのパートナーに固定化する傾向があります。これも時々相手を変えてプレーの幅を広げるようにするとよいでしょう。

(2)キャプテンを助けよ

なったことのない者には分からないが、組織の一番上に立つというのは大変なことです。

クラブの方針を決めるに於いては、上級生、上位者各々よく考えて議論を尽くすべきだが、キャプテンが方向を決めたら、全員その意を体し、よく協力してスムーズなクラブの運営に努めて下さい。クラブに「お客さん」がいてはならず、全員がその主体なのですから、各自熱心にその役割を勤めて下さい。

上級生の中にも、レギュラーをあきらめざるを得ない人もあるでしょうが、そういう人には下級生を強くする、という仕事があるはずです。勉強の都合で練習はあまり

出られない、強くなることもあきらめた、といった場合でも、練習に出る時は一生懸命にやって下さい。それもできない人にはクラブをやめることによってキャプテンを助けるという手があると思います。

とにかく全員で活気にあふれた集中度の高い練習をめざして下さい。

3　新入部員に

(1)貴重な時間を大切に

クラブの練習時間を一日３時間とし、これに土日の試合や合宿を加えて、一週間約10時間を<u>クラブに直接使う時間</u>とします。そうすると年間約500時間(約21日)。一年のうちの約半分は眠ったり、顔を洗ったりトイレに行ったり、食事をしたり、食券を買うために列を作ったりの、いわば動物として生存するのに必要な時間です。すると人間が意識的に使う残り180余日のうちに、クラブが占める時間の割合は11%強となります。

クラブというのはそれにとどまらず、当然部員どうしが親交を深めあったり、助け合ったり、麻雀でムシリあったりする時間というのがあり、これがまた馬鹿になりません。少なくとも直接の練習時間と同程度以上の時間がかかるのは疑いないところです。

そうしますと、諸君が学生として使う時間のおよそ５分の１から４分の１が直接間接にクラブに使われる時間ということになりますが、これはもう目覚ましいことと言わねばなりません。

一生のうちで、心身が一番伸びやかに動く二十才前後という時期の、相当の時間をクラブに使おうというのですから、これはよほどの覚悟がないとできないことです。よほど有効に利用しないと取り返しがつきません。しかし断言してもいいが、十八、九という年齢は、人間があるスポーツを本格的にモノにできる最後のチャンスであり、その意味で諸君がクラブに入られたのは賢明な選択だったとも言えます。

ともかく貴重な時間を割いてクラブに通う以上は、この時間を有効に生かすよう、より大きい成果を得るよう、一生懸命やって下さい。常に、大切な時間を使っているんだ、という緊張感をもって練習して下さい。

(2)他人の迷惑になるな

バドミントンの練習には、常に相手があります。自分が投げやりになったり、気を抜いたりしていい加減なプレーをすると、それはすぐさま相手にひびきます。練習の

妨害となります。一人がやる気をなくしてミスを連発する。すると相手がイヤになって投げやりになる。こうしたことは連鎖的に伝わっていって、練習全体の士気を著しく低下させます。いかに自分が調子が悪くとも、決していい加減なプレイをしない、相手に迷惑をかけないと、肝に銘じて下さい。

どのスポーツでも、基礎練習というのは苦しいものです。中でもバドミントンは私自身想像もしなかったほど苦しかった。あの苦しさの中から本当の技を体得するのに、疲れたから少し手を抜こう、などと考えるようだと全くモノになりません。蒼ざめて息を切らして必死になって初めて、役に立つ技術が我がものとなるのです。あの練習の苦しさはたった一人では超えられるものではありません。お互いが気力をふりしぼり、交感神経を高めあって初めて、日常では考えられないような力が出てくるのです。コートに入ったら、まず自分が燃え、相手もこれに乗ってくるように努力してください。特に相手が自分よりかなり下手な場合、一発で決めてラリーを寸断するというのでなく、配球に工夫をして相手も乗ってくるようにし、そこでお互い充実した練習をする、といった具合に配慮して下さい。

(3)強い人に食いつけ

私自身のことを書きます。中学ではバレーとバスケットをやりました。高校は運動部には入らなかった。バドミントンは大学で初めてやった訳です。バレーのサーブ、アタックにはバドミントンと共通する点があります。バスケットもフットワークにヒントとなる点がありました。とにかく、バドミントンに関してはゼロから出発しました。まず、何をやったか。体操のあとの乱打には必ず当時の駒場キャプテン、川上さんのコートに入りました。練習開始前に中古シャトルを選り分けて、羽根打ち用というものを作っておく（これは全員の練習のためです)。その中から更に良いものを選んで二、三個窓の金網のうしろに隠しておく（当時は一体が練習場でした)。乱打の声がかかると同時にこの羽根を持って川上さんのコートに入るのです。当時の２年生では川上さんが群を抜いて強く、球が正確で厳しかった。

ゼロから始めた者が強くなるためには、よい環境が必要です。正確で厳しい球を打ってくれる先生、それに飛距離の正しい羽根。間もなく川上さんのコートは私の指定席のようになってしまいましたが、教える方にもこちらの意欲は自然に伝わるもので、下手な1年生ながら常に気合いを入れて相手をしてもらえました。自分が強くなれた理由を考える場合、何よりもまず「意欲」を持った、ということが根本かと思います。意欲を持てば手段、方法は自然に考えつきます。手段、方法を生かす努力もします。一生懸命練習すれば強くもなるし面白くもなります。

諸君も半年一年は必死になってやってみて下さい。それからキッパリと結論を出してください。「やめよう」又は「続けよう」と。

私自身、クラブに関してはいささか複雑な思いがあります。学生時代からずっと愛憎半ばするような思いを抱いて来ました。しかし結局最後まで（五年間）バドミントンを続けてしまいました。

学生時代を通じて最も大きな経験は何だったろう、と自問すると、即座に「それはバドミントンだ」という答えが返ってきます。今ここにいる私という人間の多くの部分がバドミントン部の活動を通じて形成されたのだ、という思いを深くします。もしもバドミントンをやらなかったら、又は早い時期にやめていたら、私は全く違ったタイプの人間になっていたろうと思います。私のメンタリティの核に近い部分にクラブの経験は食い込んでおり、その個々の経験はその後の生活や仕事の指針となり、ヒントとなって始終意識の表面に顔を出します。

私にとってこの選択が唯一最高のものであったかどうかは、私という人間が一人しかいない以上、簡単に結論が出せませんが、クラブ活動を最後までやることがこのくらい重大なことだということだけは分かってもらいたいと思います。他のＯＢでも、最後まで続けた人たちは口にこそ出さね、同じようなことを感じているだろうと思います。何しろ人生のうちで一番感受性と体力に富む数年間の何割かを使うのですから、その後の人間形成に大きな影響を与えるのは当然の話だとも言えます。

だいぶ長くなりました。次の部報は多分秋に出る４年生の追出し号です。それには１年生が強くなっていくための具体的なアドバイスを書きたいと思います。読みたい人は秋まで気力を集中して練習をやっていて下さい。

1980年５月新入生歓迎号より

遺産　（1980年春、26歳）

昭和48年入学　　野中　浩一

最近引越しをして昔のがらくたを整理したところ、私が現役当時（２回目）に書いた原稿が出てきた。長すぎてボツにしていたのだが、少しは現役諸君の参考になりそうだし、自分自身何を考えてプレイしていたかを思い出したので少々手を加えて書いてみる。尚、筆者の不得意なフットワーク、体力勝負への手引きなど、重要な点の抜けがあるので、万能薬とはならない。

１．ストローク編

(1)　全般的なこと

＜リズムは非力を救う＞

シャトルに与えられるエネルギーは力積 Ft であるが、ホールディングは許されないのだから、限られた時間 t のうちに可能な力 F を集中させねばならない。初級者が力を振り絞っているのに思うようにシャトルが飛ばせないでいるのは、手首の弱さだけが原因でなく、インパクトまでに無駄な力を使ってしまい、本番の力が薄められていることが多い。初級者のプレイは、不慣れな英会話に通じるところがある。例えば、

"I am going to move this wrist."

という７単語の文があるとする。初級者は７個とも懸命に力を入れるんですね。

（A）"I am going to move this wrist."

これは（状況にもよるが）、"I","move","wrist"の３つに力を入れてやればよいのである。他の部分は力を抜いてつなげばよい。

（B）"I (am going to) move (this) wrist."

括弧の中は、プレイでは「打」と「打」の間のフットワークに相当しており、このときの上半身の脱力が次の瞬発力を生む。フットワークのときは下っ腹（腹筋）にだけ力を入れておけばよいはずである。要は、「緩急」のリズムを作れということである。なお、「上半身の脱力」はさらに突き詰めると「肩ひじ手首の関節を自由にすること」である。

(2)　オーバーヘッドストローク（＝クリアー）

＜ワインドアップの効用＞

私はこのショットが一番嫌いであった。何故なら、守りのショットであり、10発打っても勝てるとは限らず勝負が遅いからである。しかし、ドリブンクリアーのoffensive defence の価値を認めてからは、私の一番特徴的なショットになったと思っている。そして、クリアーを offensive に保つには、どのような状況でもplacementを狂わせないこと（とりわけ敵陣の奥への長さを短くしない）ことに尽きる。私がplecement control に開眼したときのことを書く。夏合宿。ぶっとおしのアレーのクリアーの最中だった。活力は底を尽き、シャトルは前後左右に大きくぶれていた。すでに手首だけで強引に打つのには疲れすぎていた。(「手首で打てて楽でしょう」とかつてＥ夫人に聞かれたことがあったが、並＋αの私には、無理な体勢からの“手首のショット”はかえって全身疲労を伴うものである。）そのとき、半ばやけ気味に、大きなワインドアップ打法にかえてみた。それからの50発くらいはアレーをはずしたのは１つもなかったと思う。有効な力をすべて打球の方向に注ぎ込めて、自分がホールディングをしているような錯覚すら感じた。つまりこのときに「シャトルをつかまえる」という感覚を体得できたようだ。攻撃的バドミントンを目指す人にとって、シャトルは「ひっぱたく」ものでしかないかもしれない。しかし敢えてシャトルは「つかまえる」ものだと主張したい。「つかまえる」バドミントンは40になっても50になっても残るのである。「ひっぱたく」バドミントンは体力の急降下を迎えたら終わり。話が先走ってしまった。ワインドアップとは何か？何の事はない。未経験者が初めに習う素振りの「８の字」を強調した打法のことである。「８の字（八の字ではない)」を強調するには、ヒットの瞬間にいたるまでの上腕、およびひじから先の動きを大きくとることである。オーバーヘッドストロークではラケットの面を体の下から回してトップにもってくる動作をつけることにより、容易に実現できる（図１(Ａ))。

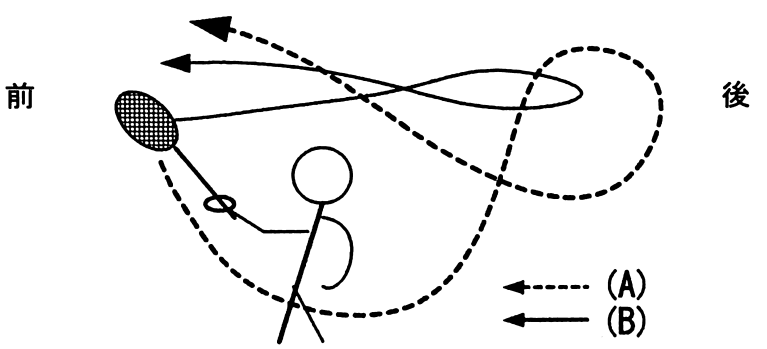


図１（Ａ）を見ると何故「８の字」かが分かる

（この動作は略されて、「構え」から肘を直線的に後ろにもっていき、「胸を張る」動作で代用するように教えられるのであるが。）さて、なぜこんな大基本を思い出すことでショットが安定したのか？　それはショットの安定性以外に考えなければならないことが増えてくるからなのである。中級者になると「打点は高く、そして各ショット（とくにクリアーとドロップ）のフォームの差を小さくすること」を考える。相手への威力からもまったく正しいのだが、私の場合、打点を高くすることで腕が棒と化してしまい、飛距離が伸びず、ドロップのフォームに近づけるべくクリアーのフォームを小さくしたため、打球の不安定さに悩んでいた。しかし、腕はムチでなければならないのであった。ムチを使ったことのある人（？）はよくわかるだろうが、大きなワインドアップをとれば（サマにはならないにしても）ムチ先の方向は格段に安定する。したがって、非力な人ほどフォームを小さくせずに（このような人は力もないのに無理して「ひっぱたき」、ラリーが10発以上続くと、どこかでアウトを打って自滅する）、ドロップのフォームを大きめにして、クリアーとの均一化をはかればよいと思う。

ひとつ大事なことを忘れていた。以上のフォームには前方への体重移動が不可欠である。中国選手のフォームが良い手本になるが、打った直後の右足（右利きの人）の上体への引きつけ（言い換えれば、右足を前方に投出すこと）がひとつのポイントである。これが不足しているため、腕は何とかムチになっているのに体が棒となっていて惜しまれる人がいるようだ。体重移動の未熟な人が多いのは、ひとつには、練習中の素振りにあるのではないだろうか？　数え方が速すぎるのである。あの速さでは緩急リズムの緩をとる時間がなく（決して手抜きの時間ではなく）、まして体重の移動に注意を向ける暇がない。もちろん１秒に１回のペースで振り続けることも大事であり、パワーとスピードの向上は本稿の内容以上に急務であるかもしれない（とくにダブルスを考えると、のんびりとした緩急では間に合わない）。しかし、パワーアップ、スピードアップは、比較的頭を空にし、がむしゃらにやれば結構有効なのであり、現状では、この方面はかなりよくやっているようだが、タイミングの練習（緩急リズム、体重移動など）は、一方で、皆無といえるのではないだろうか？　後者の練習を切り離してみなおしてみることを勧めたい。タイミングに関することには共通することだと思うが、まず「大げさな動作」を体得してから、次に磨きをかけていく、というステップを踏まないと、いざ行き詰ったときに困る。戻るべき「原点」は、ゆっくりと、力を入れずにやれなくてはならない。少なくとも、「大げさな動作の素振り」という原点をもって欲しいと思う。

(3)　ラウンド・ザ・ヘッド・ストローク

＜ひたすら手首＞

さて。今までの話と一見矛盾することを言う。このストロークは、ひたすら手首の力を利用し、ワインドアップはタイミングがとれる範囲でできる限り小さくすることを勧めたい（タイミングは、前方への体重の移動を強めることでとりやすくする)。高校時代の経験者の習った形が違っているせいか、このストロークの素振りには２通りある。１つはオーバーヘッドストロークを延長して、打点をできるだけ利腕の反対側にもってくるもので、打の瞬間、ひじはほぼ直線になっている（図２(Ａ))。そして、もう１つのが私のやっているもので、ひじから先をほぼ地面に平行になるまで逆側に倒し、打の瞬間には手首をめいっぱい使うやり方（Ｂ）である。Ｂの方が、肩とひじの関節の動きを制限している分、手首を強く使う必要があるのである。Ａはシングルスのバック側のクリアー、Ｂはダブルスのドライブ向きであるといえるが、私の感じでは、Ｂの打てる人はＡも打てるが、Ａの人はＢが打てるとは限らず、また打ててもひじを曲げていない分だけ腰から上の半身を図の左側に倒してしまう傾向があり、速い打球になると、体重を前にかけられないでいる。Ａ≦ＢとすればＢのほうが得ではないだろうか？

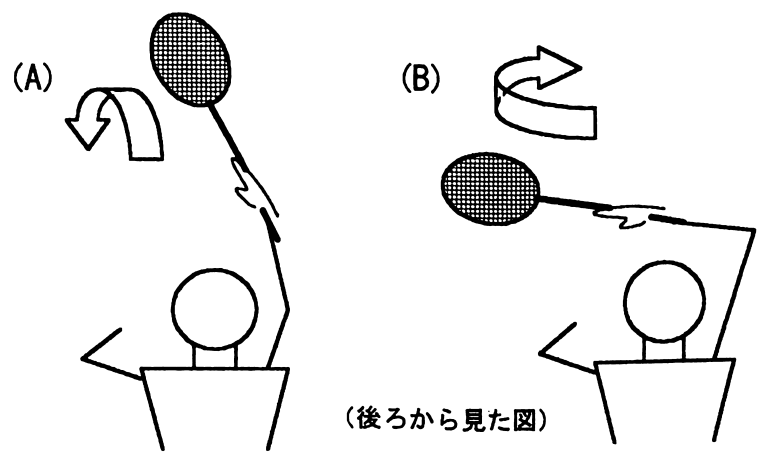


図２　ひたすら手首

２．試合編

(1)　相手のバックを攻めよ

とりわけ経験２、３年の相手に有効である。ある線を超えると、フォアの方がより効果的になるのだが、まずはバック攻めが基本であろう。クリアーの場合、甘いフォアだと初級者でもスマッシュのチャンスボールになるが、バックでは同じ甘さでも返

すのがやっとということが多い。すなわち、攻める方のコントロールが不正確でも相手のバックに打っていれば有効範囲が広いのである。やがてフォアが有効になっていくというのは、中級者のフォアが弱いというのではなく、もともとフォアはバックより相手にとって苦しいにもかかわらず、有効範囲が狭いために、そこを攻めるコントロールが要求されるのである。

(2)　無茶な動きをしてみる

バドミントンの奥義はアンティシペーションにあると言っても過言ではない、と私は思っている。かなり経験を要することだし、予測のハズレを考えるとシングルスでは怖さもある。が、ダブルスにはパートナーがいるのだから少々無茶な動きも許されるはずである。せよ、といっているのではない。してみると面白いのである。ここで言う私の予測は、ネット前へのダッシュを主とする。つまり、ダブルスでは前へ前への圧迫が向上への必須条件である。例を挙げておく（図３）。

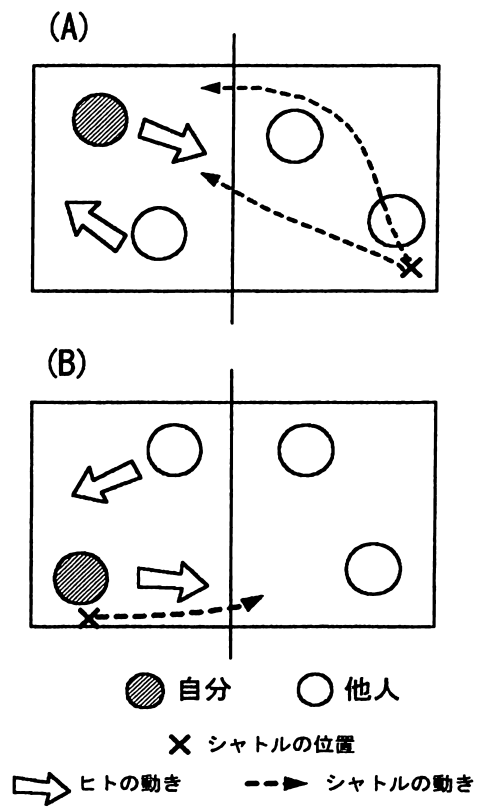


図３　無茶な動き

（A）相手が自らのコート深く、バック側（図の右下）に高く上がったシャトル（×印）を今まさに打たんとしているとき。このときネットの前につっこむ（といっても２歩ほどでよい）。スマッシュがきたら頭の上で止めてドライブリターンで攻守逆転、ドロップがきたら、打っても置いてもほぼ勝のパターンになる（うまくすると１発できまる）。もちろん、この際、敵のスマッシュが適度に遅く、かつ、クロスのクリアーで頭を抜かれる確率がほぼゼロという保証（ヨミ）が必要である。しかし、経験上、十中八九成功させることは、さほど困難ではない。定位置にいれば、４分６で負けている（攻められている）のだから、それと比べれば・・・。

（B）自分の攻撃チャンスで、変則トップ&バック（図の左下隅から打つときで、パートナーは右上隅にいる）のとき。６・４でチャンス。ここでストレートにドロップを落とし、そのままシャトルを追うようにネットにつっこむ（今度はネットに飛びつかんばかりに）。本来パートナーがつっこんでもよいのだが、自分が行く方がタイミングをつかみやすい。すると、相手はネットに置きにくいので、よくて、ハイクリアーで「やり直し」を強いられる。クリアーが浅くなったり、止むを得ずネットに置いたら（たとえクロスでも）６・４の勝目は８・２になる（なお、ストレートのクリアーリターンにそなえてパートナーは中央よりに後退する）。

（A）は守りなのに、サイドバイサイドを崩してレシーブミスの確率を多くすることが「無謀」であり、Bは攻撃中なのにパートナーに「守備的」な動きを強いること（つまり図の中央に少し穴をつくること）が「無謀」なのである。しかし、普通に定位置で守ったり（A）、スマッシュを打ったり（B）するのでは、４・６、６・４の関係は変わらないことが多い（もちろん、４・６や６・４を持ちこたえる力は必要だし、甘いチャンスボール（８・２の勝目）をスマッシュの連打で決めるのが前提にある）。

４・６や６・４の普通のラリーから、いかに６・４や８・２へもっていくかの１つの方法が、この「無謀さ」だと思ってもらいたい。

我々のレベルでのアンティシペーションは相手の筋肉の動きをヨムという神技ではなく、このような「無謀さ」（一種の罠）をしかけつつ、実戦のなかで、相手が思ったほど多様なショットを打ってはいない（あるいは打てない）ことに気づくことではなかろうか？「攻撃」とは「１発で決める」ことではなく、「相手の返球の種類を制限する」ことであると私は実感していた。

さて、長くなりすぎて、部報作成者も大変なので、後はタイトルだけで端折ってし

まう。

３．ホームポジションに戻る大切さ
４．ダブルスでは下向きのショットを打て
５．ダブルスで、相手のいないところを狙う
６．点を取ることではなく、点を与えないことが大事である

最後に、新入生諸君、しばらくは苦しさと上達の喜びが交互にやってくるだろうが、１日も早くバドミントンの面白さをつかみ、また経験者も、最初の１年は大学生活の半分以上を占めると心して精進してほしい。

1981年５月新入生歓迎号より

遺産シリーズ　その３　（1981年春、27歳）

昭和48年入学　　野中　浩一

～「決定打」は「基本」にはないが、すべての「決定打」は「基本」から生まれる～

調子にのって、その３を書こうとしているのであるが、今回は少々結論の出しにくい話をもくろんでいる。その２までに話しやすいことはかなり絞り出してきているので、それもやむをえないと考えながら筆をとった。

その２までの話で一つ欠落しているのは、「フェイント」のことである。以前のワインドアップの効用の説明のとき、「クリアーフォーム的ドロップ」について述べた。要するに、フォームを小さくすることに付随してショットの不安定さに悩む人は大きなワインドアップを基本にして各種ショットを打てばよいということである。しかし、これは、まだバドミントン開発途上者の、しかもシングルスにあてはまることであり、フェイントに関していえば、はなはだ不完全な話であった。私のフェイントは結局この延長なのだが、それを最終目標にして話を始めてみたい。

私自身は一時期スマッシュなしでもシングルスはたいていの相手なら勝てると確信していたことがあった。もちろん、これはやや誇張なのであって、冷静に考えれば、ある程度のスマッシュがあったからこそ他のショットが有効になっていたこともあるだろう。それに個人的には、ドライブにかなり自信をもっていたため、ショートサービスから、ドライブ合戦にもちこめば、まず負けないという「奥の手」があったので、余裕をもっていたこともある（後年、「奥の手」を連打しても通用しなくなるが）。さて、その「スマッシュなし」とは何を指すか、である。それは、「クリアー」、「ハーフショット」、そして「フェイント」であった。いずれも１発で決めない（「決まらない」のではない！）ところがスマッシュの精神と異なる。

「クリアー」に関しては、かつての横山さんや、豊田さんあたりが強調しておられる。（以前から村田監督が騒いでいた、横山さんの手による「レギュラーへの道」（30年誌再掲）は、かなりの長文だが、１つの行すら読み飛ばせない名文である。これだけの卒論の半分も書けたら、レギュラーにならないほうが不思議である。私にも真剣に禁煙を迫っているのだが・・・）１度少し触れたので、簡単に書くことにする。私も、派手でなくとも「クリアー」は、楽勝あるいは有利な展開への第１条件の１つ（もう１つは「サーブ」だが、これは略す）と思っている。ただ、豊田さんの言う「クリ

アー」は強烈な「ドリブンクリアー」なのであって、私のクリアーも、軌跡自体はそれに近かったと思うが「launched clear」とでも名付けたいものだと思っていたので、あまり一緒にしたくはない。湯木博恵の強さは「driven」でない「launched clear」が完成されていたからではないかと思っていたことがあった。全日本男子ではスマッシュ争いになってきているとも聞いているが、女子のほうは、今後、５年間チャンピオンを維持できる人が出たら、その人は必ずや launched clearを身につけていると予想している。ドリブンは力強いが、果たして連覇できる安定性を保てるかどうか・・・？　（launched は機関銃のごときドリブンではなく、NASAのコロンビアの「打ち上げ」のようなネバリのある、いささかホールディング気味の、余韻のあるクリアーというつもりである。ドリブンはスマッシュの延長上にあるが、これはそれとは異なっているともいえる。完全受身のときの「打ち上げ」クリアーと間違えられそうでいい言葉とは思っていないが、他に名前が出てこない。holding clear ではいかにも fault みたいで変だし・・・）

次に「ハーフショット」である。これが何を意味するかは大体わかるだろう。が、シングルスでは、ダブルスほど表にあらわれないので、要するに、「10の力で強打（スマッシュとは限らない）できるところを５分の力で打ってみたらどういう展開になるか」という game making への探求心の発露だと心得てほしい。さらに、「１球に10の力を出しきってしまうと、次の球は相手のショットのなすがままになってしまう」ということを理解することでもある。５分の力で打つのだから、次の10のショットを12にも15にもするだけのタイミングをつかまないと意味がない。そして、この緩急が相手の５の力と等しかったら・・・、これはまあ話にならないから、もっと打ち込んで力とスピードをつけるしかありませんなあ。しかし、10対10の力が向い合ったときを考えてみると、10の力を出すことは、そう困難なことではない。「十分に競りました・・・ケド負けてしまいました・・・ハハ」というのは簡単なのである。私もこういう後輩が力を出しきってないとは思わない。出し方に節操がないだけである。観念的にいえば、５分６分の力で急な攻めの来ない球を打ったか、相手の返球が読める球を意識して打ったか、その分読みのある「つぼ」に入ったラリーをしたか、ということになる。これには球種の増加が必要で、プレイの幅は大きくひろがる。しかし、これは伝家の宝刀をつくれというのではなく、練習中（つまり「基本」）にやっていないために身についていないだけのものが殆どである。例を挙げてみる。

（その１）相手のバックサイドへのソフトスマッシュ
～スマッシュは強いだけが能じゃない（もちろん強いのは能ですけどね、山梨君）～

これは旧キャプテンの関さんの言われていた戦法。私も何となく高校時代から見知っていた。曲がりなりにもスマッシュだからクロスの切り返しのない相手だと（多用しなければ）まず逆襲はない。これだけで相手のレシーブのタイミングが狂うなら、あなたのスマッシュはかなりのもの。しかし、この戦法のポイントは、おそらく７・８割、相手の返球が読めるという点にある。相手によるが、ストレートのロングあるいはショートリターンのいずれかであることが非常に多い。ショートリターンとみたらすかさず突っ込む。５分で打つから突っ込むのにも余裕と安定がある。12分の力は充分期待できるだろう。

（その２）相手のフォアへのドライブ気味のハーフリターン
～ドロップレシーブはハイクリアーとネットだけではありません～

相手が前に落とした球（相手の利き腕側とする）をかなり前でタッチしながら、上方へストレートにハイクリアーしてしまい、勝負のやり直しをしている人が多い（本人は相手を追い込もうとしているのだが）。相手（前に来ている）が跳び上がってタッチできない程度に軽く（これが大事）低めにストレートハーフを送るのがこの戦法。ストレートは相手のフォア側であり、クロス（バック）側に流すのは切り返しが恐く、さらに上級者向きと思われる。まあ、これなど言うまでもなく大抵の人は見て知っているのになかなかやれない（私の最近のシングルスの苦戦はこのショットの不安定さによるので大きなことは言えない。ラケットが悪いと責任転嫁しているが・・・）。このショットのこつは、半息分タイミングを遅らせても手首に力を入れないことである。腰の（重心の）移動がしっかりすれば難しいはずはない。ただ腰の移動といっても、手首を固定するテニスとは違う。手首はちゃんと返すのだが、最後の瞬間に（相手のコートに早く接地させようとあせって）手首に余分な力を入れてはじいたりするな、ということである。（ひとつ注意すると、完全な hop-up は打てばよいのであり、何でもこれをやろうとするのは、「オジン趣味」とそしられる。現役の人はそこまで遊んではいけない。）

（その３）足の長いドロップ
～うまい人は、ネットぎりぎりのドロップには結構強いものです～

これは「ハーフショット」とは趣を異にする。前にも１度書いたかもしれないが、ネット（ヘアピン）が、習い性ですべてカットになってしまっている相手に有効である。実感があると思うが、カットは、ネットぎりぎりの球をネットに置き返すのには割合楽だが、ネットから離れた球だと、ホップアップせずにきちんと返すのは難しい。

従って、相手がネット際にカットして置いてきたらいったん大きくクリアーして、そこでもう１度クリアーで逃げてきたら、相手の前方、サービスラインを超えるような足の長い、少々速めの、フラットドロップを打ってみる。（なぜ突然このショットが出てきたかというと、その１のソフトスマッシュと似ているから思い出したのです。）最近でも、村田、中田、山梨といったところから１，２ポイントはかせがせてもらっております。わりと利くものですよ。それなのに、快心の（？）ドロップをうまく返されたもんで意地になって「今度こそ」なんて無理をするんですね。もちろん、結果はネットにひっかけてこっちの負け、相手の勝。（ちなみに、足の長いショートサービスにも似たような効果があって、これには私もいくらか点を献上している。）

他にもまだあると思うが、「考えて試合しろ」というのは、このように、相手が「恐れる」球を打つだけでなく、「何となくミス」させるように誘うこともありうるのだという示唆にならないだろうか。

そして、「フェイント」である。意味するところは言うまでもあるまい。これには２ステップのフェイントモーションまで考えうる。それ以上のステップは趣味の問題でしょう。大体、相手がそこまで分かってくれないから、無駄というものである。例をあげて考えてみる。まず、１ステップのものから。各ステップは「見せかけて」で表現することにする。

（その１）打つ（ハイクリアーまたはスマッシュ）と見せかけてドロップを打つ（カット、ラケットのスピード同じ；フラット、突然の脱力、の２通り）

（その２）スマッシュと見せかけてハイクリアー

（その３）ヘアピンと見せかけてクリアー

その３がやや難しいが、ここまではまず誰しも考えるところ。しかし、似た組合せなのに案外ないのが次のやつ。

（その４）ドロップと見せかけてハイクリアー

これが、今回フェイントをとりあげたひとつの目標である。もちろんこれをやる人はいるが、今一つ威力がない。つまり、クリアーを打つために力を入れる動作がどうしてもよめるのである。フェイント効果は半減である。くどいようだが、ここに「ワインドアップ打法」が生きてくる。振りの小さなクリアーやドロップを目指す人にはやりにくいのである。一見逆のようだが、つまるところ、振りの小さなクリアーは咄

嗟のコントロールが難しく、それなりに力を入れる必要があるということのようである。２度同じところへクリアーを打つ（やや大げさな力で）、そしてドロップを打つような力を抜いたそぶりをする。私が用いるのはこんなパターンである。ちょっとした相手だと、前だと読んで、そして後ろにもう１度行かされるのはしんどいので、心理的にも前方荷重になる。ここで慌てず騒がず、３度めのクリアーを送る。最初に大げさなクリアーを打つところが私の未熟な点だが、いやな顔をする相手が多かった。

同一種のショットにもフェイントらしきものはある。

（その５）ストレートドロップorスマッシュと見せかけてクロスドロップ。小島一平氏の必殺逆カットもこの一種だろうか。

（その６）ストレートと見せかけて、クロスネット。熊本の教員の三本指に入る人に、これを打ったときに球と逆方向に「いちいち」顔を向ける人がいた。本人が真剣なだけに見ている分には面白いが、余り決まったところは見たことがないので、そこまでやる必要はないように思う。

これら１ステップにはそれこそいくつも応用があると思う。しかし共通しているのは、ふつうの単ショットが１で打つ構え、２で打つという「イチ、ニ」のタイミングだとすれば、「１で打つ構え、２で打つ……と見せかけて、３で打つ」のタイミングであることだろう。これを「イチ」と「イチ、ニ」の違いと見ない方がよいと思う。これは単ショットを「イチ」ではなく「イチ、ニ」（元々は「イチ、ニ、サン」の「イチ、ニ」がつまったもの）としてとらえて欲しいということでもある。あたり前のことだが、フェイントは手首のだまし操作を入れるということではなく、半テンポ（身体全体で）タイミングを遅らせることだということをどのくらいの人が意識しているだろうか。そして、そのために半テンポの半分でも早く球を打てる体勢にもっていくスピードをつけることの意識を。

次に究極の２ステップ。これは私にもようできません。かろうじて２種ほど。

（その７）相手のドロップやネットを「クリアー」で上げると見せかけて、「ネット」に置く……と見せかけて、結局「クリアー」（できれば低めのハーフクリアー）というパターン。最初のステップを強調している暇はない。大きく下からふりかぶって（？）いくか、重心を思い切り下げる動作をするか、あるいは「顔のフェイント」で代用するか？？？一歩でも速くネットに到着することがよいだろうが、２ステップ目の「置くふり」は、少なくともネットの高さの所でラケットを止めないと効果が薄いし、結局打てなくなる。このとき、相手をどれだけ前に呼びよせられるかがポイント

になる。要するに、ハーフショット（その２）とフェイント（その３）の応用である。（その８）フェイント（その４）の応用。「ハイクリアー」or「スマッシュ」と見せかけて、一瞬、ラケットを止めて「ドロップ」……と見せかけて、やおら、小さくワインドアップをとり冷静に（あわてるようなら本番では使わないほうが身のため）「ハイクリアー」を打つ。ここではサイドのコーナリングより距離を短くしないことが大事で、ドリブンクリアーである必要はない。個人的に一番好きなショットである（ここらへんが私の「いやらしい」と呼ばれた核らしい）。

相手を苦しめる球を、いわゆる「基本」以外のショットに見出したとき一歩前進する。それは「基本に忠実なプレイ」で満足しない「何でもいいから勝つ」という考えかもしれない。しかし、それはやはり勝つための「基本」に他ならないと思う。その中に「スピード」と「威力」を入れるのはあたりまえである。だが私がここで強調したかったのは、コンビネーションのことである。

「決定打は基本にはないが、すべての決定打は基本から生まれる」という副題をつけたのも、ダミーショットを含むフェイントを含めて、一球前のショットをどう打つかでその次の球が基本を超える決定打になりうるということを言いたかったのである。そしてその基本の中に、練習中の「基本」をもう一つふくらませた色々なショットを加えて欲しいということである。

ボクシングでも「右一発」の前評判はたいがい空振りで「ワン、トゥー攻撃」のほうが結局は優れている（魅力のあるなしはこの際考えない）し、囲碁でも言うではないか、「三手先を読め」と。「スピード」「威力」をつくるのは、しんどいトレーニングと練習しかないと思うが、「コンビネーション」を数多く身につけていくことは「Image training」で事足りることが多いのだから、もっともっと考えて欲しいと思う。怠惰や手抜きの発想（８＋５＋12＜10＋10＋10）も、結構役立つものである。「スピード」「威力」の現役諸君に今しばらくはこういった「小わざ」「コンビネーション」で対抗していくつもりである。

1984年秋季号より

ストローク、練習、試合について

昭和57年入学　　３年　村田　章

クリアーについて

腕をしっかり伸ばし、頭の上でシャトルを捕える。打点はなるべく高くする。面に気をくばり、バックスイングは大きく、かつ力を抜き、インパクトの瞬間に力を集中。フォロースルーは必要に応じただけ取る。ラケットを下にした状態でフォロースルーが終わらないように。足はしっかり動かす。体重をのせるには先ず追いついていなければならない。コントロールがないのは脚力、腹・背筋力、腕力、手首の力の不足。自分の力の限界近くで精密な作業が出来るわけがない。精密な調整能力を要する作業は自己の力の微小な部分を使って行なうものである。力はあればある程良い。より高く、より速く、より前でを忘れないように。実際、練習でプレイするには後ろで楽をして取っていても変わりはないのだが、それをやっていては試合で勝てない。無駄と思える位速くシャトルを捕え、また余裕があれば、なるべく速くシャトルの下に入り、相手にプレッシャーを与えること。これはやろうとする人間にしか出来ない。最初に「打点はなるべく高くする。」と書いたが、これは腕が完全に伸びきった状態で打てということではない。多少関節に余裕を残していい。腕を伸ばして打つことは力がいるし、また最初のうちは難しいと感じるかもしれないが、これが出来なければ、角度のあるショットは打てない。打点を下げることはもっと上手くなってから出来るのだから、今はとにかく打点は高くするものだと考えること。

スマッシュレシーブについて

肘から出すこと。手首だけで振ろうとすればひっかける確率が高くなる。なるべくラケットの面が水平に長く動くように工夫する。打点は体の遠くに置く。ここでもやはり力を抜く。指、手首、腕、肩、足、その他全ての部分から余分な力を抜く。振り始めもやはりあまり力を入れない。インパクトの瞬間にのみ力を集中すれば良い。レシーブの８割はバックで打つと思われる。バックが最初から強い人間はいない。バックは強くするものである。「打点は体の遠くに置く。」と書いたが、もちろん近くで、（または体の後ろで）打たなければならない時もある。この時は力だけが頼りになる。理想的にはレシーブは力がいらないものだが、この時の為だけに力を必要とする。振り始めにおいての注意だが、ヘッドをなるべく動かさないようにして、レシーブの体

勢をつくることが重要である。

シングルスについて

スマッシュは打つな。打つとしても返ってくることを考えて打つこと。ダブルスと違ってシングルスは、それ程細かいコントロールは要求されないと思う。相手が打つ球を全て拾おうとする気魄と、相手がへばるまで付き合ってやろうという気持ちがあれば勝てるはず。但し、技術的な伸びをあきらめてしまうのは感心できない。常に技術の向上を目指しながら、試合においては前に述べた気構えを持って欲しい。

ダブルスについて

スマッシュ（ドライブ）しか打つな。返ってくる球を全部スマッシュで打ち返す体勢に入るような気持ちがなければ、技術の向上は望めない。ドロップやクリアーを打つプレーは、年をとってからでもいつでも出来る。今やるべきことは別にある。

試合一般について

試合中は声を出すこと。声を出さないで勝つ自信があるなら別にいいが、自分を自分でのせて試合を行うことは大切だと思う。

ラリーを続けること。ラリーを続けているうちに体も動いてくるし、相手の動きも見えてくる。試合になったらラリーを続けることだけを考える。

あがることに関して、これは思い上がりだと思う。勝とう、勝てるなどと思うから力が入るのであって、常に自分が相手より下で胸をかりるつもりであたれば、あがることなどない。

どんなに競った試合でも、勝ちと負けの間には大きな差があることをしっかり認識すること。結果として残ることは当然であるが、その他にも勝つ人間というのは負ける人間より常に、また確実に頑張っている。１点差でもその差は大きい。

練習について

常により高い技術、プレーを目指して練習すること。皆、強くなりたいと思っているだろうが、漠然と思うことはたやすい。形として結果を出して欲しい。

練習する時、体得したいことを頭の中で思いながらやること。しかし、最終的には無意識に体が動くことが目標だと思う。その分、頭を相手のショット、コースの組み立てに対する読みにあてる。ヤマをはるのと読むのとは違う。ヤマはあてずっぽうで、読みは今までに打たれた球から推察するのである。読みがはずれたときのことも考え

ておくこと。

各学年、各人、自分の部内での位置、責任を考えること。１年は下から部を活気づけるように。２年は中間という立場を考え、３年は最高学年ということを忘れずに。黙って練習するな。全体の寡囲気が悪くなって仕方ない。全体として盛り上がらなければ、同じメニューでも効果が薄くなってしまう。部にくっついているのではなく、部を構成する一員になって欲しい。最後に当たり前のことだが、練習に出ないなら連絡をとること。下手なことは全く悪いことではないが、練習も出て来ない奴に教える気（一緒に打つ気）はしない。

追　　加

スポーツは何でもそうだと思うが、最終的には理屈じゃないという所があると思う。今まで色々技術的なことも書いてきたが、細かい技術に振りまわされず、今、目の前にあるシャトルを拾いたいと思う心が大切だと思う。その気持ちを持っていれば自然に技術は身についてくるように思われる。

最後の最後になってしまいましたが、４年生の方々、御卒部おめでとうございます。おひまがありましたら、四体の方にもお顔を出して下さい。

1995年～1997年部報より（テーマごとに編集）

昭和62年入学　　後藤　拓也

◎～コースに対する意識～　1995年追いコン号

スマッシュについていいますと、以前の自分は、相手のフォア、バック、センターのどこに打つかまでは意識しておりましたが、同じフォアに打つにしてもわずかなコースの違いまでは考えておりませんでした。

ところが、そのコースが少し違うだけで、相手の返球がまったく変わってしまうと教わりました。例えば、クロスのスマッシュがオンラインの所へ行けば、相手は返すにしてもストレートのネット位にしか返せないのに対し、それが少し内側に入れば、クロスのネットも出来るでしょうし、ストレートにドライブを打つこともできるでしょう。なお、オンラインに打つといっても、スマッシュの角度も大切で、角度が甘ければ同じオンラインでも意味合いが変わります。逆に考えれば、今まで曖昧に考えていたコースに対する意識を高め、わずかなコースの違いまでこだわれば、相手の返球が予測できるのです。そして、最終的には、相手に対し決まったコースにしか返せなくするようなショットを打てれば最高でしょう。

この発想は私にはとても興味深く感じられました。というのも、相手の返球にどう対処するのかという考えでやってきたところに、思った所に返させるような球を打てといわれたのですから、そのギャップは大きいものでした。＜中略＞現役の人も、それくらいのことを考えながら、もっともっとコースに対する意識を高めていって下さい。

◎～ダブルスのサーブについて～　1996年新歓号

みなさんはサーブを打つ時、何を考えていますか？少し考えてみて下さい。サーブを打つ時、考えるポイントはいくつかあると思います。まず、どのコースにサーブを打つかということ。ロングやショートの区別だけではなく、同じショートにしても、センター寄りなのかサイドを狙うのか、相手の真正面なのか、真正面よりの少し右あるいは左に打つのか、など多くのコースが考えられます。そして次には、その打ったコースを相手はどのようにレシーブするのか、相手はどのコースが得意でどのコースが苦手なのか、を考えるべきでしょう。さらに、そのレシーブがどういう球だと、自分のパートナーが打ちやすいのか、あるいは、どういう球だと打ちづらいのかも考えます。これらのことを考えながら、状況に応じてサーブを使い分けていくわけですが、通常の場合、パートナーが打ちやすい所へ相手が返すように仕向けることを考え、サ

ーブすることが大切です。もちろんサーブを打った後も、相手のレシーブコースをふさぐことにより、パートナーの苦手なコースへは打たせないようにします。以上の他にも、相手や目的に応じてどんなサーブを打つかは変わるはずです。

もし、今まであまり考えずにサーブを打っていたのなら、今後は少しでも考えてサーブを打つようにして下さい。実際には、これらのほんの少しと思えることが、勝敗を大きく決めていたりするものです。

◎～「読み」を持って「余裕」を持つな！～　1996年追いコン号

分かったら動くということです。相手のショットを読んだ瞬間に行動を起こす。自分でも実戦しているつもりでしたが、自分より速く動く相手と試合をし、自分の遅さに気が付きました。遅い理由として、筋力低下により瞬発力が下がったこと、そして、速く動くことへの意識の低下です。

現役の人は、筋力の方は問題ないでしょうが、意識についてはどうでしょうか。例えば相手がネットをするとき、少しでも浮いたら叩いてやろうと思って動いているでしょうか。決められないように取れれば良いという位に考えて動いていないでしょうか。試合が進み相手のプレーに慣れて、読みが早くなったときでも、序盤と同じプレーで余裕を見せてはいないだろうか。

試合中の全てのショットに対して、少しでも早くシャトルに触ろうと意識してプレーするのとしないのとでは、その試合だけでなく、その後の成長にも大きな影響を与えると思います。また、シャトルに早く触っても、それを生かすようなショットを打たなければいけません。例えば、ネットを越えてすぐにシャトルを捕らえても、高くロビングを上げることしかできなければ、何の意味もないのです。とはいえ、実際には早いタッチでシャトルをうまく打つことは易しいことではありません。自分の打ち易いポイントにシャトルがくるのを待たずに、打たなければいけないからです。多彩なラケットワークが必要となりますが、現役の人は、まず、より早く触るんだという意識を持つことだけは実行して下さい。

◎～「ロブの高さ」と「つなぎ」について～　1997年追いコン号

最近の現役をみていて気が付いたことを２点ほど話したいと思います。

１つは、ロブを上げるとき、高さに気を使っていないということです。ロブは、落下する場所だけでなく、高さも重要です。追い込まれて逃げるとき、高いロブを打てれば自分の体勢を立て直すことができ、勝負を振り出しに戻すことができます。そのときロブは高ければ高いほど、時間的余裕ができ、有利に試合を進めることができま

す。高いロブを打つということは、日頃から練習しておかないと難しく、また、打ち方にも工夫が必要です。特に、高くてコースを狙うとなると、狙うコースによってはかなり難しいと思います。自分としては、フォア側からストレートにロブを高くあげることはなかなかうまくいきません。高く打とうとすると少し内側に入ってしまい、コースを狙うとあまり高く上がりません。現役の人は、基礎打ちのドロップのレシーブの時に研究してみて下さい。

もう１つは、ダブルスのつなぎ球です。多くの人は何も考えずに安易にシャトルを上げてしまっています。ダブルスでは、いかに相手にシャトルを上げさせるかが大事であるのに、なんてこともないシャトルをぽんぽん上げているようでは、勝負になりません。つなぎとは、前衛に捕まらずに低く浅く、そして、無駄なく落とすことです。ダブルスとは、基本的につなぎの勝負ではじまり、つなぎきれなくなったものがしょうがなく上げるのです。現役の試合では、ほとんどつなぎの勝負がなく、いきなり打ち合いからはじまっています。もう少し上級者がどのようにつないでいるのか勉強して下さい。なお、よく行われている誤ったつなぎがありますので、注意しておきます。よく見受けられるパターンとしては、まず、スマッシュを打って、それを相手がドライブ系でリターンします。そしてそのリターンを下で受けているのに、信じられないことにクロスにドリブン系の球を打つのです。この球を相手の後衛にスマッシュされれば、パートナーはとても返球などできません。この場合、前衛のいない所へ落とすか、高くロブを上げるべきです。ロブを打つ場合、浅くてもよいので、なるべく高く上げて下さい。ダブルスで逃げる場合、奥に打つことよりも高く打つことを最重点に考えて下さい。高く上がったシャトルが落ちるのには、思ったよりも時間がかかります。そのため、体勢を立て直すことができ、少し位浅くてもなんとかレシーブできるのです。逆に、奥に打っても高さがないと、体勢が整う前に相手に打たれてしまい、レシーブはこの方がよほど困難です。

以上、今回は「ロブ」と「つなぎ」について説明しましたが、ロブ１つとっても、考えていくと色々と奥深いものです。打ちやすいコースもあれば、打ちづらいコースもあります。なかなかどこへでも好きなように打てるようにはなりません。しかし、その難しさを理解することは実はすごく大切です。自分がなかなか打てないコースは、相手にもまた難しいのです。ですから、試合のときには自分が苦手とすることを、如何に相手にやらせるか考えて組み立てればよいのです。相手が何を嫌がるかを考える前に、まず、自分がどうされたら嫌なのかを考えてみて下さい。

９．その他

関東大学ＯＢバドミントン選手権大会

昭和33年入学　　金丸　清昭

1981年のある晩、例の如き秋山先輩の「おい、今夜付き合え」に、従いて行った所が代々木第二体育館、数人の人がバドミントンをしていた。ここで初めて法政ＯＢ（副会長）の相原さんと立教ＯＢの力石さんにお会いした。趣旨は「関東１部リーグのＯＢ有志が集まって練習して居るが、もう少し広く各校に呼びかけ、発展させたい。東大にもぜひ参加して欲しい。」という事だった。東大にお声が掛かったのは、初期の学連で活躍し、１部リーグの各校ＯＢから信頼篤かった司馬先輩に相談があり、それでは秋山に話せという指示だったらしい。何故私かと言うと、秋山さんが既にリオデジャネイロ転勤が決っていて、後は金丸と言う訳だった。相原さんたちの熱心な努力で、その11月29日に、第一回関東大学ＯＢバドミントン大会（主催関東学連ＯＢ会：スタークラブ）が、年代別ダブルス・トーナメントの形で行われた。場所はこの時からずっと、六浦の関東学院大学で、これには関東学院の湊先生（バドミントン部長）や、同校ＯＢの中村さんの一方ならぬご尽力があった。尚スタークラブの由来は、「かって関東リーグのスターであったメンバーの集まり」の意だそうである。第１回大会では、往年の日本チャンピオンだった、立教の永井選手のダブルスを間近に見る事が出来た。接戦の末、立教の永井・鈴木組が法政の富田・井門組を破って優勝した。余談だが、永井選手は、東京聖学院時代にインターハイで優勝、インカレ、全日本でも何度も優勝しているが、やや異端の、ウエスタン・グリップが特徴であった。又この大会では、29歳以下の部で、東大の小松・上野組が堂々２位になって居る。小松君はその後ずっと音信不通になっていたが、昨年のダブルス選手権で久々に顔を見せ、上野君とのダブルスが復活した。50周年を控えて、何かの因縁か、大変うれしい事である。第３回大会では木村君（故人）と組んで45歳以上の部で決勝に進出、１部リーグの選手に勝つと言う私の夢も半ば実現したが、決勝で当たった立教の加藤・花岡組（３－４年上級）には、圧倒的な球威の違いを見せ付けられ、優勝の夢は敢え無く破れた。私の在米中に、木村君のダブルスが、これ又、往時の名ダブルスであった早稲田の堺・小川組にラブゲームをやられたと口惜しがっていた事もあった。第10回迄続いたこの大会も、第1回では71組あったエントリーが、第10回では44組に半減する等、諸般の事情で中止になったが、各校の希望もあって、最後の大会を此れ迄とは別の大会として、駒場で開催する事になった。この時は３ダブルスの団体リーグであった。駒場での大会を引き受けた木村君は、この時既に病の床にあって残念乍ら不参加だった。さて、当日体育館に着いたら、何と定例の電気設備点検日と言う事で照明なし、幸い天気が良かったので、何とか皆さんには、ちゃんとプレイして頂けたが、一瞬、真っ青になった。

又この大会では、前年のインカレ・チャンピオンを擁する青学ＯＧチームが男子の部に出場を希望、好成績を納めたのも特筆事項だろう（Ａ組：早・慶・青・法、Ｂ組：明・立・東・青女子でリーグ戦と順位決定戦方式）。東大が、青学ＯＧと当たった時、未だ腕に多少自信のあった私は、無理を言って藤田君と組んで出場させてもらった。私は年齢順（弱い順）にオーダーを組むと了解していたのに、優勝をねらう青学は何と、しっかりオーダーを組み、我々はチャンピオン組と当たってしまった。自信過剰の私は、無理にスマッシュを打って自滅、「クリヤーを打って、相手に打たせて拾えば勝てる」と言って居た藤田君には、申し訳ない事をしたと思う。尤も口の悪い豊田君なら、金丸さんのはスマッシュではないと言いそうだし、又藤田流でやった所で勝てたか、或いは相手のNO. ３に当たっても勝てたかは、神のみぞ知るである。何れにせよ、この大会やその準備を通じて、多くの大学の幅広い年代に亘るＯＢの方々と知り合えた事も、私のバドミントン人生の良き経験・思い出である。自分の事ばかり書いたが、29歳以下の部迄あったので、若手ＯＢや、大会の度に審判として、貴重な休みを提供して頂いた現役諸君にもそれなりの勉強になったのではないか、又１・２部の各校の人達との交流も出来、東大バドミントン部にとって資する所が大きかったと思う次第である。

折があれば又各校の方々に声を掛けて、もう少し規模は小さくともこんな大会が出来ればと思ったりする。

参考迄に、当時の参加校等を付記する。

第１回：慶応、法政、明治、立教、中央、青山学院、早稲田、関東学院、東大 計９校、尚その後の新規参加の先駈けとして、Ｓ30年代の関西学生チャンピオンである同志社大の上田さんが立教から、又北大のエースだった藤森君が、東大から豊田君と組んで参加している。豊田・藤森組は、第３回大会で２位になっている。

第２回以降参加：同志社、埼玉、電通大、関西学院、大妻、東洋大、横浜市大、成蹊、千葉大、横浜国大、専修、駒沢、熊本大、日大、東北大、昭和女子大等（関東地区以外は、会社等の口コミで参加したものと思われる）尚第２回の参加校が15校で、ピークだった。

第３回頃からは、協賛会社として、ヨネックス、ゴーセン、カワサキラケット等の名前が見える。

第７回以後のプログラムは、実態と時代を反映してか、関東大学ＯＢ・ＯＧバドミントン選手権大会となっている）。

東大は第６回のみ欠場、私自身は１～３回と９、10回に木村君と組んで出場しているが、第９、10回については、残念ながら全く記憶にない。

「蹴飛ばし」について

昭和33年入学　　金丸　清昭

記念誌に「蹴っぽり」の歴史を書くべきだとの意見があった。これも50年の一齣と、大先輩方を煩わせて調べてみた。私は「蹴飛ばし」ではないかと思うが、昭和39年の部報（追いコン号）には「蹴っぽられる」の題で卒業生の挨拶、「蹴っぽる」として現役の送辞が載っているから、「蹴っぽり」も正しいのだろう。どんなものかと言えば、コンパ、特に追い出しコンパの時に最後に電気を消して、４年生を中に現役とＯＢが外に、それぞれが肩を組んで向き合い、「バッカスの唄」というのを歌い乍ら輪になってぐるぐる回る。その時、ふざけて且つ親愛の情を込めて蹴りあうというものである。「ノーメノメ、ノーメノメ、世界が(地球が)回るまで、バッカスお前の酒樽を、心配するなよドンブリコ」となかなか調子のよい唄で、宴たけなわから、お開きへの合図にもなっていたが、大変に盛り上がったものである。ノーメノメの代わりにTrinken Sieとも歌ったように記憶するが、初期にはなかったという。一般にドイツ語にして歌うのが結構格好良いと思われていたので取り入れられたのだろう。確か始める時の掛け声もEins, Zwei, Drei！が良く使われていた。

と思って諸先輩の話を聞くうちに、蹴飛ばすという行為は最初からあったのではなく、 むしろ行儀の悪いものが蹴るという感じであった事が判明した。S20-30年代のクラス・コンパ等ではやはり旧制高校の寮歌が主役で、宴の最後に皆が肩を組み円陣を組んで寮歌を歌うのが常であった。そこに駒場寮の寮生が、盛んに歌っていた「バッカスの歌」が持ち込まれたらしい。上島さんによればこの歌は駒場寮では「春爛漫の」と並んで定番で、起源まではわからないが、かなり古いものだという。とにかく蹴ると言う事はなかったそうだ。

調査の結果を纏めると、最初は肩を組み、歌いながらただグルグル回るものだった。次第に部員が増えてくると、どうしても円陣が崩れる事になり、向き合ったあたりが近づくと、面白半分にトイメン同士蹴りあうものになった。それが時と共に、二重の輪を作り電気を消して回りながら蹴る（軽くではあるが）形に変わった。ここで始めて「蹴飛ばし」と呼べる。更に時代が下がると、蹴ること自体が目的となり、特に歌を歌うわけでもなくただワーワー言いながら蹴りあう様になった。時には酔った勢いにまかせて、取っ組み合いになったりもして、「電気を消さなければ蹴れないのか、暗闇に紛れて卑怯だ!」と注意される事も起こった。一方では追い出される４年生が、俺をもっと蹴れと涙声で怒鳴るような事もあったと聞くが、この場合は親愛の気持、万感の思いを込めた蹴りを期待している訳で、一概に蹴るのが悪いといえない例であろ

う。

現役諸君に聞くと、今でも蹴飛ばし(蹴っぽり)は健在で、歓迎コンパ、追い出しコンパ、京大戦等の機会に寮歌(嗚呼玉杯に花受けて、琵琶湖周航の唄、逍遥の唄等)を歌いながら、内側の４年生或いは新入生を蹴るもので、内側からは蹴り返さないそうである。

以上の如く、「蹴飛ばし」或いは「蹴っぽり」は、最初からあった訳ではなかった。しかし誰に聞いても、バドミントン部のコンパ以外でやった記憶はないと言うから、この「バッカスの唄」とセットになった「蹴飛ばし」は、我が部の伝統と言っても良いのではなかろうか。

今回調べ始めた時、まず上野さんから手紙を頂き、図解入りで蹴る事はなかった等一連の説明を頂き、更に同期で旧制高校の出身である上島さん、早津さんが良くご存知ではとの助言もいただいた。早速問い合わせところ、早津さんからは手紙で、上島さんからは電話で、懇切丁寧にお話を伺う事が出来た。歌詞の部分は、今でも歌えるよという上島さんに確認した。司馬さんからも手紙を頂き、片山先生も終わった後息を切らすほど熱心に参加されたという事も聞いた。行儀の悪い者が蹴るのくだりは司馬さんの話である。細矢さんからも蹴る事はなかったとお聞きした。ただ筆者の脳裏には、かなり強烈に「...バッカスお前の酒樽を...」という歌詞と、蹴りあいが刻み込まれているので、「蹴飛ばし」を主題にした。余談であるが上野さんの手紙の中に「歌詞にはバッカスだけではなくヴィーナスもあったが、この方は現在は不適であろう」との一節があり、そうなると「バッカスの唄」と呼ぶのも違うのかも知れない。勿論「Trinken Sie」と同じく後から加えられたとも言えるので、これも「バッカスの唄」で通す事にした。何かの機会にヴィーナスの歌詞も是非聞きたいと思って居る。

部旗の話

昭和42年入学　　豊田　拓男

リーグ戦や七帝戦に行くと、各大学が体育館の壁面に部旗を掲げる。なかにあって私の在学当時の東大の部旗はひときわ小さく、旗のサイズで勝負するわけではないが、何倍も大きな他大学の旗に比べ、たいへん見劣りがした。私はバドミントン部員としては５年目の昭和46年秋のリーグ戦を終え、学部にはもう１年通う予定だったが、クラブからは卒業し、急に時間に余裕ができた。

たしかその頃、それまでの部旗がどこかに行方不明になっていたようで、これを新しく作り直す必要が生じたらしい。今回探し出した、鈴木明夫先輩宛ての部旗製作に関する会計報告から推測するに、たぶん42、43年入学組の寄付をベースにして作る、というプランを申し出るかたちでＯＢ会の賛同をいただいたようだ。当時は今の駒羽会ほどしっかりした組織ではなかったが、すでにその頃から鈴木さんがＯＢ会事務局として、全体の取り纏め役に任じておられた。

製作を一任されたようなかたちで、画用紙30枚、絵筆５本、絵の具10種（前述の報告書にそう書いてある）を買い込み、保谷の下宿にこもってデザインから業者との交渉まで一人でやった。

画用紙にいく通りもの背景（簡単に言えば、その多くはライトブルーの地色の中央にシャトルをかたどった白を残したもの）を描き、手描きで大きさの異なる銀杏マークをいくつも作って（当時は複写機の出始めで、たぶんまだ拡大、縮小機能はついてなかった。いずれにせよ複写機を利用できるような境遇ではなかった）背景の上に乗せてはためつすがめつ……。

ようやく決めたデザインを、どなたかに承認いただいた記憶がない。本郷だったかの徽章屋に、図面でなく、彩色した見本（手描きの背景に、銀杏マークを寸分の狂いなくホチキス止めしたもの）を持ち込んで製作を依頼した。背景のサイズや銀杏マークの位置も正確に測っており、店のおじさんに詳しく説明したはずだったが、出来上がったのを見て愕然とした。

注文よりも銀杏が中央に寄りすぎている！

あきらめ切れぬ思いだったが、世間知らずの学生で、どの程度に問題にしていいかも分からない。旗屋はずいぶん大まかな考えで仕事をするんだな、という情けない印象を得ただけで、引き下がらざるを得なかった。代金は３万円。自分を含む同期全員と、一年下の学年全員(彼等もすでに社会人になっていた)から寄付を集め、不足分をＯＢ会に援助願って支払いにあてた。

旗の完成は昭和47年の２月10日前後。シーズンオフだったので初披露は47年２月29日。船便シベリア経由でフランスに留学する、同期の湯浅有光を横浜港に見送りにいく際、思い立って持って出た。船上の湯浅が撮った旗の写真が、記念誌『三十年』の87ページに出ている。

ＯＢへのお披露目はたしか新歓コンパの席上。今はなき、駒場の木造二階建ての同窓会館（正門を入って左手のはずれ。よくすき焼きで追いコンなどをやりましたよね。）だったかと思う。実は、デザインについてはいろいろ深奥な文学的な意味付けをしていて、ひとしきり講釈をするつもりでいたら、横山さんが、「おう、真ん中がシャトルだな」といってにぎやかに喋り始めたので、デザインの含意はそのまま永遠の闇へと葬り去られてしまった。

自分としては銀杏の位置が痛恨だったが、大きさでは文句なし、一応の満足をもって現役に引き渡した。それ以来18年（？）この部旗は東大バドミントン部の試合の場に掲げられ続け、その結果なのか、途中で辛い目に会ったのか、天井裏で雨漏りに曝されたように、全面しみだらけになってしまった。

そこで２代目が40周年のときに同じデザインで作り直された。費用などは記録にあるはずだが、発見できない。

更に３代目がある。これは平成５年。一橋戦だかリーグ戦だかの帰り、部旗担当の○ちゃんが、酔っ払って部旗を入れたバッグを電車内に置き忘れ、そのままついに出てこなかったため、７月に高田馬場の宮坂徽章という店に注文して作ったという。費用は13万円弱。駒羽会の会計記録に残ってないので、関係者が自弁したのか？これが現在の部旗である。よく見ると初代とはデザインがだいぶ変わっている。サイズも少し小さくなっているのではないか。

取材ついでに昔の部旗などについても触れておく。といって、実は古い部旗については、「50周年記念事業」の中間報告のなかで情報提供をお願いしたが、残念ながら回答は皆無に近かった。

ほんとの（おそらく）初代の部旗は、ブルーの地の中央に、縦書きで「大學」のロゴ。その下に「東京大学運動会バドミントン部」の白抜き文字（『三十年』口絵ページの昭和36、37年頃の写真に出ている）。実はこの旗が最近、故・木村先輩のところから出てきた。ご遺族が遺品を整理していて見つけられたという。木村さんが、何かの折に自宅に持ち帰ったまま忘れたのか、それとも２代目の旗を作ったので、初代を引退させて持っておられたのか。多少の謎を含んだまま、この旗は再び日の目を見ている。３月のバドミントンフェスティバルに行ったら、今の部旗のそばに小さく掲げ

られていた。

同じくたぶん２代目のデザインは、ライトブルーの地の中央に黄色の銀杏マークで、初代と同じサイズ。同じく口絵ページの44年の写真に出ているが、これは42年にはすでにあったように思う。初代、二代目とも製作経緯不明。

更にもうひとつ旗がある。ライトブルー地に横書きで「栄耀栄華」と大書したものである。ある年の卒部生が現役に記念として贈ったもの。当時四文字熟語を並べて面白がるのが流行っていたそうで、贈る方は一種のシャレのつもりだったらしい。

これがどういう訳か四十周年記念誌に「新しく作った副部旗」というキャプションつきで口絵写真に載せられた。その影響なのか、あるいは贈られた現役がシャレで返したつもりか、はたまた先輩のシャレを解さなかったのか、これを試合の場に掲げるようになり、その後それがしきたりになった。

これを見て古いＯＢたちは思う。

部の旗は運動部の世界では一応「公的なもの」であろう。まさか公式戦の場に持ち出されるとは予想しなかったのかもしれないが、まず、公的なものをシャレにするという感覚がわからない。さらに公的なものを勝手に作るという感覚がわからない。公的なものには必ず時間的側面が伴なってくる。過去からの流れの中で、新たにこのような旗を作るべきか否か、また、作ったとして、どのように伝えて行こうと考えたのか。

ある時、背中に「馬鹿野郎」と大書したシャツを着て公式戦に出ていた選手を見かけたことがあったが、同じような話である。いずれも、要するに下品で不躾である。

世は大衆社会で、大衆向けの情報の量は圧倒的である。我が後輩たちも、世を覆う大衆向け情報の強烈な影響下に、知性や品性についての座標軸を失いがちなのではないか。気付いたＯＢは、はっきりＮＯを言うべきではないか。古いＯＢたちに聞いてみると、誰もが「栄耀栄華」はよろしくない、と言っている。そう思っていながら黙って見過ごしてきたＯＢも悪い。

50周年を機に、この旗は引退させたらどうか。部旗というのは、幾つもあるものではない。木村さんのところから出てきた古い部旗も、部室に大事に保管しておけばいいのではないか。

「栄耀栄華」の旗について

昭和58年入学　　青山　豊久

１．入部した昭和58年当時、バドミントン部には、淡青色の地に白抜きのシャトルが描かれた旗があった。そのとき、すでに薄汚れていて、ずいぶん年季の入った旗だと感心して見た記憶がある。今あるのは、その三代目ということらしいが、私が出会ったのは初代ということになる。私たちは、先輩から受け継いだこの旗とともに、リーグ戦、七帝戦など四年間の活動を送ることになる。

２．試合会場では、いろいろな旗にお目にかかった。デザインと大学の部名のみのものから、「飛翔」「雄飛」といった勇壮なキャッチフレーズが入ったものまでバラエティに富んでいた。いろいろあって面白いものだなと感心していた。

３．やがて、卒部を迎え、大学生活の大半の時間をそのために費やしたバドミントン部のために、自分なりに何かの役に立ちたいと思った。そのとき、「うちにも他大学のように、複数の旗があってもいいじゃないか」と思い立ったのである。

４．さっそく、同期とも話し合い、ちょうど他の目的で同期から預かっていたお金の残りがいくらかあったため、それで旗を作って寄贈することにした。寄贈にあたっては、現役に押しつけがましくならないよう「〇〇年卒部生寄贈」といった文言は入れず、淡々と大学名と部名だけを入れることにした。（これが、逆に「部」としての正式なものとして受けとめられ、また、寄贈年などを残さなかったがために後の追跡を困難にしていたのかもしれない。）

５．新しい旗は、従来の旗との棲み分けの意味からも、キャッチフレーズの題字のみにすることにした。旗の位置づけを置きかえる意図もなかったため、特にＯＢの皆様に断ることはしなかった。

６．旗の題字のキャッチフレーズについては、正直いって面白いものにしようという意識があった。これが、一部のＯＢの方々に不愉快な思いをさせたことは事実であり、配慮が足りなかったと今となっては反省するが、ここでは不興を買った「栄耀栄華」という文言を記載するに至った当時の経緯を記しておきたいと思う。

7．当時、一代上の村田章主将は、部活動のほか、学業における活躍も顕著だったことから、我々後輩は偉大な先輩に「文武両道」という言葉を連想していた。

「文武両道」という言葉、バドミントン部員たるもの、部活は当然一所懸命行なうものの、ともすれば学生の本分である学業がおろそかになりがちであったため、こちらの方がキャッチフレーズとしては適当であったのかもしれない。

しかし、ここから論理が飛躍する。バドミントン部員としての目標は「文武両道」のみならず、私生活においても充実することも目指すべきであり、これを超える概念ということで「栄耀栄華」になったのである。（仰々しく経緯を記しておきたいとはいったものの、私とてこれ以上のことはやはり書けない。）

8．広辞苑によれば「栄耀栄華」とは、「はなはだしく派手でぜいたくなこと」とあり、バブル期をまさしく象徴する言葉となったが、そのときは「我々バドミントン部員は、文武両道に加えて、公私にわたって充実した日々を送るのだ」という意味合いを持たせたものだった。栄耀栄華なんて、いかにも傲慢で品のない言葉だ、盛者必衰の理ということも知らなかったのか、ということでお叱りを受けていると思うのだが、ある意味、良い印象の言葉でないことも知っててわざと使ったのも確かである。

9．発注は、高田馬場の宮坂徽章に一人で赴いた。そこのカタログで初めて知ったのだが、以前からあった旗は、絹100%製であり、非常に高価なものであることを知った。同時に、そのような旗とは知らず汚してしまったことを後輩部員の一人として恥ずかしく思った。

予算の都合で、新しい旗は綿の生地で作ることにした。地の色は東大の淡青色であるとコントラストが弱くなってしまうので、少し濃いめの色にした。汚れても目立ちにくいだろうという思いも少しあった。

問題の題字であるが、こうした旗に「栄耀栄華」などという言葉を選ぶことはないようで、業者に「本当にこれでいいんですか」と聞かれたときは恥ずかしかったが、意を決して「お願いします」と帰ってきた。

費用は全部で五万円前後だったと記憶している。

10．こうして前代未聞の「栄耀栄華」の旗ができあがった。卒部にあわせてなので、昭和61年暮れか、昭和62年初めのことだったと思う。壁矢君やその後の主将の方々に面白がって活用いただきありがたく思っているが、ＯＢの方々の中には苦々しく思っていらっしゃった方もいると聞き、恐縮している。

11.「栄耀栄華」の旗の作成・寄贈の経過については、このとおりである。現役の皆さんにおしつける気もなく寄贈したものであるので、旗の掲揚をやめるにしても、いまさら我々に気兼ねする必要はないと思う。バドミントン部の運営は、現役の皆さんの判断によるものであり、旗の取扱いについても、現役の皆様の判断にお任せしたいと思う。

バドミントンフェスティバルの創設

第１回バドミントンフェスティバル実行委員長
昭和45年入学　　江藤　弘純

ＯＢになって14年たった1988年頃、ＯＢとバドミントンとの付き合い方、ＯＢと現役とのふれあい方について考えるような年恰好になっていた。当時、駒羽会の理事を仰せつかっていた事もあり、こういうことについても雑談のごとく話をしていた。「京大戦やシングルス選手権、ダブルス選手権に出るのは体がついていかない」、「現役レギュラークラスの相手をしても彼らの練習にはならない（ＯＢとやることが練習になってしまうような現役では困る）」、「現役の支援の一環としてＯＢの力で有名選手を呼んできて、現役とやってもらってはどうだろうか」、「ＯＢがやるには楽しい雰囲気がないと続かない」等々の放談の末、「お前が案を考えろ」ということになってしまった。

毎年、プロ野球のキャンプが始まるとテレビで様子が放映されるのでご存知だと思うが、グランドには音楽が流れている。その明るい雰囲気の中で選手はプロのレベルの鍛錬に励み、お客さんも楽しい１日を過ごしている。バドミントンも年に１回位そういう日があってもレベルダウンにはならないし、ＯＢにとってはそれくらいの軽いノリの方がむしろ良い。競技を離れたコンセプトを提案してみようと思い考えたのが「フェスティバル」という案であった。

実行委員と一緒に具体的にいくつかアイデアを築いた。

①子供や彼女（彼氏）を連れて行きたくなる雰囲気として…

会場に音楽を流しつづける

参加者各人の意気込みと目的に応じたクラス分けをする

その結果として　リラックスコース、ファミリーコース等競技色を排した選択肢を準備した。

子供のためにお菓子の小袋を用意

②現役にもメリットがある仕掛けとして…

「ヒト寄せパンダ」といっては失礼になるが超有名な選手に来てもらい、現役にとってもこう言う機会でなければやれない練習相手になってもらう。一方、我々ＯＢにとっては間近で見れるだけでも感激だし、場合によっては握手ができたりサインがもらえるような場にしようと思った。

その結果、第１回目のゲストとして元全日本チャンピオン小島一平選手に来てもらったし、以降も相沢・竹中ペアや、三洋電機の選手に来てもらっている。

③名称もイメージ一新し、決して「大会」とか「選手権」とか付けない。

その結果「フェスティバル」とした。

④時期は現役に迷惑がかからなくて、なおかつ運動に適した時期

その結果、３月末とした。

このような試みが運動会（体育会）として受け入れられるかどうか極めて不安であった（事実、一部のＯＢからは反組織的な造反活動と誤解され厳しいご注意を頂いた）。当日を同期会として活用してもらおうとの意図もあったので、各学年毎に連絡員を置いてＰＲをしてもらい、人数把握を事前に行ったりした。第１回目の当日（1989年３月19日）、私自身、子供に渡すお菓子の小袋を車に積み、ウェアも私としては極力明るめの物を着用し駒場へ向かった。幸い３月の暖かい陽射しの日で、体育館に入った途端、そこには汗の臭いと掛け声と喘ぎではなく、開局したばかりのJ-WAVEのサウンドが流れ、子供と興じる人もいれば相変わらず一生懸命やっている人もいた。まさに思い描いていた光景が作られていた。完全に成功を確信した。小島一平さんも趣旨を理解して頂いており、そいう雰囲気の中でもいやな顔をせず現役の相手をしてくれた。最後に全員で記念写真を撮り駒羽会報に付け「フェスティバル」の雰囲気を全国のＯＢに伝えた。

私自身は、その後数回参加したが、今となってはフェスティバルですら怪我が心配で参加できないでいる。しかし毎年案内を頂き、また会報に掲載される写真と記事を見ては会の盛会を喜んでいる。このような催しが続くのも東大ならではであり、他大学にも誇れるものと思っている。バドミントンは今や一部の競技者のものではなく、小学生からママさんに至るまで社会体育として認知され、多くの人に愛されている。かつて競技として参加した我々がＯＢとしてこのような形でも良いから接触できる場を東大が有しているのは大学クラブの一つのあり方になるのではとさえ思っている。

最後に、この会が毎年行われているのは第５回以降万年実行委員長を引き受けてくれている小林伸宏君（昭和55年入学）の尽力に支えられていることを付記し、彼に感謝の意を表したい。

木によって育ち、金属とともに滅び、炭素によって復活する
～ダブルス選手権、シングルス選手権の回顧と現在～

昭和48年入学　　野中　浩一

実質的にはわずか三年間半の期間（実際には、当時「流行」していた留年生活の一年を加えた期間）のバドミントン生活、さらに高校での二年半を加えても、自分のバドミントンの基礎がいかに短い濃い期間で培われたものかを実感する。その後の20年という薄い年月に比べれば時間的には三分の一くらいにしかすぎない。残りの薄い年月の始まりに彩りを添えてくれたのがダブルス選手権（以下D選）とシングルス選手権（以下S選）だった。幸いにもその創設期にはファイナリストをつづけられた自分の個人史をふりかえる機会が与えられたことに感謝している（無理矢理誘導したという話もあるが…）。いま記念誌の記録をふりかえってみると、D選は初期14回で優勝６回（うち現役１回）、準優勝４回、三位１回、S選は初期９回で優勝４回、三位２回であるから、たしかに自分でもよくやったな、という感慨がある。

しかし、詳細な記録をほったらかしにした（関心がなかった）当時のつけというべきか、個々の試合についての記憶は断片でしかない。また、ここは個々の試合について感想を述べる場でもないだろう。いつになっても一番楽しいのは、いまの自分のバドミントンを考えつづけることだし、ここでは、D選やS選をふりかえりながら、体育実技ではどうやっても五段階の三でしかなかった自分が、45歳になるこの歳まで、まがりなりにもバドミントンをつづけられ、ある程度のレベルで楽しめてきたわけを考えてみたい。

D選やS選の記録をみると、複数回優勝している顔ぶれには限りがある。もちろん出場機会があったかどうかを無視した話ではあるが、私と村田（光二）、村田（章）、戸塚、後藤といったところだろうか。こうした顔ぶれのプレイの質を考えてみると、「二流」の世界で長持ちするために必要なものが何か、少しばかりヒントが見えてくる。一言で言えば、スマッシュと瞬発力が信条ではない、ということだ。攻撃以上にディフェンスへの意識を高くもっている、と言えるかもしれない。もう少し具体的に言うと、ダブルスではドライブ合戦、とくに相手にやや押され気味のときに絶対にミスせず、相手の隙をついて攻守逆転にもっていく力に長けていた、と言えるかもしれない。

ガットの面とシャトルの出会いは哲学的である。いつまでたっても私には、迫ってくるシャトルを、コンマ何秒かのタイミングを狂わせずに打ち返せる自分の肉体が信じられない。その想いはスマッシュを打つことよりも、相手のドライブやスマッシュ

をレシーブするときにとくに強い。だからレシーブこそしっかり「ひっぱたく」べきだ、という意識がずっとあった。ドライブやプッシュでも、利き手の逆側に上がったシャトルは、よほどでないかぎり、当てるだけになりがちなバックハンドではなく、ラウンドザヘッドストロークで「ひっぱたく」。そういう意識をもつよう指導された高校時代の練習に、何度感謝したかしれない。

じつはバドミントンがいやになったことが一度あった。それはウッド製のラケットが急速に軽量の金属製へと変化し、世の中からウッドラケットが「根絶」されそうになったときだった。初期のD選の優勝はほとんどがウッドラケット（カワサキのブルーリース……なつかしい！）によるものだったが、廃番になってメタルしか選択肢がなくなったらやる気がしないなあ、と心底悲しかった。ヘッドの軽量化によってシャトルのスピードが一般に上がったことは確かで、一流どころが、「佐々木七恵の時代」とは別世界の「高橋尚子の時代」に進むのはやむを得まい。しかし、こうした高速化は、二流の選手、とくに初級者にとってはマイナスに働いていると思っている。この記念誌に再掲されているので詳しくは避けるが、初級者でも攻撃力が一見高くなったために、レシーブでひっぱたいている余裕がなくなり、面をつくって壁をつくるだけのレシーブが横行するようになったからである。D選、S選に現役時代に一度だけ勝つためなら、ひたすら攻撃力を磨いても可能性はあるだろう。しかし、連覇を目指すにはもっとレシーブ力の強化が必要である。40歳を超えるシニアの生き残りたちは総じてレシーブ力は抜群である。

幸いにも、ウッドなきいま、軽いだけでしなりの少ないメタルフレームはすたれ、適度のしなりをもった新世代のラケットが生まれたために、私ももう一度生き返ることになった。しかし、いま私はあらたな課題を抱えている。しっかりためて打つという自分の信念は変わらないが、「そこまでためて打っては打点が低くなって通用しないでしょう。もっと前捌きを研究しなくては」と、シニアの全日本クラスの人に教えを受けたからだ。その研究が実ったとき、いまのD選の目標である一部での一勝が実現でき、また新しいバドミントンを体験できるのではないかと期待している。もうバドミントンがいやになることは一生ないと思う。「障害」バドミントンがどこまでできるか、残された年月のなかでD選の歴史に挑戦していきたいと思っている（さすがにS選についてはノーコメントとしておきます）。そのささやかな挑戦の跡に興味がある方は、http://www.jah.ne.jp/~nonaka/badrec.htmlまでどうぞ。

ガス戦･東大戦

昭和42年入学　　豊田　拓男

古いＯＢの方は恐らくご存じないだろうが、「ガス戦」は昭和57年初冬に始まり、以来すでに17年の歴史を誇る東大バドミントン部の年中行事である。三菱ガス化学バドミントン部との定期交流試合のことで、名称うるわしからねど、学生の方が勝手にそう呼ぶので仕方がない。ガス化学の部員は「東大戦」と称している。試合の由来を語るには、まず東大バドミントン部と三菱ガス化学の関係から始めねばならない。

三菱ガス化学の前身、三菱江戸川化学は、昭和38年入学の志岐紀夫先輩の父君が当時社長をやっておられた。そのご縁で、41年入学の川上邦彰が入社したのが昭和45年、これがそもそもの始まりである。たまたま同学年の阪大主将、島岡悟郎も同期入社していた。川上の縁で１学年下の豊田拓男が48年に入社した。51年には北大主将だった藤森秀信が入社した。これらの社員が中心となって素人の同好会程度だった会社（主に東京工場）のチームを鍛え、53、54年頃から東京都実業団に加盟したり、同好の士と語らって東京全三菱リーグを作ったりした。

大学での経験者、とくに藤森秀信が熱心に未経験者を鍛えた。30才前後からようやく本格バドミントンに目覚めた多くの部員たちも指導によく応え、軟式テニスや空手など、学生時代にやったスポーツの特性を生かして、目覚ましい上達ぶりを示した。

実業団では、54年春、最下部の12部に加盟し、以来９回連続優勝。４年半で３部まで駆け上がり、しばらくは２部に在籍した。また、東京全三菱でも連戦連勝。今年３月の団体戦第22回大会では、通算19回目の１部優勝を果たした。

入社後にバドミントンを始めた選手たちが、実業団リーグでようやく苦戦するようになっていた56年、初心者上がりで東大キャプテンになった森明が折よく入社して、仕事よりバドミントンで大活躍を始めた。更に２年後に54年入学のマネジャー、築地永治が入社した。

「ガス戦」を始めたのは、築地の入社が内定していた57年暮れである。森と築地で話を纏めて交流試合を試みた。場所は葛飾区金町にある東京工場体育館。最初の頃、学生はレギュラー、準レギュラーくらいに人数を絞ったかもしれない。

双方の参加人数に合わせて試合を組み、上から順に当てていくと、ガス化学の圧勝だった。馴れない体育館というせいもあろうが、多くは球は遅いが老獪なおじさんたちに翻弄され、勝手の違った負け方だったようである。試合後は懇親会。宴席では一人づつ立って全員がスピーチをおこない、以後これを恒例化した。学生にとっては、

馴れないおじさんたちとの宴会。また会社側も、交替勤務の現場のおじさんや高卒の若手社員は、多数の東大生を前にやや上がり気味。興味深い交歓風景だったが、少なくとも社員のほうはあっという間に馴れてしまった。杯の数なら何枚もうわ手、おじさんたちがリードして、学生諸君と大酒を飲んだ。

試合が大変うまく行ったので、定期戦化することとし、毎年だいたい学年末試験の終わる頃の休日に、東大チームを工場に招待するようにした。しかしこの時期に試合をやると、学生側が練習不足なのか、力の差があまりに大きい。学生が調子を上げる頃の方がいいという話になり、春合宿のあとあたりに日程を移した。しかしその甲斐もなく、ガス化学の圧倒的な優勢がその後も続く。記録を残してないので詳しいことは分からないが、森明に言わせると、彼自身の初めての敗戦は戸塚・後藤組との試合中に、肉離れを起こして負けたときだとのこと。この時は駒場の４体で試合をやって、たしか団体戦で初めての敗戦だった。試合のあと、目黒の会社のクラブに席を移して懇親会をやった。恐らく平成２年のことである。

この勝利に味を占めたのかどうか、大学院で数学を専攻した後藤拓也が平成６年に入社して先輩社員を不思議がらせた。後藤は東大の監督でもあったから、懇親会のスピーチではいまの立場を忘れて、しきりに学生にお説教をした。

その頃から「ガス戦」は一層盛大になり、学生は初心者の１年生まで、ほぼ全員が参加するようになったが、ガス化学の主力は段々高齢化して行き、一部は使用に耐えなくなったので、最近の数年は試合に助っ人を呼び込むようになった。地元のクラブチームの仲間など、周辺にバドミントンの関係者が多いので、東大の主力選手の手に合いそうなレベルの知人に頼んで、試合に加わってもらうのである。負けたくないからそうするのではなく、東大の選手に練習の機会を与えたいという、つまりは親心である。

試合は、シングル・ダブルの割り振りや全体の試合数、それに対戦相手を、その場に集まった顔ぶれを見て決める。ちょっと見に７－３くらいで学生が強そうな印象の組み合わせでは、だいたいおじさんの方が勝つ。タッチの速さ、球速では相手を圧倒していながら、ミスが多いこと、簡単に連続失点すること、攻めがワンパターンであることなど、現役学生のプレーは脆すぎるのである。

ガス化学の主力の選手層は四十代、五十代。さすがにここ数年はスピード、スタミナで押しまくられて学生に歯が立たなくなったペアもあるなかで、わが藤森秀信選手はことし51才。関連会社の工場長をやりながら、毎回Ｓ１かＳ２に出て、ほとんど負けたことがない。四半世紀前の当人の姿に比べれば、もう見る影もないのだが、それ

でも粘りと正確さで、なんとか学生と互角以上にたたかっている。

後藤拓也から５年おいて平成11年に高須大典（現大野）が入社した。続いて平成12年には夕部邦夫が入社。初の２年連続入社で、ようやく東大戦リクルート活動も収穫期に入った感がある。これでわが社の東大バドミントン部出身者は７名となった。

大野も夕部もガス化学バドミントン部の伝統に則り、入社後にいっそう強くなることを、先輩社員は期待する。本人の心がけにもよるが、いくら仕事が忙しくても、月１、２回の練習くらいは何とかやれるのがこの会社の良さである。また、クラブ活動は現場の３交替のおじさんお兄さんたちと全く一緒。合宿などでは文字通り同じ釜の飯を食ってともに乱痴気騒ぎを楽しんでいる。おかげで世間がたいへん広くなる。こんな付き合いをしていると、決して鈍感なエリートの坊っちゃんになることはない。ほんとにいいクラブだよ。

油断すると、ついリクルート風の文章になってしまう。失礼！

大事なことを書き忘れたが、学生諸君も恒例の「ガス戦」を楽しみにしているようである。年１回、学生とはスタイルの変わった相手と試合をし、三、四年ともなればなじみのライバルもでき、どこにいるのか忘れてしまうほど酒をごっつあんになって、逆方向の電車に乗って帰ったりして。

これで東大側が試合に勝ち、勢いに乗って春のリーグ戦に臨めれば言うことはないのに、ガス化学バドミントン部は、学生諸君の成長を祈りつつ、またも厳しい愛の鞭をくれてしまうのである。

筑波大学との交流

昭和52年入学　　内藤　史門

筑波大学との交流試合が始まったのは昭和54年の秋、私どもの代にバトンタッチされて間もない頃だったと思う。きっかけはむこうの主務だった西原隆君が、こちらの神野君と高校（愛媛県立新居浜西高校）の同級生だったことに由来する。大学３年の夏休みに四国に帰省した時、両人が新居浜の体育館で練習したりして会っているうちに、「一緒にやってみない？」という話になったそうだ。当時、筑波大学は新設まもなく、やや孤立していた為、リーグ戦以外の他流試合を積極的に求めていた、という事情もあったらしい。

あの頃の我が部は、秋季リーグ戦で４部優勝、３部復帰の宿願を果たしたものの、４年生の主戦力が引退したばかりで、前途多難が目にみえていた。従って、かたや３部Ａクラスで２部をねらって飛ぶ鳥を落とす勢いの筑波と戦うことに、新米主務としての私は全く及び腰であった。むしろ勝ちぐせをつけられるような相手の方が、チームの成長にプラスになると考えていた。ところがこの話に、先輩方は大いに乗り気だった。消極発言を繰り返す私は、とうとう前主将の小松さんから引導を渡された。

「そんなにやりたくなければ、内藤、お前だけ行かなければよい！」

現役時代、苦い思い出はたくさんあるが、このときほど自分の甘さを痛烈に思い知らされたことはなかった。ともかく筑波に出陣することになった。

そうなると次なるお仕事は、当時筑波大の教授でいらっしゃった司馬先生に「筋を通しておく」ことである。司馬先生の厳しさについては、何も知らぬ私の耳にもかねがね入っていたので、恐る恐る、電話で筑波に遠征する旨お知らせ申し上げた。すると司馬先生がおっしゃるには

「このような交流試合が長続きするためには、ギブ・アンド・テイクの考え方がなければならない。いったい君達は彼等に何を与えられるのかネ!?」

……私はほとんどしどろもどろ。腹の中では（もともと俺は気が進まなかったのに…）などと思いつつ、「東大の伝統的な良さを云々」と言いつくろうのが精一杯であった。汗ばんだ黒の受話器が、実際以上に重かった。

いざ筑波へ――

交通事情の悪さも手伝って、とにかく遠いなあ、はるばる来たなあ、というのが皆の実感であった。今でこそ文化センターから飲み屋に至るまで、あらゆるものが揃っている学園都市だが、その頃はまだほとんど何もなかった。車で夜の大通りを突っ走っていると、気がついたら雑木林の中だった、なんて話が当たり前という状態であっ

た。逆にいえば、建っている構築物はすべて新品、最先端の近未来風。体育館などの設備も大変充実していた。

さて肝心の戦績のほうは、残念ながら正確な記録が残っていない。同期の森主将によると、シングルスは歯が立たなかったが、ダブルスはけっこう試合になったのではないか、ということである。筑波は確かに強かった。同大監督、阿部さんの強力な指導の下、練習の方法が非常に科学的だったという印象が強い。単に気力と体力と根性（もしくは絶叫）で頑張るというのではなく、観察し、データを採り、分析し、プレーの向上に役立てる姿勢は、学ぶべきところ大であった。

試合後のコンパは外の芝生に飲み物とおつまみを並べて、というなごやかな心づくしであった。傍らに、一見きれいな池もあったが、そこは人工都市のこと、各建物からの廃液溜めを兼ねたものゆえ、入ったり、まして飲んだりはご法度であった。その池に落とされるという栄に浴したのは、ほかならぬ森明君である。初めての交流にしては、よくもそこまで盛り上がったものだ。宴席には司馬先生もお出かけ下さり、過分の差し入れをして下さったと記憶している。

その後も、来てもらったり行ったりして、筑波戦は続いた。壁矢君によると、彼が主将だった昭和62年、こちらから遠征した。既にあちらは１部校となっており、同部史上でも著しく充実した時期だったという。実力差は歴然としていた。それでもなお我が部を暖かく迎えてくれた彼等の誠実さ、生真面目さは交流試合が始まった頃と変わらなかった。

現在は諸般の事情で中断しているとのこと。公式記録を残すような定期戦をもつまでには至らなかった。それでも、両校にとって何がしか意義のある影響をお互い与えられたとすれば、最初に関わった者として望外の幸せである。いつかまた筑波戦が復活することを願いつつ、筆をおく。

東大バドミントン部と運動会総務について

昭和59年入学　　竹内　実

卒業して早や12年経ちますが、小員が東京大学運動会総務部（ご存知の方が殆どとは思いますが、いわゆる他大学でいう「体育会本部」に該当するもので、所属運動部全般に関わる情宣とか予算手当てとかの本部業務などをしている組織です。）にも籍をおいていたとの理由から、このほど東大バドミントン部創部50周年記念誌への寄稿を拝命することとなり、つたない記憶を辿ってみることにしました。実は、正直なところ、そういえばそんなこともあったんだなぁという位、最近は忘れていたことではありますが。

小員は、１年生の10月から４年生の８月までの約３年間運動会総務部なる組織に身を置いていましたが、それ故バドミントン部の練習に参加するよりも当時本郷第２食堂内にあった運動会室にいる方が、はるかに長いという些か奇妙な学生生活を送ることになりました。

そもそも、総務部に足を突っ込むきっかけになったのは、大学１年の夏も殆ど終わりかけた頃、東京大学運動会が管理運営する某Ｈ田寮の寮委員なるものを経験したことだったと記憶しています。「寮委員って何？」なんてことは全く知らないまま、バドミントン部で２年先輩だったＫ上先輩から「タダで好きなだけ酒が飲めるぞ。」という甘い言葉（確かにそれは事実で、もう酒は沢山だ！っていうくらいゴチになりました。）にそそのかされて、西伊豆までノコノコ出かけていったのでしたが、そこで夏期の寮運営をしていた総務部の先輩方と会ったのが、「東京大学運動会総務部」なる組織の存在を知った最初でした。（ちなみに寮委員のつとめを終わった後、沼津港にある某Ｆ葉寿司なる寿司屋につれていって頂き、そのときにかなりの幸福感を味わったことだけは鮮明に覚えているのですが、今更ながら自分の食い意地の汚さを思い知らずにはいられません。なにしろ、バドミントン部に入部したのだって、１年上の某Ｈ田先輩に渋谷でお好み焼きをゴチになったことがきっかけでしたから。）

その後、１年生の秋休みが終わって実家から上京した日の夜、総務部の１年先輩のＫ村氏から、「11月の伊豆戸田マラソンのスタッフとして総務部の手伝いをしてほしい。」と要請され、釈然としないながらも、これまた「タダで寿司が食えるぞ。」の罠のような甘い言葉につられて、当時世間知らずの私は、数日後に運動会室で行われた総務会なるものに足を踏み入れ、なぜかそのミーティング終了後には、新人総務として自己紹介をするハメになっておりました。（しかしながら、小員のあずかり知らな

いところで、バドミントン部の２学年上のＳ澤先輩、Ｋ上先輩と総務部委員長Ｓ山先輩との間で、小員を総務部に売り飛ばす密約が既にできていたとのこと。なにしろ、寮委員として送られてすぐ、実は小員が、当時Ｈ田寮筆頭総務だったＳ山先輩の中学・高校の後輩で、末席総務だったＫ埜先輩の下クラス（文ＩⅡ15Ｄ）であるという事実が判明し、早速その密約ができてしまったらしい。後でその話を聞いて、もう笑うしかなかった。）

きっかけが長くなりましたが、入部した後は、いわゆる「どこに出しても恥ずかしい」末席総務部委員として、各種の運動会総務部としての本部業務（？）諸々にいそしむことになりました。

ちなみに、その業務とは、スキー・ゴルフ等々の講習会運営や駒場陸上運動会等のイベントの実施や運動会報の作成、運動部予算の折衝など・・・では全然なくて、むしろオフビジネスにおける酒席の場が最も中心だったような気がします（こう書いてしまうと、諸先輩方には甚だ失礼でしょうか。どうかご勘弁を）。したがって、頭脳とか筋肉とかは全然鍛えなかったような気がしますが、内臓系（特に肝臓）は随分鍛えていたような気がします。もちろん、当時まだ純粋な少年だった小員は、酒席における総務部他運動会運動部先輩方の飲み方？楽しみ方？には、はじめのうちは、「？？？？」の連続で、神社の狛犬状態だったのですが、幸か不幸か、生来食い意地が張っていた上に酒好きな性質のため、気がついたときには、体がすっかり総務部体質になじんでしまっており、自分が総務部委員長として最上級生となった頃には、過去先輩方がなさったことと同じことを繰り返しておりました・・・（もし被害に合われた後輩諸君がいたらご勘弁）。しかしながら、なぜか、その酒席における良き（悪しき）慣行が、ひところバドミントン部内でもはびこっていたのには、甚だ驚かされました。（決して小員が持ち込んだわけではありませんので。）

総務部では、その性格上、他の運動部の部員や国立七大学等他大学の体育会本部の人々との繋がりが、いやでも発生します（意外とこれがクセもので、この関係で知り合った他部、他大学の先輩・同輩・後輩とは、いまだに親交が続いています）。この関係はバドミントン部にいるだけでは発生しないものであるのは確かだと思います。それに対する好き嫌いは個人によるし、その良し悪しを議論する筋合いのものでもないと思いますが、小員にとって確実にいえることは、総務部に在籍していたおかげで、退屈する暇さえなかった学生生活を送ることになったということと、卒業後も続く人間関係の輪が大変広がったという点でしょうか。

３年の秋から４年の夏までは、総務部委員長（いわゆる体育会本部の幹事長）なるものに就任させられるハメになってしまい、怠け者の私によく勤まったものだと、大学を卒業して12年たった今でも冷や汗が出ますが、当時を振り返ってみると、それもこれも、この部を含め色々な運動部の同輩諸君の助けがあったからこそのことと思っています。（今だから笑って言えますが、実は、４年生の時の試験で、あと一つ単位を落としていたら、現在勤務している会社に就職が内定していたにもかかわらず、見事に留年していました。）

総務部の上級生になるにつれて、仕事量が増えて、なかなかバドミントン部の練習に出られなくなってしまったのは残念ではありましたが、少々不健康だけどなかなかエキサイティングな学生生活を送ることになったのも、もとはといえばバドミントン部があったおかげであり、総務部委員としての業務の合間にバドミントン部を訪れたとき、妙に懐かしいような気がしていたことも、また覚えています。この部が50周年といわず、これからも、もっともっと長く続いていくことを願ってやみません。

東大バド部と私

昭和60年入学　　陣野　康幸

同期と諸先輩後輩のご活躍で、いいかげんな私にもバド部はどんどん楽しくなりました。練習中に水を飲めるようになったのは３年生からだったと思います。ゴムのサポーターより固いテーピング、体操よりストレッチ、白線踏みクリアよりノック、ビデオ撮影、ジャンプとベンチプレス、かばんにはプロテイン（山下の筋肉は驚異）。科学的トレーニングとは？（新名さん理論？）ホントは根性練習も嫌いじゃないけど.... そんな時期だったのでしょうか。
（いい練習なのに、私にはとうとう中島のヒョロヒョロドロップが拾えませんでした。）

東大バド部は骨太でカッコいい軍団でした。学内ではラグビーやボート部と同じ濃紺のウィンドブレーカーでサークル連中を蹴散らし、試合会場での純白のアップスーツは古いジャージチームのあこがれでした。
（木藤のプロデュース。女子に厳しい人ですが、センスは最高です。）

無数にあるバドミントンサークルもバドミントン仲間でした。部の練習が休みの時には好き者が集まり練習したこともありました（悪ノリでサークル化も目指したのですがすぐ断念。悔いはないよね長谷川！）。猛者も初心者も友達で、バドを通じた交流が今でも続いていて嬉しい限りです。また、女子大のバド部にコーチに呼ばれたりと（原田の善人顔のおかげです）、バドを通じてなんと世界が広がるものか、とおもしろい思いをしました。
（女子部の田中・秋朝・柴崎に対しては失礼極まりなく、この場を借りてお詫び申し上げます。）

寮委員での活躍か、バド部は運動部の中でも一目置かれていました。特に総務部や応援部とは妙なつながりがあり、４年生の七帝戦では応援部が駆けつけ、コートを黒い学ランで取り囲んでくれました。いっしょに肩を組んで奇声をあげての応援です。愉快。応援部も「ルールはわからないが勝つ運動部は楽しい」と喜んでいたのを思い出します。（当時、尊敬する野球部は神宮200勝を目前に足踏みしていた。）

バドを通じた広がりは就職してからも続いています。竹内さんが東京海上を開拓さ

れて以来、毎年のように東大バド部から（体力）採用があります。どうやら「金と女には不自由しないぞ」という甘い言葉にころっとダマされ続けているらしいのです。

バドはすぐに弱くなるので試合のやりくりは大変ですが、会社のバド部では強い弱いはあまり問題になりません（と思っているのは私だけ？）。バドミントンが好きかどうかです。老若男女で楽しい合宿をしたり、仕事では口もきけないライバル会社のバド部と友達づきあいをしたりと活動しています。嬉しいことです。

交流はどんどん広がる広がる.....

もちろんみんなは練習熱心ですばらしい運動部員でした。

バドフェス三洋電機選手招待について

昭和63年入学　　茂木　淳一

１．三洋電機選手を呼ぶことになった経緯

強い女子選手が社内にいると意識しだしたのは入社してからのことでした。それに私も三洋社内（群馬地区）のバドミントン部に入っておりましたが、女子バドミントン部は大阪にあり強化チームということで、交流は全くと言っていいほどありませんでした。

ただ群馬の部でも、大阪に「交流試合してほしい」というお願いをしたことがあるのだけれど、交通費や日程等の理由で実現しなかったようでした。

こうしたことを受けて、「旅費をこちらで持つことにすれば、もしかしたら来てくれるのではないか？ダメでも仕方ないからとにかく連絡をとってみよう」と考えるようになったのです。

もちろん今回の件には、この手の大胆（ぶしつけとも言う）な連絡をしたがる私の性格が影響しているのは、言うまでもありません・・・。喜田コーチが引率され、1996年３月は村上・山田選手、1998年３月は井田・増茂選手に来て頂きました。全員、日本のナショナルチームのメンバーです。特に井田選手は女子シングルスで世界ランキング15位になり、2000年９月のシドニーオリンピックの出場が決りました。

２．フェスティバル当日までの経緯

女子バドミントン部の皆さんは、「他の試合との日程調整さえつけばＯＫです」と、私のぶしつけな要請にも快く応じてくれました。ただ、“他の試合”といっても、全英やユーバー杯などすごい試合の名前を言われて、「やはり住む世界が違うな～」と痛感しました。

３ヶ月程前にお願いの電話を入れていたのですが、フェスティバル参加と参加選手名が確定したのは、当日の約１～２週間前でした。

３．フェスティバル当日

東京駅・銀の鈴や渋谷ハチ公前で待ち合わせをしたと記憶しています。普段は関西を中心に活躍している選手なので、東京で分かり易いところを選んだのですが、ほとんどお上りさん状態です。

普段の服装はカジュアル系の人が多いようでした。スポーツ選手なのですから、当然でしょうか？お昼頃待ち合わせをして、昼食をどこかで食べてからフェスティバル

にのぞみました。

井田・増茂選手が来られた時に、体育館の照明が壊れたのが残念でした。せっかくだから数多くプレイを見たいと思ったけれど、体育館内は薄暗かったのです。間違ってケガでもされたら、大変なことになったところでした。

４．今になって思うところ

レベルは違っても“バドミントン”という１つの接点があれば、このような日本代表選手とも交流の機会を持てるということは、素晴らしいことですし、刺激になります。現役部員にしてもバドミントンの印象が変わり、部活動により励んでくれればと期待しています。

また日程・予算などで皆さんが了解していただけるようでしたら、再度このような機会を設定してみたいと考えております。



1996 年 3 月
第 8 回バドミントンフェスティバル

村上・山田選手との
エキシビションマッチ



同上
集合写真

10. ＯＢ会の歴史

ＯＢ会の歴史　　駒羽会以前

昭和37年入学　　鈴木　明夫

東京大学バドミントン部ＯＢ会が正式に発足したのは、昭和35年のことであり、立派な会則が定められている。しかし、この会則は忘れられてしまい、その後現在の規約ができる迄に、もう一度規約作成を検討したことがある。

創部後間もない頃の諸先輩の手記にもあるように、戦後徐々に経済的に余裕が出てきたとは言うものの、部活動は常にＯＢの支援が必要であった。ＯＢの会社員が１人でも出れば、すぐに寄付をお願いに上がった。手ぶらでは行きにくいということで名簿を作って、戦績の報告旁々寄付金を頂いた。このような状況下で、自然発生的にＯＢ会が形成されたわけである。東京在住の清水さん、司馬さんが幹事を務め、合宿、コンパ、京大戦などの現役の行事に合わせてＯＢ会と称して飲み会を行った。昭和35年に組織ができたのは、昭和25年の創部以来10年を経て、ようやくＯＢの数が揃ってきたということである。会費は、東京近辺在住者は1,000円、地方在住者は700円とし、現役部員がＯＢを訪問して会費を頂戴し、もちろん全額バドミントン部への寄付となりＯＢ会の財政支援ということになった。ちなみに当時の部費は月額100円であった。ＯＢ会設立とはいえ、特に会場を設営して旗上げの会を行った訳でもなく、初代の会長には清水務さんが選任され、形が整ったのである。40名弱の人数ではあったが、将来は大組織となり隆々としたものにするという意気込みで、清水会長はＯＢ総会やコンパの席では必ず「将来は、赤坂の芸者を総揚げにする」と豪語したものである。

昭和39年主務となった私は、大西主将と共に当時は本郷三丁目にあったルオーで開かれたＯＢ総会に出席せよと命じられて、何か部の運営に関係があるのかと恐る恐る顔を出したところ、単純に飲み会、懇親会であった。その後ＯＢ総会は12回が記録に残っている。その中で、サッポロビール本社ビルのビヤホール「セブンコーナー」で４回開催したが、片山先生が東大を停年退官し、九大に赴任されるに当たっての謝恩会も含まれている。総会と称しても、議事はなく飲み会であることは相変わらずであった。このころの飲み会は木村さんがサッポロビール(株)に就職したことで、必ずサッポロビールが出る店でなければならなかった。当然のごとくセブンコーナーの予約も木村さんにやって頂いた。最も傑作なＯＢ会は、昭和48年のこと、司馬さんから号令がかかり、木村さんが銀座リオンドール（当時小松ビルＢ１）に会場を取ったので、集まれと連絡が入った。当時、富士市に住んでいた私は有給休暇を取って、東京に出てきたら、張本人の司馬さんは急なご都合で欠席されたらしく、集まったメンバーはこれは何だと、司馬さんを散々肴にして愉しく飲んだことがあった。

話は戻るが、この間東大紛争時代には、部活動とは対外試合に勝つことが目的ではなく、練習こそ最大の目的で、練習によって自分を磨くのだという議論をなすものが主将となった。強いものだけでなく、練習熱心なものが試合に出場するべきだという考え方でレギュラーを外して、リーグ戦を一試合戦ってしまったことがある。ＯＢ会は現役の方針に対して、殆ど注文をつけることをしないという姿勢を貫いてきたと思っているが、この時だけは監督の木村さんが、ただ一度面と向かって苦言を呈した。この時には、ＯＢは名前だけで飾りものに過ぎないとの発言もあり、伝え聞いた一部のＯＢには少なからずショックを与えた。しかし、現役を支援していこうという気持ちは少しも揺るがなかった。

その後東大は紛争により入試が１年なく、昭和44年の新入生が１人もおらず、バドミントン部としても１学年穴があいてしまったが、その後入部者の定着率がよくなり、同期のまとまりもよく、楽しんで部生活を送るようになって、活気も戻ってきた。

この頃の会員数は150名を超え、会長は足達哲之さんを経て秋山敦男さんとなっていた。1976年に１年遅れではあるが創部25周年の総会が開催された。ここでも特別な議事はなく、懇親会だけではあったが、30周年には記念誌を作るなどと約束してしまった。まだ５年あるとたかをくくっているうちに30周年はあっという間に近づいてきた。１年前の1979年９月渋谷の「竜飛」でのＯＢ総会で記念事業の一つとして記念誌を作ることが決定して、いよいよ記念誌を作らねばならなくなってきた。ともかくやりましょうと言ったものの、全くの素人の私は、文集に毛が生えたものをイメージしていた処に、本を作るノウハウを持っていた豊田拓男君がものすごいエネルギーで、編集と業者との交渉をやってくれた。おかげで、今見てもよくこんなものがという立派な記念誌ができ上がった。私の心配はもっぱらお金のことだけとなった。当時3,000円であった会費を臨時会費として１万円とし、集めたら3,000円は補助として渡すと現役にハッパをかけ、集金をさせた。その結果、なんとか金を集めることができ記念誌250部を作り、幽霊に近い会員も含め約200名全員に配布をした。そして1980年11月8日に学士会館で開催した記念総会には100名を超える会員が出席するという大変な盛況であった。

これでＯＢ会もしっかりした組織となったような気になっていたが、実際はそうはいかなかった。一世代以上の年齢差が生じて、総会や懇親会に出ても全員の名前と顔を知っているわけではないという状態になってきた。懇親会としては、シニアＯＢ会と称し上から15年位のものが集まって懇親会を時々やるようになっていた。この様なＯＢ会をどのように運営していくか、若いＯＢとどうやって付き合うかが課題となってきた。若いＯＢからはＯＢ会に対する疑問の声も出始めていた。シニアに比べジュ

ニアＯＢの行事参加が少ない、会費納入率が悪いというような状態も顕在化してきた。逆にシニアＯＢで熱心に参加するものからは、行事に参加するものだけが現役支援をし、コンパ等の費用を余分に負担し、更に二次会の面倒を見るのは不公平だ、欠席者も負担をすべきだという意見も聞かれた。即ち、会員数の増加に伴う年齢差の断層をどう克服するか、会費の使い方にＯＢ会の意志をどう反映させるかが課題であった。

この様な状況下で、当時監督をしていた村田光二君から、ＯＢ会の組織をもっとしっかりしたものにして、現役の支援をきちんとやって欲しいとの要望があった。その時のＯＢ会長は木村さんであり、熱心にコンパ、京大戦等に出席して「皆様においしく召し上がって頂いているサッポロビールの木村です」の挨拶に始まり、一所懸命現役を激励していた。そこでこの組織を明確にしようということで、木村さん、平松さんと相談して、シニアＯＢへの根回しをお願いした。村田君が現在の規約を作ってくれ、各種雑用を小林伸宏君(S55年入学)がやってくれたので、何でもかんででもやっていた私に少し余裕ができ、35周年記念総会に向け組織固めの準備をすることが出来た。1985年ホテルセンチュリーハイアットのスカイルームという、これまでの学士会館とは一転して華やかな会場で、35周年記念総会を開催した。この総会で規約が承認され、これまでＯＢ会長であった木村さんが改めて規約に基づく会長として選任された。２～３年に１名の理事を選任して理事会を構成し、会員の意志が反映できる体制とした。これまでうやむやのうちに行っていた会費徴収、名簿作成、予算、現役の支援、行事の運営、会報の発行等をＯＢ会の事業として位置付けた。

会長の下に事務局長を置き、実際の企画、運営を実施する事務局を明確に規定し、これを機能させるよう努力してきたことが、今日の駒羽会の基礎となっている。これ以前は会費の徴収は現役に任せきりで、使途の大部分が現役の財政支援ということになっていた。人手を持たないＯＢ会が自分で会費を徴収することが出来るか議論はあったが、ＯＢ会の意志を反映するには自分で集めて、その中から一定の金額をきちんと現役の支援に廻すことが不可欠であった。これは現役側から見ればＯＢ会費の徴収という雑務はなくなるが、資金源を失う可能性を持つものであった。これらの危惧を避けるため当面の間は前年度実績の79万円を現役支援に廻し、残りをＯＢ会自身の活動に充てることとした。当初ＯＢ自身のための予算は全体予算の30%であったが、将来的には50%にしようという目標でスタートした。

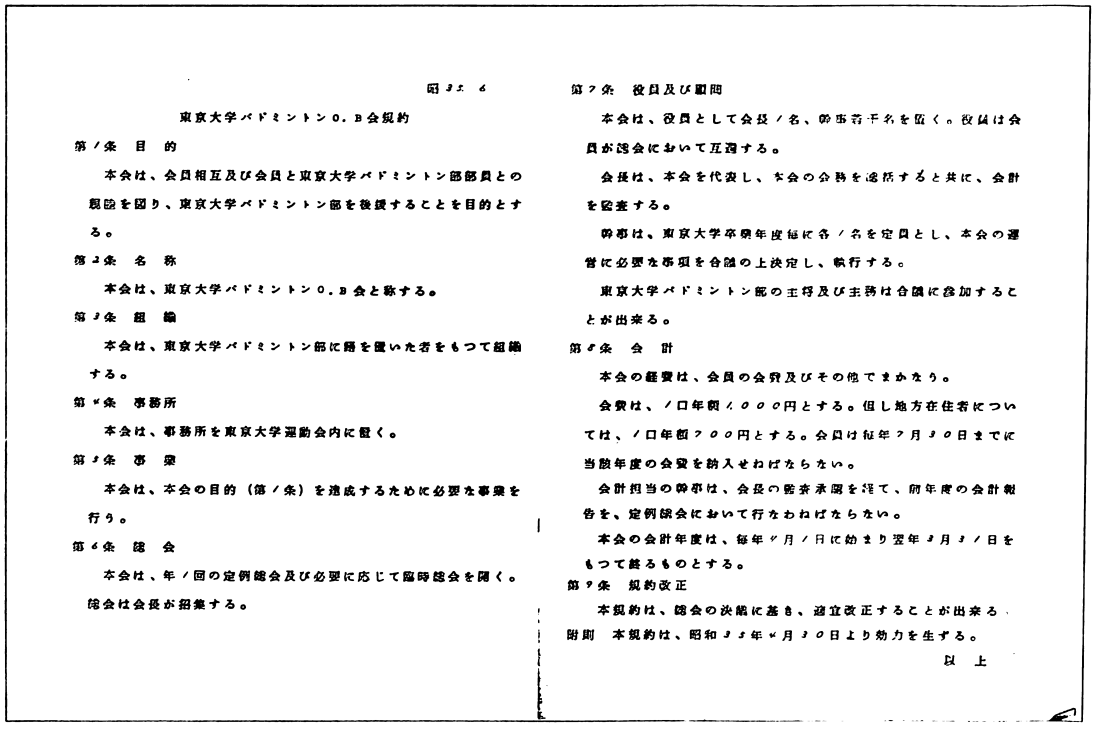
具体的にＯＢ会行事の支援とは、たとえば京大戦ではレセプション費用はホスト側が負担することになっているが、出席するＯＢが本人分以上の負担をしないよう会費から支出することにした。新歓コンパ、追い出しコンパも同様である。出席したいが、一次会の会費でさえ＋αの徴収が負担となり、出席率が低くなるという事態も起こっ

ていた。また監督、コーチは駒場へ来て、練習後に現役と飲む機会も多く、負担が大きいので、ささやかではあるが、手当のごときものを支給することなどを決めた。現役支援のため活動をしたり、行事に参加するＯＢへの支援を予算化したわけである。

もう一つの理念は、会費を払ってくれるＯＢ会員には公平に行事の案内をし、積極的に参加を勧誘するということであった。ややもすると現役時代はレギュラー中心、それがＯＢ会になっても一部のものだけの行事となることは極力排除するように考えた。これは名簿を毎年作成、整備することによって可能となったと考えている。もちろん、残念ながら海外、国内でも地方在住の会員に対して全て公平になっていないのは事実であり、今後永久の課題であることは間違いない。

何はともあれ、東大バドミントン部ＯＢ会が組織として体をなしたのは、この35周年記念総会の時点であった。

昭和35年ＯＢ会正式発足時の規約



昭35.6

東京大学バドミントンO.B会規約

第1条　目　的

本会は、会員相互及び会員と東京大学バドミントン部部員との親睦を図り、東京大学バドミントン部を後援することを目的とする。

第2条　名　称

本会は、東京大学バドミントンO.B会と称する。

第3条　組　織

本会は、東京大学バドミントン部に籍を置いた者をもつて組織する。

第4条　事務所

本会は、事務所を東京大学運動会内に置く。

第5条　事　業

本会は、本会の目的（第1条）を達成するために必要な事業を行う。

第6条　総　会

本会は、年1回の定例総会及び必要に応じて臨時総会を開く。総会は会長が招集する。

第7条　役員及び顧問

本会は、役員として会長1名、幹事若干名を置く。役員は会員が総会において互選する。

会長は、本会を代表し、本会の会務を統括すると共に、会計を監査する。

幹事は、東京大学卒業年度毎に各1名を定員とし、本会の運営に必要な事項を合議の上決定し、執行する。

東京大学バドミントン部の主将及び主務は合議に参加することが出来る。

第8条　会　計

本会の経費は、会員の会費及びその他でまかなう。

会費は、1口年額1000円とする。但し地方在住者については、1口年額700円とする。会員は毎年7月30日までに当該年度の会費を納入せねばならない。

会計担当の幹事は、会長の監査承認を経て、前年度の会計報告を、定例総会において行なわねばならない。

本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日をもつて終るものとする。

第9条　規約改正

本規約は、総会の決議に基き、適宜改正することが出来る。

附則　本規約は、昭和35年4月30日より効力を生ずる。

以　上

ＯＢ会の歴史　　駒羽会以降（1985年以降）

昭和55年入学　　小林　伸宏

1985年（昭和60年）

11月12日　創部35周年記念ＯＢ総会が、ホテルセンチュリーハイアットにて開催された。前年３月に卒業した私は、現役時代の主務の経験から、鈴木明夫さんに声を掛けられ、ＯＢ会の運営のお手伝いをすることとなっていた。

幸い就職した会社（石川島播磨重工業）の勤務先も、１年目は工場実習で愛知勤務であったが、昭和60年７月には東京の本社勤務となり、ＯＢ総会準備をお手伝いすることができた。

上記の創部35周年記念ＯＢ総会では、鈴木さん、村田光二さんらの立案により、ＯＢ会組織、規約、活動計画、予算につき体系化され、理事会・事務局組織が定まり、ＯＢ会活動を組織的に行うため、次の内容が承認・決定された。

（１）ＯＢ会の目的は、現役の援助とＯＢ会独自の活動を行うことである。
（２）予算管理を行い、コンパ等への補助を行う。
（３）活動資金としてＯＢ会費を設定し、会員資格を整理する。
（４）理事会：定例理事会を年１回開催し、年度計画・予算等必要事項を討議・決定する。
（５）事務局：ＯＢ会活動の企画立案を行う。
（６）会報の発行
（７）名簿の整理

並びに、木村会長、平松副会長、理事（清水さん以下13名）、事務局（鈴木…事務局長、内藤…会報担当、大島…会計担当、小林…事務担当）が決定された。

以下、理事会・事務局会議事録を元に、1985年（昭和60年）以降のＯＢ会活動を整理した。

1986年（昭和61年）

ＯＢ会として組織固めがされ活動開始した初年度である。

３月　　事務局会で、ＯＢ会費（１口800円）の設定を行い、予算の策定、活動計画を検討、会報（春・秋）の発行、会費の理事を通じての督促を検討し、理事会に諮ることとした。

現役への補助を第１に、一方ＯＢ会としての独自の活動もやっていけるよう、いくつかシミュレーションを行って１口800円とした。

４月16日　第１回理事会を開催し、上記事務局会の立案事項を審議・承認いただいた。

活動方針・規約に沿った運営を行い、ＯＢ会活動を軌道にのせる。

・単に現役への補助だけでなく、ＯＢ会員相互の親睦を深めるため、ＯＢ会組織を生かしていく。

５月１日　ＯＢ会報の創刊号を会報担当の内藤さんの手により、発刊した。

６月　事務局会で、７月片山先生喜寿のお祝い会の開催を決定。

７月７日　片山先生喜寿のお祝い会をホテルセンチュリーハイアットで開催。先生にＯＢ会から記念品として銀製の酒器をお贈りした。

10月　上半期の報告、会計状況確認と下半期の活動予定立案のため、事務局会を現役主務を入れて開催。

シングルス選手権の反省を踏まえ、ダブルス選手権に向けての課題の整理、秋の会報発行内容の検討を行い、名簿を発行することとした。

以降、事務局会は、春・秋の開催が定例化した。

1987年（昭和62年）

４月　第２回理事会開催

長期滞納者、脱会者の扱い、会費督促につき議論。次回理事会に向け、該当会員の意思確認を行っていく方針とした。

２年目に入り活動方針は、

・ＯＢ会運営基盤の確立（会費納入・行事参加者への補助）

・ＯＢ会員相互の親睦をより深める（行事の充実・会報寄稿者の掘起こし）

７月　京大戦を駒場で開催。第１日目土曜の夜、ＯＢ同士の懇親を歓迎会と称し、豊田さんのご尽力で、三菱ガス化学長者丸研修所で開催。

８月　関西地区ＯＢ会を実施

11月　４部へ昇格した女子部のお祝い会を、銀座のサッポロビール安具楽で開催。

1988年（昭和63年）

１月　理事会新年会を本郷で開催、片山先生宅（喪中）ご訪問に代わり、現役の抱負を聞く会とした。
現役のビデオ購入の希望に対する援助、シニアＯＢも家族で参加できる交流会の提案があり、検討開始した。

４月　第３回理事会開催
・ＯＢ会員の参加意識を高めるためのイベントの提案あり。
・片山先生年始は、先生ご高齢のため遠慮し、２月初めに理事会の新年会として開催することを決定した。
・ＯＢ会名称の検討を開始した。
候補である「駒羽会」「飛翔会」「Geese Club」「東京大学バドミントン部ＯＢ会（名前不要も含む）」の中からアンケートをとり、その結果を踏まえ片山先生に決めていただくこととした。
・40周年記念行事内容の検討を開始した。
活動方針は、
・ＯＢ会運営基盤の確立（会費納入徹底）
・ＯＢ会員相互の親睦をより深める（行事の充実・独自の活動）
現役に対しビデオを購入し贈呈した。

８月　村田監督により、シングルス選手権・ダブルス選手権の内規が作成された。

９月　事務局会で、ＯＢ会名称アンケート結果を確認。
駒羽会34、名前無し or 東京大学バドミントン部ＯＢ会が34であった。
これを受け、片山先生のご意見を伺うこととした。
会報担当、内藤さんから壁矢君に交替。
会計担当、大島君から原田（秀）君に交替した。
また、ＯＢ会活発化策として、３月中旬に親睦ＯＢ戦をやることとし、江藤さんをプロジェクトリーダーとして企画を依頼した。

10月　江藤さんのもと、有志による「ＯＢ会活性化：３月の会」
準備の打合せを実施し実行委員会を編成した。

1989年（平成元年）

３月19日　ＯＢ会活性化：３月の会は、検討の結果、「ばどみんとんフェスティバル」として開催することとなった。
第１回ゲストを小島一平さんにお願いし、江藤さんのアイディアによるポスターも作り、開催をＰＲした。
OB/OG 54名、家族20人が参加し大成功を収めた。
前年の秋から準備を行い、江藤さんの柔軟な発想で、従来の我が部にはない異色のイベントとなった。

４月　第4回理事会開催
活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の定着化
・他大学ＯＢとの交流の模索（京大、一橋、関東学生他）
・40周年記念企画の準備開始
ＯＢ会名称は、片山先生のご意思により理事会に一任となったため、理事会案として、「駒羽会」を1990年（平成２年）40周年総会で提案し、決定することとした。
40周年準備として、9月に準備委員会を設置し、記録集発行、記念総会開催、名簿発行を企画・立案していくこととなった。

７月　京大戦の際、ＯＢ懇親会を一昨年に引き続き、三菱ガス化学長者丸研修所で開催、京大の方々に好評であった。

９月　事務局会開催
40周年準備実行委員会の委員長江藤さん、副委員長村田光二さんに就任をお願いすることとした。

11月　40周年準備委員会開催
記念誌編集委員森明さん、築地さん、名簿編集委員寶迫くん。記念誌は30周年誌以降の記録を整理、名簿は会員の異動をできるだけフォローすることとした。
また40周年記念のビデオを作成することとした。
記念総会は、山上会館か学士会館、翌年10月の土曜の午後開催とした。

1990年（平成２年）

３月　第２回ばどみんとんフェスティバルを、実行委員長小鷹さんで開催。
ゲストは、豊田さん紹介の元世界チャンピオン梅野尾（旧姓竹中）悦子さん、鈴木（旧姓相沢）マチ子さんペア。

４月　第５回理事会開催
40周年記念総会開催を10月、学士会館に決定。
活動方針・40周年記念企画の成功
・ＯＢ会員相互の親睦活動の定着化
40周年記念企画の内容を承認。記念総会での役員改選案を検討した。

５月　この頃、40周年記念誌編集で森明さんのご自宅にお邪魔し打合せた。私も事務方としてお手伝いし、記念誌発行が間に合うか心配したこともあったが、編集作業をきっちり鮮やかにまとめられた森明さんの手腕に感心した。

10月20日　40周年記念総会を学士会館で開催した。
出席者約100名、木村会長を再選、平松副会長を選任、清水さん以下16名の理事を承認。
ＯＢ会名称を満場一致で「駒羽会」（コマバカイ）に決定した。
記念誌・名簿を発行、40周年記念ビデオを会場で上映した。

11月　事務局会開催。
名簿担当　實迫君就任。
会報担当　壁矢君から中野君へ交替、
会計担当　原田（秀）君から後藤君へ交替。
次回ばどみんとんフェスティバルの後、監督交代（村田光二さんから壁矢和久さんへ）の記念パーティを開催することとした。

1991年（平成３年）

３月　第３回ばどみんとんフェスティバル開催
実行委員長上野さん
その後、監督交代記念パーティを開催、監督在任10年の村田さんに記念品を贈呈した。

４月　第６回理事会開催

1989年（平成元年）

３月19日　ＯＢ会活性化：３月の会は、検討の結果、「ばどみんとんフェスティバル」として開催することとなった。
第１回ゲストを小島一平さんにお願いし、江藤さんのアイディアによるポスターも作り、開催をＰＲした。
OB/OG 54名、家族20人が参加し大成功を収めた。
前年の秋から準備を行い、江藤さんの柔軟な発想で、従来の我が部にはない異色のイベントとなった。

４月　第4回理事会開催
活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の定着化
・他大学ＯＢとの交流の模索（京大、一橋、関東学生他）
・40周年記念企画の準備開始
ＯＢ会名称は、片山先生のご意思により理事会に一任となったため、理事会案として、「駒羽会」を1990年（平成２年）40周年総会で提案し、決定することとした。
40周年準備として、9月に準備委員会を設置し、記録集発行、記念総会開催、名簿発行を企画・立案していくこととなった。

７月　京大戦の際、ＯＢ懇親会を一昨年に引き続き、三菱ガス化学長者丸研修所で開催、京大の方々に好評であった。

９月　事務局会開催
40周年準備実行委員会の委員長江藤さん、副委員長村田光二さんに就任をお願いすることとした。

11月　40周年準備委員会開催
記念誌編集委員森明さん、築地さん、名簿編集委員寶迫くん。記念誌は30周年誌以降の記録を整理、名簿は会員の異動をできるだけフォローすることとした。
また40周年記念のビデオを作成することとした。
記念総会は、山上会館か学士会館、翌年10月の土曜の午後開催とした。

1990年（平成２年）

３月　第２回ばどみんとんフェスティバルを、実行委員長小鷹さんで開催。
ゲストは、豊田さん紹介の元世界チャンピオン梅野尾（旧姓竹中）悦子さん、鈴木（旧姓相沢）マチ子さんペア。

４月　第５回理事会開催
40周年記念総会開催を10月、学士会館に決定。
活動方針・40周年記念企画の成功
・ＯＢ会員相互の親睦活動の定着化
40周年記念企画の内容を承認。記念総会での役員改選案を検討した。

５月　この頃、40周年記念誌編集で森明さんのご自宅にお邪魔し打合せた。私も事務方としてお手伝いし、記念誌発行が間に合うか心配したこともあったが、編集作業をきっちり鮮やかにまとめられた森明さんの手腕に感心した。

10月20日　40周年記念総会を学士会館で開催した。
出席者約100名、木村会長を再選、平松副会長を選任、清水さん以下16名の理事を承認。
ＯＢ会名称を満場一致で「駒羽会」（コマバカイ）に決定した。
記念誌・名簿を発行、40周年記念ビデオを会場で上映した。

11月　事務局会開催。
名簿担当　實迫君就任。
会報担当　壁矢君から中野君へ交替、
会計担当　原田（秀）君から後藤君へ交替。
次回ばどみんとんフェスティバルの後、監督交代（村田光二さんから壁矢和久さんへ）の記念パーティを開催することとした。

1991年（平成３年）

３月　第３回ばどみんとんフェスティバル開催
実行委員長上野さん
その後、監督交代記念パーティを開催、監督在任10年の村田さんに記念品を贈呈した。

４月　第６回理事会開催

活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の充実
・現役への支援活動の充実

12月　関東学連ＯＢ・ＯＧ対抗戦を駒場第４体育館で開催
当日、以前から予定されていた停電があり、事前確認不足が判明。幸い、大事に至らず終了したが参加者にご迷惑を掛けることとなった。

12月９日　昭和34年入学木村武会長ご逝去（享年53歳）

1992年（平成４年）

３月　第４回ばどみんとんフェスティバル開催。
ゲスト筑波大学ＯＧ　谷藤千香さん（S62年インカレ優勝）

４月　第７回理事会開催
活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の援助
・現役への支援活動の充実
６月に臨時駒羽会総会開催を決定
分科会活動補助制度を決定

５月　京大45周年記念行事に出席

６月　臨時駒羽会総会を山上会館で開催
平松副会長を会長に選任、上野部長から三浦部長への交替の報告、故木村会長の追悼を行った。

９月　上野前部長の功績を称える会をホテルセンチュリーハイアットで開催。

1993年（平成５年）

３月　第５回ばどみんとんフェスティバル開催
これまで実行委員会方式により、何人かの実行委員を通じて参加者を募ってきたが、イベントとしてすっかり定着したことから、事務局小林が実行委員を担当することとなった。

４月　第８回理事会開催
活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の援助
・現役への支援活動の充実
決算が、ＯＢ会費集金状況悪化のため、赤字となった。
６月に臨時駒羽会総会を開催することを決定。平松会長海外勤務となっ

たため、会長代行を秋山敦男さんにお願いすることとなった。

６月　臨時駒羽会総会を学士会館で開催、秋山会長代行を会長に選任した。

11月　事務局会開催。会計担当を後藤くんから三島くんに交替。

12月31日　昭和37年入学宮地純樹様ご逝去。

1994年（平成６年）

３月　第６回ばどみんとんフェスティバル開催

４月　第９回理事会開催

活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の援助

・現役への支援活動の充実

駒羽会規約の細則、再入会細則・会員慶弔細則を決定した。

７月27日　名誉会員横山正二様ご逝去（享年81歳）

1995年（平成７年）

３月　第７回ばどみんとんフェスティバル開催

４月　第10回理事会開催

活動方針・ＯＢ会員相互の親睦活動の援助

・現役への支援活動の充実

その他、会員資格の検討、資格停止会員等につき検討。

京大戦第１日目のレセプション開催についての是非を検討。

45周年開催について、理事改選、規約改訂の検討を行った。

1985年（昭和60年）の総会で規約を定め、会費収集も組織化して10年が経過したが、この頃から会費滞納者も少しづつ増えてきて、ＯＢ会として会員へのサービスの在り方などをどう考えていくかが課題となってきた。理事の人数を1.5倍にし、中堅クラスの方に多く参画していただくことで、会の運営に新鮮な発想を持ちこもうと腐心した時期である。

11月18日　45周年記念総会を小田急百貨店別館ハルク８階中華料理「豪華」で開催した。出席者約90名、金丸会長を選任、清水さん以下21名の理事を承認。規約改正（再入会条項、慶弔条項他の改正）を承認。

1996年（平成８年）

２月３日　昭和29年入学北沢巽様ご逝去。

３月　第８回ばどみんとんフェスティバル開催
三洋電機茂木くんの紹介で、三洋電機バドミントンチームの山田裕美選手、村上直美選手、喜多努コーチがゲストで参加。

４月　事務局会開催
名簿担当　前年秋に竇迫君から佐藤君に交替。
会計担当　三島君から米永君に交替。
会報担当　中野君から伊藤君に交替。
第11回理事会開催
資格停止会員、永久会員の検討、赤門カード事業への協力を検討した。

1997年（平成９年）

３月４日　片山信夫名誉会長ご逝去（享年87歳）

３月　第９回ばどみんとんフェスティバル開催

４月　第12回理事会開催
片山先生を偲ぶ会の開催を決定。
会員資格につき、当面「終身［仮称］会員」の取扱い決定。
今後、永久会員の取扱いと合わせて会員資格につき継続検討し、名簿の記載方法も研究することとした。

６月６日　学士会館で「片山先生を偲ぶ会」を開催。
奥様をお迎えして、34名の方にご出席をいただき、片山先生のご業績・思い出を振り返った。

７月　明治大学バドミントン部創部50周年記念祝賀会に、金丸会長、三浦部長が出席。頂いた記念誌と共に、３年後の東大バドミントン部の創部50周年に向けて大いに参考となった。

10月　シングルス選手権開催。ダブルス選手権と合わせ、今後、両選手権の予算10万円を現役への補助とし、1985年以来87万円で据え置いてきた現役への補助を97万円に増額することとした。
従って、選手権参加者から、シャトル代相当の参加費1000円を頂戴することとした。

10月　　法政大学バドミントン部創部50周年記念祝賀会に、金丸会長、三浦部長が出席した。

11月29日　　昭和28年入学　理事上林邦雄様ご逝去。

1998年（平成10年）

３月　　第10回ばどみんとんフェスティバル開催
三洋電機茂木くんの紹介で、再び三洋電機バドミントンチームが来訪。
井田貴子選手（全日本シングルスチャンピオン)、増茂孝枝選手（全日本ダブルスチャンピオン)、喜多努コーチがゲストで参加。ＯＢの先田・後藤ペアが、井田・増茂ペアから１セットを奪った。
ただし、残念ながら体育館の照明が故障のため、薄暗い中での試合となり、大変申し訳無いことをした。

４月　　事務局会開催。会計担当、米永君から上等君に交替。
会報担当、伊藤君から吉野君に交替。
第13回理事会開催
会員資格につき、継続検討した。
会への一定の貢献、一定の会費納入のある方を、「永久会員」とすることで今後具体的な取扱いを検討することとした。
また、連絡がつかず、会費も長期滞納となっている方を、資格停止会員とすることとした。
名簿は２部構成とし、前段を住所も入った名簿（アクティブなもの）とし、退会会員・資格停止会員は載せない、後段は卒部者を対象とし、名前・入学年度のみのＯＢ名簿（歴史記録用）とすることとした。
2000年（平成12年）の創部50周年に向け、準備委員会を発足させることとした。

10月　　京都大学創部50周年記念式典に、上野さん、清水さん、深田さん、秋山さん、金丸会長、三浦部長以下、合計15名が出席、懇親を深めた。

12月５日　　昭和41年入学小吹哲郎様ご逝去。

1999年（平成11年）

３月　第11回ばどみんとんフェスティバル開催

４月　第14回理事会開催

会員資格につき、永久会員（当面、終身［仮称］会員・物故会員）、退会会員、資格停止会員、名誉会員、一般会員とすることとした。

50周年記念行事につき、記念誌の発行、記念総会・祝賀会の開催、諸記録の整理・収集、名簿の総点検・保存版の発行、駒羽会ホームページの立ち上げ、などの骨子を決定した。

６月　50周年第１回準備委員会を開催、記念誌の発行、記念総会の開催に向け、それぞれに実行委員を決め、活動を開始した。

私も、中堅クラスのＯＢとして、上下の方のつなぎ役として動ける年代となったこと、丁度自宅でパソコンを購入するタイミングで、電子メールを使って編集作業を行えば、豊田さんが30周年記念誌を編集された頃よりは労力が少なかろうと考えて、記念誌編集の取りまとめを担当することとした。

2000年（平成12年）

２月　昭和33年入学秋山敦男様（元監督、元ＯＢ会長）ご逝去（享年62才）

３月　第12回ばどみんとんフェスティバル開催

京都大学ＯＢ・ＯＧの方の出席も定着した。

４月　事務局会開催。会計担当、上等君から木村君に交替。

第15回理事会開催

会員資格を、永久会員、終身会員、資格停止会員、住所不明会員に分類し、それぞれに会員資格の検討・整理を行って、10月開催予定の50周年記念総会の場で規約を確定することとした。

50周年記念行事の活動状況につき、確認。

故秋山敦男さんを偲ぶ会を６月にホテルグランドパレスで開催することを決定。

６月　故秋山敦男さんを偲ぶ会を開催

９月　臨時理事会開催（総会・祝賀会準備）

10月14日　50周年総会・祝賀会をホテルグランドパレスにて開催。

●追　　悼●

片山先生を悼む

昭和25年入学　　上野　正

この３月はじめに片山先生がお亡くなりになりました。

先生は1950年に東大バドミントン部ができてまもなく部長をおひきうけ下さり、その後約20年にわたってバドミントン部のためにいろいろと御尽力下さいました。恒例のコンパに、京大戦など多くの試合に、いくつもの記念行事にもおいで下さり、美しい白髪と血色のよい温顔で、現役の部員やＯＢ達を優しく見守って下さいました。

御定年で部長をおやめになったあとも、色々の機会にお出掛け下さり、部員たちを快くお迎え下さったので、白山のお宅を永年にわたって大勢の部員がお訪ねしました。

1950年というと、東大が今の形で(新制の東大として)発足してから２年目で、なかなか活気に満ちていました。当時バドミントンをやる人はごくわずかでしたが片山先生はご経験があるということで、先生のセミナーのクラスの早津秀彦君と、これは翌1951年だったと思いますが、先生の研究室に部長就任をお願いにあがりました。今の先端研の建物はもとは宇宙航空研究所で、先生の地学の研究所はそこに間借中でした。先生は第二次世界大戦中は地質の調査でインドネシアに行かれ、そこでバドミントンを始められた。ジャングルで高い木に囲まれた一画を切り開くと、そこはあまり風が来ないので良い屋外コートができる。それでインドネシアでは大勢の人がバドミントンをやっていて、国技にもなっている。

夕方の弱い西日の入る橙色の光の中でそんな話をして下さいました。

出来たての部は新入生歓迎、年末などと同窓会館でよくコンパをやり、先生も必ず御出席になり、よく歌われ、話もして下さいました。当時の部には、まあ青天井の下での活気のようなものがあって、先生は時々、何か野武士の集まりのような雰囲気があるね、などとほめて下さったものです。

私は今から30年前には、先生と同じ駒場で数学教室に居り、秋にニューヨークに出張しました。２年ほどして帰ってくると、翌春には先生が御定年ということで、あとをお引受けしました。このころ、今は亡き木村武君のお世話でＯＢ会の会合が銀座のサッポロビールの本社ビルで開かれたことを覚えています。先生はこれから九州大学にゆくので、３年程ハカチョンというものをやって来ます、などとおっしゃっておいででした。

さて、それから又20年ほどたった今から５年前には、今度は私が定年、今の三浦登

さんが部長を引き受けて下さいました。私はこの前後に、学生時代から数学の方で特に親しく接して来た先生方や、近い親戚を次々に失って、若い頃から自分のなかに拡がっていた世界の一角が狭められたような気がしました。この３月に先生がお亡くなりになったのは、信州大学で第二の定年を迎える所でした。

考えてみると、先生とはここ数年の間にも何回かお目にかかる機会に恵まれたのですが、ややおやせになっただろうかという位にしか感じられず、(本当は有り得ない筈のことなのですが)何となく何時までででもお元気なままにお目にかかれるかのような気分で来てしまいました。

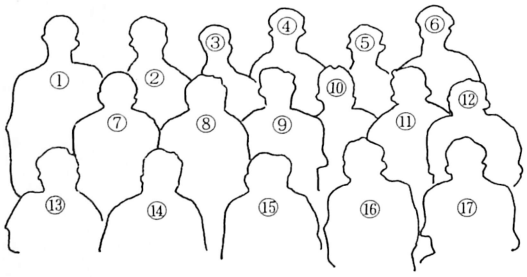
今回の御逝去にあたって、これまで無為のうちにご無沙汰してきたことが悔やまれます。

改めて、長い間の先生のお心遣いに感謝し、先生と過した日々を偲んで、先生のご冥福を祈りたいと思います。

(1997年５月記、駒羽会報での追悼文を再掲載)



1959 年６月
国公立（東工大）後
片山先生を囲んで



①野口　②鈴木　③金丸
④古沢　⑤山元　⑥岡野
⑦橋爪　⑧石川　⑨渡辺
⑩藤原　⑪比田　⑫新田
⑬遠藤　⑭篠田　⑮小原
⑯片山先生　⑰森(健)

片山先生と駒場の思い出

昭和25年入学　　早津　秀彦

我々のバドミントン部が生誕半世紀を迎えた。弱々しい発足当時の組織からたくましき壮年に育ったわけで嬉しいことである。これも歴代部員の活動と努力の成果と言えよう。そして初期の頃から若い学生部員の我々を励ましお世話下さった片山信夫先生にここで感謝の意を表したい。

私が駒場に入学したのは昭和25年のことだった。当時は第二次大戦後まだ四年余りで東京には大空襲の跡があちこちに見られ、壊れたビルの取り壊し、道路の整備や新しい建物の建設でごたごたしており、春風に砂塵舞い上がるの毎日だった。渋谷もハチ公はいたが青山への通りは空き地が目立ち、道玄坂も低い建物が続いていたようだ。地下鉄は渋谷と浅草間の一路線しかなく、通学の山手線の古い車内では、白衣の戦傷軍人達の淋しげなアコーデオン演奏によく出会った。駒場の正門から駅の方を眺めると遠くにネオンサインが幾つかある程度で視野が広く開けて、ある冬の晴れた夜に、東京では滅多にしか見れないカノープス星を南の地平線上すれすれに見て喜んだこともあった。旧制一高からの駒場寮は古くて暗かったが、駒場の寮から渋谷への道もまた夜は暗く、今日からすれば駒場村といえよう。でも大学内は青春を学問にまた政治運動に捧げる若さ活気であふれていた。

当時の校内には空地が多く、私が選択学習した地学のゼミは新しく建てられたバラックのような地学教室研究室で行なわれたが、その先生が片山先生だった。大体地学地質学の方々は、職業上山歩きや湖探検で鍛えた健康な人が多く、人数も少なかったので授業後に教員と学生が草野球をしたことを思い出す。さて入学してバドミントン部に入っていた私が放課後の練習のためにラケットを持って地学のゼミに出席したある日、先生がそのラケットを見られて、私に珍しい物を持っているねと声をかけられたのが片山先生のその後の長い御苦労の始まりだった。日本は昭和17～20年に石油資源目的で当時の蘭領インドネシアを占領し、多くの技術者が油田の修理や資源調査のために現地に渡ったが、若き日の片山氏もその一員だったようだ。現地の人達が当時日本ではまだ知られていないこのゲームに興ずるのを目にしてそれを習い、帰国後日本で始めたのが、わが国のバドミントンの一つの元となっている。こうして先生の東大バドミントン部長時代が始まる。中年の運動不足を感じられる頃だったと思うが、先生御自身もよく体育館で我々と一緒に汗を流された。又時々ある学生のコンパにもよく参加され、我々若者達の失礼にも寛容で肩を組んで一緒に踊られて、流石旧制一高の伝統を感じさせられた。さて先生は小石川植物園の隣りの閑静なお宅に住まわれ

ていて我々学生は正月によく年始の挨拶に伺ったが、昭和30年頃のこと、その前年に行かれた海外旅行のスライド写真で欧州の景色を説明していただいたのが、思い出される。海外旅行などまだ珍しい頃のことだった。

私は本郷に進学し、その後ＯＢになってからもバドミントン部とは交流を続けてきたが、昭和36年に海外に出てからは次第に縁が遠くなり、遂にそこで定年になってしまった。時々送られてくる部報は面白く読ませてもらって感謝している。なお私の現役の時は部報は未だ無かった。ある年に休暇で帰国し先生のお宅に伺った時、先生が今の若い人達は書いている内容が昔と違うよと言われてにこにこしながら見せて下さった部報は漫画が豊富であつたので、近頃の学生は多芸ですねと二人で語りあった。

晩年の先生は、御家庭での不幸と御自身の病気にも拘らず可成りお元気だったようだが、三年前故人となられた。ここに心から御冥福をお祈りする。また長年にわたり先生を支え、我々をお世話下さった奥様（片山敏子さん）は小石川の自宅でお元気であるのであらためて厚くお礼を申し上げたい。



1964年６月　国公立団体優勝後

短編集『ヘソキチの独り言』から

初代部長　片山　信夫

（故片山先生が執筆された短編集『ヘソキチの独り言』から「はじめに」と「銀色の道」を掲載させていただきました。故片山先生のお人柄を偲んでいただければと思います。：編集委員会）

はじめに

「ムラサキノ・ヘソキチ」というのは、わたくしが生まれると間もなく、わたくしに付けられたあだ名である。名づけ親は、当時遊学のためわたくし達の家に寄宿していた、わたくしの従兄で、あだ名の所以は、わたくしのお臍の色だったそうである。もしかすると、わたくしの実名が届けられるよりも、前からあるあだ名というわけである。わたくしは、少年のころ従兄からその話しを聞いて初めて、自分に生まれながらのあだ名があることをしらされたが、その後はだれもそのあだ名で呼んでくれる人はいなかった。

学生のころ、小さな同人雑誌に投書するときに当たり、何かペンネームが欲しくなったとき、ふと思いついたのが、「ムラサキノ・ヘソキチ」であった。その名で二三編の短編を発表したが、それきりで、その後の書き物は専ら実名で通してきた。

この度、この文集を著すに当たって、実名を名乗らずに、敢えて「ムラサキノ・ヘソキチ」を名乗ったのは、今までに実名で書いてきたものの内容と、この文集の内容とが、あまりにもかけ離れているからである。しかし、「ムラサキノ・ヘソキチ」は決して偽名ではない。すでに述べたように、それはもしかしたら実名よりも早くに名づけられたあだ名だからである。

この文集は、全くお互いに関係のない、三つの部分から成っている。書き下ろした順序からいえば、第三部が一番古く、わたくしがまだ壮年のころの作で、その後ずっと暖めていたものである。第二部は、脳梗塞の軽い発作から回復した後で、永年連れ添った女房に、今まで話してなかった思いで話しを、うたにかこつけて、語ってみたくなったとき、記したものである。第一部は、「ムラサキノ・ヘソキチ」もそろそろ宿題を片付けるときだと思い、書き出したものである。

第一部に就いては、実名のわたくしを知って下さる方々が、少しおかしいのではないかと思われる心配があるので、執筆に当たり参考にした主な文献を掲げておく。

水野弘元‥仏教要語の基礎知識（春秋社）
伊藤正男‥脳のメカニズム（岩波書店）

特集　脳と心（日経サイエンス、1992/2）

この文集は、いわば「ムラサキノ・ヘソキチ」の独り言である。1910年に生まれて、20世紀を生き長らえた、一人の男の独り言である。

銀色の道

明るい夜明けの近いことをうたっている。しかし、このうたに接する度に、わたくしは夜明けを目前にして散っていった、二人の異郷の友を思わずにはいられない。

一人はアリと呼び、一人はラスートと呼び、共にバンドンの役所の主任技師であった。わたくしが、バンドンの背後にあるチアテル温泉のカリ塩鉱床に着目して、その開発を企てたとき、二人はそれぞれの担当分野で貢献著しかったので、ジャワの軍政当局から表彰されたこともあった。

アリはジャワ人で、回教徒ではあるが戒律にこちこちではなくて、酒も勧められれば適当にたしなむ方であった。戦前からの独立運動の志士で、そのころからの情報網との繋がりも保たれていたようである。役所の行事のときなど、所員一同の纏め役を任されていたが、しつかりとした統率ぶりであった。

ラスートは、セレベス島の北部メナドの出身である。メナド人は、インドネシアには珍しくキリスト教徒のせいもあって、戦前のオランダ時代には中間管理職などとして重宝がられたらしい。そのため、一般のジャワ人からは特殊な目で見られがちであった。しかし、気性は日本人に似たところがあり、ラスートの仕草などを見ていると、日本人と見違えかねないこともあった。

西部ジャワに出張のため、ラスートと同行したときのことである。途中の宿で晩飯をすまし、各自の部屋で寛いでいたとき、ノックしてラスートがひとりで入ってきた。仕事の打合せのためかと思ったが、どうも様子が違う。個人的なことで話があるという。詳しい問答は一々覚えていないが、要するに、従来のしがらみを断ち切って、これからはインドネシアの独立を目指して努力するというのである。ぎらぎらとしたその眼差しに、わたくしは彼の覚悟のほどを知り、ラスートの手を固く握ったのであった。

終戦になって、われわれは集団で山中の農園に立て籠もることとなり、後事を託すために二人の私宅を訪れたことがある。二人とも中流の健全な家庭を営んでいる様子で、状況の変化に対する覚悟はすでにしっかりとしていたように見受けた。アリは、間もなく独立軍の参謀として活躍していることを、風の便りに聞いた。その後は連絡もつかないまま、終戦から一年近くして、わたくしたちは帰国した。

悲報はX君によってもたらされた。X君は現地除隊した後バンドンの役所に勤務し、

終戦後はジャワに残留する道をえらんだ。X君の報告は次のようなものであった。

アリは、スラカルタ付近の陣営で、オランダ奇襲部隊の攻撃を受けて戦死した。

ラスートは、同じく奇襲部隊によって、中部ジャワの山中に拉致されたまま、行方不明となった。

二人とも、インドネシアの独立の夜明けを目前にして散っていったのである。

片山先生のご経歴

1910（明治43年）１月17日　東京にてお生まれ
1930（昭和５年）第一高等学校ご卒業
1933（昭和８年）東京帝国大学理学部鉱物学科ご卒業
直ちに同学部助手
1938（昭和13年）同学部講師
1939（昭和14年）商工省地質調査所に商工技官として勤務
1943（昭和18年）７月　陸軍技師としてインドネシア、バンドン地質調査勤務赴任中にバドミントンを楽しまれた
1946（昭和21年）６月　ご帰国後再び地質調査所にご勤務
1948（昭和23年）理学博士の学位を取得（主論文：Daiton Sulphur）
1949（昭和24年）６月　東京大学教養学部教授として駒場に赴任
1950（昭和25年）初代運動会バドミントン部部長ご就任
その後20年に亘り部長としてご指導を頂いた。
この間電通大講師、大学院数物系研究科教官、
通産省地質調査所調査員、農学部講師などを併任
1970（昭和45年）３月　東京大学定年退官
44年より併任されていた九州大学教授に配置換
５月には東京大学名誉教授
1973（昭和48年）３月　九州大学定年退官
その後も各種役職をこなされながら、お庭の畑仕事等に、晴耕雨読の悠々自適のご生活
1982（昭和57年）勲二等　瑞宝章叙勲
1987（昭和62年）この年まで１月４日片山先生宅での新年会
この年軽い脳梗塞、翌年からは駒羽会の新年会に衣換
その後、回復され駒羽会各種行事にご参加頂いた。
1995年の45周年記念総会が最後のご出席となった。
1997（平成９年）３月４日　ご逝去
戒名「理證院地文誠信居士」

片山先生宅　年始



1964年



1974年



1972年



1980年

30周年記念誌打合せ



1980年

片山先生喜寿のお祝い会

1986年７月７日（ホテルセンチュリーハイアット）

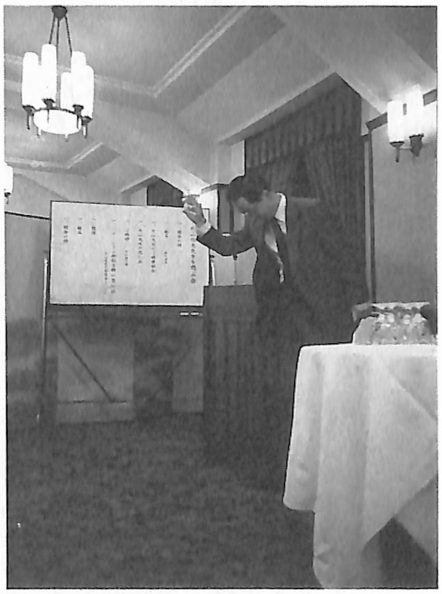




片山先生を偲ぶ会

1997年６月６日（学士会館）







横山正二様追悼文

昭和37年入学　　鈴木　明夫

駒羽会名誉会員 横山正二様がご逝去になったのは平成６年７月27日、享年81歳でした。

横山正二様は駒羽会員 横山直也氏の御父君であります。そして横山正二様に名誉会員となって頂いた経緯はおよそ下記のとおりであります。

昭和38年横山直也氏が東大バドミントン部に入部してきました。当初、彼はあまり熱心な部員とはいえませんでしたが、先輩との麻雀には熱心で、練習後の麻雀のため練習にでてくるようなこともありました。東大前の雀荘はもとより横山家も雀荘としてよく使われました。横山家では息子の友達に嫌な顔をせずに使わせてくれたのです。そうこうしているうちに、直也氏は次第に練習熱心な部員に変身して、２年生になった時にはレギュラーの座をつかんでいました。そうなると、横山家では試合には、おばあさまも含め家族全員で彼の応援に来るようになり、それがいつしか彼の応援に止まらず東大バドミントン部全体の応援団となった訳です。応援団というよりも家族ぐるみの後援会といった方が良いような状態でありました。雀荘「横山」は前にも増して繁盛し、夜食、朝食を頂いて駒場あるいは本郷へと通学する部員もおりました。中には、麻雀抜きで二食つきの宿泊所として利用するものも現れるようになり、地方出身者にとっては親代わりをつとめて頂くようになりました。これは、直也氏が卒業した後まで続きました。

昭和42年直也氏が卒業されたのを機に今後も末永くお付き合いを願いたいということで、名誉会員としてＯＢ会にご入会をお願いしたところ、快くご承諾いただき、さらに親身になって東大バドミントン部、ＯＢ会を応援していただきました。その一つは横山杯というユニークな賞をつくり部員の励みとしてくださいました。これは国公立戦のシングルスにおいて東大生が優勝した時にかぎりトロフィを作り授与してくれたのです。この賞は現役部員が横山家に出入りしている間中続いておりました。

思えば当時、横山正二様は国際水産（株）の常務取締役という要職にあり御多忙にもかかわらず、夜遅くまで部員の相手をしたり、休日には試合の応援にもお越し下さいました。

このような場を提供していただいたことが、部のチームワーク形成にどれだけ貢献していたかははかり知ることができないといっても言い過ぎではないでしょう。

東大バドミントン部が50周年を迎え、今後21世紀に向けて飛躍をしようという今日、ここに横山正二様が生前、東大バドミントン部ならびに駒羽会に寄せていただきましたご厚情に改めて感謝の意を表したいと存じます。





横山正二様　快気祝

1991年９月６日

上林邦雄さんの思い出

昭和28年入学　　杉原　健児

上林邦雄さんと私が同期生で通っていた福岡県立小倉高等学校では、２年生後半から、大学受験のための実力試験が２か月に１回程の頻度で行われ、全員の点数と序列が公表されていた。その試験は、浪人生も加わっての500人規模のものだったが、その中で彼の成績はいつもトップだったように記憶している。その頃の彼は、先生からもお手本として皆に紹介され、私のような凡人には近づき難い神のような存在であった。

そんな彼と、大学のバドミントン部で一緒になったのには驚いた。私は大学でも勉強に悩まされ、コンプレックス病に苦しんでいたが、時々私のすぐれている面を挙げて励ましてくれたのには、勇気づけられ、彼の優しさをおぼえた。また、寮内でのいろいろな議論に同席し、彼の論理的・倫理的考え方、真摯な態度といった、彼の勉強以外での人間性にも感銘した。

お互い社会人になってかなり経ったある日、彼が自分の家を建てたいので相談にのって欲しいと、私を訪ねて来た。私は建築設計事務所に勤めていたので、彼の要望を叶えられるであろう一人の設計技師を紹介した。私も、その設計の打合せに何度か同席したが、彼の奥さんや娘さんへの思いやりや心遣いの深さに大いに感銘を受けた。

北九州市の応援団としての“ふるさと北九州を考える会”は、昭和63年（1988年）11月にスタートしたが、彼は第1回の会合から出席して、北九州市活性化のため数々の有益な提案をはじめ、色々とこまめなお世話をされた。

一昨年の年末、この北九州の会が転機を迎えるとき、私が困っていることを察し、彼は病身でありながら電話をかけてきて、いろいろと有益なアドバイスをして下さった。その時は、こんなに早くこの世を去られるとは夢にも思っていなかったが、今考えて見ると、最後まで面倒をみようという、彼の思いやりの姿勢に頭が下がる思いである。

秀才であり、卓抜したビジネスマンでありながら、思いやりに満ちた彼であったが、その彼の余りにも早い逝去は、本当に残念で堪らない。心からご冥福をお祈りしたい。

昭和28年入学　駒羽会理事　上林邦雄様は、平成9年11月29日ご逝去されました。慎んで哀悼の意を表します。

（1998年５月記、駒羽会報での追悼文を再掲載）

北沢　巽君を悼む

昭和29年入学　　西本　正

「東大バドミントン部同期の北沢の娘ですが…」「ン？」「父の生前親しくしていただいた方々にご連絡をしたいと思いまして…」「嗚呼！」　1996年２月３日の夜、娘さんからの不意の電話だった。

前年の年賀状には「２月に還暦　自適に入ります」とだけ書かれていて、その年は大学卒業以来欠かしたことのない年賀状が遂に来ず、律儀な彼がどうしたのかな、と案じていたところだった。前年秋、駒羽会名簿更新のため北沢君に確認の電話をかけた際にも奥さんしか応対されなかったことも思い出された。

北沢　巽（ユズル）君、卒業とともに武田薬品に入社、大阪に赴任して以来38年間、ついぞ会う機会がなく文通のみだった君の面影は若かりし在学当時のまま鮮明に脳裏に焼きついている。昭和29年４月、お互いに初めて親元を離れて上京、駒場寮バドミントン部屋で１年半寝食を共にし、青春の最も多感な一時期を過ごしたあの頃は今でも一つ一つなつかしく想い出される。

当時は戦後の復興未だ途上で、食糧難、学生運動、マージャン、バイトが寮生活のキーワードだった。愛媛は松山北高出身の俊秀北沢君は理１で、素晴らしく頭がキレ、醒めていてニヒルな感じがある一方、シャイで地方出の素朴な暖かさを持っていた。数学オンチの私が初歩的な問題の解き方を聞いても、バカにすることなく、かと云って最後まで解いて見せるわけでもなく、ヒントを教えてあとは自分で考えろ、といったことが何度かあったように覚えている。青い議論もよくやった。激しく対立したところで、北沢のダジャレが出て収まるのが通例だった。同期の須藤・石本・本間のように高校運動部のレギュラー経験者でない我々同室の素人達（北沢・深田・小野寺・西本）は、読書や議論に疲れると深夜に第一体育館の照明をつけてバドミントンに打ち興じたことも思い出のひとつである。

青春の思い出とともに北沢君は逝ってしまった。同期では初めてだ。武田薬品で研究一筋、定年を迎えてこれから悠々第二の人生を楽しむ時期に、惜しまれてならない。

遥かにご冥福を祈るとともに、奥様はじめ御遺族に心から哀悼の意を表したい。

（1996年５月記、駒羽会報での追悼文を再掲載）

弔　辞

昭和30年入学　　橋本　章

秋山敦男君

君との付き合いは、昭和30年、1955年、ともに東京大学に入学、即、東大バドミントン部に入部して以来であるから、45年の永きにわたります。

今回の逝去は全く突然のことであっただけに、君に対する弔辞と云われても、考えがまとまらない状態のまま、今、ここに立っています。

君は栄光学園を卒業し、入学した大学時代においても、運動部、教会と多忙でありながら、優秀な成績で法学部を卒業し、三菱商事に入社、商社マンとして、主として金属部門合金鉄グループにおいて業務に精励し、海外勤務もヨハネスブルグ、リオデジャネイロ、モスコーと広範囲にわたり活躍し、さらに監査役として経営の一翼を担うなど、充実した企業人生活を送られました。

昨年６月非常勤の顧問になるや、第二の人生を稔りあるものとすべく、ゴルフやコントラクトブリッジに加え、改めて神学の勉強にいそしむなど、相変わらずの忙しさで毎日を過ごしていました。

家庭においては、宏美夫人、二人の令嬢、さらに二人のお孫さんに恵まれ、特に孫の話となると、良きおじいさん振りをわれわれにも語っていたのが印象に残っています。

しかし、神は、君の地上における生活に多くの時を与えなかったことは、われわれにとって残念でなりません。

今、君とバドミントンとの関わりを振り返ってみたいと思います。

栄光学園時代から運動神経に優れ、バドミントンの名選手であった君は、入学後、直ちにレギュラーとして対外試合にその技倆を示したのは当然として、創設わずか５年の東大バドミントン部を、真の運動部たらしめるべく、その骨格作りに努力しました。

トレーニング方法の修得、合宿のスタート、部報の創刊、部財政の確立など、いずれも今日では当然のことが、当時は手探りで試行錯誤を重ねながら実行していったもので、その実現には、駒場、本郷を通してキャプテンを務めた君のリーダーシップに負うところが大きかったと思います。

在学中チームとしての戦績は振るわず、関東大学リーグの３部に終始したことは心残りでしたが、国公立大学戦、京大との定期戦、さらには４年時にスタートした七帝戦など、名プレーヤー振りは、今も強く印象に残っています。

ともすれば、同好会的になりがちな風潮にあって終始一貫運動部としての姿勢を堅持、強調したことも特筆すべきでしょう。その点に君のよい意味での頑固さがよく表れているといえます。

君は、大学卒業後も、三菱商事バドミントン部の一員としてプレーを続け、特に後輩の平松と組んだダブルスでは、東京都実業団リーグにおいて、四年間無敵という素晴らしい記録を残したほどです。

またＯＢとして実戦で現役の若手をしごくのを楽しみにしていました。

平成４年、54歳のとき、社内大会でプレー中、アキレス腱を切断、ついに競技生活を断念するにいたったことは、極めて残念であると繰り返し言うほど、実戦に執着を持っていました。

卒業後、東大バドミントン部の監督を４年、さらにＯＢ会の会長を長期間務めるなど、社会人としての激務の中で、献身的な努力をしたことは、部に対する愛着は当然として、先輩後輩を問わず、君に寄せられた信頼の厚さを物語るものであります。

また、部に対する愛情がひと際強かっただけに、後輩に対する苦言は司馬先輩と並び、真に手厳しいものがあり、横にいるわれわれがはらはらしたことも再三ありました。

しかしながらその厳しさの中には、常に愛情と思いやりがあったことは、叱られた後輩達から、今なお非常に慕われていることが如実に示しています。

今日、東大バドミントン部のＯＢ会である駒羽会が和気あいあいの中にも、良き厳しさを持ちつつ発展している原動力は、創設時の諸先輩のご努力、恩情もさることながら、君の力によるところが大きいといっても誉め過ぎではないでしょう。

私は、大学に入ってからバドミントンを始めたもので、選手として、マネージャーとして、同期生として、遊び仲間として、実に多くの時間を、君と過ごしたことを思い出します。

当時田浦にあった君の母校に、一緒にバドミントンの指導に行ったこと、鹿島田の教会も訪問しました。

もちろん、お宅にもお邪魔し、ご両親から歓待を受けました。

敬虔なカトリック信者である君に対し、駆け出しのプロテスタントである私が吹っ掛ける議論に、「それはなあ、橋本」と、ちょっと口をとがらせながら、真摯な応酬をされたことも今は懐かしい思い出となりました。

君と同時にバドミントン部に入部し、部生活を４年間まっとうした仲間が７人います。

秋山、相澤、角川、原、宗像、森、そして私です。１学年で７人も終わりまで活動することは極めて珍しいことですが、その結束は卒業後40年余りを経た今日でも固く、事あるごとに集まり、遊び、語り合ってきました。そしてその中心に常に君が居たのです

われわれはバドミントンを中心として、あるいはダシにして、実によく遊びました。特にトランプ遊びは、君が持ち込んだコパックやマリッジにはじまり、ノートランプ、コントラクトブリッジに至るまで、よく飽きもせず、部室や合宿で遊んだもので、その縁は切れず今でも月一回当時のメンバーを中心として、ブリッジの集いをやっているほどです。

しかし、人一倍頑健な君を最初に天国に送るとは、想像だにしなかったことです。

東大バドミントン部は今年創部50周年を迎えます。その記念誌の原稿執筆のため、当時の記憶を呼び戻し、記事の正確を期そうと７人が集まることにし、その日を２月15日と決めました。しかし、その日は君の入院日となり、集まりに君の姿はなく、残る６人で、君の病状を心配しながら話し合う、淋しい会合となりました。

２月12日、今日からわずか２週間前、君からの電話で、第五頚椎の異常を治療するため、15日入院、17日手術予定と告げられ、全く驚きました。

首や肩が痛いとは云っていたものの、ゴルフはやる、ブリッジの会合は欠かさず出席していましたから、にわかに信じられませんでした。

入院の前日、三菱クラブで、私は君と会い、われわれの学生時代の記録の整理と総括をしました。そのとき君の書いたメモを今私は手に持っています。そのメモの一項に、同期７人の結束の固さと今日までの継続を「自負」という言葉で記しています。

病状の説明は、持ち前の気丈さからか、淡々としたものでしたが、別れ際に「ガンかも知れぬ。覚悟はしている。」と云いました。そして、奥様と落ち合って、出て行ったのです。

入院、手術後、病院を訪問するも、面会は叶わず、奥様はじめ、皆の心配するなか、26日早朝、突然の逝去に至ったのです。

神はその賞でし者を早く御許に召されました。

今残された君の愛した奥様をはじめご家族の方々、そして今日はこの席に連なり、君との関わりを、様々な形で、あらためて噛みしめている者たちにとって、君との早き別れは、真に耐え難いものがあります。

われわれの記憶の中には、仕事や家庭における君の姿とは別に、バドミントンをプ

レーする君、ブリッジに興ずる君、議論に熱中する君、そして皆に敬愛された君の姿が、ずっと生き続けると思います。

今思うと、君は実にいろいろなものを与えてくれたと心から感謝しています。

われわれも、いずれ地上の生活に別れを告げます。

その時、君と再会できるのを楽しみにしています。

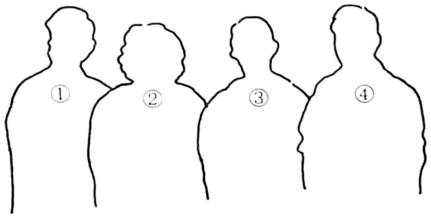
平成12年２月28日

東大バドミントン部ＯＢ会である

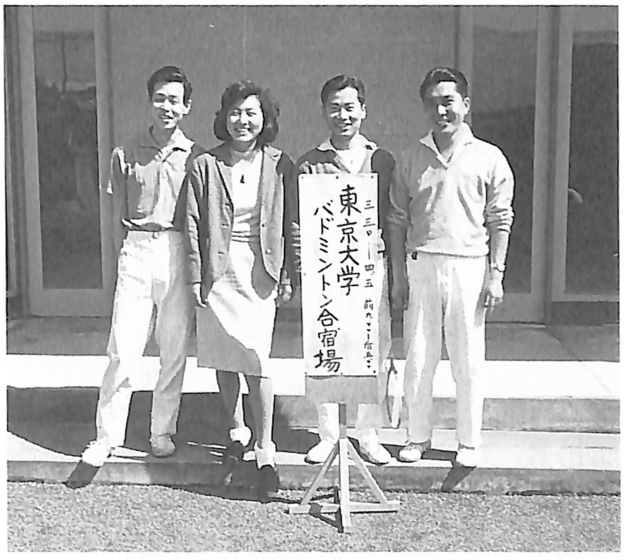
駒羽会の一員として

橋本　章

1964 年　春合宿（吉原）

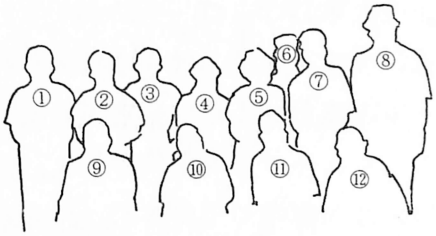


①金丸　②木村の妹 美香子
③秋山　④森(邦)





1998 年 10 月　駒羽会ゴルフ



①浅野　②豊田　③森　④清水夫人
⑤秋山夫人　⑥長谷川　⑦金丸
⑧平松　⑨川上　⑩秋山　⑪清水
⑫足達

秋山メモ

（"12.2.14 入院前日、本人から、病床に
　持ってきたもの

新入部員勧誘

春の合宿（3泊4日）　日数（4泊）
3回、4　① 女子マネアルバイト
　② 疾病の発症

部報

合宿前のトレーニング

財政改善（音楽会）

インカレ（参加 — 3年ぶりに）

七帝戦

① 1年 秋
　横浜
② 4年 春ナ戦
③ キャプテンの行動と
　発言の違さ
　オーダーの書き直し
④ 4年 秋 ケガ、1ヒビ3
⑤ 4年春 大大
　学 事件
　第4年のルール化
⑥ 2年冬
　司馬さんと有馬さん訪問
　痛飲

OB

- 34 口公立 — 安保斗争　21と正さん左、
- カントク — way（木村家）（馬場の思い出）
- 三菱商事（平松とのペア　39〜43年　実業団リーグ全勝
  平成4　社内大会でアキレス腱切断。

ツーテンビック　カナスク
ナポレオン　スパーク
ノートラップ
→ コルトラクト、ブリッジ

① 53の3社
　戦績＝バドの脚　残るべきのはず…
　入学の春 2部→3部。
② 運動部としての骨格作った。
③ 7人が4年間 終りまで活動。
　今日まで色々な形で継続 → OB

自負。

故木村武さん追悼文

昭和35年入学　　平松　由紀夫

早いもので、木村武さんが平成３年12月、ガンのため53歳の若さで他界されてから約９年になります。

木村さんは昭和34年に入学されると同時にバドミントン部に入部、１年生の時からレギュラーとして活躍されました。

昭和37年、４年生のときにはキャプテンとして春のリーグ戦で二部復帰を果たし、秋には二部で５位となった他、京大戦、七帝戦、国公立戦の全てに優勝という輝かしい成績を挙げられました。

昭和38年、サッポロビール(株)に入社された後も、コーチ、監督として東大バドミントン部の強化に尽力されました。

さらに、それまでは、時々集まって飲むというだけであったＯＢ会の組織確立に尽力され、創部40周年の際には「駒羽会」の名称も決定し、初代駒羽会会長に就任されました。

東大バドミントン部ならびに駒羽会の発展に多大な功績を残された木村さんとともに50周年を祝えないのは返す返すも残念であります。

以下、木村さんの追悼集に寄稿した拙文を引用させていただきます。

駒場の若大将

昭和35年(1960年)４月、私は東大入学と同時にバドミントン部に入部。そこで初めて出会ったのが木村武さんである。木村さんは当時２年生で、駒場のキャプテンとして大張り切り。慶応大学の春の合宿に特別参加させてもらい、一段と鍛えられて逞しくなり、色は浅黒く、引き締まった身体で抜群のスタミナを誇り、ひよわな東大生の中ではひときわ目立つ存在であった。いかにも都会育ちの麻布のお坊ちゃんといった雰囲気で、われわれ都立や地方の出身者とは一味違い、東大生というよりは慶応ボーイといったほうがぴったり。駒場のキャプテンとして、１，２年生のトレーニングの先頭に立ち、ぐいぐいと皆を引っ張っていく、その颯爽とした姿は正に駒場の若大将であった。

私はそんな木村さんに憧れ、先輩として敬愛し、以後常に木村さんに寄り添い、行動を共にすることとなった。現役時代にはダブルスのパートナーとして、卒業後は共にコーチとして、さらに木村監督を補佐し、現役やＯＢ会の各種行事に共に参加し、

また、最近は駒羽会（ＯＢ会）の会長と副会長として、私のこれまでの東大バドミントン部の生活は常に木村さんと共にあったと言っても過言ではない。

木村さんのバドミントンは攻守にバランスが取れており、対戦相手に得意技を出させ、それらを封じて、反撃して勝つといったパターンの試合が多く、正に横綱相撲の風格があった。これらはスタミナに自信があったから出来たことであろうが、その為に相手のペースで進行することが多く、いつでも逆転できると思って試合を楽しんでいるうちに、試合の流れが相手に傾き、取りこぼしてしまうことが時々あった。そんな時にも、木村さんは明るく、「イケネー」といって、実にアッケカランとしていたのが印象的である。この「あまり勝負にこだわらない」点は木村さんの「優しさ」と「余裕」の現れであろう。

木村さんと私のダブルスが強かったのも、この木村さんの「余裕」に負うところが大きい。木村さんは常にペースメーカーであり、私は安心して思う存分に打ちまくることが出来た。木村さんの得意技の一つはダブルスのショートサーブのレシーブのとき、サーバーの体の正面のネット際にヘアピンで返すことだった。相手は意表を突かれて、慌ててネットにひっかけるか、ネットに浮いた球を出して、待ち構えている木村さんに叩かれるか或いはそれから逃れようとして後ろに中途半端な球を上げたところを私がスマッシュで決める、といったパターンである。ただし、これは何度もやると相手に覚えられてしまい、余裕を持って返されて効果が無くなるので、取って置きの時に出す必要がある。木村さんはこれを終盤の接戦で、相手にマッチポイントを握られた絶体絶命の状況でよくやった。これは大変危険なことである。こちらも固くなっているので、肩に力が入ってしまいネットにひっかけるか、或いはヘアピンが浮いてしまい、相手に叩かれてゲームセットとなる恐れがある。従って、普通はこんな状況ではやらないことであるが、これを木村さんは、いとも簡単にやってのけるので、相手が意表を突かれて... ということになる。これで絶体絶命のピンチを逃れ、試合を逆転して勝った経験が何度かある。正に大胆不敵。これも木村さんの「余裕」（図々しさ）のお陰であった。

木村さんはバドミントンを離れても不思議な魅力の持ち主であった。誰とでもフランクに付き合い、誰からも親しまれ、信頼され、幅広い交友関係を持ち、先輩、後輩も含め、友人同士を紹介しあっていた。従って木村さんを中心とする交友関係の輪が大きく広がっており、これが木村さんの大きな財産であった。木村さんの幅広い交友関係の中でも、その中心をなすのは麻布時代の素晴らしい友人達であり、その家族ぐるみでの交友は羨ましい限りである。

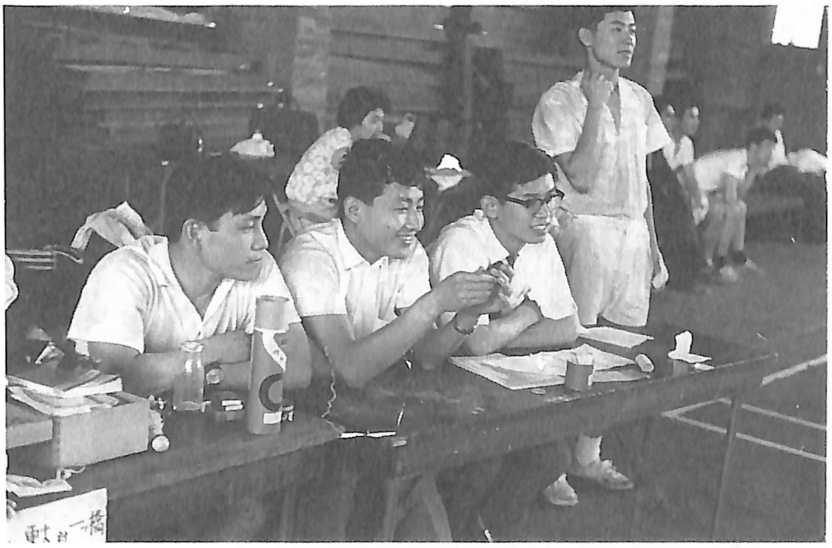
また、木村さんの友達付き合いをバックアップしていたのが、木村家の皆さんであ

る。ご両親を始めとして、二人の妹さん、ミッちゃん、チコちゃんにはいつもわれわれを暖かく迎えていただいた。この伝統は結婚してからも受け継がれ、木村家はいつも社交場であり、和代夫人にも大変お世話になった。この良き伝統は史君にも受け継がれるであろう。仕事の上でも、会社関係のお付き合いも含めて、木村さんの幅広い交友関係は大きな財産となっていたに違いない。この財産が大きく花開き、大将として大活躍するときを待たずして、余りにも若くして他界してしまわれたことは痛恨の極みである。

木村さんは、私の心の中では永遠に駒場の若大将として生き続けることであろう。



1962年７月　七大戦優勝記念



1964年６月　国公立

宮地純樹氏追悼文

昭和37年入学　　鈴木　明夫

宮地純樹氏のご逝去は平成５年12月31日のことでした。当初、心筋梗塞で突然お亡くなりになられたと聞いていましたし、前夜式、告別式でいろいろ伺っていると、働き過ぎの過労死だとも思ったりもしました。その後、ご遺族から頂戴した追悼集で白血病であったことを知りました。医師として、最も脂の乗り切った時期に、自らの病気を知り、余命がそれ程ないことを知った彼の心中は察するに余りあります。

宮地さんは昭和37年に東京大学に入学されると同時にバドミントン部に入部しました。何故彼がバドミントンをやろうとしたのか、聞くこともなく４年間を過ごして、同じ釜のメシを食った仲間ということになりました。入部した同期生は55名いましたが、次々と辞めていく中、過酷なトレーニング、合宿でもへばっている彼の姿を思い出すことはありません。ランニングも速く、いつも余裕をもっている様子で、合宿もアフターファイブを楽しんでいる様にも見えました。人生論なども好きで、よく議論しているのを見ましたが、私は相手にならないというよりなれなかったのです。またバドミントン以外にもキリスト教のサークルにも参加して人生を積極的に考えて活動をされていました。

そして、３年になった時には入部者の１割にも満たない５人となり、このメンバーが最後まで残ることになりました。さらに医学部の５、６年で実習が忙しくなってからも、相変わらず駒場に現れ、練習をし、試合の応援にも駆けつけ、その後の付き合いも欠かしませんでした。

彼は入部したときから４年間を通じて、紅顔の美少年という表現がぴったりで、先輩からもミヤチ、ミヤチと可愛がられたものでした。その後、医学部を卒業して医師として多くの経験を積んで貫禄はついたものの、お亡くなりになるまで、あどけなさの残る学生時代と変わらぬ容貌でおられました。宮地さんが最後にお勤めになっていたのは、関東中央病院で、呼吸器アレルギー科部長の要職にあり、喘息の治療では多くの患者さんに信頼をされておられました。

宮地さんが駒羽会の行事に参加してくれたのは40周年記念総会でした。もう10年も前のことになります。久しぶりに会った会員と愉しそうに懇談をしていたのが最後でした。二次会に誘ったところ、僕には患者さんがいるので、と断って帰っていきました。この様に全てにわたり、全力疾走で50歳を目前に早世されたのは、誠に残念なことでした。一緒にこの50周年を祝って欲しかったと思います。最後に宮地純樹追悼集「素朴な琴」から絶筆となった日記とメモを転載させて頂き、改めて、ご冥福をお祈り致します。

絶筆となった日記とメモ

日　記　か　ら

1993年12月23日（木）

VB12＞1600　マルクの結果はまだ来ないが、CMLと思う。21日久富先生に話す。驚いていた。午後WintrobeのCMLの条りを読みながら自分のデーターと合わせる。

余命僅かと思えば辛いが、今迄忙し過ぎたので、時間をみつけて読書、論文書きなどの余裕があればよい点もあるかと考えることにした。

昨22日は早く帰り、幸とビールをのみながら話し合う……

神のみ心なのかと考えることにした。死ぬことを考えると、家族の心を思ったりして辛いが、それ迄の間をどう有意義に過すかと考えると多少気が晴れる。

12月25日（土）

外来後、浅野Dr. にTelしたら、Myeloid　が多いねと。27日に受診することにした。山下と古酒の越乃寒梅をのみながら話す。

12月26日（日）

翌日の浅野Dr. 受診に当たって、CMLの場合の治療、仕事、生活についてメモを作る。

12月30日（木）

午後、年賀状書きを始め、夜はウイスコンティの「ルードヴィヒ」をみる。葉子に「うたかたの記」を出してみせる。もしCMLとしたら＜最後まで現役＞でなく、余裕を残して休職し、旅行や読書をしたい。

［補注］

無益な心痛を与えまいと、CML（慢性骨髄性白血病）に関しては、一言も老親の耳に入れていなかった。前日（30日）も（例年のように）「明日午後から行くよ」と母親に電話を入れている。正月は弟妹一家ともども両親宅（町田在住）で過す習慣であった。既に来泊中の弟妹と、31日早朝病院にかけつけることが出来た。（両親記）



1965年秋　平塚合宿
手前から２列目中央　故 宮地氏

メ　モ　か　ら

CML（編者注：慢性骨髄性白血病）の場合

93－12－27　宮地純樹

★治療

治療方針については浅野先生にお任せします。

自分で調べた範囲では骨髄移植（BMT）については消極的ですがこれも含め、浅野先生が決めて下さい。

消極的である理由：

▲49歳と高齢なのでGVHD, IPなど多く、early mortality率が高いのではないか。
（日本では合併症が少ないという。私にはそれ以上分りません。）

▲比較的初期と思うので化療（＋IF？）のみで3～4年は生存できるのではないか。
BMTのearly mortalityに入るのは割に合わない。

▲donorにも全くriskがない訳ではない。

治療、検査については可能な範囲で関東中央病院をも利用したいと思います。

理由：

▲時間が節約できる。

▲医療費が安くなる。

その際、関東中央病院での担当医は直属部下の鈴木医長に依頼しようと思います。

いずれ最終段階に入った場合、不自然な延命は希望しません。

最終役階で対症療法のみとなり、特に血液の専門家がいなくても治療は変わらないということになった場合、状況が許せば関東中央病院で最後を迎えることを希望します。設計から関わり、17年苦労してきた施設なので。

★仕事・生活

浅野先生の意見をきいてきめるが当面の方針としては

当面一年程度は現職（関東中央病院呼吸器アレルギー科部長）に留まるが、院外の仕事はカットする。４月以降の講演、学会座長は遠慮する。（既に予定となっている２月の講演・座長一件は予定通り行う）

東大物内非常勤講師：月３回夕方、医学生２回と研修医１回　→　辞任

看護婦国家試験出題委員：年後半に30時間位　→　辞任

（医師側委員代表が川戸先生なので血液専門家の診断書をいただけないか）

世田谷区医師会、玉川医師会での講義：月１回（準備が負担）→　辞任

看護学校講義：年15時間　→　辞任か時間数減

この一年の間に後任人事を段取りし休職～退職する。

あと可能なら、外来診療を非常勤で続け、また学会発表したままのことを論文にしておきたい。

小吹哲郎君の急逝を惜しむ

昭和41年入学　　川上　邦彰

小吹君の急逝からちょうど１周年にあたる、昨年12月５日、ご案内をいただいた昭和41年入学同期の佐々木君、三留君、宮崎大宮高校同期の盛君および東京圏在住のその同期生ともども、川崎市にあらたに建てられた墓前にお参りさせていただきました。当日は納骨式とお墓の建碑式を兼ねて供養をされ、浄土真宗のお坊様から故人を慕い供養するこころ、故人の思い出を胸に、残された者たちがどう生きていくべきかを考えさせるありがたいお話をいただきました。終了後、参列できなかったが偶々近くに住む昭和42年入学の豊田君をあらためて墓前に案内してお参りし、これからも墓参りをしていこうと語り合いました。

以下は、昨年（1999年６月）駒羽会報に掲載いただいた私の追悼文です。

昨年暮れ12月５日朝、小吹哲郎君が突然亡くなりました。朝から雨の降る日で、私は会社の恒例の役員研修に付随した忘年ゴルフコンペの事務局として、清水さんにお世話になって毎回とっている藤沢ゴルフクラブでのコンペがハーフで中止になり、何人かで酒を飲んで遅く帰った夜に連絡を受けました。小吹君の会社のかたからの電話という取り次ぎに、一瞬不審な気がしてから激しい胸騒ぎがしました。先方の声はやはり沈うつなもので、飛行機が落ちたかという連想が浮かびました。聞くと、横浜に住む小吹君が反対に私の住むところからもう少し北に行った茨城のゴルフ場で、スタート前に倒れたというのです。逆ならよかったのではなどということが思われたりしました。その知らせのときのことを思いながら、今でも頭がかっとして動悸がします。

おつきあいのあった先輩や近い年次のＯＢへの連絡を手分けしながらすませて、翌日曜日に同期の佐々木君、三留君とともにご自宅を訪ね、ご遺体に対面し手を合わせました。小吹君がずいぶん大きく見えました。体重管理が課題だったが血圧もそう高くはなかったのに、と。救急車からの電話を受けて交通事故かと驚いた、と。心臓発作かと疑われほとんど手の施しようがなかったが、検査の結果はくも膜下出血だったとのこと、と。どうしてこんなに早く、と。呆然としておられるご親族や次々に訪れる友人などの歎きの声や嗚咽を聞いているといたたまれません。葬儀のことは会社のほうですべてお世話いただいており、なすこともなくほどなく失礼しました。その場で依頼された友人代表としての弔辞は、宮崎大宮高校いらいの親友の盛君が適当だと考えましたが、同君の海外出張からの帰国が間に合わず、私が読ませてもらうことにして、帰宅後お世話のかたに連絡しました。

葬儀では私のまえに弔辞を読まれた会社の上司のかたとすわった最前列の席に、日航の高木元社長がご夫妻で参列しておられました。その高木元社長が急にお亡くなりになったのを新聞紙上で知ったのは、それからほどなくでした。日航の安全運行の再確立に尽瘁し、御巣鷹の事故のあと遺族へのおわび行脚に心を尽くされた高木社長に秘書としてつかえた小吹君は、当時くりかえし同氏に対する敬愛の気持ちを語っていました。

葬儀の最後に、奥さま、長女の有香さんとならんで雄一郎君が涙をまじえつつも本当に立派な挨拶をしてくれました。雄一郎君は昨年東京三菱に入行し、有香さんも大学生で、すでにお子さんたちが立派に成長されていることはせめてもの慰めです。

小吹君とは昭和41年の同期入部ですが、その頃は「70年安保闘争」に向けて、また国際的にも学生運動が非常に激しかった頃で、また42年卒業の先輩がたの抜けられたあとの戦力低下も著しく、学園紛争や部の運営方針に関する議論の中で、活動の存続をはかることで精一杯という時期もありました。その中で小吹君は副キャプテンとしてやわらかく部のまとまりを作られました。南九州の人らしい温和で男っぽいなかに気配りの細やかな好漢でした。一方で、私など目の前のことにとらわれてうろうろしているときに、勉強にしろ就職でも、結婚も、なんでもきちんと先さきとして、いつも置いていかれました。それがこんなところでまでとは思いたくはありません。我々の世代は一年後輩の湯浅君と、同期の若園君も若くして事故でなくしてしまいました。私は近年あいついで両親をなくし、そのようなことも年代のせいか小吹君とも話したりしていたのですが、最近物故者の方に私自身ずいぶん親しくなってきました。

なんだか個人的な感傷にとらわれた文になりました。半年近くになりますが、なにかあると考えたり、話になったりで小吹君の死をまだ気持ちの中で整理できていないところがあります。生前に年が明けたらまたやろうと言っていた同期あたりの飲み会をそろそろもちたいと思います。行き届いた報告にはなりませんが、この場をお借りして小吹君を悼む気持ちをもう一度述べさせてもらいました。



1968年夏　京大戦（S41入学同期）
左から　佐々木、小吹、三留、三上

湯浅有光君の思い出

昭和42年入学　　小宮　泉

訃報が届いたのは、昭和52年４月のことだった。卒業後間もないこの若さで……。

同期誰もが蕭然として奈良に向かった。通夜、葬儀を済ませ、折しも昭和大修理で改築中の東大寺の屋根瓦に「鎮魂・湯浅有光」と同期６人が１字ずつ毛筆書きして寄進した。この瓦は、今でも東大寺の屋根にあって大仏殿を風雨から守り続けている筈である。

昭和42年入学時には大勢いた部員も、検見川の夏合宿、東大闘争などを経て、徐々に数が減り、４年次末の追い出しコンパでの在籍は７名であった。ＯＢのどなたかに、「七人の侍」と称して頂いた。同期としてのまとまりの良さを表しているこの愛称を、我々の誰もが気に入っていた。

湯浅君は長距離走が得意であった。子供の時に体を鍛えるために始めたとのことだが、部内で１、２を争う韋駄天だった。昭和44年のこと、１年先輩の川上さん、１年後輩の岩崎君と湯浅君のバドミントン部長距離走エース３人が、伊豆縦断マラソン大会に挑戦した。これは、たすきをつなぐ駅伝ではなく、３人がフルマラソンを走って、３人目の記録がチームの記録となるという趣向である。３人は全く一緒に、３時間30分でゴールに着き、年功序列で５、６、７位となって見事にチーム優勝を果たした。さすがに翌日の練習は足首が腫れ上がってできなかったものの、バドミントン以外の分野での、部初の快挙であった。

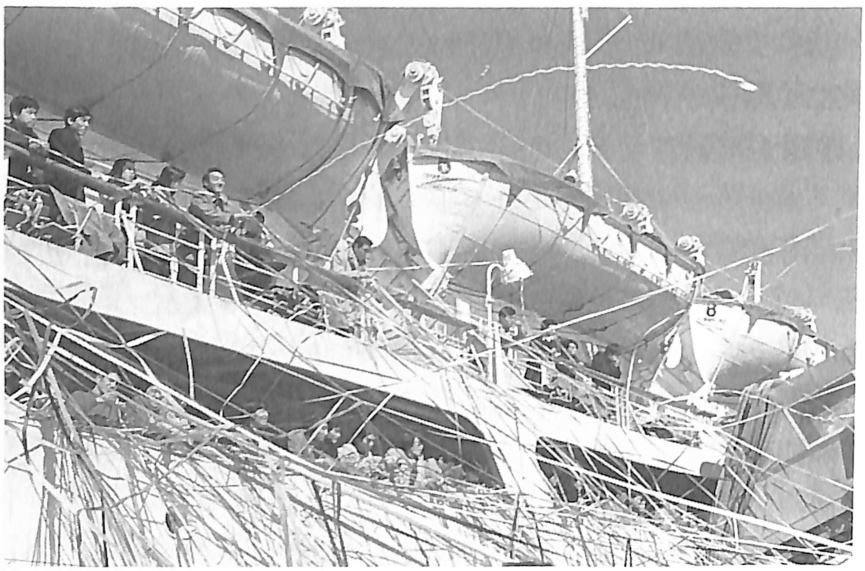
卒業後、湯浅君は建築士の道を歩み始めた。人間誰しもそうだが、かけ出しの時には、自分の職業に不安と期待を織り交ぜて持っているものである。ましてや、建築士という、専門性が極めて高く、奥行きの深い分野ではなお更のことであろう。そんなある日、彼が一戸建て建築をデザインし、図面を書いて応募建築にアプライした。口さがない連中は、「バス・トイレは入れたか」だの、「二階への階段を書き忘れなかったか」だの囃し立てたものだったが、これがなんと優秀賞に選ばれた。同期の中で最も早く、仕事が世の中に評価された瞬間であった。このとき、彼が自分の将来にいささかの自信を持ったことは想像に難くない。この時期、フランスに留学することも決まっていた。お祝いと送別会を本郷界隈で行った。昭和47年２月のことだった。

同月閏29日、湯浅君は、期待に胸膨らませてパリに赴いた。ナホトカ、モスクワ経由の長旅だった。横浜港に見送りに行った豊田君が、別れテープを湯浅君が投げるその瞬間をカメラにとらえている。

２年間、フランス語はもとより、建築の勉強をしたのだろう。顔中にひげをたくわ

え、一段と哲学者然とした面もちを深めて帰国した。彼は、留学中に欧州の建造物のスライド写真を数多く撮ってきた。同期が集まって、その１枚１枚を白壁に写して彼の講釈を聞いた。留学して、更なる自信と箔をつけたという印象を強く持った。うんちくを傾ける彼の目が輝きに満ちていたのを今でも記憶している。

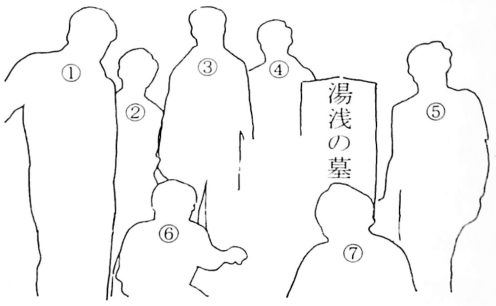
そんな湯浅君は、まさに韋駄天のごとく人生を終えてしまった。今年も４月が来て、23回目の命日を迎えた。今、同期は皆齢50を越え、勤めも第４コーナーを周り、ホームストレッチにさしかかっている。普段、なかなか昔のことを回想する心の余裕を持たない生活を強いられているが、我々同期は、今でも「七人」なのである。



1972年２月29日　湯浅フランス留学



1978 年夏　湯浅有光の墓参
奈良市浄教寺　京大戦前日



①飯倉　②小宮　③森安　④本田
⑤盛　⑥豊田　⑦小林

●駒羽会報から●

全米バドミントン選手権の決勝戦を観て　（1987年５月掲載）

昭和48年入学　　松本（旧姓百瀬）純子

昨年７月にStanford大学に留学した夫(博、47年入学)のもとへ、３月25日、２人の子供とともにやってまいりました。どうにか落ち着いた４月４日、車で30分ほどのSan Joseで全米バドミントン選手権の決勝戦があるというので出かけてみました。

事前に買った新聞によると、“The America's rank far behind many European and Asian nations in level of play”とのこと。その記事通りのminor sportらしく観客はパラパラ程度。(あとで数えるとそれでも約300人はいましたが……)ちょうど女子のシングルスが終わって男子のシングルスの始まるところでした。

ベスト４に２人外国人が残ったそうで、その１人パキスタンからの留学生Wadoodが、前ChampionのJogisをストレートでやぶって優勝しました。この人はパキスタンのChampionに過去８度もなった人ですが、この２年ほどは引退しており、アメリカに留学に来てまた始めたということでした。「だいたい関東リーグの２部あたりの試合レベルではないか」というのが主人の感想でした。私の見たところでも、Jogisは前半押されてハイクリアーばかりで、後半Wadoodが疲れてからやっと背の高さを生かしたスマッシュではじめ追い上げましたが、ミスも多くスピードもいまひとつの感じでした。

次の女子ダブルスは、シングルスの優勝者でStanfordの卒業生というKitzmillerのパートナーHughesのフォームがひどくて、練習を見ただけでレベルが知れる感じでしたが、案の定、試合はせいぜい新人戦の決勝程度のものでした。

男子ダブルスは、シングルスの対戦者同志がまたぶつかって、ファイナルにもつれこんだところで帰ってきました。Wadoodのパートナーは Yaoという中国人で、全中国でベスト16までいったことがないということでしたがジャンプスマッシュはなかなか迫力がありました。

バドミントンはソウル五輪でexhibition sport、バルセロナ五輪では正式種目となり、日本をはじめ力を入れている国も多いと思われますが、アメリカに関する限りは、今のところは、まだminor sportの域を脱しておらず、たしかに世界は遠いという印象を持ちました。

(後記)

TVニュースを見ていると、日本の方は雨が多いようですが、こちら、サンフランシスコ郊外のStanfordは毎日初夏の陽気が続いています。

バドミントン部ＯＢ会報の係りのお仕事、ご苦労様です。いつも楽しみに読ませて

いただいております。

２号の金丸さんのアメリカ便りの続報ではありませんが、４月４日に全米バドミントン選手権を見にいきまして、その感想をまとめてみましたのでお送りします。余白がありましたら載せていただければうれしく思います。

Stanfordには日本人がとても多くて、他にＯＢの方では45年入学の岸田さん、小森谷さんのお２人がいらっしゃいます。私はまだこちらに来たばかりですが、この夏休みには色々旅行にも行きたいと思っています。

来年１月のお正月明けには、また前住所に戻りますので、名簿の方は直していただかなくてもよいのではないかと思います。

色々お忙しいこととは思いますが、よろしくお願いします。（1987年４/11）

カフジの生活をふり返って　（1987年11月掲載）

昭和42年入学　　盛　俊夫

この夏、ようやく８年間のサウジアラビア勤務を終えて日本に帰ってきたのだが、帰国するやすぐに東大シングルス選手権の誘いがあった。久々にバドミントンと聞いて居ても立ってもおられずさっそく参加してみることにした。自分はまだまだ昔なみのプレーができると信じて試合に臨んだのだが、思い違いもはなはだしく、２年生を相手に変りはてた自分の姿をまざまざと見せつけられてしまった。久々のシングルスの何ときつかった事か。勝敗はともかく、足腰立たなくなるまで体を動かしてみて、かつて自分がほれぬいたバドの味を思い起こすことができて大いに満足であった。「次回のダブルス選手権こそは！」とひそかに思いつつ、自分はやはりバド以上のものはないとあらためて知った次第である。

さて、サウジアラビアと一口に言っても大変広い国である。私がいたのはその片田舎、サウジとクウェートの国境近くにあるカフジという所である。もともと砂漠であった所に石油が発見されてできた小さな町だ。宗教上何かと規制の多いこの国では、いろんな苦労があるが、まず男が困るのは酒、女、賭博の御法度であろう。後者の二つはともかく、酒なしで私が生活できる訳もなく、飲むためには自分で造るしかない。この手の飲み物には結局不自由しなかったのだが、月に一度の材料の仕込み、温度計をにらみながらの夜なべの蒸留作業はかなりの重労働であった。蒸留酒だけでは寂しいのでワイン、ビールも手がけてみた。おかげで日本では取得できない貴重なノウハウをマスターしたのであるが、この腕も日本では全く必要とされないのが残念である。

カフジの生活でもう一つ忘れられないのが家庭菜園だ。ここでは家庭菜園は趣味というより二つの意味で生活の一部となっている。一つはもちろん食生活のため。すべての食品を輸入に頼っているこの町では、新鮮でしかも日本人に欠かせない野菜を食べるにはこれ又自給するしかない。庭の砂地をすべて土と入れ替え、乾燥させたらくだの糞を唯一の肥料としてあらゆるものを作ってみた。大根、カブ、小松菜、春菊、ナスビ、カボチャ、ゴボウ、ハクサイ、レタス、シソ、パセリ、ニラ、数え上げればきりがない。すべてに成功した訳ではないが、大根と小松菜だけは決して市販のものに劣らなかったと自負している。

もう一つは精神面への糧のためである。夏場（５～10月）は連日40度以上となり、とても外へ出る気はしない。外に出ても石油現場のため特に楽しみの場所もない。女、子供は単独で出かける事を禁じられており、主人が車で連れ出さない限り身動きがとれない。これでは家に閉じこもるしかなくストレスもたまってくる。このような生活

に何とか潤いを持たせようといろいろ策を講じるのだが、その一つが家庭菜園、庭造りなのである。暑さにめげず外に出て水を撒き、スズメの大群の対策に頭をひねり、成長の具合に一喜一憂しながら、何とか食卓を豊かにせんと、何とか庭に花をあふれさせんとの努力は大いに生活に励みを与えてくれた。この種の話にはきりがないが、今その生活を終わってみると、これらの苦労もすべて良い思い出となっている。

イ・イ戦争の砲火の音が時折聞こえてくる中で、長年のカフジ生活を終え、家族全員無事に帰国できた事を喜んでいる所であるが、改めてカフジの生活をふり返ってみると、今の豊かな日本ではなかなか味わえない生活を体験できて決して悪くなかった８年間だったと思う次第である。

香港のバドミントン事情　（1991年２月掲載）

昭和48年入学　　関（旧姓白坂）みどり

こちらに引越して、一週間とたたないうちにラケットを振っていた位、バドミントン好きの私。香港での生活もはや一年半を過ぎました。こちらでのバドミントン事情について少しお話したいと思います。

ここ香港では、バドミントンは誰でも気軽に楽しめるスポーツとして、たいへん人気があります。私の住むCause Bay地区では、家から半径２km以内に少なくとも３つの体育館があります。そのうちの一つで私がいつも利用しているSouth China Associationは、朝７時から夜10時まで、それも旧正月（香港では、お正月は旧暦で祝います）の祭日以外休日なしで、１時間１コート35HKドル（１HKドル＝17円　1990年12月）であきがあればいつでも使うことが出来ます。おまけに冷暖房付きですから、暑い暑い香港の夏でも大丈夫。夜は、仕事の後プレーをする人たちで賑わっています。専属コーチもいて、あらかじめ予約しておけば一人で行ってもプレーできます。

腕前のほうはというと、基本からきちんとやってきたと思われるのは数える程です。ほとんどの香港人は、準備体操もせずにコートに入り、いきなり打ち始めるので驚いてしまいます。マナーも良いとは言えず、プレー中に自分のミスしたシャトルを拾わない、他人のプレーしているコートを平気で横切るのは当たり前と言う風です。日本人はプレーの前後にお辞儀ばかりしていて、これまた香港人から見ると、異質のもののようですが…。

1990年５月の全香港バドミントントーナメントに出ましたが、予選も何も無く、上、中、初級の好きなところへ申し込めば、誰もが出場できます。ほとんど皆社会人か学生ですから休日と平日の夜試合が行われ、それも選手は１回だけ試合をして次の試合はまた別の日になるので、２ヶ月くらいかかってようやく決勝戦です。上級者には、香港でも全国レベルの人たちが出ているので、当然私たち凡人にも、プロ級の人と試合するチャンスがある訳です。実際、日本人の私の友人は、先の北京のアジア大会に香港代表として出場した選手と試合しました。私は、上級組でなんと４位。上級の人の層がいかに薄いかということでしょう。しかしこういった大会は、中国から移民してきた人たちがいつも優勝をさらってしまうので、純粋な香港人はやる気を無くしているという「言い訳」も聞いたことがあります。

さて買い物天国といわれる香港ですが、私の考えでは品物の種類やサイズ、品数の豊富さは日本にとてもかなわないと思います。バドミントングッズに関しても同じで、バドミントンシューズにはまずお目にかかりません。一度だけスポーツ用品店でやっ

と見つけたナイキのシューズ？を買いましたが、数ヵ月後同じ店にいったら、店員に「バドミントンシューズ？なにそれ？」という顔をされました。香港人は運動靴がすきですが、運動によって使い分けるということはしないのかしら。ラケットも遊びで使うようなのが主流で、本格的なものとなると種類も品数も限られていて、日本のようにはかりではかって選ぶことはできません。気になるお値段ですが、先日値切りに値切って買ったYONEXのBX-906というのが450HKドル（約7700円）。ちなみにCarbonex 20が650HKドル（約11000円）ということでした。日本に比べて高いのか安いのか私にはわかりませんが、いかがなものでしょうか。

卒業して何年たったのか数えきれない程になりましたが、今までずっと細々ながらもバドミントンを続けてきました。香港では、バドミントンを通じて日本人、外国人、多くの友人を得ることができ、大変幸せだったと思います。いまだに学生時代のハチャメチャクリアーとゴキブリスマッシュだけのテクニックですが、自分の年令にあわせて少しずつ楽にプレーすることを覚え、いつまでも続けていきたいと思っている今日この頃です。

モスクワ便り　（1991年11月掲載）

昭和30年入学　　秋山　敦男

モスクワはヨーロッパで７番目に森の多い街と言われており、東京から来た者には羨ましい位“みどり”が多い。その樹々の葉は９月上旬から黄ばんでくるが、（紅葉は少ない）ソ連のひとはこのシーズンを“黄金の秋”と呼んでいる。今年は９月末から２週間余り稀に見る晴天に恵まれ、モスコビッチは自慢の秋を充分に楽しんだ訳である。もっとも今は10月23日夜から降り始めた霜でうっすらと薄化粧されている。

さて８月の失敗クーデター以来二ヶ月経過したが、この間にバルト三国の独立、共産主義の解体、KGBの解散という一連の劇的変革が見られたものの肝心の「新しいソ連邦」の姿がなかなか見えてこないというのが現状であろう。

特に目につくのがウクライナ共和国の姿勢で、もう一つの有力共和国カザフが連邦支持を明確に打ち出しているのと対照的に独立を標榜し、自国通貨の発行とか共和国軍の創設などの方針を次々と発表している。尤も実際には12月始めのウ共和国大統領選の後にはっきりした動きが出て来ると思われるが、最終的に経済共同体条約（既に８共和国は調印済み）には調印するが、連邦条約には加わらないという可能性が大きい。

ウクライナの場合、民族意識も当然だが、「肥沃な」という形容詞が常につけられるように農業生産は自国消費を賄なって余りあり、地下資源も石油こそ無いものの鉄鉱石、石炭、マンガン等豊かであり、経済的自立が容易であることからかかる強い姿勢が出てくるものと思われる。ただ最近ウクライナの首都キエフを訪問して受けた感じでは、独立への意欲は盛んだが、そのための組織作りはまだまだであり、市場経済への移行も前途遼遠と思われる。

新ソ連邦の門出に立ちふさがるような難問が食糧不足とエネルギー危機であると日本の新聞などで大いにはやし立てているが、最近日本政府が派遣した調査チームの報告でもそうだが、我々が日頃見ているところでも一部（コーカサス地方など）を除き食料にはそれほど困っているようには見えない。むしろエネルギー問題のほうが深刻で中でも石油の減産は大きく（1989年の６億トンが今年は５億トンもどうかと言われている）長期ストによる石油の減産ともあいまって各地で暖房切れやガソリンの欠乏等の生ずる恐れが出てきている。気のせいか我が家の暖房（スチーム）もこの冬は去年より一段と弱く今から電気ヒーターにかじりついて暖冬異変となるよう祈っている始末である。

ところで我々の商売の方は日本をはじめ各国からの金融支援の声が聞こえて来たた

めか、来客も多く活況を呈してきたが、受け皿のみ整備から実際の契約までには未だ相当の時間が掛かると覚悟している。

霜が降ってとうとうゴルフが出来なくなったが、これからはオペラやバレエのシーズン故、ヨーロッパへの往き帰りの途中にでも是非お立ち寄りください。

板場うら話　（1993年６月掲載）

昭和52年入学　　内藤　史門

はじめに

信州下諏訪に移ってから早や５年になります。第二の故郷の旅館を継ぐ勉強のために、料理屋やレストランをいくつか回りました。そして昨夏、おかげさまで調理師免許を頂きました。この程度でえらそうなことは言えませんが、ふだん余りお目にかかれない料亭の調理場を少し御案内致しましょう。

調理師になるには

板前、コックといわれる人は原則として調理師免許を持たなければなりません。調理師になる道は二通りあります。一つは調理専門学校に行く方法。こちらは全日制１年で、卒業と同時に調理師免許を取得できます。はじめから板前になろうという若い人は、たいていこれです。もうひとつは、どこかの食堂、給食センター、総菜屋、魚屋、旅館などで、２年以上調理の実務経験を積んだ上で、保健所の実施する調理師免許試験を受ける方法です。私の場合もそうです。調理師試験は、衛生法規、食品衛生学、栄養学、調理理論などを出題する、四者択一のペーパーテストです。７割できれば合格！自動車の運転免許みたいなものですが、実技はありません。要は、食中毒をいかにださぬか、と言う為のものです。調理師にとって、食中毒ほど怖いものはありません。店一つ簡単につぶれます。板前殺すにゃ刃物はいらぬ、食中一発あればよいってなもんです。

女の板さん

板場といえば男の世界と思われるでしょうが、最近は女性の板前さんもみられるようになりました。専門学校出の若い子が多いようです。私の勤めた店にも二人いました。彼女達を見た限りでは、同世代の男共より仕事は丁寧で早く、明らかに上でした。もちろん、女だからといってあまやかされるわけではありません。板長の包丁こそ飛んできませんが、容赦ない叱咤の声があびせられます。セクハラだなんて暢気に騒げるようなほかの職場はむしろ平和だといえるでしょう。

怪我

板前の見習が包丁で手を切るのは、バドミントンの初心者がマメをこしらえるのと同じ位、日常的なことです。何度も何度も怪我を繰り返して、しまいにタコになる頃

やっと少しは使えるようになる、というのも似ているでしょう。さて切ってしまうのは得てして、大忙しの真っ最中で気があせっている時です。「こんな時に一」と余計あせる訳ですが、のんびり治療もしていられないので、とりあえずガムテープでぐるぐる巻きにして無理矢理止血させ、暇になってからハサミで切り開いて手当てします。傷が深いときは、あらかじめ輪ゴムなどでぎっちり血管を押さえておかないと、吹き出してまごつきます。私の人差し指第一間接付近も、たびたびそぎ落とされまして、今ではちょっとした跡になっています。もう少しで完治しそうなのに、同じ所をまたやってしまう瞬間は、身の毛もよだつ感があります。しかしまあ、手を切るということは、いくらか進歩したという事です。「上手は切らず、下手切らず」という言葉もありますから。

従食

料理人も飯は食います（アタリマエ）。洋食系統では店のメニューを社員割引料金で食わせたり仕出し弁当を頼んだりするところもありますが、和食の店では、従業員の食事は若い者達が作ることになっています。（これを従食といいます。）半端な素材を無駄にしないためと、下の者が味付けを勉強する良い機会だからです。それでは板前サン達は日頃何を食っているのでしょうか？たいした物ではないのでして、ゴハン、みそ汁、焼き魚の定食からトンカツ、焼きそば、チャーハン、かき揚げといったところです。たまに暇だと、握りずしや手作りハンバーガーをやってみたりもします。板前の機嫌がよければ、ふだん手に入らない良いマグロの端っこにありつけることも。だいたい朝食はひと仕事終わった10時頃、昼はお客様が一段落した３時頃です。盛り台に集まって立ち食いです。ただし日祝など注文が途切れない時は、皆が手を休めて食うわけにも行かず、交代で急いでかきこんで仕事を続けます。そういう時はだいたいカレーライスでした。

煙草

最近のグルメブームの火付け役となった某コミックによると、板前は喫煙しちゃいかんということになっています。嗅覚細胞が破壊されて香りに鈍感になる、手がヤニくさくなって食材を不味くする、等々。それは確かですが、現実の料理人は、超一流は別としてほとんどの人が愛煙家です。女板さんも例外ではありません。まして仲居さんとなると、和服姿もすがすがしく御接待これ勤めますが、休憩室に戻ればあぐらかいてくわえ煙草です。たいていが中学時代からやっているようです。酒も好きな人が多く、中には、朝出勤してまず冷や一杯やらないと手のふるえが止まらない、とい

う鰻職人がいました（腕は抜群！）。こう書くと何かアブナイ連中の集まりのようですが、決してそうではありません。いやむしろ逆で、三十何年間も生きて、初めて人間らしい血の通った人たちに出会えた、と私は思いました。とても自分に正直なのです。

涙、涙の送別会

そういう人達のことですから、たまの宴会ともなると、殴りあったり抱き合ったり、それはそれは盛り上がります。そして一泣きします。

日常が厳しいせいでしょうか、同じ釜の飯を共にした仲間と別れ別れになる送別会の宴には、ことにつらいものがあります。バド部の追い出しコンパや会社を退社した際には、泣くも泣かれることもなかった私ですが、ずうっと一緒に働き多くの事を教えてくれた立板さん（副主任）が去られた時は、万感迫ってその人の胸にしがみつきました。

おわりに

こうした送別会に私も送られて、まだまだ半人前ですが、お暇を頂きました。現在は一転、ある会計事務所に通って、会社経営、経理の勉強をしております。こちらは全く日が浅く、「渦中」なので、もう少ししたら面白いお話ができる機会もありましょう。

オックスフォードでのバドミントン　（1994年１月掲載）

昭和58年入学　　高橋　克彦

私は1990年秋から約一年間、オックスフォード大学ST. ANTONY'S COLLEGE中東研究所にて客員研究員として過ごしました。その際、バドミントン部の活動に参加する機会がありましたので、当時の自分の経験の範囲内でオックスフォード大学（以下「オ」大）のバドミントン事情につき簡単に紹介したいと思います。

ご存知の通り、「オ」大はいくつものカレッジの集合体の総称です。学生はそれぞれのカレッジに籍をおき住居その他のサービスを受ける一方、授業については各々専門の先生がいるカレッジに通って受けるという形式を取っています。クラブ活動も類似の体制となっており、各カレッジがそれぞれ独立したバドミントン部を持つと共に、「オ」大としても独立したバドミントン部を持っています。前者はあくまでも「オ」大の中に限定された活動を行うのに対し、後者は「オ」大を代表して対外試合を行う資格を有しています（後述しますが、ケンブリッジ大学との定期戦は後者が行うわけです)。

10月に「オ」大の新年度が始まってから、私が在籍するST. ANTONY'Sはカレッジ独自のバドミントン部を持っていないということを知り、それならばということで、「オ」大バドミントン部が部活をやっているという体育館を覗きにいきました。４面コートの体育館でダブルスの試合（？）をしている学生を発見。プレーのレベルはそれ程高くなく、東大のサークルのほうがうまいという印象を受けたので本当にこれが大学のクラブなのかしらんと、周囲の学生に尋ねたらその通り。驚きを隠しつつ、リハビリにはちょうど良いかなと即刻入部を決めました。部としての活動は毎週水、木、土それぞれ３時間程度行われますが、基本ストロークなどは一切せず（ウォームアップもなし)、早く来た部員からコートに入り１セット・ゲームをローテーションで延々と続けるというものでした。(コートに割り振りのための洗濯バサミ活用法等、特筆すべき事項は多いのですが、ここでは省略します)。主将は香港系中国人、主務はパキスタン系英国人、部員も様々な国からの留学生が多く、体を張ってプレーする米国人、プレーの最中もターバンを巻いたままのシーク教徒の学生、バドミントンのレベルも上から下までゴチャ混ぜにしての試合はそれなりに楽しめるものでした（ここで英国風（？）サーブ権の決め方などいろいろなことを学びました)。

ここまで読むと何だ「オ」大のレベルはそんなものかと思われるでしょうが、階級社会の英国ならではのシステムが実は存在しているのです。それは毎年始めのTRIAL（「オ」大のオープン戦的レギュラー決め）で選ばれた男女20名程度からなる集団で、「オ」大より濃紺のユニフォームを支給されるため「BLUES（ブルースではなくブルーズと発音）」と呼ばれています。（これは「オ」大ラグビー部やボート部も同様）。バドミントン部ブルーズは実力別にＡとＢに分かれ、特別の練習時間枠が与えられていることもあり、上述した一般部員とプレーすることは非常にまれです。私は年度始めのTRIALに参加せず正式な所属はできませんでしたが、時々Ｂチームの試合、練習に参加し、結果としてＡチーム男子はチームレベルとしては関東学生リーグの２部程度、Ｂチームは３部下位または４部上位程度の実力ではないかとの印象を持ちました。これはＡ、Ｂチームはオックスフォード州のリーグ戦（COUNTY LEAGUE）に参加すると共に、年に一回３月頃に開催されるケンブリッジ大学との対抗戦に大学を代表し参加するわけです。私がいたときの対抗戦はケンブリッジで開催され、私も応援に行きましたが、Ａ、Ｂ両チームともケンブリッジ大学のチームにコテンパンに叩きのめされてしまいました（何複何単であったか、スコアがどうであったかは思い出せません）。

「オ」大の各カレッジのバドミントン部はオックスフォード市内の体育館（カレッジ専用の体育館を持っていないチームは大学、高校の体育館、コミュニティーのスポーツセンター等を利用）で練習を積み重ね、１月から３月にかけて行われるインター・カレッジ・トーナメント、３月に開かれる全英シングルス・ダブルス選手権に備えます。前者のリーグは２複１単で行われるもので「オ」大の12程度のカレッジが参加しており、私もニュー・カレッジ（比較的新しいのでこう呼ばれていますが創設は14世紀）の「助っ人外人」としてトーナメントに参加、ダブルス全勝で同カレッジの優勝に貢献することができました。全学シングルス・ダブルス選手権も20－30名のエントリーがありましたが、ブルーズを除く大会であったためそれほどレベルは高くなく、結局私はシングルス優勝・ダブルスはバングラデッシュ人学生とペアを組んで準優勝と一見素晴らしい成績を収め、賞品のワインとチョコレートを獲得しました。今となってはこれがオックスフォードで私が収めた最大の成績といえると思います。

この様にして最大の盛り上がりを見せるシーズンが過ぎると、当然のことながら勉強が何よりも優先するオックスフォードの学生生活のこと、４月、５月は試験勉強の時期のため部活は休みとなり、引き続き10月に新年度が始まり再びTRIALが行われるまで、長い夏休みに入ります。したがって、私の一年間の「オ」大生活の中でバドミ

ントンができたのはわずか５ヶ月間でした。限られた時間ではありましたが、試合、練習等を通じて多くの友人を作ることができたのは本当に幸いなことでした。また、当時の中東研究所での議論は湾岸危機、湾岸戦争一色で、先行きの不透明感、問題の深刻さから憂鬱になることもしばしばでしたが、その気分を転換するという意味でもバドミントンの効用は十分にあったように思えます。「オ」大ではバドミントンにしても、他のスポーツにしても、生活のリズム作りとしてやっているという人がほとんどで、確かに平均的なレベルは高くはありませんが、大学で教職につきながら数十年続けている選手等、長くプレーしていきたいと言う人がとても多かったような気がします。これはひとえに、体育館の整備、クラブ活動に対する社会の認知といった、プレーを続けていきやすい社会環境が英国にあるからだと思いますが、私も彼等を見習って「細く、長く」バドミントンを続けていきたいとの思いを新たにさせられました。

以上纏まりのない話となってしまいましたが、諸先輩方の外国での経験談に倣って、私のオックスフォードでの経験につき書かせてもらいました。実は私は「オ」大での研究生活の後、アラブ首長国連邦に転勤し、そこでもバドミントンを続けることができましたが、その時の話はまた別の機会があればさせて頂きたいと思います。

ニューヨーク雑感　（1994年６月掲載）

昭和35年入学　　重松　宗男

1992年５月、突然ニューヨーク勤務を命じられた。商社マンにとって海外勤務はあたりまえのことであり私にとっても若い頃の３年間のロンドン生活についで２回目のことである。しかしながら齢50才を超えると“何で今更”という気がしてなんとも気の重いことであった（その年の２月、情報通信システム関連の業務から古巣の審査関連の仕事に戻ってわずか３ヶ月しか経っていないことも一つの理由であったが)。

然し、そこはサラリーマン、社命には抵抗するわけにもいかず、私も家族も３－５年の任期を覚悟し、一大決心のもと単身赴任に踏み切った次第である。

結果からいうと僅か400日という当社米国会社としては最短記録の滞在期間で日本に召還されるところとなり、“歓送迎会がmainの仕事だったみたい”と周りからからかわれる破目となった。幸い役員就任が付いていたので助かったが、さもなくば何か大きな失敗をしたか、不適格の烙印を押されたと見える程の異例の移動であった。

あまりにも短期間の滞在でニューヨーク生活を論ずるところまでゆかないが、私なりの印象を記してみたい。

ニューヨークの最大印象は本当に種々雑多な人々が混在する社会で、数多くの文化と生活様式がMIXしているということである。世界の大都市は多かれ少なかれこういう要素をもっているが、東京、ロンドン等とはその度合いが全然違うといえる。MIXの仕方が融合しつつ新しい様式を作りつつあるという感じではなく、各々バラバラに異端のものがモザイク状に混在している感じが非常に強い。異種のものが存在することに抵抗がなく、極端に言えば悪性の生活様式習慣すら存在そのものは認知されてしまう様に見える（たとえばドラッグが悪ということを大半の人が認識しているのにソーホーやヴィレッジでは住民権を持ったかのように見受けられるのがこれにあたる)。

この異種文化のモザイクはどんどん進行して行っている様で、昔の駐在員の話に出てくるようなニューヨーカーは既にこの都市のone elementに過ぎずmajorityではなくなっている。

さてこの上記の都市の特性は、私にとっては意外にも快適な単身赴任を過ごすのにプラス要素であった。すなわち急にこの社会に飛び込んでくる外国人が住み着く際に“郷に入らば郷に従え”的な拘束がほとんどなく、自分の文化、自分の生活をそのま

ま持ち込んでも何の気兼ねも要らないのである。日本人が日本的な発想で日本的生活パターンを維持しても決してminorityとして差別されることにはならず（別に評価もされないが…）、自分自身が卑屈になったりする必要が全くないのである。

例えばJapanese Englishもほとんど恥ずかしくない。なぜならもっと癖のある英語を話す人は山ほどいるし、英語をほとんどしゃべらないヒスパニック系も堂々とニューヨークで生活している。教養のあるちゃんとした英語を話す人はもちろんプライド高くそれなりに他人を見ているが、必ずしも彼らがこの社会のmajorityではない。

例えば私のような年令の者がＴシャツサンダルがけで目抜き通りを歩こうとデパートに入ろうと一向におかまいなし（ほとんど注目されない）。

そのままの格好で数百ドルの買い物をクレジットカードで支払ってもOnline端末で機械的に確認するだけで“変だなあ”という顔は見せない。

他人は他人それぞれ勝手な生き方をするものだという認識が浸透しており、他人のbehaviorに何かと口を出す癖のある日本とは異なる自由放任の世界であり、このことがニューヨークの多人種、多宗教、多文化の傾向をいっそう助長しているように見える。

東京がこのような都市になっていくことについては全く賛成できないが、外国人が住むのにはとにかく楽であることは間違いない。

さて私のニューヨーク生活も少し御紹介しよう。単身であったこともありマンハッタンのど真ん中、ブルーミングデールという百貨店の筋向いの高層アパートの一室を借りていた。つくりは１LDKであるが、一人住まいには十分過ぎる広さであった。

会社まで徒歩10分、この職住近接の良さは一寸日本では味わえない。通勤時間約３時間のセーブということだが、自分の時間がたっぷりあり接待等で夜遅くなってもすぐにベッドにもぐりこめるので疲れもたまらないで済み、正直、家族のいる日本での生活より快適であった。朝食は自分で作り昼･夜は外食、掃除洗濯は自分でもかなりやったが、アルバイトのメイドを頼み週一回程度来てもらって会社に行っている留守に片付けてもらった。

ぼちぼち装飾品等を買い揃えて、ゆとりのある部屋にしようと思っていたら一年で帰ることになってしまったのでその方はあまり増えなかった為、どうしても少々ガランとしたイメージではあるが、窓からは付属建物の屋上にあるルーフガーデンの緑と花々が見え、3RD AVE.を行き交う人々をじっと眺めているのもなかなかのものである。

ニューヨーク生活をゆったりと過ごした様に聞こえるかもしれないが、結構精力的

に体験を広めたつもりで、400日間にやったことを列挙すると次の通り

海外出張２回（日本と英国)、米国内出張８回（うち西海岸へ３回)、ゴルフ25回以上、野球観戦２回、フットボール１回、ホッケー１回（バスケットはKNICKSのチケットとれず残念)、ミュージカル４回、リサイタル２回（１回はフランク・シナトラ)、小旅行ドライブ７、８回といったところである。

ミュージカル４回のうちの１回は（もう帰国間近ではあるが)、我が駒羽会の同期メンバーである、平松君夫妻（着任してきたばかり）と出張してきた三浦教授の４人でCATSを見たものである。３名がニューヨークで一緒に食事をし観劇するとは夢にも思わなかった等々語りつつ旧交を温めた。小生はCATSは２回目であったが三浦教授は本場のミュージカルに感嘆していた様だ。

家内が１度、息子が１度、娘は２度遊びに来た。来るたびに私が買いだめしておいた日本食料品が空っぽにされてしまうのだが、それぞれにenjoyし、私もナイアガラ、ワシントンといったありふれた観光地を訪れる良い機会にもなった（さもないと一人ではいわゆる観光ルートへは行かないから)。娘は私の帰日が決まり電話した際に“それは聞こえません。”とまだ５、６度来るつもりだったのが、あてがはずれて残念がっていたのが記憶に生々しい。

私のいた一年は概してmildで噂に聞いた冬の寒さも夏の暑さもなく（といっても冬は０度以下だが)、最高の印象のみを持っているのだが、今年の夏は大変だったらしい（私は心がけが良いのかな)。

ウェストミンスターの森に囲まれた住宅地、コース間がりんごの木で仕切られりんごの花とりんごの実に飾られた田舎風ゴルフコース（小生がメンバーとなっていたカントリークラブ)、ニュージャージー州ハドソン川沿いの景観等々、挙げだすときりがないが、まだまだenjoyしたいことが一杯あって心残りであるが、もうニューヨークで生活するチャンスは来ないであろう。

行くときはしぶしぶ、帰るときもいやいやということで会社の先輩同輩はお前は勝手だというが、これが実感であり、短いかもしれないが良い印象だけ残った（仕事の方はそうでもないが…)。

２年目からは米国中を車で走ってやろう、と４月に買ったBMWを売り飛ばし、今又東京の雑踏にいる。同じ雑踏でもニューヨークのほうが良いなあと思うこともしばしばのこの頃である。

（住友商事（株）取締役主計経理担当）

二つのB　（1994年11月掲載）

昭和30年入学　　相澤　修三

連休明け、入部しようと訪れたバドミントン部の部屋は、薄暗く、埃っぽく、ドアのガラスは割れて、板が打ちつけてあった。

ノックに応えて出てきた森は、もうこの寮に10年間も棲みついているような落ち着きで、「まあ、入れよ」と言った。

「練習は月水金の一日おき、時間は五時から七時まで。同室は、授業に出ていて、今、居ないけど、西本さん、深田さん、北澤さん。一年は僕だけ。新入部員は、秋山、原、宗像それに角川。練習には本郷から足達さん、高山さん、対馬さんなどの先輩もやって来るよ」と独特の口調で教えてくれた。

見渡すと畳一畳分の木のベッドと机。布団は昆布巻きになっている。ベッドの下には柳行李が一つ、洗面器なども見える。途端にパラパラと雨が降ってきた。おかしいな、今日はいい天気なのにと外を見やると、平然として、

「寮雨だ」と森が行った。

このような部屋に以後二年間、入り浸りになろうとは、その時には露ほども思わなかった。

練習は七時には終わる。ところが一年生共はそれから約二時間、時には三時間、練習に励んだものだ。何々…？励んだ割には進歩しなかったって？そうその通り。秋山とか森とかは別として、私の場合には練習後の“ちんや”のうどんに魅力を感じていたからだ。それにもう一つ理由があった。それが“トランプ”である。

講義には空き時間や休講があった。四人揃えば駅前の“くぼた”という手があったが、揃わずに麻雀が流れた時には、足は自然に部屋に向いてしまう。部屋には誰かしらがいてダベるのに事欠かなかった。このダベリングにいつの頃からかトランプが登場した。

現在の学生間で最も人気のあるトランプ遊びは“大貧民”だそうだが、この時やったのは“コパック”だったと思う。ルールの解説及び指導は西本さんだったと記憶する。すぐに森が“マリッジ”を広めた。

やがて“２・10・J”と“ナポレオン”がレパートリーに入った。深田さんが“２・10・J”に強く、導入したのは深田さんだったかも知れない。橋本が入室してきたのは、この頃のことで、後期に入ってからではなかったか？この橋本もたちまちトランプ仲間に引きずり込まれてしまった。とにかくトランプは素晴らしい。何しろショバ

代はいらないし、第一に時間を取られない。練習のある日も無い日も寸暇を惜しんで耽ったものである。耽ったといっても金銭を賭けないのだから（これが麻雀をする先輩から馬鹿にされた理由なのだが)、可愛いものです。

ことトランプとなると俄然生彩を発揮したのは宗像だった。誰も知らなかった“ノートラ”が面白いと言い出して、根気よく我々に教え込んだ。切り札を使う“２・10・J”、その上にオークションが加わる“ナポレオン”、切り札をわざと使わないオークションもある“ノートラ”と、複雑さが増し、駆け引きの妙味が加わった。

“ノートラ”の全盛期は一年の春休み、最初の宇都宮合宿の頃であった。しかし、さしも猩獗を極めた“ノートラ”も半年ほどで廃れ始め、終極の“コントラクトブリッジ”へと発展した。

ここでもオークションやプレイのやり方をコーチしたのは宗像で、「世界の三大カードゲームはポーカー、カナスタ、ブリッジである。これからの国際社会の一員として、ブリッジをマスターする必要があり、外務省では必須課程になっている」とか何とか言葉巧みに誘い込んだものである。のりの良い二年生共はたちまちノッた。ことに橋本は伯父貴の家からオートブリッジなる独習器械まで手に入れて励んだものだ。“コントラクトブリッジ”は本郷に進学すると廃れるはずだった。ところがどういう訳かその気配がなく、空き時間になると“二食”の片隅で楽しんだものだ。時の矢内原総長が「学生の分際で、トランプに現を抜かすとはけしからん」とクレームをつけたとか…それに対して加藤法学部教授が「あれはコントラクトブリッジというゲームで、欧米では知識階級必須の教養である」と弁護したとか、しなかったとか、いろいろ取り沙汰された一原因となった。

卒業すれば、当然のことながらブリッジは全く念頭から消え去ってしまった。ところが「おい、千円菓子を買ってくれ」と突然宗像がやってきた。十年前のことである。菓子を買わされた上に、「お前、ブリッジまだ覚えているだろう。来週の木曜日に試合があって、一人足りないからお前でないか」ときた。

これがブリッジ再開の端緒となった。秋山のモスクワ状況報告で懐かしいバドミントンの仲間に会うと、橋本は一人でブリッジソフトで楽しんでいるというし、秋山は奥様につき合わされてブリッジをやってるという。深田さんの奥様もなさるそうだ。

そんなこんなで今年の一月から、宗像、秋山、橋本と月に一度、丸ビルの森永レストランに集まって、ブリッジを楽しむ会が復活した。現在では原、森も参加するようになった。バドミントン同様にブリッジのプレイも上達はしないものの、旧知の仲間とダベりながら飲むビールの味は又格別。美味しさに引かれて、その日になると、定刻にいそいそと社を飛び出す昨今である。

分科会活動報告：関西駒羽会会議録（読書感想文以上エッセイ以下）（1997年６月掲載）

平成２年入学　　小西　美恵子

１階ロビーのフロントには、「あのう、８階の駒羽会の方ですか？」と丁寧に純粋に怪訝そうな面持ちで訪ねられ、「あっ、はい、そうなんです。ええっとはい、８階です。」と雛オウムの返事のような返しをして、10分遅刻で既に沸点まで到達していた私は、エレベーターに飛び乗ったのでした。

鈴木さんから関西駒羽会の宴のお誘いをいただいて、そうかそうか、のほほんと「出席」のお返事をしてから、約１か月（ぐらいですか？）まさかあんなお歴々中に若僧ただ一人とは思わず、エレベーターが開いた瞬間、そのまま「閉」を押そうかと思ったぐらいでした。

さすが運動会の方々、定刻通り午後６時30分に集まっておられたのでしょう、今まさに、さ、乾杯しようかというタイミング。あっちゃー、しゃーないわ腹くくろ、と心の中まで関西弁で、８名の出席者の方々の寛大さにすがり、どうにか開会に間に合わせていただきました。

ここはオフィス街の中心、中央区瓦町３丁目。小坂の都心部を縦断する幹線道路、演歌にも登場するその名も御堂筋沿いにある、洗練された高級感漂うラウンジ。この会場は出席者のお一人野崎氏の御厚意で、セッティングしていただきました。（ホントに素敵なところでした。ありがとうございました！）

皆様の自己紹介と近況から抜粋すると…

当然最年少の私から始まりましたが、活字にする情報として価値があるのは、平成入学ということで、皆様に、ある種の感慨を与えたことだけでしょうか。

大阪大学文学部の教授として、東洋史を研究しておられる森安氏（森安孝夫、S42入、文学部）の教授としてのお顔と、研究者としての情熱と、先輩を前にした後輩としての御様子を同時に拝見することが出来たのは、貴重な機会でした。東洋史学は習得すべき言語の種類が多く、学生もなかなか大変であるが、なにより魅力的なのは、目にする資料、解読する文字、解明する文化に接しているのは、世界中で自分なんだという事実が待ち受けていることである、とおっしゃっていたのが印象的でした。もしかしたら、百武彗星を発見した彼と、分野は違えど底には同じものが流れているのでしょう。羨ましい限りです。

住友金属にお勤めの野崎氏（野崎寛、S39入、法学部）には、前述の通り、今回の

会場をお世話していただきました。残念ながら卒部はされていらっしゃらないというお話でしたが、椅子に根が生えて動かない私のところにも、気を使って移動してきていただいて、いろいろと関西デビュー３年目の私の話を聞いていただきました。私が、関西では学生時代の頃よりも、当然知り合いが少ないということを申し上げたところ、ご自身は、会社関係だけでなく、さまざまに人との交流網を広げておられることを話していただきました。「関西東大会」と言う団体の存在を初めて教わったのも、そしてその会の入会申込書一式を、ご親切に送っていただいたのも野崎さんでした。

「世の中の事実」と「当人の現実」の違いという深遠な味わいのちゃんこ鍋から、日々個人のお椀へネタを配って奮闘しておられる本沢氏（本沢義雄、S39入、法学部）の、朝日新聞編集局の社会部でのお仕事のお話は、大変興味深いものでした。政治部、社会部、運動部、などに線引きできない事件を全て社会部で扱うことになるそうで、「何でも屋さんなんですよねえ。だからなんでもくるんですよねえ。」とボヤきつつ、その反面実は何でも面白がってしまうような不思議な表情をしていらっしゃいました。あの不思議な精神が一面トップ記事に宿ることになるのですね。「私の紙面批判」小西版」をエラソーにぶちまけたところ、笑って聞いてくださった、海よりも深い懐の持ち主であられることも、私の勤務先に電話をかけてこられて、この原稿をよりによって私に命じた類稀な勝負師であられることも、申し添えておきます。

都市工学科ご出身の北浦氏（北浦正一、S38年入、工学部）はまちづくりの仕事を存分にできる場所を求めて竹中工務店へ。そしてJR大阪駅から徒歩10分の、知る人ぞ知る「空中庭園」のある梅田スカイビルをてがけられたそうで、ああそんなことならもっとかみしめてあのビルに入るんだった、と思わず反省してしまいました。このスカイビルというのは、「地図に残る仕事」のようなもので、なんといっても超高層ビルの最上層部が、アルファベットのHの真ん中の横棒みたいにガラス張りのエスカレーターでつながっているのがすごいの一言で、こんな説明では何がなんだかわからないでしょうが、とにかく眺めが最高の最高のデートスポットなのでございます。現役時代、七大戦のシングルスでは、２年生のときから負け知らずだそうで、特に後に紹介する中山氏を含め、京大戦に対してもこのスカイビルディング以上に立ちはだかり続けておられたそうです。

京大の現監督中島啓之氏（Ｈ２入）をして「東大ＯＢ会の財産」と言わしめる鈴木氏（鈴木明夫、S37入、農学部）は本会の主催者であり、ご多忙な中、関西駒羽会会員有資格者一人一人にお知らせを郵送して、回収して、人数を集約して…というまるで駒場の１、２年生のような発送のお仕事をしていただきました。本当にありがとうございました。以前大阪へ仕事で来られたときは、わざわざ電話をかけてこられて、その上中島氏、大畑真紀氏（Ｈ２入）ともどもまとめて３人どうもごっつぁんでした。

住友電気工業に身をおかれながら、内壁に血栓が付着しないような、人工血管の研究開発をしていらっしゃったということで（そうでしたよね？）、話題は特許のことにまで発展しました。上は拝顔したこともないようなＯＢから、下は現役生にまで、誰よりも知名度の高いＯＢとして君臨し続けるためには、京大戦、Ｓ権、Ｄ権、追いコン、バドフェスと、先輩のように参加するガッツがいるんだなあと、お会いするたびに思います。

私の遅刻の間に自己紹介をすませておられたということで、実は宴のあいだじゅう、いったいこの方は？？？？と失礼にも探っていました。古澤さん申し訳ありません。（古澤松之丞、S31入、法学部）花と緑の博覧会の協会専務理事をされているということでしたが、数多の肩書きの中で今はそれを使っている、といったご様子でした。実体は如何に？博識かつ著名人も多くご存知のようで、豊富な話題と知的好奇心から、あるいは鋭い質問を飛ばし、ある時はメモを取りながらうなずいていらっしゃったのが、大変印象的でした。大学からバドミントンを始められて東日本インカレベスト８という戦績を聞いて、現役諸君、ご感想は？ともあれ古澤さんの正しいご紹介を、本沢さん是非お願いします。

京大のＯＢの先輩もお二人お見えでした。

北脇氏は、（北脇重康、S31入、工学部）今までに何度か職場を変えられてきているそうですが、辞めた会社辞めた会社次々になくなっていくそうで、「見る目があるのか無いのかよくわからないが、いや一私の自慢なんですよ」と、とても楽しそうに話して下さいました。現在はコンピューターのソフトウェア方面でご活躍をされているということで、相手の目を、じーーーっとみつめていらしたのが、僭越ですが、誠実なお人がらを表しているのではなかろうか、と思います。

始めてじっくりお話をお聞きできた京都工繊大で助教授をされている京大ＯＢ会長の中山氏（中山敏弘、S39入、理学部）には、（実は北脇氏にも初めてお会いしたような気がしたのですが、定期戦にはお二人とも常連ということなので、私の認識不足です。！！）ラウンジでも２回、駅の構内でも２回、「今度絶対シングルしましょうね、絶対ですよ。」と、念を押され、次回の京大戦まで精進しておくことをお約束しました。ハイネックの白いセーターにキャメル色のジャケットでまさに教授然とされていて、お洒落な方だなあと思っておりました。

話題と経験とバドネタの豊富な方々との時間は、あっという間に過ぎますね。「人間は背伸びもしないと成長しない」と高校の恩師の言葉の中にあったのを思い出しました。背伸びしすぎて、足がつるくらいの中身の濃いひとときでした。ココロの筋肉の超回復を願って、次回も是非お仲間に加えていただきますように！！

Hong Kong （1997年11月掲載）

昭和38年入学　横山 直也

中華人民共和国香港特別行政区となった当時、香港は７日１日以降何かしらの変化があるのではないかと誰もが思っていた訳ですが、私の個人的な印象・感覚では正直いって何の変化もありません。拍子抜けするほど何もありません。仕事の上でも個人生活でも変化は全く感じられません。

日本のマスコミや評論家は、何かというと香港悲観論を展開しますが、之は己の商売の為の「擬態」と私は見做しています。マスコミが楽観論を説いた場合、そして不幸に何かがあった時、当然観察力・洞察力が欠けていると世の中から非難されますから、己の身の安全の為に悲観論を流していると思えます。保険みたいなものでしょう。

一方評論家のほうは、既に当地で大勢を占めている楽観論をその侭是認することは、世間の批判を浴びませんし、単に同調しているだけと見做され、原稿は売れません。自分はそういう大衆とは違うんだということを強調しないことには、収入の途が絶えてしまう訳です。

私に言わせれば、彼等は大局を見ずというより、敢えて無視して局部的な事をさも全体を脅かす致命傷の如く騒いでいるに過ぎません。「木をみて森を見ない」典型です。然もこれは森が見えないのではなく、敢えて見ない振りしているのですから、その罪は非常に大きいものがあります。

８月に当地大物華僑10人位と食事を共にする機会がありました。李嘉誠・Gordon Wu・David Li等々世界的に著名な人達ばかりです。香港将来観は基本的に極めて楽観的です。私も楽観論者の一人ですが、驚いたことに彼らは私より輪をかけて楽観論だったということです。

彼等とて７月１日の回帰前は、人前で言う言わないは別として、一抹の不安は持っていた筈です。それが３ヶ月経過した今香港の将来に自信を深めています。数十年間香港で過ごしてきた人達ですし、政・財界の知人・友人も非常に多く、お互い毎日のように情報交換している訳で、彼等の分析力や一種の勘は信じて良いと私は思っています。香港民主党党首のMartin Leeは７月１日以前しきりに「中国が自制する筈が無い、C.H.Tungは中国の傀儡に過ぎない」と発言していました。要するに香港は中国の単なる一都市に「なり下がり」、将来は極めて暗いと云っていた訳です。そのM.Leeが８月末「前言を一部訂正しなければならないかも知れない」と発言、C.H.Tung政府の行動実態、そして中国の非干渉を、勿論鵜呑みではありませんが、評価し始めています。という次第で、新香港は上々のStartを切って居ります。私は当地の日本人商工会議所

の会頭もしていますので、日本の経済のミッションに香港事情を説明する場が多いのですが、上述のような話をすると皆さん一様に「そんなことは無いでしょ！？」という顔をされておられます。冒頭で述べた日本のマスコミや評論家の弊害に毒されていることをつくづく感じる次第です。香港は７月１日以降もまったく変わっていません。これからも貿易・金融の中心拠点として益々活躍してゆくことを確信しています。

香港の過去を少し振り返って見ましょう。香港が世界の歴史に登場するのは19世紀半ばです。第一次阿片戦争に負けた清国中国が1842年の南京条約に依り英国に香港島を割譲したことは世界史で学んだ通りです。当時の香港島の住人は四千人弱の寒村でした。然しこの戦争は阿片で巨万の利益をあげていた英国に対し、時の清朝政府がその害を取り締まったことがそもそも原因であり、正義は清朝中国にありました。香港を割譲する見返りに、英国は阿片を最早中国に持ち込まないことを約束したにも不拘、英国はその旨味を忘れられず、引き続き阿片を持ち込んだ為、第二次阿片戦争が勃発（1856年）、清朝は再び敗れてしまいました。そして英国が北京条約（1869年）で得たのが九竜です。この二つの領土は、清朝から英国への割譲であり、永久に英国領になった訳です。

1898年に英国は九竜の北側（新界）を99年間租借しました。香港島と九竜のインフラ（特に水源）のために借りたのが実態です。その99年の年限が今年（1997年）の７月１日だった訳です。借りたもの（新界）を返すのは当然としても、貰ったもの（香港・九竜）迄返すことになったのは、鄧小平とサッチャーとの交渉結果ではありますが、詰まる処は水源であったようです。香港島と九竜には水源が無く100％新界及び深圳（中国）に依存していて、それを止められれば、香港・九竜は一巻の終わりの為、英国は泣く泣く手放さざるを得なかったというのが実態です。

返還交渉に負けた英国ではありますが、過去150年余の香港統治振りは誠に見事であり、夫が今日の香港の繁栄を築いた礎になったといっても過言ではありません。

具体的には、そして一言でいうなら、Laisser-faireを文字通り実現したということです。税金も含めた規制を限りなく緩和し、民の竈を最大限豊かにしようというねらいです。

御蔭で所得税は個人で累進なしの15％、法人も16.5％という低さです。日本の法人税が実効約50％になるのと比較して、如何に効率的なGovernmentであるか一目瞭然です。然も今この税率をさらに下げようとしています。国債もありません。それどころか７兆円にも及ぶ内部留保を政府は保有しています。税金が安いのにこれだけの貯え。見事というしかありません。それに引き換え、自分自身の生活維持の為に行政を骨抜きにすることにうつつをぬかす日本の役人共の乏しさをつくづく感じます。香港の官

僚の報酬は民間よりはるかに高額でその清廉潔白さは誰もが尊敬しています。そういう健全な香港が今後も従来同様健全に発展していくことを、そこで働く一員として強く願っています。

香港という外国（香港自体は国ではありませんが）に住むようになって、日本同様の問題点があぶり出されて来ています。やはり「敵を知り己を知らなければ」「井の中の蛙」でしかないようです。

（香港三菱商事会社社長）

ミャンマー（旧ビルマ）に住んでみて　（1999年６月掲載）

昭和57年入学　　川上　泰司

1995年の３月から98年の３月まで、３年間ミャンマー(The Union of Myanmar)の首都ヤンゴン市（旧ラングーン）の日本大使館に赴任する機会を得ました。ミャンマーといってもどこにあるのか、どんな国なのか見当もつかない人がほとんどだと思いますので、簡単にご紹介したいと思います。

まず、ちょっとクイズを出してみましょう。

Ｑ１　ミャンマーは社会主義国である。本当か嘘か。

Ｑ２　水島上等兵（ビルマの竪琴）は実在の人物である。本当か嘘か。

Ｑ３　毎年、独立記念日には反旧日本軍のキャンペーンが行われる。本当か嘘か。

Ｑ４　元英国植民地のため、自動車は左側通行である。本当か嘘か。

Ｑ５　軍国主義であるミャンマーでは、徴兵制が実施されている。本当か嘘か。

わかりますか？答えは、全てNoです。Ｑ１は、88年に社会主義を捨て市場経済主義に移行しています。Ｑ２は、もともと「ビルマの竪琴」はフィクションです。ミャンマーでは、お坊さんが楽器を弾くことは御法度だそうです。しかし、似た境遇の人はたくさんおられるようです。Ｑ３は、逆に旧日本軍に対する感謝の言葉があふれています。世界中で最も親日的な国のひとつではないでしょうか。Ｑ４は、反英国主義の思想を反映して（？）右側通行です。Ｑ５は、ミャンマーは軍国主義でもなく、徴兵制もありません。政権が軍事政権であるだけです。

ミャンマーは、インド、バングラデシュ、中国、ラオス、タイに囲まれた国で、面積は日本の1.8倍、人口は約半分の国です。連邦制をひいており、７州７管区で構成されています。多民族国家で、135の民族がいるといわれています。約６割を占めるビルマ族は敬虔な仏教徒で、各地にパゴダといわれる仏塔が建っています。少数民族の中には、キリスト教やイスラム教を信じているものも少なくありません。

ミャンマーでの生活は、非常に不便で退屈であったけれども楽しかった、というのが正直な感想です。一番困ったのが停電の多さです。まる１日以上も停電することがあり、冷蔵庫に保管してある貴重な日本食がみんなとけてしまう事態になります。電気が来ても電圧が振れるため、蛍光灯がつかないとか、電気製品がすぐ壊れるなど、日本では想像のできないことがしばしば起こりました。ロウソクの灯をともし、クーラーのない蒸し風呂のような部屋で夜を明かすことも今や楽しい思い出となっています。

ミャンマーでの唯一の楽しみはゴルフです。旧大英帝国の植民地であったため全国

至る所にゴルフ場があります。ベトナムとの大きな違いです。一方、食事は、中華料理とインド料理とタイ料理のまずいところを足したような、似ているけれども似ていない料理で、ベトナム料理がおいしいのと比べて逆の意味で大きな違いです。新宿や大久保あたりにミャンマー料理店があるので、一度トライしてみてください。おいしいのはシャンカウソェ（ヌードルの一種）ぐらいでしょうか。

ミャンマーの第一のスポーツはサッカーです。バドミントンも人気があるスポーツのひとつです。しかし、体育館がほとんどない、あっても天井が低い、また電気がなく暗い、ネットもない（単にひもをかけている）、地面はコンクリートか土という状態でした。地元のクラブの練習に参加させてもらいましたが、バドミントン自体はミャンマー人の若者と楽しくやれましたが、このような環境と暑さのせいで、２～３回でやめてしまいました。

ミャンマーの日本人コミュニティはわずか300人ほど。楽しいことやイヤなことがいろいろあります。どこかに行っても、昨日どこどこに車があったね！などと相互監視機能が働きます。逆に、いろいろな人と家族ぐるみのお付き合いができたのも貴重な経験でした。

最後に、真面目なはなしを。前段のクイズでもおわかりのように、日本で入手できる情報は、特にマスメディアによってもたらされるそれは非常にステレオタイプで偏っているものです。それぞれの国には非常に複雑な歴史的、文化的な背景があること、ややもするとそういった創造された情報で我々がものごとを判断しがちであること、それが非常に危険であることを痛感した３年間でした（そういう私が入手している情報も偏っているはずですが）。

決められた量を超えてしまいましたので、詳しいことは、一杯やりながらでも聞いて下さい。私の第二の故郷（私の息子にとっては第一の故郷？）であるミャンマーについて（裏話も）よろこんでお話しします。

（運輸省勤務）

●記　　録●

歴代部長・監督・主将・主務・主要戦績

西暦	和暦	部長	監督	主将	主務	リーグ戦		対京大戦		国公立戦			七大戦	
						春	秋	男子	女子	団体	ｼﾝｸﾞﾙｽ	ﾀﾞﾌﾞﾙｽ	男子	女子
1951	26	片山信夫		上野　正	早津秀彦	—	—	● 4-11		—			—	
1952	27	〃		上野　正	早津秀彦	2部4位	2部4位	● 5-10		—			—	
1953	28	〃		上野　正	司馬正次	2部6位	2部3位	○11- 4		1位			—	
1954	29	〃		山下　宏	司馬正次	2部4位	2部5位	○ 8- 7		1位			—	
1955	30	〃		対馬哲郎	足達哲之	2部6位	3部5位	● 5-10		1位			—	
1956	31	〃		足達哲之	深田健介	3部4位	3部1位	○12- 3		1位			—	
1957	32	〃		須藤晃一	西本　正	3部3位	3部3位	○11- 4		1位			—	
1958	33	〃	司馬正次	秋山敦男	橋本　章	3部4位	3部5位	○ 8- 7		3位			4位	
1959	34	〃	〃	古沢松之丞	比田　宏	3部2位	3部2位	○12- 3		2位			2位	
1960	35	〃	〃	石川滄一	渡辺光夫	3部1位	2部6位	○11- 4		2位			3位	
1961	36	〃	秋山敦男	金丸清昭	佐藤祥次	2部6位	3部2位	○11- 4		1位		木村・平松	1位	
1962	37	〃	〃	木村　武	小野利明	3部1位	2部5位	○ 9- 6		1位	馬場	平松・馬場	1位	
1963	38	〃	〃	平松由紀夫	鈴木敏之	2部5位	2部4位	○11- 4		1位	平松	重松・北浦	1位	
1964	39	〃	〃	大西正芳	鈴木明夫	2部6位	2部6位	○11- 4		1位			6位	
1965	40	〃	石川滄一	森本　剛	鈴木明夫	3部1位	2部6位	○ 8- 7		1位	北浦	北浦・横山	1位	
1966	41	〃	〃	北浦正一	木下英夫	2部5位	2部6位	● 7- 8		1位	横山	横山・木下	1位	
1967	42	〃	金丸清昭	大門　宏	今井貞夫	2部6位	3部5位	● 6- 9		2位			6位	
			木村　武	伊丹　誠	神田道男									
1968	43	〃	〃	碓井　晃	新美和久	3部4位	3部5位	● 4-11		3位			6位	
1969	44	〃	〃	川上邦彰	佐々木憲一	3部4位	3部4位	○ 8- 7		1位	小林		5位	
1970	45	上野　正	〃	小林　健	飯倉正夫	3部4位	3部4位	● 5-10		1位	小林	小林・岡本	4位	
1971	46	〃	〃	岡本伸行	長谷川真一	3部3位	3部4位	○ 9- 6		2位	岡本		4位	
1972	47	〃	川上邦彰	角本　敬	丹羽敏春	3部2位	3部4位	● 5-10		2位	江藤	江藤・増田	6位	
1973	48	〃	〃	伊藤正博	角田　隆	3部1位	3部1位	○10- 5	●0-5	1位	江藤	江藤・増田	5位	6位
1974	49	〃	〃	関　和夫	緑川清志	2部6位	3部2位	● 3-12	●0-5	1位	松本	松本・野中	4位	6位
1975	50	〃	江藤弘純	松本　博	渡辺巧教	3部3位	3部3位	● 4-11	●1-4	2位	野中		5位	5位

歴代部長・監督・主将・主務・主要戦績

西暦	和暦	部長	監督	主将	主務	リーグ戦		対京大戦		国公立戦			七大戦	
						春	秋	男子	女子	団体	ｼﾝｸﾞﾙｽ	ﾀﾞﾌﾞﾙｽ	男子	女子
1976	51	上野　正	江藤弘純	村田光ニ	金井一弘	3部2位	3部2位	● 3-12	●2-3	2位			6位	2位
1977	52	〃	〃	三角正純	奈良正太	3部4位	3部5位	● 4-11	●2-3	2位			7位	7位
1978	53	〃	〃	上田真理人	坂井真樹	3部6位	3部6位	● 4-11	●0-5	3位			7位	7位
1979	54	〃	〃	小松秋広	山本直史	4部2位	4部1位	● 6- 9	●1-4	2位			7位	7位
1980	55	〃	村田光ニ	森　　明	内藤史門	3部4位	3部5位	○ 8- 7	●1-4	2位			4位	7位
1981	56	〃	〃	中田義文	芳賀俊一	3部4位	3部4位	○10- 5	●1-4	1位			4位	6位
1982	57	〃	〃	炭谷俊樹	築地永治	3部4位	3部5位	● 5-10	○4-1	2位			5位	4位
1983	58	〃	〃	山梨裕司	小林伸宏	3部5位	3部6位	○ 9- 6	○4-1	3位			4位	3位
1984	59	〃	〃	河野　匡	佐伯　修	4部2位	4部1位	● 5-10	○4-1	1位		村田・森	7位	5位
1985	60	〃	〃	村田　章	盛田謙ニ	4部1位	3部5位	○ 8- 7	○3-2	2位		村田・森	6位	4位
1986	61	〃	〃	森　郁雄	青山豊久	3部5位	3部5位	○ 8- 7		2位		森・原田	5位	
1987	62	〃	〃	壁矢和久	寶迫　巌	3部6位	4部1位	● 6- 9	○4-1	1位			5位	5位
1988	63	〃	〃	長谷川孝裕	木藤祐一郎	4部1位	4部1位	● 7- 8	○3-2	1位			3位	5位
1989	1	〃	〃	野村　顕	中野史彦	3部6位	4部3位	○11- 4	●2-3	1位			6位	5位
1990	2	〃	壁矢和久	戸塚英男	前間　聡	4部1位	3部3位	○11-4	ｵｰﾌﾟﾝ	1位	戸塚		2位	6位
1991	3	〃	〃	伊藤隆史	茂木淳一	3部5位	3部4位	○10- 5	○3-2	1位			5位	5位
1992	4	三浦　登	〃	石田仁志	市原健一	3部4位	3部3位	○11- 4	ｵｰﾌﾟﾝ	1位	香西	石田・香西	2位	7位
1993	5	〃	〃	林　崇文	平野正浩	3部5位	3部3位	○10- 5	●2-3	2位			3位	7位
1994	6	〃	〃	川　信郎	松薗裕二	3部4位	3部5位	○12- 3	●2-3	1位	香西		2位	7位
1995	7	〃	後藤拓也	伊藤恒有	光澤茂信	3部5位	3部6位	○ 8- 7	●1-4		香西	香西・岩井	4位	6位
1996	8	〃	〃	岩井　完	高須大典	4部1位	3部4位	○ 8- 7	●1-4	1位	古川	古川・川上	3位	6位
1997	9	〃	〃	古川敦司	志田泰盛	3部3位	3部2位	○ 9- 6	●2-3	1位	鎌田		3位	7位
1998	10	〃	〃	小林亮治	勘里裕樹	3部5位	3部5位	● 5-10	●0-5	1位			6位	7位
1999	11	〃	石田仁志	鎌田祥吾	木村好克	3部6位	4部2位	● 4-11	●2-3	1位			7位	7位
2000	12	〃	〃	杉本光貞	斎藤譲一	4部6位		● 7- 8	●1-4				6位	6位

関東大学リーグ戦（男子）

西暦	和暦	春	秋	成績	入替戦	参加校数	備考
1951	26	春		—			
			秋				
1952	27	春		2部4位		3部17校	この年加盟
			秋	2部4位		3部17校	
1953	28	春		2部6位	○青学	〃	
			秋	2部3位		3部19校	
1954	29	春		2部4位		〃	
			秋	2部5位		4部22校	
1955	30	春		2部6位	●日大	〃	
			秋	3部5位		4部24校	
1956	31	春		3部4位		〃	
			秋	3部1位	●横国	〃	
1957	32	春		3部3位		5部27校	
			秋	3部3位		5部28校	
1958	33	春		3部4位		〃	
			秋	3部5位		5部27校	
1959	34	春		3部2位		5部28校	
			秋	3部2位		〃	
1960	35	春		3部1位	○関学	〃	
			秋	2部6位	○一橋	5部30校	
1961	36	春		2部6位	●横市	〃	
			秋	3部2位		5部33校	
1962	37	春		3部1位	○一橋	〃	
			秋	2部5位		〃	
1963	38	春		2部5位		6部34校	ﾌﾚｰﾑｼｮｯﾄOKとなる
			秋	2部4位		〃	
1964	39	春		2部6位	○明学	6部35校	
			秋	2部6位	●一橋	〃	
1965	40	春		3部1位	○一橋	6部36校	ｵｰﾀﾞｰ：3－3－3
			秋	2部6位	○明学	〃	水鳥球使用
1966	41	春		2部5位		6部38校	
			秋	2部6位	○一橋	〃	
1967	42	春		2部6位	●一橋		
			秋	3部5位			
1968	43	春		3部4位			
			秋	3部5位		7部42校	
1969	44	春		3部4位		〃	
			秋	3部4位			
1970	45	春		3部4位			
			秋	3部4位			

関東大学リーグ戦（男子）

西暦	和暦	春	秋	成績	入替戦	参加校数	備考
1971	46	春		3部3位		8部48校	
			秋	3部4位			
1972	47	春		3部2位			
			秋	3部4位			
1973	48	春		3部1位	●千葉大	8部50校	
			秋	3部1位	○千葉大	9部51校	
1974	49	春		2部6位	●千葉大	9部55校	
			秋	3部2位		9部58校	
1975	50	春		3部3位		10部59校	
			秋	3部3位		11部65校	
1976	51	春		3部2位		11部67校	これ以降3複4単
			秋	3部2位		12部70校	
1977	52	春		3部4位		12部73校	立教4部へ降格
			秋	3部5位		12部72校	理科大4部へ降格
1978	53	春		3部6位	○	13部77校	(3部の整理進む)
			秋	3部6位	●	5部79校	3部以下複数ﾘｰｸﾞ制
1979	54	春		4部2位		5部82校	
			秋	4部1位	○埼玉		
1980	55	春		3部4位		5部87校	
			秋	3部5位		5部90校	
1981	56	春		3部4位		5部92校	
			秋	3部4位		5部96校	
1982	57	春		3部4位		6部96校	
			秋	3部5位		6部94校	
1983	58	春		3部5位		6部92校	
			秋	3部6位	●工学院	〃	
1984	59	春		4部2位		6部93校	
			秋	4部1位	●都立	〃	
1985	60	春		4部1位	○一橋	6部94校	
			秋	3部5位		6部97校	
1986	61	春		3部5位		〃	
			秋	3部5位		〃	
1987	62	春		3部6位	●横国	6部99校	
			秋	4部1位	●防衛	〃	
1988	63	春		4部1位	●成蹊	6部100校	
			秋	4部1位	○都立	〃	
1989	1	春		3部6位	●芝工	6部101校	
			秋	4部3位		6部103校	
1990	2	春		4部1位	○明学	〃	
			秋	3部3位		〃	

関東大学リーグ戦（男子）

西暦	和暦	春	秋	成績	入替戦	参加校数	備考
1991	3	春		3部5位		6部105校	
			秋	3部4位		〃	
1992	4	春		3部4位		〃	
			秋	3部3位			
1993	5	春		3部5位			
			秋	3部3位			
1994	6	春		3部4位		6部101校	
			秋	3部5位			
1995	7	春		3部5位			
			秋	3部6位	●日大経済		
1996	8	春		4部1位	○国士舘		
			秋	3部4位		6部104校	
1997	9	春		3部3位		6部105校	第100回記念大会
			秋	3部2位			
1998	10	春		3部5位			これ以降2複3単
			秋	3部5位			
1999	11	春		3部6位	●明学	6部105校	ﾙｰﾙ改訂：
			秋	4部2位		〃	ｾｯﾃｨﾝｸﾞは14点ｵｰﾙのみ
2000	12	春		4部6位	○上智	6部97校	
			秋				

関東大学リーグ戦（女子）

西暦	和暦	春	秋	成績	入替戦	参加校数	備考
1973	48	春					
			秋	9部3位		9部56校	秋：新規加盟
1974	49	春		9部2位		10部61校	
			秋	9部2位		〃	
1975	50	春		9部3位		11部67校	
			秋	9部4位		12部71校	
1976	51	春		9部2位		12部72校	
			秋	9部1位	○武蔵野音大	13部76校	
1977	52	春		8部4位		13部80校	
			秋	8部6位	●東海大	13部81校	
1978	53	春		9部6位		14部86校	
			秋	5部		5部89校	3部以下複数ﾘｰｸﾞ制
1979	54	春		5部2位		5部90校	
			秋	5部2位		5部91校	
1980	55	春		5部2位		〃	
			秋	5部2位		5部92校	
1981	56	春		5部3位		5部94校	
			秋	5部2位		5部97校	
1982	57	春		5部2位		6部97校	
			秋	5部2位		6部98校	
1983	58	春		5部1位	●上智	〃	
			秋	5部2位		〃	
1984	59	春		5部2位		6部102校	
			秋	5部2位		〃	
1985	60	春		5部5位		6部101校	
			秋	5部4位		6部103校	
1986	61	春		5部4位		〃	
			秋	5部4位		6部109校	
1987	62	春		5部3位		〃	
			秋	5部1位	○都留文	6部101校	
1988	63	春		4部3位		6部103校	
			秋	4部5位		6部107校	
1989	1	春		4部6位	○文教経営	〃	
			秋	4部5位		6部102校	
1990	2	春		4部5位		〃	
			秋	4部5位		6部101校	
1991	3	春		4部5位		6部104校	
			秋	4部2位		6部106校	

関東大学リーグ戦（女子）

西暦	和暦	春	秋	成績	入替戦	参加校数	備考
1992	4	春		4部5位		6部108校	
			秋	4部5位			
1993	5	春		4部5位			
			秋	4部5位			
1994	6	春		4部6位	●	6部104校	
			秋	5部6位			
1995	7	春		5部2位			
			秋	5部3位			
1996	8	春		5部3位			
			秋	5部5位		6部111校	
1997	9	春		5部4位		6部113校	
			秋	5部6位			
1998	10	春		5部6位			
			秋	5部6位			
1999	11	春		5部5位		6部113校	
			秋	5部3位		6部114校	
2000	12	春		5部2位		6部96校	
			秋				

対 京 都 大 学 定 期 戦

回	西暦	和暦	日程	会場	成績		レセプション	宿舎	備考
					男子	女子			
1	1951	26		近衛中学	● 4-11		(寮食)	三高吉田寮	
2	1952	27		(京都)	● 5-10			百万遍知恩寺	
3	1953	28		国民体育館	○11- 4		同窓会館	同窓会館	
4	1954	29		九條小	○ 8- 7			百万遍知恩寺	
5	1955	30		駒場一体	● 5-10		同窓会館	同窓会館	
6	1956	31		(京都)	○12- 3			百万遍知恩寺	
7	1957	32		駒場一体	○11- 4		同窓会館	同窓会館	
8	1958	33	8/12	京都工繊大	○ 8- 7		楽友会館	京大スポーツ会館	(農学部グランド内)
9	1959	34	7/12	駒場一体	○12- 3		更新館	更新館	
10	1960	35	7/16, 17	京都工繊大	○11- 4		楽友会館	京大スポーツ会館	
11	1961	36	7/15, 16	文京三中	○11- 4		白十字	更新館	
12	1962	37	7/14, 15	京都学芸大	○ 9- 6		楽友会館	育英会館	
13	1963	38	7/13, 14	高円寺体育館	○11- 4		山上会議所	更新館	
14	1964	39	7/18, 19	平安女学院	○11- 4		教育文化センター	成山荘	
15	1965	40	7/17, 18	検見川	○ 8- 7		白十字	検見川合宿所	対抗クロスカントリー
16	1966	41	7/16, 17	橘女学院	● 7- 8		教育文化センター	さわや旅館本館	
17	1967	42	7/21, 22	検見川	● 6- 9		学士会館分館	検見川合宿所	
18	1968	43	7/20, 21	京都工繊大	● 4-11		教育文化センター	京大スポーツ会館	
19	1969	44	7/19, 20	検見川	○ 8- 7		学士会館分館	検見川合宿所	
20	1970	45	7/25, 26	京都工繊大	● 5-10		教育文化センター	京大スポーツ会館	
21	1971	46	7/24, 25	駒場四体	○ 9- 6		学士会館分館	同窓会館	四体完成後初めての試合
22	1972	47	7/22, 23	京大体育館	● 5-10		京大生協		
23	1973	48	7/21, 22	一橋大	○10- 5	●0-5	東大生協	同窓会館	
24	1974	49	7/20, 21	京大体育館	● 3-12	●0-5	京大生協	京大スポーツ会館	
25	1975	50	7/19, 20	駒場四体	● 4-11	●1-4	東大生協	同窓会館	
26	1976	51	7/18, 19	京大体育館	● 3-12	●2-3	京大生協	京大スポーツ会館	
27	1977	52	7/23, 24	駒場四体	● 4-11	●2-3	駒場寮食堂	東急修学旅行会館	
28	1978	53	7/22, 23	京大体育館	● 4-11	●0-5	京大生協	京大スポーツ会館	
29	1979	54	7/21, 22	駒場四体	● 6- 9	●1-4	駒場寮食堂	同窓会館	

対 京 都 大 学 定 期 戦

回	西暦	和暦	日程	会場	戦績		レセプション	宿舎	備　考
					男子	女子			
30	1980	55	7/19, 20	京大体育館	○ 8- 7	●1-4	北部生協	京大スポーツ会館	
31	1981	56	7/25, 26	駒場四体	○10- 5	●1-4	駒場生協食堂	同窓会館	
32	1982	57	7/16, 17	京大体育館	● 5-10	○4-1	北部生協	京大スポーツ会館	
33	1983	58	7/23, 24	駒場四体	○ 9- 6	○4-1	駒場生協食堂	同窓会館	
34	1984	59	7/14, 15	京大体育館	● 5-10	○4-1	北部生協	京大スポーツ会館	
35	1985	60	7/20, 21	駒場四体	○ 8- 7	○3-2	駒場生協食堂	同窓会館	
36	1986	61	7/19, 20	京大体育館	○ 8- 7		吉田食堂	京大スポーツ会館	
37	1987	62	7/19, 20	駒場四体	● 6- 9	○4-1	駒場寮食堂	代々木青少年スポーツセンター	
38	1988	63	7/16, 17	京大体育館	● 7- 8	○3-2	吉田食堂	京大スポーツ会館	4 月駒場新体育館竣工→第 1 体育館、旧 4 体→第 2 体育館
39	1989	1	7/15, 16	駒場ニ体	○11- 4	●2-3	駒場寮食堂	同窓会館	
40	1990	2	7/14, 15	京大体育館	○11- 4	オープン	吉田食堂	京大スポーツ会館	
41	1991	3	7/13, 14	駒場ニ体	○10- 5	○3-2	駒場生協食堂	同窓会館	
42	1992	4	7/18, 19	京大体育館	○11- 4	●2-3	吉田食堂	京大スポーツ会館	
43	1993	5	7/10, 11	駒場ニ体	○10- 5	●2-3	駒場生協食堂	同窓会館	
44	1994	6	7/16, 17	京大体育館	○12- 3	●2-3	吉田食堂	京大スポーツ会館	
45	1995	7	7/15, 16	駒場一体	○ 8- 7	●1-4	駒場生協食堂	同窓会館	
46	1996	8	7/13, 14	京大体育館	○ 8- 7	●1-4	吉田食堂	京大スポーツ会館	
47	1997	9	7/19, 20	駒場二体	○ 9- 6	●2-3	駒場生協食堂	同窓会館	
48	1998	10	7/11, 12	京大体育館	● 5-10	●0-5	吉田食堂	京大スポーツ会館	
49	1999	11	7/17, 18	駒場ニ体	● 4-11	●2-3	駒場生協食堂	同窓会館	
50	2000	12	7/1, 2	京大体育館	● 7- 8	●1-4	吉田食堂	京大スポーツ会館	

戦績記録及びオーダー（男子）

第8回 1958年(昭和33年)

	東大	8(	D:3-2 S:5-5	)7	京大
D1	古沢 小原	2(	15-4 15-2	)0	小野 田中
D2	石川 比田	1(	15-5 10-15 7-15	)2	棗田
D3	金丸 森(健)	2(	15-4 15-1	)0	吉野 富田
D4	秋山 森	2(	15-10 15-12	)0	北脇 太田
D5	片上	0(	2-15 5-15	)2	船橋 中谷
S1	橋本	2(	15-5 15-5	)0	小野
S2	古沢	1(	10-15 15-5 13-18	)2	中谷
S3	工藤	0(	4-15 7-15	)2	棗田
S4		0(	2-15 1-15	)2	
S5	石川	2(	15-2 15-4	)0	富田
S6	森(健)	0(	6-15 6-15	)2	北脇
S7	角川	2(	15-2 15-11	)0	田中
S8	金丸	2(	15-4 15-7	)0	吉野
S9	比田	1(	15-12 12-15 2-15	)2	太田
S10	秋山	2(	18-17 15-2	)0	船橋

第9回 1959年(昭和34年)

	東大	12(	D:4-1 S:8-2	)3	京大
D1	石川 金丸	2(	15-6 15-11	)0	北岸 棗田
D2	森 比田	2(	15-9 15-11	)0	舟橋 植村
D3	木村 浜田	1(	15-11 5-15 15-18	)2	北脇 太田
D4	岡野 新田	2(	15-12 15-9	)0	馬渕 杉本
D5	古沢 小原	2(	15-8 15-7	)0	後藤 渡辺
S1	木村	2(	15-4 15-9	)0	太田(考)
S2	石川	2(	15-11 15-5	)0	植村
S3	岡野	2(	15-3 15-5	)0	渡辺
S4	森	2(	15-3 15-6	)0	杉本
S5	新田	0(	2-15 5-15	)2	北岸
S6	比田	2(	15-6 15-6	)0	棗田
S7	金丸	2(	15-0 15-11	)0	舟橋
S8	篠田	0(	12-15 14-17	)2	馬渕
S9	小原	2(	8-15 15-6 15-5	)1	北脇
S10	古沢	2(	10-15 15-8 15-10	)1	後藤

戦績記録及びオーダー（男子）

第 10 回 1960 年(昭和 35 年)

	東大	11(	D: 5- 0 S: 6- 4	) 4	京大
D1	岡野 平松	2(	15-6 15-2	)0	井河 深尾
D2	藤原 浅野	2(	15-6 15-14	)0	船橋 安達
D3	三浦 重松	2(	14-17 15-3 15-8	)1	古瀬 杉本
D4	石川 金丸	2(	15-6 15-9	)0	植村 後藤
D5	木村 浜田	2(	15-3 15-2	)0	野呂 吉岡
S1	岡野	2(	15-6 15-1	)0	野呂
S2	平松	2(	15-5 15-9	)0	船橋
S3	篠田	0(	8-15 2-15	)2	後藤
S4	森	1(	7-15 15-10 3-15	)2	古瀬
S5	木村	2(	15-1 15-2	)0	吉岡
S6	川元	0(	10-15 7-15	)2	植村
S7	金丸	2(	15-8 15-10	)0	杉本
S8	新田	1(	10-15 15-11 6-15	)2	井村
S9	浜田	2(	18-17 15-4	)0	深尾
S10	藤原	2(	15-5 15-2	)0	安達

第 11 回 1961 年(昭和 36 年)

	東大	11(	D: 4- 1 S: 7- 3	)4	京大
D1	金丸 浜田	2(	15- 7 15- 7	)0	植村 大場
D2	三浦 重松	2(	15-12 18-15	)0	荒木 石橋
D3	石平 城石	1(	15-11 2-15 0-15	)2	古瀬 杉本
D4	藤原 浅野	2(	15- 7 15- 9	)0	井村 深尾
D5	木村 平松	2(	15- 1 15- 0	)0	野呂 吉岡
S1	三浦	2(	15- 2 15- 8	)0	大場
S2	重松	2(	15- 0 15- 2	)0	吉岡
S3	藤原	0(	13-15 13-18	)2	井村
S4	平松	2(	15- 0 15- 2	)0	古瀬
S5	浜田	2(	15- 6 15- 8	)0	野呂
S6	金丸	2(	15- 5 15- 5	)0	石橋
S7	浅野	2(	15- 1 15- 4	)0	深尾
S8	石平	0(	7-15 7-15	)2	植村
S9	城石	0(	12-15 9-15	)2	荒木
S10	木村	2(	15- 7 15- 0	)0	松本

戦績記録及びオーダー（男子）

第 12 回 1962 年(昭和 37 年)

	東大	9(	D: 3- 2 S: 6- 4	)6	京大
D1	大西 馬場	2(	15- 2 15- 8	)0	野呂 吉岡
D2	平松 三浦	2(	15- 7 15- 2	)0	長尾 奥村
D3	渡辺 五十嵐	0(	4-15 2-15	)2	植村 井村
D4	重松 徳田	0(	2-15 10-15	)2	大場 石橋
D5	木村 城石	2(	15- 5 15- 9	)0	森本 近藤
S1	大西	0(	6-15 6-15	)2	石橋
S2	森	2(	15- 7 15- 2	)0	吉岡
S3	三浦	1(	10-15 15-10 2-15	)2	植村
S4	城石	2(	15-12 17-18 15- 8	)1	森本
S5	馬場	2(	15- 2 15- 4	)0	近藤
S6	平松	2(	15- 0 15- 0	)0	野呂
S7	重松	2(	5-15 15- 6 15- 6	)1	長尾
S8	五十嵐	0(	4-15 2-15	)2	井村
S9	渡辺	1(	12-15 15- 8 3-15	)2	大場
S10	木村	2(	15- 4 15- 4	)0	奥村

第 13 回 1963 年(昭和 38 年)

	東大	11(	D: 3- 2 S: 8- 2	)4	京大
D1	重松 北浦	2(	15-10 15- 7	)0	井村 荒木
D2	森本 木下	2(	15- 9 15- 4	)0	森本 近藤
D3	平松 渡辺	0(	9-15 8-15	)2	長尾 稲垣
D4	城石 三浦	2(	15- 5 15- 4	)0	黒田 谷内田
D5	徳田 森	0(	9-15 6-15	)2	大場 石橋
S1	重松	2(	7-15 15- 9 18-15	)1	長尾
S2	森本	0(	10-15 6-15	)2	稲垣
S3	渡辺	2(	15- 3 15-10	)0	黒田
S4	徳田	2(	15- 5 15- 5	)0	近藤
S5	木下	2(	17-15 15- 4	)0	森本
S6	小野	0(	9-15 2-15	)2	石橋
S7	北浦	2(	15-0 15-5	)0	谷内田
S8	城石	2(	15- 4 15- 8	)0	大場
S9	平松	2(	15- 0 15- 0	)0	荒木
S10	三浦	2(	15- 9 12-15 15- 7	)1	井村

戦績記録及びオーダー（男子）

第 14 回 1964 年(昭和 39 年)

	東大	11(	D: 4- 1 S: 7- 3	)4	京大
D1	大西 森本	2(	15- 8 15- 9	)0	黒田 木村
D2	江森 横山	0(	5-15 0-15	)2	長尾 稲垣
D3	北浦 木下	2(	15- 4 15- 0	)0	谷内田 森本
D4	谷合 浜中	2(	11-15 15- 9 15-11	)1	細川 中山
D5	渡辺 徳田	2(	15- 1 15- 6	)0	谷 宮川
S1	森本	2(	15- 8 15- 4	)0	木村
S2	横山	2(	15- 1 15-12	)0	石橋
S3	北浦	2(	15- 2 15- 1	)0	中山
S4	渡辺	0(	4-15 2-15	)2	稲垣
S5	井上	2(	15-10 16-17 15- 8	)1	宮川
S6	徳田	2(	15- 9 15- 7	)0	森本
S7	谷合	0(	10-15 7-15	)2	黒田
S8	浜中	1(	12-15 15-11 7-15	)2	長尾
S9	木下	2(	15- 3 15- 3	)0	谷内田
S10	大西	2(	15- 3 15- 6	)0	谷

第 15 回 1965 年(昭和 40 年)

	東大	8(	D: 2- 3 S: 6- 4	)7	京大
D1	北浦 横山	2(	15- 0 15- 3	)0	谷 谷内田
D2	木下 森本	2(	15- 5 15-10	)0	木村 中山
D3	鈴木 脇田	0(	3-15 2-15	)2	石橋 早田
D4	井上 浜中	0(	14-17 12-15	)2	稲垣 細川
D5	神田 本沢	0(	0-15 3-15	)2	黒田 長尾
S1	浜中	2(	17-14 15- 4	)0	木村
S2	森本	2(	15- 3 15- 1	)0	細川
S3	横山	2(	15- 2 15- 9	)0	宮川
S4	北浦	2(	15- 2 15- 3	)0	谷内田
S5	井上	2(	15- 5 15- 7	)0	早田
S6	脇田	0(	0-15 9-15	)2	中山
S7	江口	0(	6-15 0-15	)2	谷
S8	鈴木	0(	12-15 4-15	)2	稲垣
S9	長瀬	0(	2-15 1-15	)2	長尾
S10	木下	2(	6-15 15-12 15- 7	)1	黒田

戦績記録及びオーダー（男子）

第 16 回 1966 年(昭和 41 年)

	東大	7(	D: 2- 3 S: 5- 5	)8	京大
D1	伊丹 川上	2(	15-12 15-12	)0	岡本 大野
D2	新美 藤田	0(	1-15 6-15	)2	木村 坂口
D3	北浦 大門	2(	15- 4 15-10	)0	細川 早田
D4	木下 志岐	0(	7-15 6-15	)2	稲垣 中山
D5	本沢 神田	0(	2-15 3-15	)2	長尾 荒井
S1	伊丹	2(	18-16 15- 2	)0	黒田
S2	川上	2(	9-15 15- 5 15- 8	)1	木村
S3	北浦	2(	15- 2 15- 2	)0	荒井
S4	木下	2(	15- 5 15- 4	)0	岡本
S5	大門	2(	15- 5 15- 4	)0	早田
S6	志岐	0(	-15 -15	)2	長尾
S7	本沢	0(	0-15 5-15	)2	稲垣
S8	神田	0(	4-15 0-15	)2	細川
S9	碓井	0(	3-15 7-15	)2	坂口
S10	藤田	0(	4-15 0-15	)2	中山

第 17 回 1967 年(昭和 42 年)

	東大	6(	D: 1 - 4 S: 5 - 5	)9	京大
D1	碓井 川上	1(	5-15 17-16 15-18	)2	梅本 上り坂
D2	新美 黒川	0(	1-15 8-15	)2	木村 中山
D3	伊丹 大門	2(	15-12 15- 5	)0	大野 荒木
D4	藤田 小林	0(	9-15 8-15	)2	細川 黒田
D5	小吹 飯倉	0(	2-15 3-15	)2	早田 岡本
S1	新美	0(	0-15 5-15	)2	中山
S2	河内	0(	3-15 4-15	)2	梅本
S3	碓井	2(	15- 8 15-12	)0	荒木
S4	黒川	2(	15- 9 15- 5	)0	上り坂
S5	伊丹	2(	15- 9 17-16	)0	黒田
S6	川上	2(	15- 3 15- 5	)0	岡本
S7	三留	0(	2-15 0-15	)2	木村
S8	小林	2(	15- 8 15- 3	)0	細川
S9	小吹	0(	3-15 2-15	)2	西念
S10	藤田	0(	5-15 3-15	)2	早田

戦績記録及びオーダー（男子）

第 18 回 1968 年(昭和 43 年)

	東大	4(	D: 1 - 4 S: 3 - 7	)11	京大
D1	新美 三留	0(	4-15 0-15	)2	岡本 大野
D2	川上 小吹	2(	13-15 15-10 15- 8	)1	早田 中山
D3	神田 塚本	0(	0-15 5-15	)2	西念 荒木
D4	小林 飯倉	1(	15- 7 9-15 11-15	)2	梅本 南手
D5	岡本 小川	0(	6-15 10-15	)2	塩見 武部
S1	豊田	0(	2-15 0-15	)2	荒木
S2	小吹	0(	11-15 2-15	)2	南手
S3	川上	2(	15-11 15- 2	)0	大野
S4	小林	2(	11-15 15- 6 15- 3	)1	武部
S5	飯倉	2(	18-13 15- 7	)0	藤山
S6	新美	0(	7-15 6-15	)2	早田
S7	神田	0(	8-15 13-15	)2	岡本
S8	保持	0(	11-15 2-15	)2	梅本
S9	岡本	0(	4-15 10-15	)2	西念
S10	三留	0(	4-15 9-15	)2	中山

第 19 回 1969 年(昭和 44 年)

	東大	8(	D: 3 - 2 S: 5 - 5	)7	京大
D1	川上 小吹	2(	15- 4 15- 3	)0	荒川 塩見
D2	小林 岡本	2(	17-14 15-11	)0	西念 武部
D3	三留 河内	0(	4-15 2-15	)2	荒木 安藤
D4	飯倉 保持	2(	15-18 15- 4 15-12	)1	川村 藤山
D5	豊田 盛	0(	13-18 1-15	)2	中山 南手
S1	小林	2(	15- 0 15-12	)0	武部
S2	川上	2(	15-11 15- 8	)0	塩見
S3	小吹	0(	4-15 7-15	)2	西念
S4	岡本	2(	4-15 15-12 15- 0	)1	川村
S5	飯倉	0(	11-15 8-15	)2	荒木
S6	豊田	2(	13-15 15- 9 18-14	)1	安藤
S7	保持	2(	15- 0 12-15 15-12	)1	藤山
S8	盛	0(	12-15 9-15	)2	南手
S9	河内	0(	7-15 10-15	)2	荒川
S10	三留	0(	6-15 10-15	)2	中山

戦績記録及びオーダー（男子）

第 20 回 1970 年(昭和 45 年)

	東大	5(D: 1 - 4 S: 4 - 6)10	京大
D1	山田 岩崎	0(5-15 5-15)2	荒木 安藤
D2	小林 岡本	2(15- 9 15-12)0	吉田 植田
D3	盛 飯倉	1(15-10 12-15 6-15)2	川村 武部
D4	森安 江藤	0(0-15 2-15)2	梅本 南手
D5	豊田 小宮	0(5-15 12-15)2	荒川 塩見
S1	岡本	2(15-10 11-15 15- 3)1	植田
S2	小林	2(15- 6 15- 1)0	武部
S3	盛	2(15- 9 15-10)0	吉田
S4	豊田	0(14-18 2-15)2	南手
S5	湯浅	0(10-15 5-15)2	菅田
S6	岩崎	2(15-11 11-15 15-12)1	中路
S7	山田	0(2-15 7-15)2	荒木
S8	森安	0(1-15 2-15)2	梅本
S9	江藤	0(5-15 12-15)2	成瀬
S10	飯倉	0(14-17 4-15)2	安藤

第 21 回 1971 年(昭和 46 年)

	東大	9(D: 2 - 3 S: 7 - 3)6	京大
D1	岡本 盛	0(6-15 4-15)2	安藤 酒井
D2	角本 増田	1(12-15 15- 6 11-15)2	菅田 沢井
D3	豊田 江藤	2(13-15 15- 6 15- 3)1	植田 成瀬
D4	長谷川 尾上	2(15-10 6-15 15-13)1	卯田 松本
D5	山田 岩崎	0(9-15 16-18)2	中路 吉田
S1	増田	2(17-14 15-12)0	沢井
S2	小林	0(9-15 8-15)2	酒井
S3	盛	2(15- 1 15- 7)0	中路
S4	岩崎	0(8-15 4-15)2	安藤
S5	伊藤	0(16-17 1-15)2	成瀬
S6	江藤	2(5-15 15-10 15- 5)1	植田
S7	岡本	2(15- 5 15- 7)0	吉田
S8	角本	2(15- 6 15-11)0	卯田
S9	豊田	2(15- 4 15- 7)0	菅田
S10	山田	2(15- 2 15- 3)0	松本

戦績記録及びオーダー（男子）

第 22 回 1972 年(昭和 47 年)

	東大	5(	D: 2 - 3 S: 3 - 7	)10	京大
D1	関 大田	0(	2-15 2-15	)2	安藤 酒井
D2	角本 伊藤	2(	15-12 6-15 15- 5	)1	柴山 森
D3	松本 渡辺	2(	9-15 18-13 15-10	)1	渡辺 深津
D4	山田 (裕) 松留	0(	6-15 11-15	)2	沢井 奥村
D5	江藤 増田	1(	15- 8 11-15 13-18	)2	植田 吉田
S1	伊藤	0(	8-15 11-15	)2	酒井
S2	大田	1(	15- 9 17-18 13-15	)2	森
S3	角田	0(	0-15 1-15	)2	安藤
S4	三浦	0(	2-15 11-15	)2	芝原
S5	江藤	2(	15- 7 15- 2	)0	奥村
S6	松留	0(	4-15 9-15	)2	深津
S7	増田	2(	15- 5 15- 2	)0	沢井
S8	角本	0(	2-15 6-15	)2	植田
S9	山田 (裕)	0(	11-15 3-15	)2	吉田
S10	関	2(	15- 6 15- 7	)0	柴山

第 23 回 1973 年(昭和 48 年)

	東大	10(	D: 3 - 2 S: 7 - 3	)5	京大
D1	江藤 増田	2(	15-11 15- 6	)0	奥村 森
D2	伊藤 関	1(	15-12 12-15 6-15	)2	酒井 沢井
D3	大田 松本	2(	15-12 15- 3	)0	渡辺 藤野
D4	市川 野中	2(	12-15 15- 2 15-12	)1	植田 芝原
D5	殿谷 渡辺	0(	9-15 11-15	)2	吉田 芝山
S1	江藤	2(	15- 1 15- 6	)0	酒井
S2	角田	0(	1-15 1-15	)2	森
S3	伊藤	2(	15- 4 15- 6	)0	十亀
S4	大田	0(	7-15 5-15	)2	植田
S5	増田	2(	15- 4 15- 0	)0	藤野
S6	野中	2(	17-14 15-11	)0	西川
S7	松本	0(	14-17 7-15	)2	奥村
S8	市川	2(	15- 2 18-16	)0	渡辺
S9	関	2(	17-14 15- 9	)0	芝原
S10	殿谷	2(	7-15 17-14 15- 0	)1	沢井

戦績記録及びオーダー（男子）

第 24 回 1974 年(昭和 49 年)

	東大	3(	D: 2 - 3 S: 1 - 9	)12	京大
D1	田尻 三角	0(	1-15 2-15	)2	奥村 森
D2	後藤 船渡川	0(	8-15 7-15	)2	山本 森下
D3	松本 野中	2(	12-15 17-16 18-15	)1	酒井 芝原
D4	関 大田	2(	15- 6 15-11	)0	藤野 前川
D5	渡辺 殿谷	0(	5-15 7-15	)2	沢井 加納
S1	松本	0(	4-15 8-15	)2	芝原
S2	大田	0(	4-15 12-15	)2	森
S3	殿谷	0(	8-15 11-15	)2	渡辺
S4	後藤	0(	6-15 8-15	)2	奥村
S5	野中	2(	15- 3 15- 4	)0	山本
S6	渡辺	0(	6-15 4-15	)2	酒井
S7	村田	0(	5-15 7-15	)2	加納
S8	関	0(	7-15 13-15	)2	沢井
S9	船渡川	0(	3-15 2-15	)2	前川
S10	三角	1(	6-15 15-12 9-15	)2	森下

第 25 回 1975 年(昭和 50 年)

	東大	5(	D: 1 - 4 S: 4 - 6	)10	京大
D1	村田 大脇	0(	3-15 10-15	)2	森下 木森
D2	後藤 船渡川	0(	4-15 13-15	)2	芝原 前川
D3	松本 野中	2(	15-12 15- 5	)0	加藤 松田
D4	渡辺 三角	0(	5- 15 3-15	)2	奥村 御宿
D5	田尻 殿谷	1(	1- 15 15-11 6-15	)2	山本 加納
S1	村田	0(	3-15 1-15	)2	前川
S2	後藤	2(	15- 5 12-15 15-10	)1	松田
S3	野中	2(	15- 6 15- 9	)0	加藤
S4	松本	2(	15- 2 15-8	)0	御宿
S5	船渡川	0(	4- 15 10- 15	)2	山本
S6	中村	0(	7-15 1- 15	)2	芝原
S7	三角	2(	15- 5 15- 5	)0	三好
S8	大脇	0(	3-15 2-15	)2	奥村
S9	殿谷	1(	15-12 0-15 3-15	)2	森下
S10	渡辺	0(	5-15 4-15	)2	加納

戦績記録及びオーダー（男子）

第 26 回 1976 年(昭和 51 年)

	東大	3 (D: 1 - 4 S: 2 - 8) 12	京大
D1	萩原 小松	0( )2	
D2	野中 外山	0( )2	
D3	大脇 土屋	0( )2	
D4	村田 小西	2( ) 1	
D5	小鷹 鈴木	0( )2	
S1	野中	2( )	
S2	遠藤	( )2	
S3	萩原	( )2	
S4	土屋	( )2	
S5	大脇	2( )0	島崎
S6	小西	( )2	
S7	村田	0(12- 15 1- 15)2	前川
S8	鈴木	( )2	
S9	小鷹	( )2	
S10	外山	( )2	

第 27 回 1977 年(昭和 52 年)

	東大	4(D: 2 - 3 S: 2 - 8)11	京大
D1	荻原 小松	1(8-15 15-10 10-15)2	御宿 島崎
D2	飯田 小鷹	0(12-15 16-17)2	前川 木森
D3	鈴木 外山	0(0-15 2-15)2	森下 皆川
D4	三角 上田	2(15-6 15-4)0	浜岡 篷郷
D5	下村 小西	2(17-14 15-8)0	川村 岸本
S1	荻原	0(9-15 6-15)2	白井
S2	小松	0(12-15 10-15)2	皆川
S3	飯田	0(7-15 4-15)2	島崎
S4	小鷹	0(0-15 5-15)2	森下
S5	鈴木	1(15-9 7-15 4-15)2	浜岡
S6	外山	0(7-15 4-15)2	木森
S7	三角	2(15-7 15-5)0	篷郷
S8	上田	2(15-8 15-12)0	岸本
S9	下村	0(0-15 1-15)2	御宿
S10	小西	0(6-15 0-15)2	前川

戦績記録及びオーダー（男子）

第 28 回 1978 年(昭和 53 年)

	東大				京大
		4(	D: 1 - 4 S: 3 - 7	)11	
D1	小松 上野	1(	8-15 17-15 6-15	)2	島崎 本多
D2	遠藤 佐藤 (一)	0(	6-15 11-15	)2	白井 原
D3	山本 真川	0(	9-15 5-15	)2	佐能 福島
D4	上田 佐藤 (彰)	2(	15-11 4-15 17-14	)1	御宿 横内
D5	小池 中田	0(	13-18 16-17	)2	篷郷 吉村
S1	上野	0(	0-15 0-15	)2	御宿
S2	佐藤 (一)	0(	7-15 6-15	)2	本多
S3	古谷	0(	8-15 9-15	)2	原
S4	遠藤	0(	8-15 4-15	)2	白井
S5	山本	0(	15-18 9-15	)2	酒井
S6	小池	2(	15-10 4-15 15-10	)1	山西
S7	坂元	0(	9-15 7-15	)2	森
S8	小松	2(	18-16 15-9	)0	福島
S9	上田	2(	15-4 18-14	)2	篷郷
S10	森	0(	10-15 7-15	)2	島崎

第 29 回 1979 年(昭和 54 年)

	東大				京大
		6(	D: 3 - 2 S: 3 - 7	)9	
D1	佐藤 上野	0(	13-18 10-15	)2	原 本多
D2	内藤 芳賀	2(	15-10 18-13	)0	酒井 福島
D3	小松 森	2(	15-3 15-8	)0	小西 三上
D4	山本 小池	2(	15-6 15-10	)0	横内 川島
D5	古谷 中田	0(	2-15 9-15	)2	白井 宮下
S1	島	0(	0-15 9-15	)2	本多
S2	芳賀	1(	12-15 15-6 7-15	)2	安部
S3	上野	0(	13-18 11-15	)2	酒井
S4	小松	2(	11-15 17-16 15-10	)1	三上
S5	小池	0(	12-15 8-15	)2	原
S6	山本	2(	15-5 11-15 15-9	)1	横内
S7	古谷	0(	12-15 3-15	)2	白井
S8	佐藤	1(	15-6 4-15 1-15	)2	小西
S9	森 (明)	2(	15-12 15-8	)0	川島
S10	中田	0(	8-15 4-15	)2	宮下

戦績記録及びオーダー（男子）

第30回 1980年(昭和55年)

	東大	8(D: 3 - 2 S: 5 - 5)7	京大
D1	山梨 大井	0(3-15 3-15)2	原 本多
D2	内藤 中田	2(15-7 15-4)0	川島 堀江
D3	森 芳賀	2(15-2 7-15 15-8)1	安部 小倉
D4	大谷 野村	0(10-15 2-15)2	三上 村田
D5	高見 炭谷	2(15-12 15-8)0	福島 坂本
S1	中神	0(1-15 0-15)2	原
S2	山梨	2(15-6 15-7)0	小野山
S3	中田	0(11-15 10-15)2	本多
S4	内藤	2(15-6 15-12)0	安部
S5	森	2(15-6 15-11)0	根井
S6	大谷	0(12-15 11-15)2	小倉
S7	野村	0(2-15 6-15)2	村田
S8	芳賀	0(4-15 7-15)2	三上
S9	炭谷	2(15-11 17-14)0	宝谷
S10	高見	2(15-12 15-5)0	福嶋

第31回 1981年(昭和56年)

	東大	11(D: 4 - 1 S: 7 - 3)4	京大
D1	中田 芳賀	2(15- 3 15- 13)0	本多 小倉
D2	炭谷 山梨	2(15-10 15- 4)0	宝谷 江田
D3	野村 高見	2(10-15 15- 4 15- 8)1	森 浅田
D4	中神 井川	2(15- 7 18-14)0	石塚 森田
D5	大井 青木	0(3-15 2-15)2	村田 水間
S1	山梨	2(15-11 15- 2)0	浅田
S2	河野	2(15- 9 15-12)0	大参
S3	大島	0(17-18 8-15)2	宝谷
S4	中田	2(15- 0 15- 2)0	江田
S5	高見	2(15-12 2-15 15- 9)1	本多
S6	芳賀	2(15- 8 15- 8)0	森田
S7	中神	0(8-15 6-15)2	村田
S8	野村	2(15-12 15- 0)0	森
S9	大井	0(3-15 7-15)2	小倉
S10	炭谷	2(15- 9 15- 2)0	水間

戦績記録及びオーダー（男子）

第 32 回 1982 年(昭和 57 年)

	東大	5(	D: 0 - 5 S: 5 - 5	)10	京大
D1	高見 炭谷	0(	16-18 6-15	)2	村田(浩) 西
D2	井川 久保田	0(	12-15 4-15	)2	石塚 吉谷
D3	山梨 河野	0(	11-15 7-15	)2	水間 森田
D4	村田(章) 芹沢	0(	14-18 13-15	)2	高須賀 浅田
D5	大井 小林	1(	15- 9 13-15 8-15	)2	森 坂手
S1	青木	0(	11-15 2-15	)2	石塚
S2	大島	0(	2-15 10-15	)2	村田(浩)
S3	高見	2(	15-10 15- 9	)0	高須賀
S4	山梨	2(	15- 5 15-10	)0	森
S5	炭谷	2(	13-15 15- 7 15-11	)1	森田
S6	久保田	2(	15- 9 15- 2	)0	河井
S7	河野	1(	10-15 18-13 6-15	)2	吉谷
S8	大井	2(	3-15 18-14 15- 6	)1	西
S9	前田	1(	4-15 15- 7 5-15	)2	浅田
S10	天野	0(	1-15 0-15	)2	水間

第 33 回 1983 年(昭和 58 年)

	東大	9(	D: 3-2 S: 6-4	) 6	京大
D1	山梨 村田	0(	15- 2 15-11	)0	浅田 宮川
D2	河野 森	0(	13-15 12-15	)2	吉谷 河合
D3	久保田 芹沢	2(	17-14 15-10	)0	坂手 亀田
D4	大島 佐伯	2(	15- 8 15- 7	)0	小松 金子
D5	小林 天野	0(	3-15 6-15	)2	森田 西
S1	芹沢	2(	17-14 15-11	)0	吉谷
S2	天野	1(	15-11 7-15 9-15	)2	河井
S3	久保田	2(	15- 6 15- 3	)0	宮川
S4	佐伯	1(	6-15 15-11 2-15	)2	亀田
S5	森	0(	8-15 12-15	)2	森田
S6	山梨	2(	18-14 6-15 15-12	)1	西
S7	大島	2(	15- 9 15- 8	)0	小松
S8	河野	2(	15- 9 15- 2	)0	坂手
S9	小林	2(	15- 6 15- 8	)0	蒲原
S10	村田(章)	0(	14-17 10-15	)2	浅田

戦績記録及びオーダー（男子）

第 34 回 1984 年(昭和 59 年)

	東大				京大
		5(	D:2－3 S:3－7	)10	
D1	村田 森	1(	7-15 15-10 16-17	)2	浅田 吉谷
D2	河野 芹沢	2(	11-15 15- 4 15-11	)1	河井 亀田
D3	青木 高橋	0(	5-15 8-15	)2	小松 峰
D4	佐伯 盛田	0(	1-15 4-15	)2	西 宮川
D5	倉田 壁矢	2(	17-15 10-15 15- 9	)1	金子 多田
S1	村田	2(	15- 4 15- 3	)0	蒲原
S2	川上	0(	11-15 4-15	)2	繁田
S3	芹沢	0(	0-15 3-15	)2	浅田
S4	高橋	0(	8-15 4-15	)2	西
S5	盛田	0(	10-15 1-15	)2	河井
S6	青木	0(	7-15 7-15	)2	亀田
S7	河野	2(	15- 4 15- 2	)0	吉谷
S8	成瀬	0(	6-15 6-15	)2	宮川
S9	佐伯	2(	4-15 18-15 15- 2	)1	小松
S10	森	0(	2-15 9-15	)2	峰

第 35 回 1985 年(昭和 60 年)

	東大				京大
		8(	D:2-3 S:6-4	)7	
D1	村田 森	2(	15- 4 15-11	)0	宮川 峰
D2	赤瀬 原田	0(	14-18 3-15	)2	河井 蒲原
D3	芹沢 高橋	0(	11-15 7-15	)2	亀田 清水
D4	壁矢 長谷川	2(	15-11 15- 7	)0	石田 高本
D5	盛田 倉田	0(	6-15 15-17	)2	多田 長谷川
S1	原田	2(	15-10 15- 1	)0	高本
S2	境	0(	7-15 0-15	)2	峰
S3	村田	2(	15- 9 15- 2	)0	河井
S4	赤瀬	0(	11-15 4-15	)2	蒲原
S5	壁矢	0(	10-15 10-15	)2	宮川
S6	倉田	0(	11-15 11-15	)2	清水
S7	盛田	2(	15-10 15- 9	)0	亀田
S8	芹沢	2(	15- 6 15- 7	)0	多田
S9	高橋	2(	15-12 15- 5	)0	石田
S10	森	2(	15- 1 15- 3	)0	長谷川

戦績記録及びオーダー（男子）

第36回(1986年(昭和61年)

	東大	8(	D:2-3 S:6-4	)7	京大
D1	森 原田	1(	6-15 15- 8 12-15	)2	宮川 泉川
D2	岩松 先田	0(	9-15 8-15	)2	長谷川 吉田
D3	青山 木藤	2(	15-12 17-14	)0	野村 大塚
D4	赤瀬 壁矢	0(	5-15 6-15	)2	蒲原 峰
D5	高橋 長谷川	2(	6-15 15-13 15-12	)1	清水 下村
S1	青山	0(	1-15 3-15	)2	泉川
S2	先田	0(	10-15 9-15	)2	宮川
S3	高橋	2(	15- 1 15-13	)0	長谷川
S4	原田	2(	15- 4 17-14	)0	角田
S5	壁矢	2(	6-15 17-15 15-12	)1	吉田
S6	木藤	0(	9-15 7-15	)2	清水
S7	赤瀬	2(	15- 7 15-10	)0	大塚
S8	岩松	0(	1-15 7-15	)2	峰
S9	森	2(	15-11 15-12	)0	蒲原
S10	長谷川	2(	15- 5 15- 8	)0	下村

第37回 1987年(昭和62年)

	東大	6(	D:2-3 S:4-6	)9	京大
D1	長谷川 原田	1(	4-15 15- 9 9-15	)2	吉田 下村
D2	壁矢 赤瀬	2(	11-15 18-14 15-10	)1	長谷川 野村
D3	木藤 先田	2(	8-15 15-10 15- 5	)1	泉川 大塚
D4	陣野 前間	0(	2-15 2-15	)2	清水 古川
D5	野村 戸塚	1(	18-17 6-15 4-15	)2	峰 角田
S1	赤瀬	2(	15- 0 15- 4	)0	板垣
S2	浅井	0(	13-15 5-15	)2	吉田
S3	壁矢	2(	15- 2 15-10	)0	長谷川
S4	木藤	0(	13-15 17-18	)2	野村
S5	先田	1(	15-12 10-15 10-15	)2	下村
S6	戸塚	1(	8-15 18-17 4-15	)2	古川
S7	新名	1(	15-11 15-18 17-18	)2	大塚
S8	長谷川	2(	15- 3 15-13	)0	角田
S9	原田	2(	12-15 15-11 15- 9	)1	清水
S10	前間	0(	2-15 6-15	)2	峰

戦績記録及びオーダー（男子）

第 38 回 1988 年(昭和 63 年)

	東大	7(	D:2-3 S:5-5	)8	京大
D1	長谷川 原田	0(	12-15 3-15	)2	泉川 下村
D2	西口 先田	0(	8-15 6-15	)2	古川 大塚
D3	野村 後藤	2(	15- 7 15-10	)0	香取 安斉
D4	新名 合田	0(	4-15 3-15	)2	清水 吉田
D5	戸塚 陣野	2(	15- 3 15- 7	)0	稲垣 仙波
S1	合田	0(	1-15 0-15	)2	大塚
S2	前間	0(	0-15 5-15	)2	吉田
S3	西口	2(	15- 3 15- 5	)0	仙波
S4	野村	0(	5-15 2-15	)2	泉川
S5	後藤	2(	15-12 15- 7	)0	竹村
S6	先田	2(	15- 3 15- 7	)0	梅村
S7	戸塚	0(	7-15 4-15	)2	古川
S8	原田	2(	18-15 11-15 15- 7	)1	稲垣
S9	長谷川	2(	15-11 15- 5	)0	清水
S10	新名	0(	15-18 9-15	)2	下村

第 39 回 1989 年(平成元年)

	東大	11(	D:4-1 S:7-3	)4	京大
D1	先田 西口	0(	12-15 7-15	)2	泉川 大塚
D2	戸塚 後藤	2(	15- 4 15- 8	)0	奥村 沢田
D3	前間 伊藤	2(	15-11 12-15 15-12	)1	古川 竹村
D4	野村 福島	2(	18-17 15- 9	)0	下村 山下
D5	石田 楠本	2(	15- 9 15- 8	)0	香取 安斉
S1	伊藤	2(	15-11 15- 9	)0	沢田
S2	合田	2(	15- 2 15- 2	)0	泉屋
S3	石田	0(	6-15 7-15	)2	大塚
S4	西口	0(	3-15 5-15	)2	古川
S5	前間	2(	15- 2 15- 4	)0	山下
S6	福島	0(	8-15 0-15	)2	泉川
S7	野村	2(	15- 3 15- 0	)0	竹村
S8	後藤	2(	18-16 10-15 15- 2	)1	香取
S9	先田	2(	17-16 15-12	)0	下村
S10	戸塚	2(	15- 5 15- 1	)0	安斉

戦績記録及びオーダー（男子）

第 40 回 1990 年(平成 2 年)

	東大	11(	D:3-2 S:8-2	)4	京大
D1	戸塚 後藤	2(	15- 7 2-15 17-16	)1	古川 舟山
D2	前間 合田	2(	15- 7 15- 9	)0	町田 粟野
D3	石田 楠本	2(	15-11 15- 2	)0	安西 安藤
D4	伊藤 小西	1(	16-18 15-10 14-17	)2	奥村 中原
D5	工藤 市原	0(	7-15 1-15	)2	沢田 山下
S1	後藤	2(	15- 2 15-11	)0	香取
S2	合田	2(	15- 1 15- 5	)0	納谷
S3	市原	0(	0-15 1-15	)2	古川
S4	石田	2(	15- 3 15- 7	)0	竹村
S5	伊藤	2(	15- 3 15- 2	)0	安西
S6	小西	2(	15-12 15- 3	)0	粟野
S7	工藤	0(	2-15 0-15	)2	町田
S8	楠本	2(	15-11 15- 3	)0	奥村
S9	前間	2(	15- 6 15- 1	)0	沢田
S10	戸塚	2(	15- 7 15- 8	)0	山下

第 41 回 1991 年(平成 3 年)

	東大	10(	D:4-1 S:6-4	)5	京大
D1	石田 楠本	2(	15- 8 15-10	)0	中原 山下
D2	伊藤 (隆) 合田	2(	11-15 15- 9 15- 5	)0	栗野 安藤
D3	小西 川	2(	15- 2 15- 3	)0	上村 橋爪
D4	茂木 市原	2(	15- 6 15-11	)0	西畑 寺内
D5	伊藤 (健) 塚本	0(	5-15 3-15	)2	中島 舟山
S1	石田	2(	15- 1 15- 2	)0	栗野
S2	市原	0(	8-15 11-15	)2	吉永
S3	伊藤 (健)	2(	12-15 15- 9 17-14	)1	阿波
S4	伊藤 (隆)	2(	15-12 15- 8	)0	安藤
S5	川	1(	15- 2 10-15 7-15	)2	山下
S6	楠本	2(	12-15 15-10 15- 0	)1	舟山
S7	合田	2(	15- 6 15- 2	)0	西畑
S8	小西	2(	15-10 17-14	)0	中原
S9	林	0(	0-15 13-15	)2	寺内
S10	茂木	0(	2-15 1-15	)2	中島

戦績記録及びオーダー（男子）

第 42 回 1992 年(平成 4 年)

	東大	11(	D:4-1 S:7-3	)4	京大
D1	石田 香西	2(	15-11 15-10	)0	中島 船山
D2	楠本 川	2(	15- 2 15- 5	)0	池田 吉永
D3	市原 光澤	2(	15- 2 15- 7	)0	早野 遠藤
D4	塚本 松薗	2(	15- 8 15- 8	)0	中谷 勝尾
D5	平野 三島	0(	1-15 5-15	)2	栗野 藤田
S1	香西	2(	15-11 15- 9	)0	船山
S2	光澤	0(	4-15 5-15	)2	吉永
S3	松薗	2(	15-15 15-15	)0	遠藤
S4	塚本	0(	1-15 5-15	)2	栗野
S5	川	1(	18-14 4-15 10-15	)2	中島
S6	氏家	2(	15- 4 18-13	)0	勝尾
S7	三島	0(	2-15 11-15	)2	藤田
S8	楠本	2(	15- 3 15- 7	0	中谷
S9	市原	2(	15- 3 15- 1	)2	境
S10	石田	2(	15-13 15- 4	)0	池田

第 43 回 1993 年(平成 5 年)

	東大	10(	D: 4-1 S: 6-4	) 5	京大
D1	川 香西	2(	15- 7 15-10	)0	中島 渡辺
D2	平野 三島	2(	12-15 15- 9 15- 5	)1	勝尾 諸富
D3	林 光澤	2(	15- 9 3-15 15- 4	)1	遠藤 横田
D4	氏家 塚本	0(	8-15 5-15	)2	舟山 藤田
D5	松薗 岩井	2(	13-15 15- 8 15-11	)1	寺内 吉永
S1	佐藤	0(	6-15 9-15	)2	吉永
S2	松薗	2(	15- 1 15- 8	)0	寺内
S3	三島	2(	15-10 15- 2	)0	遠藤
S4	塚本	2(	15- 3 15- 7	)0	勝尾
S5	岩井	2(	15- 5 15- 7	)0	境
S6	光澤	2(	15- 9 15-12	)0	渡辺
S7	林	0(	10-15 10-15	)2	藤田
S8	川	1(	10-15 18-14 5-15	)2	舟山
S9	香西	2(	15- 1 15- 0	)0	諸富
S10	氏家	0(	9-15 0-15	)2	中島

戦績記録及びオーダー（男子）

第 44 回 1994 年(平成 6 年)

	東大	12(	S:8-2 D:4-1	)3	京大
D1	川 光澤	2(	15- 4 15- 1	)0	境 塚原
D2	氏家 塚本	2(	15- 9 15- 3	)0	倉田 前田
D3	松薗 古川	2(	15- 4 15- 3	)0	藤井 増田
D4	増永 米永	2(	18-13 15- 3	)0	横田 今川
D5	原田 夕部	0(	5 -15 15-17	)2	遠藤 加藤
S1	上等	2(	15- 7 15- 0	)0	倉田
S2	川	2(	15- 5 15- 2	)0	藤井
S3	夕部	2(	12-15 15-10 15-11	)1	佐藤
S4	古閑	0(	12-15 11-15	)2	塚原
S5	増永	2(	15-12 15- 6	)0	前田
S6	古川	2(	9-15 15- 9 15- 8	)1	横田
S7	米永	1(	15-10 4-15 5-15	)2	遠藤
S8	松薗	2(	15- 6 14-17 15-10	)1	加藤
S9	光澤	2(	15- 1 15- 5	)0	今川
S10	氏家	2(	15-10 18-13	)0	増田

第 45 回 1995 年(平成 7 年)

	東大	8(	S:6-4 D:2-3	)7	京大
D1	岩井 増永	1(	15-12 10-15 6-15	)2	加藤 諸富
D2	川上 夕部	2(	15- 4 18-17	)0	佐藤 増田
D3	米永 古閑	2(	15- 7 15- 6	)0	植山 川地
D4	伊藤 樋口	0(	13-18 13-18	)2	塚原 堀田
D5	酒井 小林	0(	13-18 5-15	)2	今川 三井
S1	上等	2(	15- 6 15-12	)0	川地
S2	増永	0(	9-15 9-15	)2	諸富
S3	川上	2(	15- 5 15- 3	)0	塚原
S4	米永	2(	15- 1 15-10	)0	今川
S5	古閑	2(	15-10 10-15 15-12	)1	堀田
S6	樋口	2(	15- 5 15-12	)0	佐藤
S7	高須	2(	15-10 15- 8	)0	増田
S8	吉原	0(	13-15 7-15	)2	植山
S9	酒井	1(	4-15 15-11 8-15	)2	加藤
S10	小林	0(	11-15 7-15	)2	三井

戦績記録及びオーダー（男子）

第 46 回 1996 年(平成 8 年)

	東大				京大
		8(	D: 3-2 S: 5- 5	)7	
D1	古川 川上	2(	15-8 12-15 15・3	)1	三井 奥田
D2	高須 森原	1(	15-10 4-15 4・15	)2	川地 水谷
D3	岩井 鎌田	2(	8-15 15-13 15・5	)1	増田 梶野
D4	増永 上等	2(	15-11 15-9	)0	瀬川 小椋
D5	高木 坪倉	0(	3-15 8-15	)2	塚原 堀田
S1	夕部	0(	8-15 9-15	)2	三井
S2	増永	2(	15-2 15-9	)0	水谷
S3	吉原	0(	8-15 1- 15	)2	小椋
S4	森原	1(	15-11 10-15 2・15	)2	奥田
S5	上等	2(	15-6 15-7	)0	堀田
S6	志田	2(	15- 7 11-15 15・3	)1	増田
S7	高須	0(	6-15 9-15	)2	梶野
S8	鎌田	2(	15-3 15- 0	)0	川地
S9	坪倉	0(	3-15 1-15	)2	瀬川
S10	古川	2(	15-5 15-6	)0	塚原

第 47 回 1997 年(平成 9 年)

	東大				京大
		9(	D: 2-3 S: 7-3	) 6	
D1	上等 鎌田	2(	15-11 8-15 15・7	)1	三井 奥田
D2	増永 小林	1(	11-15 15-10 9・15	)2	塚原 堀田
D3	高木 坪倉	1(	15-10 9-15 11・15	)2	瀬川 小椋
D4	夕部 吉原	2(	15- 12 15- 7	)0	菊本 湯元
D5	渡辺 遊佐	0(	11-15 9-15	)2	梶野 佐藤
S1	鎌田	2(	15-0 15-1	)0	石田
S2	小林	2(	15-12 15-8	)0	奥田
S3	古川	2(	15-4 15- 3	)0	小椋
S4	志田	2(	18-15 15-14	)0	梶野
S5	高木	2(	15-6 15-4	)0	菊本
S6	坪倉	2(	15-11 15-9	)0	佐藤
S7	吉原	0(	6-15 4-15	)2	瀬川
S8	増永	2(	15- 9 15- 9	)0	塚原
S9	上等	1(	5-15 15-13 1・15	)2	堀田
S10	夕部	0(	4-15 6-15	)2	三井

戦績記録及びオーダー（男子）

第 48 回 1998 年(平成 10 年)

	東大	5(	D: 1 - 4 S: 4 – 6	)10	京大
D1	鎌田 坪倉	0(	7-15 10-15	)2	瀬川 小椋
D2	小林 鳥居	2(	15-10 15-11	)0	佐藤 湯本
D3	斉藤 安藤	0(	0-15 5-15	)2	堀田 梶野
D4	小埜 服部	1(	15- 2 11-15 17-18	)2	石田顕 石田裕
D5	杉本 相浜	0(	4-15 2-15	)2	三井 奥田
S1	北畑	0(	2-15 0-15	)2	小椋
S2	服部	0(	7-15 3-15	)2	堀田
S3	鎌田	2(	15- 7 15- 6	)0	湯本
S4	菅原	0(	5-15 5-15	)2	梶野
S5	鳥居	2(	15- 2 15- 9	)1	石田顕
S6	小埜	0(	5-15 6-15	)2	三井
S7	坪倉	2(	15- 7 15- 4	)0	岡方
S8	相浜	0(	3-15 6-15	)2	奥田
S9	小林	2(	15- 5 15- 9	)0	佐藤
S10	杉本	0(	3-15 1-15	)2	瀬川

第 49 回 1999 年(平成 11 年)

	東大	4(	D:1-4 S:3-7	)11	京大
D1	鎌田 相浜	2(	15- 8 15-10	)0	梶野 湯本
D2	坪倉 小埜	1(	15-11 15-17 8-15	)2	岡方 石田
D3	杉本 服部	0(	7-15 15-17	)2	奥田 三輪
D4	安藤 北畑	0(	4-15 9-15	)2	清水 疋田
D5	伊藤 山本	0(	11-15 6-15	)2	佐藤 菊本
S1	鎌田	2(	15- 2 15- 4	)0	岡方
S2	坪倉	2(	15- 3 10-15 15-13	)1	疋田
S3	相浜	0(	3-15 3-15	)2	佐藤
S4	小埜	0(	6-15 10-15	)2	奥田
S5	杉本	0(	9-15 4-15	)2	湯本
S6	服部	2(	15- 8 12-15 15-13	)1	菊本
S7	斎藤	1(	11-15 15- 9 9-15	)2	清水
S8	白石	1(	7-15 15-12 16-17	)2	三輪
S9	高橋	1(	15-13 14-17 7-15	)2	石田
S10	伊藤	0(	7-15 5-15	)2	梶野

戦績記録及びオーダー（男子）

第 50 回 2000 年(平成 12 年)

	東大	7(	D:2-3 S:5-5	)8	京大
D1	服部 伊藤	0(	9-15 4-15	)2	佐藤 菊本
D2	御嶽 白石	0(	8-15 5-15	)2	三輪 松田
D3	高橋 山本	2(	8-15 15- 4 15- 2	)1	上山 松島
D4	相浜 杉本	0(	9-15 6-15	2	湯本 岡方
D5	斎藤 安藤	2(	15- 1 15- 3	0	小野 今井
S1	伊藤	1(	10-15 15-13 5-15	2	湯本
S2	小埜	1(	17-14 7-15 4-15	2	菊本
S3	御嶽	0(	3-15 9-15	2	佐藤
S4	山本	2(	15- 4 15- 8	0	上山
S5	服部	2(	15- 3 9-15 15-10	)1	岡方
S6	相浜	2(	15- 8 15- 7	)0	小野
S7	高橋	0(	10-15 3-15	)2	松田
S8	安藤	2(	15- 6 15- 4	)0	金沢
S9	杉本	2(	15- 2 15- 5	)0	松島
S10	斎藤	1(	15-10 10-15 9-15	)2	三輪

戦績記録及びオーダー（女子）

第 1 回 1973 年(昭和 48 年)

	東大	0(	D: 0 - 2 S: 0 - 3	)5	京大
D1	大沢 白倉	0(	3-15 1-15	)2	井上 (和) 乾
D2	矢口 塚内	0(	2-15 1-15	)2	鈴木 和田
S1	矢口	0(	4-11 5-11	)2	井上 (淑)
S2	塚内	0(	2-11 3-11	)2	和田
S3	大沢	0(	3-11 0-11	)2	鈴木

第 2 回 1974 年(昭和 49 年)

	東大	0(	D: 0 - 2 S: 0 - 3	)5	京大
D1	白坂 嶋村	0(	3-15 0-15	)2	鈴木 中村
D2	池原 百瀬	0(	2-15 6-15	)2	斎藤 井上
S1	白坂	1(	11- 8 3-11 8-11	)2	乾
S2	百瀬	0(	3-11 4-11	)2	中村
S3	池原	0(	4-11 7-11	)2	鈴木

第 3 回 1975 年(昭和 50 年)

	東大	1(	D: 1 - 1 S: 0 - 3	)4	京大
D1	白坂 嶋村	0(	2-15 0-15	)2	鈴木 中村
D2	池原 百瀬	2(	15-12 15-10	)0	斎藤 乾
S1	百瀬	0(	1-11 1-11	)2	中村
S2	池原	0(	11-12 5-11	)2	斎藤
S3	白坂	0(	5-11 2-11	)2	鈴木

第 4 回 1976 年(昭和 51 年)

	東大	2(	D: 1 - 1 S: 1 - 2	)3	京大
D1	嶋村 山本	0(	1-15 2-15	)2	斎藤 中村
D2	有賀 百瀬	2(	15- 3 15- 8	)0	寺島 竹中
S1	嶋村	0(	2-11 3-11	)2	斎藤
S2	有賀	2(	11- 5 11- 0	)0	寺島
S3	百瀬	0(	5-11 2-11	)2	中村

戦績記録及びオーダー（女子）

第 5 回 1977 年(昭和 52 年)

	東大	2(D: 1 - 1 S: 1 - 2)3	京大
D1	山本 小森	( )2	中村 寺島
D2	有賀 名和田	2( )	竹中 梅本
S1	山本	( )2	寺島
S2	名和田	0( )2	中村
S3	有賀	2( )	竹中

第 6 回 1978 年(昭和 53 年)

	東大	0(D: 0 - 2 S: 0 - 3)5	京大
D1	三種 橋田	0(0-15 1-15)2	中 谷
D2	吉田 小森	0(9-15 10-15)2	竹中 森
S1	三種	0(1-11 0-11)2	谷
S2	小森	0(1-11 0-11)2	中
S3	吉田	0(7-11 0-11)2	竹中

第 7 回 1979 年(昭和 54 年)

	東大	1(D: 1 - 1 S: 0 - 3)4	京大
D1	宮田 吉田	2(15- 8 15- 7)0	佐藤 杉浦
D2	松下 小森	0(5-15 1-15)2	中 谷
S1	宮田	0(3-11 1-11)2	中
S2	小森	0(0-11 2-11)2	谷
S3	吉田	0(8-11 3-11)2	杉浦

第 8 回 1980 年(昭和 55 年)

	東大	1(D: 0 - 2 S: 1 - 2)4	京大
D1	吉田 宮田	0(2-15 5-15)2	中 広田
D2	小松 山敷	0(5-15 11-15)2	小野田 平山
S1	吉田	0(3-11 0-11)2	中
S2	山敷	0(0-11 0-11)2	広田
S3	宮田	2(5-11 11- 3 11- 0)1	宮下

戦績記録及びオーダー（女子）

第 9 回 1981 年(昭和 56 年)

	東大				京大
		1(	D: - S: -	)4	
D1		(	- -	)	
D2		(	- -	)	
S1		(	- -	)	
S2		(	- - -	)	
S3		(	- -	)	

第 10 回 1982 年(昭和 57 年)

	東大				京大
		1(	D:1-1 S:0-3	)4	
D1	福田 山田	0(	1-15 5-15	)2	広田 長田
D2	斉藤 田村	2(	11-15 15- 6 15- 5	)1	宮下 浜田
S1	田村	0(	5-11 3-11	)2	広田
S2	斉藤	1(	4-11 11- 8 8-11	)2	長田
S3	山田	0(	4-11 7-11	)2	宮下

第 11 回 1983 年(昭和 58 年)

	東大				京大
		4(	D:2-0 S:2-1	)1	
D1	福田 高瀬	2(	15- 4 15- 2	)0	藤井 安永
D2	斉藤 田村	2(	15- 8 15- 8	)0	浜田 長田
S1	高瀬	2(	11- 6 11- 1	)0	藤井
S2	斉藤	0(	5-11 3-11	)2	長田
S3	田村	2(	11- 0 11- 1	)0	浜田

第 12 回 1984 年(昭和 59 年)

	東大				京大
		4(	D: 1-1 S: 3-0	)1	
D1	近江 平川	0(	12-15 17-18	)2	山本 柳田
D2	畑 高瀬	2(	15- 5 15- 9	)0	安永 内村
S1	畑	2(	2-11 11- 2 11- 2	)1	安永
S2	高瀬	2(	11- 4 12-10	)0	内村
S3	近江	2(	11- 8 11- 6	)0	山本

戦績記録及びオーダー（女子）

第 13 回 1985 年(昭和 60 年)

	東大				京大
		3(	D:1-1 S:2-1	) 2	
D1	畑 近江	2(	15- 5 15-12	)0	佐藤 伊藤
D2	近藤 安藤	0(	12-15 7-15	)2	倉沢 内村
S1	畑	2(	11- 4 11- 0	)0	伊藤
S2	近江	2(	7-11 11- 5 11- 9	)1	内村
S3	近藤	0(	4-11 8-11	)2	倉沢

第 14 回 1986 年(昭和 61 年)

	東大				京大
D1					
D2					
S1					
S2					
S3					

第 15 回 1987 年(昭和 62 年)

	東大				京大
		4(	D:1-1 S:3-0	)1	
D1	田中 国友	1(	15- 9 12-15 6-15	)2	佐藤 田里
D2	郡司 伊藤	2(	15- 2 15- 6	)0	小山 大林
S1	伊藤	2(	11- 3 11- 3	)0	佐藤
S2	郡司	2(	11- 1 11- 3	)0	小山
S3	国友	2(	11- 8 11- 6	)0	田里

第 16 回 1988 年(昭和 63 年)

	東大				京大
		3(	D:1-1 S:2-1	)2	
D1	田中 伊藤	2(		)0	小川 斉藤
D2	原 志村	0(	4-15 2-15	)2	大林 田里
S1	伊藤	2(		)0	小川
S2	原	0(		)2	大林
S3	田中	2(		)0	田里

戦績記録及びオーダー（女子）

第 17 回 1989 年(平成元年)

	東大	2(	D:1-1 S:1-2	)3	京大	
D1	久我 伊坪	0(	4-15 7-15	)2	斉藤 前川	
D2	志村 伊藤	2(	15-10 15- 7	)0	小川 田里	
S1	志村	0(	6-11 10-12	)2	前川	
S2	伊藤	2(	11- 6 11- 3	)0	小川	
S3	久我	0(	8-11 0-11	)2	田里	

第 18 回 1990 年(平成 2 年)
オープン戦

	東大	1(	D:0-2 S:1-2	)4	京大	
D1	小西 山下	0(	7-15 17-18	)2	斎藤 山本	
S1	橋本	0(	4-11 3-11	)2	領	
S2	小西	2(	11- 4 3-11 11- 0	)1	斎藤	
S3	山下	0(	5-11 2-11	)2	大畑	
D2	小西 橋本	0(	17-18 7-15	)2	領 大畑	

第 19 回 1991 年(平成 3 年)

	東大	3(	D:2-0 S:1-2	)2	京大	
S1	中島	0(	10-12 7-11	)2	藤原	
D1	中島 飯塚	2(	15-11 15- 8	)0	山本 藤原	
D2	志村 酒井	2(	15- 2 13-15 15- 6	)1	大畑 三谷	
S2	志村	2(	12-10 11- 3	)0	三谷	
S3	飯塚	1(	7-11 11- 2 8-11	)2	大畑	

第 20 回 1992 年(平成 4 年)
オープン戦

	東大	2(	D:0-2 S:2-1	)3	京大	
D1	小西 橋本	0(	8-15 0-15	)2	大畑 三谷	
D2	秋朝 志村	2(	6-15 6-15	)0	藤原 川向	
S1	小西	2(	11- 2 11- 0	)0	大畑	
S2	志村	2(	11- 9 11- 8	)0	藤原	
S3	橋本	0(	3-11 2-11	)2	藤田	

戦績記録及びオーダー（女子）

第 21 回 1993 年(平成 5 年)

	東大	3(	D: S:	)2	京大
S1	雑賀	0(	8-11 2-11	)2	向坂
S2	根本	0(	2-11 2-11	)2	川向
S3	小西	2(	11-12 11- 4 11- 7	)1	三谷
D1	根本 藤沢	0(	1-15 0-15	)2	三谷 向谷
D2	小西 雑賀	2(	15- 3 15-13	)0	川向 宮重

第 22 回 1994 年(平成 6 年)

	東大	2(	S:1-2 D:1-1	)3	京大
D1	高本 藤沢	0(	6-15 0-15	)2	向坂 井上
D2	雑賀 根本	2(	15- 4 15-11	)0	永井 出島
S1	藤沢	0(	0-11 0-11	)2	向坂
S2	雑賀	2(	11- 0 11- 4	)0	永井
S3	高本	1(	11- 1 8-11 4-11	)2	金沢

第 23 回 1995 年(平成 7 年)

	東大	2(	D:0-2 S:2-1	)3	京大
D1	雑賀 高本	0(		)2	向坂 井上
D2	大河原 根本	0(		)2	永井 出島
S1	高本	0(		)2	向坂
S2	根本	2(		)0	永井
S3	雑賀	2(		)0	出島

第 24 回 1996 年(平成 8 年)

	東大	1(	D: 1-1 S: 0-3	)4	京大
S1	雑賀 高本	0(	17-18 9-15	)2	稲岡 東
S2	根本 遠藤	0(	15-18 11-15	)2	永井 出島
D1	雑賀	2(	11-3 11-2	)0	東
D2	遠藤	0(	3-11 5-11	)2	出島
S3	根本	0(	0-11 0- 11	)2	稲岡

戦績記録及びオーダー（女子）

第 25 回 1997 年(平成 9 年)

	東大	2(	D: 1-1 S: 1-2	) 3	京大
S1	遠藤	2(	11-5 12-11	)0	橘
S2	山崎	0(	2-11 0-11	)2	稲岡
D1	遠藤 岩井	2(	15-1 15-4	)0	永井 玉井
D2	山崎 青木	0(	4-15 6-15	)2	東 稲岡
S3	岩井	0(	4-11 4-11	)2	永井

第 26 回 1998 年(平成 10 年)

	東大	0(	D: 0 - 2 S: 0 - 3	)5	京大
D1	岩井 三好	0(	3-15 1-15	)2	浅沼 橘
D2	山崎 岸	0(	4-15 3-15	)2	久保 三浦
S1	山崎	0(	0-11 0-11	)2	橘
S2	岸	0(	2-11 6-11	)2	久保
S3	岩井	1(	11- 6 9-11 8-11	)2	浅沼

第 27 回 1999 年(平成 11 年)

	東大	2(	D:0-2 S:2-1	)3	京大
S1	玉城	0(	5-11 2-11	)2	橘
S2	岸	2(	11- 7 11- 1	)0	田中
D1	青木 岩井	0(	4-15 7-15	)2	橘 三浦
D2	岸 玉城	1(	15- 7 10-15 11-15	)2	塩 田中
S3	岩井	2(	10-13 11- 8 11- 2	)1	三浦

第 28 回 2000 年(平成 12 年)

	東大	1(	D: 0 - 2 S: 1 - 2	)4	京大
D1	岸 玉城	0(	3-15 4-15	)2	橘 三浦
D2	三好 須藤	0(	8-15 8-15	)2	塩 田中
S1	玉城	1(	11- 6 1-11 4-11	)2	三浦
S2	須藤	2(	11- 2 11- 7	)0	塩
S3	岸	0(	5-11 7-11	)2	橘

国　公　立　戦

回	西暦	和暦	会　場	男子　成績			女子　成績
				団体	ｼﾝｸﾞﾙｽ	ﾀﾞﾌﾞﾙｽ	
1	1953	28		1位			
2	1954	29		1位			
3	1955	30		1位			
4	1956	31		1位			
5	1957	32		1位			
6	1958	33	東工大	3位			
7	1959	34	東工大	2位			
8	1960	35	教育大	2位		2:石川・金丸	
9	1961	36		1位		1:木村・平松	
10	1962	37		1位	1:馬場、3:木村	1:平松・馬場	
11	1963	38	学芸大	1位	1:平松、3:北浦	1:重松・北浦 2:平松・三浦	
12	1964	39	東工大	1位	2:北浦	2:北浦・木下	
13	1965	40	東工大	1位	1:北浦、2:横山、 3:森本	1:北浦・横山	
14	1966	41	東工大	1位	1:横山、2:北浦	1:横山・木下 2:北浦・井上	
15	1967	42		2位			
16	1968	43	東工大	3位	4:小林	4:川上・小吹	
17	1969	44	学芸大	1位	1:小林、3:岡本		
18	1970	45	東工大	1位	1:小林	1:小林・岡本	
19	1971	46	農工大	2位	1:岡本、2:豊田	2:豊田・江藤 3:岡本・盛	
20	1972	47	東大	2位	1:江藤、2:角本	1:江藤・増田 3:角本・伊藤	
21	1973	48	東大	1位	1:江藤、3:伊藤、 松本	1:江藤・増田 2:角本・伊藤 2:大田・関	
22	1974	49	東大	1位	1:松本、2:関、 3:大田	1:松本・野中 3:関・大田	
23	1975	50	東大･農工	2位	1:野中	2:松本・野中	
24	1976	51	一橋	2位			
25	1977	52	東大・一橋	2位	2:野中	3:野中・村田	
26	1978	53	東大・一橋	3位		2:野中・村田	
27	1979	54	農工･東大･一橋	2位		2:佐藤・上野	
28	1980	55	一橋	2位		4:内藤・中田	
29	1981	56		1位	3:中田	4:中田・芳賀	女子団体2位
30	1982	57		2位	3:炭谷		女子団体2位
31	1983	58		3位	2:山梨	2:山梨・村田	女子団体2位
32	1984	59		1位		1:村田・森	女子団体2位
33	1985	60		2位	2:村田	1:村田・森	
34	1986	61		2位		1:森・原田	
35	1987	62	東工大	1位	2:長谷川	2:長谷川・原田	
36	1988	63	電通大	1位	2:戸塚	2:先田・西口 3:木藤・戸塚 3:長谷川・原田	

国　公　立　戦

回	西暦	和暦	会　場	男子　成績			女子　成績
				団体	ｼﾝｸﾞﾙｽ	ﾀﾞﾌﾞﾙｽ	
37	1989	1	学芸大	1位	2:戸塚	2:戸塚・後藤	女子D2位:伊藤・志村
38	1990	2	一橋大	1位	1:戸塚	2:戸塚・後藤 3:前間・合田 3:石田・楠本	女子D3位:志村・小西
39	1991	3	東工大	1位			女子団体2位 女子D1位:志村・小西 女子S3位:志村
40	1992	4	東大	1位	1:香西、2:石田	1:石田・香西 2:後藤・楠(東工) 3:楠本・市原	女子D2位:小西・酒井 女子S1位:小西
41	1993	5	東大	2位			女子D1位:小西・堀田(お茶大) 女子S3位:小西
42	1994	6	東大	1位	1:香西、3:川		
43	1995	7			1:香西、2:上等	1:香西・岩井	女子S3位:雑賀
44	1996	8		1位	1:古川、2:上等	1:古川・川上	女子S3位:雑賀
45	1997	9	東大	1位	1:鎌田、2:川上、 3:上等、小林	3:古川・川上	
46	1998	10	東大	1位	1:鎌田	2:小林・鎌田	女子D1位:雑賀・遠藤
47	1999	11	東大	1位			
48	2000	12	東大				

国立七大学定期戦

回	西暦	和暦	日程	主管校	会場	順位		備考
						男子	女子	
	1958	33		名大	名古屋市 YMCA	4位		
	1959	34	7/28～30	北大	札幌工業高校体育館	2位		
	1960	35		九大	久留米石橋文化ｾﾝﾀｰ	3位		
	1961	36		阪大	大阪市立中央体育館	1位		
1	1962	37	7/28～30	北大	中島ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ	1位		
2	1963	38	7/28～30	九大	九州産業大学体育館	1位		
3	1964	39	7/22～24	京大	西京極体育館	6位		
4	1965	40	7/25～28	阪大	大阪市立中央体育館	1位		
5	1966	41	7/23～27	東大	検見川体育館	1位		
6	1967	42	7/24～27	東北大		6位		
7	1968	43	7/27～30	名大	金山体育館	6位		
8	1969	44	7/25～28	北大	北大体育館	5位		
9	1970	45	7/30～8/2	九大	福岡女子大体育館	4位		
10	1971	46	7/29～8/1	阪大	阪大体育館	4位		
11	1972	47	7/14～17	京大	京大体育館	6位		
12	1973	48	7/30～8/2	東北大	東北工業大学体育館	5位	6位	女子は6校中
13	1974	49	7/27～30	東大	第4体育館	4位	6位	
14	1975	50	7/26～29	名大	ﾄﾖﾀ自工ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ	5位	5位	
15	1976	51	7/27～30	北大	真駒内屋内競技場(ｱｲｽｱﾘｰﾅ)	6位	2位	札幌は記録的暑さ
16	1977	52	7/27～31	阪大		7位	7位	
17	1978	53		九大	九大体育館	7位	7位	
18	1979	54	7/29～8/2	京大	京大体育館	7位	7位	
19	1980	55	7/2～27	東北大	東北福祉大体育館	4位	7位	
20	1981	56	7/29～8/2	東大	駒場第4体育館	4位	6位	
21	1982	57	7/19～23	名大	ﾄﾖﾀｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ	5位	4位	
22	1983	58	7/27～31	北大	北大体育館	4位	3位	
23	1984	59	7/17～21	九大	九大体育館	7位	5位	
24	1985	60	7/23～27	阪大	阪大体育館	6位	4位	
25	1986	61	7/25～29	京大	京大体育館	5位		
26	1987	62	7/22～26	東北大	東北大青葉山体育館	5位	5位	
27	1988	63	7/2～730	東大	駒場第1体育館	3位	5位	4月竣工の駒場第1体育館での開催
28	1989	1	7/23～28	名大	名古屋市体育館	6位	5位	
29	1990	2	7/2～529	北大	北大体育館	2位	6位	
30	1991	3	7/28～8/1	九大	九大貝塚体育館	5位	5位	
31	1992	4	7/30～8/2	阪大	豊中市立千里体育館	2位	7位	
32	1993	5	7/24～28	京大	京大体育館	3位	7位	
33	1994	6	8/4～7	東北大	宮城県ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ	2位	7位	
34	1995	7	7/29～8/2	東大	駒場第2体育館	4位	6位	
35	1996	8	7/29～8/2	名大	名大体育館	3位	6位	
36	1997	9	8/1～6	北大	北大体育館	3位	7位	
37	1998	10	8/3～7	九大	福岡市民体育館	6位	7位	
38	1999	11	7/26～30	阪大	豊中市庄内体育館他	7位	7位	
39	2000	12	7/29～8/2	京大	京大体育館	6位	6位	

対 一 橋 大 学 定 期 戦

回	西暦	和暦	日程	会場	成績			備　考
					現役	OB	合計	
1	1963	38	12/1	一橋	8- 7	5- 5	13-12	39卒でカップ作成 12月第1日曜日と決定
2	1964	39	12/	東大			17- 8	
3	1965	40	12/4	一橋			13-12	
4	1966	41	11/27	東大	7- 8	6- 4	13-12	佐藤(紘)氏ｱｷﾚｽ健を切る
5	1967	42	12/3	一橋	4-11	9- 1	13-12	
6	1968	43	12/1	東大	11- 4	6- 4	17- 8	
7	1969	44	11/24	一橋	7- 8	5- 5	12-13	
8	1970	45	11/29	東大	10- 5	5- 5	15-10	
9	1971	46	11/28	一橋	8- 7	6- 4	14-11	
10	1972	47	11/26	東大	11- 4	8- 2	19- 6	新体育館追い出しなし
11	1973	48	11/18	一橋	6- 9	7- 3	13-12	
12	1974	49	11/24	東大				
13	1975	50	11/23, 24	一橋	6- 9	(5- 0)	11- 9	
14	1976	51	11/23	東大	7- 8	(4- 1)	11- 9	
15	1977	52	11/20	一橋	5-10	(4- 1)	9-11	
16	1978	53	11/23	東大	4-11	(3- 2)	7-13	
17	1979	54	11/23	東大				
18	1980	55	11/16					
19	1981	56	11/15	一橋	6- 9			
20	1982	57	11/14					
						以下女子		
21	1983	58	11/13	一橋	7- 8	3-2		
22	1984	59						
23	1985	60	11/17	一橋	6- 9	1-4		
24	1986	61	11/16	東大	13- 2	0-5		
25	1987	62	11/15	一橋	12- 3	2-3		
26	1988	63	11/20	一橋	11- 4	1-4		
27	1989	1	11/12	一橋	9- 0	0-5		
28	1990	2	11/17	東大	9- 0	3-2		
29	1991	3	12/22	一橋	10- 5	3-2		
30	1992	4	10/24		7- 8			
31	1993	5	12/11	東大	12- 3	2-3		
32	1994	6	1/28	東大	6- 9	2-3		
33	1995	7	12/10	一橋	14- 1	2-3		
34	1996	8	11/16		13- 2	2-3		
35	1997	9	11/16		13- 2	2-3		
36	1998	10		東大	9- 6	4-1*		*津田塾大と
37	1999	11	11/13	東大	10- 5	3-2		
38	2000	12						

春の一橋戦　一橋ジュニア戦

西暦	和暦	春				ジュニア				備　考
		日程	会場	男子	女子	回	日程	会場	成績	
1961	36	5/13	一橋	4-5						
1962	37	4/29		8-1						
1963	38	5/12		ｵｰﾌﾟﾝ						
1964	39	4/29		7-2		1	4/29		5-4	
1965	40	4/29		7-2		2	12/12		4-5	
1966	41	4/29		6-3		3	12/4		3-6	
1967	42	4/23		2-7		4			6-3	
1968	43	4/		3-6		5	11/24	東大	6-3	
1969	44	4/27	一橋	6-3		6	11/23	一橋	5-4	
1970	45	4/29	東大	6-3		7	11/15	東大	5-4	
1971	46	4/18		7-2		8	11/21	一橋	7-6	
1972	47	4/23	東大	5-4		9	12/10		8-7	
1973	48	4/22		5-4	1-2	10			7-3	
1974	49	4/14		3-6		11				
1975	50	4/27	一橋	4-5	5-0	12	11/23,24		5-4	
1976	51	4/25	東大	4-5	5-0	13				
1977	52	4/	東大	4-5	2-3	14	1/15		2-7	
1978	53	4/23	一橋	4-5	2-3	15	12/17		4-5	
1979	54	4/22	一橋			16	1/20	一橋	5-4	
1980	55									
1981	56	4/12								
1982	57	4/11	一橋	7-2	4-1				7-2	
1983	58	4/10	東大	7- 2						
1984	59	4/22	一橋	4- 5	2-3					
1985	60			5- 4						
1986	61	4/20	一橋	5- 4	3-2					
1987	62	4/12	一橋	8- 1	4-1					
1988	63	5/29	東大	8- 1	4-1					
1989	1	5/14		8- 1	ｵｰﾌﾟﾝ		3/21	一橋	9-0	女子 1-4
1990	2	5/20	東大	14- 1	2-3		3/15	東大	3-6	
1991	3	5/19	一橋	7- 2	4-1		3/20	東大	4-5	
1992	4	5/17		11- 4	3-2		3/24	一橋	8-1	
1993	5	6/19	一橋	8- 7	2-3		3/16	東大	3-6	
1994	6	6/18		8- 7	2-3		3/28	一橋	8-1	女子 2-3
1995	7	6/17	一橋	9- 6	0-5		3/16	東大	7-2	
1996	8	6/22		15- 0	4-1		3/15	一橋	9-0	女子 4-1
1997	9	6/14		11- 4	3-2		3/28		8-1	
1998	10		一橋	10- 3	3-2*		3/27	一橋	3-6	*津田塾大と
1999	11	6/12	一橋	9- 6	2-3		3/18	東大	3-4	
2000	12	6/17	一橋	9- 1	2-3					

東大ダブルス選手権

回	西暦	和暦	日程	1位	2位	3位	3位	備　考
1	1976	51	9/5	野中・三角	渡辺・殿谷	平松・小林	江藤・山田	
2	1977	52	9/4	豊田・江藤	飯田・小鷹	金丸・小林	川上・島岡*	*阪大OB
3	1978	53		野中・村田	佐藤・小松	江藤・角本	飯田・小鷹	
4	1979	54	9/16	野中・村田	上野・佐藤	豊田・小鷹	小松・森	
5	1980	55	9/15	野中・村田	豊田・江藤	森・芳賀	上野・小松	
6	1981	56	9/15	野中・村田	中田・芳賀	高見・炭谷	豊田・森	
7	1982	57	9/5	炭谷・高見	野中・村田	豊田・森	上野・小松	
8	1983	58	12/4	豊田・森	高見・炭谷	野中・村田	河野・村田	
9	1984	59	1/13	村田・森	豊田・森	高見・炭谷	芹沢・高橋	
10	1985	60	12/8	村田・森	野中・村田	芹沢・盛田	高橋・長谷川	
11	1986	61	12/14	野中・村田	森・高橋	長谷川・原田	豊田・森	
12	1987	62	12/13	原田・長谷川	村田・野中			
13	1988	63	12/11	戸塚・後藤	前間・西口	先田・合田	原田・長谷川	
14	1989	1	12/17	戸塚・後藤	野中・村田	合田・伊藤	豊田・森	
15	1990	2	12/9	戸塚・後藤	先田・西口	村田・野中	—	
16	1991	3	12/8	戸塚・後藤	石田・楠本			
17	1992	4	12/12	川・香西	戸塚・後藤	小西・市原	—	
18	1993	5	12/18	香西・光澤	戸塚・後藤	野中・松薗	—	
19	1994	6	12/17	戸塚・後藤	岩井・古川	先田・中島*	—	*京大
20	1995	7	12/16	岩井・古川	戸塚・後藤	上等・増永	—	
21	1996	8	12/14	古川・川上	上等・増永	小林・鎌田	—	
22	1997	9	12/20	古川・川上	中島*・舟山*	後藤・石田	—	*京大
23	1998	10	12/19	後藤・戸塚	古川・川上		—	
24	1999	11	12/18	堀田*・奥田*	後藤・戸塚	鎌田・坪倉	—	*京大
25	2000	12						

東大シングルス選手権

回	西暦	和暦	日程	1部				2部		3部		備　考
				1位	2位	3位	3位	1位	2位	1位	2位	
1	1980	55	12/7	野中	村田	高見	中田					
2	1981	56	12/6	野中	村田	山梨	中田	上野	豊田			
3	1982	57	12/5	野中								
4	1983	58	9/11	野中	山梨	森52	久保田	飯田	大谷			
5	1984	59	9/15	山梨	森58	野中	村田	鈴木	山崎			
6	1985	60	9/15	村田	森58	野中	森52	外山	飯田	宮田	近藤	
7	1986	61	9/15	森58	村田	赤瀬	高橋	山下	鈴木	郡司	高瀬	
8	1987	62	9/15	村田	長谷川	原田	佐藤	豊田	松留	伊藤	郡司	
9	1988	63	9/11	戸塚	原田	長谷川	先田	藤田	伊藤	田中	田村	
10	1989	1	9/15	戸塚	原田	山本	先田	岩松	中野	志村		
11	1990	2	9/9	戸塚	石田	森52	前間	市原	茂木	小西	林	
12	1991	3	9/15	石田	楠本	小西	伊藤	境	林	酒井	小林*	*当時1年
13	1992	4	10/17	香西	石田			小西	氏家	飯塚	新田	
14	1993	5	11/13	香西	石田	戸塚	－	櫻井	坂田	雑賀	酒井	
15	1994	6	5/14	香西	戸塚	川	－	山本	米永	新田	根本	
16	1995	7	10/21	古川	上等	岩井	－	志田	茂木	高木	金丸	
17	1996	8	10/19	古川	鎌田	上等	－	森52	坪倉	遠藤	根本	
18	1997	9	10/18	古川	後藤	川上	－	杉本	勘里	石井	白石	
19	1998	10	10/17	鎌田	中島*	後藤	－	先田	夕部	岩井	小西	*京大OB
20	1999	11	10/2	鎌田	堀田*	後藤	－	伊藤	山本	遠藤	岸	*京大OB
21	2000	12										

合　宿

西暦	和暦	春	夏	秋	備　考
1950	25				
1951	26				
1952	27				
1953	28				
1954	29				
1955	30				
1956	31	宇都宮			
1957	32			駒場＊	＊同窓会館(10/14～20)
1958	33	宇都宮		駒場＊	＊同窓会館(10/9～15)
1959	34	駒場＊			＊春(3/27～4/2)
1960	35	駒場	駒場 1,2 年	久里浜	
1961	36	千葉	駒場 1,2 年	久里浜	
1962	37	久里浜	駒場 1,2 年	久里浜・駒場	
1963	38	久里浜	駒場 1,2 年	高岡	
1964	39	吉原(静岡)	駒場 1,2 年	吉原	晩夏検見川ﾚｷﾞｭﾗｰ強化合宿
1965	40	平塚	検見川	平塚	
1966	41	検見川	久里浜	平塚	
1967	42	検見川	検見川	平塚	1年合宿(検見川)
1968	43	深谷	検見川	検見川	1年合宿(検見川)
1969	44	検見川	検見川		
1970	45	検見川(駒場)	検見川	駒場(1年)	
1971	46	検見川	検見川		1年合宿(駒場)
1972	47	検見川	検見川	なし	1年合宿(検見川)
1973	48	駒場	検見川	駒場	1年合宿(検見川)
1974	49	検見川	検見川	駒場	1年合宿(検見川)
1975	50	検見川	検見川	なし	1年合宿(検見川)
1976	51	検見川	検見川	なし	1年合宿(検見川)
1977	52	検見川	検見川	なし	1年合宿(野沢)
1978	53	検見川	検見川	なし	1年合宿(検見川)
1979	54	検見川	検見川	なし	1年合宿(検見川)
1980	55	以降検見川	以降検見川	以降なし	

伊豆戸田マラソン

西暦	和暦	チーム（個人）成績	個人成績	備　考
1969	44	優勝：川上5位、湯浅6位、岩崎7位ﾁｰﾑ		団体初参加
1970	45	優勝：岸田3位、岩崎4位、湯浅13位ﾁｰﾑ		
1971	46	着外		
1972	47	2位：後藤、橋本、浜野ﾁｰﾑ		いずれも11位以下？
1973	48	2位：後藤10位、橋本、浜野ﾁｰﾑ	船渡川5位、殿谷6位、村田8位、大田9位	
1974	49	大会中止		
1975	50	国公立大会のため不参加		
1976	51	着外		この年からコース変更（戸田～戸田）
1977	52	団体出場せず		
1978	53	優勝：上野3位、山本6位、神野25位ﾁｰﾑ		
1979	54	2位：上野2位、山本3位、神野30位ﾁｰﾑ		
1980	55	2位		
1981	56	2位：上野2位、山本3位、神野30位ﾁｰﾑ		
1982	57			
1983	58			
1984	59			
1985	60			
1986	61	2位		
1987	62	2位		
1988	63	2位		
1989	1			
1990	2			
1991	3			
1992	4			
1993	5			
1994	6			
1995	7			
1996	8			
1997	9			
1998	10			
1999	11			
2000	12			

ＯＢ総会

西暦	和暦	日程	会場	備考
1951	26			
1952	27			
1953	28			
1954	29			
1955	30			
1956	31			
1957	32			
1958	33			
1959	34			
1960	35			ＯＢ会正式発足
1961	36			
1962	37			
1963	38			
1964	39		ルオー	
1965	40			
1966	41			11/23 対京大 OB 戦 (日立亀有体育館)懇親会
1967	42	4/12	ｻｯﾎﾟﾛﾋﾞｱﾎｰﾙ ｾﾌﾞﾝｺｰﾅｰ	
1968	43	5/21	ｻｯﾎﾟﾛﾋﾞｱﾎｰﾙ ｾﾌﾞﾝｺｰﾅｰ	
1969	44			
1970	45	8/14	ｾﾌﾞﾝｺｰﾅｰ特別室	4 月から上野部長、片山先生謝恩会
1971	46			
1972	47	2/10	赤坂桧苑	
1973	48		ﾘｵﾝﾄﾞｰﾙ	
1974	49		恵知勝	
1975	50	3/15	京橋会館	
1976	51	10/1	学士会館分室	創部 25 周年（1 年遅れで開催）
1977	52		生協	
1978	53			
1979	54	9/16	竜飛	12/26 ｼﾆｱ OB 会(ｾﾌﾞﾝｺｰﾅｰ)
1980	55	11/8	学士会館	創部 30 周年記念総会
1981	56			
1982	57			1 月：三菱瓦斯化学との定期戦ｽﾀｰﾄ
1983	58			
1984	59			
1985	60	11/12	ｾﾝﾁｭﾘｰﾊｲｱｯﾄ	創部 35 周年記念総会、木村会長選任
1986	61	7/7	ｾﾝﾁｭﾘｰﾊｲｱｯﾄ	片山先生喜寿お祝い会 6 月：OB 会報創刊
1987	62			7 月：京大戦 OB 懇親会 8 月：関西 OB 会第 1 回 11 月：女子 4 部昇格お祝い会

ＯＢ総会

西暦	和暦	日程	会場	備考
1988	63			
1989	1			3/19：第1回ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ開催(駒場1体)
1990	2	10/20	学士会館	創部40周年記念総会、OB会名称「駒羽会」に決定
1991	3			3月：監督交代ﾊｰﾃｨ（村田光二→壁矢和久）
1992	4	6/6 9/11	山上会館 ｾﾝﾁｭﾘｰﾊｲｱｯﾄ	5月：京大創部45周年記念式典 平松会長選任、三浦部長へ交替、故木村会長追悼 上野前部長の功績を称える会
1993	5	6/12	学士会館	秋山会長選任
1994	6			
1995	7	11/18	小田急ﾊﾙｸ「豪華」	創部45周年記念総会、金丸会長選任
1996	8			
1997	9	6/6	学士会館	片山先生を偲ぶ会 7月：明治大学創部50周年祝賀会 10月：法政大学創部50周年祝賀会
1998	10			10月：京大創部50周年記念式典
1999	11			
2000	12	6/16 10/14	ﾎﾃﾙｸﾞﾗﾝﾄﾞﾊﾟﾚｽ ﾎﾃﾙｸﾞﾗﾝﾄﾞﾊﾟﾚｽ	秋山敦男さんを偲ぶ会 創部50周年記念総会

バドミントン界の歴史

慶応義塾大学体育会バドミントン部50周年記念誌（1992年7月19日発行）から転載させていただいた。

西暦	和暦	主な出来事
1939	14	横浜ＹＭＣＡにバドミントンクラブ結成
1940	15	日本初の協会、神奈川県バドミントン協会創立。
1941	16	
1942	17	
1943	18	
1944	19	
1945	20	
1946	21	日本バドミントン協会創立。
1947	22	関東学生バドミントン連盟結成。 慶・明・立の３校にて関東大学リーグ戦開始（３複６単）。
1948	23	第１回全日本選手権大会開催。関東大学リーグ戦秋季より４校となる。 第１回トマス杯英国グラスゴーにて開催。関東学生選手権大会開催。
1949	24	日本バドミントン協会、日本体育協会へ正式加盟。 第４回国民体育大会の公開競技となる。
1950	25	全日本学生バドミントン連盟誕生。第１回全日本学生選手権大会（個人戦）開始。 全国高校体育連盟バドミントン専門部設立。第５回国民体育大会より正式種目となる。
1951	26	第１回全日本大学選手権大会（男子団体戦）開始（第２回学生選手権大会と併催）。 第１回全国高校選手権大会開催。関東大学リーグ戦秋季より７校となる。
1952	27	第１回全日本実業団選手権大会開催。 日本協会がＩＢＦ（国際バドミントン連盟）に加盟。
1953	28	
1954	29	第３回トマス杯アジア地区予選に日本初参加。
1955	30	
1956	31	第３回トマス杯優勝国マラヤより２選手を招き親善試合。
1957	32	第４回トマス杯アジア地区予選に出場しセイロンに９－０で勝利。タイ国戦は棄権。
1958	33	第１回全日本社会人選手権大会開催。第３回アジア競技大会（東京大会）にオープン競技として初参加、日本代表（男子）チーム優勝。
1959	34	日本協会がＡＢＣ（アジアバドミントン連盟）に加盟。
1960	35	全日本選手権大会が全日本総合選手権大会となる。
1961	36	日本実業団連盟・日本教職員連盟設立。
1962	37	第１回教職員選手権大会開催。
1963	38	第５３回全英選手権大会に日本選手として初めて小宮好雄（トヨタ自動車）が出場。 第３回ﾕｰﾊﾞｰ杯ｲﾝﾀｰｿﾞｰﾝ出場のｲﾝﾄﾞﾈｼｱﾁｰﾑと親善試合を行い5-0にて日本選抜勝つ。
1964	39	第６回トマス杯アメリカ地区予選に出場してゾーン優勝しｲﾝﾀｰｿﾞｰﾝに出場。 準決勝でタイに６－３にて敗る。全日本大学・学生選手権大会水鳥シャトル採用。
1965	40	第４回ユーバー杯アジアゾーンに日本女子初参加。
1966	41	第４回ユーバー杯インターゾーンに日本初出場・初優勝。 第２回国際学生選手権に出場し日本優勝。全日本大学選手権が全日本学生選手権団体戦となる。
1967	42	第７回トマス杯インターゾーンに出場し日本は第３位。
1968	43	
1969	44	第５回ユーバー杯に日本連続優勝。
1970	45	第８回トマス杯アジアゾーン決勝大会（京都）開催。 日本４－５インドネシア

バドミントン界の歴史

慶応義塾大学体育会バドミントン部50周年記念誌（1992年7月19日発行）から転載させていただいた。

西暦	和暦	主な出来事
1971	46	第１回全国中学生大会開催。
1972	47	第６回ユーバー杯に日本３連続優勝。関東大学リーグ戦の試合形式３複４単に変更。 第９回トマス杯アジアゾーン東地区決勝大会、東京で開催。日本５－８マレーシア
1973	48	
1974	49	
1975	50	第７回ユーバー杯に日本は準優勝、４連覇を逸す。
1976	51	第１０回トマス杯アジアゾーン決勝大会で日本敗れる。日本３－６マレーシア
1977	52	第１回世界選手権（個人）大会開催。 第１回全日本高等専門学校選手権大会開催。
1978	53	第８回ユーバー杯日本４度目の優勝。
1979	54	第１回日本リーグ始まる。 第１回ワールドチャンピオンズカップトーナメント、東京で開催。
1980	55	
1981	56	第９回ユーバー杯日本５度目の優勝。 ワールドカップが第１回ジャパンオープンとなる。
1982	57	第１回全日本ジュニア選手権開催。
1983	58	
1984	59	第１回全日本シニア選手権開催。
1985	60	
1986	61	
1987	62	
1988	63	第２４回ソウルオリンピックで公開競技となる。
1989	1	
1990	2	
1991	3	
1992	4	第２５回バルセロナオリンピックで公式競技となる。
1993	5	
1994	6	
1995	7	
1996	8	
1997	9	
1998	10	
1999	11	
2000	12	

●駒羽会規約●

駒　羽　会（東京大学バドミントン部ＯＢ会）　規　約

（名称）

第１条　本会は駒羽会（東京大学バドミントン部ＯＢ会）と称する。

（目的）

第２条　本会は会員相互の親睦を深めること、東京大学バドミントン部の発展に寄与することを目的とする。

（活動）

第３条　本会は前条の目的を達成するために下記の活動を行う。

１　総会等会合の実施。

２　対京大ＯＢ戦等、他大学ＯＢとの交流。

３　東大選手権等、競技会・親睦会の開催。

４　東大バドミントン部及び部員への援助及び指導。

５　名簿、会報の発行。

本会の活動は会員相互の合意の上に行われるものとする。

（会員）

第４条　本会は東京大学バドミントン部卒部者を会員として構成される。上記以外の者で、本会の目的、活動に賛同する者は、会員の推薦を受けて事務局宛文書で申し出、理事会、会長の承認を受けた上で会員となることができる。

第５条　本会の活動に特に貢献のあった者は理事会及び総会の承認を受けて、名誉会員となることができる。

第６条　本会を退会しようとする者は、事務局宛文書で申し出、退会することができる。また、正当な理由なくして、５年以上会費を納めない者は、会員を継続する意思がないものとみなして退会したものとする。

第７条　本会への再入会は、原則として、退会後５年間はこれを認めない。再入会を希望する者は、会員の推薦を受けて事務局宛文書で申し出、理事会、会長の承認を受けた上で会員となることができる。再入会を認められた場合、再入会員は再入会金を支払うことに同意するものとする。再入会金は、退会時までの会費滞納金額とする。ただし、30口を上限とする。

第８条　会員の結婚に際しては、祝電を駒羽会名で打電する。

会員の死去に際しては、花輪または生花を献じ、弔電を駒羽会会長名で打電する。

（役員）

第９条　本会に下記の役員をおく。

会長、副会長、理事（３学年に１名程度）、事務局長、事務、会計、会報担当、名簿担当。

また、現役の援助、指導の任に当たる次の者も役員を兼ねるものとする。

監督、コーチ。

第 10 条　会長は会員の互選によるものとし、総会において選任する。会長は本会を代表し、会務を総理する。任期は、定例総会での選任時点から、次の定例総会開催時点までとする。ただし、会長がその職務を遂行することが困難となり、任期途中で交替せざるを得ない場合は、理事会にて次の定例総会までの会長を選任する。

第 11 条　副会長は会長の推薦に基づいて、理事会において選任する。副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその職務を代行する。任期は、理事会での選任時点から、次の定例総会開催時点までとする。

第 12 条　理事は会員の推薦に基づき、総会の承認を得た上で、会長が委嘱する。任期は、定例総会での承認時点から、次の定例総会開催時点までとする。

第 13 条　事務局長は理事の中から会長が委嘱する。事務局長は会務を遂行する。事務、会計、会報担当、名簿担当は事務局長の委嘱を受け、各職務を実行する。

第 14 条　監督は会員の中から、部長が会長と相談の上、委嘱する。

監督は現役部員の援助、指導にあたる。

コーチは監督の委嘱を受け、現役部員の援助、指導にあたる。

第 15 条　総会の承認を受けて、名誉会長の他、若干名の名誉役員をおくことができる。

（会合）

第 16 条　定例総会は５年に１度（西暦５の倍数年に）開催し、役員の選出、規約の改正等、重要事項を審議、決定する。また、必要に応じて臨時総会を開催することができる。

第 17 条　定例理事会は年に１度、会長によって招集され、年度計画、予算等、必要事項を討議、決定する。また、必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

第 18 条　東京大学バドミントン選手権は、ＯＢ会、現役部員合同でシングルス、ダブルス等をそれぞれ年１回開催する。開催の要項は別に定める規定による。

第 19 条　対京都大学定期戦ＯＢ戦は、原則として、毎年７月中・下旬の土曜日もし

くは日曜日に現役戦と同時に開催する。開催地は１年毎の交替で、西暦奇数年は東京大学で開催する。

（会費）

第 20 条　本会の会計年度は毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。財源には会費、寄付金及びその他の収入を充てる。

第 21 条　会費は一般社会人を 10 口とし、学生を５口相当、無職（主婦等）を３口相当とする。ただし、海外在住会員は上記の半額相当とする。一口当たりの単価は毎年理事会で決定する。

第 22 条　卒部後５年以上の会員で東京大学バドミントン部部報の送付を受けたい者は、事務局まで申し出の上、別に２口相当の会費を支払うものとする。

（事務局）

第 23 条　事務局は事務局長、事務、会計、会報、名簿各担当者、監督、コーチ　その他若干名によって構成される。

事務は会員への直接連絡の任にあたる。また、現役部員からＯＢへの連絡の便宜をはかる。

会計は会費の徴収の任にあたり、会費を管理する。

会報は会報の発行の任にあたる。

名簿は名簿の発行の任にあたり、名簿を管理する。

第 24 条　事務局会は必要に応じて事務局長によって招集され、本会活動の企画立案を行う。

（その他）

第 25 条　会員は転勤・転居等にあたっては速やかに事務局まで変更事項を申し出なければならない。

第 26 条　この規約に定めのない事項については、理事会で協議の上決定し、必要のある場合は別に規定を定める。

第 27 条　この規約の改正は総会の議決によって行われる。

付記　１．この規約は昭和 60 年 11 月 12 日東京大学バドミントン部　35 周年記念総会にて制定、昭和 61 年４月１日から施行。

２．一部改正を平成７年 11 月 18 日東京大学バドミントン部　45 周年記念総会にて行う。

編　集　後　記

第１回編集委員会を1999年６月に開催し、記念誌骨子を次のとおり固めたのが同年11月でした。

（１）テーマ別の東大バドミントン部の活動史
（２）部報・駒羽会報からの再掲載
（３）50年分の記録の整理
（４）付属CD－ROMによる映像情報記録

このままだと５月には、記念誌が出来てしまうのでは？と余裕の言葉さえ出たのが、編集委員会での当初の会話でした。

しかし、予想外にというか、案の定というか、６月は原稿収集の追込みとなり、７月は各執筆者との校正、記録・写真等の整理に充てられ、８月は原稿・記録・写真の校正に時間を費やすこととなってしまいました。

「当初夢想された雄大な構想は次第に縮小、省略され、多く独断によって資料が取捨されることになった」という30周年記念誌編集後記での豊田編集代表のお気持ちに近いのが今の心境です。

ですが以下のように、たくさんの方々のご協力を頂戴してきました。あえて80％の出来栄えと自画自賛することとしたいと思います。

皆様、本当にありがとうございました。

活動史　ご執筆をお願いした方々の殆どから、ほぼ編集目的どおりの個性ある文章を頂戴できました。

部報・駒羽会報からの再掲載　原稿ｲﾝﾌﾟｯﾄを現役諸君に手伝ってもらいました。

50年分の記録の整理　部報に掲載された戦績情報のほぼ90％が、現役諸君の手で電子情報化されました（付属CD-ROMに収録）。

付属CD-ROM　たくさんの方から写真・ビデオをお借りしました。これらの映像情報は、ほぼ100%収録することが出来ました。そして、吉野崇君(H6入学)が資料取込み・全体編集に夏休み全てを充ててくださいました。

編集委員諸氏　村田章君(S57入学)、岩松正憲君(S58入学)、壁矢和久君(S59入学)、吉田博信君(S61入学)には１年以上の長きに亘りお付合いいただきました。特に、村田章君には編集内容・校正・付属CD-ROMの全般に亘り、常に冷静・的確な助言をいただき、影の編集長として助けてもらいました。

先輩諸氏　金丸清昭会長・鈴木明夫事務局長には、色々な相談事にも迅速に対応いただくなど暖かいご支援をいただきました。豊田拓男先輩には、30周年記念誌編集のご経験から貴重なアドバイスを度々頂戴しました。

印刷会社　お渡しする電子情報をそのまま印刷するので手間要らず…だったはずの編集が、校正に次ぐ校正で大幅にずれ込み、リプロの内藤さんにはご迷惑をお掛けしました。

今回、編集作業を通して強く感じたのは、50年に亘る人々のバドミントンに対する情熱、仲間との友情です。私もその一員として50周年記念誌編集に携わることが出来て本当に光栄でした。時間の関係でやり残した作業は、遠からず仕上げて、後輩達に伝えていくことにしたいと思います。

最後に、ご協力いただいた関係者の皆様に、改めて感謝申しあげます。

2000年９月　　編集委員会　小林伸宏(S55入学)

東京大学バドミントン部五十周年記念誌

2000年10月14日発行

発行者　東京大学バドミントン部五十周年記念誌編集委員会

連絡先　東京大学運動会バドミントン部
〒153-0041　東京都目黒区駒場３－８－１
東京大学教養学部学生会館内

印　刷　株式会社　リプロ
〒135-0061　東京都江東区豊洲1-2-34　丸石ビル